



Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

No.33

2005

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I . 現状と課題.....	1
1 組織説明.....	1
1.1 概要.....	1
1.1.1 情報学環組織と学際情報学府組織.....	1
1.1.2 東京大学内の他研究科との関係.....	3
1.1.3 大型研究・教育プロジェクト.....	5
1.1.3.1 文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」.....	5
1.1.3.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム.....	6
1.2 理念と沿革.....	7
1.3 教職員数.....	9
1.4 財務.....	11
1.5 運営.....	15
1.5.1 情報学環教授会.....	15
1.5.2 学府委員会.....	15
1.5.3.1 社会情報学コース.....	15
1.5.3.2 文化・人間情報学コース.....	16
1.5.3.3 学際理数情報学コース.....	16
1.5.4 教務委員会.....	17
1.5.5 情報学環教育部委員会.....	17
1.5.6 社会情報研究資料センター運営委員会.....	18
1.6 概要.....	18
1.7 事務組織.....	22
2 教育活動.....	23
2.1 概況.....	23
2.2 教育カリキュラム.....	23
2.3 カリキュラム支援体制.....	24
2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置.....	24
2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成.....	25
2.3.3 ウェブ発表.....	25
2.3.4 修士論文中間発表会.....	25
2.3.5 博士課程コロキウム.....	26
2・3・6 E-learning 授業 (iii online).....	26
2.3.6.1 iii online の目標.....	26
2.3.6.2 iii online の概要.....	27
2.3.6.3 iii online の評価.....	30
2・3・7 ソウル大学大学院との大学院日韓合同授業.....	31
2.4 学際情報学府への進学.....	31

2.5	修士論文及び博士論文の執筆	32
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	34
2.7	学際情報学府以外の教育活動	34
2.7.1	教育部	35
2.7.2	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	36
2.7.3	ベネッセ先端教育技術学講座（寄附講座）	39
3.	研究活動	41
3.1	概況	41
3.1.1	文理の相互作用と連携	41
3.1.2	流動教員制度	42
3.2	大型研究プロジェクト	42
3.2.1	文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	42
3.2.2	ベネッセ先端教育技術学講座	45
3.2.3	その他の大型研究プロジェクト	48
3.3	社会情報研究資料センターの役割	50
3.3.1.1	新聞マイクロフィルム保存環境の改善	50
3.3.1.2	新聞マイクロフィルムのデジタル化によるバックアップ作成	50
3.3.2.1	社会情報研究資料センター デジタルアーカイブの構築	51
3.3.2.2	COE ユビキタスプロジェクトとの連携化	51
3.3.3.1	駒場地区別置新聞原紙資料の保存書庫の再配置	51
3.3.3.2	マイクロフィルム・新聞原紙等資料の保存書庫の再配置	52
4	社会との交流	53
4.1	国際的委員会	53
4.2	政府・自治体委員会	53
4.3	学協会活動	54
4.4	セミナー・研究会・公開講座	54
4.5	出版活動	59
4.5.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	59
4.5.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実験編』	60
4.6	定期刊行物・ホームページ	60
4.7	国際交流	60
	情報学環・学際情報学府 10 年ビジョン	61
1	情報学環・学際情報学府の今後 10 年のビジョン	61
1.1	今後 10 年の社会の変容	61
1.2	今後 10 年の学際情報学の展望と課題	61
1.3	10 年で情報学環・学際情報学府の目指すもの	62
1.4	情報学環・学際情報学府と社会との関わり	63
2	教育の将来ビジョン	64

2.1	教育理念と目標	64
2.1.1	大学院学際情報学府	64
2.2	学内連携	67
2.2.1	大学院学際情報学府	67
2.2.2	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	68
2.3	計画と具体策	69
2.3.1	大学院学際情報学府	69
2.3.1.1	コースの特色の明確化と専攻としての目標の共有	69
2.3.1.2	文理相互浸透のさらなる深化・発展	70
2.3.1.3	ネットワーク技術を活用した高度な学習教育環境	71
2.3.1.4	大学院教育の国際展開	72
3	研究の将来ビジョン	74
3.1	概要と背景	74
3.2	各学圏のビジョン	74
3.2.1	社会情報学圏の研究ビジョン	74
3.2.2	学際情報学圏	75
3.3	21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	77
III.	資料	78
1	沿革	78
2	学環の教員（定員）	79
3	学府の学生数	81
4	教育部	81
5	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	83
6	予算	88
7	土地・建物面積	91
8	入試定数と受入数	91
9	年度別入試データ詳細	92
10	修了者数の推移	98
11	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	99
12	日本学術振興会特別研究員数	100
13	リサーチアシスタント数	100
14	就職状況	101
15	ベネッセ先端教育技術学講座	102
16	客員講座等	103
17	研究員（客員）等	105
18	学会賞など受賞者リスト	105
19	論文数	110
20	特許出願・公開数	110

21	東京大学 21 世紀 C O E 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 16 年度の活動	111
23	国際委員会委員数	114
24	政府関係委員会委員数	115
25	地方公共団体関係委員会委員数	115
26	ジャーナル・国際会議編集	116
27	定期刊行物一覧	116
28	留学生数の推移	116
29	留学生国籍別一覧	117

I . 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

1.1.1 情報学環組織と学際情報学府組織

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に定員及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

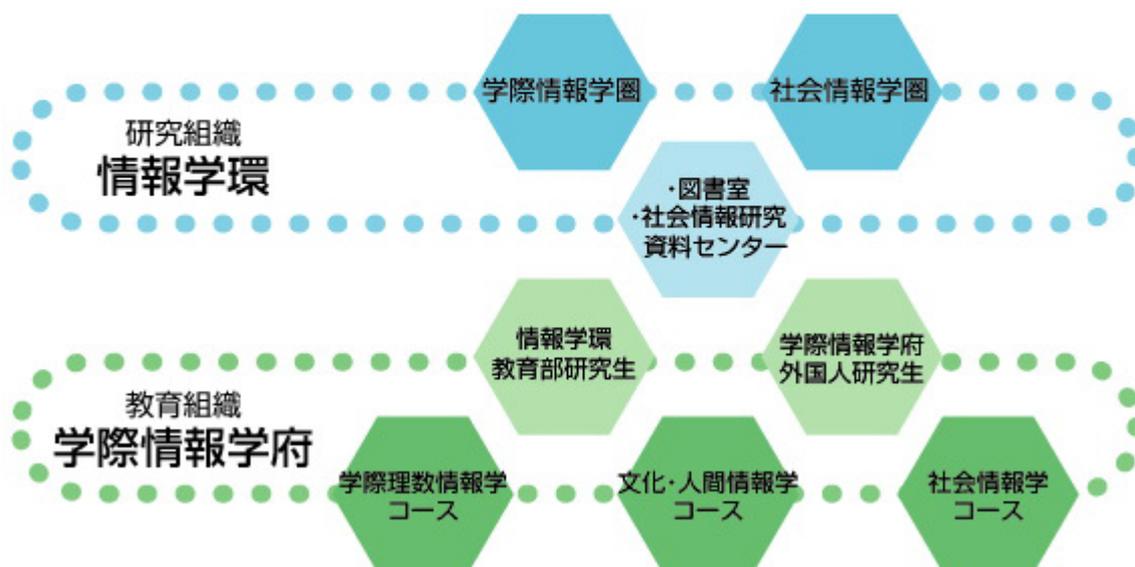
学際情報学圏

情報生命・思想学域
情報システム・言語学域
情報表現・造形学域
情報環境・認知学域
情報社会・制度学域

社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域
情報行動・機能学域
情報法・政策学域
情報経済・産業学域
情報文化・歴史学域

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような3つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラ

シー、学習環境までの 21 世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

学際理数情報学コース

このコースでは、21 世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

これらの 3 つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学 2 年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年 50 名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限 2 年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.1.2 東京大学内の他研究科との関係

さて、ここで、学内に存在し領域的に関連性のある他の研究科との関係及び違いについて、各部署のホームページの情報をもとにして述べておきたい。

情報理工学研究科

情報理工学研究科は、東京大学の情報学構想のなかで情報学環・学際情報学府の設立と連動して、翌年の 2001 年 4 月に設立された研究科である。情報学環・学際情報学府が文理相互浸透、そして研究所を含めた全学協力の組織論で作られたのに対して、情報理工学研究科は東京大学における理工系の情報科学技術に関連した組織が理学系研究科と工学系研究科とに分散して存在していたのを改組、再編し、新研究科として設置されたものである。「これによって、新時代に向けた情報関連教育・研究の効果的統合と集約、及び機能的役割分担とスケールメリットを活かした新たな展開に対する柔軟性を実現」している。コンピュータ科学、数理情報、システム情報、電子情報、知能機械情報といった専門的・先端的な英知を結集している。その規模は、情報学環・学際情報学府より数段大きく、文系を含まない理系の研究科である。学位は博士（情報理工学）、修士（情報理工学）。

新領域創生科学研究科

新領域創成科学研究科は、東京大学の既存部局の全学的協力のもとに 1998 年に新設された大学院（独立研究科）で、一期生の受入れが 1999 年 4 月に始まった。学部を持たない独立大学院である点で情報学環・学際情報学府と共通しているが、統合モデルの研究科である点で情報学環・学際情報学府と違っている。新領域創生科学研究科は、既存の個別学問分野から派生する未開拓の領域を研究・教育の対象とし、既存の様々な学問を融合することによって、新たな学問領域を創成するという使命を持って設立された。「学融合」を基本理念としている。組織としては、基盤科学研究系、先端生命科学研究系、環境学研究系の 3 研究系体制でスタートし、その後、2003 年度に情報生命科学専攻、2004 年度にメディカルゲノム専攻、そして 2005 年度に生涯スポーツ健康科学研究センターを新設した。現在では、3 研究系体制で、8 専攻、1 研究センターを有し、12 の専攻・コースで修士課程 865 人、博士課程 399 人、合計 1,264 人の大学院生を教育する研究科となっている。

公共政策大学院

公共政策大学院は、東京大学法学政治学研究科と経済学研究科によって 2004 年 4 月に設立された、公務員をはじめとする政策の形成、実施、評価の専門家を養成する大学院修士課程（専門職学位課程）である。「東京大学公共政策大学院」は通称で、「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として分離モデルをとり、両研究科が連携して設立する教育組織である「公共政策学教育部」と研究組織である「公共政策学連携研究部」から成っている。特色としては、法学部、経済学部の教授陣によって、政策立案、実施、評価能力の基礎となるレベルの高い法律学、政治学、経済学についての教育が行われ、同時に実務家教員による授業を含め、内外の具体的なケースを素材とした事例研究による実践的教育の重視がされていることである。定員は 1 学年 100 名。学位は公共政策学修士（専門職）。

工学系研究科

工学系研究科は歴史も古く、規模も大きい研究科であり、学部教育の工学部組織を持っている。そのポリシーは次のようにまとめられている。「工学の教育に携わる私たちは、科学技術の持つこのような多面性を理解し、その影響の及ぶ範囲に思いをいたし、全ての人間がより実りの多い生きがいのある営みを実現できるように努めます。科学技術の未来を支えるに足る工学の基礎とともに、技術の社会における位置や意味を教育し、幅広い視野と見識、国際感覚を身につけた高度な人材を養成します。研究面では、基礎的な研究を重視すると同時に、既成の工学の枠組みを取り払い、新しい地平を開拓する取り組みを積極的に推進します。」大変広範な工学の領域を対象とし、19 専攻、65 講座、教員 411 名を擁する。学生数は学部学生が 2,031 名、大学院修士課程が 1,627 名、博士課程が 1,070 名。

人文社会学系研究科

人文社会学系研究科は伝統のある文学部を基礎とする大学院である。文学部には4学科、27専修課程があり、人文社会学系研究科は7つの研究専攻(文化資源学や韓国朝鮮文化研究専攻を含む)から成る。「一方で輝かしい学問的伝統を継承しながら、他方では各専攻分野における国際的最先端を担う」ことが目指されている。学部学生が910名、大学院生が約1000名。旧社会情報研究所は情報学環との組織統合以前、人文社会系研究科の社会文化専攻のなかで協力講座として「社会情報学専門分野」を運営していた。それが現在、学際情報学府の社会情報学コースとして引き継がれ、拡充されている。

総合文化研究科

総合文化研究科は、教養学部を基礎として1983年に4専攻(比較文学比較文化、地域文化研究、国際関係論、相関社会科学)で発足した。その後の拡充・再編を経て、現在、言語情報科学、超域文化科学、地域文化研究、国際社会科学、広域科学の5専攻体制をとっている。広域科学専攻はさらに生命環境科学系、相関基礎科学系、広域システム科学系に分かれている。教養学部は国際的な視野の下に既存の学問体系を超えて学際的に新たな知を探求する精神をモットーとし、総合文化研究科は文系と理系にまたがる教育・研究体制をもって、既存のディシプリンを大切にしながら分野横断的な試みを行う大学院という特色を持っている。現在、教養学部前期課程に6,875名が在籍し、後期課程には452名が、そして大学院総合文化研究科に修士課程・博士課程をあわせて1,408名が在籍している。

1.1.3 大型研究・教育プロジェクト

情報学環の中には多様な研究・教育プロジェクトが展開されているが、競争的政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」及びコンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの2つがあげられる。

1.1.3.1 文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

東京大学大学院情報学環を核とした、文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(平成16年度~20年度)が採択された。本プログラムは、あらゆる分野や場面において、デジタル情報、特に状況認識技術によって得られたコンテキスト情報を活用した、効率的で効果的な情報サービスが実現される、ユビキタス情報社会基盤の確立と課題の解決に向け、情報学を核とした理論基盤研究や技術基盤研究、社会基盤研究にわたる幅広い新たな学際的な学問基盤を確立することを目的としている。

現在、本研究拠点は、東京大学大学院情報学環の教員を中心として、計算機科学から社会科学、人文科学の分野の研究者19人を中心として発足し、更に活発に研究を推進する

ために、更に特任教員や非常勤研究員、RAなどの採用を続けている。また、ユビキタスコンピューティングの多様な基盤技術や応用技術をカバーするために、産官より本分野のオーソリティーの3名に非常勤の特任教授に就任いただいている。本拠点は、拠点リーダーのリーダーシップの基、主に3つの領域を統括しており、それらは、ユビキタス情報技術研究プロジェクト、ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト、ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトである。

1.1.3.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム(以下、コンテンツ創造科学と記す)は平成16年度文部科学省科学技術振興調整費(以下、振興調整費と記す)における新興分野人材養成プログラムで採択されたものであり、平成16年度から5年間の計画として実施されている。なお、平成16年度の振興調整費においては、548件の申請のなかから、137件がヒアリングを受け、最終的に60件が採択されており、採択率は約11%である。特に、当該課題が採択されたプログラム(新興分野人材養成)においては、76件の申請のなかから、34件がヒアリングを受け、最終的に18件が採択されており、採択率は約24%となっている。

コンテンツ創造科学が主眼とするのは、わが国におけるデジタルコンテンツ分野を率いる人材の養成であり、特にプロデューサー、技術開発者、指導的教育者という3種の人材の養成を目標としている。

これらの人材を養成するために、本学において以前からデジタルコンテンツ分野の研究を推進していた研究者が大学院情報学環を中心として集結し、さらに産業界からコンテンツ産業の第一線で活躍する実務者を指導者として招聘することで人材養成を進めている。

このプログラムにおける被養成者は主として東京大学に所属する修士課程の学生を中心として選抜しているが、学部学生・博士課程学生・社会人であっても履修に十分な学力を有する場合には、選考の対象としている。また、修了年限は2年間であり、副教育プログラムという全学的な位置づけとなっている。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導体制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成12年4月から、学校教育法第66条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ定員で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。そこでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当

は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

*** 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯**

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授3名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という3大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992年から95年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

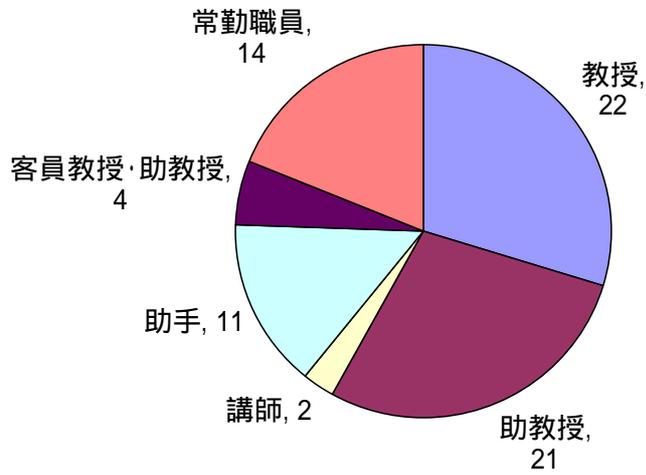
高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的にに関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 教職員数

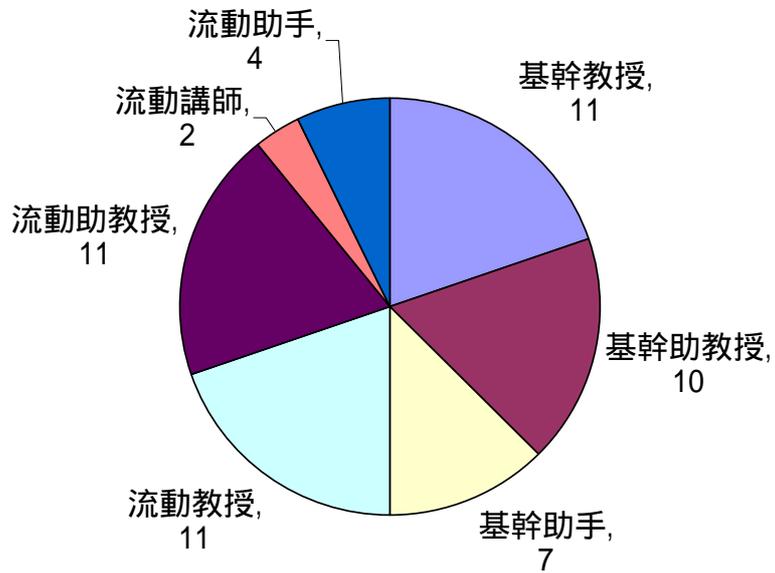
給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員及び客員教員）の定員は全74人となっている。内訳は図表1-3-1のとおり、教授等の常勤教員56人、客員教授・助教授4人、常勤職員14人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図表1-3-2のとおりとなっている。基幹教員と流動教員の定員数は同数（28人）で両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

図表1 - 3 - 1 教職員定員(全74人)の内訳



図表1 - 3 - 2 常勤教員定員(56人)の内訳



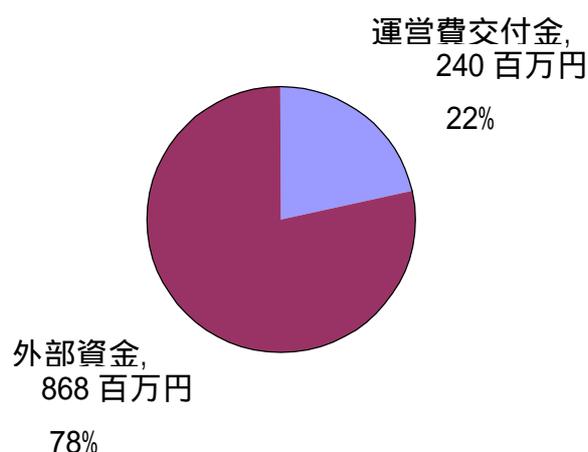
1.4 財務

平成 16 年度予算に基づき、大学院情報学環の財務構造を説明する。なお、対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接に及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

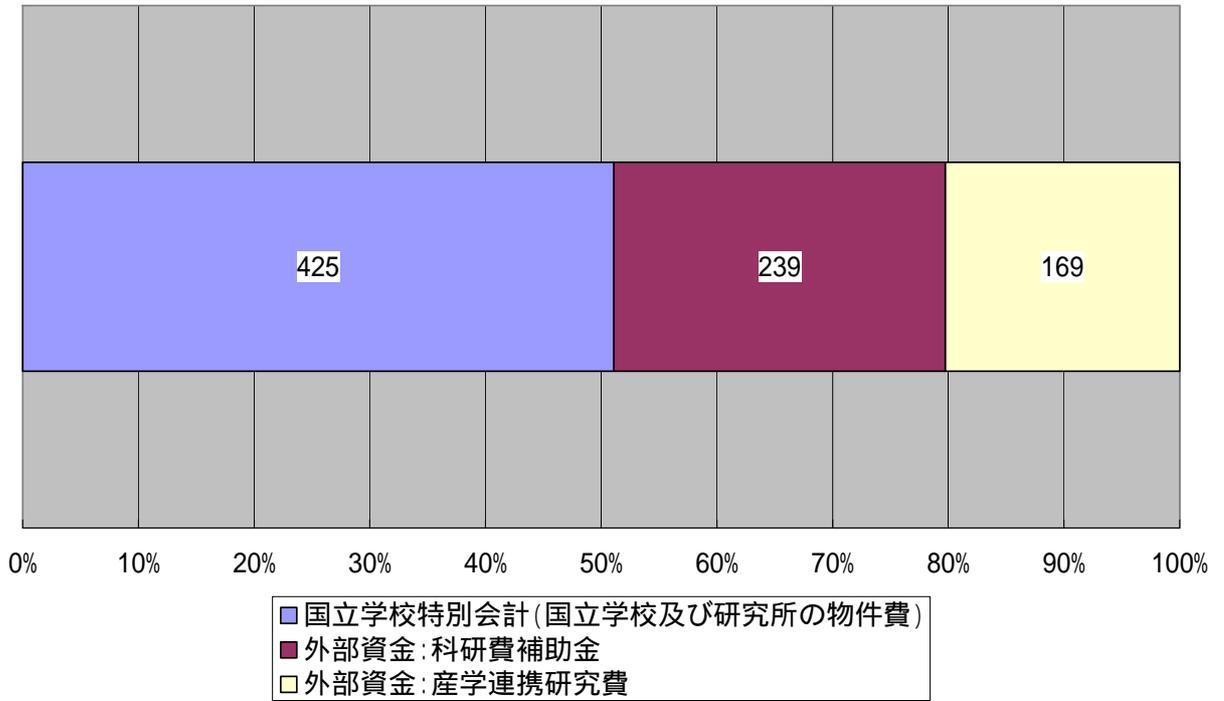
さて、具体的な数字を見る前に、学環財務の特徴である流動教員(3.1.2 参照)に関する資金の取り扱いについて説明する。資金計上の段階では、流動教員に係る資金及び基幹教員に係る資金のいずれの取り扱いに差がない。すなわち、運営費交付金及び外部資金のいずれも、一旦、大学院情報学環の予算として計上される。しかしながら、執行の段階に移ると、流動教員に係る資金は流動元部局に移る。そして、大学院情報学環に残るのは基幹教員に係る資金と社会情報資料センターなどの大学院情報学環固有の事務に関するものだけとなる。このため、教員の研究教育資金に付随する間接経費については、流動教員分は流動元で執行され、大学院情報学環に残り執行されるのは基幹教員分だけとなる。

それでは、数字に基づき、大学院情報学環の財務構造を概観する。図表 1 - 4 - 1 に示すとおり、平成 15 年度の収入総額は 859 百万円で、比率としては、運営費交付金が 2 割強に対して外部資金が 8 割近くとなっている。参考として、国立大学法人化以前の平成 15 年度の東京大学全学の支出項目のうち、比較的性格の近いものを示したのが図 1 - 4 - 2 である。単純には比較できないが、大学院情報学環の場合、外部資金のウェイトが高いことがわかる。

図表 1 - 4 - 1 情報学環の運営費交付金と外部資金の構成比率
(平成 16 年度、単位:百万円)

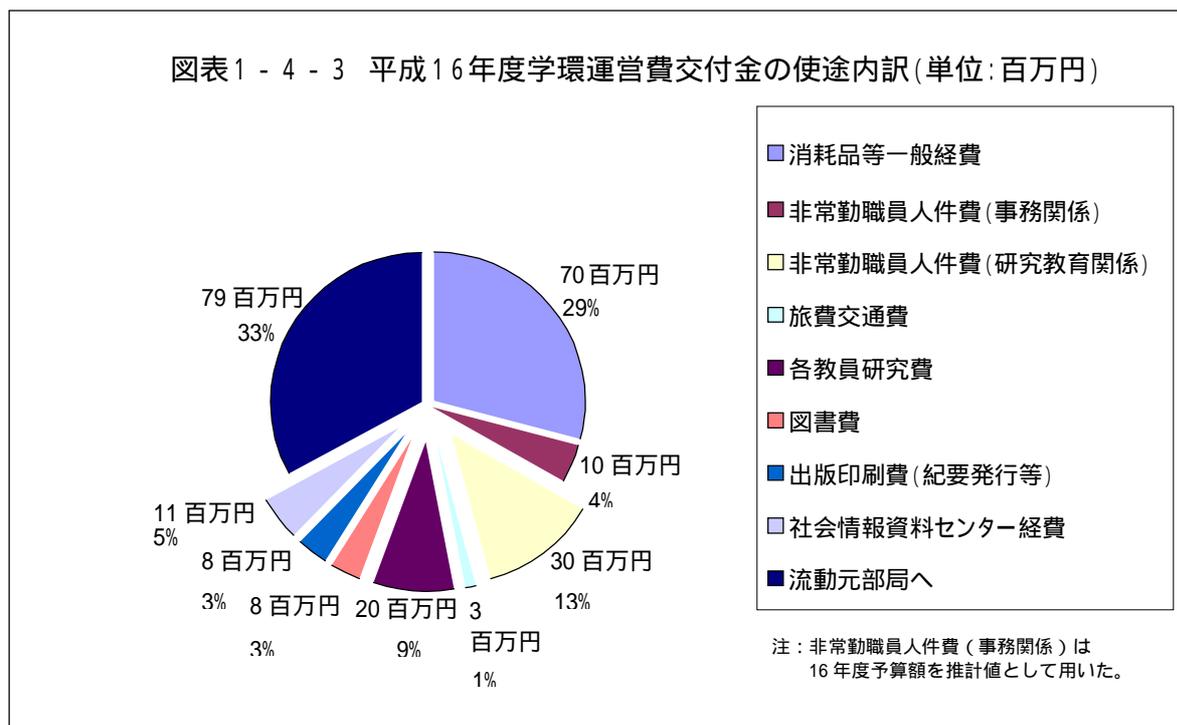


図表1 - 4 - 2 東京大学全学の関係支出項目の構成(平成15年度、単位:億円)



次に、運営費交付金の使途内訳を見ると、図表1-4-3のとおりとなる。他部局にない特徴としてあげられるのが、流動元部局に移される資金（約8千万円）が全体の三分の一を占めることである。したがって、運営費交付金のうち、大学院情報学環の裁量が及ぶのは、残り三分の二の約1億6千万円となる。そして、約1億6千万円のうちの半分（全体の三分の一）が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費という事務管理の経費となる。残りの半分（全体の約三分の一、約8千万円）が、直接の研究教育活動に充てられることになる。このうち、約1千万円強の社会情報資料センター経費と約8百万円の図書費は、同センター及び図書室を維持するために必要な雑誌等の購入に充てられ、固定的経費の性格を帯びている。そのほか、教育研究に直接携わる非常勤職員の人件費として約3千万円充てられるとともに、各基幹教員の研究教育経費として総額で約2千万円が充当されている。（注：図表1-4-3の非常勤職員人件費（事務関係）は平成16年度予算で計上されている額を推計値として用いた）

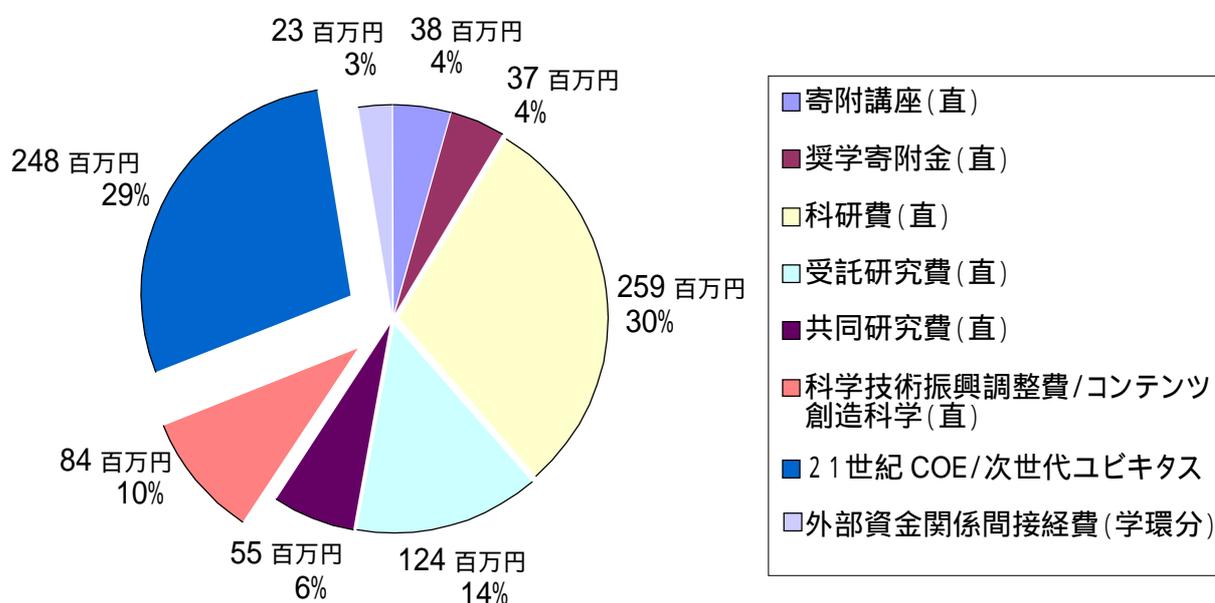
図表1-4-3 平成16年度学環運営費交付金の使途内訳(単位:百万円)



外部資金の収入内訳は、図表1-4-4のとおりである。ここに計上しているのは、外部資金関係間接経費（学環分）を除いては、直接、研究教育に充当される資金の金額となっている。外部資金のうち、大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。なお、外部資金についても、流動教員の外部資金に係る間接経費は流動元の部局に移され、大学院情報学環では計上されない点は同じである。さて、内訳としては、21世紀COE/次世代ユビキタスのウェイトが最も大きく、このプロジェクトだけで、運営費交付金の総額に匹敵する。次に多いのが科学技術振興調整費/コンテンツ創造科学となり、そのほか、単独の項目としては、寄附講座（ベネッセ）も4千万円と大きい。

大学運営費交付金が毎年度削減される一方で、学際的な情報学に対する研究及び教育ニーズが引き続き高いことを踏まえると、外部資金の積極的な獲得は極めて重要である。定常的な研究・教育のための資金であっても例外とは言えず、特に新たな資金を必要とする場合には外部資金の確保は不可欠となっている。また、外部資金は基本的に時限的という性格を有していることを踏まえると、現在進行中の研究等のプロジェクトで確実に成果をあげるにとどまらず、時代を先取りした研究及び教育テーマを設定していけるように、資金的なリソース配分についても常に見直しを行い、フィードフォワード的な対応を取っていくことが課題となる。

図表1-4-4 平成16年度情報学環外部資金収入(868百万円)の内訳(単位:百万円)



1.5 運営

1.5.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に1度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長2名を指名する。1名は教員から選ばれ、もう1名は事務長が務める。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかける案件の準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、3コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ週に1度開催される。これが実質的な執行部である。

1.5.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼任教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.5.3.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会の主な業務は、他のコース運営委員会と協力しつつ、入試実施委員会の指示下で修士課程入学試験および博士課程入学試験を実施することである。その際、修士課程入試問題のスケジュール作成、問題作成者の決定も大きな任務の一つである。また、入学試験同様、他のコース運営委員会と協力しながら、教務委員会の指示下で、修士課程学生の「修士論文中間報告会」、博士課程学生の「博士課程コロキウム」の実施に携わっている。

2004年度において社会情報学コースでは、修士課程、博士課程ともに、人文社会系研究科社会情報学専門分野の伝統をふまえ、ほぼ前年の選考方式を引き継ぐ形で実施した。

今後の課題として、(1)とくに修士課程入学試験において、他コースとの共通性を高めつつ、より適切な人材を選抜する入試方法のあり方を検討すること、(2)修士課程在学生在が効率的に社会情報学を学習し、質の高い修士論文を執筆できるよう、コースワーク・カリキュラムおよび論文指導を充実させること、(3)博士課程在学生在が在学期間内に博士論文を執筆できるよう論文執筆指導に関わる授業・演習を充実させ、段階的に無理なく論文提出できる教務スケジュールを構築すること、等が考えられる。

1.5.3.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の学際理数情報学コースをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、教育システムなどの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、基本的に、生命・身体・環境、文化・表象・映像、メディア表現・学習・リテラシー、アーカイブ・歴史情報という、より理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしている。文化・人間情報学コースは、これらの4本の太い幹の周囲に多様で野心的な枝葉を伸ばしながら、情報学という新しい学問の森で、文化・人間科学の諸領野を体系的に再編し、それこそ生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組もうとしているのである。そして、そのための深い学識と精緻な方法的能力を備えた研究者や実践者を養成し、未来の世界に送り出そうとしている。そのために、とりわけこのコースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎(4単位)と文化人間情報学研究法(2単位)では、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習などが実施されている。

1.5.3.3 学際理数情報学コース

学際理数情報学コースには、教員32名(学環基幹4名、流動12名、兼任11名、授業担当・併任・客員5名)が所属しており、毎年修士(定員20名)と博士(定員9名)の学生を受け入れて教育している。

コースは、学際理数情報学コース運営委員会(コース会議)のもとに、コース長、副コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局(情報理工学研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど)からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていること

である。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっているが、一方で関係教員の負担が課題となっている。

今後の課題としては、(1)多様な背景を持つ学生を、「学際的に協調できる理数系情報学の専門家」として育成するための、入学試験選抜方法の検討、教育カリキュラムの検討、(2)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、などが挙げられよう。

1.5.4 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成 17 年度現在で、基幹教員 22(教授 12、助教授 10)、流動教員 22(教授 10、助教授 10、講師 2)、兼任教員 17(教授 10、助教授 7)、授業担当教員 8(教授 5、助教授 2、講師 1)、客員教員 2(教授 1、助教授 1)、非常勤講師 7、総計 78 名となっており、修士課程 1 学年約 70 名、博士課程 1 学年 30 名、学府全体で 250～300 人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、後述するような大学院生たちの教育研究促進のための諸々のプログラムを実施している。

1.5.5 情報学環教育部委員会

大学院情報学環教育部は、平成 16 年 4 月 1 日の社会情報研究所と大学院情報学環の組織統合により、社会情報研究所教育部を大学院情報学環に引き継いだ制度である。教育部の制度は、社会情報研究所の前身である新聞研究所設置(昭和 24 年 5 月)まで遡り、50 年余にわたる歴史をもっている。

設立当初の教育部は、マス・メディアに従事しようとする者の指導養成を目的としていたが、その後の組織改変等にともない、教育対象の拡大およびカリキュラム内容の拡充を逐次行ってきた。さらに、社会情報研究所教育部から大学院情報学環教育部への移行により、従来 of 伝統を引き継ぐと同時に、情報全般にかかわる教育研究組織である大学院情報学環・学際情報学府の特色を踏まえ、学際的な情報学に関心を持つ者も研究生として受け入れることとし、それに対応してカリキュラムの拡充を図りつつある。

1.5.6 社会情報研究資料センター運営委員会

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に利用していただくことを目的としている。現在、本研究資料センターでは、製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 巻という膨大な数の資料を管理している。沿革としては、1964 年 1 月に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンタ - 」が 1967 年 6 月、新聞研究所附属施設「新聞資料センタ - 」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センタ - 」と改称された。その後、2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあっている。同センターの 2004 年度における月別利用者数は、下記の通り。

社会情報研究資料センター月別利用者数（2004 年度）

(開室日数)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学内	186	192	259	205	158	155	225	162	203	179	94	68	2,086
学外	52	45	62	69	60	62	38	79	61	49	38	26	641
不明	1	6	3	3	11	1	2	5	8	1	2	1	44
合計	239	243	324	277	229	218	265	246	272	229	134	95	2,771

1.6 概要

● 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積も確保されていないという認識のもと、なんとか教育研究に必要な施設を確保することにある。本年度は 21 世紀 COE ユビキタス情報社会基盤の形成をはじめ学環としては大きなプロジェクト獲得に成功したためさらに必要面積が増えその確保に努力した。

なお、2005 年度には護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルームの確保や 2006 年度からの教員のための必要面積の確保に成功した。しかしながらこれでもまだ最低必要面積に達しておらず引き続き努力するつもりである。

● 企画広報委員会

本委員会の使命は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（シンポジウム、ワークショップ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、

ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うことである。旧情報学環においては機動性を持たせた企画室も併置されていたが活動を休止している。現在、情報学環としての使命を果たすべく、情報をキーワードとした学際的な新規の研究分野の開拓やインキュベーションにも注力し、その環の発展に努めるための企画広報活動を行うことを目標としている。

- 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内LAN、学内LANであるUTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWWサーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに「情報システム委員会」が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を全般的に担当している。

課題と目標に関しては、情報学環・学際情報学府の情報ネットワーク全般に関する情報を集約し、提供するとともに、関係各所との責任分担を明確にし、直轄部分については適切な対処を迅速にかつ正当に行えるよう、規則整備を含め、ガバナンスの体制を確立し、運用する。その際、利用者の利益および意見の尊重と、内外におけるアカウントビリティの確保に努める。

- 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員3名をおいて、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のためのMLをつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。重大な情報倫理案件は現在までは発生せず、現在までの活動内容は、情報学環各種MLへの投稿基準の審査にとどまっている。

- 学生・留学生委員会

まず、現状について、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学生・留学生委員会では、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。なお、外国人研究生の受託審査と奨学金関係の業務については、2003

年度までは当委員会が担当していたが、2004年度から教務委員会の職掌に移管されたので、ここでは扱わない。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供

これらのうち、(1)については、本部棟4階とアネックス棟2階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供している。ロッカーは年度初めに希望者を募り、貸与している。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなってきた。情報学環発足時には、各教員の研究室が未整備だったこともあり、このような共通備品の充実が望まれたが、2004年度現在ではほとんどニーズはない。

(3)については、年に数回、院生向けの連絡会を教務委員会と共同で開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新生歓迎会、留学生懇親会、年度末の謝恩会を開催している(謝恩会は当該年度の修了生が企画実施)。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜メーリング・リストでの情報配信をおこなっている。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、留学生専用の窓口となる部署はないが、学生・留学生委員会、事務部、チューター制度等が機能してきて、部局としての留学生の受入体制は整ってきたと思われる。かろうじて個々の留学生を把握できる規模であることもあり、奨学金を始めとする諸々の留学生固有の問題に対しても、これまでは個別対応の形で比較的ケアができてきていた。2004年度は「留学生懇談会」を学環として初めて開催し、留学生、日本人学生、教職員が交流を図る場をもつことができた。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体としてスペースが不足していることから、大学院生用のスペースも十分ではない。勉強用の机やロッカーも、大学院生ひとりひとりに充当できていないのが現状である。当委員会だけで解決できる問題ではないが、また、拠点となる場所が分散していることから、大学院生向けの情報もまとまって提供できておらず、院生交流室などに一括して、奨学金・就職・住宅などの情報を閲覧できるようにすることがのぞましい。院生用の備品については、かなり蓄積されてきて現在とくに大きな問題は生じていないが、ゼロックス・コピーの便がやや悪いとの苦情が学生からはよく聞かれる。年間500枚という上限を越えてコピーする学生がかなり多く、対処が必要である。

留学生を対象としたサービスの課題に関しては、今後、留学生数は増加することが予想され、従来のような個別対応によるケアが行き届かなくなる可能性がある。そのため、対応組織を整備し、留学生全般を対象としたサポート体制を構築していくことが課題となる。具体的には、(1)入学時の留学生向けオリエンテーションの開催、(2)留学生懇談会の開催、(3)留学生旅行の実施などが考えられる。他部局には留学生専任の講師

を設置しているところも多いが、学府の現在の留学生数（平成 17 年度 45 人、全学生数の 17.9%）であれば、これまでの学生・留学生委員会、事務部、チューター制度等のサポートを強化することでカバーしていけると考えられるので、必ずしもその必要はないと思われる。

● 国際活動委員会

情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可することが委員会の役目である。最近の受け入れ総数を見ると、平成 12 年度 22、平成 13 年度 20、平成 14 年度 12、平成 15 年度 11、平成 16 年度 14 名となっている（ただし、15 年度までは旧情報学環と社会情報研究所の合計）。情報学環の研究の更なる展開に必要な分野で受け入れ研究員をさらに増加させることがこれからの課題であろう。

現在まで、情報学環としては外国の大学・研究機関との個別の研究協力協定を結んでいない。確かに東京大学全体としての協定の枠のなかで情報学環にとって関連のある分野で研究協力をおこなっていくことも重要であるが、やはり情報学環の研究の個性や特徴を踏まえて、部局として外国の大学・研究機関との協定締結をすすめることはこれからの大きな課題であろう。

また各教官がおこなっている国際的研究活動をさらに活性化させると同時に、それらを情報学環の活動として組織化していくことが必要である。これと関連して、教官が主体となる国際的研究活動に学生を積極的に参画させることも必要であろう。

● 出版編集委員会

出版編集委員会は、大学院情報学環の研究上の 3 つの主要な定期刊行物、『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』（年 2 回刊行）、社会調査・実験系の『情報学研究 調査研究編』、英文紀要『Review of Media, Information and Society』の編集と出版の業務を担当している。これらの学術刊行物は、もともと旧社会情報研究所において新聞研究所時代から長い間刊行されてきたものであるが、平成 16 年の社会情報研究所と情報学環の合併に伴い、内容や構成、装丁などを刷新し、継続的に刊行しているものである。それぞれの刊行物の目的と内容、刊行形態については、情報学環の出版事業についての項目で後述する。出版編集委員会は、それぞれの号の紀要について企画立案し、教員論文や巻頭エッセイ、フィールドノートやブックレビューについての依頼をするほか、院生査読論文についての査読委員への依頼や査読結果のまとめを行っている。

● 図書委員会

学環図書室は、文学部新聞研究室（昭和 4.10.1 - ）および新聞研究所（昭和 24.5.31 - ）時代に収集された、言論統制やジャーナリズムに関する豊富な蔵書を引き継ぎ、社会情報研究所（平成 4.4.10 - ）と改められ、平成 15 年度に情報学環・学際情報学府と統合しスタートした。

研究対象が、コミュニケーション一般、ニューメディアやネットワーク、さらに情報に関する社会現象・文化現象全般に拡大するに伴い、図書室の収書範囲も隣接諸分野に大きく広がっている。

なお、学環図書室は図書・雑誌形態の資料を主に収集しており、新聞の原紙、縮刷版に関しては、社会情報研究資料センターが収集、提供を分担している。

(主な主題分野)

新聞、テレビ、ラジオ、映画、言論出版、マスコミュニケーション、ジャーナリズム、広告宣伝、災害情報、社会情報学、社会心理学など。

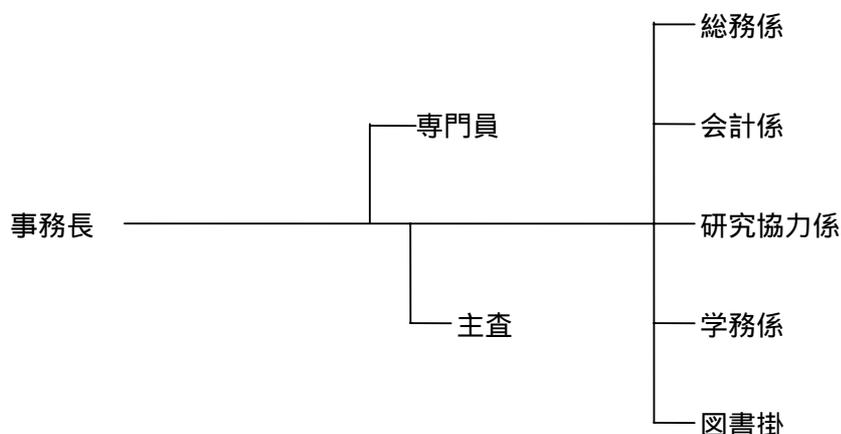
(蔵書冊数) 約 98,500 冊 (平成 14 年 3 月末現在)

● 財務法務委員会

情報学環の予算案の検討、予算の適切な執行等を行うほか、他の委員会の所掌に属さない一般的な事項に関する規程案の検討などを行い、総務委員会等における情報学環の管理運営を補佐している。(学環の財務状況については、1.4 を参照)

1.7 事務組織

事務部組織図



事務長	専門員	主査	係長	係員
1	1	1	3	9

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたっては、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1)コース共通必修科目、(2)コース別選択必修科目、(3)コース共通選択科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では博士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院のゼミ科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、情報・言語・行動系科目、社会・制度系科目、メディア・文化系科目、表現・リテラシー系科目、数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

2.3.3 ウェブ発表

ウェブ発表は、学際情報学府修士1年生が、その年度の末から翌年度初めにかけて、それまでの約1年間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表するものである。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をウェブページにまとめて学府サーバに掲載するオンライン発表会と、それを踏まえてポスター発表形式で行うオフライン発表会から成る。

オンライン発表会は年度末から約2週間続くが、発表者は1週間の間に自分以外の発表を閲覧し、アイデアの面白さ・斬新さ、進捗度合い、プレゼンテーションの良さ等の観点から良いと思うものに投票する相互評価を行い、各項目の上位の発表は公表される。

オフライン発表会は新年度に入ってから1日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、70名に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、70名に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2・3・6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

iii online は3つの目標をかかげてスタートした。社会人大学院生の学習機会の確保・大学院の情報公開・学習過程の透明化と改善である。そのうちの2つの目標については、次のとおりである。

1) 社会人大学院生の学習機会の確保

eラーニングを始めた最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の2割から3割が社会人という状況であった。

学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで1ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2回、3回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持ってくることは、非現実的だった。

そこで、教務委員会で話にでたのが、授業を撮影してオンデマンド配信するという現在のiii online のプランである。

2) 大学院の情報公開

情報学環では様々な研究プロジェクトを通じて大学と社会の連携を実現してきている。メディア表現・学びとリテラシーに関する MELL プロジェクト、日本科学未来館との連携、大井町の地域活性化などがその代表的な事例である。これらのプロジェクトでは、アプローチや領域は違っても、大学の知を公開するだけでなく、社会の中で再定義し大学と社会の新しい関係を築きあげていくという側面を共通して持っている。

iii online は、学習サービスの提供であるとともに、こうした社会連携型研究プロジェクトの一種でもある。iii online が大学院生向けの閉じた学習サービスではなく、可能な限り一般公開するという方針になったのは、情報学環が持っているこのような大学と社会に対する基本的なスタンスが反映しているからである。

2.3.6.2 iii online の概要

さて、この3つの目標をもとに設計された iii online の概要を説明しよう。iii online のシステムはメディア教育開発センターのチームが開発したものであり、後に eXcampus というオープンソース(誰でも無料で自由に改変して使える)ソフトウェアになったものである。(http://www.excampus.org)

iii online は、大きくゲスト向けのサービスと、学生向けのサービスに分けることができる。

ゲスト向けサービス

The screenshot shows the iii online website interface for guest users. At the top, there is a navigation bar with 'ゲスト' (Guest) and '学生' (Student) tabs. Below the navigation bar, there is a 'Welcome!' message and an 'Update' section. The 'Update' section lists two courses: 'メディア表現論: 第16講' (Media Expression: 16th Lecture) and '情報政策論: 第15講' (Information Policy: 15th Lecture). Each course listing includes a speaker's name and a link to '詳細ビデオ・資料はこちら' (Detailed video/materials here). There are also icons for 'video' and 'data'. Below the 'Update' section, there is a 'What's new' section with a list of recent news items, including dates like '2003/02/07' and '2003/02/01'.

図1: iii online ゲスト向けの画面

ゲスト向けの画面は、青色をベースにデザインされており、この画面では登録なしで授業を閲覧することができるようになっている。

ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは Real 形式 300kbps エンコーディングで行っている。Real 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井 潤一
	コミュニケーション・システム	原島 博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	各教官
2003	情報リテラシー論	山内 祐平
	情報記号論	石田 英敬
	情報進化論	佐倉 統
	シミュレーション・システム	荒川 忠一
2004	学際情報学概論	各教官
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平

表 1: iii online で閲覧可能な授業の一覧

ゲスト向けサービスでは、著作権処理ができていないもの、学生の発表など授業に影響がでると考えられるもの、教員が公開しない方がよいと判断したものをのぞいてすべての授業映像を見ることができる。

学生向けサービス

→[東京大学](#) →[情報学環・学際情報学府](#)

iii online

東京大学大学院学際情報学府
e-learning site

ゲスト メンバー

TOP | 授業 | プロフィール | ログアウト

「[履修授業](#)」-「[文化・人間情報学基礎III](#)」-[掲示板一覧](#)」-「[ヴィゴツキーの発表を受けてのディスカッションボード](#)」

ヴィゴツキーの発表を受けてのディスカッションボード

説明: ヴィゴツキー 班の発表を受けてのディスカッションをしてください。

関連する講義: [第11講](#)

設置日: 2004-07-01

最終更新日時: 2004-07-08 07:08:40

メッセージ数: 49

表示: 古いもの順 → [新しいもの順に変更](#)

内容表示: 1件のみ表示 → [全件の表示](#)

→[新しいメッセージを書く](#)

▼10件のトピック(1-10)

[ヴィゴツキー班への質問: 氏原 茂将](#) (2004-07-01 12:35:10)

削除されました: [シュルツ\(八坂\) 由美](#) (2004-07-01 13:28:20)

[デュエー班のテーマ:「○○主義」を整理する!](#): [古徳 佳枝](#) (2004-07-01 23:14:48)

→ [今更感たっぷりですが・・・](#): [飛理 信崇](#) (2004-07-08 00:53:55)

→ [構成主義について](#): [古徳 佳枝](#) (2004-07-05 15:36:25)

→ [訂正](#): [古徳 佳枝](#) (2004-07-08 07:08:40)

→ [\(社会的\)構築主義/構成主義/客観主義](#): [氏原 茂将](#) (2004-07-04 23:19:09)

→ [構成主義](#): [氏原 茂将](#) (2004-07-06 00:48:44)

→ [自分なりの整理 Re: 構成主義](#): [大嶋 淳俊](#) (2004-07-08 00:20:44)

→ [【補足】構成主義と社会的構成主義～学習・心理よりな立場から](#): [酒井 俊典](#) (2004-07-06)

図2: iii online 学生向けの画面

iii online の学生向けサービスは、赤色をベースとしてデザインされている。登録したユーザーIDとパスワードを入れることによって、このサービスを利用することができる。

学生向けサービスは、ゲスト向けサービスのすべての機能に加え、学生向けだけに公開される授業や資料の情報と掲示板サービスを利用することができる。

掲示板は、授業によってさまざまな方法で利用されているが、図2に示したのは、2004年夏学期に行われた文化・人間情報学基礎という演習形式の授業で利用された例である。この授業は、コミュニケーションと教育領域の古典的研究者6名に関する文献購読の授業であり、1週目に担当のグループが発表を行い、それを受けて、残りのグループがオンライン上でディスカッションをしながら、その研究者に関する疑問を掘り下げていき、その成果を2週目に発表するというサイクルで構成されている。

学生は基本的にeラーニングと通常の授業を好きに組み合わせることができる。仕事の都合でほとんど全回eラーニングで受講する学生もいれば、2、3回だけeラーニングで受講する学生もいる。

2.3.6.3 iii online の評価

利用動向を確認するために、2002 年夏学期授業終了後に、iii online に利用者登録した全学生（大学院生）130 名に対してアンケート調査を実施した。有効回答数は 62（有効回答率 47.7%）であった。このうち社会人学生の回答者は 16 名（有効回答数に占める割合 25.8%）である。



グラフ1：iii online のメリット

iii online のメリットは「時間的拘束からの解放」，「体力的に楽であること」，そして「効率のよい学習」である。社会人学生にとくにこの傾向が強くみられたことが特徴的である。特に e-learning で受講してみたいという総合評価項目では、5 段階スケールで 4.64 という好成績をマークしている。

この調査から、iii online が当所の目的としていた「社会人大大学院生の学習機会」という目標はほぼ達成できているものと考えられる。

iii online は 2002 年 4 月に運用を開始したが、ほぼ 1 年たった 2 月 20 日現在で、稼働実績を集計したものが以下の表である。

ヒット数	107 万ヒット
利用者数	のべ 46347 人
映像配信時間	5474 時間
学外からのアクセス率	93.5%

表 2：2002 年度の稼働実績

サーバのアクセスログと、同時期におこなった外部からの利用者へのアンケート調査を照らし合わせると、興味深いことが明らかになってきた。授業によって人気・不人気があるのだが、各授業に数百人の外部利用者がついており、数としては、1) 40代の社会人男性 2) 30代子育て中の主婦 3) 受験を考えている大学院生予備軍 がベスト3になった。このことから、iii online は、新しいオンラインコミュニティを開拓することに成功したといえるだろう。大学院の情報公開としては一定の成果を確認することができた。

2・3・7 ソウル大学大学院との大学院日韓合同授業

学際情報学府では、大学院授業の一環として、ソウル大学との間でインターネット回線を用いた日韓合同授業を実施している。これは、これまでの東京大学社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所との長年の学術交流を基礎に、双方の会場をビデオ会議システムでつなぎ、両大学の教員、大学院生が、毎週、越境的に議論を重ねる授業をしていこうという試みで、8週間にわたり継続的に授業を行っている。教材は、原則として英語のテキストを用いているが、講義は英語、日本語、韓国語で行われ、日韓相互での担当講師による講義の後、日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化の対する認識を共有してきている。この試みを第一歩として、今後は日本と韓国だけでなく、将来的には中国や台湾、欧米のトップレベルの大学院をインターネット回線でつなぎ、共同で大学院授業を企画運営していくことも考えたい。これらの試みは、情報学環が東京大学の中期計画・中期目標の「各部局の重点事項」のなかで、平成17年度実施の5項目のうちの一つとして、「国際への展開を目指しアジアの他大学との授業交換実験を開始する」ことを掲げていることにも対応している。

2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博士課程約20人の大学院生を受け入れてきた。04年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程14人、博士課程7人が統合されたので、学際情報学府の入学者数はさらに拡大し、現在では修士課程定員が70人、博士課程定員が30人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から出発して、01年度が102人（修士）、02年度が139人（修士113人、博士26人）、03年度が169人（修士128人、博士41人）、04年度が205人（修士136人、博士69人）、05年度が234人（修士151人、博士83人）と増加し続けてきた。現在、東京大学のなかで大学院情報学環・学際情報学府は、大学院生数においては教育学研究科、経済学研究科などとほぼ同じ規模の組織となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、（1）東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、（2）実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会

人の割合が高いこと、(3)外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4)入学者の男女比も、約6:4(全体の40%程度が女性)と均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近2年間では、修士課程の受入予定人員70人に対し、2005年度入学試験が志願者178人(2.54倍)、06年度入学試験が210人(3.00倍)と、ほぼ3倍の競争率になる志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001年度が38人、02年度が40人、03年度が51人、04年度が57人と徐々に増えてきた。他方で、2004年度から学際情報学府と合併する人文社会系研究科社会情報学専門分野では、すでに長い間、毎年約10名の修士修了者を輩出してきた。したがって、両組織の合併後の入学者が修了の時期を迎える2005年度以降、毎年、約70名の修士修了者が輩出されていくようになると見込まれる。

また、博士課程の修了者についてみるならば、旧社会情報研究所では、人文社会系研究科社会情報学専門分野において2001年度に4人、02年度に2人、03年度に0人、04年度に5人の博士号取得者(課程博士)を輩出してきた。他方、学際情報学府では、設立されたのが2000年度なので、最初の入学者が博士3年に達する2004年度に初めて4人の博士号取得者を輩出することになった。2005年度以降も、すでにこれまで以上に多くの博士号取得者が誕生することが見込まれている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2の先輩たちによるWeb発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、Web発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように日本の大学院教育としては珍しいほどに修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなりストに示される。

(別表)

これまでの修士論文のタイトル(抄)

- 日本における「情報セキュリティ」の言説分析
- 「いい男」の世界～男性ライフスタイル誌と＜男性性＞に関する研究～
- インターネット・コミュニティと組織集団との現実感覚の共有に関する研究
- 国語教科書のメディア論
- 経済主体の適応行動～企業の経済適応行動分析における普通的条件とその形式～
- 戦時期におけるメディアと国家～同盟通信社の設立と活動～
- マス・メディアの表現の自由における自律と制度
- メディアを規定する視聴率を巡るテレビの作り手研究～放送デジタル化における新評価基準とメディアの行方まで～
- 企業情報システムのマネジメントに関する考察～情報技術の高度化がもたらす新たな段階～
- 中国の女性「時尚」雑誌の二極化現象について～欧米型と日本型を中心に～
- 情報教育におけるデザイン概念の有用性に関する研究
- アメリカにおけるオルタナティブ・メディアの政治学～批判的実践に関わる人々へのインタビュー調査を中心として～
- 組織のマルチエージェントシミュレーション～組織のシミュレーションのためのモデルの研究～
- web-literacy の育成モデルに関する研究～教科「情報」における授業実践を通して～
- インターネットによる公共空間の合意形成の再構築～電子立法院によって国民が立法過程へアクセスする機会～
- 国際交流学習に見る高齢期の学びの在り方の一考察
- 企業の境界の変化と知の創造の「場」としての社会的ライブラリー
- 戦後初期(1945～1953)小津映画における家族像の分析～母性原理を軸にして～
- オンラインゲームとインターネット中毒～アバターが自己意識に与える影響の実証的研究～
- ユビキタスコンピューティングの応用としてのデジタル・ミュージアム～パーソナライズ手法によるアプローチ～
- 「映画性」はテレビゲームに何をもたらしたか～高度化した映像表現と「面白さ」の関係について～
- 位置参照システムとしての地名～都市施設の地名による位置参照を事例として～
- 経済システムの不安定性に対する一考察～情報と非可逆性の経済学への序論～
- 人間からロボットへの日常の動的把持スキルの伝達
- ロボットへの動作教示を目的とした相関情報抽出学習による予測機構
- 実音場を拡張する頭部装着型音場提示システムの研究
- 拡張現実感における建築物の陰影表現手法
- 現実構成問題へのシステム論的＝情報学的接近
- 無線センサーネットワーク低消費電力化のためのイベントドリブン対応時分割 MAC 層プロトコル

- 信頼される意思決定プロセスのデザインに向けて～エネルギー～技術導入の社会意思決定プロセスから考える～
- アプリケーション解析に基づく組み込み OS 自動最適化手法
- 遊離物体の機能的な配置換え行為の観察～環境のレイアウトを改変する行為と知覚について～
- 音列の異同判断課題における音色の効果の検討
- ギター演奏の学習過程における「構え」の意義
- クモの造網行動に基づく CG 表現の研究
- 耐故障性を備えた自律適応型検索エンジン
- 自律的移動支援のための場所表現モデルと経路計算手法
- 複合語の統計的性質に基づく重要語抽出法の研究
- CASIS：ユビキタスコンピューティング環境のためのコンテキストウェア音声インタフェースシステム
- 音楽配信サービスにおける利益均衡の法と技術～著作権者等と利用者の利益均衡のあり方の検討～
- コンピュータの理解を支援するシュミレーション・ゲームおよびメディア・アート
- 自治体の情報化におけるプライバシーの保護をめぐる問題
- アニメ業界における権利・契約問題に関する考察及び実態調査
- 生活支援のための投影型情報提示システム
- テレビジョンにおける時間デザイン～重層化メディア時代にむけての番組設計論序説～
- 三次元計測データに基づく学術調査・シミュレーション - ゴッペ洞窟の光源環境に関して -
- コンテキスト・デザインとしての WEB 表現～オンラインとオフラインとのコミュニケーション創造～

以上のリストには、大学院学際情報学府の他、旧社会情報研究所の大学院コースであった人文社会系研究科社会情報学専門分野の修了者の論文タイトルも含まれる。

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の 35～40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の 6 割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、コンテツト創造、教育部及びベネッセ寄附講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

教育部では、大学2年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年50名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限2年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

この種の専門教育は、他大学では、独立の学部・学科を設けている例が少なくない。しかし、本学では、上述の希望をもつ学生諸君は、それぞれの所属する学部・学科で、各自の専攻する学問分野の専門知識を修得するとともに、これと並行して情報に関する基礎的素養を身につけることが望ましいとの考えから、本学環に課外授業のかたちで教育部研究生制度が設けられている。そのため、研究生に対する講義は、各学部や大学院の講義時間とできるだけ重ならないようにするため、夕刻から夜間にかけて開講される(15:15-16:55、17:05-18:45、18:55-20:35の3限)。

主な授業科目には、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム論、情報行動論、情報認知論、情報文化論、情報思想論、情報法論、情報政策論、情報経済論、情報産業論、情報生命論、情報アート論、情報メディア論、情報教育論、新聞論、出版論、放送論、広告論、メディア演習、ジャーナリズム演習、特別講義、自主学习、などがあり、原則として全ての科目が2年間のうちに一度は開講されることとなっている。

教育部に在籍した研究生の進路は、相当数がジャーナリズム関係の職業を選んでいるほか、一般の会社官庁関係に就職する者も多く、また大学院進学により教育研究職を目指す者も少なくない。

参考として平成17年度開講科目を以下に示す。

(夏学期)

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月			
火	情報教育論		ジャーナリズム演習()
水			
木	情報生命論		
金		ジャーナリズム演習()	

(冬学期)

	4 限 15:15 ~ 16:55	5 限 17:05 ~ 18:45	6 限 18:55 ~ 20:35
月	情報認知論	マス・コミュニケーション論	
火	情報経済論		新聞論 ()
水	放送論 ()	情報思想論	
木	情報政策論	出版論 ()	メディア演習 ()
金	特別講義	メディア演習 ()	広告論 ()

なお、2001年から2005年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数については巻末参考資料を参照していただきたい。

2.7.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学の目的

欧米諸国ではコンテンツは文化資源としてだけでなく経済資源としても重視され、20世紀初頭から国家戦略としてこの分野の人材育成が実施されていた。21世紀に入り、アジア諸国でも成長分野としてのコンテンツ産業振興を国家目標と掲げるなどして人材育成に注力している例も数多い。これらの国が高等教育機関から専門学校まで幅広い人材を育成しているのに対し、わが国では専門学校におけるクリエイター育成がほとんどであった。その結果、比較的国際競争力を持っていたわが国のアニメーションとゲームも、人材育成に力を入れている他の国々に激しく追い上げられ、既にオンラインゲームでは韓国に逆転されているという事例もある。このような世界状況の中で、先端的デジタル技術の知識を有し、国際競争力を持つ創造的コンテンツを制作し流通させる修士レベルの人材育成はわが国にとって急務であると考えられる。

特に、デジタルコンテンツ分野においては、近年の情報技術の革新と連動して、作品制作における技術の比重が以前に比べて格段に高くなってきている。このため、製作者・監督者の両者において、通常のコンテンツ制作における知識のみならず技術に通暁することが強く求められてきている。また、同時に、新たな表現技術の研究開発を担う技術者の側においても、作品制作の現場における諸事情に通暁し、技術開発と作品制作の間の架け橋となることが求められている。これらの状況を総合的に評価した結果、人材養成の対象としては大きくプロデューサー、技術開発者の2者を掲げてはいるが、その間に広がる広範なスペクトルを包含する人材層を養成することを想定している。その結果として得られる、従来にない種類の人材は、日本のコンテンツ産業の水準の牽引と国際競争力の強化に大きく寄与するものと考えている。

特に、人材養成の推進により、高次の知識を有する専門家を体系的に産業界に供給することを可能とし、従来は希薄であったコンテンツ産業界と高等教育機関、さらには学会との連携の強化が実現される。同時に、これらの人材育成を行う際の教育プログラムの規範

を提供できる。来日してアニメーションやゲームについて学ぶことを希望する者が多いため、海外から優れた人材が集結する国際的拠点の形成に発展しうるだろう。

養成の対象となる人材

本教育プログラムでは、3種の人材の養成を目的としている。各々の人材養成において想定する到達レベルは以下のようになっている。

プロデューサー： 先端技術と国際的なコンテンツビジネスの高度な専門知識を有し、実社会で研究成果を活用できる人材。

指導的教育者： デジタルコンテンツ創造に関する高度な人材育成プログラムを構築できる教育者。

技術開発者： 表現手法に詳しく、エンターテインメント技術の研究開発をクリエイターと共に行える技術開発者。

人材養成における手法の独自性に関して

「わが国に欠落している人材の養成：プロデューサー」

国際競争力があるわが国のコンテンツが国際市場から評価に見合った経済的報償を得る機会を逃していることが少なくないのは、国際的なビジネス・スキームを組めないためである。本プログラムでは、国際的ビジネスの知見と、先端的な技術に関する知見をもったプロデューサーを養成することで、日本のコンテンツ産業の国際競争力を強化する。

「わが国に欠落している人材の養成：指導的教育者」

わが国にはクリエイター養成機関が多数存在するが、教育者そのものを育成する機関が存在しないため、教育も経験による属人的なものになっているのが実状である。そのため、本分野では教育者が絶対的に不足している。本プログラムでは、コンテンツ創造の人材育成で指導的な立場にたつ教育者を育成することで、日本における教育水準を向上させる。

「わが国に欠落している人材の養成：技術開発者」

国際競争力をもっていたわが国のアニメーションやゲームが守勢にあるのも、制作技術の開発の立ち後れに原因がある。コンテンツ産業の知見を有した先端的エンターテインメント技術を研究開発できる技術開発者の育成が急務である。

「自然科学と人文・社会科学との融合」

東京大学では早くからデジタルコンテンツ創造に関する教育プログラムの実現に向けて検討を重ね、産業界の協力を得て「コンテンツビジネス概論」、「メディアビジネス概

論」(共に浜野保樹)、「ゲームデザイン&エンジニア論」(馬場章)などの講義を実施し、『表現のビジネス：コンテンツ制作論』(浜野保樹著)、『CG入門』(河口洋一郎著)、『記憶のゆくたて：デジタル・アーカイブの文化経済』(武邑光裕著)などの教科書を作成した。また、コンテンツ創造の競争力を向上させるためには、自然科学と人文・社会科学との融合が不可欠であることを考慮すると、人材養成機関には先端的研究の裏づけが必須である。東京大学では、コンテンツ創造に活用できる映像処理技術やバーチャルリアリティ技術やアーカイブ技術など、多くの技術開発を行い、技術者養成で実績がある。

「高等教育機関と産業界との連携」

スタジオジブリには「東小金井村塾」、プロダクションIGには押井守氏による「押井塾」などがあり、自主的な人材育成が既に行われている。その成果が『千と千尋の神隠し』や『攻殻機動隊』の国際的成功につながっている。コンテンツ分野では、実践現場における知識が重要であるため、このような試みで既に成果をあげている専門家と連携し、広範に教育を行うことで、より実践的な人材育成が行える。また、コンテンツ産業は東京に集中するため、産業界の協力を得て継続的に先端的人材育成を行うためには東京に立地している必要がある。

「人材養成のモデル」

国際的な成功を収めたコンテンツ業界の経験知と、東京大学の技術者教育の経験を科学的に融合させ、体系的に整理した本プログラムのカリキュラムは、コンテンツ人材の育成モデルとなる。

「非ハリウッド型人材育成」

コンテンツ人材養成はハリウッドの手法を流用することが多いが、ハリウッド・モデルは表現の多様性を阻害する方向に向かうことが多い。本プロジェクトでは表現の多様を担保するわが国のコンテンツ産業が培ってきた技法やモデルに準拠しつつ、国際的に通用する実務知識を有する人材育成を行う。

国内外の類似事例との対比

● 国内

わが国におけるこの分野の人材育成は、専門学校によるクリエイター育成が中心である。プロデューサー養成としては教育特区構想の一環としてデジタルハリウッドが、株式会社

の専門職大学院を申請中であるが、Webなどの小規模作品制作のプロデューサーとディレクターの育成が主眼である。

大学としてデジタルコンテンツの関連学科を持つのは、ともに平成15年4月設置された東京工芸大学芸術学部アニメーション学科と大阪電気通信大学情報工学部デジタルゲーム学科だけで、やはりクリエイター養成が目的である。

関連大学院としては、東京大学情報学環と東京大学新領域創成科学研究科メディア環境学分野が内容的に最も近く、両者ともにプロデューサー養成を目的の一つとしている。それらの知見が活かされ、産業界との連携において拡張したものが本プログラムである。また、九州大学、立命館大学、慶応義塾大学、早稲田大学においても、本分野に力を入れようとする動きがある。

● 国外

海外ではFilm Schoolと呼ばれる映画大学でデジタルコンテンツの教育が行われている事例が多く、先進諸国では、フェミス(仏)、BFI(英)、SFI(スウェーデン)、北京映画学院(中国)、北京広播学院動画学院(中国)、国立芸術学院映画演劇学科(台湾)といったように国立の映画大学が存在する。米国でも政府の連邦政府資金が入った大学院大学AFIが存在する。先進諸国で国立の映画学校をもたないのはわが国のみである。

しかし、これらはクリエイター養成機関であって、デジタルコンテンツのプロデューサー育成を行っているのは、米国のエンターテインメントに関するMBAコースである。これらと技術に関する研究開発を併せ持つ機関は、南カリフォルニア大学(USC)だけである。既にUSC映画・テレビ学部長とも包括的な情報交換を定期的に行うことで合意しているが、USCはあくまでもハリウッド・モデルを前提としたものであり、本プログラムは日本型モデルを志向している点で大きく異なる。

2.7.3 ベネッセ先端教育技術学講座(寄附講座)

ベネッセ先端教育技術学講座(3.2.2を参照)では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

・学際情報学府の教育活動との有機的連携

Beatで行われている研究プロジェクトに対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトがそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をしている。(Monogatari, eCC, Skaalなど、全プロジェクトに大学院生が関与している。)その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、月1回のペースで公開研究会 beat セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

- 第1回 「地上デジタル放送の教育展開」 2004年7月3日開催
- 第2回 「“ケータイ”と教育の未来」 2004年9月4日開催
- 第3回 「ヨーロッパ・m-learningの現在」 2004年10月9日開催
- 第4回 「モバイルコンテンツとインタラクショナルデザイン」 2004年11月7日開催
- 第5回 「モバイルする!? 科学教育」 2004年12月11日開催
- 第6回 DoCoMo モバイル社会研究所 共同企画
ケータイ・ネット・テレビ～メディアとこどもの今とこれから～ 2005年1月8日開催
- 第7回 BEAT プロジェクト成果報告会 2005年2月5日開催
- 第8回 Emerging learning technology in education
姿をあらわしはじめた 新しい学習テクノロジー 世界最先端の現場から 2005年3月5日開催

2004年度はのべ510名の参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。なかでも最大のものが 21 世紀 COE「次世代ユビキタス社会基盤の形成」（研究リーダー：坂村健教授、副学環長）である。その予算規模は科学研究費補助金や寄附講座などを含めた学環の研究資金全体の 4 分の 1 を占めており、運営費交付金分の金額をさえ上回っている。その研究内容は、文理連携の下に次世代ネットワーク社会を大胆に構想している。その創造性が高く評価されて採択されたものと考えられる。情報学環のスタッフ体勢は、こうした文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことができるのである。

そして、文理連携の 21 世紀 COE は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することになった。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに 21 世紀 COE という競争的資金が獲得できたことによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになったのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況

の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になったのである。内部相互補助のやり方だと言えよう。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹定員（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動定員を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来 of 枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト

3.2.1 文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

現在、状況認識技術（Context-awareness）を中核とする新しい情報分野（ユビキタスコンピューティング）の研究が世界的な大きな潮流となっている。ユビキタスコンピューティングは、世界に先駆けて本拠点リーダー（坂村）が 1984 年に開始したトロンプロジェクトの技術目標に掲げたコンセプトである。こうした経緯もあり、我が国は本分野において世界を先導しうる技術水準を有する。しかし、学術分野・産業分野双方で世界的に活発な研究開発がなされており、本分野の重要性は現在の世界的な共通認識となっている。そのため、本分野の研究の推進は、激しい国際競争の中で遅れをとらないためにも必須のものである。ユビキタスコンピューティングの適用分野は多岐にわたり、既に農学、医学、薬学、地理学、生物学等の諸学問分野をはじめ、災害支援や社会安全の実現、国土産業社会インフラ等の国家レベルの施策への適用も期待されており、本分野の研究レベルや技術

競争力の低下は、我が国の将来の国力低下に直結する。したがって、ユビキタスコンピューティング分野の研究教育を積極的に推進することは緊急度と重要度が極めて高い。そこで、東京大学大学院情報学環が核となり、東京大学はユビキタスコンピューティング技術やそれを様々な分野に適用する研究や、当該分野の人材育成を行う教育のための拠点として、文部科学省 21 世紀 COE プロジェクトを平成 16～20 年度の 5 年計画で開始した。本拠点における研究は、基礎技術研究、応用技術研究、社会適用研究の 3 つの分野からなる。

(1) 基礎技術研究

ユビキタスコンピューティングにおける状況認識技術の核となる、超小型 RFID やセンサーネットワーク、リアルタイムシステム、組み込みシステムなどの基盤情報技術の研究を実施する。更に、こうした要素技術を組み合わせて社会レベルの巨大システムを構築するためのトータルアーキテクチャの研究にも取り組む。

(2) 応用技術研究

ユビキタスコンピューティングの状況認識技術を、他の様々な分野に適用する応用研究を実施する。例えば、農学分野に適用する食品トレーサビリティ研究、医薬分野に適用する医薬品のトレーサビリティや医薬品の適正利用支援システム研究、交通分野に適用したユビキタス場所情報システム研究などの応用研究に対して、各種分野の研究者と連携して取り組む。

(3) 社会適用研究

ユビキタスコンピューティング技術を社会基盤として適用する際の社会的課題についての研究も行う。例えば、ユビキタスコンピューティング技術によって提供されるコンテンツの構成方法に関する課題、セキュリティやプライバシーの問題、法制度などの問題を検討し、最終的には政策提言を行うことを目指す。

ユビキタス情報技術研究プロジェクトは、常勤教員 9 名、特任教員 3 名によって構成され、主にユビキタスコンピューティングの基盤技術の研究分野である。ユビキタス情報社会国際研究プロジェクトは、常勤教員 7 名、特任教員 2 名により構成され、主にユビキタスコンピューティング技術を社会に適用するときの社会的な課題、あるべきユビキタス情報社会のあり方の研究分野である。ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトは、常勤教員 4 名、特任教員 1 名、RA4 名によって構成され、コンテクストアウェアな情報配信を、社会規模で実施するために必要なコンテンツ記述技術の研究分野である。

更に本拠点は、世界におけるユビキタスコンピューティング分野の研究教育のハブとしての役割を果たすべく、世界中の様々な大学や企業との共同研究や共同実験の実施、関連する政府機関等との密接な連携を行いプロジェクトを推進している。

総括班

坂村 健・教授（拠点リーダー）
吉見 俊哉・教授（拠点リーダー補佐）
石崎 雅人・助教授（総括調整）
越塚 登・助教授（総括調整）

プロジェクト A: ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクト

馬場 章・教授（統括）
橋本 良明・教授
石田 英敬・教授
西野 嘉章・教授（総合研究博物館）
添野 勉・特任教員
大島 十二愛・R A
研谷 紀夫・R A
倉持 基・R A
山根 信二・R A

プロジェクト B: ユビキタス情報技術研究プロジェクト

坂村 健・教授（統括）
原島 博・教授
辻井 潤一・教授
河口 洋一郎・教授
中川 裕志・教授（情報基盤センター）
清水謙多郎・教授（大学院農学生命科学研究科）
石崎 雅人・助教授
越塚 登・助教授（情報基盤センター）
大石 久和・特任教授（国土技術研究センター 理事長）
井村 亮・特任教授（日立製作所 情報・通信グループ、ミュージアムソリューション事業部長）
小川 克彦・特任教授（NTT サイバーソリューション研究所 所長）

プロジェクト C: ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト

吉見 俊哉・教授（統括）
西垣 通・教授
濱田 純一・教授
須藤 修・教授
佐倉 統・助教授

水越 伸・助教授
林 香里・助教授
山本 拓司・特任教員
関谷 直哉・特任教員
寺師 正俊・技術補佐員

平成 16 年度は、本拠点の形成プログラムの初年度であり、特に研究拠点形成の初年度あるため、研究教育体制や環境を構築することに多くの労力を注力した。また、拠点リーダーがリーダーシップを発揮し、今後 5 年間の研究教育の方向性を研究者間で合意するために、シンポジウム等の開催に努めた。特に C O E シンポジウムは、平成 16 年度は全部で 5 回という大変高い頻度で開催し、研究教育の方向性の確認や問題提起を盛んに行った。

3.2.2 ベネッセ先端教育技術学講座

ベネッセ先端教育技術学講座 (Benesse department of Educational Advance Technology- 以下 beat と略称)は、株式会社ベネッセコーポレーションの寄附により、2004 年 4 月に設置された寄付講座である。設置期間は 3 年間で予定している。主要な研究テーマは以下の通りである。

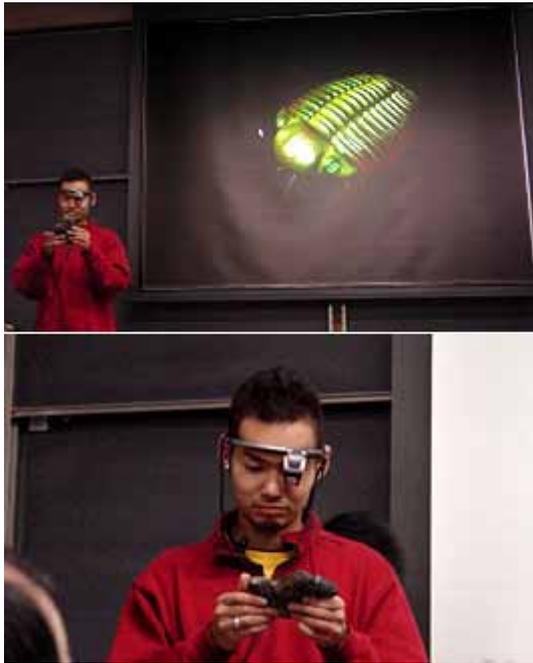
携帯電話を基盤とした学習システムの構築・ウェアラブルコンピュータを利用したユビキタス学習環境・デジタル放送などの新しい放送システムとインターネットの連動による教育環境の構築・データマイニング技術を利用した LMS(学習管理システム)の構築など。

現在、beat は客員助教授 2 名、フェロー・アソシエイツなど研究員 8 名の体制で運営しており、2004 度は以下のような研究プロジェクトが行われた。

● MonoGatari Project

我々の身近にあるモノ自体が語ることによって学習のきっかけや状況を作り出すという、従来の教科書やマルチメディア教材の枠組みを超えたインターフェイスを開発。この背景には、街全体を博物館とし、学習の入り口になるような新しい社会基盤をデザインしていこうとする構想がある。beat ではこの新しい教育向けインターフェイスの開発の基盤技術として RFID (無線 IC タグ) を使った把持状態の認識システムを開発した。(特許申請中)

この技術のアプリケーションとして、博物館向けのシステム開発を進めている。これは、三葉虫の化石をユーザーがさわることによって、そのさわりに応じて三葉虫の化石自身が自分の生い立ちや構造について語るというものである。ユーザーは、ウェアラブルディスプレイをつけ、4 億年前に実際生きていた化石の鑑賞とその化石にまつわる物語を同時に経験することになる。



- eCC Project

「総合的学習の時間」などのカリキュラム開発でリーダーシップを発揮するコーディネータの力量形成をねらいとする教員向け e-Learning プログラムの開発を目的としたプロジェクト。

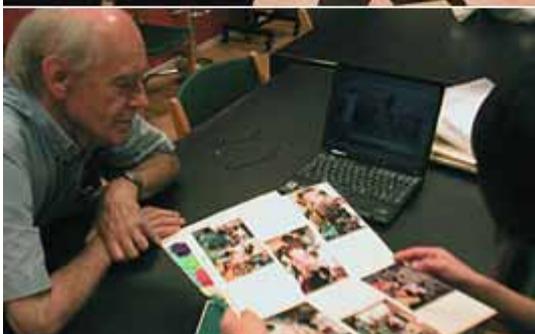
その内容は、千葉・静岡・富山・兵庫・岡山・奈良・徳島・熊本の地域的に離れた教員が、学校カリキュラムについて、協同的に学んでいくというものである。電子掲示板だけでなく、学習のための実効的なインタラクションとして、Macromedia Breeze を使って他地点遠隔テレビ会議を行った。



- Skaal Project

Skaal は、ノルウェー語で「乾杯」という意味で、ノルウェーと日本の高齢者の国際交流学習のためのプロジェクトである。高齢化社会・生涯学習社会において、重要なテーマである高齢者の学びに焦点を当て、国際交流学習を通して学ぶプログラムを開発。

今回の実証実験では、日本とノルウェーの高齢者同士が、身近なテーマをきっかけに相互にコミュニケーションし、学び合った。具体的には、ビデオレター等による自己紹介の後、E-mail やテレビ会議を用いて交流を行った。



3.2.3 その他の大型研究プロジェクト

上述のように情報学環として組織的に遂行するもののほか、各教員が中心となって行う研究プロジェクトでも、以下の例（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。

< 科学研究費補助金、研究代表者となっているもの >

池内 克史 2001-2003 特定領域研究 「ロボットの動作観察とタスク・スキル獲得による人間の作業熟練過程の解明」（池内克史、木村浩） 20,700 千円

永ノ尾 信悟 2002-2004 基盤研究(B) 「イスラム教と接触以後の南アジア諸宗教の相互関係に関する研究」（永ノ尾信悟、斉藤明、高島淳、島岩、森雅秀） 13,600 千円

國吉 康夫 2003-2005 特定領域研究 「身体性と社会性の認知脳科学的理解とアンドロイド構成論」（國吉康夫、石黒浩、開一夫） 50,600 千円

國吉 康夫 2003-2005 基盤研究(A) 「全身行動における「コツ」と「目の付け所」のヒューマノイド科学」（國吉 康夫） 27,500 千円

須藤 修 2001-2005 特定領域研究 「グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザインに関する研究」（須藤修、出口弘、田中秀幸、榊俊吾、後藤玲子） 72,200 千円

橋元 良明2001-2003 「インターネット利用に伴う情報格差、対人関係希薄化の分析」（橋元良明、石井健一、木村忠正、辻大介） 16,400 千円

水越 伸 2002-2004 基盤研究(B) 「循環型情報社会の創成を目指したメディア・リテラシーの理論と実践に関する研究」（水越伸、山内祐平、砂川浩慶、菅谷明子、ペク・ソンス） 11,500 千円

森 武俊 2003-2006 若手研究(A) 「家庭内行動情報データベースのための並列分散ネットワークセンシングシステム」（森 武俊） 23,530 千円

森 武俊 2004-2005 特定領域研究 「運動計測情報に基づく人間の日常生活動作認識モデルに関する研究」(森武俊) 13,000 千円

山口 泰 2002-2004 基盤研究(B) 「実世界データのための次元間横断処理」(山口泰、高橋成雄、寺沢幹雄) 14,800 千円

吉見 俊哉 2004-2007 「20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発：日本、韓国、台湾、フィリピンを中心に」(吉見俊哉、姜尚中、水越伸、伊藤守、小倉利丸、岩淵 功一、田仲康博、多田治、毛利嘉孝、姜明求(ソウル国立大学教授)、陳光興(台湾精華大学教授)) 14,200 千円

吉見 俊哉 2001-2003 「20世紀における戦争とメディア：両世界大戦期の情報文化に関する歴史社会学的研究」(吉見俊哉、姜尚中、水越伸、佐藤健二) 11,200 千円

<その他外部資金関係>

池内 克史 2002-2004 科学技術振興事業団 「文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法」(池内克史) 44,500 千円

池内 克史 2001-2004 科学技術振興事業団 戦略的創造研究推進事業
「高度メディア社会の生活情報技術文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法」(池内克史、尺長健、久野義徳、木村浩、斎藤英俊他) 424,700 千円

池内 克史 2000 科学技術振興事業団 戦略的創造研究推進事業
「高度メディア社会の生活情報技術文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法」(池内克史、尺長健、久野義徳、木村浩、斎藤英俊他) 83,000 千円

山本 隆一 2002 厚生労働科学研究費補助
「標準データ項目セットを用いた知的データベースによる診療根拠の動的生成に関する研究」(山本隆一、増田剛、坂本憲広、大江和彦) 10,000 千円

山本 隆一 2001 厚生労働科学研究費補助
「標準データ項目セットを用いた知的データベースによる診療根拠の動的生成に関する研究」(山本隆一、増田剛、坂本憲広、大江和彦) 10,000 千円

山本 隆一 2000 厚生労働科学研究費補助 「標準データ項目セットを用いた知的データベースによる診療根拠の動的生成に関する研究」 (山本隆一、増田剛、坂本憲広、大江和彦) 10,000 千円

3.3 社会情報研究資料センターの役割

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所に開室された「プレスセンタ-」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センタ-」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センタ-」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。この研究資料センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、関連する学内外の研究者に利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、社会情報研究資料センターが収蔵している資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000巻という膨大な数に上る。これらの新聞資料は、情報学環書庫に保管されている他、駒場キャンパス内の宇宙工学研究所跡地などに別置されている。センター内には、利用者のためにマイクロリーダーとCD-ROM 検索用のパソコンを備えている。また、本研究資料センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

3.3.1.1 新聞マイクロフィルム保存環境の改善

現在、研究資料センター収蔵のマイクロフィルムは保存環境が必ずしも十分に整備できていないため、一部に強い酢酸臭を発生し、フィルムがたわんできているものがある。センターでは、この事態を深刻に受けとめて、マイクロフィルムの保存状態についての調査を進めている。すなわち、専門の係員が担当して、収蔵マイクロフィルムの状態をチェックし、5段階で評価をする調査を行った。その結果を踏まえ、特に傷みが激しいもの(強い酢酸臭、フィルムの激しいたわみなど)は、隔離などの特別の装置を講じている。当面は応急の措置にとどまっているが、より抜本的な保存環境改善のための措置が必要なことは明らかであり、書庫そのものの冷房、除湿設備の完備やマイクロ保存用の特別書庫の整備などの措置が早急に望まれている。

3.3.1.2 新聞マイクロフィルムのデジタル化によるバックアップ作成

上記のようなマイクロ保存環境の改善と並行して、収蔵しているマイクロフィルムのすべてについてデジタル化とバックアップ体制の整備を進める必要がある。前述のように、本研究資料センターは、約4,500本の貴重なマイクロを収蔵しており、これらについて段階的にバックアップ用の画像デジタルデータを作成していきたいと考えている。データ

の公開には、著作権などなお検討しなくてはならないいくつかの問題があるが、データが失われては重大な損失なので、バックアップのためのデジタルデータを作成しておくことは、最低限必要な措置である。しかしながら、5万本近いマイクロフィルムのデジタル化には、膨大な作業と高価な装置が必要である。当面は、この装置を所有している部局や機関の協力を得ながら、デジタル化のプロジェクトを進めたい。

3.3.2.1 社会情報研究資料センター デジタルアーカイブの構築

社会情報研究資料センターでは、本研究資料センターや情報学環図書室に収蔵されている資料を中心に、旧新聞研究所資料のデジタルアーカイブ化のための諸々のプロジェクトを進めている。すでに構築されているアーカイブとしては、ジャーナリストの「森恭三アーカイブ」、「小野秀雄コレクション かわら版・新聞錦絵（ニュースの誕生）アーカイブ」などがあり、いずれもすでにインターネットで公開して一般の利用に供せられている。これらに加えて現在、「第一次大戦プロパガンダ・ポスター・アーカイブ」、「内閣情報部宣伝資料アーカイブ」、「近代日本号外資料アーカイブ」、「満州・中国大陸新聞アーカイブ」などの旧新聞研究所の貴重資料を基礎としたアーカイブ構築の作業が進んでいる。採取的には、旧新聞研究所が所蔵してきたほとんどの貴重資料を網羅するような形でのデジタルアーカイブを構築し、またその英語や韓国語、中国語のバージョンを作成していくことで、広く世界のメディア研究や歴史研究、地域研究などの利用に供していくことにしたい。

3.3.2.2 COEユビキタスプロジェクトとの連携化

本センターの中期的な将来計画として、既述のようにセンターにおける資料のデジタル化を進めるとともに、進行中のCOEユビキタスプロジェクトの連携を図る。すなわち、本センターのデジタルアーカイブ化された資料群が、最終的には東京大学のあらゆる場所、さらには世界の各地からアクセス可能になるように、諸々の基盤整備を進める。また、そのような仕組み作りのプロセスを通じ、東京大学内あるいは日本各地で同様のメディア資料のデジタルアーカイブ化を進めている機関との連携を強化し、東アジアのメディア資料に関する限り、本社会情報研究資料センターが世界の研究資料ネットワークのハブとして機能するようにしていくつもりである。また、こうした幅広い連携の手始めとして、横浜にある日本新聞博物館（ニュースパーク）等との何らかの連携体制を模索したい。

3.3.3.1 駒場地区別置新聞原紙資料の保存書庫の再配置

現在、大学院情報学環はスペースがきわめて狭小なため、本研究資料センターの主要な収蔵資料であるマイクロフィルムや新聞原紙に関し、必ずしも十分な保存・保管体制が整備できないでいる。特に、駒場地区（旧宇宙航空研究所跡地）に別置している以下の新聞原紙資料に関しては、きわめて劣悪な保存環境に置いたままの状態にある。

駒場地区別置資料：大阪朝日新聞	99 冊
信濃毎日新聞	122 冊
新潟日報	96 冊
沖縄タイムス	72 冊
New York Times	742 冊
Washington Post	234 冊
	1365 冊

したがって、これらの資料の保存環境の改善は、本研究資料センターの重要な課題の 1 つであり、早急に対応する必要がある。本研究資料センターでは、これらの原紙製本資料を、目白台東大病院分館の保存施設の改修後、目白台保存施設に移動し、本研究資料センターの分館的な施設を整備していきたいと考えている。

3.3.3.2 マイクロフィルム・新聞原紙等資料の保存書庫の再配置

本研究資料センターの諸々の貴重資料の保存環境の改善とより積極的な公開・閲覧環境の整備のためには、以下のような保存書庫の再配置が必要である。すなわち、既述のマイクロフィルムの保存環境の整備のために、本研究資料センター書庫新館 1 階及び 2 階部分に空調設備を導入し、湿度等の面でマイクロフィルム保存に相応しい環境を整備し、マイクロ保存書庫としたい。その上で、現在、本館 1 階の資料センター受付の正面の資料室スペースに置いてあるマイクロフィルムのすべてを、新館 1 階及び 2 階のマイクロ保存書庫に移動することを計画している。そのためには、新館書庫 1F および 2F 収蔵に収蔵している『読売新聞』『朝日新聞』『毎日新聞』の原紙製本資料（但し、別にマイクロフィルムを健全な状態で保管できているもの）を、目白台東大病院分館の保存施設の改修後、目白台保存施設に移動し、本研究資料センターの分館として整備する必要がある。また、上記に併せて、現在、7 階貴重資料室に配置しているマイクロフィルム類に関しても、新館 1、2 階のマイクロ保存書庫に移動したい。同時に、以上の配置換えによって、現在、1 階の事務室に隣接している書庫スペースの大半が空となる。この空間を、デジタルアーカイブ機能を備えた研究資料センターの展示閲覧スペースとして整備したい。すなわち、情報学環が提供できる様々なデジタルデータやマイクロフィルムの閲覧スペースとして整備しつつ、ユビキタス・テクノロジーを用いた展示スペースとしても、この空間を整備したい。こうして整備した学環本館の閲覧展示スペースは、新 2 号館に整備される予定の展示スペースとも連動させ、本郷のなかで 2 つの核を持つユビキタス型の展示閲覧スペースとしていきたい。他方、7 階展示室の貴重資料以外の展示ケース等は、廃棄するかもしくは下記の 1 階資料センター展示閲覧スペースに移動する。

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

(国際学会委員会委員：例)

池内 克史 OTCBVS'04(IEEE Workshop on Object tracking and classification beyond the visible spectrum), Program Committee, Washington DC (2004)

池内 克史 IEEE RAS AD Com (アメリカ電気学会、ロボティクスソサイエティ、運営委員) (1999-2004)

池内 克史 IEEE ITSC, AD Com (アメリカ電気学会、ITSカウンシル、運営委員) (2003-2004)

國吉 康夫 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, Program Committee Member (2004)

苗村 健 The Second IEEE and ACM International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR2003) Technical Demonstration Chair (2003)

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している(政府委員会委員の延べ人数69人、地方自治体委員会委員の延べ人数16人)。

(政府・自治体委員会委員：例)

<政府>

坂村 健 (総務省) 情報通信審議会・専門委員

鈴木 高宏 (特許庁) 工業所有権審議会委員

須藤 修 (内閣府) 国民生活審議会委員

須藤 修 (内閣府) 国民生活審議会個人情報保護検討部会委員

須藤 修 (文部科学省) 科学技術・学術審議会専門委員

濱田 純一 (総務省) 電波監理審議会委員

原島 博 (総務省) 情報通信審議会委員

廣井 脩 (国土庁) 国土審議会特別委員

<自治体>

須藤修 福島県情報化推進アドバイザー

須藤修 岐阜県IT顧問

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長などの学会の要職等を通じて、学協会活動に貢献している。

(学協会役職：例)

河口 洋一郎	日本アニメーション学会理事・副会長
河口 洋一郎	アジアグラフ亜州芸術科学会会長
須藤 修	日本社会情報学会副会長
須藤 修	情報文化学会副会長
辻井 潤一	アジア言語処理学会連合(AFNLP)・副会長
辻井 潤一	アジア太平洋機械翻訳協会・会長
辻井 潤一	国際機械翻訳協会(IAMT)・会長
辻井 潤一	言語処理学会・副会長
辻井 潤一	言語処理学会・会長
原島 博	日本バーチャルリアリティ学会会長
原島 博	日本顔学会会長
廣井 脩	日本災害情報学会会長

4.4 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。なお、各教員の研究活動として企画されたものなどは含まれず、全ての企画を網羅していない。主だったものを紹介する。

2000年の大晦日に開催された「知の光」プロジェクトは、21世紀に向けた東京大学のメッセージを発信するために、総長を含む21名の講演を企画したものである。安田講堂前の新世紀に向けたカウントダウンにはキャンパスを埋め尽くす多数の方々が参加し、同時に行われた赤門および講堂のライトアップは現在でも話題になっている。なお、本プロジェクトは東京大学が主催し、情報学環が強力に支援して実現した。

シンポジウム・ワークショップは、新しく展開する学際的なプロジェクト研究を紹介するため、当初は定期的に行われてきた。2004年度からは、次世代ユビキタス21世紀COEプログラム、コンテンツ創造科学産学連携プログラム、ベネッセ先端教育技術学寄付講座などの発足により、それらの開催は数を増し、活発な活動となっている。また、学環講話会は学内外からの講師をお招きし、新しい学問の環を広げるために開催しているものであ

る。なお、プロジェクトは、企画広報委員会の前身である企画室が、それぞれのグループの申請によって認めているものであり、萌芽的な研究分野の育成に大きな役割を果たした。

【シンポジウム】	
2000.11.27	情報学環・学際情報学府創立記念シンポジウム
2000.12.31	知の光（東京大学として開催したものを支援）
2004.6.12	情報学環・学際情報学府新生記念シンポジウム 「智慧の環・学びの府：せめぎあい、編みあがる情報知」 [コース説明] 西垣通教授、吉見俊哉教授、坂村健教授、橋元良明教授、須藤修教授 [パネルディスカッション] 小宮山宏副学長、中島信也氏（CM ディレクター）、武田徹氏（ジャーナリスト）、境真理子客員教員、原島博教授
2004.7.13	ワールドインターネットプロジェクト国際シンポジウム 「ユビキタスネットワーク社会で変わるライフスタイル」 ウィリアム・ダットン（オックスフォード大）、三上俊治教授（東洋大）、橋元良明教授
2004.10.21	「笑と大学」シンポジウム 三谷幸喜氏（脚本家）、星譲氏（映画監督）、石田英敬教授
2004.10.27	21世紀 COE 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成 「第一回設立記念シンポジウム」 坂村健教授基調講演 「ユビキタス情報社会を支えるデジタルコンテンツ」 石田英敬教授、吉見俊哉教授、馬場章助教授 「ユビキタス情報社会を支える社会設計・法制度そして政策」 須藤修教授、濱田純一教授 「ユビキタス情報社会を支える技術基盤と応用」 大江和彦教授（東大医学系研究科）、越塚登助教授（東大情報基盤センター）
2004.11.4	東京大学・ソウル大学合同シンポジウム 「デジタル時代のメディア・文化・政治」 花田達朗教授、林香里助教授 於：ソウル大
2004.11.16	21世紀 COE 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成 「ユビキタス場所情報システムシンポジウム」 林義博副学長、佐藤信秋氏、藤本貴也氏、上野宏氏（国土交通省）、大石久和氏（国土技術研究センター）、川嶋弘尚教授（慶應大）、坂村健教授
【国際フォーラム】	

2002.3.25-26	「情報技術と社会」 国際比較フォーラム
2003.3.18	「IT 国家の構築と留学生教育」 アジア社会の情報化と人材育成
【講演会】	
2003.7.25	坂村健教授特別講演会「ユビキタス・コンピューティング未来を目指して TRON プロジェクトの20年」
【情報学環ワークショップ】	
第1回 2003.12.6	「ユビキタス・コンピューティングがもたらす21世紀」坂村健教授 「大井町プロジェクトの現在」 馬場章助教授
第2回 2004.3.5	「メディア・リテラシーと情報知の地政学」アジア情報社会と留学生教育 呉翠珍氏(台湾政治大学)、李月蓮氏(香港バプティスト大学)、 陳世敏氏、 周典芳氏(台湾慈濟大学)、ジョン・ヒョンソン氏(ソウル大学)、 山内祐平助教授
第3回 2004.9.4	「ケータイと教育の未来」 ベネッセ先端教育技術学講座・beat セミナ共催 山川隆氏(NTTドコモモバイル社会研究所)、緒方広明助教授(徳島大)、 佐和伸明教諭(千葉県柏市立旭東小学校)、山内祐平助教授
【学環講話会】	
第1回 2002.10.18	「情報と空間のデザイン」 原島博教授
第2回 2002.11.15	「大井町プロジェクト」 馬場章助教授
第3回 2002.12.20	「『はざま』で考える」 原洋之助教授
第4回 2003.1.17	「学環+未来館=***感/歓/観/寒？」 境真理子客員教員(日本科学未来館)、佐倉統助教授
第5回 2003.2.21	「湯けむり事件の真相を聞く」 山内祐平助教授、学生発表
第6回 2003.4.4	「記憶のデザイン デジタル・アーカイブの文化経済」 武邑光裕助教授(東大新領域創成科学研究科)
第7回 2003.5.28	"Tangible Bits: Designing the Seamless Interface between People, Bits and Atoms" 石井裕客員研究員(MIT)
第8回 2003.6.26	「日本のゲーム、アニメ、映画を考える」 浜野保樹教授(東大新領域創成科学研究科)
第9回 2003.10.24	「楽しいテレビCM」 中島信也氏(株式会社東北新社 CMディレクター)

第 10 回 2003.11.28	「アジアのデジタルコンテンツ産業」 金鐘棋教授（韓国東西大学）
第 11 回 2004.2.17	「生命とかたちと時間の不思議」 児玉龍彦特任教授（東大先端科学技術研究センター）
第 12 回 2004.6.14	「宇宙は我々の宇宙ではなかった 無量宇宙論」 佐藤勝彦教授（東大ビッグバン宇宙国際研究センター長）
第 13 回 2004.7.7	「アニメ映画『アップルシード』が映画の未来を変える」 荒牧伸志氏（「アップルシード」監督）
第 14 回 2004.7.30	「ミクロの宇宙、細胞と生命の要、分子モーター」 廣川信隆教授（東大医学系研究科長・医学部長）
第 15 回 2004.11.24	「形ないものを人に伝える仕事」 宮本文昭氏（オーボエ奏者、東京音楽大学教授）

【プロジェクト関連】

メルプロジェクト

〔公開研究会〕

平成 13 年度 2001.8.18, 2001.9.29, 2001.10.27, 2001.11.10,
2002.1.12, 2002.2.23

平成 14 年度 2002.4.13, 2002.5.1, 2002.6.15, 2002.10.12,
2002.11.16, 2002.12.14,

2003.1.11, 2003.2.8

平成 15 年度 2003.4.5, 2003.5.17, 2003.6.14, 2003.9.27,
2003.10.11,

2003.11.22, 2003.12.13, 2004.1.10, 2004.2.11

平成 16 年度 2004.4.17, 2004.5.15, 2004.6.26, 2004.9.24,
2004.10.23,

2004.11.13, 2004.12.18

〔シンポジウム〕

2001.1.13-1.14 メディア表現、学びとリテラシー2001: 「メルプロ
ジェクトの誕生」

2002.3.9-3.10 メディア表現、学びとリテラシー2002: 「メルプロ
ジェクトの展開」

2003.3.7-3.9 メディア表現、学びとリテラシー2003: 「メルプロジ
ェクトの衍生」

2004.3.6-3.7 メディア表現、学びとリテラシー2004: 「メルプロジ
ェクトの波延」

ゲームプロジェクト

〔公開研究会〕

2003.12.12 「テレビゲームと子どもたち 社会心理学の立場から」
坂元章助教授（お茶の水大）

〔シンポジウム〕	2004.9.12	国立科学博物館特別展「テレビゲームとデジタル科学展」記念シンポジウム
		「テレビゲームの楽しさ どのように作るのか、どのように遊ぶのか」
		岩谷徹（ナムコ）、坂元章教授（お茶の水大）、稲見昌彦講師（電通大）、馬場章助教授
	2004.9.27	東京大学コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム
		キックオフ・イベント記念講演会 「ゲーム開発者の国際連携」
		Jason Della Rocca（IGDAプログラムディレクター）、Gonzalo Frasca（イタリアゲンIT大学コンピュータゲーム研究センター研究員）

黄土高原生態文化回復活動プロジェクト

〔研究発表会〕	2004.6.10	「コミュニケーション・ネットワークのダイナミクスを利用した
		生態環境回復の戦略」深尾葉子助教授（大阪外大）、安富歩助教授

〔シンポジウム〕	2004.12.18	「黄土高原生態文化回復活動シンポジウム」 深尾葉子助教授（大阪外大）、安富歩助教授
----------	------------	--

戦争とメディアプロジェクト

〔ワークショップ〕	2004.11.2	「『敵』とみなされたアメリカ人」 村上由見子客員教員、リナ・ホシノ氏（映像作家）、吉見俊哉教授
-----------	-----------	--

4.5 出版活動

大学院情報学環では、2004年の情報学環と社会情報研究所の合併の後、旧社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな包括的な出版体制を樹立させつつある。その中軸となるのは、(1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』(年2回刊行)、(2)調査実験紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実験編』(年1回刊)、(3)英文紀要『Review of Media, Information and Society』(電子版)、(4)学環年報『東京大学大学院情報学環年報』、(5)ニューズレター『学環 学府』(ニューズレター)の5つの定期刊行物である。これらはいずれも、統合後の情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

4.5.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』は、社会情報研究所が、2004年4月に同大学院情報学環と合併したことを受けて、『東京大学社会情報研究所紀要』から改称したものである。同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、日本の新聞学、マス・コミュニケーション研究の中核を担う研究誌として半世紀以上にわたり継続的に刊行され、国内外の専門研究者、学生に多くの影響を及ぼしてきた。社会情報研究所では、情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、新しい大学院組織の拡大した研究教育基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。これまで『東京大学新聞研究所紀要』、またそれを継承した『東京大学社会情報研究所紀要』は、新聞学や世論研究、マス・コミュニケーション論の研究誌から発展し、ジャーナリズムやメディア史、新聞やテレビのようなマス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程とメディア文化、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載してきた。情報学環との統合に伴い、本誌は名称を『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』と改称し、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場になろうとしている。そのために本紀要は、巻頭エッセイの「思考の幹」、情報学環教員の研究論文を集めた「智慧の環」、学際情報学府博士課程院生の査読付論文を集めた「学びの府」、情報学環における研究プロジェクトや関連分野の最前線を紹介する「フィールド・ノート」、学際的な情報学関連分野での著作を取り上げ論評する「ブック・レビュー」の5つのセクションから構成されている。情報学環では、大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要を継続的に発展させていく予定である。

4.5.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実験編』

『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実験編』は、前記の『東京大学社会情報研究所紀要』が発展していくなかで、新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた1992年から発刊されてきた『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。社会情報研究所時代、『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所における様々な社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環との合併後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害情報の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果や文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育の分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表されていく媒体に発展させてこうとしている。

4.6 定期刊行物・ホームページ

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に知っていただくために、ニューズレター『学環学府』を年4回発行し、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、書籍刊行などの情報を掲載している。2002年冬号から始まり、2005年春で通算10回の発行となっている。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現し、本組織に興味をもっていただく素材となっている。ちなみに、2005年度は河口洋一郎教授のCG作品を利用したデザインシリーズとなっている。

ホームページは、表紙に「News & Events」を配置して、最新の情報を学内外に紹介することに努めている。また、総合案内、教員・研究員、研究、教育、入学案内といった一般的な情報に加えて、iii-onlineで企画されたe-learningのシリーズ講義をこのホームページから聴講することができる。さらに刊行物のデジタルアーカイブや、ニューズレター『学環学府』のPDFファイルをダウンロードすることなどもでき、魅力のあるホームページを構築している。なおURLアドレスは <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/> である。

4.7 国際交流

学環の教官が、その研究活動の展開のなかで国際交流を深めることにともない、多様な形で社会との交流を広げていくことが重要であろう。具体的には、国際的研究活動のなかで、それに関係してくれる外国の大学・研究機関の研究活動の質を向上させるなどの貢献が重要となっている。

また、より実践的な研究活動の展開を通して、研究活動の対象地域・国の社会に対する多くの知的な貢献を実現させていくことも重要な課題である。

1 情報学環・学際情報学府の今後 10 年のビジョン

1.1 今後 10 年の社会の変容

20 世紀最後の四半世紀に徐々に進んできた社会変容の流れは、一言で言えば、モノの生産(プロダクション)からコミュニケーションへと基軸が移ってきたということだと言える。そこに、「情報」という要素への着目、情報現象への関心の高まり、そして情報学構築への学問的必要性や社会的要請があった。

モノの生産の重要性が相対化されとともに、価値の準拠枠組みが物資に対する利害関係で安定的に規定されていた時代が終わった。それを背景として、価値の多様化と呼ばれる現象が始まったと考えられる。それは、国家や市場の意味、そして政府の役割や市場の作用に大きな変化をもたらした。そして、社会は資源的な価値をモノのみならず、情報にも認めるようになった。

そのような価値の多様化のなかで、唯一、一致した価値が登場した。環境という価値である。それを社会に気づかせたのが、地球環境の有限性という事実であり、社会に訴える言葉となったのが「持続可能な社会」という概念である。有限の物質的資源を相手にするのが環境学とするなら、有限の非物質的資源を相手にするのが情報学だと言えるのではないか。

こうした近い過去の趨勢の延長線上に、今後 10 年の社会変容が予測されなければならない。そこで間違いなく、基軸となるのはデジタル化とグローバル化という 2 つの変動要因であろう。デジタル化は技術の問題で、グローバル化は国際社会の問題というわけにはいかない。デジタル化は社会や文化の問題でもあり、グローバル化は技術や経済の問題でもある。その両者は入れ子関係のなかで、既存の諸制度の縦割り状況を否応なく変更させ、そしてコミュニケーションと文化の比重を引き上げていくだろう。

10 年後の社会では何が求められるだろうか。おそらく、情報という資源的価値に着目したコミュニケーション上の問題解決というアプローチが中心を占めるのではないだろうか。そこでは何かと何かの間関係、その関係を媒介する要素や要因、その媒介のプロセスなどが一層重視されるようになるだろう。そのような社会における学問研究として、情報学の存在とその学際性はひとつの必然である。

1.2 今後 10 年の学際情報学の展望と課題

学際情報学の構築は現在進行形で続いている。10 年後、学際情報学は何ものであるのか。その自己認識とはどのようなものでありうるだろうか。

第一の問は、学際情報学はひとつの教育分野として固有のディシプリンとなるか、あるいはそもそもそれを目指すのか、ということであろう。既存の学問体系、ディシプリンをベースとした教育体系では対応できない事態が進捗していることは明らかであり、そこで既存体

系の組み換えやディシプリン間の越境や複合化がさまざまな分野で試みられ、また成果も生み出している。問題はそのような越境や複合化の深化のなかから、新しいディシプリンが形成されてくると考えるかどうかである。しかし、現時点でその問題を抽象的に考えても決して生産的ではないであろう。むしろ具体的に、越境や複合化のための環境条件を整え、それによっていかにそのプロセスが深まっていくかを検証し、そしてそれに応じ随時その環境条件を修正していくことを考えるべきであろう。10年後の学際情報学は、おそらくなおそのプロセスのただなかにあるであろう。しかし、そのときの学際情報学は、現在とは違ってもっと各段に、越境と複合化のための方法論を磨き、特有の領分とスタイルを打ち出し、それをもって社会的な認知を獲得していると考えられる。すなわち、伝統的なディシプリンが備えてきた体系性とは違うやり方で、学問研究の固有性を確保しているであろう。

第二の問は、学際情報学の研究は研究分野を次々生み出す分野創出領域なのか、あるいはそれ自身がコアとなり大きくなる巨大領域なのか、ということであろう。学際情報学研究が関係の学、媒介の学という性格を持ち、諸学の連携というところにその特有性を求める以上、前者の方向をとることとなろう。学際情報学研究はそれ自体で完結することはいえなし、またそれを目指すものでもない。むしろ、異なったものを掛け合わせ、複合化を生み出そうとする試行実験のフィールドであり、常に新しい分野の創出が繰り返されるような流動的な現場である。それ自体の規模はそれほど大きくある必要はなく、むしろ活発な出入が行われ、常に新陳代謝が起こり、そこから新しい芽が生まれ、それが外で育つ、というような姿が想定されよう。そして、10年後の学際情報学の研究はまさにそのような活況を呈し、ひとつのハブ港として機能を果たし、積荷とともにたくさんの船を送り出しているであろう。

1.3 10年で情報学環・学際情報学府の目指すもの

組織としての情報学環・学際情報学府は、上記のような展望のなかで、10年後の姿をどのように描くのか。一言でいえば、情報学に関する新しい知識の生産・創出システムとして一定の完成度を達成し、成熟期を迎えているであろう。この学術組織の使命は関係付けと媒介の機能を担うことであるから、組織としての規模の拡大を目指す必要はなく、むしろ適正規模の範囲を設定し、そこでの密度を上げていくことを目指す。

具体的には、学内にネットワークを張り、学内の研究ポテンシャルを栄養として吸収し、そして情報学環・学際情報学府からの刺激を学内あるいは学外へと返していくという双方向の仕組みを構築していく。つまり、情報学環・学際情報学府は学内の教育研究組織を必要とし、逆に学内の教育研究組織からも必要とされるという、相互依存の協力関係が望ましい姿である。

情報学環・学際情報学府は東京大学という大きな知識生産システムのなかで、情報学に関わる相互依存のネットワークを駆動させ、学内の知的リソースの循環をはかる適正規模のハブとして機能する。同時に、学環・学府自体が、学際的な知識生産の方法や手段を自覚的、

専門的に開発し、その効果を教育研究の成果をもって実証していくという独自のミッションを設定し、そのための先端的組織として機能する。

以上のように、情報学環・学際情報学府が今後 10 年間のために設定する使命と課題は、この 21 世初頭の時代状況そのものと同期した、きわめて挑戦的なものである。それは知識というものの命運、大学という制度の正当性の行方を左右するほどに重大なものである。情報学環・学際情報学府は、それに応えられるだけの組織的な基盤、人的なリソース、そしてコミュニケーションに裏打ちされたモチベーションをそれぞれに一層レベルアップしていく。

1.4 情報学環・学際情報学府と社会との関わり

情報学環・学際情報学府の社会との関わり方は、その教育研究の目標や性格や内容などからして極めて多面的である。そして、その多面的な社会との関わり方、その強い結びつきのなかにこの教育研究組織の存在意義がある。

第 1 に、情報現象という研究対象そのものが今日の社会において解明の迫られるテーマであり、社会的ニーズが高い。第 2 に、社会はその研究を基盤とした教育によって情報現象を学問的あるいは実践的に取り扱うことのできる人材が供給されることを求めている。第 3 に、情報学の学際的研究は社会が直面する諸問題の解決に向けて積極的に貢献しようとしている。第 4 に、固有の社会連携プログラムを立ち上げ、社会のなかに活動の現場を築いてきている。

特に第 3、第 4 の局面において、情報学環・学際情報学府は著しい特色をもっており、これまで社会の側からの評価も獲得してきた。それは 21 世紀 COE を初めとするさまざまな研究プロジェクトのテーマに現れている。情報学環・学際情報学府ではコンピュータ科学の領域においても純粋に理系のアプローチというよりも社会応用学的な色彩が強く、また文系においても制度論や政策論による問題解決型のアプローチが多くとられ、社会への提言型の活動が盛んである。そして、それらの文理にわたる知識と問題意識を有機的に結びつける努力が常に行われている。社会連携プログラムの分野では、社会のニーズを読んで、そこに発生している教育課題に応えるべく、実践的なプログラムが展開されている。

2 教育の将来ビジョン

2.1 教育理念と目標

2.1.1 大学院学際情報学府

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科の限界を超えて、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進してきた。

とりわけ 2004 年 4 月、半世紀以上にわたり日本における社会情報とコミュニケーションについての中心的な研究拠点として大きな役割を果たしてきた東京大学社会情報研究所と合併した。この合併により、情報学環はその組織構成の面で躍進的な変化を遂げ、東京大学が 21 世紀の情報社会の中で研究と教育の両面にわたり世界的なリーダーシップを示していくフロントとなる組織となってきた。

合併の結果、現在の大学院学際情報学府学際情報学専攻は、社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コースという 3 つのコースからなる大学院組織となった。これらの 3 つのコースは、それぞれ固有の専門的な視座を深化・発展させる教育目標を掲げ、専門分野ごとに「基礎」および「研究法」という 2 種類の選択必修科目を軸にして大学院での学習を組織している。これらの必修科目を縦系とすると、横系として「学際情報学概論」をはじめとする専攻横断的な科目があり、このような縦横の構造が今後とも学際情報学府での大学院教育の基本をなすことは変化しない。

さらに学際情報学府では、2006 年度から、既存の 3 つのコースに加え、総合分析情報学コースが、第 4 の新コースとして加わることになっている。総合分析情報学コースは、主にコンピュータ・サイエンスやコンピュータ・ネットワークの基礎知識を基に、センサーや観測衛星などから大量のデジタル情報を取得し、解析・分析した上で、社会において有効に活用する高度な能力を養うことを目的としている。きわめて大規模な情報ネットワークの諸問題や社会的可能性に照準して、技術的課題と社会制度の両方に関心を持ち、膨大な情報を活用して確固たず決断を下すことのできる人材を育成するこのコースは、今後の学際情報学府の教育の大きな目玉となることが確実である。

デジタル・テクノロジーが生活の奥深くにまで浸透した 21 世紀社会では、通信と放送とが融合して基幹インフラとなり、バーチャルリアリティに代表されるサイバー環境が、人間の身体、生活、知識から経済、法制度、国際秩序までのレベルでまったく新しい知的課題を提起する。21 世紀の世界の主要大学は、これらの課題に直面し、従来の情報関連の諸研究を IT ベースのより広い情報学に発展統合させていかなければならない。

そのために、学際情報学府では、これまで情報学環が先端的に取り組んできたマン・マシン対話システムやユビキタス・コンピューティング、e ラーニング(遠隔教育)、メディア・アート、生命情報思想などの諸領域の知と、社会情報研究所が長年蓄積してきたジャーナリ

ズム、法・政策、経済、社会心理、メディア文化等の諸領域の知とを相互浸透させた教育研究基盤を築きつつある。本大学院は、技術的な知識と融合したソスアルウェアとしての情報に焦点を当てながら、21世紀型情報社会システムの脆弱性やセキュリティ、ユビキタス技術、情報経済や情報法制度、情報社会の精神病理など、既存の技術的なアプローチだけでは対処しきれない問題に総合的に対処できる人材を育成していく。

● 社会情報学コース

社会情報学コースは、一言で言えば「情報社会学」について学ぶ場である。情報社会学とは、メディアやコミュニケーションにかかわる社会現象・文化現象、情報社会における諸問題を、「社会情報」という視点から学際的に分析する新しい学問である。

現在、社会情報学コースは下記の6研究領域の教官が所属し、教育を担当している。

- (1)メディア・ジャーナリズム研究
- (2)法律・政策研究
- (3)経済・産業分析
- (4)社会心理・情報行動研究
- (5)社会・歴史研究
- (6)アジア・地域研究

学部レベルで情報社会学を専門的に教えている大学はほとんどなく、そのために、コースでは、情報社会学の基礎や研究法が初歩から学べる授業を用意している。

すなわち、「選択必修科目」として、「社会情報学基礎(Ⅴ)」、「社会情報学 研究法()」の科目である。これらの科目によって、まず情報社会学の概要を知り、また各領域固有の研究方法を身につけることになる。

その他、「コース共通選択科目」として、各教官は、最新のデータと学際的知見を駆使した研究の成果の一部を授業で紹介している。そこでは情報法、デジタル経済、情報社会心理学、メディア思想、メディア社会学、アジア情報社会論などの最新の研究が紹介され、また、より具体的には、電子マネー、情報公開、「2ちゃんねる」のもつ意味、携帯電話普及の影響などが実際に授業や演習のテーマになっている。

「社会情報学」が伝統的な学術的研究の基礎を踏まえた上で成立してる学問である ことはいうまでもないが、常に学際性・多分野研究の統合が求められる研究領域であり、また社会の変容と即応した鮮度の高い学問でもある。そのため、「コース共通選択科目」では、惰性に陥ることなく、研究の最前線が学生に伝わるよう、毎年、授業内容の更新を行っている。

この「基礎的概論」「基礎研究法」と「研究最前線の紹介」が社会情報学コースの教育の核心を構成しており、今後とも鮮度を失わないよう、毎年、授業内容の見直しを行う。上記6領域も固定的なものではなく、将来的に再構成する可能性があり、時代の流れ、社会の変動に不離不則の形で教育内容を見直す計画である。

なお、このコースには「社会人特別選抜枠」があるのが一つの特徴で、社会人経験をもつ人が、社会情報学の知識・理論や研究態度を身に付けながら、より高度な職業的、社会的実践能力を備えた専門的職業人となるよう支援する教育も行っており、この点でも将来的に、教官サイドも研究面で実社会との連携をより深めながら、社会的要請により積極的に応える教育カリキュラムを構成していく計画である。

● 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、学際情報学府の理念である文理相互浸透、とりわけ情報をめぐる新しい学際知の創出と、そのことを通じての広く文化、人間に関わる諸学の再編を最も先端的に切り拓こうとしているコースである。このコースを教える教員には、基礎情報学や生態心理学、知覚情報論などから、記号学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学などまで、きわめて幅広い分野の専門家が揃い、新しい学際知の地平を拓きながら学生の指導に当たっている。このコースの教育は、以下の4つの柱から構成されている。

(1) 生命・身体・環境：

基礎情報学、進化学、生態心理学、知覚情報論、バイオメカニクス、科学技術コミュニケーションなどの領域を含む。

(2) 文化・表象・映像：

記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、ヴィジュアル・コミュニケーション論などの領域を含む。

(3) メディア表現・学習・リテラシー：

メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、教育システム論などの領域を含む。

(4) アーカイブ・歴史情報：

歴史情報学、デジタル・アーカイブ論などの領域を含む。

文化・人間情報学コースは、これらの4本の太い幹の周囲に多様で野心的な枝葉を伸ばしながら、情報学という新しい学問の森で、文化・人間科学の諸領野を体系的に再編し、それこそ生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。

以上の内容面での特徴に加え、形式面でのこのコースの大きな特徴は、多くの授業や演習、実習において、思想や哲学、歴史、教育、生命などについての、人文社会科学の古典的な知の深みと、最新のデジタル・テクノロジーの実践的な融合が試みられている点である。たとえば、歴史学の史料分析とデジタル・アーカイブ技術の融合、記号学による表象分析とハイパー・テキストの結合、最新のe-learningシステムを通じた教育学の理念の実現、ウェブサイトでのディスカッションを通じた批判的文化理

論の習得、科学技術のコミュニケーション論的理解、デジタル空間における新しい百科全書の思想的構築など、先端的な情報技術と古典的な人文知が様々な次元で結びつけられている。このコースの学生は、こうして技術知と人文知の融合する知性を育むことが期待されており、実際にもそうした教育の成果が出始めている。今後とも、このような技術知と人文知の融合が、このコースでの教育の大きな軸となると考えられる。

● 学際理数情報学コース

学際理数情報学コースは、その名の通り「学際性を意識して理数系の情報学を学ぶコース」として発足した。

このコースの教育は、

- (1) コンピューティング・言語
- (2) メディア・行動体情報技術
- (3) 情報造形・コンテンツ

の3分野を主な柱としておこなっている。

ここに、「コンピューティング・言語」分野には、アルゴリズム、プログラミング言語、コンピュータアーキテクチャ、オペレーティングシステム、ネットワークなどのコンピュータサイエンスの基礎、さらには自然言語処理などが含まれる。「メディア・行動体情報技術」は、画像や音声などの信号処理技術、コンピュータビジョンやバーチャルリアリティなどのメディア技術、ロボットなどの行動体に関連する情報技術、メカトロニクス技術などを対象とする。「情報造形・コンテンツ」分野では、コンピュータグラフィックスなどの情報技術に基づいたメディアアート表現やコンテンツ制作に関連する話題を学ぶ。

コースには、多様な背景を持つ学生が入学している。そのため、教育カリキュラムとしては、修士一年の夏学期を中心に、理数系の情報学の基礎科目「学際理数情報学基礎 ~」（1単位講義、毎週1回2ヶ月間開講）が選択必修科目として用意されている。これにより、まずは理数系の研究者として必要な最小限の武装ができるように配慮されている。また、そのような基礎知識を前提として、「学際理数情報学研究法 ~」（輪講、演習）や数多くの選択科目等を通じて文理にまたがる幅広い知識を身につけ、学際的に協調できる理数系情報学の専門家として学生が育っていくことを期待している。

2.2 学内連携

2.2.1 大学院学際情報学府

学際情報学府の大学院教育では、基幹教員の他、総合文化研究科、生産技術研究所、東洋文化研究所、医学系研究科、史料編纂所、社会科学研究所、情報理工学系研究科、

教育学研究科、薬学系研究科などからの流動教員が中核的に学環・学府の運営と実施に関与してきた。さらにこれらの流動元部局に加え、情報基盤センター、農学生命科学研究科、人文社会系研究科、新領域創成科学研究科、先端科学技術研究センター、法学政治学研究科など、まさしく東京大学大学院の全学的な広がりの中かで多くの部局の教員が兼担として授業を担当している。このように、情報学環・学際情報学府は、東京大学の全学的な関連専門分野の教員の連携によって支えられている組織である。

大学院教育という観点だけからみるならば、このようなきわめて幅広い教員の全学的な協力は、世界のトップレベルの知性を集めた総合大学の特長を生かすものであり、学際情報学府には、これまでの閉鎖的な傾向を持つ大学院研究科や専攻、専門分野ごとの研究室システムでは考えられない知的創造の可能性がもたらされる。しかし同時に、あまりにも横断的に多様な領域の授業がなされていくために、授業担当の教員にとっても、参加する学生にとっても、全体像が見えにくくなる危険がある。また、それぞれの流動元、あるいは兼担・授業担当教員の所属している研究科にとっては、学府に授業を提供するだけでは一方的な教育サービスの提供になってしまい、メリットが少ない。

そこで学際情報学府では、本学府の大学院教育への全学的な関与をヴィジュアルに眼に見えるものにしていく工夫を、何らかの方法で考えていく必要がある。また、このような授業の提供が一方的なものにならないようにするために、とりわけ流動教員の流動元の部局との間では、相互にメリットのある東京大学における大学院教育の有機的な連携の仕組みが考えられていかなければならない。

2.2.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

本学においては、デジタルコンテンツ分野における技術開発・政策調査が多数の研究者によって推進されていた。しかし、それらの研究者は学内の幅広い部局に横断的に存在しており、固有の部局においてそのような活動が行われてきていたわけではない。

特に情報学環では、デジタルコンテンツの技術的側面、芸術的側面において研究を推進する研究者が多く所属しているため、学内におけるコンテンツ創造の中心拠点となるのに相応しい環境が整っていた。このため、コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの発案においては、大学院新領域創成科学研究科、大学院工学系研究科、大学院情報理工学研究科、先端科学技術研究センター等に所属し、コンテンツ創造の分野において研究を推進する者が大学院情報学環に集結する形をとって進められた。

以下に掲げた学内参加者とその所属組織の一覧表からわかるように、学内 5 部局の共同によって実施されている。

氏 名	所 属
-----	-----

原島 博	東京大学大学院情報学環
河口 洋一郎	東京大学大学院情報学環
相澤 清晴	東京大学大学院新領域創成科学研究科
濱野 保樹	東京大学大学院新領域創成科学研究科
馬場 章	東京大学大学院情報学環
青木 輝勝	東京大学先端科学技術研究センター
七丈 直弘	東京大学大学院情報学環
吉田 正高	東京大学大学院情報学環
大谷 智子	東京大学大学院情報学環
笹田 晋司	東京大学大学院情報学環
掘 聖司	東京大学大学院情報学環
安田 浩	東京大学国際・産学共同研究センター
舘 暲	東京大学大学院情報理工学系研究科
西田 友是	東京大学大学院新領域創成科学研究科
廣瀬 通孝	東京大学先端科学技術研究センター
武邑 光裕	東京大学大学院新領域創成科学研究科
苗村 健	東京大学大学院情報学環
岩井 俊雄	東京大学先端科学技術研究センター

2.3 計画と具体策

2.3.1 大学院学際情報学府

前述のような大きな目標のもとで、本大学院学際情報学府がさらに発展していくために実現しようとしているのは、以下のような点を柱とする教育学習環境である。

2.3.1.1 コースの特色の明確化と専攻としての目標の共有

大学院学際情報学府は、2006年度から学際理数情報学コース、総合分析情報学コース、文化・人間情報学コース、社会情報学コースの4つのコースによって運営されていく。これらのコースは、すべて文理相互浸透的な性格を持つが、相対的にいうならば、学際理数情報学コースが最も理系的な傾向が強く、社会情報学コースが最も文系的な傾向が強い。

同時に、学際理数情報学コースは、コンピュータ・アートや文化財のデジタル化、コンテンツ技術などの工学と文化表現が結びつくフィールドをカバーしているので、教育研究の内容において文化・人間情報学コースと深い関係を持っている。他方、総合分析情報学コースは、デジタル技術の社会工学的な応用に関心を向け、情報政策や経済システム、法制度と結びついた領域をカバーしているので、社会情報学コースと関わりが深い。

このように、学際情報学府における4つの大学院コースは、より理系的が文系的かという軸では、学際理数情報学コースと総合分析情報学コースが理系的、文化・人間

情報学コースと社会情報学コースがやや文系的となるが、認知や文化、表現への関心か政策的な関心かという軸で考えるならば、学際理数情報学コースと文化人間情報学コースが前者、総合分析情報学コースと社会情報学コースが後者ということになる。

大学院学際情報学府では、このような4つのコースのそれぞれの特長がより発展的に生かされ、なおかつ相互の有機的な連携を強化する立体的な仕組みを構築していきたい。そのためには何よりも、それぞれのコースで教員が日常的にコースの特色や可能性についてインテンシヴに議論しながら目標を共有していくプロセスが不可欠である。また、そのような各コースでの議論をベースにしながら、コースの間で学府全体の将来像を共有していく日常的なコミュニケーションの機会が確保されていかなければならない。

このような目標を達成するために、情報学環・学際情報学府の4つのコースの教員たちの間で、以下の3つの物理的、社会的基盤を整えていく。

第1に、情報学環はこれまで教員のためのスペース不足に悩んできた。基幹教員の研究室スペースすら十分に確保できない状況のなかで、多分野にわたる学環・学府の教員（及び、各研究室の大学院生）が横断的に交流するスペースが不足してきた。また、本郷キャンパスと駒場キャンパス、本郷キャンパスのなかでも本館とアネックスというように拠点が分散しているため、コースの単位ですら教員が一堂に集まることが困難であった。しかし、共同のスペースでの日常的な議論は、それぞれのコースや専攻の教員が教育目標を共有していくための基礎である。したがって、このような教員が相互に談論していくことができる共有スペースを、あらゆる方法で確保していく。

第2に、以上のような共通スペースの確保を前提にして、教員間での教育目標の共有化を促進する2つの方法を活用していく。その1つは、ネットワーク上での共通の談論スペースの構築である。これまで情報学環では、ホームページとiiiオンラインの発展に努めてきたが、これらの学生や外部とのコミュニケーション回路の整備と並行して、学府教員間での情報共有化の様々な仕組みを先端的なCMS（Contents Management System）の技術を取り入れながら整えていく。もう1つは、教員間でコースや専攻の教育目標や課題、その解決法について議論を重ねていく社会的な機会の拡大である。学際情報学府は、教育内容においても、また教育方法においても、東京大学のなかでは特異なほどに新しい試みが展開されている組織であり、本学府の教育そのものについて教員が議論を公開で進めていく定期的な機会を設けることで、内部の議論の活発化を促したい。

2.3.1.2 文理相互浸透のさらなる深化・発展

大学院学際情報学府の最大の特徴は、理系の方法論と文系の方法論が高度に有機的に結びついた学習教育環境にある。こうした高度な文理相互浸透により、たとえばコンピュータ・グラフィックスやコンテンツ技術、ロボティクスなどの工学技術とアー

カイズや歴史学、教育学、メディア・リテラシー教育などが結びついていくことが可能になり、またユビキタス技術やネットワーク技術と経済学や法学の基礎を踏まえた政策的な知識が結びついていくことも可能になっている。大学院学際情報学府の教育にとっての第2の課題は、このような文理相互浸透によって開かれた可能性を、修士課程及び博士課程の大学院生たちの研究関心や研究能力の開発に直結する形で発展させていくことである。

そのためには、文理相互浸透が有効に活用していくことのできる領域を具体的なプロジェクトとして発展させながら、学生たちがそうしたプロジェクトに積極的に参加して能力を磨く機会を拡大させる。具体的には、大学院教育のカリキュラムのなかで、それぞれの研究室でのプロジェクトができるだけ学生全員によく見えるものになるようにする。また、そうしたプロジェクトとカリキュラムとの関係を明確にしていくこと、また異なる領域の学生でも参加することができるような場をできるだけ広げていくことが必要である。

2.3.1.3 ネットワーク技術を活用した高度な学習教育環境

すでに大学院学際情報学府では、大学院教育のなかで iii-online をはじめとする様々な e-learning の仕組みが導入されている。今後は、このような先端的なネットワーク技術の大学院教育への応用を、さらにより高度な研究教育内容と結びつけながら発展させていく予定である。すなわち、将来的には、学際情報学府の大学院教育をサポートするネットワーク上の仕組みとして、iii online に加え、以下のようないくつかのオンライン上の仕組みを発展させていく予定である。

(1) 大学院生用学習ポータルサイトの拡充

すでに学際情報学府では、情報学環ホームページと iii-online が大学院生たちが日常的に活用できるネット上の学習環境として実質的にポータルサイトの役割を果たしているが、今後はこの仕組みをさらに発展させつつ、大学院での学習に関わる多くの情報のやりとりをネット空間のなかで実現させていくことができるポータルサイトを構築する。

(2) 情報学環アーカイブ

情報学環には、旧社会情報研究所が所蔵してきた近代日本のマスメディアに関する膨大な歴史資料が所蔵されており、そのいくつかについてのデジタル・アーカイブ化の作業が進んでいる。また、情報学環の研究室において、TV映像資料やアーカイブ学に関わる先端的なデジタル・アーカイブ構築が進んでいる。これらのアーカイブは、学府の院生が研究を進めていくための重要な研究基盤であり、情報学環の研究室が進める多くのデジタル・アーカイブを横断する研究教育基盤として情報学環アーカイブを構築する。

(3) Web 版情報学環英文ジャーナル

学際情報学府の研究室や博士課程の大学院生が、国際的なアカデミック環境で自分の研究を定期的に発表していく媒体として、Web 版の情報学環英文ジャーナルを刊行する。

2.3.1.4 大学院教育の国際展開

学際情報学府における大学院生教育の国際的な展開を進める。すでに本学府では、このような国際展開のモデルケースとして、ソウル大学大学院言論情報学科との間で部局間の相互交流協定を結び、以下のような大学院教育の国際的連携を進めてきた。

(1) 大学院生レベルの合同交換シンポジウムの実施（毎年）

旧社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所の間では、相互の研究交流や共同プロジェクトの長い歴史があり、それを基礎として情報学環との合併後、ソウル大学大学院言論情報学科の大学院生と東京大学大学院学際情報学府の大学院生が、毎年、相互に相手の大学を訪れてそれぞれの研究について発表し、討論を重ねるプロジェクトがスタートした。2004 年度には、東京大学の大学院生が情報学環教員と共にソウル大学大学院を訪れ、2005 年にはソウル大学の大学院生が情報学環を訪れてワークショップを開催している。

(2) 日韓合同大学院テレビ会議授業の実施（毎年）

ソウル大学大学院と学際情報学府の 2 つの教室をビデオ会議システムで連結し、半期 1 コマの大学院授業を実施している。これは、ビデオ会議システムで連結された東京とソウルの双方の会場に大学院生が集まり、それぞれの大学院の教員が交互に講義し、討論をお互いにしていくものである。この日韓合同の大学院授業はそれぞれの大学院で授業としてカリキュラムのなかに組み込んでいるので、学生から見たときには履修単位になる。このシステムは、2005 年度から開始しており、今後も継続していく予定である。

(3) 大学院生の相互交換留学

ソウル大学大学院言論情報学科との部局間交流協定に基づき、双方の大学院生が、半期ないし 1 年を単位として、最大 4 人（通年ならば 2 人）までを、授業料を相互免除して留学させる仕組みを整備する。留学した学生には、相手の大学から学習のための基本的な便宜（授業料免除、宿舎の何らかの仕方での保証）がなされることになっている。

ソウル大学との間では、今後もこうした相互交流の仕組みを着実に発展させていくと同時に、このような大学院教育レベルでの国際的な交流を、中国や他のアジア太平洋諸国（シンガポール、オーストラリアなど）、アメリカ、ヨーロッパの世界的なレベルに達していると認められる大学大学院との間でも進めていく。

3 研究の将来ビジョン

3.1 概要と背景

情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏の二つの「学圏」から成り立っている。これは基本的には、2004年4月に旧情報学環と旧社会情報研究所という二つの部局が対等合併したという経緯を踏まえたものである。すなわち、研究分野も歴史的背景も運営方法も異なる二つの部局が、合併によって互いの長所を失うことなくスムーズに融合し、将来にわたって学問的深みのある多面的な情報学研究をおこなっていくために、たとえ一時的にせよ、このようなグループ分けがぜひ必要だと考えられたのである。

情報学環の教員はすべていずれかの学圏に所属しており、原則として、旧情報学環の教員は学際情報学圏、旧社会情報研究所の教員は社会情報学圏に所属している。学圏は主に教員人事および財務に関わっており、これらを各学圏ごとに独立におこなえるような制度になっている。ただし一方、学圏相互のコミュニケーションは十分にとられている。こうして、合併以前より行ってきた長期的な研究の継続的發展を保障するとともに、将来に向けて無理なく融合領域の研究をおこなうことが可能になるのである。

ただし、二つの学圏が今後もこのような形態で存続するかどうかは流動的であり、場合にはよっては大幅な再編成や廃止も視野に入っていないわけではない。

3.2 各学圏のビジョン

3.2.1 社会情報学圏の研究ビジョン

社会情報学圏の目的は、人文・社会諸科学の方法的成果に基づいて社会現象としての情報やメディア、コミュニケーションを、政治や経済、文化や社会統合・アイデンティティの領域にまたがって学際的かつ総合的に研究することにある。このような研究目的とスタイルによって、社会現象としての情報に関連する歴史と理論、および政策の三位一体的な総合的研究成果を生み出すことが社会情報学圏の研究目的である。

この研究目的に即して社会情報学圏の具体的な研究ビジョンを描くならば、5つの研究領域に集約することができる。

まずジャーナリズム・メディア学域とかがわって、テレビや新聞、インターネットや携帯など、様々なメディアと消費行動や政治行動との相互関係を定性的かつ定量的に分析し、その行動を予測する研究ビジョンがあげられる。

次に情報行動・機能学域に関連して、メディアやコミュニケーションと若者の情報行動パターンやアイデンティティ、帰属意識の変容の相関関係を、社会心理学的な実証研究を通じて明らかにし、その特徴を国別の比較研究によって明らかにする研究ビジョンがある。

第三に、情報法・政策学域とかかわって、サイバースペース上のインターアクティブな情報交換やコミュニケーションに伴う表現の自由の変容、法的カテゴリーの創設や公共空間の多様化を、新たな法制化の試みと法政策的な観点から明らかにする研究ビジョンがあげられる。

第四に、情報経済・産業学域に即して言えば、グローバル・ネットワーク取引や新しい金融システム、デジタル化した情報環境の成立が、経済的な行動パターンや企業組織、さらには非営利的な社会的ネットワークにどのような影響を及ぼしつつあるのか、その多様な諸側面を微視的かつ巨視的に分析し、予測する社会経済学的な研究ビジョンがある。

第五に、情報現象を主に文化や歴史の観点から捉えなおす情報文化・歴史学圏に関連して、新聞や雑誌、その他よりプリミティブなメディアやコミュニケーションの様式が過去の時代の社会や人々の意識、文化的なパターンや価値観の形成にどのような影響を与え、それが長期的な変動の中でどのように変容してきたのか、これらの点を資料や文献の蒐集を通じて明らかにし、先端的なメディア・情報研究を歴史の厚みを通じて支える研究ビジョンがあげられる。

以上、5つの学域にまたがる研究ビジョンを素描したが、これらはそれぞれが相互に作用しながら、社会情報学圏の歴史と理論、政策の三位一体を形作っていくことになる。

以上のような研究ビジョンの実現に向けて、各学域ごとの研究の相互連携と協力を進め、同時に、学際情報学圏との多様かつ横断的な研究ビジョンの共有と交流を図ることにしたい。

3.2.2 学際情報学圏

学際情報学圏では、文理相互浸透型の新しい情報学の研究をおこなうことをめざしている。すなわち、そこで扱われる研究は、生命／身体／環境情報学、文化／表象／映像情報学、メディア表現／学習／リテラシー情報学、アーカイブ／歴史／図書館情報学などの文系諸分野と、ユビキタス／電脳建築情報学、造形／視覚アート情報学、認知／言語／医療情報学、人間機械／空間共有情報学などの理系諸分野にまたがっている。これらの多くはITの新たな応用と関わっており、中には未開拓の分野も少なくないが、文系・理系それぞれの既存の方法論を遵守しつつ、互いに協力連携していくことで、21世紀の情報社会に必要な新たな応用学問の領域がひらけるとともに、それらを通底する基礎的な情報学の研究が進展すると考えられる。

具体的には、これらの研究は21世紀COEを始めとする各種プロジェクトを中心におこなわれるが、とくに学際情報学圏のいちじるしい特徴は学内外との緊密な連携にある。学外連携についてはそれぞれのプロジェクトの項を参照していただきたいが、学内連携について主な相手先をあげると、情報理工学研究科、総合文化研究科、工学

研究科、人文科学研究科、教育学研究科、医学研究科、法学研究科、農学研究科、新領域研究科、生産技術研究所、東洋文化研究所、社会科学研究所、史料編纂所、先端科学技術研究所、情報基幹盤センター、総合博物館などがある。

3.3 21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

文部科学省 21 世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」プログラムは、成熟した情報社会の 21 世紀型の究極形であるユビキタス情報社会を先導することを目的として、概念形成や基礎理論、工学的技術や社会応用にわたり、情報学を核として計算機科学や認知科学、社会情報学、経済学、法学、社会学、歴史学、文化研究が連携し、幅広い学際研究を推進する世界最高水準の研究・教育拠点を形成しようとしている。ユビキタス情報社会とは、人類社会を形成するあらゆる分野や場面において、情報技術により生み出されたデジタル情報、特に状況認識技術によって得られたコンテキスト情報を活用した、効率的で効果的な情報サービスを行い、それによって人間生活の質の向上に資する社会である。その基盤となる学術研究を、情報学を中心とした学際的な教育・研究組織である、東京大学大学院情報学環・学際情報学府が中心となって推進する。

ユビキタスコンピューティングにおいては基礎技術研究と制度研究が必要である。全体が社会規模の巨大システムであり、多様な基礎技術を組み合わせてシステムを構築して、はじめて全体イメージがみえるようになる。そのため、本プロジェクトでは応用研究を行いその中で特に実証実験を重視したいと考えている。

実証実験の結果はシステムの実運用時の課題を明確にする。設計時から、運用サイドや社会との関係をもち、利用者の意見を広く取り入れることで、技術設計や制度設計に対するフィードバックを与える。またこれにより、実現イメージを広く知ってもらい社会的なコンセンサス醸成のためのはたらきかけとなるとともに、研究の説明責任の一環としても重要な意味をもつ。ユビキタスコンピューティングの基礎自体は、広く応用できる汎用情報インフラとして設計することがポイントである。そうでなければ社会コスト的に成立し得ないといえる。しかし、このような目的のはっきりしない汎用的なインフラであるからこそ、明確な応用イメージをもって開発しないと課題がみえてこないし、社会的な認知も得られない。

社会により密着するユビキタスコンピューティングは、社会に対する影響もより大きく、また被害も短期間に極大化することが十分考えられる。そのため、電話やインターネットの轍を踏むことなく、それらの失敗例を参考にして避けるべき問題を避けるように、技術・制度両面での設計が為されなければならない。そのためにも、応用研究を基礎研究と並行して、それを社会にオープンにし広く周知を集め相互にフィードバックして進めるといふ、21 世紀型の新しい研究スタイルが望まれるのであり、本COEプログラムでは、こうした研究スタイルを確立することも目指している。

III. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室

1949年 東京大学新聞研究所

1992年 東京大学社会情報研究所に改組

2004年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

(大学院情報学環)

2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合

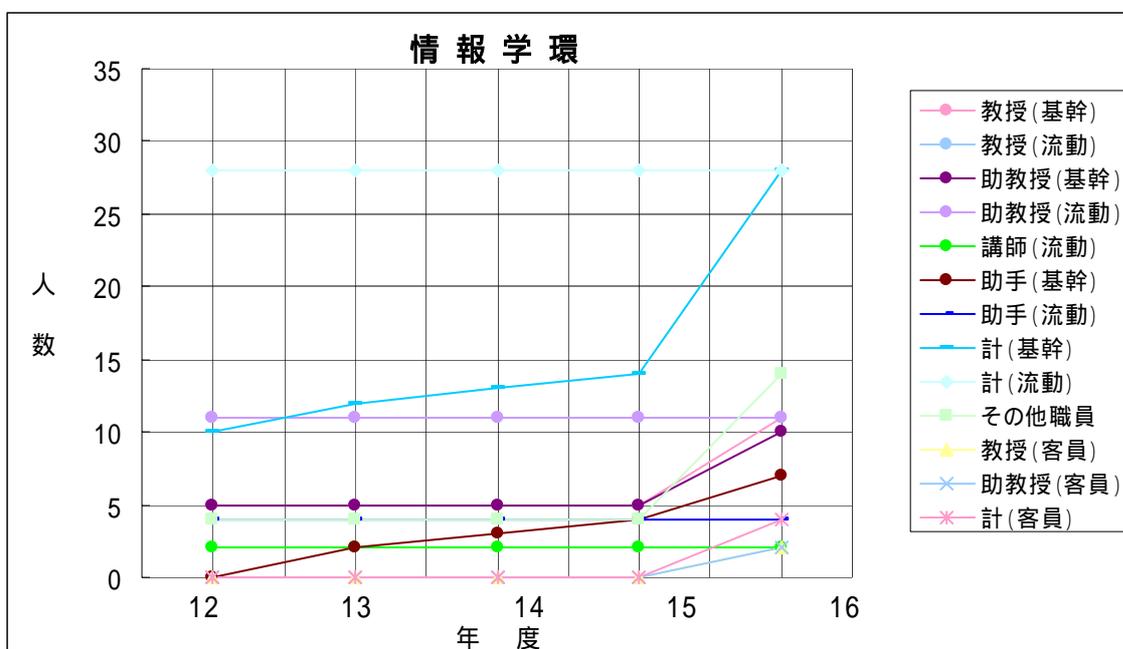
2 学環の教員（定員）

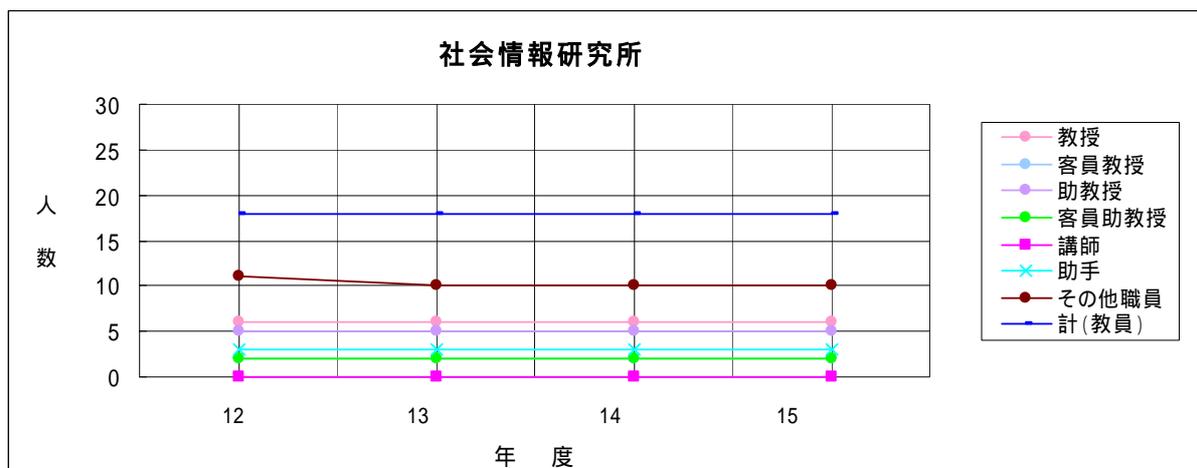
・情報学環

年度	教授			助教授			講師		助手		計			その他の職員
	基幹	流動	客員	基幹	流動	客員	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	客員	
12	5	11	0	5	11	0	0	2	0	4	10	28	0	4
13	5	11	0	5	11	0	0	2	2	4	12	28	0	4
14	5	11	0	5	11	0	0	2	3	4	13	28	0	4
15	5	11	0	5	11	0	0	2	4	4	14	28	0	4
16	11	11	2	10	11	2	0	2	7	4	28	28	4	14

・社会情報研究所

年度	教授	客員教授	助教授	客員助教授	講師	助手	計	その他の職員
12	6	2	5	2	0	3	18	11
13	6	2	5	2	0	3	18	10
14	6	2	5	2	0	3	18	10
15	6	2	5	2	0	3	18	10





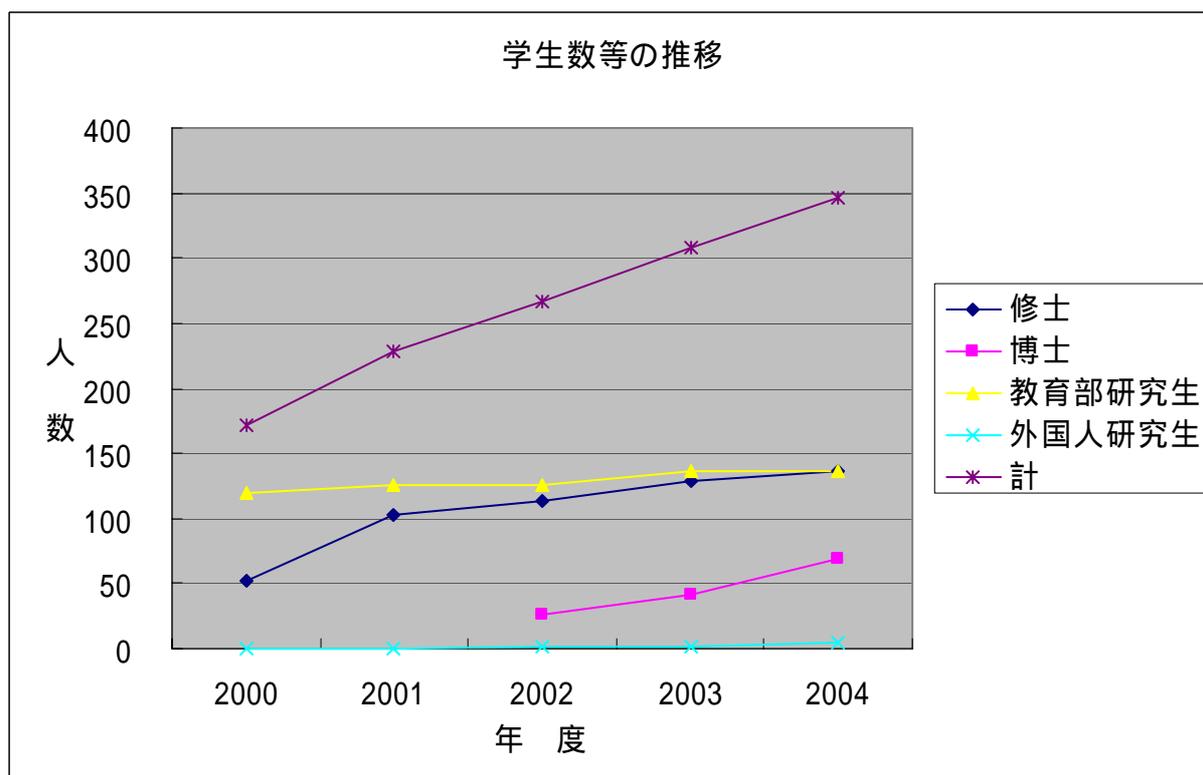
客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 12	客員教授	黒須 俊夫	メディア人間論 - メディア人間論の系譜と構図 -	群馬大学社会情報学部
	客員教授	白水 繁彦		武蔵大学社会学部
	客員助教授	木村 忠正		都立科学技術大学
	客員助教授	中村 陽一	ボランティア・エコノミーとNPO - 内発的発展の視点から -	都留文科大学文学部
平成 13	客員教授	小倉 利丸	インターネット・ガバナンスとグローバル・デモクラシー	富山大学経済学部
	客員教授	大井 眞二		日本大学法学部
	客員助教授	堀田 龍也	情報教育実践論	静岡大学情報学部
	客員助教授	下村 健一		(株)セラフ・メディア
平成 14	客員教授	鈴木 秀美	ジャーナリズムと法制度	広島大学法学部
	客員教授	市村 元		TBS 解説室理事
	客員助教授	遠藤 薫		東京工業大学大学院社会理工学研究科
	客員助教授	中村 功		松山大学人文学部
平成 15	客員教授	鈴木 正敏		(株)日本総合研究所
	客員教授	藤田 博司		上智大学文学部
	客員助教授	毛利 嘉孝		九州大学大学院比較社会文化研究院
	客員助教授	港 千尋		多摩美術大学美術学部
平成 16	客員教授	伊藤 守	社会情報学特別講義	早稲田大学教育学部

客員教授	村上 由見 子	文化・人間情報学特別講義	著述業
客員助教授	東 浩紀	社会情報学特別講義	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
客員助教授	永井 由美 子	学際理数情報学特別講義 (病気のため取止め)	多摩美術大学美術学部

3 学府の学生数

	2000	2001	2002	2003	2004
修士	52	102	113	128	136
博士			26	41	69
教育部研究生	119	126	126	137	137
外国人研究生	0	0	2	2	4
計	171	228	267	308	346



4 教育部

教育部入学試験

平成 13(2001)年度から平成 17(2005)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人 / 外国人	志願者			受験者			合格者		
			本学	他大 学	計	本学	他大 学	計	本学	他大 学	計
平成 13(2001) 年度	約 50	日本人	50	36	86	41	34	75	29	21	50
		外国人	2	1	3	2	1	3	0	1	1
		計	52	37	89	43	35	78	29	22	51
平成 14(2002) 年度	約 50	日本人	57	27	84	50	25	75	41	9	50
		外国人	3	6	9	3	5	8	0	2	2
		計	60	33	93	53	30	83	41	11	52
平成 15(2003) 年度	約 50	日本人	65	22	87	59	21	80	47	10	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	1	1
		計	65	23	88	59	22	81	47	11	58
平成 16(2004) 年度	約 50	日本人	90	41	131	81	40	121	44	13	57
		外国人	1	1	2	1	1	2	0	1	1
		計	91	42	133	82	41	123	44	14	58
平成 17(2005) 年度	約 50	日本人	90	47	137	79	46	125	43	12	55
		外国人	1	3	4	1	3	4	0	1	1
		計	91	50	141	80	49	129	43	13	56
合計		日本人	352	173	525	310	166	476	204	65	269
		外国人	7	12	19	7	11	18	0	6	6
		計	359	185	544	317	177	494	204	71	275

5 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

カリキュラム概要

1) デジタルコンテンツ創造科学講義 : コンテンツ制作理論

担当: 濱野保樹

コンテンツ制作のワークフローとロジスティックスについて、理論的側面、実践的側面の両者に関して検討し、ケーススタディを通してプロジェクト立案と遂行に必要な知識を学ぶ。

2) デジタルコンテンツ創造科学講義 : 先端科学技術と芸術表現論

担当: 河口洋一郎

デジタルコンテンツの基礎となるCG技術に関し、先端科学技術と芸術表現の相互触発作用という観点から展望し、わが国のメディア芸術・CGアートの現状について論じる。

3) デジタルコンテンツ創造科学講義 : コンテンツ産業論

担当: 角川歴彦

コンテンツ産業で従事する際に必要となる課題(著作権管理、ファイナンス、製作、流通、公開など)における問題を論じ、コンテンツ産業の基本構造について、実践的な視点から解説する。

4) デジタルコンテンツ創造科学講義 : グローバルストラテジー論

担当: 武邑光裕

各国の著作権制度と商慣習、国際市場、国際マーケティング、貿易制度、国際共同製作、文化摩擦、各政府の文化政策、エンターテインメント・ロイヤー、エージェント制度、ユニオン、人材育成など、わが国との相違を中心に論じる。

5) エンターテインメントテクノロジー研究 : バーチャルリアリティ

担当: 舘 暲

バーチャルリアリティ技術の数理的側面、技術的側面、社会的側面にする基礎的議論から、具体的な応用事例(バーチャルリアリティシアター、デジタルアーカイブ、コミュニケーション)までを論じる。また、それら技術の、エンターテインメントへの応用について考察する。

6) エンターテインメントテクノロジー研究 : コンピュータグラフィックス

担当: 西田友是

コンピュータグラフィックスを構成する諸要素(モデリング技術、レンダリング技術、高速化技術)を論じ、先端研究に触れる。また、それら諸技術のエンターテインメントへの応用について論じる。

7) エンターテインメントテクノロジー研究 : コンテンツデザイン

担当: 広瀬通孝、岩井俊雄

エンターテインメントを構成する技術の中でも、とりわけインタラクティブななどのインタフェース技術に関して論じ、メディア芸術作品で用いられている实例をみながら、その工学的デザイン方法論について論じる。

8) エンターテインメントテクノロジー研究 : デジタル映像処理

担当: リチャード・エドランド

デジタルシネマで用いられる先端的映像処理技術の概観を行い、作品事例に基づき、要素技術のエンターテインメントへの応用手法について論じる。

9) エンターテインメントテクノロジー研究 : アーカイブ技術

担当: 馬場章

デジタルコンテンツの展示・保存を担うアーカイブ技術の基礎的技術について学び、実際のデジタルアーカイブの事例をみながら、そのエンターテインメントへの応用について論じる。

10) エンターテインメントテクノロジー研究 : コンテンツ流通技術

担当: 安田浩、青木輝勝

デジタルコンテンツの流通に必要となるネットワーク技術と、コンテンツ保護技術について学び、そのエンターテインメントへの応用について論じる。

11) デジタルコンテンツ創造科学演習 : 国内インターンシップ

担当: 各教官

国内の関連企業において、インターンとして製作や技術開発の現地研修を行う。

12) デジタルコンテンツ創造科学演習 : 海外インターンシップ

担当: 各教官

海外の関連企業において、インターンとして製作や技術開発の現地研修を行う。

13) デジタルコンテンツ創造科学演習 : 製作・マーケティングシミュレーション

担当: 各教官

作品の企画から流通、公開までチームを組んで作品製作を行う。流通・公開に関しては、シミュレーションを行うことで、実際の現場で生じる課題とその解決方法について学ぶ。

14) デジタルコンテンツ創造科学特論 : 古典研究

担当: 濱野保樹

国際的に成功を収めたわが国の記念碑的作品を取り上げ、それに関わった製作者やクリエイターとともに、成功の理由を分析する。以下の作品を取り上げる予定である:

- 『千と千尋の神隠し』 鈴木敏夫 (従事者)
- 『AKIRA』 大友克洋 (従事者)
- 『GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊』 押井守 (従事者)、石川光久 (従事者)
- 『スーパーマリオ』 宮本茂 (了承済)
- 『バーチャ・ファイター』 鈴木裕 (従事者)
- 『ファイナル・ファンタジー』 (交渉中)
- 『ポケモン』 久保雅一 (了承済)
- 『RING』 角川歴彦 (従事者)
- 『ドラゴンボール』 (交渉中)
- 『セーラームーン』 幾原邦彦 (了承済)
- 『クレヨンしんちゃん』 原恵一 (了承済)
- 「ルイヴィトンのアニメーション」 細田守 (了承済)
- 『スラムダンク』 井上雄彦 (了承済)
- 『スター・ウォーズ』 リチャード・エドランド (従事者)
- 『七人の侍』 村木与四郎 (了承済)

15) デジタルコンテンツ創造科学特論 : 作品解析

担当: 各教官

2週間に一度、公開直前の作品を視聴(スニークプレビュー)し、そのスタッフにインタビューすることで得られた情報を基に作品の正否について分析を行い、公開後に分析結果と現実の結果を比較検討する。

16) デジタルコンテンツ創造科学特論 : アニメーション

担当: 鈴木敏夫、押井守、大友克洋、石川光久、各教官

コンテンツ産業の事例としてアニメーション産業を取り上げて、産業構造とその制作の現場における問題点について検討する。また、成功した企業の事例研究を行う。

17) デジタルコンテンツ創造科学特論 : ゲーム

担当: 鈴木裕、馬場章

コンテンツ産業の事例としてゲーム産業を取り上げて、産業構造とその制作の現場における問題点について検討する。また、成功した企業の事例研究を行う。

18) デジタルコンテンツ創造科学特論 : 映画

担当: 角川歴彦、リチャード・エドランド、各教官

コンテンツ産業の事例として映画産業を取り上げて、産業構造とその現場について検討する。また、成功した企業の事例研究を行う。特にコンテンツがデジタル化されることによって、どのような変化が起こるのかをデジタルシネマを例に取り、検討する。

科目・開講時期一覧

科目番号	科目名	担当教官	単位数	1年	2年	開講時期	備考
0001	デジタルコンテンツ創造科学講義 : コンテンツ制作理論	濱野保樹	2			夏学期	1
0002	デジタルコンテンツ創造科学講義 : 先端科学技術と芸術表現論	河口洋一郎	2			夏学期	1
0003	デジタルコンテンツ創造科学講義 : コンテンツ産業論	角川歴彦	2			冬学期	1
0004	デジタルコンテンツ創造科学講義 : グローバルストラテジー論	武邑光裕	2			冬学期	1
0005	エンターテインメントテクノロジー研究 : バーチャルリアリティ	舘 暲	2			夏学期	2
0006	エンターテインメントテクノロジー研究 : コンピュータグラフィックス	西田友是	2			夏学期	2
0007	エンターテインメントテクノロジー研究 : コンテンツデザイン	広瀬通孝、 岩井俊雄	2			夏学期	2
0008	エンターテインメントテクノロジー研究 : デジタル映像処理	リチャード・エドランド	2			冬学期	2
0009	エンターテインメントテクノロジー研究 : アーカイブ技術	馬場章	2			冬学期	2

0010	エンターテインメントテクノロジー研究 ： コンテンツ流通技術	安田浩 青木輝勝	2			冬学期	2
0011	デジタルコンテンツ創造科学演習 ： 国内インターンシップ	各教官	4			通年開講	3
0012	デジタルコンテンツ創造科学演習 ： 海外インターンシップ	各教官	4			通年開講	3
0013	デジタルコンテンツ創造科学演習 ： 製作・マーケティングシミュレーション	各教官	4			通年開講	3
0014	デジタルコンテンツ創造科学特論 ： 古典研究	濱野保樹	2			夏学期	4
0015	デジタルコンテンツ創造科学特論 ： 作品解析	各教官	2			夏学期	4
0016	デジタルコンテンツ創造科学特論 ： アニメーション	鈴木敏夫 押井守 大友克洋 石川光久 各教官	2			夏学期	4
0017	デジタルコンテンツ創造科学特論 ： ゲーム	鈴木裕 馬場章	2			冬学期	4
0018	デジタルコンテンツ創造科学特論 ： 映画	角川歴彦 リチャード・エド ランド	2			冬学期	4

備考

- 1 必修科目
- 2 科目番号 0005～0010 の中から 3 科目以上を選択の上、履修する
- 3 科目番号 0011～0013 の中からいずれか 1 科目を選択の上、履修する
- 4 科目番号 0014～0018 の中から任意の数の科目を選択の上、履修する

6 予算

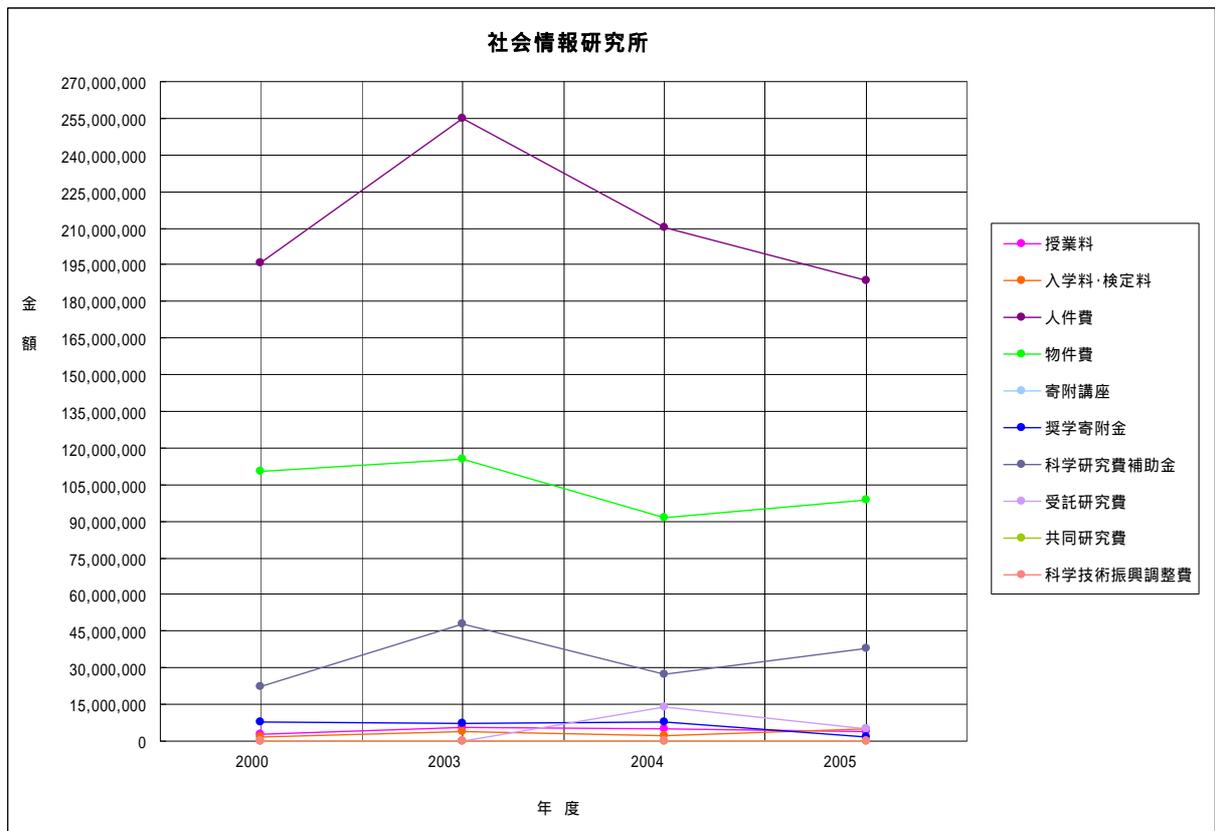
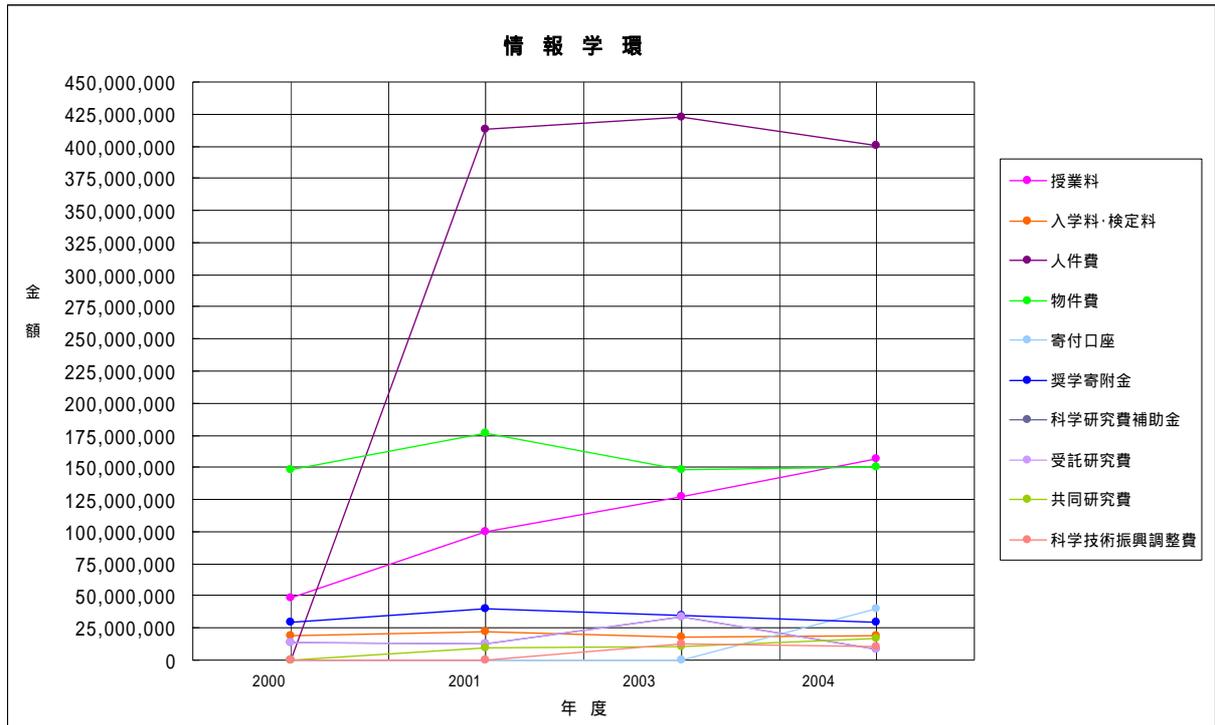
・情報学環

	2000('12)		2001('13)		2002('14)		2003('15)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料		48,518,400		99,360,000		127,015,200		156,240,000
入学料・検定料		19,332,000		22,290,000		17,808,000		19,344,000
人件費	—	—	—	413,285,007	—	422,990,757	—	400,697,242
物件費	—	148,680,000	—	176,554,000	—	148,589,615	—	150,090,000
寄附講座	—	—	—	—	—	—	1	40,000,000
奨学寄附金	25	29,730,000	31	40,080,000	31	34,660,000	27	29,860,000
科学研究費補助金	—	—	16	206,600,000	31	392,600,000	25	235,800,000
受託研究費	4	13,405,695	5	12,400,000	7	33,620,000	6	8,365,000
共同研究費	—	—	4	9,525,000	3	10,000,000	8	16,720,000
科学技術振興調整費	—	—	—	—	1	12,453,000	1	11,018,000

・社会情報研究所

	2000('12)		2001('13)		2002('14)		2003('15)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料		2,923,000		5,337,600		4,797,800		4,161,200
入 学 料・検定 料		1,798,000		3,632,000		2,187,000		4,842,000
人件費	—	195,873,902	—	255,035,672	—	210,427,503	—	188,609,768
物件費		110,624,000		115,725,000		91,401,000		98,583,000
寄 附 講 座	—	—	—	—	—	—	—	—
奨 学 寄 附 金	5	7,760,000	4	7,320,000	3	7,760,000	4	1,400,000
科 学 研 究 費 補 助 金	4	22,203,300	10	48,013,457	10	27,600,500	12	38,000,169
受 託 研 究 費	—	—	—	—	2	14,199,000	1	4,800,000
共 同 研 究 費	—	—	—	—	—	—	—	—
科 学 技 術 振 興 調 整 費	—	—	—	—	—	—	—	—

(注) 2003年度までの予算額について、社会情報研究所と大学院情報学環で重複して計上されているものがあるために、単純に合計することはできない。



7 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積（延㎡）
学環本館	S.27	472
	S.29	26
	S.33	360
	<u>S.58</u>	<u>4,171</u>
	計	5,029
暫定アネックス	H.13	1,013

・学外スペース

文京区本郷	117.92 ㎡
品川区西五反田	54.62 ㎡

8 入試定数と受入数

		修士		博士	
		入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員

2000(2001 入試)	平成 12	37	48	-	-
2001(2002 入試)	平成 13	37	48	-	-
2002(2003 入試)	平成 14	37	48	16	20
2003(2004 入試)	平成 15	37	48	16	20
2004(2005 入試)	平成 16	70	70	30	30

9 年度別入試データ詳細

修士

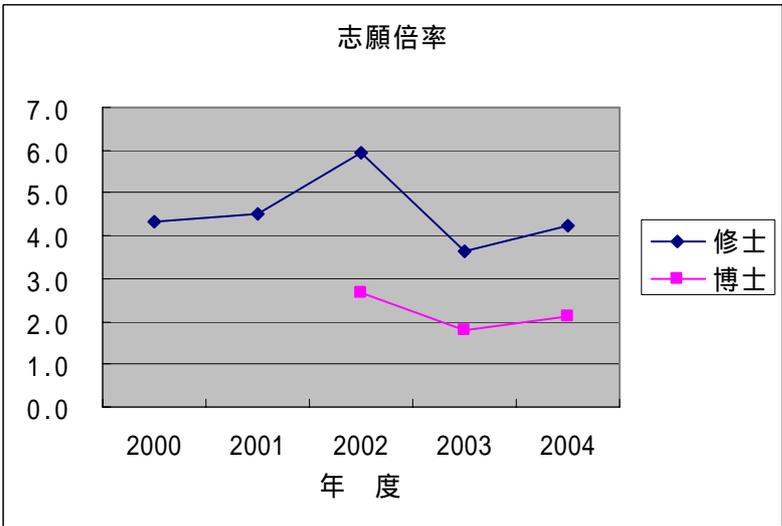
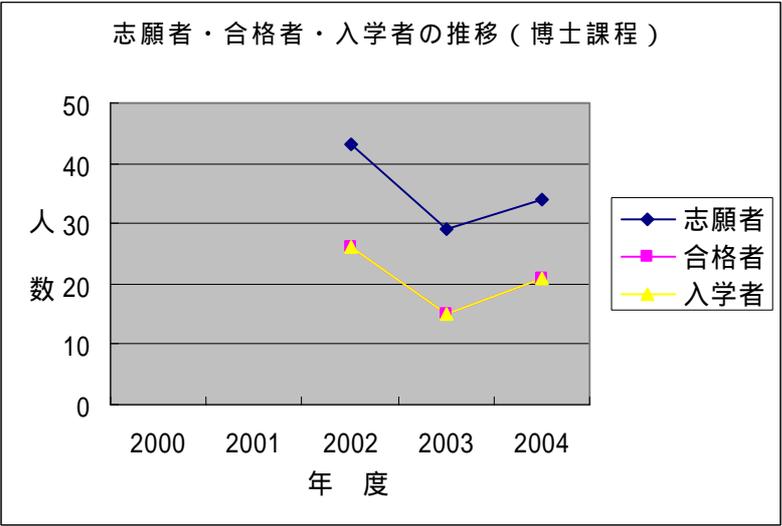
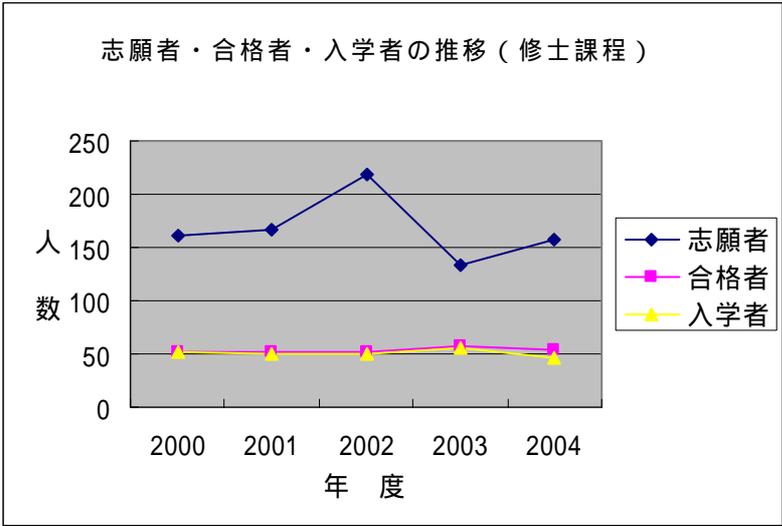
	2000	2001	2002	2003	2004
志願者	161	167	219	134	157
合格者	52	52	52	58	53
入学者	52	50	50	56	47

博士

	2000	2001	2002	2003	2004
志願者	-	-	43	29	34
合格者	-	-	26	15	21
入学者	-	-	26	15	21

志願倍率

	2000	2001	2002	2003	2004
修士	4.35	4.51	5.92	3.62	4.24
博士	-	-	2.69	1.81	2.13



2004 年度修士入学試験詳細

志願者

本学	28
他大学	129

合格者

本学	13
他大学	40

入学者

本学	10
他大学	37

志願者

日本人	133
外国人	24

合格者

日本人	44
外国人	9

入学者

日本人	38
外国人	9

志願者

男	96
女	61

合格者

男	31
女	22

入学者

男	27
女	20

志願者

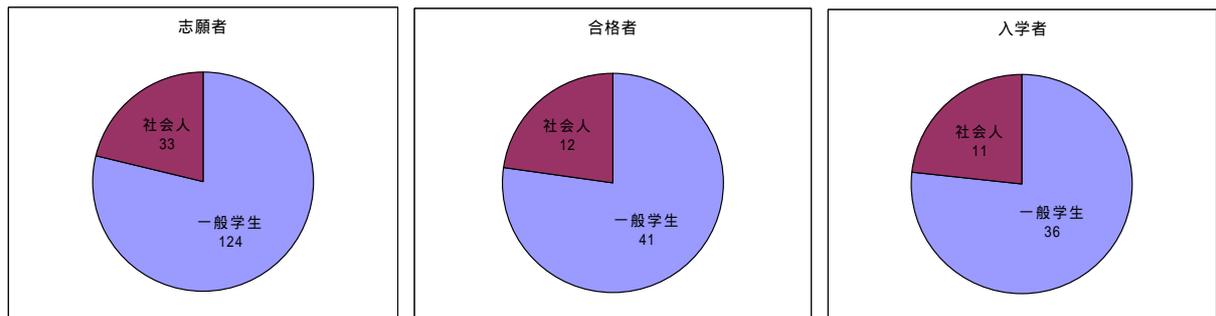
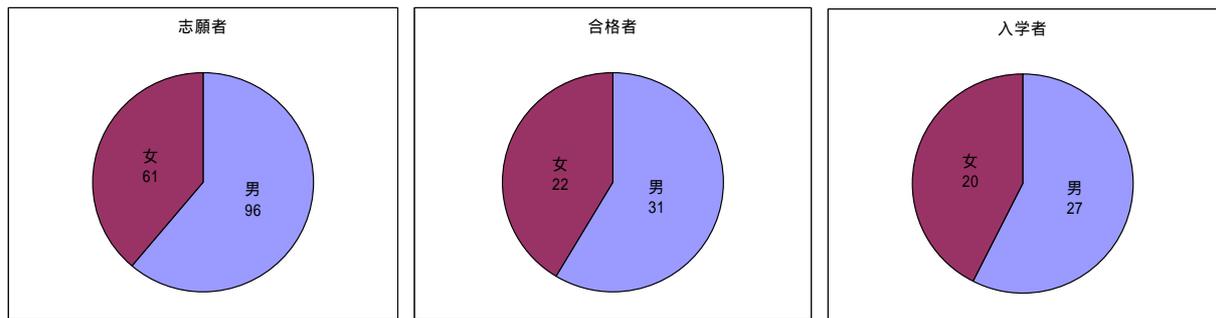
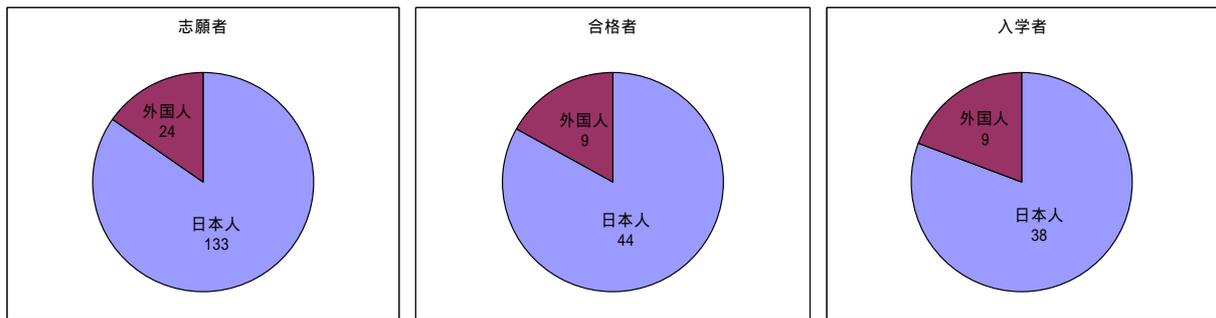
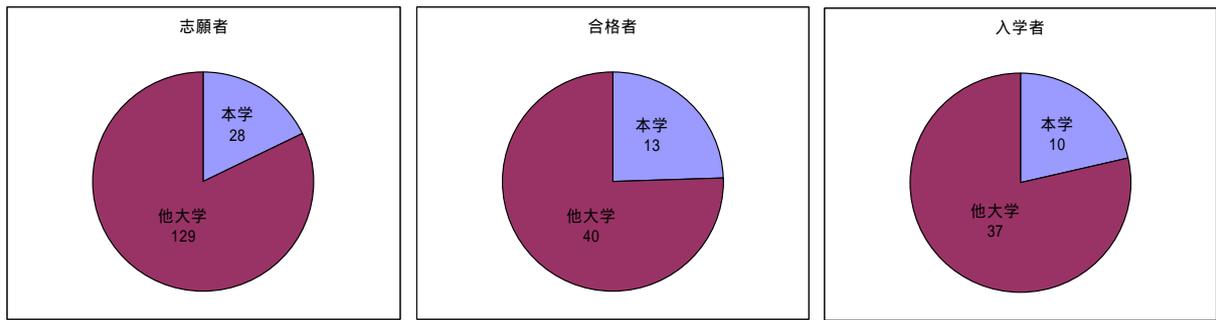
一般学生	124
社会人	33

合格者

一般学生	41
社会人	12

入学者

一般学生	36
社会人	11



2004 年度博士入学試験詳細

志願者

本学	29
他大学	5

合格者

本学	18
他大学	3

入学者

本学	18
他大学	3

志願者

日本人	32
外国人	2

合格者

日本人	19
外国人	2

入学者

日本人	19
外国人	2

志願者

男	21
女	13

合格者

男	13
女	8

入学者

男	13
女	8

志願者

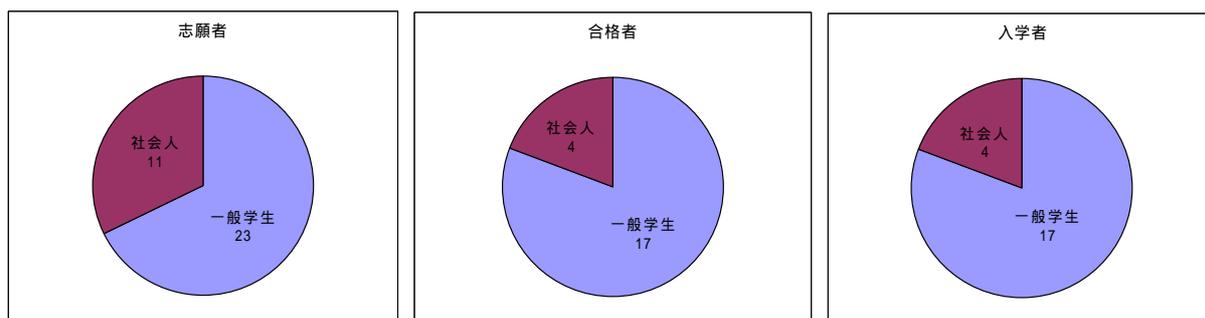
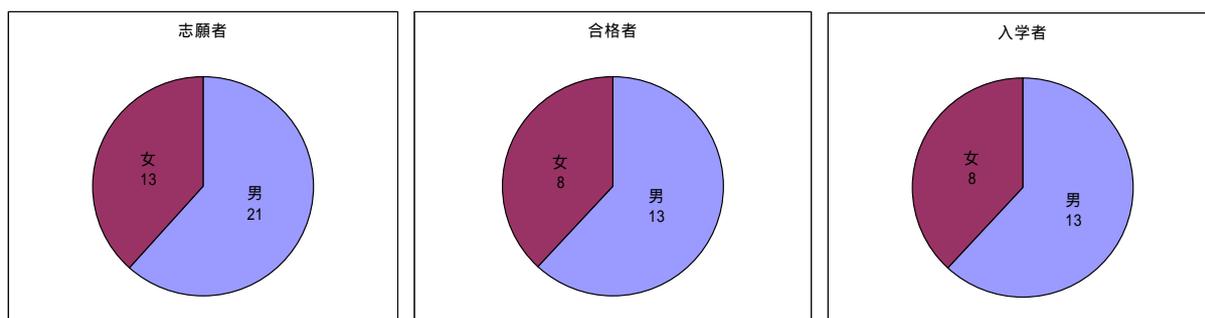
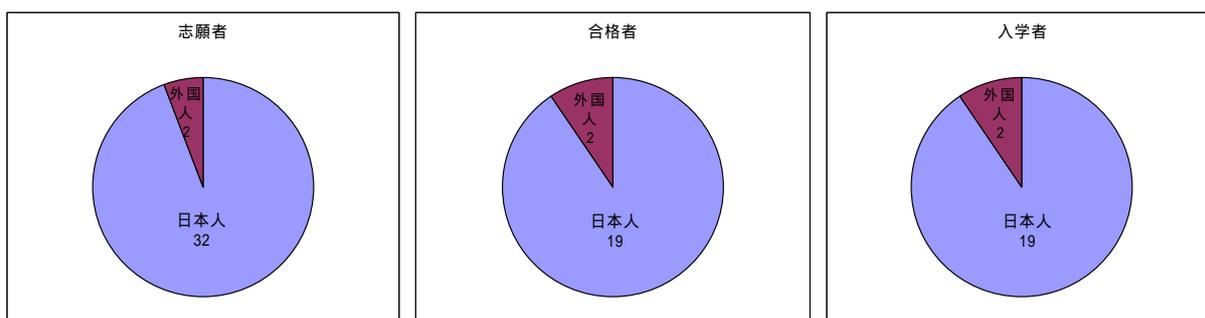
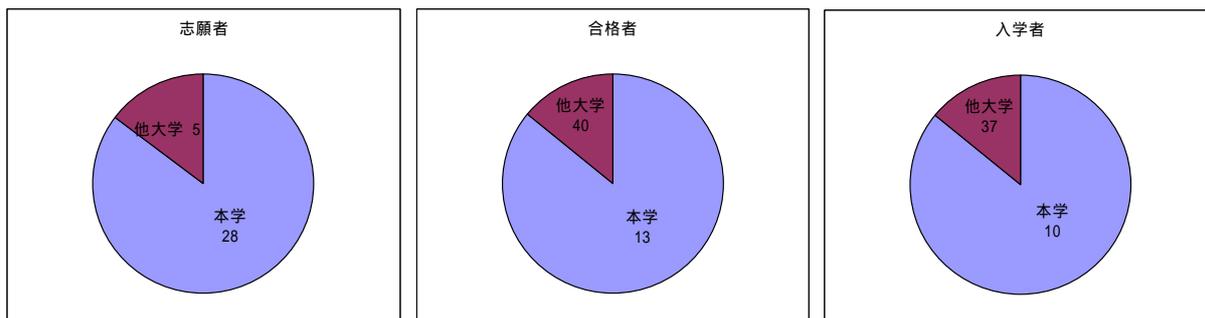
一般学生	23
社会人	11

合格者

一般学生	17
社会人	4

入学者

一般学生	17
社会人	4



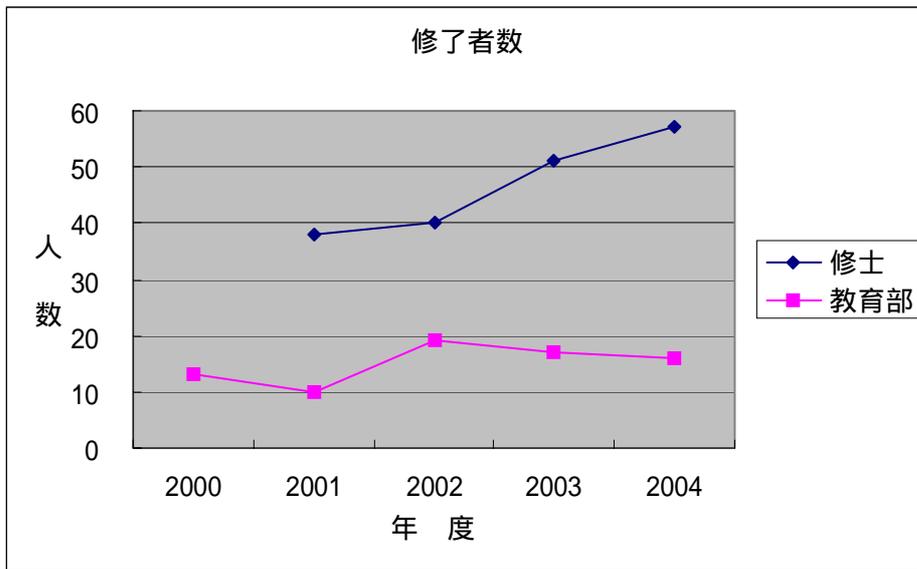
10 修了者数の推移

教育部 入学試験

平成 12(2000)年度から平成 16(2004)年度修了者数

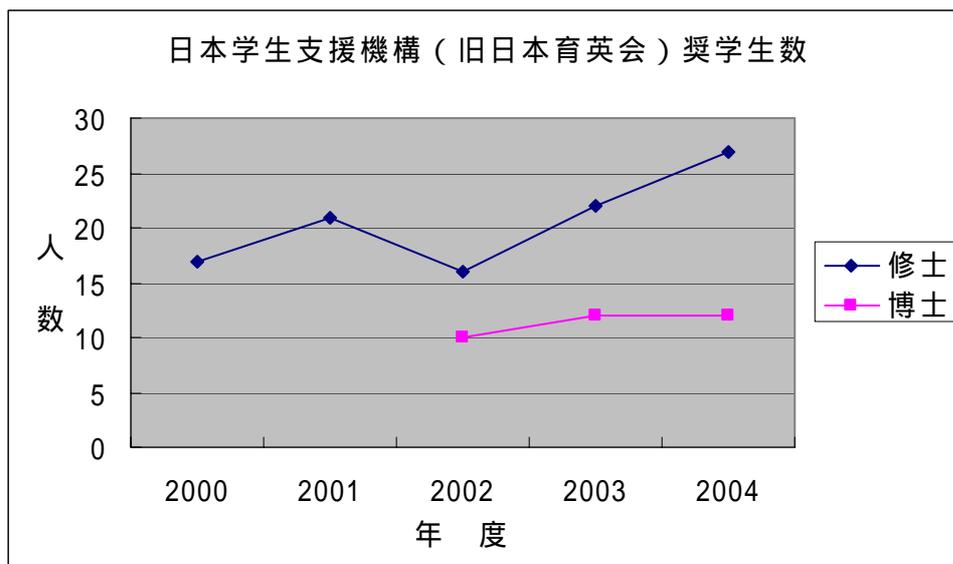
年度	修了者		
	本学	他大学	計
平成 12(2000)年度	10	3	13
	0	0	0
	10	3	13
平成 13(2001)年度	4	6	10
	0	0	0
	4	6	10
平成 14(2002)年度	12	7	19
	0	0	0
	12	7	19
平成 15(2003)年度	7	9	16
	0	1	1
	7	10	17
平成 16(2004)年度	9	6	15
	0	1	1
	9	7	16
合計	42	31	73
	0	2	2
	42	33	75

	2000	2001	2002	2003	2004
修士		38	40	51	57
教育部	13	10	19	17	16



11 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		きぼう 21		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2004 年度	18	12	9	0	27	12
2003 年度	14	9	8	3	22	12
2002 年度	12	10	4	0	16	10
2001 年度	14	-	7	-	21	-
2000 年度	14	-	3	-	17	-



12 日本学術振興会特別研究員数

学際情報学府

	D C 1	D C 2	合計
2004 年度	1	0	1
2003 年度	0	0	0
2002 年度	1	0	1
2001 年度	-	-	-
2000 年度	-	-	-

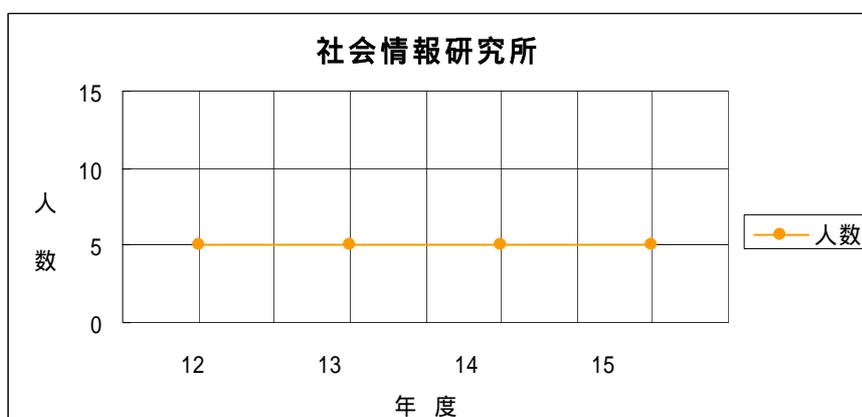
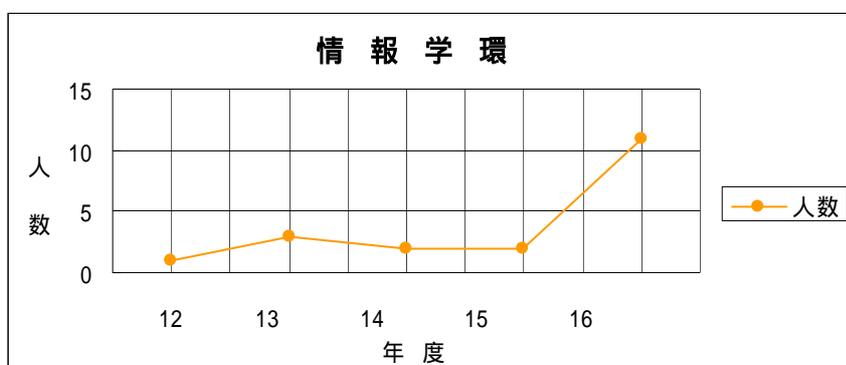
13 リサーチアシスタント数

・ 情報学環

年度	人数
12	1
13	3
14	2
15	2
16	11

・ 社会情報研究所

年度	人数
12	5
13	5
14	5
15	5



14 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2001年度～2004年度)

区 分	2001年度			2002年度			2003年度			2004年度			
	学際情報学 コース	実証情報学 コース	計	学際情報学 コース	実証情報学 コース	計	学際情報学 コース	実証情報学 コース	計	学際情報学 コース	実証情報学 コース	計	
博士課程進学	学際情報学府 学内他研究科 学外	13 1	11 1	24 2	8 1	7 1	15 1	8 1	9 1	17 1	14 1	6 1	20 1
海外留学			1		1	1							
就職		2	6	8	4	12	16	10	16	26	12	17	29
大学院研究生	学際情報学府 学内他研究科	※用していない*			※用していない*			※用していない*			※用していない*		
帰国(外国人留学生)			1	1				1		1	1	1	2
就職未定			1	1	1	1	2	2	2	2	1		1
その他					2	2	2	1	1	1			
不明					3	3	3	2	1	3			
合計		17	21	38	14	26	40	23	28	51	29	24	53
<就職先一覧>		2001年度			2002年度			2003年度			2004年度		
		東京海上火災(株)投資(株)	1		株ウェザーニューズ	1		株野村総合研究所	2		株ホストンコンサルティング	2	
		日本放送協会	1		HCL Technologies Japan	1		株電通	3		株任実堂	2	
		(私立)育英短期大学	1		ウエルソナリング・ワールドワイ	1		株ディー・エス・エー	1		株日本総合研究所	1	
		(株)博報堂	1		株ヤフージャパン	1		株エス・ティ・ティ・ドットコム	1		株イースタンスポーツ	1	
		(株)ソニー木原研究所	1		千葉県	1		株アクティブ・ワーク	1		株ソニー	1	
		ソニー(株)	1		イデー	1		株青木社	1		NTT研究所	1	
		スピキスコンピュータの研究	1		ゴールドマン・サックス証券会社	1		株モバイルビジネスソリューション	1		株東京リーガルマインド	1	
		竹中工務店	1		チームラボ株	1		ヤマハ株	1		YRPユビキタスネットワークエンジニア	1	
					マッキンゼー・アンド・カンパニー	1		三菱電機株	1		株ジェイ・エル・東日本情報シ	1	
					防衛庁	1		東日本電信電話株	1		株日立製作所	1	
					株NTTデータ	1		任実堂株	1		株博報堂	1	
					株NTTドコモ	1		日本電信電話株	1		株エス・ティ・ティ・ドットコム	1	
					東海大学文学部	1		日産自動車株	1		株三井物産	1	
					自営業	3		パロジプラットフォーム株	1		個人デザイン事務所	1	
								チームラボ株	1		日本経済新聞社	1	
								ソニー株	1		株サイバーエージェント	1	
								キャノン株	1		株電通	1	
								朝日新聞社	1		衆議院議員事務所	1	
								Singapore Press Holdings	1		株日本テレビ放送網	1	
								McKinsey&Company	1		株ベネッセコーポレーション	1	
								Bain&Company Japan,Inc	1		株スクウェア	1	
								Leo Burnett(米国)	1		株リー・エンビュテインティイ	1	
								自営業(介護福祉業)	1		株セブテーニ	1	
											福山大学	1	
											株NTTデータ	1	
											株NECソフト	1	
										シティバンク・エヌ・エイ	1		

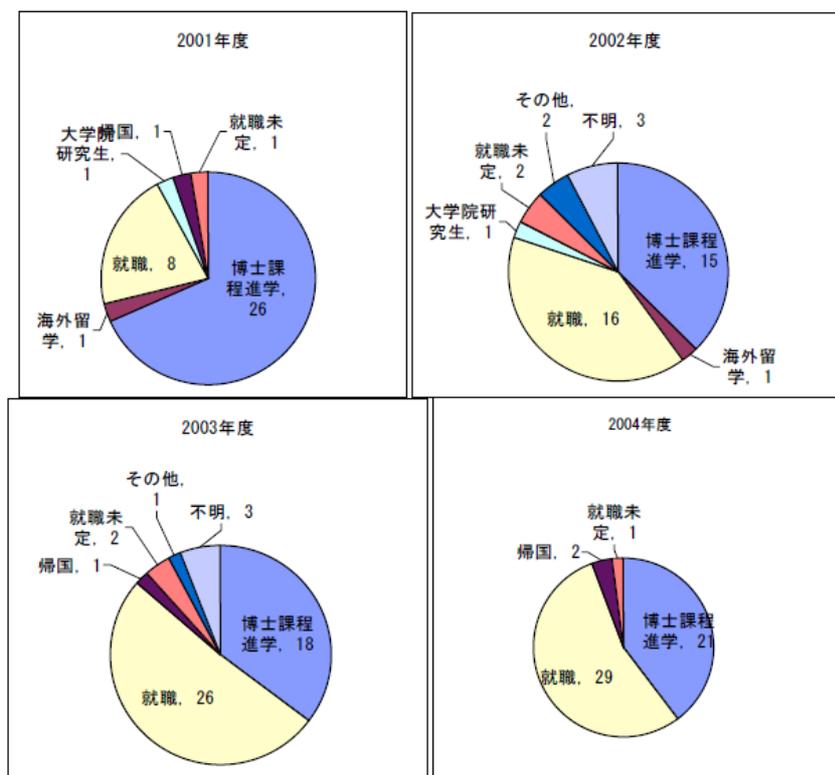
グラフ表

	2001年度
博士課程進学	26
海外留学	1
就職	8
大学院研究生	1
帰国	1
就職未定	1
その他	
不明	

	2002年度
博士課程進学	15
海外留学	1
就職	16
大学院研究生	1
帰国	
就職未定	2
その他	2
不明	3

	2003年度
博士課程進学	18
海外留学	
就職	26
大学院研究生	
帰国	1
就職未定	2
その他	1
不明	3

	2004年度
博士課程進学	21
海外留学	
就職	29
大学院研究生	
帰国	2
就職未定	1
その他	
不明	



15 ベネッセ先端教育技術学講座

ウェブサイトアドレス <http://beatiii.jp/>

スタッフ一覧

客員助教授 宇治橋祐之

NHK エデュケーショナル教育部チーフプロデューサー

客員助教授 堀田龍也

静岡大学情報学部情報社会学科・助教授

フェロー 中原淳

東京大学 大学総合教育研究センター 講師

フェロー 山内祐平

東京大学大学院 情報学環 助教授

フェロー 桑野啓

(株)ベネッセコーポレーション

教育研究開発本部 バイスプレジデント

フェロー 中野真衣

(株)ベネッセコーポレーション

教育研究開発本部 モバイル事業研究開発部

フェロー 和気竜也

(株)ベネッセコーポレーション

教育研究開発本部 モバイル事業研究開発部

アソシエイト 西森年寿

独立行政法人 メディア教育開発センター 助手

アソシエイト 望月俊男

神戸大学 学術情報基盤センター 助手

アソシエイト 山口悦司

宮崎大学教育文化学部助教授

アソシエイト 北村智

東京大学大学院学際情報学府修士課程

16 客員講座等

平成12年

客員教授 黒須 俊夫

客員教授 白水 繁彦

客員助教授 木村 忠正

客員助教授 中村 陽一

平成13年

客員教授 小倉 利丸

客員教授 大井 眞二

客員助教授 堀田 龍也

客員助教授 下村 健一

平成14年

客員教授 鈴木 秀美

客員教授 市村 元

客員助教授 遠藤 薫

客員助教授 中村 功

平成15年

客員教授 鈴木 正敏

客員教授 藤田 博司

客員助教授 毛利 嘉孝

客員助教授 港 千尋

平成16年

客員教授 伊藤 守

客員教授 村上 由見子

客員助教授 東 浩紀

客員助教授 永井 由美子

17 研究員（客員）等

情報学環

事項 / 年度	12	13	14	15	16
受託研究員	2	3	1	0	0
中国政府派遣研究員	0	6	3	0	0
客員研究員	0	0	3	3	3
外国人研究員	0	0	3	1	2
内地研究員	0	0	0	0	1
外国人研究員	0	0	0	0	7
交流研究員	0	0	0	1	2
私学研究員	0	0	0	0	0

社会情報研究所

事項 / 年度	12	13	14	15
受託研究員	0	0	0	0
中国政府派遣研究員	0	0	0	0
客員研究員	0	0	0	0
外国人研究員	10	2	4	3
内地研究員	1	0	0	0
外国人研究員	7	9	1	3
交流研究員	0	0	0	0
私学研究員	2	0	0	0

18 学会賞など受賞者リスト

総件数: 108 件

1. 荒川忠一、日本流体力学会 フェロー、。
2. 荒川忠一、第5回文化庁メディア芸術祭インタラクティブアート部門審査委員会推薦作品、2002年。(作品 "Water Canvas with Ears"、2001年)
3. 荒川忠一、2002年アジアデジタルアート大賞インタラクティブアート部門大賞、2002年。(作品 "Liquid Sculpture"、2002年)
4. 荒川忠一、2002年 waSABI GRAND Prix waSABI 芸術賞 (インタラクティブアート部門) 2002年。(作品 "Liquid Sculpture"、2002年)
5. 荒川忠一、ターボ機械協会 畠山賞、2003年。(風車プロペラの数値解析)
6. 荒川忠一、日本機械学会 フェロー、2003年。
7. 荒川忠一、日本計算工学会 論文賞、2003年。
8. 池内克史、IEEE IEEE Fellow、1997年4月。
9. 池内克史、The Best Vision Paper Award at the 2000 IEEE International Conference on Robotics and Automation.、2000年。
10. 池内克史、6th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM 2000)、2000年。
11. 池内克史、電子情報通信学会 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2000) 最優秀論文賞、2000年。
12. 池内克史、日本バーチャルリアリティ学会 日本バーチャルリアリティ学会論文賞 (Japan Virtual Reality Society Best Transaction Paper Award) 2000年9月。
13. 池内克史、6th VSMM 最優秀論文賞、2000年11月27日。
14. 池内克史、情報処理学会 CVIM 研究会 優秀卒論賞、2004年5月。
15. 池内克史、10th VSMM 最優秀論文賞、2004年11月19日。
16. 河口洋一郎、ユーログラフィックス最優秀芸術賞 (コペンハーゲン) 1984年。
17. 河口洋一郎、ヌーベルイマージュ'87 グランプリ (フランス) 1987年。
18. 河口洋一郎、パリグラフィ'87 第1位[アート] (フランス) 1987年。
19. 河口洋一郎、未来イメージ'87 第1位[アート] (モンテリオール) 1987年。
20. 河口洋一郎、未来イメージ'88 第1位[アート] (モンテリオール) 1988年。
21. 河口洋一郎、イマジナ'91 第1位[アート] (モナコ) 1991年。
22. 河口洋一郎、国際エレクトロニックシネマ'91 第一位[アート] (スイス) 1991年。
23. 河口洋一郎、ARS エレクトロニカ'91 準大賞授賞 (リンツ・オーストリア) 1991年。
24. 河口洋一郎、ユーログラフィックス'92 第1位[アート] (モナコ) 1992年。
25. 河口洋一郎、MMA マルチメディアグランプリ会長賞 (日本) 1993年。
26. 河口洋一郎、第1回口リアル大賞 (グランプリ) (日本) 1997年。
27. 河口洋一郎、東京テクノフォーラム ゴールドメダル (金賞) (日本) 1997年。
28. 河口洋一郎、南日本文化大賞特別賞 (日本) 2000年。
29. 河口洋一郎、千葉市 国際エレクトロニックシネマ'01 千葉市長賞 (千葉市) 2000年。
30. 河口洋一郎、福岡県文化賞 (日本) 2002年。

31. 國吉康夫、日本ロボット学会 第 5 回研究奨励賞、1990 年。(論文名：國吉康夫，稲葉雅幸，井上博允：「実演による作業教示 - 第一報：新しい教示方式の提案と動作認識のための視覚情報抽出機構 - 」)
32. 國吉康夫、第 2 回佐藤記念知能ロボット研究奨励賞、1992 年。(研究題目：「実演による教示に関する研究」)
33. 國吉康夫、International Joint Conference on Artificial Intelligence (IJCAI) Outstanding Paper Award (国際合同人工知能会議最優秀論文賞) 1993 年。(論文名：Y. Kuniyoshi and H. Inoue: Qualitative Recognition of Ongoing Human Action Sequences)
34. 國吉康夫、日本ロボット学会 日本ロボット学会 10 周年記念論文最優秀論文賞、1993 年。(論文名：北垣、植芝、河井、音田、中村、國吉、永田、森島、脇田：「21 世紀における知能システムの姿 - 202X 年あるテクニカルライターの手記より - 」)
35. 國吉康夫、電子技術総合研究所 所内表彰「貢献賞」、1994 年。(対象：「情報処理研究共用計算機利用ガイドの作成」)
36. 國吉康夫、日本ロボット学会 第 10 回論文賞、1996 年。(論文名：喜多伸之，S. Rougeaux, 國吉康夫，坂根茂幸：仮想ホロボタを用いた実時間両眼追跡，日本ロボット学会誌，vol.13, no.5, 1995.、1995 年)
37. 國吉康夫、IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots & Systems, Best Paper Award Finalist, 2003 年。
38. 國吉康夫、NHK 大学ロボットコンテスト 2004 全国大会優勝(出場チーム(工学部丁友会学生サークル RoboTech)の指導教員として.)、2004 年 7 月。
39. 國吉康夫、(社)計測自動制御学会 第 5 回(社)計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 SI2004 ベストセッション講演賞、2005 年 3 月。(論文：深野亮，國吉康夫：「チンパンジー型模倣を目指したロボットシステムの設計」)
40. 坂村健、市村学術賞 特別賞、2001 年 4 月。
41. 坂村健、経済産業省 経済産業大臣賞、2001 年 10 月。
42. 坂村健、武田財団 武田賞(第一回、情報・電子系応用分野)、2001 年 12 月。
43. 坂村健、IEEE IEEE Fellow、2002 年。
44. 坂村健、総務省 「電波の日」総務大臣表彰、2002 年 6 月。
45. 坂村健、IEEE IEEE Golden Core Member、2003 年。
46. 坂村健、日経 BP 社 第 2 回 日本イノベーター大賞、2003 年 5 月。
47. 坂村健、紫綬褒章、2003 年 5 月。
48. 坂村健、大川財団 大川賞、2004 年。
49. 佐々木正人、日本教育心理学会 城戸奨励賞、1984 年。
50. 佐々木正人、日本発達心理学会 発達心理学研究論文賞、1994 年。
51. 須藤修、電気通信普及財団 第 11 回電気通信普及財団賞(第 11 回テレコム社会科学賞)、1996 年 3 月。(著書『複合的ネットワーク社会』(有斐閣、1995 年) 1995 年)
52. 須藤修、情報文化学会 第 5 回情報文化学会賞(国際賞)、1999 年 11 月。(情報学に関する国際的活動)
53. 須藤修、ドイツ連邦共和国ハイデルベルクベルク市 Heidelberg Club International 会員資格授与、2001 年 9 月。

54. 須藤修、総務大臣表彰(2004年10月) 2004年10月。(タイムビジネス推進協議会(会長:大橋正和、副会長:須藤修) 情報化の促進への貢献(時刻認証の研究開発及び普及活動))
55. 辻井潤一、国際計算言語委員会(ICCL: International Committee of Computational Linguistics) 終身フェロー、1992年。
56. 辻井潤一、香港 SEYMF 招聘教授 Sir Edward Youde Memorial Fund、2000年。
57. 原洋之介、発展途上国研究賞奨励賞、1986年。
58. 原洋之介、大平正義記念研究奨励賞、1996年。
59. 原洋之介、国際開発研究大来武郎賞、1997年。
60. 原洋之介、大同生命 大同生命地域研究奨励賞、2001年。
61. 原島博、電子情報通信学会 フェロー、2000年。
62. 原島博、映像情報メディア学会(旧テレビジョン学会) 丹羽高柳賞著述賞、2001年。
63. 原島博、総務省(旧郵政省) 総務大臣表彰、2002年。
64. 廣井脩、兵庫県 防災功労者賞、2003年5月。
65. 廣井脩、内閣府 防災功労賞、2004年9月。
66. 廣井脩、(社)全国治水砂防協会 赤木賞、2005年3月。
67. 鈴木高宏、日本ロボット学会 第18回研究奨励賞、2003年9月20日。(人工食道用螺旋スクリュウ機構の開発、2002年10月12日)
68. 田中秀幸、特定非営利活動法人日本ネットワークセキュリティ協会・日本セキュリティ・マネジメント学会 Network Security Forum 2003 論文発表会奨励賞、2003年10月。
69. 苗村健、日本バーチャルリアリティ学会 猪瀬学術奨励賞、1993年7月29日。
70. 苗村健、日本バーチャルリアリティ学会 学術奨励賞、1997年3月17日。
71. 苗村健、映像情報メディア学会 藤尾記念賞、1997年5月24日。
72. 苗村健、3次元画像コンファレンス 1996年度優秀論文賞、1997年7月9日。
73. 苗村健、電子情報通信学会 学術奨励賞、1998年3月28日。
74. 苗村健、映像情報メディア学会 丹羽高柳賞 論文賞、1999年5月29日。
75. 苗村健、3次元画像コンファレンス 1999年度優秀論文賞、2000年7月5日。
76. 苗村健、5th World Multi-Conference on Systematics, Cybernetics and Informatics, The best paper in the session、2001年8月28日。
77. 苗村健、電子情報通信学会 FIT2003 論文賞、2003年9月11日。
78. 苗村健、11th Workshop on Interactive Systems and Software (WISS2003) 対話発表賞、2003年12月5日。
79. 苗村健、Visual Computing/ グラフィックスとCAD 合同シンポジウム2004、グラフィックスとCAD 研究会 優秀研究発表賞(GCAD 賞)、2004年。
80. 苗村健、DiVA 芸術科学会展 第2回大賞、2004年5月20日。
81. 苗村健、3次元画像コンファレンス 2003年度優秀論文賞、2004年6月30日。
82. 苗村健、Pacific Graphics 2004 Best Paper Award、2004年10月8日。
83. 苗村健、ASIA DIGITAL ART AWARD インタラクティブアート部門優秀賞、2004年10月29日。

84. 苗村健、芸術科学会 第3回論文賞、2004年12月12日。
85. 苗村健、NHK デジタルスタジアム デジスタアワード2004 ゴールデンミュージック(年間最優秀作品)賞、2004年12月23日。
86. 苗村健、第5回SICEシステムインテグレーション部門講演会 ベストセッション講演賞、2004年12月29日。
87. 馬場章、第1回ゲーム作品コンペティション アカデミック部門 最優秀賞、ゲーム大会、2003年12月。
88. 水越伸、電気通信普及財団 テレコム社会科学賞奨励賞、1993年。(吉見俊哉・若林幹夫とともに)
89. 森武俊、日本機械学会 優秀講演 2002、2002年。(日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02における優秀講演 2P1-K04:生活環境センサネットワーク空間において動作する移動台車システムの構築)
90. 森武俊、日本機械学会 優秀講演 2003、2003年。(日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03における優秀講演 1A1-1F-A2 : センシングフロアによる人の識別・追跡)
91. 森武俊、日本ロボット学会 ロボティクスシンポジウム最優秀論文賞 Finalist5、2004年。(原田、伊藤、森、佐藤の第9回ロボティクスシンポジウムでの発表)
92. 森武俊、日本ロボット学会 ロボティクスシンポジウム最優秀論文賞 Finalist5、2004年。(下坂、森、原田、佐藤の第9回ロボティクスシンポジウムでの発表)
93. 森武俊、日本機械学会 畠山賞、2004年。(指導卒業生の瀬川友史が卒業論文と成績優秀により受賞)
94. 安富歩、日本経済新聞社 第40回日経経済図書文化賞、1997年11月。
95. 山内祐平、日本教育工学会 論文賞、2003年10月。
96. 山口いつ子、情報文化学会 情報文化学会賞奨励賞、2002年10月。(「サイバースペース法」研究 - ネット上の情報流通におけるコンテンツ責任に関する制度比較を中心として)
97. 奈良高明、日本バーチャルリアリティ学会 学術奨励賞、1996年。
98. 奈良高明、日本バーチャルリアリティ学会 論文賞、2000年。
99. 奈良高明、計測自動制御学会 日本計測自動制御学会学術奨励賞、2001年。
100. 奈良高明、IEEE IEEE Virtual Reality Best Paper Award、2001年。
101. 奈良高明、計測自動制御学会 The Society of Instrument and Control Engineers Young Author's Award、2002年8月。
102. 奈良高明、日本応用数理学会 論文賞、2003年9月。
103. 伊藤陽一、日本計量生物学会 奨励賞、2004年9月5日。
104. 金相美、The Japan Society for Socio-Information Studies (JSIS) 研究奨励賞(Top Paper Award)、2004年9月。
105. 清原聖子、電気通信普及財団 第17回テレコム社会科学学生賞入賞、2002年3月。
106. 小林真輔、第13回 回路とシステム(軽井沢)ワークショップ実行委員会 第13回 回路とシステム(軽井沢)ワークショップ 論文奨励賞、2004年4月。
107. 堀聖司、コンペティション[onedotzero7] 入選、2003年。(映像作品「REFLECTION OF NOWHERE」)
108. 堀聖司、コンペティション[onedotzero_nippon] 入選、2003年。(映像作品「REFLECTION OF NOWHERE」)

19 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
2000年度	538	48	13
2001年度	548	51	18
2002年度	772	97	46
2003年度	813	100	48
2004年度	745	118	74
5年度間合計	3416	414	199
1999年度以前	289		
2005年度以降	91		
年度不明	134		

注：各種業績をすべて含む。

20 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
5年度間合計	25	13
年度不明	3	

21 東京大学 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 16 年度の活動

COE シンポジウム

1. 第一回 COE 研究拠点設立記念シンポジウム

【開催概要】

日時：平成 16 年 10 月 27 日（水）13:30～17:20

場所：東京大学大講堂（安田講堂）

主催：東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻

参加者：約 1000 名

【成果内容】

本シンポジウムは、本拠点の設立を記念した、第一回目のシンポジウムである。そこで、シンポジウムの登壇者も、ほぼ本研究拠点の推進メンバーにより、本拠点が目指す目標と現状における課題を抽出した。坂村拠点リーダーの基調講演に続いて、本プログラムの 3 つのサブプロジェクトに対応した、3 つのパネルセッションとして、「ユビキタス情報社会を支えるデジタルコンテンツ」と「ユビキタス情報社会を支える社会設計・法制度そして政策」、「ユビキタス情報社会を支える技術基盤と応用」を実施し、各テーマにおける研究の現状について意見交換をした。

2. 第二回 ユビキタス場所情報システム・シンポジウム

【開催概要】

日時：平成 16 年 11 月 16 日（火）14:00～17:00

場所：東京大学大講堂（安田講堂）

主催：東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻、国土交通省

参加者：約 1200 名

【成果内容】

本シンポジウムは本拠点が国土交通省と共同で進めているユビキタスプロジェクトである「自律的移動支援プロジェクト」をテーマとして、国土交通省と共同開催し、社会規模の巨大な情報基盤を構築するときに考えられるさまざまな課題について議論を深めた。将来のユビキタス情報社会における重要な社会基盤のひとつに、「場所」の把握がある。これは、応用に応じてさまざまな技術の組み合わせが必要であり、またその場での設置に関してもコスト的にも権利的にもまた責任の面からも、関係者が多く非常に複雑な問題が考えられる。多くの場所で、多くの主体により現実的に実施されることを考えると、理想論的モデルが成り立たないことも確実であり、学術ベースでない現実的な対応が重要である。技術的な問題と同程度というより、それ以上に制度的な問題が重いという意味で、場

所の状況把握基盤は、まさに今回の COE に適した主題といえる。その可能性とともに、実現にあたりどのような課題があるかを本シンポジウムでは明らかにすることに成功した。

3. 第三回シンポジウム「だれでもできるためのユビキタス」

【開催概要】

日時：平成 16 年 12 月 4 日（土）13:30～17:00

場所：東京国際フォーラム

主催：東京大学大学院情報学環・T-Engine フォーラム・トロン協会・TRON イネーブルウェア研究会

後援：総務省・国土交通省・経済産業省・文部科学省

参加者：約 350 名

【成果内容】

ユビキタスコンピューティングとは、生活空間のあらゆる場面において、身の回りのあらゆるところに埋め込まれた情報機器のサポートを受けて、究極的には利便性や生活の快適性を増すことを目的としている。この情報機器のサポートを受けられる人にとっては、いつでもどこでも快適な環境となるが、そのサポートを受けられない人にとっては、いつでもどこでも快適でない環境となってしまう。つまり、ユビキタスコンピューティングにおいては、システム更には制度を含めたユビバーサルデザインが不可欠である。そこで、本シンポジウムでは、様々な身体障害をお持ちの方々に参加していただき、現状のユビキタス技術をユニバーサルデザインの観点から評価し、また将来にむけてどういった技術開発や制度設計が必要であるかということを議論した。

4. 第四回シンポジウム「食の安心・安全を実現するユビキタスコンピューティング技術」

【開催概要】

日時：平成 17 年 3 月 2 日（水）14:00～17:00

場所：東京大学武田ホール

主催：東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻

共催：農林水産省

参加者：約 250 名

【成果内容】

近年、食の安全を脅かす事件が次々と発生し、今や、食の安心と安全は国民的な課題となっている。こうした中で、食品トレーサビリティ（food tracability）という取り組みが注目されている。食品のトレーサビリティとは、「生産・処理・加工、流通・販売のフードチェーンの各段階で、食品とその情報を追跡し遡及できること」である。これには、食品の生産履歴や流通履歴を正確に記録し、その情報を消費者が遡及（トレーシング tracing）できるようにすることや、事故の発生時に、すばやくフードチェーンを遡及し

て原因を究明し、問題のある製品を特定し、それらの行き先を追跡（トラッキング tracking）し、迅速に回収できるようにすることが含まれる。こうした取り組みを効率的に行い、更に消費者に対して効果的に情報提供する手段として、ユビキタスコンピューティング技術の活用が期待されている。また、食品中の危害が人間の健康へおよび悪影響を把握したり、あるいはフードチェーンや食品の製造工程において危害を制御するなど、食品安全確保のさまざまな局面において情報技術が寄与しうると考えられる。本シンポジウムでは、食品・農業分野の研究者とユビキタスコンピューティング技術の研究者が共同し、食品トレーサビリティをはじめとして、こうした食の安心・安全を実現する IT に関する議論を深めた。

5. 第五回シンポジウム「ユビキタス情報社会と個人情報保護」

【開催概要】

日時：平成 17 年 3 月 16 日（水）14:00～17:00

場所：東京大学武田ホール

主催：東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻

参加者：約 250 名

【成果内容】

ユビキタス情報社会においても、また既に現在の情報化社会においても、セキュリティやプライバシー情報の保護は重要な課題の一つである。本シンポジウムでは特に、個人情報保護の問題に焦点をあて、技術的問題から法制度、政策の問題を含めて、幅広い観点から学際的な議論を深めた。特に、この 4 月より日本で施行される、個人情報保護法について議論した。

学内をフィールドとしたユビキタス実証実験

1. 複写機の消耗品等の物流効率化実証実験

【実験概要】

期間：平成 16 年 11 月～17 年 1 月

共同実施者：富士ゼロックス株式会社、等

【成果内容】

本実験では、RFID を利用して、事務機器に関する商品・消耗品の供給・回収等の物流業務の効率向上、顧客サービスの向上、環境の保護、資源の有効利用を目指した、物流管理実証実験を実施した。本実験では、富士ゼロックスが、東京大学・本郷キャンパスに配している事務機器、及びそれらに供給する商品・消耗品に、ユビキタス ID センター標準の ucode タグを貼り、ユビキタス ID 基盤システムを介して、情報を管理した。既存の情報収集・管理システムと本実験システムを併用したシステムの運用性を実証した。具体的

には、東京大学・本郷キャンパスの担当者が、ucode タグを読み取ることができる携帯型端末を用いて、事務機器やトナーに付けられた ucode タグを読み取ることで、各機器やトナーの個体管理を効率化することなどが実験された。

2. 医薬品の物流効率化実証実験

【実験概要】

期間：平成 16 年 3 月

共同実施者：東京大学医学部附属病院、三菱ウェルファーマ、ベネシス、スズケン、等

実験対象：注射剤（実験用サンプル） 計 400 本

実験場所：製薬メーカー工場・物流センター（三菱ウェルファーマ、ベネシス）、医薬品卸（スズケン）、東京大学医学部附属病院薬剤部

【成果内容】

本実験では、医薬品流通において RFID を使って、注射剤が工場から出荷され、病院へ入荷されるまでの過程を追跡（トレース）する業務の効率化の上での RFID の実用性を検証した。特に、薬事法の改正に伴い、生物由来製品市販後安全対策の強化として製薬メーカー・卸・医療現場で、製剤名・規格・ロット番号などの販売記録、使用記録の保管管理（保存期間等）が義務化されており、こうした業務の効率化を検証した。

23 国際委員会委員数

区分	国際的な学会・ジャーナルへの関与	その他国際的団体の役員・委員等
延べ人数	90	6

24 政府関係委員会委員数

区分		委員等延べ人数
政府全体		69
内 訳	内閣府	8
	総務省	16
	経済産業省	7
	文部科学省	7
	厚生労働省	5
	国土交通省	4
	農林水産省	2
	外務省	1
	財務省	1
	金融庁	1
	文化庁	3
	特許庁	1
	中央防災会議	3
	日本学術会議	2
原子力安全委員会	1	
最高裁判所	1	
その他	6	

25 地方公共団体関係委員会委員数

区分	委員等延べ人数
地方公共団体関係全体	16
都道府県	11
市区町村	5

26 ジャーナル・国際会議編集

区分	学会誌等編集査読	学術大会等組織運営
延べ人数	48	77
うち国際的なもの	22	50

27 定期刊行物一覧

『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』No.68 (2005年1月), No.69 (2005年3月)

『情報学研究 調査研究編』 No.22 (2005年1月), No.23 (2005年3月)

【出版委員会分については、評価委員会がウェブサイト情報から記述】

ニューズレター『学環学府』No.0 2002.冬~No.9 2005.春

28 留学生数の推移

総表

*各年度5月1日現在数

	修士		博士		研究生		合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	
2004年度	9	11	1	7	3	1	13	19	32
2003年度	6	7	1	4	2	0	9	11	20
2002年度	1	11	1	3	2	0	4	14	18
2001年度	1	9	-	-	0	0	1	9	10
2000年度	1	4	-	-	0	0	1	4	5

29 留学生国籍別一覧

留学生国籍別一覧（2004年5月1日現在）

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
インド		1	1
スリランカ		1	1
タイ	1		1
シンガポール	1		1
フィリピン		1	1
韓国	3	5	8
中国	2	5	7
台湾		3	3
小計	7	16	23
中近東			
イラン	1		1
小計	1	0	1
アフリカ			
コンゴ民主共和国		1	1
小計	0	1	1
オセアニア			
オーストラリア	1	0	1
小計	1	0	1
北米			
アメリカ合衆国	0	1	1
小計	0	1	1
中南米			
ブラジル	1	0	1
小計	1	0	1
ヨーロッパ			
オランダ	1		1
フランス		1	1
ルーマニア	1		1
ブルガリア	1		1
小計	3	1	4
合計	13	19	32

個人業績編

平成17(2005)年3月31日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび2000年度から2004年度までの研究業績を、各自が確認したデータベースの入力内容に基づき、収録しています。各人の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の50音順となっています。

1. 教授
2. 助教授
3. 講師
4. 助手
5. 科学技術振興特任助教授
6. 科学技術振興特任教員(助手)
7. 科学技術振興特任研究員
8. 研究拠点形成特任教員(助手)

荒川 忠一 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

風車の大規模空力および騒音シミュレーション

風車の洋上における超大型化を踏まえて、新しい設計法を提案するために、プロペラを中心とした空力および騒音解析を、地球シミュレータを利用した大規模シミュレーションとして構築している。これまで研究開発を続けてきた、ジェットエンジンなどのターボ機械流れのシミュレーションコードを基準にして、LESをはじめとする最新の乱流モデルを取り込んだ計算手法を確立した。また、風況シミュレーションとの組み合わせにより、最適な風車設置地点の選定を行うことを試みている。

エネルギー経済シミュレーションとヴァナキュラー風車の提案

100 年を単位とした将来のエネルギーシステムを考える時に、化石燃料の著しい減少を前提としたシステムを構築する必要がある。本研究では、自然エネルギーの可能性の評価を定量的に行ない、その普及を図るために、単に経済・技術の側面にとどまらず、風土性やアート性といった感性に重きをおいたデザインなどを提案する。また、東京湾における風車を中心とした環境公園の提言、およびその計画作成に協力する。

流体力学とメディアアートの融合の試み

流体力学とアートの融合を目指した「水キャンバス」・「リキッド・スカルプチャ」の制作といったメディアアートの新しい試みを手がけている。水槽を上昇する 48 あるいは 249 個の気泡運動を利用して、計算機制御された画像を描き出すインスタレーションを研究開発した。単にパターンを描画するのみではなく、インタラクティブ性を持たせて、見学者との対話型で様々な表現を試みることができる。さらに音の情報を組み合わせた新しいメディアアートの制作、また「風のつらら」といった風車を利用した作品作りに研究室として挑戦している。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

矢川元基・奥田洋司編、『計算力学Ⅶ・計算力学における超並列法』、2002 年 4 月、養賢堂。(分担)

小林敏雄編、『数値流体力学ハンドブック』、2003 年 3 月、丸善。(分担)

論文等

H. FUJIWARA, Y. MATSUO and Ch. ARAKAWA, "A Turbulence Model for the Pressure-Strain Correlation Term Accounting for the Effect of Compressibility," *International J. of Heat and Fluid Flow*, 21, 2000, pp. 354-358.【査読有】

松本秀晴・栗山幸介・荒川忠一、「洋上を含む風車の利用のシミュレーションによる近未来評価」、『第 16 回エネルギーシステム・経済・環境コンファレンス講演論文集』、2000 年、pp. 387～392。

荒川忠一・有賀清一・尾登誠一、「アート性を有する風車タワー周りの流れ数値解析」、『日本計算工学会講演論文集』、5 巻、1 号、2000 年、pp. 177～178。

I. Makoto, Ch. Arakawa and H. Matsumiya, "Numerical Simulation of Three Dimensional HAWT WINDMEL III Rotor," *CD-ROM Proceeding of Wind Power 2000*, 2000. (CD-ROM)

飯田誠・荒川忠一・松宮輝、「CFD による水平軸風車の 3 次元流れ解析」、『日本流体力学会講演論文集』、2000 年、pp. 433～434。

荒川忠一・斎藤健児、「連立解法を用いた超並列数値流体アルゴリズムの LES への応用」、『日本機械学会講演論文集』、II 巻、00-1 号、2000 年、pp. 111~112。

飯田誠・荒木健悟・荒川忠一、「擬似圧縮性解法による水平軸風車の数値流体解析」、『日本機械学会講演論文集』、IV 巻、00-1 号、2000 年、pp. 7~8。

宮澤真史・鈴木正己・荒川忠一、「PC クラスターを利用した波力発電用ウエルズタービンの数値解析」、『日本機械学会講演論文集』、IV 巻、00-1 号、2000 年、pp. 29~30。

荒川忠一・松本秀晴・栗山幸介・有賀清一、「エネルギーシミュレーションによる風車普及予測とヴァナキュラー性を有する風車の提案」、『日本機械学会講演論文集』、IV 巻、00-1 号、2000 年、pp. 47~48。

荒川忠一・豊田郁夫、「直交適合格子法による非圧縮性流体解析」、『日本機械学会講演論文集』、IV 巻、00-1 号、2000 年、pp. 241~242。

Y. Ooba and Ch. Arakawa, "Large Eddy Simulation Analysis of Lobed Mixer Nozzle," *First International Conference on Computational Fluid Dynamics*, 2000. (CD-ROM)

Ch. Arakawa, K. Saito and K. Shimano, "Massively Parallel Computing with Coupled Algorithm for Introduction of Large-Eddy Simulation," *First International Conference on Computational Fluid Dynamics*, 2000. (CD-ROM)

M. Iida, Ch. Arakawa and H. Matsumiya, "Three Dimensional Flow Analysis of Horizontal Axis Wind Turbine Blade Using Overset Grid Method," *Proceedings of EWEC 21th*, 2000. (CD-ROM)

荒川忠一・飯田誠・松宮輝・有賀清一、「3次元風車数値解析とヴァナキュラー風車の提案」、『第22回風力エネルギー利用シンポジウム講演論文集』、2000年、pp. 104~107。

謝正海・荒川忠一、「カン型燃焼器の反応流に関する数値解析」、『第14回数値流体力学学会シンポジウム』、14巻、2000年、pp. 1~2。

H. Fujiwara, P. Voke and Ch. Arakawa, "LES of TL10 LP Turbine Blade Row," *Proc. of Computational Fluid Dynamics*, 14, 2000, p. 69.

鈴木正己・荒川忠一、「翼まわりの数値シミュレーションと格子依存性」、『第14回数値流体力学学会シンポジウム』、14巻、2000年、p. 97。

今井隆太・荒川忠一、「水銀ターゲットの流体構造連成解析コードの開発II」、『第14回数値流体力学学会シンポジウム』、14巻、2000年、p. 97。

小林謙一・荒川忠一、「水銀ターゲットの流体構造連成解析コードの開発I」、『第14回数値流体力学学会シンポジウム』、14巻、2000年、p. 119。

M. SUZUKI and Ch. ARAKAWA, "Guide Vanes Effect of Wells Turbine for Wave Power Generator," *International J. of Offshore and Polar Engineering*, 10, no.2, 2000.6, pp. 153-159.【査読有】

島野健二郎・浜島義之・荒川忠一、「連立解法による非定常非圧縮性流れの超並列計算」、『日本機械学会論文集』、66巻、651号、2000年11月、pp. 79~85。【査読有】

飯田誠・松宮輝・荒川忠一、「新風力タービン WINDMEL-III の三次元数値シミュレーション」、『機械技術研究所研究発表会 研究発表概要』、2000年12月20日、p. 35。

鈴木正己・荒川忠一、「波力発電用ウエルズタービンの三次元失速と生成機構の推定」、『日本機械学会論文集(B)』、67巻、662号、2001年、pp. 17~23。【査読有】

荒川忠一・有賀誠一・飯田誠、「ヴァナキュラー風車の提案」、『環境芸術学会論文集』、1 巻、1 号、2001 年、pp. 13～19。
【査読有】

M.Suzuki and C.Arakawa, "Numerical Simulation of 3-D Stall Mechanism on Wells Turbine for Wave Power Generating System," *International J. of Offshore and Polar Engineering*, 11, no.4, 2001, pp. 315-320.【査読有】

飯田誠・荒川忠一、「東京港における風力賦存量の推定」、『ターボ機械』、29 巻、10 号、2001 年、pp. 29～34。【査読有】

Makoto Iida, Chuichi Arakawa and Hikaru Matsmiya, "Three-Dimensional Navier-Stokes Flow-Field Computations through Horizontal Axis Wind Turbine Blade," *AIAA-Paper*, 2001-0058, 2001, pp. 340-346.

飯田誠・荒川忠一・松宮輝、「水平軸風車 WINDMELⅢの Navier-Stokes 解析」、『日本機械学会 2001 年度年次大会講演論文集(Ⅱ)』、2001 年、pp. 317～318。

貞住武志・飯田誠・荒川忠一・松宮輝、「モデル風車の数値解析」、『日本機械学会 2001 年度年次大会講演論文集(Ⅱ)』、2001 年、pp. 319～320。

飯田誠・荒川忠一・有賀清一、「東京湾における風力エネルギー賦存量の推算と環境公園」、『23 回風力エネルギー利用シンポジウム講演論文集 2001』、2001 年、pp. 199～202。

飯田誠・荒川忠一・松宮輝、「水平軸風車の三次元シミュレーション」、『第 23 回風力エネルギー利用シンポジウム講演論文集 2001』、2001 年、pp. 80～83。

松宮輝・小垣哲也・飯田誠・稲葉隆成、「小型風力タービン用翼型および翼型データベースの開発」、『第 23 回風力エネルギー利用シンポジウム講演論文集 2001』、2001 年、pp. 84～87。

飯田誠・荒川忠一・松宮輝、「水平軸風車の三次元非定常数値解析」、『第 15 回数値流体力学シンポジウム講演論文集』、2001 年、p. 191。

神保紘史・荒川忠一・飯田誠・謝正海、「マイクロガスタービンシステムの全体シミュレーションにむけて」、『第 15 回数値流体力学シンポジウム講演論文集』、2001 年、p. 202。

鈴木正己・荒川忠一、「 $k-\epsilon$ モデルによる翼特性の推定と可能性の検討」、『日本機械学会講演論文集(Ⅱ)』、2001 年、pp. 305～306。(No.01-1)

荒川忠一・伊藤隆道・松村誠一郎・鈴木太郎、「視聴覚連繋作用と気泡を用いたインタラクティブサウンドアート」、『情報処理学会研究報告 2001-MUS-43』、43 号、2001 年、pp. 33～38。

Fleig Oliver・鈴木正己・飯田誠・荒川忠一、「風車翼型における低マッハ数域圧縮性数値計算コードの適応性」、『日本機械学会講演論文集(Ⅲ)』、2001 年、pp. 161～162。(No.02-1)

馬場洋一・栗山幸介・松本秀晴・荒川忠一、「気候、経済、技術を考慮した新しい統合モデルの作成」、『エネルギー資源学会第 20 回研究発表会講演論文集』、2001 年、p. 365。

荒川忠一、「風車のシミュレーションとデザイン」、『ターボ機械』、29 巻、9 号、2001 年、pp. 28～33。

Makoto Iida, Chuichi Arakawa and Hikaru Matsumiya, "The Three Dimensional Numerical Simulation of WINDMEL," *EWEC*, 2001.7, Copenhagen, Denmark.

清水大志・君塚肇・蕪木英雄・荒川忠一、「並列分子動力学ステンシルの開発」、『日本計算工学会論文集』、4 巻、22 号、2002 年、pp. 225～230。【査読有】

H. Fujiwara, P. Voke and Ch. Arakawa, "Large Eddy Simulaion of TL10 LP Turbine Blade Row," *Engineering Turbulence Modelling and Experiments*, no.5, 2002, pp. 751-758.【査読有】

松村誠一郎・鈴木太朗・荒川忠一・伊藤隆道、「気泡と音響を用いたインターラクティブアート」、『環境芸術学会論文集』、2号、2002年、pp. 29～36。【査読有】

H. Fujiwara, P. Voke and Ch. Arakawa, "Large Eddy Simulaion of TL10 LP Turbine Blade Row," *Engineering Turbulence Modelling and Experiments*, no.5, 2002, pp. 751-758。【査読有】

鈴木正己・荒川忠一、「波浪エネルギー変換用空気室特性の計算方法」、『日本機械学会講演論文集(Ⅲ)』、2002年、pp. 171～172。(No.02-1)

Masami SUZUKI and Chuichi ARAKAWA, "Design Method of Wave Power Generating System with Wells," *Proceedings of the 12th International Offshore and Poplar Engineering Conference*, 2002, ISOPE, Kitakyushu, pp. 527-533. (CDROM)

浅野裕洋・荒川忠一、「回転振動を伴う円柱周りの流れの抵抗減少の数値解析」、『日本機械学会講演論文集(Ⅲ)』、2002年、pp. 353～354。(No.02-1)

清水 大志・君塚 肇・蕪木 英雄・荒川 忠一、「並列分子動力学ステンシルの開発」、『日本計算工学会論文集』、論文番号 20020015、2002年。URL:<http://homer.shinshu-u.ac.jp/jscses/>

Chuichi Arakawa, Seiichi Ariga and Makoto Iida, "Proposal of Vernacular Design for Wind Turbine," *Journal of Wind Engineering and Industrial Aerodynamics*, no.90, 2002.4, pp. 1731-1741。【査読有】

Makoto Iida, Chuichi Arakawa and Hikaru Matsumiya, "Effect of the Tower against the Blade," *2002 Global Windpower Conference and Exhibition*, VC3.17, 2002.4, France.

飯田誠・荒川忠一、「東京湾における風力発電」、『第2回風力エネルギー利用総合セミナー』、2002年6月。(招待講演)

Makoto Iida and Chuichi Arakawa, "Three Dimensional Wind Turbine Simulation of Interference of Blade and Tower," *International Conference on Computational Fluid Dynamics 2*, 2002.7, Sydney, pp. 661-666.

Makoto Iida, Chuihi Arakawa and Hikaru Matsumiya, "Computational Simulation of the Horizontal Axis Wind Turbine with the Tower," *2002 Worldwide Energy Conference*, VD1.35, 2002.7, Germany.

Fleig Oliver・鈴木正己・飯田誠・荒川忠一、「風車翼型における低マッハ数域圧縮性数値計算コードの適応性」、『日本機械学会講演論文集』、02-1、2002年9月、pp. 161～162。

Oliver Fleig, Makoto Iida and Chuichi Arakawa, "Aeroacoustics Simulation around a wind turbine blade using Compressible LES and Linearized Euler Equations," *DGLR-Report 2002-03*, 2002.10, Proceedings LES for Acoustics, Goettingen, Germany.

荒川忠一・飯田誠、「風車のシミュレーション」、『日本数値流体力学会誌』、10巻、4号、2002年11月、pp. 293～299。【査読有】

Makoto Iida, Chuichi Arakawa and Hikaru Matsumiya, "Numerical Fluid Analysis of Horizontal Axis Wind Turbine with Tower," *The Fifth JSME-KSME Fluids Engineering Conference*, 2002.11, Japan, 6pp.

荒川忠一・飯田誠、「日本の洋上風力開発に向けて」、『第24回風力エネルギー利用シンポジウム基調講演』、2002年11月、pp. 47～51。

塗師康輔・葛西真吾・戸田和之・山本誠・飯田誠・荒川忠一、「風車翼における着氷現象の数値計算」、『第16回数値流体力学シンポジウム』、D28-4、2002年12月、pp. 165～172。

Oliver Fleig and Chuichi Arakawa, "Aeroacoustics Simulation around a wind turbine blade using Compressible LES and Linearized Euler Equations," *Proceedings of FEDSM'03, CD-ROM, 4th ASME-JSME Joint Fluids Engineering Conference*, 2003, Honolulu, Hawaii。【査読有】(CD-ROM)

鈴木正己・Oliver FLEIG・貞住武志・飯田誠・荒川忠一、「非圧縮と圧縮性数値計算コードによる風車翼形の特性予測」、『日本機械学会論文集(B)』、69 巻、681 号、2003 年、pp. 1067～1072。【査読有】

鈴木正己・荒川忠一、「波力発電用ウエルズタービン形状の選定方法」、『日本機械学会論文集(B)』、69 巻、683 号、2003 年、pp. 1621～1627。【査読有】

Masami SUZUKI and Chuichi ARAKAWA, "Numerical Methods to Predict Characteristics of Oscillating Water Column for Terminator Type of Wave Energy Converter," *Proceedings of the 13th International Offshore and Poplar Engineering Conference, ISOPE, CD-ROM*, 2003, Honolulu, pp. 333-340.【査読有】(CD-ROM)

Oliver Fleig, Makoto Iida, Masami Suzuki and Chuichi Arakawa, "Aerodynamic noise simulation around a wind turbine blade using Compressible LES and Linearized Euler Equations," *7th AICFM*, 2003, The 7th Asian International Conference on Fluid Machinery, Fukuoka. (CD-ROM)

Masami SUZUKI, Chuichi ARAKAWA and Toshiaki SETOGUCHI, "Prediction of Large Scale Wells Turbine Performance by CFD for Wave Power Generating System," *Turbomachinery Society of Japan*, 2003, The 7th Asian International Conference on Fluid Machinery, Fukuoka. (CD-ROM)

Oliver Fleig and Chuichi Arakawa, "Aeroacoustics simulation of wind turbine tip noise using Large Eddy Simulation," *Proceeding of 2nd World Wind Energy Conference*, 2003, Cape Town. (CD-ROM)

Oliver Fleig・Chuichi Arakawa、「圧縮性 LES と線形型オイラー式を用いた風車翼型の騒音予測」、『第 52 回理論応用力学講演会』、2003 年、pp. 403～404。(講演論文)

Oliver Fleig・Chuichi Arakawa、「地球シミュレータを用いた LES 大規模計算による風車翼の流れと騒音予測」、『日本機械学会流体工学部門講演会講演論文集』、2003 年、第 81 期日本機械学会流体工学部門講演会、大阪。(CD-ROM)

荒川忠一・松村誠一郎、「流体とメディアアートの融合と発展---Liquid Sculpture を例にとつて---」、『日本機械学会流体工学部門講演会講演論文集』、2003 年、第 81 期日本機械学会流体工学部門講演会、大阪。(CD-ROM)

Oliver Fleig・Makoto Iida・Chuichi Arakawa、「LES 大規模計算による風車翼 MELIII の流れと騒音予測」、『講演論文集』、2003 年、第 17 回数値流体力学シンポジウム、東京。(CD-ROM)

鈴木正己・鷲尾幸久・窪木利有・荒川忠一、「波力発電システム用浮体型空気室の固定時特性」、『日本機械学会流体工学部門講演会講演論文集』、2003 年。(CD-ROM)

鈴木正己・荒川忠一、「単独翼による数値計算精度と計算領域の検討」、『第 17 回数値流体力学シンポジウム』、D1-6、2003 年、日本流体力学会。(CD-ROM)

飯田誠・荒川忠一、「東京都の風力発電」、『電子情報通信学会 安全性研究会』、2003 年 8 月 26 日、東京都庁。(招待講演)

津田真吾・飯田誠・鈴木正己・荒川忠一、「高精度風車全体計算に向けた重合格子法の評価と検討」、『第 17 回数値流体力学シンポジウム』、D1-4、2003 年 12 月 17 日、東京。(CD-ROM)

有賀清一・荒川忠一・飯田誠・木矢村公介、「東京湾埋立地における風況精査と風況シミュレーション」、『第 17 回数値流体力学シンポジウム』、E4-3、2003 年 12 月 18 日、東京。(CD-ROM)

Oliver Fleig・飯田誠・荒川忠一、「LES 大規模計算による風車翼 MELIII の流れと騒音予測」、『第 17 回数値流体力学シンポジウム』、A5-2、2003 年 12 月 18 日、東京。(CD-ROM)

Oliver Fleig and Chuichi Arakawa, "Large-Eddy Simulation of Tip Vortex Flow at High Reynolds number," *42nd AIAA Aerospace Sciences Meeting and Exhibit*, 2004, Reno.【査読有】

Oliver Fleig and Chuichi Arakawa, "Numerical Simulation of Wind Turbine Tip Noise," *42nd AIAA Aerospace Sciences Meeting and Exhibit*, 2004, Reno.【査読有】

Oliver Fleig, Makoto Iida and Chuichi Arakawa, "Wind Turbine Blade Tip Flow and Noise Prediction by Large-eddy Simulation," *Journal of Solar Energy Engineering*, 126, 2004, pp. 1017-1024.【査読有】(Transactions of the ASME)

Masami SUZUKI and Chuichi ARAKAWA, "Design Method of Wave Power Generating System with Wells Turbine,," *International Journal of Offshore and Polar Engineering, ISOPE*, 14, no.3, 2004, pp. 227-232.【査読有】

FLEIG OLIVER・飯田誠・荒川忠一、「地球シミュレータを用いた風車翼の騒音予測」、『ターボ機械協会第51回総会講演会』、2004年、東京。

FLEIG OLIVER・飯田誠・荒川忠一、「大規模LES計算による風車回転翼まわりの空力および騒音計算」、『日本流体力学会年会2004』、2004年、名古屋。

FLEIG OLIVER・飯田誠・荒川忠一、「LES直接騒音計算による風車翼のシミュレーション」、『日本機械学会2004年度年次大会講演論文集』、2004年、札幌、pp. 135~136。

鈴木正己・荒川忠一、「波力発電用ウェルズタービンのガイドベーン設計法」、『日本機械学会流体工学部門講演会講演論文集』、2004年。(CD-ROM)

井上智弘・岡村聡・飯田誠・荒川忠一・西村隆夫、「エネルギー経済シミュレーションによる洋上風力発電の可能性」、『日本機械学会2004年度年次大会講演論文集(3)』、No04-1、2004年、北海道、pp. 299~300。

井上智弘・飯田誠・荒川忠一、「エネルギー経済シミュレーションによる日本の風力発電賦存量寄与率の評価」、『第25回風力エネルギー利用シンポジウム講演論文集』、2004年、東京、pp. 307~310。

川目宏幸・飯田誠・荒川忠一、「設計ツールに向けたSAモデルを用いた風車翼の3次元解析」、『第18回数値流体シンポジウム』、C1-1、2004年、東京。

新宮泰弘・飯田誠・荒川忠一、「風車翼型を対象としたDESとLESの比較」、『第18回数値流体シンポジウム』、A9-2、2004年、東京。

有賀清一・荒川忠一・飯田誠・高山糧、「東京湾埋立地の風況シミュレーションと複合現実感を用いた流れの可視化」、『第18回数値流体シンポジウム』、C1-4、2004年、東京。

加藤太一・臼井英之・竹沢葵・谷本吏・荒川忠一・伊藤隆道、「風の氷柱-風とのインタラクションを持つイルミネーションアート」、『2004年度芸術科学大会発表予稿集』、2004年、東京。

加藤太一・荒川忠一、「ころころデジタルゲーム(c)」における紙芝居を用いた導入の試み」、『日本シミュレーション&ゲーミング学会2004年度秋季全国大会発表論文集』、2004年、東京、pp. 79~80。

Oliver Fleig, Makoto Iida and Chuichi Arakawa, "Prediction of Wind Turbine Tip Noise using Large Eddy Simulation," *2004 EWEC*, 2004, London, UK. (CD-ROM)

Oliver Fleig, Makoto Iida and Chuichi Arakawa, "Flow and Noise Prediction of Horizontal Axis Wind Turbines with Large-Scale Simulation on Earth Simulator," *WVEC 2004*, 2004, Wind Power Asia 2004, Beijing, China, pp. 1-4. (CD-ROM)

Masami SUZUKI, Chuichi ARAKAWA and Shigeo Takahashi, "Performance of Wave Power Generating System Installed in Breakwater at Sakata Port in Japan," *Proceedings of the 14th International Offshore and Polar Engineering Conference*, 2004, ISOPE, Toulon, pp. 202-209. (CDROM)

Masami SUZUKI and Chuichi ARAKAWA, "Flow on Blades of Wells for Wave Power Generation," *Proceedings of International Conference on Advanced Optical Diagnostics in Fluids*, 2004, Solids and Combustion(VSJ-SPIE04). (CD-ROM)

Taichi KATO and Chuichi ARAKAWA, "Effects of 'Solid Computing' game among elementary school children," *International Simulation And Gaming Association*, 2004, Munich.

S.Ariga, C.Arakawa and M.Iida, "Simulation of Wind over Tokyo Bay Area for Construction of Wind Turbines," *World Renewable Energy Congress VIII*, 2004, Denver, p. 569.

FLEIG OLIVER・飯田誠・荒川忠一、「騒音直接計算を用いた風車翼の騒音低減について」、『2004年度宇宙航空研究開発機構シンポジウム』、2004年6月、東京、p. 12。

飯田誠・高橋優・FLEIG OLIVER・荒川忠一、「風車後流の数値シミュレーション」、『日本機械学会2004年度年次大会講演論文集』、2004年9月、北海道、pp. 137~138。

鈴木正己・荒川忠一、「波力発電における実証実験データの解析方法」、『日本機械学会2004年度年次大会講演論文集(2)』、No.04-1、2004年9月、pp. 121~122。

鈴木正己・荒川忠一、「波力発電用ウェルズタービンのガイドベーン特性(第2報, ロータ, ガイドベーン間隔の影響)」、『日本機械学会2004年度年次大会講演論文集(2)』、No.04-1、2004年9月、pp. 123~124。

Oliver FLEIG・飯田誠・鈴木正己・荒川忠一、「LES大規模計算による風車翼の流れと騒音予測(第1報, 単独翼実験データとの検証)」、『日本機械学会論文集B編』、171巻、701号、2005年、pp. 177~183。【査読有】

Oliver FLEIG・飯田誠・荒川忠一、「LES大規模計算による風車翼の流れと騒音予測(第2報, 翼端に着目した風車翼の空力騒音低減について)」、『日本機械学会論文集B編』、171巻、701号、2005年、pp. 184~190。【査読有】

N.Fujisawa, Y.Asano, C.Arakawa and T.Hashimoto, "Computational and experimental study on flow around a rotationally oscillating circular cylinder in a uniform flow," *Journal of Wind Engineering and Industrial Science*, 93, 2005, pp. 137-153. 【査読有】

Chuichi Arakawa, Oliver Fleig, Makoto Iida and Masakazu Shimooka, "Numerical Approach for Noise Reduction of Wind Turbine Blade Tip with Earth Simulator," *Journal of the Earth Simulator*, 2, 2005, pp. 11-33.【査読有】

井上智弘・飯田誠・西村隆夫・荒川忠一、「モデルを用いた日本の風力発電の近未来評価 ~化石燃料0%イニシアチブにおける影響評価~」、『第21回エネルギーシステム・経済・環境コンファレンス講演論文集』、2005年、東京、pp. 167~170。

Makoto Iida, Oliver Fleig, Chuichi Arakawa and Masakazu Shimooka, "Wind Turbine Flow and Noise Prediction by Large Eddy Simulation," *A Collection of the 2001 ASME Wind Energy Symposium Technical Papers Presented at the 43th AIAA Aerospace Sciences Meeting and Exhibit*, AIAA-2005-1188, 2005, Reno,NV, pp. 448-459.

Chuichi Arakawa, Fleig Oliver, Makoto Iida and Masakazu Shimooka, "Prediction of wind turbine tip noise using large eddy simulation with earth simulator," *The 6th KSME-JSME Thermal and Fluids Engineering Conference*, KA.01, 2005, Jeju, KOREA. (CD-ROM)

Toshihiro Inoue, Makoto Iida and Chuichi Arakawa, "Break the Limit of Growth of Wind Energy," *AGS Annual Meeting 2005 Near-Term Steps on the Pathway to Sustainability*, 2005, Boston USA.

一般向けエッセイ等

荒川忠一、「風力発電・環境との調和を目指すウインドファーム」、『デザイン・レビュー2000』、2000年、INAX出版、pp. 387~392。

荒川忠一、「デザイン性豊かなヴァナキュラー風車」、『月刊・エネルギー』、2001年、pp. 60~63。

荒川忠一、「風車のシミュレーションとデザイン」、『クリーンエネルギー』、10巻、12号、2001年、pp. 7~12。

荒川忠一、「風車のパラダイムシフト」、46 巻、2003 年、JOPRE Communication、pp. 1～4。

一般向け講演等

荒川忠一、「風車パラダイム変換」、『日本機械学会 2002 年度年次大会』、2002 年。(基調講演)

荒川忠一、「風車パラダイムシフトと東京湾風車環境公園の提言」、『風力発電ビジネス戦略セミナー2002』、2002 年、地球文明リサーチ・センター。(講演)

荒川忠一、「風力開発の新パラダイム・風車の普及による新しいデザインの機運」、『日本エネルギー学会・新エネルギー部会第 4 回セミナー「風力技術の最前線」』、2002 年。(講演)

荒川忠一、「風車パラダイムシフトと東京湾風車環境公園の提言」、『地球文明リサーチセンター講演』、2002 年。(特別講演)

有賀清一・荒川忠一、「東京ベイエリアにおける「環境公園」の提案」、『環境芸術学会講演会』、2002 年。(講演)

荒川忠一、「洋上風力発電の検討例2(日本の洋上風力開発に向けて)」、『第 24 回風力エネルギー利用シンポジウム』、2002 年。(基調講演)

荒川忠一、「東京湾風車環境公園の提言」、『地球文明リサーチセンター講演』、2002 年。(基調講演)

荒川忠一、「風車パラダイム転換(豊かなデザイン性と超大型風車へ)」、『環境政策研究会』、2003 年。(基調講演)

荒川忠一、「乱流の世界最大規模直接計算とモデリングによる応用計算」、『地球シミュレータ成果報告会』、2003 年。(講演)

荒川忠一、「大強度陽子加速器計画で用いられる核破砕水銀ターゲット内部の大規模並列流体シミュレーション」、『地球シミュレータ成果報告会』、2003 年。(講演)

荒川忠一、「風車の最新科学」、『日本科学未来館・WWF シンポジウム』、2003 年。(招待講演)

Chuichi Arakawa, Seiichi Ariga and Makoto Iida, "Wind Turbines in Tokyo Metropolitan Area," *AGS (Alliance for Global Sustainability) symposium*, 2003.

荒川忠一、「風力発電について(学際情報による風車パラダイムシフト)」、2003 年、東京都港湾局。(招待講演)

荒川忠一、「乱流の世界最大規模直接計算とモデリングによる応用計算」、『日本原子力学会総会講演会』、2003 年。(講演)

荒川忠一、「大強度陽子加速器計画で用いられる核破砕水銀ターゲット内部の大規模並列流体シミュレーション」、『日本原子力学会総会講演会』、2003 年。(講演)

荒川忠一、「自然エネルギーと風車」、『若狭路博 2003 記念ビジュアルシンポジウム』、2003 年。(招待講演)

荒川忠一、「新しい風が吹く(風車研究の現在)」、『第 10 回全国風サミット(岩手県浄法寺町)』、2003 年。(基調講演)

荒川忠一、「風力発電のパラダイムシフト(デザイン・経済・環境をキーワードに)」、『日本機械学会講習会「日本風力発電の現状と将来」』、2004 年。(招待講演)

荒川忠一、「風力利用」、『第 53 回理論応用力学講演会「各種自然エネルギー有効利用の現状と将来予測」』、2004 年。(講演)

荒川忠一、「東京かざぐるまのひみつ(風車はどうしてまわるのだろう)」、『大井町プロジェクト立会小学校講演会』、2004年。(招待講演)

荒川忠一、「風力の普及状況と今後について」、『ターボ機械講習会「風力発電:日本における風力発電の現状および課題と対策」』、2004年。(講演)

池内 克史 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

大型有形文化財のメディアコンテンツ化

大型有形文化財をTVカメラや距離センサーなどの入力機器により観測し、データ処理し、サイバー空間のコンテンツ化し、これを高品位表示する手法を開発している。本年度までに、鎌倉、奈良、タイなどの大仏やカンボジアアンコール遺跡内、バイヨン寺院を複数の方向から観測し、開発した手法でデジタルコンテンツを作成してきた。コンテンツ作品の一部は、九州国立博物館などの常設展示物として展示されている。

実演教示に基づくロボットの行動学習

ロボットの行動を簡単にプログラムする方法として、人間がお手本となる行動を示し、ロボットがそれを観察し理解することによって新たな行動を学習する実演に基づく教示について研究を行っている。これまで、機械部品組み立て、日常の手作業、ひもむすび動作、おどろき動作などのドメインで手法の適用に成功した。とくに、ニューマノイドロボットを使用した日本の民謡の学習は、ヒューマノイドをもちいた無形文化財の保存にも有用である。

ITS(高度交通システム)のための視覚センサの技術開発

人と車と情報の流れをコントロールすることで、安全・安心・環境・利便といった面から満足の行くすみやすい社会を形作ることを目的とする高度交通システム(ITS)の研究の枠組みで、情報収集手段としてのセンサのあり方についての研究を行っている。特に、コンピュータビジョンの手法を用いて車種判別したり、駐車車両を計数したり、デジタル地図を簡単に構築する手法を現在開発している。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

Katsushi Ikeuchi and Yoichi Sato, "Modeling from Reality," *Kluwer Academic Press (Springer Press)*, 2001.11.

論文等

Kentaro Kawamura, Kiminori Hasegawa, Y Someya, Yoishi Sato and Katsushi Ikeuchi, "Robust localization for 3D object recognition using local EGI and 3D template matching with M-estimators," *IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA2000)*, 2000.4, IEEE, pp. 1848-1855.【査読有】

Jun Takamatsu, Hirohisa Tominaga, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Symbolic Representation of Trajectories for Skill Generation," *IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA2000)*, 4, 2000.4, IEEE, pp. 4077-4082.【査読有】

河村憲太郎・Mark D. Wheeler・山下修・佐藤洋一・池内克史、「メッシュモデルとM-推定法に基づく配電器材の位置推定手法」、『日本ロボット学会誌』、18巻、4号、2000年5月、pp. 600～611。【査読有】

佐藤いまり・林田守宏・佐藤洋一・池内克史、「境下での画像生成:基礎画像の線形和による高速レンダリング手法」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、Vol.CVIM-122、2000年5月、pp. 65~72。

Alberto Broggi, Katsushi Ikeuchi and Charles E. Thorpe, "Special Issue on Vision Applications and Technology for Intelligent Vehicles:Part I- Infrastructure," *IEEE Transactions on Intelligent Transportation Systems*, 1, no.2, 2000.6, pp. 69-71.【査読有】

Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Spatio-Temporal analysis of omni image," *論文(論文集・図録等書籍内の論文)*, 2, 2000.6, IEEE, pp. 577-584.【査読有】

Takuji Takahashi, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Arbitrary View Position and Direction Rendering for Large-Scale Scenes," *IEEE International Conference on Computer Vision ICCV*, 2, 2000.6, IEEE, pp. 296-303.【査読有】

Shunsuke Kamijo, Yasusyuki Matsushita, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Traffic Monitoring and Accident Detection at Intersections," *IEEE Transactions on Intelligent Transportation Systems*, 1, no.2, 2000.6, IEEE, pp. 108-118.【査読有】

小川原光一・射場総司・田貴富和・木村浩・池内克史、「9眼ステレオとデータグローブを用いたロボットによる人間行動の認識と再現」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2000-CVIM-122、2000年6月、pp. 57~64。

Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Automatic 3D city construction system using omni camera," *International Conference on Multimedia and Expo 2000*, 2000.7.【査読有】

斉藤めぐみ・佐藤洋一・池内克史、「赤外光の偏光解析とその透明物体の形状モデリングへの応用」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2000)』、1巻、2000年7月、電子情報通信学会、pp. 95~100。【査読有】

佐藤いまり・林田守宏・甲斐郁代・佐藤洋一・池内克史、「複合現実感における光学的整合性の実現:基礎画像の線形和による高速レンダリング手法」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2000)』、2000年7月、電子情報通信学会、pp. 107~112。【査読有】

高松淳・富長裕久・木村浩・池内克史、「視覚を用いた基本組み立て動作要素の抽出」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2000)』、1巻、2000年7月、電子情報通信学会、pp. 173~178。【査読有】

上條俊介・松下康之・池内克史・坂内正夫、「時空間 Markov Random Filed モデルによる隠れにロバストな車両トラッキング」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2000)』、II巻、2000年7月、電子情報通信学会、pp. 379~384。【査読有】

Katsushi Ikeuchi, "Modeling from reality, Y.J. Zhang, (ed) ICIG'2000, Conf. on Image and Graphics," *Journal of Image and Graphics (JIG)*, 5, 2000.8, pp. 22-28.【査読有】

池内克史、「人間の把持行動観察によるロボットの把持戦略の生成」、『日本ロボット学会』、18巻、6号、2000年8月、pp. 792~797。【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Soshi Iba, Tomikazu Tanuki, Yoshihiro Sato, Akira Saegusa, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Acquiring hand-action models in task and behavior levels by a learning robot through observing human demonstrations," *Humanoids2000 The First IEEE-RAS International Conference on Humanoid Robots*, 2000.9, IEEE.【査読有】

Takuji Takahashi, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Expanding Possible view point of Virtual Environment Using Panoramic Images," *IAPR 15th International Conference on Pattern Recognition(ICPR 2000)*, 2000.9, IAPR.【査読有】

Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "EPI Analysis of Omni-Camera Recognition," *IAPR 15th International Conference on Pattern Recognition(ICPR 2000)*, 2000.9, IAPR.【査読有】

Michihiro Murao, Yasuyuki Matsushita, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Visualization of Traffic Conditions for Drivers," *International Workshop on Urban 3D and Multi-Media Mapping(UM3'2000)*, 2000.9.【査読有】

Shunsuke Kamijo, Yasuhiro Matsushita, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Traffic Monitoring at an Intersection utilizing Occlusion Robust Vehicle Tracking Method," *The 3rd International Workshop on Urban 3D and Multi-Media Mapping(UM3'2000)*, 2000.9.【査読有】

Shunsuke Kamijo, Yasuyuki Matsushita, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Occlusion Robust Tracking utilizing Spatio-Temporal Markov Random Field Model," *IAPR 15th International Conference on Pattern Recognition(ICPR 2000)*, 2000.9, pp. 142-147.【査読有】

Daisuke Miyazaki, Megumi Saito, Yoichi Sato and Katsushi Ikeuchi, "Shape Measurement of Transparent Objects using Polarization and Geometrical Characteristics," *情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)*, 2000.9, pp. 33-42.

小川原光一・射場総司・田貫富和・木村浩・池内克史、「データグローブとステレオビジョンを用いた注視点解析に基づく人間作業のモデル化手法」、『第 18 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2000)』、2 巻、2000 年 9 月、pp. 855~856。

佐藤啓宏・木村浩・池内克史、「教示動作の視覚処理に基づく物体の機能情報の抽出」、『第 18 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2000)』、3 巻、2000 年 9 月、pp. 1305~1306。

Daisuke Miyazaki, Takeshi Oishi, Taku Nishikawa, Ryusuke Sagawa, Ko Nishino, Takashi Tomomatsu, Yutaka Takase and Katsushi Ikeuchi, "The Great Buddha Project: Modelling Cultural Heritage through Observation," *VSM2000 (6th international conference on virtual systems and multimedia)*, 2000.10, pp. 138-145.【査読有】

Masataka Kagesawa, Arihiro Nakamura, Katsushi Ikeuchi and Hiroaki Saito, "Local-feature based vehicle class recognition in infra-red images using parallel vision board," *2000 IEEE International Conference on Intelligent Transportation Systems(ITSC2000)*, 2000.10, IEEE.【査読有】

R. Sagawa, K. Okada, S. Kagami, M. Inaba and H. Inoue, "Incremental Mesh Modeling and Hierarchical Object Recognition using Multiple Range Images," *2000 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2000)*, 1, 2000.10, pp. 88-95.【査読有】

Koichi Ogawara, Soshi Iba, Tomikazu Tanuki, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "ecognition of human task by attention point analysis," *International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2000)*, 3, 2000.11, pp. 2121-2126.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Yutaka Takase, Takashi Tomomatsu, Ko Nishino, Ryusuke Sagawa, Taku Nishikawa, Takashi Oishi and Daisuke Miyazaki, "Applying MFR(modelling-from-reality) for Cultural Heritage Preservation," *Korea-Japan Joint Workshop on Network Based Human Friendly Mechatronics and Systems(2000)*, 2000.11, pp. 66-70.

Katsushi Ikeuchi, Yutaka Takase, Ko Nishino, Ryusuke Sagawa, Daisuke Miyazaki and Takashi Oishi, "Modelling Cultural Heritage through Observation," *7th International Display Workshop*, 2000.11, pp. 1099-1102.【査読有】

Jun Takamatsu, Hirohisa Tominaga, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Extracting Manipulation Skills from Observation," *2000 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2000)*, 1, 2000.11, pp. 584-589.【査読有】

Masataka Kagesawa, Arihiro Nakamura, Katsushi Ikeuchi and Hiroaki Saito, "Vehicle type classification in infra-red images using parallel vision board," *7th World Congress on Intelligent Transport Systems*, 2000.11.【査読有】

Takuji Takahashi, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Virtual Driving System with Real-world Image," *7th World Congress on Intelligent Transportation Systems(ITSW2000)*, 2000.11.【査読有】

Shunsuke Kamijo, Yasuyuki Matsushita, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Occlusion Robust Vehicle Tracking utilizing Spatio-Temporal Markov Random Field Model," *7th World Congress on Intelligent Transport Systems(ITSW2000)*, 2000.11.【査読有】

高橋徹・佐藤洋一・池内克史、「偏光による反射成分の分離および反射パラメータの決定」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告』、2000年11月。

Katsushi Ikeuchi, Yoichi Sato, Ko Nishino, Ryusuke Sagawa, Taku Nishikawa, Takeshi Oishi, Imari Sato, Jun Takamatsu and Daisuke Miyazaki, "Modeling cultural heritage through observation," *The First IEEE Pacific-Rim Conference on Multimedia 2000*, 2000.12, pp. 86-89.【査読有】

上條俊介・松下康之・池内克史・坂内正夫、「時空間 Markov Random Filed モデルによる隠れにロバストな車両トラッキング」、『電子情報通信学会論文誌 D-II』、J83-D-II 巻、12 号、2000 年 12 月、pp. 2597~2609。【査読有】

Kohtarō Ohba, Yoichi Sato and Katsushi Ikeuchi, "Appearance-based visual learning and object recognition with illumination invariance," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence (PAMI2001)*, 12, 2000.12, pp. 189-196.

佐藤いまり・佐藤洋一・池内克史、「物体の陰影に基づく光源環境の推定」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、41 巻、2000 年 12 月、pp. 31~40。

斉藤めぐみ・佐藤洋一・池内克史、「赤外線偏光解析とその透明物体形状モデリングへの応用」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、41 巻、2000 年 12 月、pp. 12~18。

川崎洋・池内克史・坂内正夫、「車載全方位カメラ映像からの建物画像の超解像度化」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-125、2001 年 1 月、pp. 95~102。

Yoichi Sato, Megumi Saito and Hideki Koike, "Real-time input of 3D pose and gestures of a user's hand and its applications for HCI," *IEEE Virtual Reality 2001*, 2001.3, pp. 79-86.【査読有】

Masataka Kagesawa, Shinichi Ueno, Katsushi Ikeuchi and Hiroshi Kashiwagi, "Recognizing Vehicles in Infrared Images Using IMAP Parallel Vision Board," *IEEE Transactions on Intelligent Transportation Systems*, 2001.3, pp. 10-17.【査読有】

Kagesawa Masataka, Ueno Shinichi, Ikeuchi Katsushi and Kashiwagi Hiroshi, "Simultaneous 2D images and 3D geometric model registration for texture mapping utilizing reflectance attribute," *2001 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2, no.1, 2001.3.【査読有】

倉爪亮・マーク D. ウェラー・池内克史、「Parallel Processing of Range Data Merging」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2001 年 3 月、pp. 73~80。

Ryo Kurazume, Mark D. Wheeler and Katsushi Ikeuchi, "Mapping textures on 3D geometric model using reflectance image," *2001 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2001.5.【査読有】

Ryo Kurazume, Mark D. Wheeler and Katsushi Ikeuchi, "Simultaneous 2D images and 3D geometric model registration for texture mapping utilizing reflectance attribute," *2001 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2001.5.【査読有】

Koichi Ogawara, Soshi Iba, Tomikazu Tanuki, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Acquiring hand-action models by attention point analysis," *ICRA2001 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 4, 2001.5, pp. 465-470.【査読有】

西野恒・池内克史、「大規模レンジデータのロバストな同時位置合わせ」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-127、2001 年 5 月、pp. 1~8。

高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「視覚誤差修正能力を有する観察からの組み立て動作理解」、『情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-127、2001年5月、pp. 17~24。

増田智仁・池内克史、「SAIによる三次元形状操作」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-127、2001年5月、pp. 59~65。

浅田稔・池内克史、「ロボット人間の協調動作の実現」、『日本ロボット学会誌』、19巻、4号、2001年6月、pp. 38~49。
【査読有】

池内克史、「Geometry-based Vision と VR の接点」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア』、42巻、SIG6号、2001年6月。【査読有】

佐藤啓宏・小川原光一・田貫富和・木村浩・池内克史、「人間の教示動作の視覚処理に基づく物体機能の抽出」、『ロボティクス・メカトロニクス講演会'01』、Vol.2A1-C12、2001年6月。

Ko Nishino, Zhengyou Zhang and Katsushi Ikeuchi, "Determining Reflectance Parameters and Illumination Distribution from a Sparse Set of Images for View-dependent Image Synthesis," *Proc. of Eighth IEEE International Conference on Computer Vision ICCV '01*, 1, 2001.7, pp. 599-606.【査読有】

Tatsuya Yoshida, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Local-feature Based Vehicle Recognition System Using Parallel Vision Board, Proc. of the 5th World Multiconference on Systemics," *The 8th Congress of the International Colour Association*, 2001.7.【査読有】

Yasuyuki Matsushita, Michihiro Muraio, Shunsuke Kamijo, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Visualization of vehicle activities for traffic monitoring," *The 5th World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics*, 2001.7, pp. 100-108.【査読有】

佐藤いまり・林田 守宏・甲斐郁代・佐藤洋一・池内克史、「実光源環境下での画像生成:基礎画像の線形和による高速レンダリング手法」、『電子情報通信学会論文誌、D-II』、84-D-II巻、8号、2001年8月、pp. 1864~1872。【査読有】

川崎洋・池内克史・坂内正夫、「時空間画像解析を用いた全方位カメラ映像の超解像度化」、『電子情報通信学会論文誌D-II』、84-D-II巻、8号、2001年8月、pp. 1891~1902。【査読有】

Hiroshi Kawasaki, Hiroyuki Aritaki, Takeshi Ooishi, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Image-based rendering for Photo-realistic animation," *SIGGRAPH 2001*, 2001.8, pp. 205-?.

小川原光一、高松淳、木村浩 and 池内克史, "Extraction of fine motion through multiple observations of human demonstration by DP matching and combined template matching," *10th IEEE International Workshop on Robot and Human Interactive Communication*, 2001.9, pp. 8-13.

Hiroshi Kawasaki, Michihiro Muraio, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Enhanced navigation system with real images and real-time information," *第8回ITS世界会議*, 2001.9, シドニー コンベンション&エグジビション センター・ダーリンハーバー, シドニー, オーストラリア.【査読有】

中澤篤志・中岡慎一郎・池内克史、「モーションキャプチャデータからの舞踊動作プリミティブの抽出」、『第19回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2001)』、2001年9月。

倉爪亮・大石岳史・佐川立昌・西野恒・池内克史、「Great Buddha Project -文化遺産のデジタル保存-」、『第19回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2001)』、2001年9月、pp. 23~24。

佐藤啓宏・木村浩・池内克史、「物体機能に基づくロボットの動作記述と実装」、『第19回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2001)』、2001年9月、pp. 289~290。

小川原光一・高松淳・木村浩・池内克史、「人間行動の複数回観察に基づく注視点の発見と行動理解」、『第19回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2001)』、2001年9月、pp. 341~342。

Keni Bernardin, 小川原光一, 木村浩 and 池内克史, "Classification of human actions using sensor gloves and hidden Markov models," 第 19 回日本ロボット学会学術講演会 (RSJ2001), 2001.9, pp. 797-798.

吉田達哉・影澤政隆・池内克史, 「局所特徴認識アルゴリズムによる車両の認識」, 『第 19 回日本ロボット学会学術講演会 (RSJ2001)』, 2001 年 9 月, pp. 1119~1120.

橋本謙太郎・高松淳・小川原光一・池内克史, 「赤外線画像のステレオ処理に基づく手の形状推定」, 『第 19 回日本ロボット学会学術講演会 (RSJ2001)』, 2001 年 9 月, pp. 1283~1284.

吉田達哉・影澤政隆・塘中哲也・池内克史, 「局所特徴認識アルゴリズムによる車両の認識」, 『電子情報通信学会技術研究報告』, 101 巻, 302 号, 2001 年 9 月, pp. 9~14.

Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Refining hand-action models through repeated observations of human and robot behavior by combined template matching," 2001 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2001), 2001.10, pp. 545-550.【査読有】

Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Refining hand-action models through repeated observations of human and robot behavior by combined template matching," 2001 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2001), 2001.10, pp. 545-550.【査読有】

Ryusuke Sagawa, Ko Nishino, Mark D. Wheeler and Katsushi Ikeuchi, "Processing of Range Data Merging," 2001 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2001), 1, 2001.10, pp. 577-583.【査読有】

Tatsuya Yoshida, Masataka Kagesawa, Tetsuya Tomonaka and Katsushi Ikeuchi, "Vehicle Recognition with Local-Feature Based Algorithm Using Parallel Vision," 8th World Congress on Intelligent Transport Systems(ITSW2001), 2001.10.【査読有】

Ko Nishino, Yoichi Sato and Katsushi Ikeuchi, "Eigen-Texture Method: Appearance Compression and Synthesis Based on a 3D Model," IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence (PAMI2001), 23, no.11, 2001.11, pp. 1257-1265.【査読有】

山崎俊太郎・加瀬究・池内克史, 「PC グラフィクスハードウェアを利用した高精度・高速ボリュウムレンダリング手法」, 『CVIM 研究会 2001 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告』, CVIM-130, 2001 年 11 月。

原健二・稲熊伸昭・西野恒・池内克史, 「透視投影における単一画像からの反射パラメータ推定」, 『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』, CVIM-130, 2001 年 11 月, pp. 15~22.

Imari Sato, Yoichi Sato and Katsushi Ikeuchi, "Stability issues in recovering illumination distribution from brightness in shadows," CVPR 2001 IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition, 2001.12, pp. II-400-II-407.【査読有】

池内克史・坂内正夫・川崎洋・高橋拓二・村尾真洋・佐藤いまり・甲斐郁代, 「全方位画像による仮想都市空間の生成」, 『情報処理学会 論文誌: コンピュータビジョンとイメージメディア(CVIM)』, 42 巻, SIG 13 号, 2001 年 12 月, pp. 49~58. 【査読有】

高橋拓二・川崎洋・池内克史・坂内正夫, 「全方位画像を用いた広域環境の自由視点レンダリング」, 『情報処理学会論文誌: コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.42, SIG 13(CVIM3)』, 42 巻, SIG 13 号, 2001 年 12 月, pp. 99~109. 【査読有】

Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Light Field Rendering for Large-Scale Scenes," CVPR 2001 IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition, 2001.12.【査読有】

Ryusuke Sagawa, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Robust and Adaptive Integration of Multiple Range Images with Photometric Attributes," CVPR 2001 IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition, 2, 2001.12, pp. 172-179.【査読有】

Shuntaro Yamazaki, Kiwamu Kase and Katsushi Ikeuchi, "Hardware Accelerated Volume Rendering using Standard PC Graphics Card," *RIKEN Symposium, Integrated Volume-CAD System Research(2001)*, 2001.12.

西野恒・原健二・高橋徹・宮崎大輔・Robby T. Tan・池内克史、「画像にもとづく見えの解析 -文化財のデジタル化に向けて-」、『計測自動制御学会 第2回システムインテグレーション部門学術講演会(SI2001)』、2001年12月、pp. 221~222。

倉爪亮・大石岳史・佐川立昌・西野恒・池内克史、「Great Buddha Project -観察に基づく文化遺産のデジタル保存-」、『情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん 2001)』、2001年12月。

中澤篤志・中岡慎一郎・池内克史、「動きのデジタル保存-舞踊動作のプリミティブ化とヒューマノイドによる再演-」、『情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん 2001)』、2001年12月。

Katsushi Ikeuchi, "Modeling Cultural Heritage through Observation," *The 1st IEEE Int. Sympo. on Signal Processing and Information Technology*, 2001.12, Signal Processing and Information Technology Society, IEEE, IEEE, Cairo, Egypt. (招待講演)

池内克史、「CREST 池内プロジェクト -観察に基づく文化遺産のデジタル保存-」、『第2回システムインテグレーション部門学術講演会(SI2001)』、2001年12月、計測自動制御学会、名古屋工業大学。

池内克史・倉爪亮・西野恒・佐川立昌・大石岳史・高瀬裕、「The Great Buddha Project -大規模文化遺産のデジタルコンテンツ化-」、『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』、7巻、1号、2002年1月、pp. 103~114。【査読有】

Ryo Kurazume, Ko Nishino, Z. Zhang and Katsushi Ikeuchi, "Simultaneous 2D images and 3D geometric model registration for texture mapping utilizing reflectance attribute," *Fifth Asian Conference on Computer Vision(ACCV2002)*, 2002.1。【査読有】

Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Robust Simultaneous Registration of Multiple Range Images," *Fifth Asian Conference on Computer Vision(ACCV2002)*, 2002.1。【査読有】

池内克史・倉爪亮・西野恒・佐川立昌・大石岳史・高瀬裕、「The Great Buddha Project -大規模文化遺産のデジタルコンテンツ化-」、『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』、7巻、1号、2002年1月、pp. 103~113。【査読有】

Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "The Improved Screw Theory using Second Order Terms," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.1, pp. 1614-1618。【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Yutaka Takase, Ryo Kurazume, Takeshi Oishi, Ryusuke Sagawa and Ko Nishino, "Modeling Cultural Heritage through Observation, Int. Sympo. on Artificial Intelligence," *Robotics and Human Centered Technology for Nuclear Applications(AIR'02)*, 2002.1, pp. 26-32. (招待講演)

吉田達哉・シヤミラ モホッタラ・影澤政隆・塘中哲也・池内克史、「CG モデル画像を利用した局所特徴認識アルゴリズムによる車両の認識」、『信学技報 Vol.IE2001』、2002年3月。

増田智仁・倉爪亮・池永美都・西野嘉章・池内克史、「パラメトリック数理モデルの形状評価法の開発」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-132、2002年3月、pp. 69~74。

池内克史、「文化遺産のデジタルアーカイブ」、『日本情報考古学会第13回大会特別講演』、8巻、1号、2002年4月、pp. 687~694。(招待講演)

Yasuyuki Matsushita, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Handling Illumination and Shadow for Video Surveillance," *The Proceeding of First European Conference on Color in Graphics, Imaging, and Vision(CGIV '02)*, 2002.4, University of Poitiers, pp. 153-158。【査読有】

影澤政隆・上野信一・池内克史・栢木寛、「並列画像処理ボード IMAP-vision を利用した赤外線による車両認識システム」、『電子通信情報学会論文誌 基礎・境界』、J85-A 巻、5号、2002年5月、pp. 597~605。【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Generation of a task model by integrating multiple observation of human demonstrations," *ICRA2002 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2002.5.【査読有】

Atsushi Nakazawa, Hirokazu Kato, Shinsaku Hiura and Seiji Inokuchi, "Tracking Multiple People using Distributed Vision Systems," *ICRA2002 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2002.5, pp. 2974-2981.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, "Creating Virtual Reality Models through Observation," *International Conference on Virtual Reality Art and Design Technology*, 2002.5.

上原康彦・倉爪亮・池内克史、「エピポーラ拘束を利用した複数レンジデータのロバストな同時位置合わせ」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-133、2002年5月。

猪狩壮文・タン・ロツピタントウイ・池内克史、「Variable interface filter とスペクトル画像エッジを利用した多波長パノラマ画像の生成」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-133、2002年5月。

佐藤いまり・佐藤洋一・池内克史、「絵画における陰影特徴の解析とその画像合成への応用」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-133、2002年5月。

岡部孝弘・佐藤いまり・佐藤洋一・池内克史、「キャストシャドウを用いた光源推定法: 球面調和関数展開に基づく解析」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-133、2002年5月。

倉爪 亮・西野恒・Mark D. Wheeler・池内克史、「リフレクタンスエッジと濃淡エッジを用いたテクスチャのアラインメント」、『電子情報通信学会論文誌 情報・システム II-パターン処理』、J85-D-II 巻、6号、2002年6月、pp. 1038~1046.【査読有】

小川原光一・高松淳・木村浩・池内克史、「複数教示動作の時系列上での統合に基づく人間作業のモデル化手法」、『情報処理学会論文誌: コンピュータビジョンとイメージメディア』、43巻、SIG4(CVIM4)号、2002年6月、pp. 117~126.【査読有】

Shuntaro Yamazaki, Ryusuke Sagawa, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Micro facet Billboarding," *Eurographics Workshop on Rendering 2002*, 2002.6, pp. 175-186.【査読有】

小川原光一・高松淳・木村浩・池内克史、「プリミティブ動作の模倣に基づく手作業の獲得とプリミティブに基づく作業の認識と再現」、『日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス講演会'02』、2002年6月。

小野晋太郎・影澤政隆・池内克史、「車載レンジセンサによる距離画像からの駐車車両認識システム」、『第8回 画像センシングシンポジウム (SSII2002)』、2002年6月。

吉田達哉・Shirmila Mohottala・影澤政隆・塘中哲也・池内克史、「CGモデル画像を用いた局所特徴認識アルゴリズムによる車両の認識」、『第8回 画像センシングシンポジウム (SSII2002)』、2002年6月。

松下康之・西野恒・池内克史・坂内正夫、「照度の正規化によるロバストな移動物体追跡」、『第3回 知的都市基盤研究グループ研究発表会』、2002年6月、pp. 43~50。

倉爪亮・西野恒・Zhengyou Zhang・池内 克史、「レーザーリフレクタンスとエピポーラ拘束を利用した複数テクスチャの同時アラインメント」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 113~12.【査読有】

宮崎大輔・池内克史、「偏光解析と幾何学的解析に基づく透明物体の表面形状計測」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 263~268.【査読有】

増田智仁・倉爪亮・池水美都・西野嘉章・池内克史、「パラメタ同時推定位置合わせ手法の開発」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 171~176.【査読有】

佐川立昌・西野恒・倉爪亮・池内克史、「大規模観測対象のための幾何形状および光学情報統合システム」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 11～20。【査読有】

原健二・Robby T. Tan・西野恒・中澤篤志・池内克史、「単一カラー画像からの光源位置と光源色の推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 477～482。【査読有】

山崎俊太郎・佐川立昌・川崎洋・池内克史・坂内正夫、「微小面ビルボーディングを用いた複雑なシーンの表示手法」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 127～132。【査読有】

大石岳史・佐川立昌・中澤篤志・倉爪亮・池内克史、「距離画像の誤差分布方向を考慮した反復計算による精度向上手法」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 255～262。【査読有】

佐藤啓宏・木村浩・池内克史、「マルチベースラインステレオによる三次元物体追跡」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 279～284。【査読有】

西野恒・池内克史・張正友、「疎な画像列からの光源状況と反射特性の確定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 21～28。【査読有】

池内克史・中澤篤志・西野恒・小川原光一、「文化遺産のデジタル保存」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 331～340。【査読有】

Shintaro Ono, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Recognizing Vehicles in a Panoramic Range Image," *画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)*, 2002.7, pp. 183-188.【査読有】

松下康之・西野恒・池内克史・坂内正夫、「照明固有空間と頑健なビデオサーベイランスへのその応用」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 253～260。【査読有】

吉田達哉・シャミラ モホッタラ・影澤政隆・池内克史、「CGモデル画像を利用したベクトル量子化による車両認識」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 473～478。【査読有】

中澤篤志・中岡慎一郎・原田貴昭・工藤俊介・池内克史、「視覚による舞踊動作の保存・解析および生成 —舞踊動作のブリミティブ化とロボットを用いた再演—」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 153～158。【査読有】

小川原光一・高松淳・木村浩・池内克史、「複数教示動作の統合に基づく手作業のモデル化手法」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 147～152。【査読有】

佐藤いまり・佐藤洋一・池内克史、「絵画における陰影特徴の解析とその画像合成への応用」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 421～428。【査読有】

岡部孝弘・佐藤いまり・佐藤洋一・池内克史、「キャストシャドウを用いた光源分布推定: 球面調和関数展開に基づく解析」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 461～468。【査読有】

Shuntaro Yamazaki, Kiwamu Kase and Katsushi Ikeuchi, "Non-manifold Implicit Surfaces Based on Discontinuous Implicitization and Polygonization," *Geometric Modeling and Processing 2002*, 2002.7, pp. 138-146.【査読有】

原健二・タン・ロビタントウィ・西野恒・中澤篤志・池内克史、「単一カラー画像からの光源位置と光源色の推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 477～482。【査読有】

松下康之・西野恒・池内克史・坂内正夫、「イントリンシック画像を用いたイルミネーション画像のモデリングとその応用」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、名古屋工業大学、pp. 253～260。【査読有】

西野恒・池内克史、「大規模距離画像群の頑健な同時位置合せ」、『電子情報通信学会論文誌』、J85-DII 巻、9号、2002年9月、pp. 1413～1424。【査読有】

Takeshi Oishi, Tomohito Masuda and Katsushi Ikeuchi, "Digital Restoration of the Cultural Heritages," *The Eighth Inter. Conf. on Virtual Systems and Multimedia(VSMM2002)*, 2002.9, pp. 934-941.【査読有】

Tomohito Masuda, Setsuo Imazu, Tsuyoshi Furuya, Kunihiro Kawakami and Katsushi Ikeuchi, "Shape Difference Visualization for Old Copper Mirrors through 3D Range Images," *The Eighth Inter. Conf. on Virtual Systems and Multimedia(VSMM2002)*, 2002.9.【査読有】

Atsushi Nakazawa, Shinichiro Nakaoka, Shunsuke Kudoh and Katsushi Ikeuchi, "Digital Archive of Human Dance Motions," *The Eighth Inter. Conf. on Virtual Systems and Multimedia(VSMM2002)*, 2002.9.【査読有】

Ko Nishino, Kenji Hara, Robby T. Tan, Daisuke Miyazaki and Katsushi Ikeuchi, "Photometric Aspects on the Preservation of Cultural Assets," *The Eighth Inter. Conf. on Virtual Systems and Multimedia(VSMM2002)*, 2002.9, pp. 926-933.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Ko Nishino and Atsushi Nakazawa, "The Digital Archive of Cultural Heritages -Preservation and Restoration of Ancestral Assets through Observation," *The Eighth Inter. Conf. on Virtual Systems and Multimedia(VSMM2002)*, 2002.9.【査読有】

池内克史、「文化遺産のデジタルアーカイブ」、『情報考古学』、8巻、1号、2002年9月、pp. 18~19.【査読有】

池内克史、「文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法」、『画像電子学会誌(Imaging & Visual Computing)』、31巻、5号、2002年9月、pp. 716~721.【査読有】

吉田達哉・シャミラ・モホッタラ・影澤政隆・池内克史、「CGモデル画像を教師画像とする車両認識システムについて」、『信学技報』、2002年9月。

Ryusuke Sagawa, Takeshi Oishi, Atsushi Nakazawa, Ryo Kurazume and Katsushi Ikeuchi, "Iterative Refinement of Range Images with Anisotropic Error Distribution," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.9, pp. 79-85.【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Modeling Manipulation Interactions by Hidden Markov Models," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.9, pp. 1096-1101.【査読有】

山崎俊太郎・加瀬究・池内克史、「陰関数表面表現の非多様体への拡張、及びその高速な可視化」、『Proc. 2nd RIKEN Symposium on Integrated Volume-CAD System Research』、2002年9月。

Jun Takamatsu, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Correcting Observation Errors for Assembly Task Recognition," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.9.30, IEEE, Lausanne, Switzerland, pp. 232-237.【査読有】

Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Improved Screw Theory using Second Order Term," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.10, pp. 1614-1618.【査読有】

Yoshihiro Sato, Keni Bernardin, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Task Analysis based on observing hands and objects by vision," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.10, pp. 1208-1213.【査読有】

Atsushi Nakazawa, Shinichiro Nakaoka, Katsushi Ikeuchi and Kazuhiro Yokoi, "Imitating Human Dance Motions through Motion Structure Analysis," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.10, pp. 2539-2544.【査読有】

Shuntaro Yamazaki and Kiwamu Kase and Katsushi Ikeuchi, "Interactive Visualization of Non-manifold Implicit Surfaces Using Pre-integrated Volume Rendering," *The Tenth Pacific Conference on Computer Graphics and Applications 2002*, 2002.10, pp. 475-476.【査読有】

Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Calculating Optimal Trajectories from Contact Transitions," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.10, pp. 1547-1552.【査読有】

Shunsuke Kudoh, Taku Komura and Katsushi Ikeuchi, "The Dynamic Postural Adjustment with the Quadratic Programming Method.," *2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems(IROS2002)*, 2002.10, pp. 2563-2568.【査読有】

Kiyotaka Hirahara, Mari Matsuda, Shunsuke Kamijo and Katsushi Ikeuchi, "Detection of Street-Parking Vehicles using Line Scan Camera," *9th World Congress on Intelligent Transport Systems and Services (ITSWC2002)*, 2002.10.【査読有】

Shintaro Ono, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Parking-Vehicle Detection System by using Laser Range Sensor Mounted on a Probe Car," *9th World Congress on Intelligent Transport Systems and Services (ITSWC2002)*, 2002.10.【査読有】

Tatsuya Yoshida, Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa, Tetsuya Tomonaka and Katsushi Ikeuchi, "Vehicle Recognition with Local-Feature Based Algorithm using CG Models," *9th World Congress on Intelligent Transport Systems and Services (ITSW2002)*, 2002.10.【査読有】

高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「物体の可能な変位の2次近似式の導出とその応用」、『第20回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2002)』、2002年10月、大阪大学。

森田拓磨・高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「観察によるひも結び動作の学習」、『第20回日本ロボット学会学術講演会』、2002年10月、大阪大学。

園田展人・小川原光一・木村浩・池内克史、「人間からロボットへの日常の把持スキルの伝達」、『日本ロボット学会創立20周年記念学術講演会』、2002年10月、大阪大学。

Tatsuya Yoshida, Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Vehicle Classification System with Local-Feature Based Algorithm Using CG Model Images," *電子情報通信学会論文誌*, E85-D, no.11, 2002.11, pp. 1745-1752.【査読有】

森田拓磨・高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「観察によるひも結び動作の学習」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、135号、2002年11月。

小川原光一・木村浩・池内克史、「実演に基づく教示」におけるロボットビジョンの役割とその応用」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、135号、2002年11月。

橋本謙太郎・小川原光一・高松淳・池内克史、「赤外線画像を用いた視体積交差法による把持形体の認識」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、135号、2002年11月。

佐川立昌・西野恒・池内克史、「光学的情報付き距離画像のロバストな適応的統合」、『電子情報通信学会論文誌』、J85-D-II 巻、12号、2002年12月、pp. 1781-1790.【査読有】

Yasuyuki Matsushita, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Realtime estimation of illumination images using Illumination Eigenspace," *Proceedings of IAPR Workshop on Machine Vision Applications 2002(MVA2002)*, 2002.12, pp. 447-450.【査読有】

Kenji Hara, Ko Nishino, Atsushi Nakazawa and Katsushi Ikeuchi, "Estimating Light Position and Surface Reflectance from Specular Reflection under Perspective Projection," *Proceedings of IAPR Workshop on Machine Vision Applications 2002(MVA2002)*, 2002.12, pp. 566-571.【査読有】

Daisuke Miyazaki, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Determining Shapes of Transparent Objects from Two Polarization Images," *Proceedings of IAPR Workshop on Machine Vision Applications 2002(MVA2002)*, 2002.12, pp. 26-31.【査読有】

Robby T. Tan, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Separating Diffuse and Specular Reflection Components based on Surface Color Ratio and Chromaticity," *Proceedings of IAPR Workshop on Machine Vision Applications 2002(MVA2002)*, 2002.12, pp. 14-19.【査読有】

Yasuyuki Matsushita, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Shadow Estimation for Robust Video Surveillance," *IEEE Workshop on Motion and Video Computing*, 2002.12.【査読有】

原健二・西野恒・池内克史、「透視投影と点光源下の鏡面反射からの光源位置と反射特性の推定」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、43 巻、SIG11(CVIM5)、2002 年 12 月、pp. 121~129。

吉田達哉・シャミラ モホッタラ・影澤政隆・池内克史、「CG モデル画像による教師画像を利用した車両認識の試み」、『第 1 回 ITS シンポジウム』、2002 年 12 月。

小野晋太郎・平原清隆・影澤政隆・池内克史、「車載レンジセンサによる路上駐車車両計数システム」、『第 1 回 ITS シンポジウム』、2002 年 12 月。

朱成華・平原清隆・松田真理・上條俊介・池内克史、「ラインスキャンカメラを用いた路上駐車車両の検出」、『第 1 回 ITS シンポジウム』、2002 年 12 月。

園田展人・小川原光一・木村浩・池内克史、「ロボットによる日常の把持スキルの獲得」、『計測自動制御学会 第 3 回システムインテグレーション部門学術講演会(SI2002)』、2002 年 12 月。

中岡慎一郎・中澤篤志・横井一仁・池内克史、「舞踊動作を模倣するロボットの全身動作の生成」、『計測自動制御学会 第 3 回システムインテグレーション部門学術講演会(SI2002)』、2002 年 12 月。

松下康之・西野恒・池内克史・坂内正夫、「健なビデオサーベイランスのための照度不変画像列の生成」、『第 1 回 ITS シンポジウム』、2002 年 12 月、pp. 451~458。

Imari Sato, T. Okabe, Y. Sato and K. Ikeuchi, "Appearance sampling for obtaining a set of basis images for variable illumination," *IEEE International Conference on Computer Vision ICCV*, 2003.1, IEEE International Conference on Computer Vision, pp. 800-807.【査読有】

Imari Sato, Yoichi Sato and Katsushi Ikeuchi, "Illumination from shadows," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 25, no.3, 2003.3, pp. 290-300.【査読有】

池内克史、「CREST 池内プロジェクト概要 - 観察に基づく文化財のデジタル保存 -」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003 年 3 月、東京大学、pp. 1~8。

佐川立昌・増田智仁・大石岳史・西野恒・中澤篤志・倉爪亮・池内克史、「大規模観測対象のための幾何および光学情報の統合」、『情報 処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003 年 3 月、東京大学、pp. 9~18。

宮崎大輔・Robby T. Tan・原健二・池内克史、「光学的アプローチに基づく現実世界のモデル化手法」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003 年 3 月、東京大学、pp. 19~26。

大石岳史・佐川立昌・中澤篤志・倉爪亮・池内克史、「PC クラスタによる大規模距離画像の並列アライメント」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003 年 3 月、東京大学、pp. 27~34。

増田智仁・池内克史、「レンジデータを用いた三次元形状の復元と評価」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003 年 3 月、東京大学、pp. 35~43。

小野晋太郎・川崎洋・池内克史・坂内正夫、「EPI 解析による複数ビデオカメラの画像統合」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003 年 3 月、東京大学、pp. 45~52。

園田展人・Keni Bernardin・小川原光一・木村浩・池内克史、「日常動作における把持の認識とロボットによる再現」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003年3月、東京大学、pp. 61～68。

高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「接触状態を用いたビジョンの誤差修正のための線形解法」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告』、CVIM-137、2003年3月、pp. 69～75。

中岡慎一郎・中澤篤志・横井一仁・池内克史、「舞踊模倣ヒューマノイドロボットにおける脚動作の認識と生成」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003年3月、東京大学、pp. 93～100。

中澤篤志・中岡慎一郎・池内克史、「複数舞踊動作からの個性の抽出および適用」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-137、2003年3月、東京大学、pp. 101～107。

Shinichiro Nakaoka, Atsushi Nakazawa, Kazuhito Yokoi and Katsushi Ikeuchi, "Recognition and Generation of Leg Primitive Motions for Dance Imitation by a Humanoid Robot," *2nd International Symposium on Adaptive Motion of Animals and Machines*, 2003.3, the Campus Plaza Kyoto.

佐川立昌・西野恒・倉爪亮・池内克史、「大規模観測対象のための幾何形状および光学情報統合システム」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア』、44巻、SIG5(CVIM6)号、2003年4月、pp. 41～53。【査読有】

西野恒・池内克史・張正友、「疎な画像列からの光源状況と反射特性の推定」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア』、44巻、SIG5(CVIM6)号、2003年4月、pp. 1～10。【査読有】

池内克史、「文化遺産デジタルアーカイブとデジタル再現」、『人工知能学会誌』、18巻、3号、2003年5月、pp. 242～250。【査読有】

Shuntaro Yamazaki, Kiwamu Kase and Katsushi Ikeuchi, "Hardware-Accelerated Visualization of Volume-Sampled Distance Fields," *2003 International Conference on Shape Modeling and Applications(SMI2003)*, 2003.5, pp. 264-271。【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Acquisition of A Symbolic Manipulation Task Model by Attention Point Analysis," *Advanced Robotics*, 17, no.10, 2003.5。【査読有】

増田智仁・今津節生・Spatana Auethavekiat・古谷毅・池内克史、「同範・同型鏡における差異の視覚化」、『日本文化財科学会第20回大会』、2003年5月、島根県民会館。

Katsushi Ikeuchi, "Overview of the CREST Digital Archiving Project -Digital Archiving of Cultural Heritage through Observation-," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.23, 東京大学生産技術研究所。

Daisuke Miyazaki, Robby T. Tan, Kenji Hara and Katsushi Ikeuchi, "Polarization-based Inverse Rendering from Single View," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.23, 東京大学生産技術研究所。

Robby T. Tan and Katsushi Ikeuchi, "Iterative Framework for Separating Reflection Components of Textured Surface using a Single Image," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.23, 東京大学生産技術研究所。

Katsushi Ikeuchi, Masao Sakauchi, Hiroshi Kawasaki and Shintaro Ono, "Constructing Large-Scale Virtual Environment by Using Panoramic Images," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.23, 東京大学生産技術研究所。

Ryusuke Sagawa and Katsushi Ikeuchi, "Taking Consensus of Signed Distance Field for Complementing Unobservable Surface," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.24, 東京大学生産技術研究所。

Shuntaro Yamazaki, Ryusuke Sagawa, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "View-dependent Geometry for Rendering Rigid, Soft and Cluttered Objects," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.24, 東京大学生産技術研究所。

Atsushi Nakazawa, Shinichiro Nakaoka and Katsushi Ikeuchi, "Digital Archive of Intangible Cultural Properties," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.24, 東京大学生産技術研究所.

Koichi Ogawara, Kentaro Hashimoto, Keni Bernardin, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Acquiring Manipulation Tasks from Observation," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.24, 東京大学生産技術研究所.

Jun Takamatsu, Takuma Morita, Naoya Saga, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Improving State Based Analysis for Learning From Observation," *International Symposium on the CREST Digital Archiving Project*, 2003.5.24, 東京大学生産技術研究所.

Kiyotaka Hirahara and Katsushi Ikeuchi, "Detection of Street-Parking Vehicles Using Line Scan Camera and Scanning Laser Range Sensor," *IEEE Intelligent Vehicle Symposium(IV2003)*, 2003.6.【査読有】

Robby T. Tan, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Illumination Chromaticity Estimation using Inverse-Intensity Chromaticity Space," *CVPR 2003 IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition*, 2003.6.【査読有】

Yasuyuki Matsushita, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Illumination Normalization with Time-dependent Intrinsic Images for Video Surveillance," *CVPR 2003 IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition*, 1, 2003.6, pp. 3-10.【査読有】

平原清隆・シャミラ・モホツタラ・廣田祐一郎・スパタナ・ウアタヴィーキアット・池内克史、「沿道パノラマ画像におけるオブジェクト認識」、『第9回画像センシングシンポジウム(SSII2003)』、2003年6月、パシフィコ横浜。

宮崎大輔・池内克史、「偏光と放物的曲線の解析による透明物体の表面形状計測」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア』、44巻、SIG9(CVIM7)号、2003年7月、pp. 86~93。【査読有】

佐藤いまり・佐藤洋一・池内克史、「絵画の陰影特徴解析に基づく仮想物体の絵画への重ね込み」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア』、44巻、SIG9(CVIM7)号、2003年7月、pp. 132~141。【査読有】

原健二・Robby T. Tan・西野恒・中澤篤志・池内克史、「単一画像からの光源位置・色と表面反射特性の推定」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア』、44巻、SIG9(CVIM7)号、2003年7月、pp. 94~103。【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Estimation of essential interactions to achieve a task by integrating demonstrations," *IEEE International Symposium on Computational Intelligence in Robotics and Automation (CIRA03)*, 2003.7.【査読有】

Atsushi Nakazawa, Shinichiro Nakaoka, Takaaki Shiratori and Katsushi Ikeuchi, "Analysis and Synthesis of Human Dance Motions," *IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI2003)*, 2003.7, National Center of Sciences Building.【査読有】

Takaaki Shiratori, Atsushi Nakazawa and Katsushi Ikeuchi, "Rhythmic Motion Analysis using Motion Capture and Musical Information," *IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI2003)*, 2003.7, National Center of Sciences Building.【査読有】

Jun Takamatsu, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Second Order Approximation of Possible Local Displacement for Curve Objects," *IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI2003)*, 2003.7, National Center of Sciences Building.【査読有】

Yoshihiro Sato, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Recognition of a Mechanical Linkage Based on Occlusion-Robust Object Tracking," *IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI2003)*, 2003.7, National Center of Sciences Building.【査読有】

Atsushi Nakazawa, Shinichiro Nakaoka, Takaaki Shiratori and Katsushi Ikeuchi, "Analysis and Synthesis of Human Motions using Motion Capture," *Sixth International Conference on Humans and Computers(HS2003)*, 2003.8.【査読有】

Shunsuke Kudoh, Taku Komura and Katsushi Ikeuchi, "Dynamic Postural Adjustment for Human Body Model against Large Perturbation," *Sixth International Conference on Humans and Computers(HS2003)*, 2003.8.【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Extraction of Essential Interactions Through Multiple Observations of Human Demonstrations," *IEEE Trans. on Industrial Electronics*, 50, no.4, 2003.8.【査読有】

Shinichiro Nakaoka, Atsushi Nakazawa, Kazuhito Yokoi and Katsushi Ikeuchi, "Leg Motion Primitives for a Humanoid Robot to Imitate Human Dances," *Sixth International Conference on Humans and Computers(HS2003)*, 2003.8, University of Aizu.

Kiyotaka Hirahara・Katsushi Ikeuchi,「Object Detection on Panoramic Laser Range-Image」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2003)』、2003 年 9 月。

楊進華・池内克史,「織布反射のレンダリング方法」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、CVIM-140、2003 年 9 月。

崎田健二・小川原光一・木村浩・池内克史,「視線を利用した人間とロボットの協調作業」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2003)』、2003 年 9 月。

白鳥貴亮・中澤篤志・池内克史,「楽音のリズムを考慮した舞踊動作の解析」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2003)』、2003 年 9 月。

原田貴昭・原健二・中澤篤志・池内克史,「ロボットシミュレータのための材質モデルの自動生成」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2003)』、2003 年 9 月。

朱成華・平原清隆・池内克史,「エピポーラ平面画像解析に基づいた路上駐車車両の検出」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2003 年 9 月。

運天弘樹・池内克史,「テクスチャマッピングと色調補正」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2003 年 9 月、北海道。

朱成華・平原清隆・池内克史,「エピポーラ平面画像解析に基づいた路上駐車車両の検出」、『情報処理学会第 14 回高度交通システム研究会(ITS)』、2003 年 9 月、中央電気倶楽部。

廣田祐一郎・増田智仁・長谷川一英・小川原光一・池内克史,「気球上から取得した三次元形状の歪み補正」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2003)』、2003 年 9 月、東京工業大学。

佐賀直也・高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史,「観察による紐結びの動作学習のための紐の状態認識」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会(RSJ2003)』、2003 年 9 月、東京工業大学。

Atsushi Nakazawa, Shinichiro Nakaoka and Katsushi Ikeuchi, "Synthesize Stylistic Human Motion from Examples," *2003 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2003)*, 2003.9, Taiwan, The Grand Hotel.【査読有】

Jun Takamatsu, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Calculating Possible Local Displacement of Curve Objects using Improved Screw Theory," *2003 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2003)*, 2003.9, Taiwan, The Grand Hotel.【査読有】

Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Hiroshi Kimura and Katsushi Ikeuchi, "Estimation of essential interactions from multiple demonstrations," *2003 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2003)*, 2003.9, Taiwan, The Grand Hotel.【査読有】

Shinichiro Nakaoka, Atsushi Nakazawa, Kazuhito Yokoi, Hirohisa Hirukawa and Katsushi Ikeuchi, "Generating Whole Body Motions for a Biped Humanoid Robot from Captured Human Dances," *2003 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2003)*, 2003.9, Taiwan, The Grand Hotel.【査読有】

楊進華・池内克史、「織布反射のレンダリング方法」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告 (CVIM)』、2003年9月8日、北海道大学。

Kenji Hara, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Determining Reflectance and Light Position from a single Image Without Distant Illumination Assumption," *The 9th International Conference on Computer Vision (ICCV2003)*, 2003.10.【査読有】

Robby T. Tan, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Reflection Components Separation based on Chromaticity and Noise Analysis," *The 9th International Conference on Computer Vision (ICCV2003)*, 2003.10.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Kazuhide Hasegawa and Takeshi Ohishi, "The Great Buddha Project: Modeling Cultural Heritage for VR Systems through Observation," *The second IEEE and ACM International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR2003)*, 2003.10, pp. 7-16.【査読有】

山崎俊太郎・佐川立昌・川崎洋・池内克史、「視点依存の微小面を用いた複雑な表面形状をもつ物体の表示手法」、『電子情報通信学会論文誌 D-II』、J86-D-II 巻、2003年10月、pp. 1441~1449。【査読有】

Tomohito Masuda, Setsuo Imazu, Supatana Auethavekiat, Tsuyoshi Furuya, Kunihiro Kawakami and Katsushi Ikeuchi, "Shape difference visualization for ancient bronze mirrors through 3D range images," *The Journal of Visualization and Computer Animation*, 2003.10, pp. 183-196.【査読有】

中岡慎一郎・中澤篤志・横井一仁・池内克史、「シンボリックな動作記述を用いた舞踊動作模倣ロボットの実現」、『電子情報通信学会 ニューロコンピューティング研究会』、2003年10月。

Daisuke Miyazaki, Robby T. Tan, Kenji Hara and Katsushi Ikeuchi, "Polarization-based Inverse Rendering from a Single View," *The 9th International Conference on Computer Vision (ICCV2003)*, 2003.10, France, Acropolis Convention Centre. 【査読有】

Robby T. Tan and Katsushi Ikeuchi, "Estimating Chromaticity of Multicolored Illuminations," *The 9th International Conference on Computer Vision (ICCV2003)*, 2003.10, France, Acropolis Convention Centre.【査読有】

Robby T. Tan and Katsushi Ikeuchi, "Separating Reflection Components of Textured Surfaces using a Single Image," *The 9th International Conference on Computer Vision (ICCV2003)*, 2003.10, France, Acropolis Convention Centre.【査読有】

Takeshi Oishi, Ryusuke Sagawa, Atsushi Nakazawa, Ryo Kurazume and Katsushi Ikeuchi, "Parallel Alignment of Large Number of Range Images," *The 4th International Conference on 3-D Digital Imaging and Modeling (3DIM)*, 2003.10, Canada, The Banff Centre.【査読有】

Wuhong Wang, Fuguo Hou, Katsushi Ikeuchi and Xuemei Ren, "Computer Aided Dependability Analysis of Vehicle Operation Based on Priority and Even Sequencing," *The IEEE 6th International Conference on Intelligent Transportation Systems (ITSC2003)*, 2003.10, China, Worldfield Convention Hotel.

Keni Bernardin, Koichi Ogawara, Katsushi Ikeuchi and Ruediger Dillmann, "A Hidden Markov Model Based Sensor Fusion Approach for Recognizing Continuous Human Grasping Sequences," *3rd IEEE International Conference on Humanoid Robots*, 2003.10, Germany, University of Karlsruhe.【査読有】

Shunsuke Kudoh and Taku Komura, "G2 Continuous Gait-Pattern Generation for Biped Robots," *IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2003)*, 2003.10, Bally's Las Vegas Hotel.【査読有】

Koichi Ogawara, Kentaro Hashimoto, Jun Takamatsu and Katsushi Ikeuchi, "Grasp Recognition using a 3D Articulated Model and Infrared Images," *IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2003)*, 2003.10, Bally's Las Vegas Hotel.【査読有】

Kiyotaka Hirahara and Katsushi Ikeuchi, "Detection of Street-Parking Vehicles from Panoramic Street Image," *The IEEE 6th International Conference on Intelligent Transportation Systems*, 2003.10, China, Shanghai Worldfield Convention Hotel.【査読有】

Shintaro Ono, Hiroshi Kawasaki, Kiyotaka Hirahara, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Ego-Motion Estimation for Efficient City Modeling by Using Epipolar Plane Image Analysis," *10th World Congress and Exhibition on Intelligent Transport Systems and Services*, 2003.11.【査読有】

阪野貴彦・池内克史、「移動カメラによる時空間画像を用いた車両からのスペキュラ除去」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2003-CVIM-141、2003年11月、pp. 17~23。

原田貴昭・原健二・中澤篤志・斎藤博昭・池内克史、「材質感モデルの自動生成」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2003-CVIM-142、2003年11月。

Shintaro Ono, Hiroshi Kawasaki, Kiyotaka Hirahara, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Ego-Motion Estimation for Efficient City Modeling by Using Epipolar Plane Range Image," *第10回 ITS 世界会議 (ITSWC2003)*, 2003.11, Madrid, Spain.【査読有】

Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Vehicle Class Recognition using 3D Cg," *Ten th ITS World Congress*, 2003.11, Madrid, Spain.【査読有】

シャミラ モホッタラ・影沢政隆・池内克史、「CGモデル画像による教師画像を利用した確率的車種認識手法」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2003年11月、東京大学。

平原清隆・池内克史、「パノラマ距離画像からの路上駐車車両の検出」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2003年11月、東京大学。

小川原光一・高松淳・木村浩・池内克史、「観察に基づく手作業の獲得における視覚の利用」、『情報処理学会論文誌: コンピュータビジョンとイメージメディア』、44巻、SIG17(CVIM8)号、2003年12月、pp. 13~23。【査読有】

小野晋太郎・川崎洋・影沢政隆・池内克史・坂内正夫、「EPI解析を利用した画像統合による都市空間のイメージベースレンダリング」、『第2回 ITS シンポジウム 2003』、2003年12月、京都市サーチパーク。

小野晋太郎・川崎洋・平原清隆・影沢政隆・池内克史、「水平レンジスキャンを利用した自己位置推定による三次元都市モデルの構築」、『第2回 ITS シンポジウム 2003』、2003年12月、京都市サーチパーク。

Kiyotaka Hirahara・ChengHua Zhu・Katsushi Ikeuchi、「Panoramic-View- and Epipolar-Plane- Image Understandings for Street-Parking Vehicle Detection」、『第2回 ITS シンポジウム』、2003年12月、京都市サーチパーク。

王武宏・平原清隆・池内克史、「知的交通基盤におけるデジタル運転行動形成:その概念、アーキテクチャと特徴」、『第2回 ITS シンポジウム 2003』、2003年12月、京都市サーチパーク。

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Kazuhide Hasegawa and Takeshi Oishi, "Digital Presentation and Restoration of Cultural Heritage through Computer Vision Techniques," *13th International Conference on Artificial Reality and Telexistence*, 2003.12.【査読有】(招待講演)

Shuntaro Yamazaki, Katsushi Ikeuchi and Yoshihisa Shinagawa, "Determining Plausible Mapping Between Images without a Priori Knowledge," *Asian Conference on Computer Vision (ACCV2004)*, 1, 2004.1, pp. 408-413.【査読有】

Yuichiro Hirota, Tomohito Masuda, Ryo Kurazume, Koichi Ogawara, Kazuhide Hasegawa and Katsushi Ikeuchi, "Designing a Laser Range Finder which is Suspended Beneath a Balloon," *Asian Conference on Computer Vision (ACCV2004)*, 2, 2004.1, pp. 658-663.【査読有】

Rei Kawakami, Robby T. Tan and Katsushi Ikeuchi, "A Robust Framework to Estimate Surface Color from Changing Illumination," *Asian Conference on Computer Vision (ACCV2004)*, 2, 2004.1, pp. 1026-1031.【査読有】

Akifumi Ikari, Robby T. Tan and Katsushi Ikeuchi, "Separating Illumination and Surface Spectral from Multiple color Signals," *Asian Conference on Computer Vision (ACCV2004)*, 1, 2004.1, pp. 264-269.【査読有】

Daisuke Miyazaki, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Transparent Surface Modeling from a Pair of Polarization Images," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 26, no.1, 2004.1, pp. 73-82.【査読有】

Robby T. Tan, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Separating Reflection Components Based on Chromaticity and Noise Analysis," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 26, no.10, 2004.1, pp. 1373-1379.【査読有】

小野晋太郎・川崎洋・池内克史、「時空間距離画像の提案・考察と街のモデル化への応用」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004年1月、大阪府立大学。

Atsuhiko Banno, Tomohito Masuda and Katsushi Ikeuchi, "Three dimensional visualization and comparison of impressions on fired bullets," *Forensic Science International, Forensic Science International*, 140, no.2 月3日, 2004.3, pp. 233-240.【査読有】

Robby T. Tan, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Color constancy through inverse-intensity chromaticity space," *Optical Society of America*, 21, no.302, 2004.3.【査読有】

Yuichiro Hirota, Tomohito Masuda, Ryo Kurazume, Koichi Ogawara, Kazuhide Hasegawa and Katsushi Ikeuchi, "Flying Laser Range Finder and its data registration algorithm," *IEEE 2004 International Conference on Robotics and Automation*, 2004.4.【査読有】

Shinichiro Nakaoka, Atsushi Nakazawa, Kazuhito Yokoi and Katsushi Ikeuchi, "Leg Motion Primitives for a Dancing Humanoid Robot," *IEEE 2004 International Conference on Robotics and Automation*, 2004.4.【査読有】

Takaaki Shiratori, Atsushi Nakazawa and Katsushi Ikeuchi, "Detecting Dance Motion Structure through Music Analysis," *The 6th International Conference on Automatic Face and Gesture Recognition (FG2004)*, 2004.5.【査読有】

朽津信明・増田智仁・山田陽介・池内克史、「三次元計測に基づくフゴッペ洞窟への光の差し込みのシュミレーション」、『日本文化財団科学会第21回大会』、2004年5月。

山崎俊太郎・池内克史、「不十分な計測情報に基づく実物体の写実的な画像合成」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004年5月、大阪大学。

高松淳・池内克史、「ロボット動作の自動生成のための観察による手作業の抽象化」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004年5月、大阪大学。

Robby T. Tan and Katsushi Ikeuchi, "Illumination Color and Intrinsic Surface Properties -Physics-based Color Analyses from a Single Image-," *情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)*, 2004.5, 大阪大学。

岡本泰英・池内克史、「Sequential Point Clusters: 大規模モデルに対する効率的なポイントベースストレンダリングシステム」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004年5月、大阪大学。

池内克史・中澤篤志・小川原光一・高松淳・工藤俊亮・中岡慎一郎・白鳥貴亮、「民族芸能のデジタルアーカイブとロボットによる動作提示」、『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』、9巻、2号、2004年6月、pp. 14~20.【査読有】

Wuhong Wang・Wei Zhang・Dehui Li・Kiyotaka Hirahara・Katsushi Ikeuchi, "Improved Action Point Model in Traffic Flow Based on Driver's Cognitive Mechanism", 『IEEE The Intelligent Vehicles Symposium (IV'04)』、2004年6月、Parma, Parma University.【査読有】

Hiroki Unten・Katsushi Ikeuchi, "Color Alignment in Texture Mapping of Images under Point Light Source and General Lighting Condition", 『Int. Conf. Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR2004)』、2004年6月、IEEE、Washington DC, USA、Grand Hyatt Washington.【査読有】

高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「ロボットによる実行を目的とした人の組み立て作業の理解 -接触状態遷移からの最適軌道の生成-」、『日本ロボット学会誌』、22巻、6号、2004年7月、pp. 62~73.【査読有】

岡本泰英・山崎俊太郎・池内克史、「Sequential Point Clustersを用いた大規模モデルに対する効率的なポイントベースレンダリングシステム」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

猪狩壮文・Robby T. Tan・池内克史、「Interference filterを用いて取得した反射光スペクトルの光源スペクトル・分光反射率分離」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

猪狩壮文・タン・ロビタントウィ・池内克史、「Interference filterを用いた多波長データ取得のためのスペクトル変換関数の推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

運天弘樹・三橋徹・池内克史、「画像間の色調連続性を保持した3次元幾何モデルのテクスチャリング手法」、2004年7月。【査読有】

大石岳史・佐川立昌・中澤篤志・倉爪亮・池内克史、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

大石岳史・中澤篤志・池内克史、「インデックス画像を用いた複数距離画像の高速同時位置合わせ」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

白鳥貴亮・中澤篤志・池内克史、「モーションキャプチャーと音楽情報を利用した舞踊動作の構造解析」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

増田智仁・廣田祐一郎・長谷川一英・池内克史、「浮遊型レーザーレンジセンサから得られた距離画像の変形位置合わせ」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

小野晋太郎・川崎洋・影沢政隆・池内克史、「時空間距離画像を利用した事故位置推定による効率的な広域空間モデルの構築」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

中岡慎一郎・中澤篤志・横井一仁・池内克史、「人の全身動作をロボットで模倣するための動作プリミティブ」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

中澤篤志・中岡慎一郎・竹村治雄・池内克史、「スケーラブル DP を用いた人間動作のマッチングと生成」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

佐藤いまり・岡部孝弘・佐藤洋一・池内克史、「任意光源下における画像生成のための基底画像の獲得」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

山崎俊太郎・池内克史・品川嘉久、「非拘束自動画像モーフィングを用いた自由視点画像の生成」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

原健二・西野恒・池内克史、「混合球面上分布に基づく光源状況の推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

宮崎大輔・池内克史、「偏光レイトレーシング法による透明物体の表面形状の推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

宮崎大輔・池内克史、「偏光レイトレーシング法による透明物体の表面形状と裏面形状の同時推定の可能性と限界」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

宮崎大輔・池内克史、「偏光レイトレーシング法による透明物体の相互反射の解析」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

川上玲・タン・ロビタントウィ・池内克史、「光源環境の変化を利用した物体の色推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。【査読有】

阪野貴彦・池内克史、「EPI 解析に基づく動画像からの鏡面反射成分の分離」、『画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2004)』、2004 年 7 月、pp. 459~464。【査読有】

工藤俊亮・幸村琢・池内克史、「モーションキャプチャ・データからのパラメタ抽出に基づく強い外乱に対する人体モデルの姿勢制御」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004 年 7 月。【査読有】

崎田健二・小川原光一・木村浩・池内克史、「視線を利用した人間の意図推定に基づく人間とロボットの柔軟な協調作業」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004 年 7 月。【査読有】

長谷川一英・廣田祐一郎・小川原光一・倉爪亮・池内克史、「気球搭載型レーザーレンジセンサ-FLRS(Flying Laser Range Sensor)-」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004 年 7 月。【査読有】

高松淳・佐藤啓宏・木村浩・池内克史、「誤差を考慮した観察による回転ジョイントのパラメタ推定」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004 年 7 月。【査読有】

タン・ロビタントウィ・池内克史、「Intrinsic Properties of an Image with Highlights」、『画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2004)』、2004 年 7 月。【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Masao Sakauchi, Hiroshi Kawasaki and Shintaro Ono, "Constructing Virtual cities by Using Panoramic Images," *International Journal of Computer Vision*, 58, no.3, 2004.7, pp. 237-247.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Kazuhide Hasegawa and Takeshi Ohishi, "Representing Cultural Heritage in Digital Forms for VR Systems through Computer Vision Techniques," *17th International Conference on Pattern Recognition*, 2004.8.【査読有】

佐川立昌, 西野恒 and 池内克史, "Adaptively Merging Large-Scale Range Data with Reflectance Properties," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 2004.8.【査読有】

高松淳・佐藤啓宏・木村浩・池内克史、「視覚誤差にロバストな回転ジョイントのパラメタ推定」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会』、2004 年 9 月。

Wuhong Wang, Qi Cao and Katsushi Ikeuchi, "A novel approach for modeling driver behaviour : driving reliay and safety analysis," *ICTTP 2004, 3rd International Conference on Traffic & Transport Psychology*, 2004.9, UK, Albert Hall.【査読有】

山田陽介・増田智仁・朽津信明・池内克史、「三次元計測データに基づく学術調査・シミュレーション ーフゴッペ洞窟の光源環境に関してー」、『日本バーチャルリアリティ学会 (VRSJ) 第 9 回』、2004 年 9 月、京都大学。

Kenji Sakita, Koichi Ogawara, Shnji Murakami, Kentaro Kawamura and Katsushi Ikeuchi, "Flexible Cooperation between Human and Robot by interpreting Human Intention from Gaze Information," *2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2004.9, Japan, Sendai International Center.【査読有】

Kenji Sakita, Koichi Ogawara, Shnji Murakami, Kentaro Kawamura and Katsushi Ikeuchi, "Flexible Cooperation between Human and Robot by interpreting Human Intention from Gaze Information," *2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2004.9.【査読有】

Yasuyuki Matsushita, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Illumination Normalization with Time-Dependent Intrinsic Imagesfor Video Surveillance," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 26, no.10, 2004.10, pp. 1336-1347.【査読有】

Robby T. Tan, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Separating Reflection Components Based on Chromaticity and Noise Analysis," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 26, no.10, 2004.10, pp. 1378-1379.【査読有】

Shintaro Ono and Katsushi Ikeuchi, "Self-Position Estimation for Virtual 3D City Model Construction with the Use of Horizontal Line Laser Scanning," *International Journal of ITS Research*, 2, no.1, 2004.10, ITS Japan, pp. 67-75.【査読有】

Yasuyuki Matsushita, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi and Masao Sakauchi, "Illumination Normalization with Time-dependent Intrinsic Images for Video Surveillance," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 2004.10, 26 vols., pp. 1336-1347.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Jun Takamatsu, Kazuhito Yokoi and Shinichiro Nakaoka, "Dancing Humanoid:A New Presentation Method for Archived Human Motions," *Japan Korea Joint Workshop on Info-Mechatronic Systems 2004*, 2004.10, pp. 86-92. (招待講演)

Shintaro Ono, Koichi Ogawara, Masataka Kagesawa, Hiroshi Kawasaki, Masaki Onuki, Ken Honda, Keiichi Kenmotsu, Mayumi Sakai, Motomu Tsuji and Katsushi Ikeuchi, "IMAGE GENERATION SYSTEM FOR MIXED-REALITY TRAFFIC EXPERIMENT SPACE," *The 11th World Congress on ITS, Nagoya, Aichi 2004*, 2004.10, ポートメッセなごや.【査読有】

カイリルアズミ, 小野晋太郎, 影沢政隆 and 池内克史, "Automatic Reconstruction of Large-scale Virtual Environment for Intelligent Transportation Systems Simulation," *The 11th World Congress on ITS, Nagoya, Aichi 2004*, 2004.10, ポートメッセなごや.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Jun Takamatsu, Kazuhito Yokoi and Shinichiro Nakaoka, "Dancing Humanoid : A New Presentation Method for Archived Human Motions," *Japan Korea Joint Workshop on Info-Mechatronic Systems 2004*, 2004.10, 東京大学.

池内克史・長谷川一英、「レンジセンサによる三次元計測の動向 —文化遺跡のデジタル保存—」、『日本写真学会誌』、67巻、5号、2004年11月、pp. 457~462.【査読有】

Hiroki Unten and Katsushi Ikeuchi, "観測による項目天像の仮想現実モデルの生成," *10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)*, 2004.11, Gifu, Softopia.【査読有】

katsushi Ikeuchi, "Digitally Archiving Cultural Heritage," *10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)*, 2004.11, Gifu, Softopia. (招待講演)

Katsushi Ikeuchi, Kazuhide hasegawa, Atsushi Nakazawa, Jun Takamatsu, Takeshi Oishi and Tomohito Masuda, "Bayon Digital Archival Project," *10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)*, 2004.11, Gifu, Softopia.【査読有】(最優秀論文賞)

角田哲也・大石岳史・池内克史、「バーチャル川原寺: 拡張現実感のための高速影付け手法」、『10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)』、2004年11月、Gifu、Softopia。【査読有】

中岡慎一郎・中澤篤志・池内克史、「人間型ロボットの全身動作を構築する効率的な手法」、『10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)』、2004年11月、Gifu、Softopia。【査読有】

増田智仁・山田陽介・朽津信明・池内克史、「考古学的調査のための自然光入射のシミュレーション」、『10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)』、2004年11月、Gifu、Softopia。【査読有】

白鳥貴亮・中澤篤志・池内克史、「モーションキャプチャと音楽情報を利用した舞踊動作の構造解析」、『10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)』、2004年11月、Gifu、Softopia。【査読有】

Shunsuke Kudoh, Taku Komura and Katsushi Ikeuchi, "大きな外乱に対する人型モデルの足の踏み出しによるバランス保持動作の生成," *10th International Conference on Virtual Systems and Multimedia (VSMM2004)*, 2004.11, Gifu, Softopia.【査読有】

中澤篤志・中岡慎一郎・白鳥貴亮・工藤俊亮・池内克史、「モーションキャプチャによる全身運動解析と模倣ロボット—「じょんがら」節をHRP-1Sに踊らせる—」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004年11月11日、慶応大学。

高松 淳・小川原 光一・木村 浩・池内 克史、「観察による組み立て作業の模倣」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004 年 11 月 11 日、慶応大学。

松井健・長谷川一英・池内克史、「文化遺産における壁面画の測定に伴う歪み補正」、『情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM)』、2004 年 11 月 12 日、慶応大学。

高松淳・小川原光一・木村浩・池内克史、「動作プリミティブに基づく観察による紐結び作業の理解」、『The Second International Workshop on Man-Machine Symbiotic Systems(2004)』、2004 年 11 月 24 日、京都大学。

運天弘樹・池内克史、「テクスチャマッピングにおける擬似 albedo に基づく色調補正手法 -一点光源下の画像及び一般光源環境での画像への拡張-」、『電子情報通信学会論文誌 情報・システム II-パターン処理』、PT 2, J87-D-II 巻、12 号、2004 年 12 月、pp. 2156~2164。【査読有】

大石岳史・佐川立昌・中澤篤志・倉爪亮・池内克史、「大規模距離画像の同時位置合わせ手法」、『第 70 回 3 次元フォーラム(2004)』、18 巻、4 号、2004 年 12 月、pp. 2~5。

阪野貴彦・長谷川一英・池内克史、「画像列を利用した気球センサーからの 3 次元形状補正」、『第 70 回 3 次元フォーラム(2004)』、18 巻、4 号、2004 年 12 月、pp. 6~11。

宮崎大輔・池内克史、「文化財のデジタル保存のための偏光を用いた透明物体形状計測手法」、『第 70 回 3 次元フォーラム(2004)』、18 巻、4 号、2004 年 12 月、pp. 12~22。

川上玲・タン、ロビタントウィ・池内克史、「文化遺産のデジタル保存のための光源色の変化を用いた物体色推定手法」、『第 70 回 3 次元フォーラム(2004)』、18 巻、4 号、2004 年 12 月、pp. 23~26。

Katsushi Ikeuchi, "Digitally Archiving Cultural Heritage," *Third Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand 2004*, 2004.12, Bangkok, Thailand, National Archives. (招待講演)

Tomohito Masuda, Nobuaki Kuchitsu, Yosuke Yamada and Katsushi Ikeuchi, "Aged Shape Deterioration Visualization Based upon 3D Shape Measurement -Observing Brick Wall in Ayutthaya Relic-," *Third Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand 2004*, 2004.12, Thailand, National Archives.

Keni Bernardin, Koichi Ogawara, katsushi Ikeuchi and Ruediger Dillmann, "A Sensor Fusion Approach for Recognizing Continuous Human Grasping Sequences Using Hidden Markov Models," *IEEE Transactions on Robotics*, 21, no.1, 2005.1, pp. 45-57.【査読有】

小野晋太郎・小川原光一・影沢政隆・川崎洋・大貫正明・本田健・見持圭一・坂井蘭美・辻求・池内克史、「複合現実交通実験空間のためのドライバ周辺環境画像構築システム」、『第 3 回 ITS シンポジウム 2004』、2005 年 1 月、ポートメッセなごや。

カイリルアズミ・小野晋太郎・影沢政隆・池内克史、「広域仮想都市構築のための航空写真影解析による 3 次元情報復元」、『第 3 回 ITS シンポジウム 2004』、2005 年 1 月 22 日。

小川原光一・崎田健二・池内克史、「視線運動からの意図推定に基づいたロボットによる行動支援」、『インタラクション 2005』、2005 年 2 月、東京大学。

Ryusuke Sagawa, Ko Nishino and Katsushi Ikeuchi, "Adaptively Merging Large-Scale Range Data with Reflectance Properties," *IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI)*, 27, no.3, 2005.3, pp. 392-405.【査読有】

Jun Takamatsu, Yasuhiro Uehara, Tomohito Masuda, Atsushi Nakazawa, Katsushi Ikeuchi, Atsuyuki Okabe, Yoshihiro Hayashi, Yasuko Ino, Takao Oka, Koh Nomura, Takashi Amano, Akishinomiya Fumihito, "A Novel Osteometrical Method using Computer Vision Techniques for Comparison of Morphological Differences," *山階鳥学誌*, 36, no.2, 2005.3.【査読有】

増田智仁・山田陽介・朽津信明・池内克史、「三次元計測データによるフゴッペ洞窟内の自然光入射のシミュレーション」、『日本バーチャルリアリティ学会』、10巻、1号、2005年3月。【査読有】

佐川立昌・池内克史、「符号付距離場の整合化による形状モデル補間手法」、『電子情報通信学会論文誌』、88-D-II巻、3号、2005年3月、pp. 541～551。【査読有】

口頭発表等

Katsushi Ikeuchi, "Modeling from Reality," *The third International Conference on Virtual Reality and its Application in Industry (VRAI' 2002)*, 2002.4, P.R. China, Zhejiang University. (招待講演)

Katsushi Ikeuchi, 「Modeling from Reality」, 『IEEE Distinguished Lecture』, 2002年5月30日、Australia、Australian National University. (招待講演)

Katsushi Ikeuchi, 「Modeling from Reality」, 『IEEE Signal Processing Society』, 2002年5月31日、Australia、Huxley theater. (招待講演)

池内克史・中澤篤志、「観察に基づく文化遺産のデジタル保存」、『2002年度画像電子学会年次大会 創立30周年記念コンファレンス 画像電子ミュージアム2002』, 2002年6月。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, "Modeling from Reality: Photometric Aspects," *IEEE Signal Processing Society Distinguished Lecturer*, 2002.6.3, Monash University. (招待講演)

池内克史、「文化・芸術の可視化と文化遺産」、『上智大学総合講座「ビジュアライゼーション」(2002)』, 2002年7月、上智大学。

池内克史・中澤篤志、「観察に基づく文化遺産のデジタル保存」、『第30回可視化シンポジウム』, 2002年7月22日、工学院大学(新宿)。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, 「Modeling from Reality」, 『The 2nd International Conference on Image and Graphics(ICIG2002)』, 2002年8月、中国。(招待講演)

池内克史・中澤篤志・西野恒・小川原光一、「文化遺産のデジタル化」、『平成14年度電気関係学会東海支部連合大会シンポジウム』, 2002年9月、大同工業大学。(招待講演)

池内克史、「文化遺産のデジタルアーカイブ」、『社団法人エレクトロニクス実装学会 第12回マイクロエレクトロニクスシンポジウム(MES2002)』, 2002年10月。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Ko Nishino, Ryusuke Sagawa, Takeshi Oishi and Hiroki Unten, "Modeling from Reality —Creating virtual reality models through observation—," *IS&T/SPIE's 15th Annual Symposium Electronic Imaging Science and Technology*, 2003.1, Santa Clara. (招待講演)

Katsushi Ikeuchi, "Modeling from Reality —Creating virtual reality models through observation—," *第6回歴史民族学博物館国際シンポジウム*, 2003.2, 国立歴史民族博物館。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, "Modeling Cultural Heritage through Computer Vision Techniques," *2003 NAIST COE International Symposium- Ubiquitous Networked Media Computing -*, 2003.3. (招待講演)

Katsushi Ikeuchi, "Object and Task Recognition for Programming-by-Demonstration," *International Workshop on Object Recognition (IWOW)*, 2003.9, NSF/ESPRIT, Taormina, Italy. (招待講演)

池内克史、「文化遺産のデジタル化：「静」と「動」」、『CREST 研究領域「高度メディア社会の生活情報技術」第1回公開シンポジウム』, 2003年10月、アルカディア市ヶ谷。(招待講演)

池内克史、「バイヨン寺院の3D映像紹介と解説」、『第9回アンコール遺跡保存国際シンポジウム「バイヨン—その魅力はどこからくるのか—』、2003年10月、Japanese Government Team for Safeguarding Angkor。(招待講演)

池内克史・坂村健、「デジタル文化都市の創出～アーカイブとユビキタス～」、『eAT KANAZAWA』、2003年12月、金沢市民芸術村。(招待講演)

池内克史、「レーザーセンサーを用いたデジタルアーカイブ」、『中核的研究拠点 COE 形成プログラム「象形文化の継承と創成に関する研究」—五年間の経過と成果報告—』、2004年1月、東京大学。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, "Degital Bayon Archival Project," *International Symposium on the Temple of Bayon*, 2004.2, Japanese Govenment Team for Safeguarding Angkor, Siem Reap, Cambodia. (招待講演)

池内克史、「Digitizing Somma Vesuviana Site」、『アウグストゥスの別荘?—2003年度発掘調査の報告・検討・展望—』、2004年2月。

池内克史、「デジタル大仏のつくり～文化遺産のデジタルコンテンツ化～」、『科学技術振興機構 2004 第1回基礎研究報告会 シンポジウム「IT が変える世界と生活」』、2004年3月、pp. 25～33。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, 「Digital Archiving Intangible Cultural Heritage」、『2004 International Workshop on Human-Computer Interaction』、2004年6月、Taiwan、National Cheng Kung University。(招待講演)

Katsushi Ikeuchi, Atsushi Nakazawa, Kazuhide Hasegawa and Takeshi Ohishi, "Representing Cultural Heritage in Digital Forms for VR Systems through Computer Vision Techniques," *International Symposium on GeoInformatics for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences 2004*, 2004.9, Vietnam, Hanoi University of Science Conference Hall. (招待講演)

Katsushi Ikeuchi, "Digitally archiving cultural heritage," *The 21th Century Computing (21世紀コンピュータ会議)*, 2004.11, Beijing, China, Friendship Hotel. (招待講演)

Katsushi Ikeuch, "Making a humanoid robot to dance from observation instead," *The Korea International Robot Week 2004(韓国ロボット学会)*, 2004.12.1, Korea, COEX. (招待講演)

池内克史、「レンジセンサが開く3次元デジタルアーカイブの世界」、『京機会関東支部第5回総会』、2005年1月、学士会館。(招待講演)

池内克史、「静」と「動」の解析—文化遺産のデジタルコンテンツ化—、『21世紀 COE プログラム「京都アート・エンターテインメント創成」研究拠点シンポジウム—文化財のデジタル保存・モデリングおよびインタラクション—』、2005年1月20日、立命館大学、草津、滋賀県、立命館大学。(招待講演)

池内克史、「デジタル標高モデルを用いたソマ・ベスピアーナ周辺の地形解析」、『アウグストゥスの別荘?—2004年度発掘調査の報告・検討・展望—』、2005年2月。

一般向けエッセイ等

池内克史・馬場章・長谷川仁則・吉田成・吉仲亮、「140年前の写真とその修復—安田善一郎肖像銀板写真の発見と画像の復元—」、『画像ラボ(日本工業出版)』、11巻、2000年7月、pp. 5～9。

Katsushi Ikeuchi, 「デジタルコンテンツ化自動化技術と文化遺産の出会い」、『InterLab』、2000年8月、pp. 48～51。

池内克史・馬場章・長谷川仁則・吉田成・吉仲亮、「140年前の銀板写真の発見と復元」、『映像情報インダストリアル』、32巻、2000年9月、産業開発機構(株)、pp. 31～36。

池内克史、「Physic-based Vision とコンピュータグラフィックスの接点」、『情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア「Physics-based Vision とCGの接点」特集号 巻頭言』、41巻、SIG10号、2000年12月、情報処理学会。

池内克史、「IT コンテンツの自動生成」、『O plus E(新技術コミュニケーションズ)』、23 巻、1 号、2001 年 1 月、pp. 31～34。

池内克史、「センシング技術—光と影— 特集について」、『日本ロボット学会誌』、20 巻、4 号、2002 年 5 月。【査読有】

池内克史、「文化財と画像処理」、『O plus E(新技術コミュニケーションズ)』、24 巻、12 号、2002 年 12 月、pp. 1378～1385。

石田 英敬 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

蓮実・渡辺監修監修、『ミシェル・フーコー思考集成 V 1974-1975 権力/処罰』、2000 年、筑摩書房、p. 500。

蓮実・渡辺監修監修、『ミシェル・フーコー思考集成 VI 1976-1977 セクシュアリティ/真理』、2000 年、筑摩書房、p. 605。

蓮実・渡辺監修監修、『ミシェル・フーコー思考集成 VII 1976-1977 セクシュアリティ/真理』、2000 年、筑摩書房、p. 375。

石田英敬, "sous la direction de Jacques Neefs, Paris, Presses Universitaires de Vincennes, 2001, « Mémoire photographique », " *Le Temps des oeuvres Mémoire et préfiguration*, 2001, Presses Universitaires de Vincennes, pp. 117-135.

山中桂一・西谷修・石田英敬、「刊行にあたって、序 言語態とは何か、第 1 章「言語の世紀と言語態の問い」第 6 章「クレオールを語る、第 14 章「フーコー、もうひとつのディスクール理論」」、2001 年、東京大学出版会、pp. 1, 11, 133, 311～7, 46, 154, 342。

蓮実・渡辺監修監修、『ミシェル・フーコー思考集成 VIII 1976-1977 セクシュアリティ/真理』、2001 年、筑摩書房、p. 461。

蓮実・渡辺監修監修、『ミシェル・フーコー思考集成 IX 1976-1977 セクシュアリティ/真理』、2001 年、筑摩書房、p. 482。

小森陽一・小松史生子・石田英敬、石田英敬訳、「第 3 章「テレビドラマと記号支配」(小松史生子との共著 pp. 59-86)、第 6 章ベンスラマ「イスラムの発話」(訳 pp.137-160)、第 12 章「メディア分析とディスクール理論」(pp. 283-317)」、『シリーズ言語態 5 社会の言語態』、2002 年、東京大学出版会、pp. 59, 137, 283～86, 160, 317。

石田英敬, "Comment penser ensemble la modernité ? : de la désorientation moderne," Maisonneuve and Larose eds., Henri Meschonnic and Shiguehiko Hasumi eds., *La modernité après le post-moderne*, 2002, pp. 157-164.

蓮実・渡辺監修監修、『ミシェル・フーコー思考集成 X 1976-1977 セクシュアリティ/真理』、2002年、筑摩書房、p. 390。

石田英敬、『記号の知/メディアの知 - 日常生活批判のためのレッスン』、2003年、東京大学出版会、p. 408。

石田英敬、『デジタル・フィクションの分析の方法に関する情報記号論的研究(課題番号 13610685)平成13年度～14年度科学研究費補助金(基盤研究(c))研究成果報告書』、2003年3月、p. 169。

石田英敬、『現代思想の地平』、2005年3月20日、放送大学教育振興会、p. 288。

論文等

石田英敬, "Nation et narration, le rôle de la littérature dans la formation de l'espace discursif moderne," *Daruma, revue d'études japonaises*, 2002, pp. 183-200. (Nos. 10-11 automne 2001 - printemps 2002)

「象徴、引用の項」、『事典 哲学の木』、2002年3月、講談社。

石田英敬、「記号学、言語学、メディアロジー、連辞と範列、意義素、メッセージ、グループ μ 、直示と共示、言語起源論の項」、『情報学事典』、2002年5月、弘文堂。

石田英敬、「言語態の項」、『記号学事典』、2002年5月、柏書房。

石田英敬、「テレビと日常生活: テレビの記号論再考、特集メディア変容の時代と放送」、『放送メディア研究』1、2003年5月30日、日本放送協会放送文化研究所、pp. 231-266。

石田英敬、「特集「テレビジョン再考」」、『思想』、956号、2003年12月、pp. 49-64。

石田英敬, "CORPUS FOUCAULDIS," *現代思想 2003年12月臨時増刊総特集「フーコー」*, 31, no.16, 2003.12, pp. 8-13.

石田英敬, "Le portrait de l'empereur," *MÉDIUM*, 2004, automne 2004, éd. Babylone, pp. 73-79.

石田英敬、「意味のエコロジーとは何か」、『UP』、377号、2004年3月、pp. 9-15。

口頭発表等

石田英敬・Jean Nouvel・Jean Baudrillard・Kawaguchi Yoichiro・et als., 「ポスト・ヒューマンの条件(基調講演)」、『Le Colloque international "Une nouvelle culture alternative ? : le cyberspace et ses cultures"』、2000年5月。(Maison Franco-Japonaise, Tokyo, avec Jean Nouvel, Jean Baudrillard, Kawaguchi Yoichiro et als.)

石田英敬, "Le malaise dans la communication(基調講演)," *Le colloque international « Colloque franco-japonais autour de la Médiologie*, 2002.2.14.

石田英敬, "La naissance de la "philosophie" dans la modernité japonaise(招待講演)," 2002.3.29, l'Institut Marcel Granet. (l'Université de Paris 7)

石田英敬, "Le moment de l'arraisonnement photographique dans l'avènement de la modernité japonaise(招待講演)," 2002.4.5. (l'Université de Paris 7)

石田英敬, "Le moment de l'arraisonnement photographique dans l'avènement de la modernité japonaise," in *Le colloque "la Fabrique du paysage"*, 2002.4.31.

石田英敬、「人間の学としての情報学：リベラル・アーツとしての情報知をもとめて（特別講演）」、『情報処理教育研究集会』、2002年10月25日、文部科学省・東京大学。（東大安田講堂）

石田英敬, "La traduction et le moment symboliste : à propos d'une étrangeté formatrice de la poésie moderne au Japon(招待講演)," *Colloque "l'Etrangeté dans le langage*, 2002.11.9. (à l'Université de Pékin)

石田英敬, "Capturing the image: the role of photography in the emergence of Japanese modernity (招待講演)," *Beyond Diversity. French Orientalist Discourses in the Era of Globalisation. An Asian Perspective*, 2003.1.15. (The University of Melbourne)

Kobayashi Yasuo and Hidetaka Ishida, "La conférence par François Noudelmann, Président du Collège International de Philosophie.," *Conférence-débat "La modernité artistique a-t-elle une frontière?"*, 2003.3.12, Le Collège International de Philosophie. (suivi d'une discussion avec Kobayashi Yasuo et Hidetaka Ishida)

Yasuo Kobayashi and Hidetaka Ishida, "Anthropos et Humanitas—deux notions occidentales de l'Homme," *Conférence-débat: Thème: L'avenir des humanités*, 2003.3.27, Le Collège International de Philosophie. (conférence par Osamu Nishitani, professeur à l'Université des langues étrangères de Tokyo: "Anthropos et Humanitas—deux notions occidentales de l'Homme" suivie d'un débat avec Yasuo Kobayashi et Hidetaka Ishida Jeudi 27 mars 2003 Le Co)

石田英敬, "Conférence-débat.," 2003.4.23, Le Collège International de Philosophie:Séances du séminaire à la Maison Franco-Japonaise Salle 601. (avec Yves SCHWARTZ (Professeur à l'Université d'Aix-en-Provence))

Osamu Nishitani and Hidetaka Ishida, "La mauvaise foi de la modernité sous le ciel bleu de l'après-guerre japonais ", *Conférence-débat : Thème: La coupure du Sengo, ou l'époque de l'Après-Guerre Japonais ?*, 2003.5.20, Le Collège International de Philosophie. (conférence par Yasuo Kobayashi, professeur à l'Université de Tokyo et président du UTCP: "La mauvaise foi de la modernité sous le ciel bleu de l'après-guerre japonais" suivie d'un débat avec Osamu Nishitani et Hidetaka Ishida , Amphi)

石田英敬、「講演「テレビ分析の知恵の樹」」、『シンポジウム「メディアの現在」』、2003年6月。（明治学院大学）

石田英敬 and Corinne ENAUDEAU, "Conférence-débat.," 2003.6.26, Le Collège International de Philosophie:Séances du séminaire à la Maison Franco-Japonaise Salle 601. (avec Corinne ENAUDEAU (Philosophe, directeur de programme au Collège international de philosophie) ,)

石田英敬, "La traduction et le moment symboliste : à propos d'une étrangeté formatrice de la poésie moderne au Japon," *Colloque « Henri Meschonnic »*, 2003.7.16. (Colloque à Cerisy-la-salle le)

石田英敬, "マラルメ研究の現在," *日本フランス語フランス文学会秋期大会*, 2003.10. (シンポジウム 竹内信夫、川瀬武夫、兼子正勝と、大阪外国語大学)

石田英敬, "Lecture japonaise de Roland Barthes bis," *Colloque "Roland Barthes, résonance des sens"*, 2003.11.30. (à l'Université de Tokyo.)

Conférence-débat: Conférence-débat : La conférence par Jacques Rancière.; 2004.1.21. (Mercredi 21 janvier 2004: Le Collège International de Philosophie:Séances du séminaire à la Maison Franco-Japonaise Salle 601)

Hidetaka Ishida, "Condition de la légitimation moderne," *Penser les conditions historiques de l'universel (II)*, 2004.3.25. (Le Collège International de Philosophie: Séances du SÉMINAIRE À PARIS : Jeudi 25 mars 2004 (18h-22h): Amphi Stourdzé, Carré des Sciences)

石田英敬, Pierre Legendre and Osamu Nishitani, *Penser les conditions historiques de l'universel (II)*, 2004.3.26. (Autour de l'anthropologie dogmatique Avec participation de Pierre Legendre et Osamu Nishitani, Le Collège International de Philosophie: Séances du SÉMINAIRE À PARIS : Vendredi 26 mars 2004 (18h-22h) : Amphi Stourdzé, Carré des Sciences)

石田英敬 and JEAN-FRANCOIS DORTIER, *LA CRISE DES SCIENCES HUMAINES ?*, 2004.4.19. (Dialogue avec JEAN-FRANCOIS DORTIER directeur de la revue SCIENCES HUMAINES Le 19 avril 2004 : Maison franco-japonaise (salle 601))

その他

石田英敬、「アンリ・メシヨニック インタビュー」、『Language Information Text』、10 巻、2003 年、pp. 71～77。(H.メシヨニック(インタビューと翻訳))

一般向け著書等

鶴飼哲・小森陽一・高橋哲哉、「脱パラサイト・ナショナリズム！」、『21 世紀のマニフェスト 日本をどのように変えるか』、2001 年、岩波書店、pp. 81～118。

一般向けエッセイ等

石田英敬、「公共性とは何か」、『世界 2000 年 5 月臨時増刊号』、2000 年 5 月、pp. 88～91。

石田英敬・鶴飼哲・小森陽一・高橋哲哉、「21 世紀のマニフェスト： 脱くパラサイトナショナリズム>！」、『世界 2000 年 8 月号』、2000 年 8 月。(鶴飼哲、小森陽一、高橋哲哉との共同執筆)

石田英敬、「<教養崩壊の時代>と大学の未来」、『世界 2002 年 11 月号』、2002 年 11 月、pp. 215～219。

石田英敬、「「象徴的貧困」の時代：イラク「日本人質事件」報道を問う」、『世界 2004 年 7 月号』、728 号、2004 年 7 月、pp. 104～111。

一般向け講演等

石田英敬、「情報空間と記号論」、『デジタルシティ・ワークショップ「デジタルシティと記号論」』、2002 年 5 月 22 日。(京都大学情報メディア・センター)

石田英敬、「コミュニケーション研究の今日的課題—フランス、日本のコンテクスト」、『日本社会情報学会公開研究会』、2004 年 3 月 5 日、日本社会情報学会。

石田英敬、「テレビ分析の知恵の樹とは何か」、『愛宕山フォーラム』、2004 年 7 月 21 日、NHK 放送文化研究所。

石田英敬、「ユビキタス化する宇宙と世界の散文」、『東京大学大学院情報学環・学際情報学府学際情報学専攻 21 世紀 COE・次世代ユビキタス情報社会基盤の形成 第一回設立記念シンポジウム』、2004 年 10 月 27 日。(安田講堂)

石田英敬、「グローバルメディアの現在」、『国際シンポ「視角の地政学：メディア・ウォールを突き崩す II」』、2004 年 11 月 3 日。(シンポジウム H.イブラヒム、永島啓一、西谷修との討議、東京外国語大学)

その他一般向け

石田英敬、「メディアロジーとは何か(西垣通との対談)」、『現代思想 2000 年 7 月号』、28 巻、8 号、2000 年 7 月、青土社、pp. 40～55。

石田英敬、「言語態とは何か」、『UP 2001 年 3 月号』、2001 年 3 月、東大出版会、pp. 19～34。(臼井隆一郎、藤井貞和との鼎談)

石田英敬、「9.11 以後とメディア」、『UP』、361 号、2002 年 11 月、東大出版会、pp. 1～16。(西谷修、小森陽一との座談会)

石田英敬、「メディア社会の記号哲学(インタビュー)」、『ロゴスドン 2004 年秋号』、59 号、2004 年、ヌース出版、pp. 6～19。

石田英敬、『東京外国語大学主催シンポジウム「グローバル化時代の文化的想像力と大学」』、2005 年 2 月 10 日。(シンポジウム・パネル、東京外国語大学)

石田英敬、「グローバルメディアの現在」、『世界 2005 年 3 月号』、737 号、2005 年 3 月、pp. 68～79。(シンポジウム H.イブラヒーム、永島啓一、西谷修との討議)

永ノ尾 信悟 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

古代インドにおける儀礼の変容

ポスト・ヴェーダ期においてヒンドゥー教、仏教を取り込んだタントラ化の現象の中で、儀礼の変容がどのような特質を示すのかを考察する。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

Shingo Einoo, "The Signs of Death and their Contexts," Shouun Hino and Toshihiro Wada eds., *Three Mountains and Seven Rivers: Prof. Musashi Tachikawa's Felicitation Volume*, 2004, Delhi (India), Motilal Banarsidass, pp. 871-886.

Shingo Einoo, "Notes on the Vrsotsarga," Arlo Griffiths and Jan E.M. Houben eds., *The Vedas: Texts, Languages and Ritual; Proceedings of the Third International Vedic Workshop*, 2004, Groningen, Egbert Forsten, pp. 35-48. (Leiden 2002)

一般向けエッセイ等

永ノ尾信悟、「古代インドの儀礼の願望にみる幸福への願い」、『東京大学東洋文化研究所・新分野開拓研究プロジェクト『「アジア諸文化間の多元的共生を求めて」平成15年度研究報告書』』、2004 年、pp. 13～17。

河口 洋一郎 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

グロースモデル(Growth Model)によるCG造形手法の研究

CGにおける、生物の発生、成長、進化、遺伝、突然変による複雑系の自己組織化モデルに関する造形研究

ジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーミングアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出研究

超高画質3D映像研究

飛び出る立体視の高精細映像や、スーパーハイビジョン(8K4K)による超高画質のCG映像生成研究

研究業績(2000～2004年度)

著書等

Yoichiro Kawaguchi, Gerhard Mantz, Gero Gries, Martin Dorbaum and Yves Netzhammer, *naturlich kunstlich*, 2001, pp. 82-93.

Yoichiro Kawaguchi, Gerhard Mantz, Gero Gries, Martin Dorbaum and Yves Netzhammer, *naturlich kunstlich*, 2001, Berlin, Jovis Verlag GmbH. (Books+CD-ROM)

河口洋一郎, *naturlich kunstlich*, 2001.10, Berlin, Jovis Verlag GmbH, 95pp.

河口洋一郎、『アート！新スタイル』、2001年10月5日、鹿児島市立美術館、pp. 41～50。

河口洋一郎、『河口洋一郎のCG世界』、2002年4月、つくば美術館、112pp.。

河口洋一郎、『CG入門』、2003年3月、丸善、239pp.。

河口洋一郎、「先端科学技術研究をメディア芸術へと文化的価値へと高めるための施政の在り方(科学技術振興調整費)報告書」、2003年4月～2005年4月。

河口洋一郎、『河口洋一郎のサイバーアート展』、2003年7月、鹿児島県、霧島アートの森、109pp.。

作品等

Yoichiro Kawaguchi, "Nebular," *ACM SIGGRAPH2000*, 2000.7. (審査つき作品)

Yoichiro Kawaguchi, "Gemotion," *ACM SIGGRAPH2001 Art Gallery*, 2001.7. (審査つき作品)

Yoichiro Kawaguchi, "Cibervision.02," *Centro Cultural Conde Duque*, 2002.3. (invited exhibition)

河口洋一郎、『企画展「河口洋一郎のCG世界」展』、2002年4月27日～2002年5月26日、茨城県つくば美術館。(研究作品発表・個展)

河口洋一郎、『企画展「河口洋一郎展」』、2002年5月、銀座、ギャラリーイセヨシ。(研究作品発表・個展)

Yoichiro Kawaguchi, "Cytolon," *ACM SIGGRAPH2002 Art Gallery*, 2002.7. (審査つき作品)

Yoichiro Kawaguchi, "Cytolon," *ACM SIGGRAPH2002 Art Gallery visual proceeding*, 2002.7.21-2002.7.26, San Antonio, U.S.A., pp. 21-26.【査読有】

Yoichiro Kawaguchi, "Cereblan," *ACM SIGGRAPH2003 Art Gallery*, 2003.7. (審査つき作品)

Yoichiro Kawaguchi, "Hannya," *ACM SIGGRAPH2003 Art Gallery*, 2003.7. (審査つき作品)

河口洋一郎、『企画展「河口洋一郎の電脳芸術展」』、2003年11月、上越市サイエンスセンター。(研究作品発表・個展)

Yoichiro Kawaguchi, "Coacer Tower," *ACM SIGGRAPH2004 Art Gallery*, 2004.7. (審査つき作品)

河口洋一郎、『企画展「河口洋一郎展：生命宇宙の世界」』、2005年3月～2005年4月、品川キャノンサロンS。(研究作品発表・個展)

論文等

Yoichi Kawaguchi, *Self-Organized Objects with the GROWTH Model*, 2000, pp. 10-14. (招待論文)

Yoichi Kawaguchi, *Illustrated Description from the GROWTH MODEL to GEMOTION*, 2002, On Virtual Reality Art and Design Technology, pp. 1-14. (招待論文)

Yoichi Kawaguchi, *GEMOTION for Performing Arts*, 2004, Proc.ICAT, pp. 18-25. (招待論文)

Shun Iwasawa, Naohiro Shichijo and Yoichiro Kawaguchi, *Rendering Methods for Models With Complicated Micro Structures*, 2004, Proc.ICAT, pp. 229-234.【査読有】

その他

河口洋一郎、「アート+テクノロジー+ブレイン」、2000年、東大総研、安田講堂。(招待講演)

河口洋一郎、『「3D@バーチャル2000」展』、2000年、東京都写真美術館。

河口洋一郎、『屋久島文化デザイン会議2000』、2000年5月12日。(招待講演)

河口洋一郎, "13th Sake-opening performance," *SIGGRAPH2000 BOF*, 2000.7.23, New Orleans, U.S.A..

河口洋一郎、『「3D@スペクタクル2000」展』、2001年、東京都写真美術館。

河口洋一郎、『アート！新スタイル』、2001年、鹿児島市美術館。

河口洋一郎、『Media Art 国際シンポジウム「日本映像学会デジタルメディア研究会」』、2001年、東京ドイツ文化センター。(招待講演)

河口洋一郎、『招待講演』、2001年、鹿児島県立種子島高校。

河口洋一郎、『日・中・韓アジアデジタルイメージ会議』、2001年、デジタルイメージ、徳間ホール。

河口洋一郎, *NatulichKunstlich-Artificial Life and the virtual image*, 2001, kusthalle, Rostok, Germany.

河口洋一郎、『デザインシンポジウム2001』、2001年、台北・台湾、中原大学。(招待講演)

河口洋一郎、「招待講演」、『可視化大会』、2001年、お台場、タイム24。

河口洋一郎、『情報文化学会ポスター作品発表』、2001年。

河口洋一郎、『招待講演』、2001年、デジタルデザイン会議。

河口洋一郎、『国際ブロードバンド会議』、2001年、ブロードバンドコミュニティ。(招待講演)

河口洋一郎、『招待講演』、2001年、デジタルデザイン会議。

河口洋一郎、『国際ブロードバンド会議』、2001年、ブロードバンドコミュニティ。(招待講演)

河口洋一郎、『鹿児島文化デザイン会議』、2001年1月30日。(招待講演)

河口洋一郎, *NatulichKunstlich-Artificial Life and the virtual image*, 2001.7.15-2001.8.26, Kunsthalle Manheim.

河口洋一郎, "14th Sake-opening performance," *SIGGRAPH2002 BOF*, 2001.8.12, Los Angeles, U.S.A.

河口洋一郎, *NatulichKunstlich-Artificial Life and the virtual image*, 2001.10.18-2001.12.2, Haus am Waldsee, Berlin.

河口洋一郎、『招待講演(タイム 24・お台場、可視化大会)』、2001 年 10 月 26 日。

河口洋一郎、『情報文化学会ポスター作品発表』、2001 年 10 月 28 日。

河口洋一郎、『鹿児島文化デザイン会議』、2001 年 11 月 30 日。(招待講演)

ハロルドコーエン・河口洋一郎、「人工知能芸術と人工生命芸術」、『日本映像学会』、2001 年 12 月 26 日。(講演発表)

ハロルドコーエン・河口洋一郎、「人工知能芸術と人工生命芸術」、『日本映像学会』、2001 年 12 月 26 日。(講演発表)

河口洋一郎、『「映像体験ミュージアムーイマジネーションの未来へ」展』、2002 年、東京都写真美術館。

河口洋一郎、『「NEXT02」シンポジウム』、2002 年、NEXT02 実行委員会。

河口洋一郎、『「NEXT02」展招待講演』、2002 年、倉敷市立美術館。

河口洋一郎、『アニマニウム 2002』、2002 年、東京ネットワーク、ラフォーレ原宿。(招待講演)

河口洋一郎、『日本文化デザイン会議』、2002 年、同実行委員会、沖縄、那覇市国際文化会館。(招待講演)

河口洋一郎、『映像体験ミュージアムーイマジネーションの未来へ』、2002 年 2 月 28 日～2002 年 6 月 10 日、東京都写真美術館。(作品発表)

河口洋一郎、「Asia International Animation Conference」、『アジア国際アニメーション学会』、2002 年 4 月、北京、中国。(招待講演)

河口洋一郎、「The Art of Yoichiro Kawaguch」、2002 年 4 月 4 日、中国、北京中央美術学院。(招待講演)

河口洋一郎、『「アートはサバイバルだ！」個展シンポジウム』、2002 年 4 月 26 日、茨城県つくば美術館。

河口洋一郎、『河口洋一郎の CG 世界ー成長・進化する電脳宇宙』、2002 年 4 月 27 日～2002 年 5 月 26 日、茨城県つくば美術館。(個展・企画展)

河口洋一郎、『河口洋一郎展』、2002 年 5 月 13 日～2002 年 5 月 25 日、銀座ギャラリーイセヨシ。(個展)

河口洋一郎、『招待講演』、2002 年 5 月 18 日、台北・台湾、中原大学。

河口洋一郎、「Growth model から Gemotion へ」、2002 年 5 月 18 日、台湾、台湾中原大学。(作品発表)

河口洋一郎, "15th Sake-opening performance," *SIGGRAPH2002 BOF*, 2002.7.21, San Antonio, U.S.A..

河口洋一郎、『SIGGRAPH2002 のオープニングショー』、2002 年 7 月 21 日、サンアントニオ。(サンアントニオで開催された SIGGRAPH2002 のオープニングショーで、を公開する)

河口洋一郎、「15th Sake-opening performance」、『SIGGRAPH2002 BOF』、2002 年 7 月 21 日、San Antonio, U.S.A..(藤間紫穂氏の舞踊によるウェアラブルパフォーマンス)

河口洋一郎、『日中メディア芸術作品展 2002』、2002 年 8 月、中国对外文化交流協会、北京、中国。(招待講演)

河口洋一郎、「Gemotion Interactive Art」、『文化庁メディア芸術祭特別展「日本媒体芸術作品展 2002」』、2002年8月24日～2002年8月25日、同展実行委員会・北京中央芸術学院。

河口洋一郎、「Gemotion アートパフォーマンス with 藤間紫穂」招待公演、『Landscape Frontier International Symposium 国際大会』、2002年10月3日、北九州市。

河口洋一郎、「ハイビジョン3D 作品《Cytlon》、レンチキュラー作品《FOSSY》」、『ベネチアビエンナーレ記念展「12人の挑戦—大観から日比野まで」』、2002年10月5日～2002年12月8日、水戸芸術館現代美術センター。

河口洋一郎、「Gemotion アートパフォーマンス with 藤間紫穂」招待公演、『コンテンツフォーラム@穂高』、2002年10月18日、長野県穂高町。

河口洋一郎、『河口洋一郎個展』、2002年12月22日～2002年12月23日、上越市、上越市自然科学館こどもサイエンス広場。(個展)

河口洋一郎、「裸眼立体視作品《Growth Model》」、『「デジタル・イメージ 2003」展』、2003年、東京都写真美術館。

河口洋一郎、「立体映像装置ボルマトリクス作品《Growth Model》」、『「グローバルメディア 2003」展』、2003年、東京都写真美術館。(東京都写真美術館)

河口洋一郎、『河口洋一郎個展』、2003年2月1日～2003年3月31日。(オープニング記念展、個展)

河口洋一郎、「ウェアラブル・アートパフォーマンス「河口洋一郎 CG アートと金沢の伝統文化のコラボレーション～CG アート+茶道+加賀宝生」」、『eAT 金沢 03』、2003年2月7日、金沢市。

河口洋一郎、「体験型インスタレーション《Gemotion インタラクティブアート》」、2003年3月、東京都写真美術館。

河口洋一郎、「Gemotion インタラクティブ」常設展示、2003年4月、鹿児島県民交流センター先端映像エントランス。

河口洋一郎, “《Cereblan》《Hannya》,” *SIGGRAPH2003*, 2003.7.【査読有】

河口洋一郎、『河口洋一郎のサイバーアート展—原始の宇宙』、2003年7月18日～2003年8月31日、鹿児島市霧島アートの森。(個展・企画展)

河口洋一郎、『河口洋一郎のサイバーアート展—原始の宇宙』、2003年7月18日～2003年8月31日、鹿児島県霧島アートの森。(企画展、インタラクティブ・アート、映像・アニメーション作品、インスタレーション作品、スケッチ及びドローイングが展示される。)

河口洋一郎, “16th Sake-opening performance,” *SIGGRAPH2002 BOF*, 2003.7.26, San Diego, U.S.A.. (30周年を記念したオープニングパフォーマンス SAKE PARTY)

河口洋一郎, “16th Sake-opening performance,” *SIGGRAPH2003 BOF*, 2003.7.27, San Diego, U.S.A.

河口洋一郎、「SIGGRAPH 国際大会オープニングレセプションショーにて伝統芸能・琴とのコラボ「Gemotion」、SIGGRAPH アートギャラリーにおいて裸眼立体視と錯覚の作品展示」、2003年8月16日、サンディエゴ、SIGGRAPH 国際大会オープニングレセプションショー%SIGGRAPH アートギャラリー。

河口洋一郎、「NHK ハイビジョンスペシャル種子島ロケ敢行」、2003年8月20日。

河口洋一郎、「アジア文化会議の招待講演」、『アジア文化会議』、2003年9月7日～2003年9月9日、上海。

河口洋一郎、「ADADA アジアデジタルアート&デザイン学会設立基調講演」、2003年9月12日、福岡。

河口洋一郎、『河口洋一郎作品上映(マーヴィン・ミンスキー+河口洋一郎)』、2003年9月16日、NHK千代田放送会館。(作品上映)

藤間信之輔・河口洋一郎、『河口洋一郎の世界』、2003年9月16日、NHK千代田放送会館。(米国 MIT マーヴィン・ミンスキー教授を招聘し対談、シンポジウム及び映像パフォーマンスショーを行う)

河口洋一郎、「情報文化学会創立10周年記念フェスタで記念講演」、『情報文化学会創立10周年記念フェスタ』、2003年10月18日。

河口洋一郎、『河口洋一郎』、2003年11月1日、上越市科学館。(個展・企画展)

河口洋一郎、「九州文化人」対談』、『エンジン01の文化会議』、2003年11月1日、佐賀。(筑紫哲也+佐賀市長+河口 etc)

河口洋一郎、「河口洋一郎の電腦芸術展」、『上越市 Kenshin' 03』、2003年11月1日~2003年11月3日。(企画展)

河口洋一郎、「VR映像の未来」セッション』、『VR文化フォーラム in 神戸』、2003年11月7日。

河口洋一郎、「招待講演」、『文化芸術国際シンポジウム』、2003年11月24日、文部科学省、京都国際会議場。(トッド・マコーバー+キム・チョンギ+河口)

河口洋一郎、「NHK ハイビジョンスペシャル 未知を創る~CG アーティスト河口洋一郎の挑戦~が放映」、2003年11月24日。(1時間50分)

河口洋一郎、『NHKデジタル放送開局記念CGライブショー出演』、2003年12月1日。(NHK BS、NHKハイビジョン)

東儀秀樹・藤間信之輔・河口洋一郎、「NHK デジタル放送開局記念テレビ生番組に出演し伝統芸能との融合による Gemotion のライブを全国的に行う」、2003年12月1日。

河口洋一郎、「DRINK 鹿児島デジタルコンテンツフォーラムで対談」、『DRINK 鹿児島デジタルコンテンツフォーラム』、2003年12月6日。(中尊寺ゆつこ+河口)

河口洋一郎、「上越市コンテスト審査講評会を行う」、2003年12月13日。(上越市長+河口)

河口洋一郎、「EXPO に関する基調講演」、『メディア国際大会』、2003年12月21日~2003年12月24日、北京。

河口洋一郎、「世田谷パブリックシアターでメディア芸術とパフォーマンスについて講演」、2004年2月14日、世田谷パブリックシアター。

河口洋一郎、「eAT 金沢大会セミナーで講演」、『eAT 金沢大会セミナー』、2004年2月20日~2004年2月21日。

河口洋一郎、「メディア芸術シンポジウムで講演」、『メディア芸術シンポジウム』、2004年3月5日。

河口洋一郎、「メディアシンポジウムで招待講演」、『メディアシンポジウム』、2004年3月20日、札幌市。(大村+河口)

河口洋一郎、「パフォーマンス「ジェモーション」」、『鹿児島青年会議所50周年記念式典』、2004年5月8日。(島津+河口)

河口洋一郎、「特別講演」、『情報文化学会連語研究会大会』、2004年5月22日、東大。(山口裕美+河口)

河口洋一郎、「招待基調講演」、『日本写真学会記念シンポジウム』、2004年5月27日、東京工芸大。

河口洋一郎、「佐藤勝彦前東大理学部長と宇宙について異能の会で特別講演(座長)」、2004年6月14日、東大。

河口洋一郎、「アップルシード」荒牧監督を招聘し異能の会で対談』、2004年7月7日。

河口洋一郎、「亜州芸術科学学会国際シンポの講演」、『亜州芸術科学学会国際シンポ』、2004年7月17日、上海。

河口洋一郎、「招待講演」、2004年7月27日、3Dコンソーシアム、幕張。(幕張)

河口洋一郎、「廣川東大医学部長との異能の会で発表(座長)」、2004年7月30日。

河口洋一郎、「国際学会 ADADA 作品審査会に審査員として参加」、2004年7月31日。

河口洋一郎, "17th Sake-opening performance," *SIGGRAPH2004 BOF*, 2004.8.8, Los Angeles, U.S.A..

河口洋一郎、「SIGGRAPH オープニングパフォーマンスで Gemotion パフォーマンス、SIGGRAPH アートギャラリーに 3D レンチキュラー作品が展示、特別セッション アート&自然の講演」、2004年8月8日。(SIGGRAPH オープニングパフォーマンスで Gemotion パフォーマンスを行う(島津十河口)(ロス)。SIGGRAPH アートギャラリーに3Dレンチキュラー作品が展示される。また、特別セッション アー)

河口洋一郎、「情報文化学会賞授賞式審査委員長をつとめる」、2004年9月4日、早稲田大学。

河口洋一郎、「招待シンポジウム」、『国際学会 ADADA』、2004年10月8日~2004年10月9日、ソウル。

河口洋一郎、「鹿児島デジタルコンテンツフォーラム CG コンテスト審査委員長をつとめる」、2004年10月20日。

河口洋一郎、「インターナショナルフォーラム for ニューメディア&デジタルアートにて招待講演及び Gemotion パフォーマンスを行う」、2004年10月28日~2004年11月1日、台湾、台南大学・台湾大学。

河口洋一郎、「人工生命について招待講演」、『日本デザイン学会春季大会』、2004年11月5日、慶応大学。

河口洋一郎、「アジアデザインの報告会(座長)」、『映像学会デジタルメディア研究会』、2004年11月8日。

河口洋一郎、「ミッションフロンティア展にて作品発表」、2004年11月9日~2004年12月15日、東京都写真美術館。

河口洋一郎、「人工物シンポに招待され講演」、2004年11月11日、東京大学。

河口洋一郎、「Kenshin' 04 シンポジウムで対談」、2004年11月13日、上越市。(岡本敏子+河口)

河口洋一郎、「エンジン01 特別セミナーで対談」、2004年11月17日、東京大学。(さかもと未明+河口)

河口洋一郎、「アジアのメディア芸術科学フォーラムの実行委員長として「メディアアート&アニメーション」のセッションを行う」、2004年11月20日、東大。

河口洋一郎、「中国の清華大学総長列席のもと招待レセプションショーを行う」、『日中国際記念シンポジウム』、2004年11月24日、東大山上会館。

河口洋一郎、「ICAT2004 国際学会大会にて招待講演、ダンサーとのコラボレーション、大会表紙デザインも手がける」、2004年12月1日、ソウル。(ダンサーとのコラボレーションを行い大好評を得る)

河口洋一郎、「記念講演と Gemotion ライブパフォーマンス」、『かごしまデジタルコンテンツフォーラム』、2004年12月4日。

河口洋一郎、「経済産業省 DCAJ 審査委員会委員長として審査を行う」、2004年12月14日。

河口洋一郎、「文化委員会代表会議に委員として出席発表」、2004年12月17日、鹿児島県。

河口洋一郎、「SIM Talk Show で対談」、2005年1月19日、東京大学。(モンキー・パンチ+河口)

河口洋一郎、「特別講演」、2005年1月20日、ドイツ ポツダム、Film & Television アカデミー大学院大学。

河口洋一郎、「ベルリンの DAM にて作品発表公演、ベルリンのソニービルセンターにて映像が展示」、2005 年 1 月 21 日～2005 年 1 月 23 日、ベルリン、ソニービルセンター。

河口洋一郎、「経済産業省 DCAj 授与式にクリエイティブコンテンツ部門審査委員長として出席・報告を行う」、2005 年 1 月 25 日。

河口洋一郎、「eAT 金沢大会に委員として出席」、2005 年 1 月 28 日～2005 年 1 月 29 日。

河口洋一郎、「DCA 東レ審査会委員長をつとめる」、2005 年 2 月 15 日。

さかもと未明・河口洋一郎・他、「伝統と現代の夜楽」、『エンジン01オープンカレッジ大会』、2005 年 2 月 25 日～2005 年 2 月 26 日、豊橋。(対談)

河口洋一郎、「招待公演」、『Paris ACM SIGGRAPH 国際大会』、2005 年 3 月 10 日、パリ、ラ・ビレット。(フランスの文化大臣たちが列席のもと、舞台ダンサーとのコラボレーションによるパフォーマンスアーツで好評を博す)

河口洋一郎、「河口洋一郎展「宇宙生命の世界」を開催」、『キヤノンサロン S 企画展』、2005 年 3 月 24 日～2005 年 4 月 23 日。(立体視ハイビジョンや Gemotion, ケータイグロース, 屏風のような高画質展示, モーフィングにより反応するドローイングなどを展示)

一般向け講演等

河口洋一郎、「濃密なる映像宇宙」、『日本バーチャルリアリティ学会 VR 文化フォーラム 2000』、2000 年 5 月 19 日、日本 VR 学会、パリ。(招待講演)

河口洋一郎、「根源的なサバイバル CG 芸術の創出」、『日本アニメーション学会年次大会』、2000 年 6 月、日本アニメーション学会、東京都写真美術館。(招待講演)

河口洋一郎、「CG アートにおけるアルゴリズム」、『カラーフォーラム 2000』、2000 年 11 月、日本色彩学会、工学院大学。(招待講演)

河口洋一郎、「複合現実感ー現実とネット上を結ぶメディアアート」、『メディアアート国際シンポジウム』、2001 年 2 月、日本映像学会、ドイツ文化会館。(招待講演)

河口洋一郎、「人工知能と人工生命芸術」、2001 年 12 月、日本映像学会、東京大学。(特別講演)

河口洋一郎、『アジア・アニメーション会議』、2002 年 4 月、アジア・アニメーション学会、北京。(招待講演)

河口洋一郎、『アジア・アニメーション会議』、2002 年 4 月 4 日、北京中央美術学院、北京、中国。(基調講演)

河口洋一郎、「アートはサバイバルだ!」、『個展シンポジウム』、2002 年 4 月 26 日、茨城県つくば美術館。(招待講演)

河口洋一郎、『NEXT02』シンポジウム』、2002 年 4 月 28 日、NEXT02 実行委員会、東京都写真美術館。(招待講演)

河口洋一郎、「グロースモデルとジェモーション」、2002 年 5 月 18 日、台湾市、台湾中原大学。(招待講演)

河口洋一郎、『第 6 回日本バーチャルリアリティ学会 VR 文化フォーラム』、2002 年 5 月 19 日、台湾、故宮博物院。(招待講演)

河口洋一郎、「河口洋一郎講演」、2002 年 6 月 14 日、北京市、中央美術学院。(招待講演)

河口洋一郎、「映像体験ミュージアムー映像メディアの未来へ」展記念講演」、2002 年 6 月 22 日、倉敷市、倉敷市立美術館。(招待講演)

河口洋一郎、『アニマニウム 2002』、2002 年 6 月 29 日、東京ネットウェイブ、ラフォーレ原宿。(招待講演)

河口洋一郎、「Gemotion アートパフォーマンス with 藤間紫穂」、『Landscape Frontier International Symposium』国際大会』、2002 年 10 月、Landscape Frontier Association、北九州市。(招待講演)

河口洋一郎、『第 25 回日本文化デザイン会議シンポジウム』、2002 年 11 月 3 日、新丸ビル。(招待講演)

河口洋一郎、『マルチメディアシンポジウム』、2002 年 12 月 4 日、札幌市。(招待講演)

河口洋一郎、『鹿児島県フォーラム』、2002 年 12 月 7 日、鹿児島市、南日本新聞社ホール。(招待講演)

河口洋一郎、「自己組織化する色彩」、『ロレアル大賞記念講演会』、2003 年 1 月、ロレアルアーツ&サイエンスファンデーション。(招待講演)

河口洋一郎、「ロレアル大賞記念講演会」、2003 年 1 月 18 日、ロレアル財団、京都市。(招待講演)

河口洋一郎、「セミナーD 身体性の復権を目指す時代の到来×富野由悠季」、2003 年 2 月 8 日、金沢市芸術村、金沢市芸術村。(招待講演)

河口洋一郎、「前橋アート・コンペ・ライブ 2003×伊東順二、土佐信道」、『神戸ミーティング』、2003 年 2 月 13 日、神戸市、神戸ポートアイランドホール。(招待講演)

河口洋一郎、「アジアンワイドな「クリエイティブ」コンテンツビジネスの可能性を探る」、『Digital Content Japan2003』、2003 年 3 月、京都市、経済産業省。(招待講演)

河口洋一郎、2003 年 3 月 2 日、前橋市。(招待講演)

河口洋一郎、「オリジナリティを獲得せよ×野村万之丞」、『記念シンポジウム』、2003 年 3 月 9 日、川口市、SKIP CITY。(招待講演)

河口洋一郎、『Content Japan 2003 シンポジウム「アジアンワイドな『クリエイティブ』コンテンツビジネスの可能性を探る』、2003 年 3 月 18 日、経済産業省、TEPIA。(招待講演)

河口洋一郎、「対談×仙道武則「インフォメーション・アートの想像力」展」、2003 年 3 月 29 日、東京都写真美術館。(招待講演)

河口洋一郎、「アジア的サバイバルデザイン」、『日韓デザイン会議』、2003 年 5 月、韓国デザイン学会 & 日本デザイン学会。(基調講演)

河口洋一郎、「Gemotion のアート世界」、『3D フォーラム第 64 回研究会』、2003 年 5 月 23 日、東京工業大学。(招待講演)

河口洋一郎、『韓国デザイン学会大会』、2003 年 5 月 24 日、韓国釜山市。(招待講演)

河口洋一郎、「2003 年度ビジュアライゼーション講演 CG による芸術表現」、2003 年 6 月 5 日、上智大学%同理工学部。(招待講演)

河口洋一郎、「CG による生命宇宙」、『IMA 映像作品研究会』、2003 年 6 月 7 日、京都精華大学、京都精華大学黎明館。(招待講演)

河口洋一郎、「鹿児島霧島アートの森対談×三枝成彰」、2003 年 8 月 16 日、鹿児島市。(招待講演)

河口洋一郎、『上海招待会議』、2003 年 9 月、上海市。(招待講演)

河口洋一郎、「基調講演」、『ADADA アジアデジタルアート&デザイン学会』、2003年9月12日、アジアデジタルアート&デザイン学会、福岡市。(基調講演)

河口洋一郎、『情報文化学会 特別映像ショー』、2003年10月18日、情報文化学会、東京大学山上会館。(招待講演)

河口洋一郎、『鹿児島DRINKシンポジウム』、2003年10月22日、鹿児島市。(招待講演)

トッド・マコーバー・キム・チョンギ・河口洋一郎、「先端科学技術と芸術」、『文化芸術国際シンポジウム』、2003年11月、文部科学省、京都国際会議場。(招待講演)

河口洋一郎、「上越市対談×山口裕美」、2003年11月1日、上越市、上越市科学館。(招待講演)

河口洋一郎、「九州人(筑紫哲也+河口+佐賀市長)」、『エンジン01 佐賀大会』、2003年11月2日、佐賀市。(招待講演)

河口洋一郎、『VR文化フォーラム in Kobe「VR映像の未来」』、2003年11月7日。(招待講演)

河口洋一郎、「鹿児島共演 島津+河口」、2003年11月21日、鹿児島市。(招待講演)

河口洋一郎、『国際文化シンポジウム×キムチョンギ(韓国)+トッド・マコーバー(米国)』、2003年11月24日、文部科学省、京都文化ホール。(招待講演)

河口洋一郎、『鹿児島フォーラム』、2003年12月6日、鹿児島県、県民交流センター。(招待講演)

河口洋一郎、「中国CG展基調講演」、2003年12月21日、北京市。(基調講演)

河口洋一郎、『野村万斎対談』、2004年2月14日、世田谷区、世田谷パブリックシアター劇場。(招待講演)

河口洋一郎、『eAT金沢 大学対抗映像バトル』、2004年2月21日。(招待講演、(浜野、河口、片山、秋草))

河口洋一郎、『アジアのメディア芸術』シンポジウム』、2004年3月5日、文化庁。(文化庁メディア芸術祭、招待講演)

河口洋一郎、「自己増殖するアニメーション」、『インターナショナルフォーラム for ニューメディア&デジタルアート』、2004年10月、日本VR学会、台湾大学および台南大学。(招待講演)

河口洋一郎、「アジアのサバイバルアート」、『日中国際記念シンポジウム』、2004年11月、東京大学。(招待講演)

河口洋一郎、「人工生命における自己組織化デザイン」、『日本デザイン学会秋季大会』、2004年11月、日本デザイン学会、慶応大学日吉学舎。(招待講演)

河口洋一郎, "Gemotion for Performing Arts," *ICAT2004 国際学会大会*, 2004.12, ソウルコンベンションセンター。(招待講演)

河口洋一郎, "Gemotional Dancing," *Paris ACM SIGGRAPH 国際大会*, 2005.3, ラ・ビレット。(基調講演, 他多数)

姜 尚中 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいうべき特異なアジア認識、アジアイメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

姜尚中・西川長夫・西成彦、『20世紀をいかに超えるか—多言語・多文化主義を手かがりに』、2000年6月、平凡社。

姜尚中、『ナショナリズム』、2001年、岩波書店。

姜尚中・吉見俊哉、『グローバル化の遠近法』、2001年2月、岩波書店。

姜尚中、『マックス・ウェーバーと近代』、2002年1月、岩波現代文庫。

姜尚中・青木保・山室信一・吉見俊哉・小杉泰・坂元ひろ子・莫邦富・四方田犬彦、『アジア新世紀1—空間』、2002年11月、岩波書店。

姜尚中・和田春樹・キャロル・グラック、『「日米関係」からの自立』、2003年1月、藤原書店。

姜尚中・比屋根照夫・キャロル・グラック・テッサ=モーリス=スズキ、『日本はどこへ行くのか』、2003年1月、講談社。

姜尚中・水野直樹・李鐘元、『日朝関係』、2003年5月、岩波書店。

姜尚中、『日朝関係の克服』、2003年5月、集英社。

姜尚中、『反ナショナリズム』、2003年5月、教育資料出版会。

姜尚中、『挑発する知』、2003年11月、双風舎。

姜尚中、『社会情報学ハンドブッカー—研究への50の扉』、2004年3月、東京大学出版会。

姜尚中、『オリエンタリズムの彼方へ』、2004年4月、岩波現代文庫。

姜尚中・テッサ=モーリス=スズキ、『デモクラシーの冒険』、2004年11月、集英社。

論文等

姜尚中、『百科で見る二〇世紀』、2000年、日立デジタル平凡社。

姜尚中, "Korean Network and Ethnic Minority," *アジアとの対話*, 2000, 国際交流基金, 国際文化会館.

姜尚中, "Postcolonialism and Diasporic Space in Japan," *We Asians : Between Past and Present*, 2000.9, 国際交流基金, シンガポール.

一般向け著書等

姜尚中・森巢博、『ナショナリズムの克服』、2002年11月、集英社。

姜尚中、『在日』、2004年、講談社。

姜尚中・佐高信、『日本論』、2004年2月、毎日新聞社。

姜尚中・森達也、『戦争の世紀を超えて』、2004年11月、講談社。

國吉 康夫 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

「コツ」と「目の付け所」のヒューマノイド科学

身体を使いこなした器用な動作には「コツ」があり、他人のスキルを見て的確にコツを会得できる人は「目の付け所」が良い。このことには理論的根拠があるはずで、しかもそれは人間的知能の核心を突いていると思われる。我々は、行動計測や心理学実験で人間を調べる一方、タスクの力学と情報構造の解析や、ヒューマノイドロボットでの行動実現などを通して、その解明を進めている。

身体性に基づく動的秩序形成としての行動創発

多数の非線形要素が相互作用すると様々な秩序状態が発生し、移り変わる。それが身体・環境の構造と呼応して、状況ごとに新たな行動や認知のパターンを生み出す。これが、複雑な脳と身体を持つ人間の知能の発生原理の重要な側面であり、プログラムなしに状況適応行動ができるロボットの構成論になると考え、研究を進めている。

赤ちゃんロボットの認知発達

常に変動する人間の認知は発達論なしに正しく理解できない。人間の赤ちゃんは、胎内で既に学習を始め、全身で環境に働きかけ、感じながら、自己の身体、行動、物体、他者などの概念を獲得し、感情も発達していく。これら全てに関わる模倣能力の発達を軸に、脳科学、心理学、計算論などを総合してモデル構築とロボット実験を進めている。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

國吉康夫・他編、(『シリーズ「身体とシステム」全6巻』)、2001年～2002年、金子書房。(アフォーダンスと行為 他)

『AI事典』、2003年、共立出版。(分担執筆、pp.14-15「環境との相互作用」、pp.118-119「模倣」)

『知能の謎』、2004年、講談社。(多数分担執筆:担当項目 pp.8-44「序論」, pp.57-81「アプローチO」)

『人と共存するコンピュータ・ロボット学』、2004年、オーム社。(多数分担執筆:担当項目第6章, pp.209-214「ヒューマンインフォマティクスの方向性」, pp.240-251「非線形力学系を用いた力学的情報処理の設計」, pp.270-281「実世界とのインタラクションを行」)

F. Iida, R. Pfeifer, L. Steels and Y. Kuniyoshi eds., *Embodied Artificial Intelligence, International Seminar, Dagstuhl Castle, Germany, July 7-11, 2003, Revised Selected Papers, (Lecture Notes in Artificial Intelligence)*, 3139, 2004.

『人工知能ハンドブック』、2004年9月、共立出版。(分担執筆、「模倣学習」「教示と学習」)

論文等

O. Stasse, Y. Kuniyoshi and G. Cheng, "Development of a Biologically Inspired Real-Time Visual Attention System," *Biologically Motivated Computer Vision, (Lecture Notes in Computer Science)*, 1811, 2000, Springer-Verlag, pp. 150-159.

G. Cheng and Y. Kuniyoshi, "Complex Continuous Meaningful Humanoid Interaction: A Multi Sensory-Cue Based Approach," *Proceedings of IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2000, pp. 2235-2242.【査読有】

O. Stasse and Y. Kuniyoshi, "PredN: Achieving efficiency and code re-usability in a programming system for complex robotic applications," *Proceedings of IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2000, Proceedings of IEEE International Conference on Robotics and Automation, pp. 81-87.【査読有】

O. Stasse, Y. Kuniyoshi and G. Cheng, "Development of a Biologically Inspired Real-Time Visual Attention System," *Proceedings of the First IEEE International Workshop on Biologically Motivated Computer Vision (BMCV2000)*, 2000, pp. 150-159.【査読有】

Y. Kuniyoshi, S. Rougeaux, O. Stasse, G. Cheng and A. Nagakubo, "A Humanoid Vision System for Versatile Interaction," *Proceedings of the First IEEE International Workshop on Biologically Motivated Computer Vision (BMCV2000)*, 2000, pp. 512-526.【査読有】

G. Cheng, A. Nagakubo and Y. Kuniyoshi, "Continuous Humanoid Interaction: An Integrated Perspective - Gaining Adaptivity, Redundancy, Flexibility - In One," *Proc. of First IEEE-RAS International Conference on Humanoid Robots*, 2000.【査読有】

A. Nagakubo, Y. Kuniyoshi and G. Cheng, "Development of a High-Performance Upper-Body Humanoid System," *Proceedings of IEEE International Conference on Intelligent Robot and Systems (IROS)*, vol. 3, 2000, pp. 1577-1583.【査読有】

Mohammed Yeasin and Yasuo Kuniyoshi, "Detecting and Tracking Human Face and Eye Using an Space-Varying Sensor and an Active Vision Head," *IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR)*, 2000, pp. 1-6.【査読有】

宮腰清一・多賀巖太郎・國吉康夫・長久保晶彦、「神経振動子を用いた3次元2足足踏みシミュレーション -- ヒューマノイドの実世界内行動を目指して」、『日本ロボット学会誌』、18巻、1号、2000年、pp. 87~93.【査読有】

國吉康夫、「模倣ロボットは人間的知能を獲得するか?」、『学術月報』、153巻、9号、2000年、pp. 951~958。

國吉康夫・長久保、「身体性に基づく認知とヒューマノイド」、『バイオメカニズム学会誌』、124巻、4号、2000年、pp. 219~224。

宮腰清一・多賀巖太郎・國吉康夫、「神経振動子のパラメータ自動調整機構」、『第5回ロボティクスシンポジウム』、2000年、pp. 301~306。

國吉康夫・佐々木正人、「ヒューマノイドのコンセプトと実践ーブルックス以降、特集「ロボットー身体性の冒険ー」、『現代思想』、2000年4月。

G. Cheng and Y. Kuniyoshi, "Real-Time Mimicking of Human Body Motion by a Humanoid Robot," *Proc. of The 6th International Conference on Intelligent Autonomous Systems (IAS2000)*, 2000.7, Venice, Italy, pp. 273-280.【査読有】

Y. Kiuchi, Y. Kuniyoshi, T. Mishima, H. Mizoguchi and T. Shigehara, "Recognizing multiple moving objects by foveated vision," *Proc. of 2000 International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2000)*, 2, 2000.7.11-2000.7.13, pp. 881-884.【査読有】

Kuniyoshi, S. Rougeaux, O. Stasse, G. Cheng and A. Nagakubo, "A Humanoid Vision System for Versatile Interaction," *Biologically Motivated Computer Vision, (Lecture Notes in Computer Science)*, 1811, 2001, Springer-Verlag, pp. 512-526.

高橋正仁・宮腰清一・國吉康夫・柿倉正義、「振動子を用いた脚の振りにより引き起こされる身体の振りの制御」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年、pp. 1151~1152。

宮腰清一・CHENG GORDON・國吉康夫、「コンパス状脚伸縮歩行モデルを用いたヒト類似足裏形状形成」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年、pp. 739~740。

山本知幸・宮腰清一・國吉康夫、「全身運動計測用マーカーセットについて: the ETL/HH marker set の概要と特徴」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年、pp. 597~598。

萬恭明・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「視覚・運動融合学習に基づく腕動作の原始模倣モデル」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年、pp. 403~404。

宮腰清一・Gordon Cheng・國吉康夫、「脚伸縮歩行モデルの坂道上歩行」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年、pp. 47~48。

村上好文・西脇光一・加賀美聡・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「並列支持機構を持つ人間型ロボット用6軸力センサの非干渉化構造の研究」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年。

但馬竜介・水内郁夫・吉海智晃・長嶋功一・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「球面ジョイントを用いた人間型ロボットの四肢構造ー脊椎を有する全身型腱駆動ロボット“Kenta”の開発(その3)ー」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年。

和井田寛則・稲葉雅幸・國吉康夫・井上博允、「緩衝行動研究のための小型ヒューマノイドロボットの開発」、『第19回日本ロボット学会学術講演会論文集』、2001年。

山本知幸・宮腰清一・國吉康夫、「全身運動計測用マーカーセット ETL/HH について: その概要と特徴」、『第22回バイオメカニクス学術講演会(SOBIM2001)予稿集』、2001年、pp. 11~14。

高橋正仁・宮腰清一・國吉康夫・柿倉正義、「振動子を用いた脚の振りにより引き起こされる身体の振りの制御」、『電気学会 電子・情報・システム部門大会 講演論文集』、2001年、pp. 117~118。

G. Cheng, A. Nagakubo and Y. Kuniyoshi, "Continuous Humanoid Interaction: An Integrated Perspective - Gaining Adaptivity, Redundancy, Flexibility - In One," *Robotics and Autonomous Systems*, 37, no. 2-3, 2001, pp. 2-3.【査読有】

Y. Kuniyoshi, G. Cheng, A. Nagakubo and ETL-Humanoid, "A Research Vehicle for Open-ended Action Imitation," *Proc. of International Symposium on Robotics Research*, 1, 2001, pp. 42-49.【査読有】

Satoshi Kagami, Koichi Nishiwaki, James Kuffner, Kei Okada, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Low-Level Autonomy of the Humanoid Robots H6 & H7," *Proc. of International Symposium on Robotics Research*, 2001, pp. 50-59.【査読有】

Tomoyuki Yamamoto and Yasuo Kuniyoshi, "Harnessing the robot's body dynamics: a global dynamics approach," *Proc. of 2001 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2001)*, 2001, pp. 518-525.【査読有】

Akihiko Nagakubo, Yasuo Kuniyoshi and Gordon Cheng, "ETL-Humanoid - A High-Performance Full Body Humanoid System for Versatile Actions," *Proc. of 2001 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2001)*, 2001, pp. 1087-1092.【査読有】

M. Asada, K. F. MacDorman, H. Ishiguro and Y. Kuniyoshi, "Cognitive developmental robotics as a new paradigm for the design of humanoid robots," *Robotics and Autonomous Systems*, 37, no. 2-3, 2001, pp. 185-193.【査読有】

Tomoyuki Yamamoto and Yasuo Kuniyoshi, "A Global Dynamics Approach," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2002)*, 2002, pp. 2467-2472.【査読有】

Hiroyuki Nakai, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Metamorphic Robot Made of Low Melting Point Alloy," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ Intl. Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2002)*, 2002, pp. 2025-2030.【査読有】

James Kuffner, Koichi Nishiwaki, Satoshi Kagami, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Self-Collision Detection and Prevention for Humanoid Robots," *Proceedings of the 2002 IEEE International Conference on Robotics & Automation*, 2002, pp. 2265-2270.【査読有】

Koichi Nishiwaki, Satoshi Kagami, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Toe Joints that Enhance Bipedal and Fullbody Motion of Humanoid Robots," *Proceedings of the 2002 IEEE International Conference on Robotics & Automation*, 2002, pp. 3105-3110.【査読有】

Ikuo Mizuuchi, Ryosuke Tajima, Tomoaki Yoshikai, Daisuke Sato, Koichi Nagashima, Masayuki Inaba, Yasuo Kuniyoshi and Hirochika Inoue, "The Design and Control of the Flexible Spine of a Fully Tendon-Driven Humanoid "Kenta"," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ Intl. Conference on Intelligent Robots and Systems EPFL*, 2002, pp. 2527-2532.【査読有】

Mihoko Otake, Yoshiharu Kagami, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Inverse Kinematics of Gel Robots made of Electro-Active Polymer Gel," *Proceedings of the 2002 IEEE International Conference on Robotics & Automation*, 2002, pp. 3224-3229.【査読有】

Satoshi Kagami, Koichi Nishiwaki, James Kuffner, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Online 3D Vision, Motion Planning and Bipedal Locomotion Control Coupling System of Humanoid Robot : H7," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ Intl. Conference on Intelligent Robots and Systems EPFL*, 2002, pp. 2557-2562.【査読有】

Koichi Nishiwaki, Satoshi Kagami, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Online Generation of Humanoid Walking Motion based on a Fast Generation Method of Motion Pattern that Follows Desired ZMP," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems EPFL*, 2002, pp. 2684-2689.【査読有】

Kei Okada, Yasuyuki Kino, Fumio Kanehiro, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "Rapid Development System for Humanoid Vision-based Behaviors with Real-Virtual Common Interface," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems EPFL*, 2002, pp. 2515-2520.【査読有】

Koichi Nishiwaki, Yoshifumi Murakami, Satoshi Kagami, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "A Six-axis Force Sensor with Parallel Support Mechanism to Measure the Ground Reaction Force of Humanoid Robot," *Proceedings of the 2002 IEEE International Conference on Robotics & Automation*, 2002, pp. 2277-2282.【査読有】

Yasuo Kuniyoshi, Yasuaki Yorozu, Yoshiyuki Ohmura, Takuya Otani and Tomoyuki Yamamoto, "From Humanoid Embodiment to Theory of Mind," *Proceedings of the First International Workshop on Man-Machine Symbiotic Systems*, 2002, pp. 293-310.【査読有】

大谷卓也・國吉康夫・稲葉 雅幸・井上博允、「視覚情報の特徴学習による形状識別に関する研究」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、1A26、2002 年。【査読有】

下崎守朗・國吉康夫、「記憶に基づいた時系列パターン予測を行うニューラル・ネットワークモデル」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、3H15、2002 年。【査読有】

鈴木真介・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「時系列記憶に基づく視覚的注意の切り替え」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、3H14、2002 年。【査読有】

深野亮・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「模倣学習を目的としたロボットハンドの開発」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、3E23、2002 年。【査読有】

福本康隆・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「物体操作行為の文脈主導型認識と遂行」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、3H12、2002 年。【査読有】

米倉将吾・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「情動を伴う知覚のカテゴリー化に関するモデル」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、3H11、2002 年。【査読有】

S. Miyakoshi, G. Taga and Y. Kuniyoshi, "Stabilization of Periodic Motions – from Juggling to Bipedal Walking –," *Proc. of International Symposium on Adaptive Motion of Animals and Machines (AMAM)*, 2002.8, Montreal, Canada.【査読有】

Akihiko Nagakubo, Yasuo Kuniyoshi and Gordon Cheng, "The ETL-Humanoid System -- A High-Performance Full Body Humanoid System for Versatile Real World Interaction," *Advanced Robotics*, 17, no.2, 2003.【査読有】

Yasuo Kuniyoshi and Moriaki Shimozaki, "A Self-Organizing Neural Model for Context-Based Action Recognition," *Proceedings of the IEEE EMBS Conference on Neural Engineering*, 2003, pp. 442-445.【査読有】

Yasuo Kuniyoshi, Yasuaki Yorozu, Masayuki Inaba and Hirochika Inoue, "From Visuo-Motor Self Learning to Early Imitation -- A Neural Architecture for Humanoid Learning," *Proceedings of the IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2003, pp. 3132-3139.【査読有】

Tomoyuki Yamamoto and Yasuo Kuniyoshi, "Flexibility of Human Rising: towards understanding and design of complex dynamical behaviors," *International Conference on Climbing and Walking Robots (CLAWER03)*, 2003, pp. 27-34.【査読有】

Yoshiyuki Ohmura, Koji Terada and Yasuo Kuniyoshi, "Analysis and Control of Whole Body Dynamic Humanoid Motion -- Experiments on a Roll-and-Rise Motion," *Proceedings of the International Conference on Humanoid Robotics*, 2003.【査読有】(CD-ROM)

Yasuo Kuniyoshi, Yoshiyuki Ohmura, Koji Terada, Tomoyuki Yamamoto and Akihiko Nagakubo, "Exploiting the Global Dynamics Structure of Whole-Body Humanoid Motion -- Getting the "Knack" of Roll-and-Rise Motion," *Proceedings of the International Symposium on Robotics Research*, 2003.【査読有】

Moriaki Shimozaki and Yasuo Kuniyoshi, "Moriaki Shimozaki, Yasuo Kuniyoshi, Integration of Spatial and Temporal Contexts for Action Recognition by Self Organizing Neural Networks, Proceedings of the IEEE International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2003, pp. 2385-2391【査読有】," *Proceedings of the IEEE International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2003.【査読有】

Koji Terada, Yoshiyuki Ohmura and Yasuo Kuniyoshi, "Analysis and Control of Whole Body Dynamic Humanoid Motion -- Experiments on a Roll-and-Rise Motion," *Proceedings of the IEEE International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2003.【査読有】

寺田耕志・大村吉幸・國吉康夫、「ヒューマノイドロボットのダイナミックな起き上がり運動の解析と制御」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(2A15)

大村吉幸・寺田耕志・國吉康夫、「ヒューマノイドの全身ダイナミック動作の実現」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(2A16)

池谷公志・國吉康夫・稲葉雅幸・井上博允、「連想記憶モデルを用いた予測機構に基づく原初的視覚における注視行動のモデル化」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(3B16)

深野亮・小林匠・篠原雄介・國吉康夫・大津展之、「多指ハンドによる物体への働きかけとなじみに基づく物体操作学習情報の抽出」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(3B19)

米倉将吾・國吉康夫、「行動戦略切り替えのための神経回路網における非線形共鳴マップの創発」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(3B35)

大村吉幸・國吉康夫、「ヒューマノイドの関節に内蔵されたトルクセンサを用いた関節フリー制御」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(3D18)

岡本匡史・國吉康夫、「時間差ヒストグラムと大津の方法を用いたブラインド音源分離」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(3F11)

吉井強・大津展之・國吉康夫、「移動ロボットにおける随伴行動の適応的生成」、『第 21 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003 年。(3J26)

國吉康夫、「Overview of Human Informatics and Introduction to Humanoid Interaction」、『COE 実世界情報システム・シンポジウム』、2003 年。

國吉康夫、「ロボットの知能 — 創発実体主義の挑戦 —」、『計測と制御』、42 巻、6 号、2003 年、pp. 497~503。

A. Nagakubo, Y. Kuniyoshi and G. Cheng, "The ETL-Humanoid System -- A High-Performance Full Body Humanoid System for Versatile Real World Interaction," *Advanced Robotics*, 17, no.2, 2003.【査読有】

Yasuo Kuniyoshi, Yasuaki Yorozu, Yoshiyuki Ohmura, Koji Terada, Takuya Otani, Akihiko Nagakubo and Tomoyuki Yamamoto, "From Humanoid Embodiment to Theory of Mind," F. Iida, R. Pfeifer, L. Steels and Y. Kuniyoshi eds., *Embodied Artificial Intelligence, International Seminar, Dagstuhl Castle, Germany, July 7-11, 2003, Revised Selected Papers, (Lecture Notes in Artificial Intelligence)*, 3139, 2004. (ISBN: 3-540-22484-X)

國吉康夫、「機械はコツを身につけられるか」、『日経サイエンス』、34 巻、1 号、2004 年、pp. 28~33。

Yasuo Kuniyoshi, Yoshiyuki Ohmura, Koji Terada, Akihiko Nagakubo, Shin'ichiro Eitoku and Tomoyuki Yamamoto, "Embodied Basis of Invariant Features in Execution and Perception of Whole Body Dynamic Actions --- Knacks and Focuses of Roll-and-Rise Motion," *Robotics and Autonomous Systems*, 48, no.4, 2004, pp. 189-201.【査読有】

Yasuo Kuniyoshi, Yoshiyuki Ohmura, Koji Terada and Akihiko Nagakubo, "Dynamic Roll-And-Rise Motion By An Adult-Size Humanoid Robot," *International Journal of Humanoid Robotics*, 1, no.3, 2004, pp. 497-516.【査読有】

Yasuo Kuniyoshi and Shinsuke Suzuki, "Dynamic Emergence and Adaptation of Behavior Through Embodiment as Coupled Chaotic Field," *Proc. IEEE Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems*, 2004, pp. 2042-2049.【査読有】

Shogo Yonekura and Yasuo Kuniyoshi, "Emergence of Multiple Sensory-Motor Response Patterns from Cooperating Bursting Neurons," *Proc. IEEE Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems*, 2004, pp. 1377-1382.【査読有】

Ryo Fukano, Yasuo Kuniyoshi, Takumi Kobayashi, Takuya Otani and Nobuyuki Otsu, "Statistical Manipulation Learning of Unknown Objects by a Multi-Fingered Robot Hand, Proc. Int. Conf. on Humanoid Robotics," *Proc. Int. Conf. on Humanoid Robotics*, paper#65, 2004.【査読有】(CD-ROM)

深野亮・大谷卓也・國吉康夫、「ロボットハンドによる作業の統計的学習」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(ROBOMEC04)、名古屋、JUN 2004、CD-ROM』、2004 年、名古屋。(CD-ROM)

深野亮・國吉康夫・小林匠・大津展之、「多指ロボットハンドによる運動拘束の認識 — 特徴量の改良とクラスタリングの導入」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会講演予稿集、CD-ROM、2004。』、2004 年。(CD-ROM)

鍋島厚太・國吉康夫、「視触覚の時間的統合に基づくロボット身体像の適応的延長モデル」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会講演予稿集』、2004 年。(CD-ROM)

石黒勝彦・國吉康夫・大津展之、「インターモーダル学習による概念の獲得」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(ROBOMEC04)』、2004 年 6 月、名古屋。(CD-ROM)

大村吉幸・寺田耕志・國吉康夫、「ヒューマノイドの安定全身動作と制御システム」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(ROBOMEC04)』、2004 年 6 月、名古屋。(CD-ROM)

寺田耕志・大村吉幸・國吉康夫、「ヒューマノイドロボットのコツに基づく全身運動の模倣」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会(ROBOMEC04)』、2004 年 6 月、名古屋。(CD-ROM)

佐藤知正・稲葉雅幸・國吉康夫・森武俊・田所諭、「知能ロボットによる模倣の構成論的研究」、『第 5 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2004)』、2004 年 12 月、つくば。(2E1-1.pdf)

深野亮・國吉康夫、「チンパンジー型模倣を目指したロボットシステムの設計」、『第 5 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2004)』、2004 年 12 月、つくば。(2E1-2.pdf)

寺田耕志・國吉康夫、「大域的力学構造を用いた模倣運動の生成法」、『第 5 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2004)』、2004 年 12 月、つくば。(2E2-5.pdf)

國吉康夫、「ロボット模倣の創発・発達の構成論にむけて」、『バイオメカニズム学会誌』、29 巻、1 号、2005 年。

國吉康夫・大村吉幸・寺田耕志・長久保晶彦、「等身大ヒューマノイドロボットによるダイナミック起上がり行動の実現」、『日本ロボット学会誌』、2005 年。【査読有】(掲載予定)

口頭発表等

Y. Kuniyoshi, A. Nagakubo, L. Berthouze and G. Cheng, "Interfacing Complex Interaction Dynamics Through Their Boundaries," *ICECCS2000*, 2000. (ICECCS2000)

佐藤知正・國吉康夫・稲葉雅幸・森武俊・田所諭、「模倣の工学」、『計測自動制御学会 SI シンポジウム』、2000 年。

國吉康夫、「人間の模倣能力のモデル化に向けて」、『計測自動制御学会 SI シンポジウム』、2000 年。

Yasuhiko Kiuchi, Yasuo Kuniyoshi, Taketoshi Mishima, Hiroshi Mizoguchi and Takaomi Shigehara, "Recognizing multiple moving objects by foveated vision," *Proc. ITCCSCC*, 2000.

國吉康夫, "演題: A Humanoid Vision System for Versatile Interaction," *生体規範型計算機視覚に関する国際会議 (IEEE International Conference on Biologically Motivated Computer Vision)*, 2000.5.18. (招待講演)

Yasuo Kuniyoshi, Akiiko Nagakubo, Luc Berthouze and Gordon Cheng, "Embodiment, Emergence and Intentionality - A Robotic Point of View," *Proceedings of the 6th Symposium on Sohatsu System*, 2000.8, Toyama, Japan.

Yasuhiko Kiuchi, Yasuo Kuniyoshi and Taketoshi Mishima, "Selective Attention and Finding/Pursuing of Hand form Foveated Moving Images including Multiple Movement Regions for Motion Recognition," *Proc. ITCCSCC*, 2001. (Proc. ITCCSCC, 2001)

Yasuhiko Kiuchi, *Science of Imitation*, 2001.7, Advanced Science Institute.

Yasuhiko Kiuchi, *International Symposium on RoboCup*, 2002, Cooperation by Observation. (基調講演)

Yasuhiko Kiuchi, "Action Segmentation and Embodiment in Robots -- Synthetic Study of Imitation --," *International Symposium on Humanoid Science*, 2002.1.26, Oita, Japan. (招待講演)

Yasuhiko Kiuchi, "Action Segmentation and Embodiment in Robots -- Synthetic Study of Imitation --," *Int. Symp. On Humanoid Science*, 2002.1.26. (招待講演)

國吉康夫, "ロボットにおける行為分節と身体性," 第46回システム制御情報学会研究発表講演会, 2002.5.25. (招待講演)

Yasuhiko Kiuchi, *International Symposium on RoboCup*, 2002.6, Cooperation by Observation, The RoboCup Federartion, Fukuoka, Japan. (招待講演)

Yasuhiko Kiuchi, "Cooperation by Observation," *RoboCup International Symposium 2002*, 演題: *Cooperation by Observation*, 2002年6月25日【招待講演】, 2002.6.25. (招待講演)

Yasuo Kuniyoshi, "From Humanoid Embodiment to Theory of Mind," *COE International Symposium on Development of Neural Networks and Emergent Behavior*, 2003.3, Tokyo. (招待講演)

Yasuo Kuniyoshi, Yasuaki Yorozu, Yoshiyuki Ohmura, Takuya Otani and Tomoyuki Yamamoto, "From Humanoid Embodiment to Theory of Mind," *Dagstuhl Workshop on Embodied Artificial Intelligence*, 2003.7.11, Karlsruhe and Munich, Germany. (招待講演)

國吉康夫, 「身体-環境相互作用の不変構造から創発するヒューマノイドの心」、『日本心理学会第67回大会 シンポジウム S06「わが国におけるアフォーダンスの展開」』、2003年9月、東京大学本郷キャンパス。(招待講演)

國吉康夫, 「演題: 身体-環境相互作用の不変構造から創発するヒューマノイドの心」、『日本心理学会第67回大会シンポジウム招待講演』、2003年9月13日。(招待講演)

Y. Kuniyoshi, Y. Yorozu, Y. Ohmura, K. Terada, T. Otani and T. Yamamoto, "From Humanoid Embodiment to Theory of Mind," *Workshop on Bilateral Paradigms of Human and Humanoid, IEEE International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2003.10.27, Las Vegas. (招待講演)

石黒勝彦・大津展之・國吉康夫, 「音声・画像入力からの概念獲得のためのインターモーダル学習」、『電子情報通信学会パターン認識・メディア理解研究会 (PRMU)』、2004年、電子情報通信学会 パターン認識・メディア理解研究会 (PRMU)。

Yasuhiko Kiuchi, "From Humanoid Embodiment to Theory of Mind," *COE International Symposium on Development of Neural Networks and Emergent Behavior*, 2004.3.4, Tokyo. (招待講演)

國吉康夫, 「人間の心、ロボットの心」、『ROBODEX フォーラム』、2004年3月24日。(基調講演)

國吉康夫, 「胎内学習と初期認知発達の構成論的モデル化の試み」、『日本赤ちゃん学会第4回学術集会招待講演』、2004年4月24日。(招待講演)

Yasuo Kuniyoshi, 「Embodied Origin of Communication」、『第3回新・赤ちゃん学国際シンポジウム基調講演』、2004年11月1日。(基調講演)

一般向け講演等

國吉康夫, 「人間の心、ロボットの心」、『ROBODEX フォーラム』、2004年3月24日、ROBODEX フォーラム。(招待講演)

坂村 健 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われており、組込システム分野で世界でもっとも大きな実績をあげている。また、漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多国語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて構築されたBTRONでは17万字以上の文字を扱えるシステムの構築に成功している。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を、世界に先駆けて提唱した。これは、2000年以後の情報分野の学界・産業界をリードするコンセプトとして受け入れられ、このユビキタスコンピューティングに関する研究開発が世界的に盛んに行われるようになった。研究室では、Context-aware computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行い、世界的な成果を達成している。

Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、国立科学博物館、日本科学未来館といった、国内の主要な博物館での展示に採用された。この研究では複数のユーザ同時に共有できる三次元仮想空間システムMMUD (Multi-Media Multi-User Dungeon) システムの研究開発を行い実用システムレベルにまで完成させた。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

坂村健編、『デジタルミュージアム2000』、2000年、東京大学総合研究博物館。

坂村健、『情報文明の日本モデル』、2001年、PHP研究所。

坂村健、『21世紀日本の情報戦略』、2002年、岩波書店。

坂村健、『21世紀日本の情報戦略』、2002年、Dongbangbooks。(韓国語版)

坂村健、『ユビキタスコンピュータ革命』、2002年、角川書店。

坂村健、『ユビキタスコンピュータ革命』、2002年、Dongbangbooks。(韓国語版)

坂村健編、『デジタルミュージアム3』、2002年、東京大学総合研究博物館。

坂村健・清水謙太郎・越塚登、『高等学校検定教科書:情報A』、2002年4月、数研出版。

坂村健、川高嗣・須藤修・西垣通・濱田純一・吉見俊哉・米本昌平編、『情報学事典』、2002年6月、弘文堂。

T-Engineフォーラム編、坂村健監修、『T-Kernel標準ハンドブック』、2003年、パーソナルメディア。

坂村健・清水謙太郎・越塚登、『大人のための『情報』教科書』、2003年、数研出版。

坂村健・清水謙太郎・越塚登、『高等学校検定教科書:情報 B』、2003 年 4 月、数研出版。

坂村健・清水謙太郎・越塚登、『高等学校検定教科書:情報 C』、2003 年 4 月、数研出版。

坂村健、竹村健一、『すべてのモノにコンピュータを、ユビキタス社会、始まる』、2004 年、太陽企画出版。

坂村健、『ユビキタス、TRON に出会う『どこでもコンピュータ』の時代へ』、2004 年、NTT 出版。

坂村健、『トロンの夢・ひとの夢』、2004 年、協和発酵工業。

坂村健、『ユビキタス社会がやってきた』、『NHK 人間講座』、2004 年、日本放送出版協会。

論文等

M. Terada, K. Mori, K. Ishii, S. Hongo, T. Usaka, N. Koshizuka and K. Sakamura, "TENE: An Architecture for Distributed SmartCard," *Proceedings of the 2nd International Conference on Security in Pervasive Computing*.

坂村健・越塚登・西山智、「ユビキタスコンピューティング環境を実現する基盤ネットワークプロトコルの研究開発」、『平成 15 年度通信・放送機構(TAO)研究発表会予稿集』。

Kimio Kuramitsu, Hajime Matsuda, Tadashi Murakami and Ken Sakamura, "TTP: Secure ACID Transfer Protocol for Electronic Ticket between Personal Tamper-Proof Devices," *Proceedings of the 24th Annual International Computer Software & Applications Conference (IEEE COMPSAC 2000)*, 2000, pp. 87-92.【査読有】

Kimio Kuramitsu and Ken Sakamura, "PCO: EC Content Description Language Supporting Distributed Schemas across the Internet," *Transactions of Information Processing Society of Japan*, 41, no.1, 2000.【査読有】

Kimio Kuramitsu and Ken Sakamura, "Distributed Object-Oriented Schema for XML-based Electronic Catalog Sharing Semantics among Businesses," *Proceedings of the First International Conference of Web Information Systems Engineering (WISE2000)*, 2000, pp. 81-90.【査読有】

倉光君郎 and 坂村健, "複合コンテンツサービス:消費者指向のインターネットビジネス協調モデルの提案," *情報処理学会論文誌*, 41, no.11, 2000, pp. 2967-2977.【査読有】

Kimio Kuramitsu and Ken Sakamura, "Composite Content Supply-Chain for the Interoperability of XML-Based Electronic Business," *Proceedings of International Conference of Information Technology for Business Management (IFIP World Congress ITBM2000)*, 2000, pp. 376-383.【査読有】

倉光君郎・坂村 健、「セマンティック Web 全文検索エンジン」、『情報処理学会アドバンスデータベースシンポジウム(DBWeb2000)予稿集』、2000 年。

Yukihoko Shigesada, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "NetBTRON," *IFIP ICCT2000/WCC2000*, 2000.6, Beijing, China.【査読有】

Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "Tokyo University Digital Museum," *Proceedings of the 2000 Kyoto International Conference on Digital Libraries: Research and Practice (Nov,2000)*, Kyoto University, The British Library, and NSF, 2000.11, IEEE CS Press, pp. 179-186.【査読有】

越塚登・重定如彦・新堂克徳・今田庸介・石渡要介・鶴坂智則・坂村健、「ハイパーギャラリー:仮想展示空間と実展示空間を融合した新しい展示空間」、『第八回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS 2000)』、2000 年 12 月、日本ソフトウェア科学会。

Kimio Kuramitsu, Tadashi Murakami and Ken Sakamura, "TRN: Tamper Resistance Network," *情報処理学会論文誌*, 42, no.8, 2001, pp. 2114-2122.【査読有】

Kimio Kuramitsu and Ken Sakamura, "Semistructured Object: A Ubiquitous Data Model," *情報処理学会論文誌: データベース*, 42, no.No.SIG15, 2001, pp. 40-49.【査読有】

Kimio Kuramitsu and Ken Sakamura, "Openbasket: a Pick-and-Droppable Shopping Agent Placing Order to Multiple Electronic Storefronts," *Proceedings of the 2001 Symposium on Applications and the Internet (IEEE/IPSJ SAINT2001)*, 2001.【査読有】

重定如彦・越塚登・坂村健、「デジタルミュージアムのためのキオスク型 WWW ブラウザ」、『電子情報通信学会論文誌』、J85-D-1 巻、3 号、2001 年、pp. 262~273.【査読有】

重定如彦・越塚登・坂村健、「分散ハイパーメディア OS Net-BTRON におけるハイパーメディアサービス管理機構」、『情報処理学会論文誌』、42 巻、6 号、2001 年、pp. 1662~1675.【査読有】

Ken Sakamura and Noboru Koshizuka, "The eTRON Wide-Area Distributed-System Architecture for E-Commerce," *IEEE Micro*, 21, no.6, 2001.【査読有】

Kimio Kuramitsu and Ken Sakamura, "Electronic Tickets on Contactless Smartcard Database," *Proc. 13th International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA 2002)*, 2002.9, pp. 392-402.【査読有】

馬場章・越塚登・坂村健、「歴史学のデジタルミュージアム』の試み」、『情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん)2002』、2002 年 9 月。

Ken Sakamura, "Ubiquitous Computing: Making It a Reality," *ITU TELECOM World2003, Geneva Palexpo*, 2002.10.13, Geneva, pp. 1-9.

Ken Sakamura and Noboru Koshizuka, "The Open Realtime Embedded Systems Platform," *IEEE MICRO*, 22, no.6, 2002.12.

越塚登・坂村健、「eTRON: Entity and Economy TRON」、『第 19 回情報処理学会コンピュータセキュリティー研究会』、2002 年 12 月、pp. 61~66。

青野博・石井一彦・森謙作・本郷節之・越塚登・坂村健、「モバイル向け電子価値流通プラットフォームの研究」、『第 19 回情報処理学会コンピュータセキュリティー研究会』、2002 年 12 月、pp. 67~72。

Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "T-Engine Project: The Open Platform Project for Ubiquitous Computing," *Proc. First International Conference on Ubiquitous Computing (ICUC 2003), Korea, 2003*, pp. 185~190.【招待論文】、2003, pp. 185-190.

坂村健、「ユビキタスコンピューティング環境の実現にむけて」、『Microwave Workshop and Exhibition (MWE 2003)』、2003 年。

渡辺伸吾・西山智・越塚登・坂村健、「RFID を利用した everyday object の位置取得方式」、『Microwave Workshop and Exhibition (MWE 2003)』、2003 年、pp. 245~250。

新堂克徳・越塚登・坂村健、「非接触スマートカードを利用したユビキタスデジタルミュージアム」、『Microwave Workshop and Exhibition (MWE 2003)』、2003 年、pp. 251~256。

坂村健、「ユビキタス・コンピュータの時代へ」、『データベースと Web 情報システムに関するシンポジウム (DBWeb2003) 予稿集』、2003 年。(p. 31)

渡辺伸吾・西山智・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「ユビキタス環境のための非接触 IC カードを使用した位置検出方式」、『第一回ユビキタスコンピューティングシステム研究会』、2003 年、情報処理学会。

Katsunori Shindo, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "Ubiquitous Information System for Digital Museum using Smart Cards," *Proceedings of the SSGRR*, 2003.1.【査読有】

Katsunori Shindo, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "Large-scale Ubiquitous Information System for Digital Museum," *Proceedings of the 21th IASTED*, 2003.2.【査読有】

太田陽基・中尾康二・田中俊昭・西山智・越塚登・坂村健、「非接触 IC カードにおける X.509 証明書のコンパクト化に関する一考察」、『情報処理学会第 65 回全国大会』、2003 年 3 月。

西山智・渡辺伸吾・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「ユビキタスサービスのための屋内センサーネットワークの提案」、『情報処理学会第 65 回全国大会』、2003 年 3 月。

渡辺伸吾・西山智・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「ユビキタス環境のための非接触 IC カードを使用した位置検出方式の提案」、『情報処理学会第 65 回全国大会』、2003 年 3 月。

坂村健、「デジタルミュージアムからユビキタスミュージアムへ」、『人工知能学会誌』、18 巻、3 号、2003 年 5 月、pp. 259～266。

Ken Sakamura and Noboru Koshizuka, "T-Engine: The Open, Real-time Embedded-Systems Platform for Ubiquitous Computing," *Proc. 2003 Symposium on VLSI Circuits*, 2003.6.

Ken Sakamura and Noboru Koshizuka, "Technologies for Computing Everywhere Environments," *Korea Information Processing Society Review*, 2003.7, pp. 11-22.

渡辺伸吾・西山智・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「ユビキタス環境のための非接触 IC カードを使用した位置検出方式の実装と評価」、『FITS2003 第二回情報科学技術フォーラム研究報告』、2003 年 9 月。

西山智・渡辺伸吾・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「屋内用センサーネットワーク用ネットワークプロトコルの実装」、『FITS2003 第二回情報科学技術フォーラム研究報告』、2003 年 9 月。

Ken Sakamura, "Ucode Architecture and RFID," *Proc. 2004 RFID International Symposium (Korea)*, 2004, pp. 3-24.

坂村健、「ユビキタス時代の半導体技術」、『応用物理』、73 巻、2004 年、1115+。

坂村健、「ユビキタス時代のシステム技術」、『映像情報メディア学会誌』、59 巻、1 号、2004 年、pp. 27～32。

坂村健、「解説：特集『電脳都市』2」、『計測と制御』、43 巻、2 号、2004 年、pp. 52～58。

坂村健、「ユビキタス・コンピューティング社会にむけて」、2004 年、シリコンシーベルトサミット 2004 福岡、pp. 3～10。

山下春造・大熊康介・早川幹・小林真輔・越塚登・坂村健、「P11 型アクティブチップのアーキテクチャ」、『電子情報通信学会 2004 年ソサイエティ大会』、2004 年。(A-20-9, p.203)

下川功・山下春造・大熊康介・早川幹・小林真輔・越塚登・坂村健、「P11 型アクティブチップの無線輻射制御方式」、『電子情報通信学会 2004 年ソサイエティ大会』、2004 年。(A-20-10, p.204)

藤原亮介・志田雅昭・水垣健一・前木陽・小久保優・大熊康介・早川幹・越塚登・坂村健・小林真輔、「P2 型アクティブチップに向けた低電力 UWB 無線方式の検討」、『電子情報通信学会 2004 年ソサイエティ大会』、2004 年。(A-20-11, p.205)

下川功・宮崎祐行・志田雅昭・大熊康介・早川幹・越塚登・坂村健、「センサーネット向け無線通信システムにおけるマルチプルアクセス方式の検討」、『電子情報通信学会 2004 年総合大会』、2004 年 3 月。

李海量・越塚登・坂村健、「コンテキスト情報を利用して曖昧な音声入力の意味解決をする音声ユーザインタフェースシステム」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

松沢敬一・新堂克徳・越塚登・坂村健、「管理者による視認型認証を支援する IC カードを用いた本人確認システム」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

別所正博・鶴坂智則・越塚登・坂村健、「ユビキタス環境における緊急避難経路提示システムの提案」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

佐藤・豊山・田中・越塚登・坂村健、「組み込みシステムのプラットフォームの標準化によるソフトウェア資産の再利用性向上の評価」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

渡辺伸吾・西山智・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「既存ルータ混在環境におけるモバイル IP ハンドオーバーの高速・高信頼化の提案」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

宮崎真悟・石川千秋・鶴坂智則・小俣三郎・越塚登・坂村健、「組み込み機器に秘密共有機能を提供する SIM カード型セキュアチップの開発」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

西山智・渡辺伸吾・服部元・小野智弘・越塚登・坂村健、「モバイル端末における応用の要求に応じた通信メディアの使い分け方式の提案」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。

越塚登・坂村健、「ユビキタス ID 技術とその応用」、『電子情報通信学会誌』、87 巻、5 号、2004 年 5 月、pp. 374~378。

Shinsuke Kobayashi, Miki Hayakawa, Yasuyuki Okuma, Isao Shimokawa, Masaaki Shida, Shunzo Yamashita, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "T-Air: Low Power Wireless Sensor Network Platform for Ubiquitous Computing," *Shinsuke KobFirst International Workshop on Networked Sensing Systems (INSS)*, 2004.6.【査読有】

渡辺伸吾・西山智・越塚登・坂村健、「既存ルータ混在環境におけるモバイル IP ハンドオーバー高速・高信頼化」、『マルチメディア, 分散, 協調とモバイル(DICOMO2004)シンポジウム』、2004 年 7 月、情報処理学会。

小林真輔・越塚登・坂村健、「H.263 を用いた組み込みソフトウェア開発プラットフォーム:T-Engine の評価」、『DA シンポジウム, 情報処理学会シンポジウムシリーズ』、2004 号、2004 年 8 月、pp. 209~214。

寺田雅之・森謙作・石井一彦・本郷節之・鶴坂智則・越塚登・坂村健、「分散 IC カード環境のためのアーキテクチャの提案」、『Computer Security Symposium (CSS 2004)』、2004 年 10 月、情報処理学会コンピュータセキュリティ研究会。

西山智・山田満・越塚登・坂村健、「ユビキタスサービスのためのエージェントプラットフォームの提案」、『情報処理学会研究報告』、2004 年 11 月。(2004-DPS-120-2)

Lee Hoi Leong,, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "CASIS: A Context Aware Speech Interface System," *ACM International Conference on Intelligent User Interfaces 2005 (IUI 2005)*, 2005.1, pp. 231-238.【査読有】

小林真輔・早川幹・越塚登・坂村健、「T-Engine を用いた ISO18000-4 タグリーダライタのプロトタイプ設計」、『第 12 回 FPGA/PLD Design Conference ユーザープレゼンテーション論文集』、2005 年 1 月。

小林亜鈴・上向俊晃・井ノ上直己・小池淳・山田満・坂村健、「統合 PDA 端末の開発(1)~端末実装」、2005 年 3 月、信学総大。

松尾賢治・橋本真幸・小池淳・山田満・坂村健、「統合 PDA 端末の開発(2)~顔認証アプリケーションの実装と高速化」、2005 年 3 月、信学総大。

服部元・松本一則・菅谷史昭・小池淳・山田満・坂村健、「統合 PDA 端末の開発(3)~携帯端末のための Web ページ自動分割」、2005 年 3 月、信学総大。

石川彰夫・川田亮一・小池淳・山田満・坂村健、「統合 PDA 端末の開発(4)~3次元自由視点 VoD システムの実装」、2005 年 3 月、信学総大。

上向俊晃・小林亜鈴・井ノ上直己・小池淳・山田満・坂村健、「統合 PDA 端末の開発(5)~エラー耐性を強化した通信放送融合型データ配信システムの実装」、2005 年 3 月、信学総大。

加藤恒夫・河井恒・小池淳・山田満・坂村健、「統合 PDA 端末の開発(6)～分散型音声認証システムの実装」、2005 年 3 月、信学総大。

加藤 淳・藤内 俊一・諸隈 立志・坂村 健、「UNP: ユビキタス環境下における制御系ネットワークプロトコル」、『情報処理学会ユビキタスコンピューティング研究会 第 7 回研究発表会』、2005 年 3 月、情報処理学会ユビキタスコンピューティング研究会。

口頭発表等

坂村 健、「電腦生活の諸問題」、『日本学術会議シンポジウム』、2000 年 6 月、日本学術会議。

坂村 健、「韓国トロンシンポジウム基調講演」、2000 年 8 月、韓国トロン協会。

坂村 健、「トロンにおける産学連携プロジェクトの経緯」、2000 年 9 月、東京大学先端経済工学研究センター、東京大学先端経済工学研究センター。

坂村 健、「21 世紀の IT」、2000 年 10 月、中京大学、中京大学。

坂村 健、「デジタルミュージアム」、『文部省国際シンポジウム』、2000 年 11 月、国立民族学博物館、国立民族学博物館。

坂村 健、「21 世紀のマイクロプロセッサ基調講演」、2000 年 11 月 28 日、社団法人トロン協会、IEEE Computer Society。

坂村 健、『第 17 回トロンプロジェクトシンポジウム』、2000 年 12 月、東京デザインセンター。(基調講演)

坂村 健、「21 世紀のマイクロプロセッサ基調講演」、2001 年 10 月 9 日、社団法人トロン協会、ゲートシティホール。

坂村 健、『第 18 回トロンプロジェクトシンポジウム』、2001 年 12 月、ラフォーレ六本木。(基調講演)

坂村 健、「ユビキタスコンピューティング」、『日本学術会議シンポジウム』、2002 年 6 月、日本学術会議、日本学術会議。

坂村 健、「デジタルミュージアム」、『画像電子学会』、2002 年 6 月、井深ホール。

坂村 健、『画像電子ミュージアム』、2002 年 6 月 10 日、早稲田大学 国際会議場。

坂村 健、「ユビキタス社会の展望」、『モバイルコンピューティングとワイヤレス通信シンポジウム』、2002 年 10 月、独立行政法人産業技術総合研究所、独立行政法人産業技術総合研究所。

坂村 健、『データベース研究会』、2002 年 11 月、日本科学未来館。

坂村 健、『21 世紀のマイクロエレクトロニクスセミナー』、2002 年 11 月、トロン協会、大崎ゲートシティ。

坂村 健、『第 19 回トロンプロジェクトシンポジウム』、2002 年 12 月、ラフォーレ六本木。(基調講演)

坂村 健、「ユビキタス時代における建築・都市の変容と論理 ユビキタス・コンピューティングとは何か?」、『2003 年度日本建築学会大会』、2003 年、中部大学、中部大学。

坂村 健、『連続セミナー2002—次世代ネットワーク環境における基幹技術—』、2003 年 1 月、工学院大学、工学院大学。

坂村 健、『サイバーアシストシンポジウム』、2003 年 3 月、東京ビックサイト。

坂村 健、『第 1 回国際 CubeSat シンポジウム』、2003 年 3 月、国際文化会館。

坂村 健、『OA 学会』、2003 年 4 月、中央学院大学、中央学院大学。

坂村 健、『RSA Conference2003 Japan』、2003 年 6 月、東京国際フォーラム。

坂村 健、「TRON プロジェクトの 20 年」、『坂村健特別講演会』、2003 年 7 月、東京大学安田講堂。

坂村 健、『ACM 日本支部総会および特別講演会』、2003 年 7 月、東京理科大学森戸記念館。

坂村 健、『Asian Enterprise Open Source Conference』、2003 年 10 月、Singapore。

坂村 健、「ユビキタスコンピューティングが変える社会」、『東京大学社会情報研究所国際シンポジウム』、2003 年 10 月、東京大学弥生講堂・一条ホール。

坂村 健、『第 20 回トロンプロジェクトシンポジウム』、2003 年 12 月、東京国際フォーラム。(基調講演)

坂村 健、『第一回アジアユビキタス会議基調講演』、2003 年 12 月、パークタワーホール。

坂村 健、「どこでもコンピュータへの道—TRONによりコンピュータは生活者に近くなる」、『第 2 回武田シンポジウム』、2004 年 2 月、東大武田ホール。

坂村 健、『(社)電子情報通信学会 2004 年総合大会 基調講演』、2004 年 3 月、東京工業大学大岡山キャンパス。(基調講演)

坂村 健、『ナノ学会第 2 回大会 特別講演』、2004 年 5 月、学術総合センター 一橋記念講堂。

坂村 健、『国立情報学研究所オープンハウス特別講演』、2004 年 6 月、一橋記念講堂。

坂村 健、「ICタグが生み出すユビキタス社会」、『Advanced ATAC Seminar 2004 in Tokyo, 東京大学安田講堂, 2004 年 7 月』、2004 年 7 月、東京大学安田講堂。

坂村 健、「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成にむけて」、『21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第一回シンポジウム・基調講演』、2004 年 10 月、東京大学安田講堂。(基調講演)

坂村 健、「ユビキタス場所情報システムの可能性」、『21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第二回シンポジウム・基調講演』、2004 年 11 月、東京大学安田講堂。(基調講演)

坂村 健、「ユニバーサルデザインされたユビキタス国土の実現にむけて」、『TEPS2005 基調講演』、2004 年 12 月、T-Engine フォーラム・(社)トロン協会・TRON イネーブルウェア研究会・東京大学情報学環, 東京フォーラム、東京国際フォーラムホール B7。(基調講演)

坂村 健、『第 21 回トロンプロジェクトシンポジウム』、2004 年 12 月、東京国際フォーラム。(基調講演)

坂村 健、『21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第五回シンポジウム基調講演』、2005 年 3 月、東京大学武田ホール。

坂村 健、『21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第五回シンポジウム』、2005 年 3 月、東京大学武田ホール。(パネルセッションコーディネーター)

坂村 健、「空間情報社会のユビキタス場所情報システム」、『空間情報社会シンポジウム, 日本学術会議講堂, 2005 年 3 月』、2005 年 3 月、日本学術会議講堂。

坂村 健、『21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第四回シンポジウム基調講演』、2005 年 3 月、東京大学武田ホール。(基調講演)

坂村 健、「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」、『21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第四回シンポジウム』、2005 年 3 月、東京大学武田ホール。(パネルセッションコーディネーター)

一般向けエッセイ等

坂村 健、「発言席：『失敗を見つめる』文化を」、『毎日新聞』、2002年6月17日、p. 5。

坂村 健、「『計算』から『思考』へ転換告げる」、『ブックラック：『思考のための道具』(H・ラインゴールド著)、朝日新聞』、2002年6月23日、p. 14。

坂村 健、「特集：世界を変える日本の技術はこれだけある／アメリカにできないことを可能にするのが日本のトロン&ユビキタス技術だ」、『財界創刊 50周年号』、50巻、19号、2002年8月6日、pp. 161～164。

坂村 健、「正論：求められる国家情報処理基準」、『産経新聞』、2002年9月23日、p. 13。

坂村 健、「正論：開かれた土俵こそが相互繁栄の道 歴史的な MS とトロン の提携劇」、『産経新聞』、2003年10月3日、p. 13。

坂村 健、「ユビキタス社会の現状・展望 ～ 産・官・学の進むべき方向～」、『ESP (Economy Society Policy), January 2005, 特集：IT 化進展の検証・展望』、2004年1月、ESP (Economy Society Policy)、pp. 42～45。

坂村 健、「自律的移動支援プロジェクトから『ユビキタス国土』へ」、『都市政策 季刊』、117号、2004年10月、pp. 20～30。

坂村 健、「ユビキタス・コンピューティング技術」、『建築雑誌』、2005年、pp. 8～9。

坂村 健、「ユビキタス社会における産業と物流」、『港湾』、2005年、pp. 21～23。

一般向け講演等

坂村 健、『WPC フォーラム 2003 基調講演』、2003年9月、幕張メッセ・国際会議場。

坂村 健、『ET2003(組込み総合技術展)』、2003年11月、パシフィコ横浜 会議センター。

坂村 健、『全国マルチメディア祭 2003in みやぎ』、2003年11月、宮崎シーガイア。

坂村 健、「ユビキタス社会のセキュリティとプライバシー」、『日経セキュリティ会議』、2005年3月、日本経済新聞社、東京ビッグサイト。

佐々木 正人 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

身体と環境を複合する情報の研究

文部省科学研究費特定(「情報学」)からの援助を得て、(1)リハビリテーション病院に於ける重度運動障害者の運動の再学習過程の解析(頸椎損傷者、高次脳機能障害者等を対象とした)、(2)乳児を対象としてアフォーダンス(行為一環境単位)データベースの構築の研究を行った(継続中)。

生態心理学・アフォーダンス理論とその応用についての研究

また生態心理学についての研究を行った。その内容は海外の生態心理学者を招いての集中講義の実施や国際生態心理学会への参加、生態心理学についての研究結果を書籍として刊行する等の活動である。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

佐々木 正人、「21世紀と体育・スポーツ科学の発展」、『1)日本体育学会編集 2000 生態学派運動発達研究の展開』、2000年、杏林書院、pp. 155～163。

中村雄二郎・木村敏編、「3章「共変感覚」論 99—131」、『講座生命4巻「共通感覚論の可能性」』、2000年、pp. 99～131。

栗原あきら・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編、「9章「あらゆるところに同時にいる」225～248 東京大学出版会」、『越境する知1「身体:よみがえる」』、2000年、東京大学出版会。

岡田美智男・三嶋博之・佐々木正人編、「コンピュータと身体」、『コンピュータと身体』、2000年、東京大学出版会。

佐々木正人、「解題 エドワード・リード:ソウルの心理学者」村田純一他訳『魂から心へ—心理学の誕生』、『解題 エドワード・リード:ソウルの心理学者』村田純一他訳『魂から心へ—心理学の誕生』青土社』、2000年、青土社。

佐々木正人、「知覚はおわらない」、『知覚はおわらない』、2000年、青土社、284pp。

佐々木正人、「アフォーダンスの心理学—生態心理学への道」、『解説 エドワード・リードの仕事 細田直哉訳 @佐々木正人監修『アフォーダンスの心理学—生態心理学への道』新曜社』、2000年、新曜社。

佐々木正人、『行為を持続させる仕組み』、2000年、北海道理学療法学会誌、全17巻、pp. 3～29。【査読有】

佐々木正人、「児童心理学の進歩」、『発達研究の現在—運動研究1990年代』、2000年、全39巻。【査読有】

佐々木正人、「アフォーダンスと作業療法—Gibson3著作の展開を追って—」、『作業療法』、19巻、6号、2000年、作業療法、全19巻、6+pp. 520～524。【査読有】

佐々木正人・三嶋博之編訳、「アフォーダンスの構想の源—ギブソン知覚システム論—」、『アフォーダンスの構想—知覚研究の生態心理学的デザイン』、2001年、東京大学出版会、329+pp. 7～46。

佐々木正人、「項目「身体知」」、『複雑系の事典』、2001年、pp. 183～184。

佐々木正人、「IX章—4 アフォーダンスと言語習得—Reedの生態心理学的観点」、辻幸夫編、『ことばの認知科学事典』、2001年、pp. 483～496。

佐々木正人、「4部3章 エコロジカル・アプローチ」、大橋正洋・木村彰男・蜂須賀研二編、『リハビリテーションMOOK4 高次脳機能障害とリハビリテーション』、2001年、pp. 123～134。

佐々木正人、「3章 ナヴィゲーションと遮蔽」、佐々木正人・三嶋博之編、『アフォーダンスと行為』、2001年、金子書房、pp. 85～130。

鈴木健太郎・佐々木正人、『行為の潜在的なユニット選択に働くタスク制約:日常タスクに観察されるマイクロスリップの分析』、8巻、2号、2001年、認知科学 8(2) 121—138、全8巻、2+pp. 121～138。【査読有】

佐々木正人、「項目アフォーダンス、学習」、永井均・中島義道・小林康夫・河本英夫・大沢真幸・山本ひろ子・中島隆博編、『事典 哲学の木』、2002年、講談社。

佐々木正人、「意識からみた意識」、苧坂直行編、『意識の科学は可能か』、2002年、新曜社、pp. 141～176。

佐々木正人、「レイアウトとアフォーダンス」、奥出直人・後藤武編、『デザイン言語』、2002年、慶応大学出版会、pp. 127～150。

河本英夫、「4章 「アフォーダンスとオートポイエシス—知覚と行為をめぐる」」、『システムの思想 4章』、2002年、東京書籍、pp. 71～110。

佐々木正人・宮本英美・小池琢也・有田幸司・玉垣幹子、「『行為の対象特定性—魚解体過程の分析』」、2002年、東京大学大学院教育学研究科紀要、全41巻、pp. 327～348。【査読有】

佐々木正人、「5章「物と行為」」、根ヶ山光一・川野健治編、『身体から発達を問う』、2003年、新曜社、pp. 95～112。

佐々木正人、「11章「レイアウトと知覚」」、佐藤学・今井康雄編、『子どもたちの想像力を育む—アート教育の思想と実践』、2003年、東京大学出版会、pp. 208～225。

ベルンシュタイン、N. A.、「解題 運動はどのようにして環境に出会うのか」、佐々木正人監修、「工藤孝展『デクステリティ—巧みさとその発達』」、2003年、金子書房、pp. 315～330。

佐々木正人、「『レイアウトの法則—アートとアフォーダンス』」、2003年、春秋社。

佐々木正人、「『物・環境を行為で記述する試み』」、2003年、人工知能学会誌、全18巻、4+pp. 399～407。【査読有】

後藤武・佐々木正・深沢直人、「『デザインのエコロジー』」、2004年、東京書籍。

佐々木正人・高橋綾・林浩司、「対象を特定する行為について：卵の表面を割る過程の解析」、『生態心理学研究』、1巻、1号、2004年、pp. 85～90。【査読有】

佐々木正人・三嶋博之編、『生態心理学の構想』、2005年2月、東京大学出版会。(編訳、序章「なぜ世界を直接知覚できるのか」1-19)

佐々木正人、「『ダーウィンの方法—運動からアフォーダンスへ』」、2005年3月、岩波書店、315pp。

論文等

佐々木正人、「自然のデザイン原理4」、『季刊d/sign』、4号、20年3月4日、pp. 124～125。

佐々木正人、「かたち」を知覚するとき」、2000年、福井県立美術館。

佐々木正人・寺山祐策、「アフォーダンス入門」、『インタビュー(寺山祐策)』、116巻、2000年、春、武蔵野美術、pp. 4～11。

河本英夫・寺山祐策・深澤直人・佐々木正人、「環境／行為／デザイン 河本英夫・寺山祐策／深澤直人と」、『武蔵野美術@』、116巻、2000年、春、pp. 18～29。

佐々木正人・松浦寿夫・高島直之、「光の経験」、『武蔵野美術』、118号、2000年、秋、武蔵野美術、pp. 52～61。

佐々木正人、『日本作業療法学会教育講演』、2000年。(2000年5月24日(横浜))

佐々木正人、『日本ポバース研究会全国研修会講演』、2000年。(2000年6月24日(大阪))

佐々木正人、「敏達の内面的記述」、『日本教育心理学会シンポ』、2000年。(2000年9月18日(東大))

佐々木正人、「意識」、『日本心理学会シンポ』、2000年。(2000年11月7日(京都大))

佐々木正人、「分散配置されたデバイスと相互作用し賢くなる知的空間講演」、『科学技術振興事業団さがけ研究21「相互作用と賢さ」領域研究会』、2000年。(2000年12月26日)

佐々木正人、「いちど起こること」、『現代思想』、vol.28-5巻、2000年4月、pp. 118～126。

- 佐々木正人・無藤隆・村田純一、「ソウルからマインドへアンダーグラウンド心理学の構想」、『現代思想』、28巻、5号、2000年4月、pp. 40～77。
- 佐々木正人、「アフォーダンスから見える世界」、『Glaxo Welcome New Science』、137巻、2000年4月、pp. 2～7。
- 佐々木正人、「アフォーダンス知覚論の基礎」、『科学技術ジャーナル』、2000年6月。
- 佐々木正人、「田中小実昌に花束を(アンケート)」、『ユリイカ 臨時増刊』、vol. 32-9 巻、2000年6月、pp. 221～223。
- 「身体技法の21世紀 認知科学・アフォーダンス理論の視野から 平田オリザと」、『「演劇人」』、2000年7月、pp. 26～39。
- 「方向オンチのハテナ?」、『月刊寿』、2000年9月、月刊寿、pp. 102～107。
- 佐々木正人・畠山直哉、「写真と生態心理学」「談」(視覚論再考)、64号、2000年10月、pp. 61～80。
- 村上龍・佐々木正人、「暴力・身体・環境」、『大航海』、37巻、2000年12月、pp. 148～160。
- 佐々木正人、「読書案内 アフォーダンス」、『現代思想2001年臨時増刊「現代思想を読む230冊」』、29-15巻、2001年、pp. 176～179。
- ゲイリー・ヒル・佐々木正人、「知覚的協調の巢」、『インターコミュニケーション』、35巻、冬号、2001年、pp. 143～151。(対談 2000年12月)
- 河本英夫・松野孝一郎・前田英樹、「討議 システム 生命論の未来」、『現代思想 2月臨時増刊』、2001年、pp. 204～241。(座談会 2001年2月)
- 佐々木正人、「アフォーダンスと多層的世界」、2001年。(2001年3月20日(吉岡洋氏と)京都芸術センター)
- 佐々木正人、『第13回活動分析研究会特別講演』、2001年。(2001年4月15日 山梨大学)
- 佐々木正人、『鳥取理学療法士研究会』、2001年。(2001年7月14日)
- 佐々木正人、『全国大学書写書道教育学会シンポ』、2001年。(2001年8月17日)
- 佐々木正人、『東北地区ボバース研究会特別講演』、2001年。(2001年11月17～18日)
- 佐々木正人、『知と経営研究会』花王本社講演』、2001年。(2001年11月22日)
- 佐々木正人・岡本義文、「writer's eye 佐々木正人」、『月間プレイボーイ』、2001年1月、pp. 98～99。
- 佐々木正人、「ナビゲーションと遮蔽」、『現代思想臨時増刊 システム 生命論の未来』、2001年2月、pp. 254～280。
- 中村仁彦・柏木正好・佐々木正人、「ロボット—身体性の冒険」、『29巻5号 50—91』、29巻、5号、2001年4月、pp. 50～91。(鼎談)
- 佐々木正人・國吉康夫、「ヒューマノイドのコンセプトと実践」、『現代思想』、29巻、5号、2001年4月、pp. 32～49。(インタビュー)
- 佐々木正人、「光は秩序である」、『美術手帖』、vol.53巻、808号、2001年7月。
- 佐々木正人、「自然のデザイン原理1」、『季刊d/sign』、1号、2001年7月、pp. 67～72。

- 佐々木正人、「行為を物と一体に記述する試み」、『季刊 発達』、22 巻、87 号、2001 年 7 月 25 日、pp. 2～8。
- 佐々木正人、「肌理と粒」、『現代思想』、2001 年 9 月、pp. 146～148。(11—29)
- 佐々木正人、「視覚障害者の「目印」を取り入れた都市設計」、『人間科学がわかる』、2001 年 10 月、pp. 106～109。
- 佐々木正人・塚本由晴、「建築／アフォーダンス」、『10+1』、2001 年 10 月、INAX 出版、pp. 62～73。(対談)
- 佐々木正人、「アフォーダンスのフィールドから(1)繻」、『10+1』、26 号、2002 年、INAX出版、pp. 18～22。
- 佐々木正人、「相撲と無知」、『現代思想 2002年臨時増刊』、2002 年、13)佐々木正人 相撲と無知 現代思想 2002年臨時増刊 vol30-3 @70-77。
- 佐々木正人、「アフォーダンスのフィールドから(2)靴下」、『10+1』、27 号、2002 年、INAX出版、pp. 18～22。
- 佐々木正人、「五感の超え方—アモーダルのふたつの意味」、『日本バーチャル学会誌』、7 巻、1 号、2002 年、36+。
- 佐々木正人、「アフォーダンスのフィールドから(3)机面」、『10+1』、28 号、2002 年、INAX出版、pp. 20～22。
- 佐々木正人、「アフォーダンスのフィールドから(4)街」、『10+1』、29 号、2002 年、INAX出版、pp. 18～20。
- 佐々木正人、「用語解説 アフォーダンス」、『臨床精神医学』、31 巻、10 号、2002 年、pp. 1243～1244。
- 佐々木正人・森俊夫、「全てを使う—エリクソンと方法なき方法」、『現代思想』、30-4 巻、2002 年、pp. 114～129。(インタビュー)
- 佐々木正人、「アフォーダンスとダーウィン進化論の接点」、『理戦 69』、69 号、2002 年、pp. 60～72。(インタビュー)
- 佐々木正人・中村圭子、「環境から人間を考える」、『季刊 生命誌』、35 号、2002 年。(対談)
- 佐々木正人、『日本理学療法士協会542回現職講習会講演』、2002 年。(2002 年 3 月 9 日～10 日)
- 佐々木正人、『次世代産業ナビゲーターズフォーラム』、2002 年。(200 年 3 月 12 日 日本経済新聞社)
- 佐々木正人、『29回知能システムシンポジウム特別講演』、2002 年。(2002 年 3 月 29 日 学術総合センター)
- 佐々木正人、『日本心理学会ワークショップ』、2002 年。(2002 年 9 月 25 日 広島大学)
- 佐々木正人、「環境適応」、『37回日本理学療法士協会全国研修会』、2002 年。(2002 年 10 月 11 日 山形)
- 佐々木正人、『Dynamic systems approach for embodiment and sociality Fukui international activities plaza & FUKUI UNIV.』、2002 年。(2002 年 12 月 6-7 Dynamic systems approach for embodiment and sociality Fukui international activities plaza & FUKUI UNIV.)
- 佐々木正人、『日本理学療法士協会542回現職講習会講演』、2002 年。(2002 年 12 月 23 日)
- 佐々木正人、「自然のデザイン原理2」、『季刊d/sign』、2 号、2002 年 4 月、pp. 71～76。
- 佐々木正人、「アフォーダンスの視座」、『Harvard Business Review』、2002 年 7 月、Harvard Business Review。
- 佐々木正人、「自然のデザイン原理3」、『季刊d/sign3』、2002 年 11 月、pp. 94～95。
- 佐々木正人、「モビリティのアフォーダンス」、『PLATEAUX』、NO.0 26-29 号、2002 年 12 月、pp. 26～29。

佐々木正人、「知覚＝運動の協応構造」、『季刊 インターコミュニケーション』、45号、2003年、pp. 64～71。(インタビュー)

佐々木正人、「身体障害者への人工知能研究応用の可能性を探る—実世界(＝利用者＋環境)の多様性と非予測性に対する取り組み」、『第44回人工知能セミナー』、2003年。(2003年1月28日 早稲田国際会議場)

佐々木正人、『物学研究会 講演』、2003年。(2003年5月27日)

佐々木正人、『日本生理人類学会環境部会講演』、2003年。(2003年6月28日)

佐々木正人、『日本心理学会第67回大会大会本部企画シンポ「わが国におけるアフォーダンスの展開」』、2003年。(2003年9月13日 東京大学)

佐々木正人、『武蔵野美術大学特別講義』、2003年。(2003年10月6日)

佐々木正人、『千葉県精神科医療センター講演』、2003年。(2003年10月16日)

佐々木正人、『宇宙開発事業団(筑波)講演』、2003年。(2003年10月31日)

佐々木正人、『日本展示学会講演』、2003年。(2003年11月15日)

佐々木正人、『和歌山県立医科大学理学療法科講演』、2003年。(2003年11月23日～24日)

佐々木正人、『大阪エコロジカルセラピー研究会講演』、2003年。(2003年12月7日)

佐々木正人、「10よりも少ない」、『つくる陶磁郎』、23号、2003年6月、p. 89。

佐々木正人、「卵とレイアウト」、『季刊d/sign5』、2003年10月、季刊d/sign5、pp. 32～33。

林浩司・佐々木正人、『ヴァイオリン演奏における身体運動協調の解析:力の制御としてのヴィブラートの創発』、1巻、1号、2004年、生態心理学研究、pp. 91～98。【査読有】

佐々木正人・吉岡洋 2001年6月「アフォーダンスの幸福感」@ Diatxt. 04 pp. 009-024、「アフォーダンスの幸福感」、2004年、pp. 9～24。(インタビュー、@ Diatxt. 04 pp. 009-024)

佐々木正人、「身体が感知する「環境」の意味とは」、43号、2004年、pp. 14～17。(インタビュー、Fujitsu飛翔@2001年no. 43 14-17)

佐々木正人、「身体はみんな知っている」、『月間バーサス』、0号、2004年、pp. 92～93。(インタビュー)

佐々木正人、「身体はみんな知っている」、『月間バーサス』、1号、2004年、pp. 92～93。(インタビュー)

佐々木正人、「身体はみんな知っている 鈴木大地」、『月間バーサス』、2号、2004年、pp. 154～156。(インタビュー)

佐々木正人、「身体はみんな知っている 鈴木垂久里」、『月間バーサス』、3号、2004年、pp. 152～155。(インタビュー)

佐々木正人、「身体はみんな知っている 堀井学」、『月間バーサス』、4号、2004年、pp. 148～151。(インタビュー)

佐々木正人、「身体はみんな知っている 武田美保①」、『月間バーサス』、5号、2004年、pp. 140～143。(インタビュー)

佐々木正人、「身体はみんな知っている 武田美保②」、『月間バーサス』、6号、2004年、pp. 150～153。(インタビュー)

佐々木正人、『日本現象学会講演』、2004年。(2004年11月13日東洋大学)

佐々木正人、『和歌山県作業療法学会講演』、2004年。(2004年11月23日(ビックホエール))

佐々木正人、『茨城県理学療法士協会講演』、2004年。(2004年12月12日茨城県立医療大学)

佐々木正人、「冗長なデテール」、『季刊d/sign6』、2004年1月、季刊d/sign6、pp. 26~27。

佐々木正人、「視線の生態学」、『季刊d/sign7』、2004年1月、季刊d/sign7、pp. 12~13。

佐々木正人・甲野義紀と「矛盾を使いこなす古の武術の智慧」洋泉社MOOK「古武術で目覚めるからだ」2004年1月16-29、「矛盾を使いこなす古の武術の智慧」、『古武術で目覚めるからだ-』、2004年1月、pp. 16~29。(対談)

佐々木正人、「生態心理学の習慣—学会誌の創刊と大会の開催に際して」、『生態心理学研究 1(1) i- IV』、2004年2月。

佐々木正人、「東大教師が新入生にすすめる本」、『東大教師が新入生にすすめる本』、2004年4月、U痴、pp. 37~38。

佐々木正人、「こころの風景」、『朝日新聞』、2004年6月、朝日新聞。(6月21-23日夕刊)

佐々木正人、「段差、付着物、遊離物—赤ちゃんのアフォーダンス」、2004年8月、pp. 16~19。

佐々木正人、「自動巻時計の一日 解説」、2004年9月、河出文庫、pp. 221~233。

佐々木正人、「日本新発見「幼児は段差で育つ」」、『ナショナル ジオグラフィック日本版』、2004年9月。(p. 23)

佐々木正人、『日本学術会議シンポ』、2005年1月26日。(横幹科学)

佐々木正人、「思想の言葉—情報は光の中にある」、『思想』、2005年2月。(@1-3)

佐々木正人、『日赤看護大学大学院講演』、2005年3月4日。

口頭発表等

佐々木正人、『日本体育教育学会講演』、2005年3月13日、駒場。

佐々木正人、『和歌山県理学療法士協会講演』、2005年3月20日、和歌山県立医科大学。

その他

SASAKI MASATO and HIROYUKI MISHIMA, "Surface and Action; Concepts of Affordance in Ecological Psychology, Dynamic systems approach for embodiment and sociality; From Ecological psychology to Robotics," *From Ecological psychology to Robotics*, 2003, Advanced knowledge international publisher, pp. 14-19.

Hnno,Y., Ito,K., Matsuishi,T., Okura,M. and Sasaki,M., "How do harbour porpoise act in the unfamiliar environment?," *Studies in perception and action VII*, VII, 2003, LEA, pp. 191-194.【査読有】

Takahashi,A., Hayashi,K. and Sasaki,M., "Movement sequences for cracking anegg.," *Studies in perception and action*, VII, 2003, LEA, pp. 165-168.【査読有】

須藤 修 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、中国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、また ICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。とくに電子商取引と電子決済の動向について技術 (主としてPKIなどのセキュリティ技術)、取引形態 (マーケティングなど)、制度環境 (金融システムなど) について実証的に考察し、克服すべき課題の抽出と展望を行う。

ネットワークと社会進化に関する研究

国民国家という既存の枠組みに動揺を与えているグローバル・ネットワーク化およびローカル・ネットワーク化の動向 (NGOやNPOの動向) について検討し、特に行政システムと政治システムに焦点を当てて社会発展 (進化) のあり方について研究を行う。

地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型 (循環型) の持続可能な地域経済発展について研究を行う。

研究業績 (2000～2004 年度)

著書等

須藤修、「デジタル経済とグローバル・ネットワーク」、情報文化学会編、『情報文化学ハンドブック』、2001 年、森北出版。(編集委員)

須藤修、北川高嗣・須藤修・西垣通・浜田純一・吉見俊哉・米本昌平編、『情報学事典』、2002 年、弘文堂。

Osamu Sudoh, "The Digital Revolution and Globalism —— A Proposal for a New Social System Using Trusted Third Parties," 須藤修研究室 ed., 平成14年度文部科学省科学研究費補助・グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザインに関する研究報告書, 2002.3.

須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾・後藤玲子・樺島栄一郎、「グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザイン」、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告書 (研究代表: 安西祐一郎) A06情報化と社会制度の構築に関する研究 (柱長: 須藤修)』、2002 年 6 月、東京大学大学院情報学環須藤修研究室。

須藤修、須藤修・出口弘編、『デジタル社会の編成原理』、2003 年。

須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾・後藤玲子、「情報経済の実証分析と制度設計」、安西祐一郎編、『平成14年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(2)ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告書 A06情報化と社会制度の構築に関する研究』、2003 年 1 月、須藤修研究室。

須藤修、「グローバル・ネットワークと新たな社会編成原理」、『デジタル社会の編成原理』、2003 年 1 月、NTT出版。【査読有】

須藤修、安達淳編、『平成 15 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告書 研究活動の概要と成果』、2003 年 1 月、国立情報学研究所安達淳研究室。(分担執筆)

須藤修、「環境と情報システム」、寺西俊一・細田衛士編、『環境保全への政策統合——岩波講座 環境経済・政策学第5巻』、2003 年 2 月、岩波書店。【査読有】

Osamu Sudoh, "Digital Economy and Local Management," Osamu Sudoh ed., *Institutional Design on Digital Economy : A Research Project on Digital Economy in the Global Context and Institutional Design of Knowledge-Intensive Society*, 2003.2.20, The University of Tokyo founded by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾・後藤玲子、「情報社会における公私の連携及び機能分担」、『平成 15 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告書 A06情報化と社会制度の構築に関する研究』、2004 年 1 月、安西祐一郎%東京大学須藤修研究室。

須藤修, Osamu Sudoh ed., *Digital Economy and Social Design*, 2005, Springer-Verlag, 236pp.【査読有】

須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾・後藤玲子、「情報社会の信頼性の形成と内発的経済発展に関する研究」、安西祐一郎・須藤修編、『ITの深化を拓く情報学・平成 16 年度研究研究成果報告書 A06 情報化と社会制度の構築に関する研究』、2005 年、東京大学大学院情報学環須藤修研究室。

須藤修、安西祐一郎・安達淳編、『平成 15 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告書・平成 16 年度研究活動の概要と成果』、2005 年 1 月、国立情報学研究所安達淳研究室。(分担執筆)

論文等

須藤修、株式会社野村総合研究所編、『報告書・規制緩和後の経済社会における不正競争防止法の在り方に関する調査研究』、2000 年、通産省。(分担執筆)

須藤修、「情報技術革新と現代経済へのインパクト」、『連合総研レポート』、137 号、2000 年 4 月、財団法人連合生活開発研究所。

須藤修、「e-Commerce とビジネス革新」、『Printing Information Digest』、95 号、2000 年 4 月、印刷工業会。

須藤修、「デジタル経済のインパクト——ネットワーク社会の制度デザイン」、島根県編、『1999 島根国際シンポジウム報告書』、2000 年 4 月、島根県総務部。

須藤修、「e- コマースの展望と課題」、『あどばいざあ——消費生活アドバイザー』、75 号、2000 年 7 月、財団法人日本産業協会。

須藤修、「IT革命と新たな社会の創造」、『あすの三重』、118 号、2000 年 7 月、財団法人三重社会経済研究センター。

須藤修、「デジタル経済の発展と課題」、財団法人日本特許情報機構・国際エグゼクティブフォーラム編、『ビジネスモデル特許と今後の経営戦略』、2000 年 7 月、国際エグゼクティブフォーラム。

須藤修・他、科学技術庁情報セキュリティ技術研究会編、『情報セキュリティ技術に関する研究開発のあり方について』、2000 年 7 月、科学技術庁研究開発局。(共同研究)

須藤修、「IT社会構築、主体は多様——日経経済教室」、『日本経済新聞』、2000 年 7 月 6 日。

須藤修、「電子政府の創造」、『Cyber Security Management』、1 巻、10 号、2000 年 8 月、Japan Cyber Security Institute。

須藤修、「IT革命とデジタル・デバイドの超克」、『ESP』、341 号、2000 年 9 月、社団法人経済企画協会。

須藤修、「デジタル経済の課題と展望」、『リサーチ中国』、51 巻、614 号、2000 年 9 月、社団法人中国地方総合研究センター。

須藤修、「IT革命とNPOの社会的機能——市場・政府・準公共領域」、日本社会情報学会編、『日本社会情報学会第 15 回全国大会研究発表論文集』、2000 年 9 月、日本社会情報学会全国大会事務局。

須藤修、「行政電子化の課題」、日本社会情報学会編、『日本社会情報学会第15回全国大会研究発表論文集』、2000年9月、日本社会情報学会全国大会事務局。

須藤修、「デジタル経済のインパクト」、大蔵省財務総合政策研究所編、『我が国財政金融の当面の諸問題に関する懇談会議事録(第1回—第6回)』、2000年9月、大蔵省財務総合政策研究所。

須藤修、「デジタル経済とセキュリティ」、日経BP製品技術研究センター編、『PKI』、2000年11月、日経BP。

須藤修、「IT革命のカギはNPOだ」、『エコノミスト』、2000年12月11日、毎日新聞。

須藤修、「IT革命と市場経済のこれから——インターネットは持続可能な発展に貢献しうるのか」、片方善治編、『e-コマースシステム技術体系』、2001年、フジ・テクノシステム。

須藤修、「情報と国境」、樺山紘一ほか編、『20世紀の定義——第4巻 越境と難民の世紀』、2001年、岩波書店、第1章。

須藤修、総務省編、『総合行政ネットワーク構築に関する実証実験報告書』、2001年。(委員長、総務省)

須藤修、アジアPKIフォーラム推進協議会編、『第1回アジアPKIフォーラム報告書』、2001年、アジアPKIフォーラム推進協議会。(分担執筆)

須藤修、「IT革命とe Commerce」、マルエツCRM研究会編、『マルエツCRM研究報告書』、2001年1月、マルエツCRM研究会事務局。

須藤修、「近視眼的経済成長とその転換——ローマ・クラブと持続可能な発展」、養老猛ほか編、『20世紀の定義——第3巻欲望の解放』、2001年1月25日、岩波書店。

須藤修、「IT革命とソシオ・インフォマティクス」、『学術月報』、54巻、4号、2001年4月、日本学術振興会。

須藤修、「近未来の電子市場と電子政府」、『コンピュータピア』、36巻、418号、2001年6月、コンピュータ・エージ社。

須藤修、「複合的ネットワークによるデジタル・デバイドの超克」、『季刊・家計経済研究』、51号、2001年7月、財団法人家計経済研究所。

須藤修、「サービス分野」、文部科学省科学技術政策研究所編、『第7回技術予測調査——我が国における技術発展の方向性に関する調査——』、2001年7月、文部科学省科学技術政策研究所。(主査、分担執筆)

須藤修、「行政ICカードの展望と課題」、『Japan Research Review』、2001年8月、日本総合研究所。

須藤修, "Digital Economy and Sustainable Development," Anglo-Japanese Academy ed., *Conference Presentation Papers on National, Regional and Global Transition: A Common Agenda for Anglo-Japanese Relations in the Twenty-first Century*, 2001.9, University of Sheffield and University of Tokyo.

須藤修、「海外の地方自治体における電子行政と産業振興・地域振興に関する調査研究報告書」、須藤修編、2001年9月、日立総合計画研究所。(代表及び分担執筆)

須藤修、「動き出した電子自治体」、『地域政策研究』、15号、2001年10月、財団法人地方自治研究機構。

小森旭・松浦幹太・須藤修、「PKIに基づくC/S型アプリケーションの安全性分析と証拠性評価」、情報処理学会編、『コンピュータセキュリティシンポジウム2001』、2001年10月、情報処理学会。【査読有】

Osamu Sudoh, "The Digital Revolution and the Evolution of e-Government," Institute for International Policy Studies ed., *The International Symposium Presentation Papers on The IT revolution: Challenges from innovation in information and communication technology and the role of government*, 2001.11, Institute for International Policy Studies.

須藤修、「電子行政とデジタル経済——世界の現状と将来展望」、『JIPDECジャーナル』、107号、2001年12月、財団法人日本情報処理開発協会。

小森旭・松浦幹太・須藤修、「契約時に添える付加的なMACに関する総合的分析」、『コンピュータセキュリティ研究』、2001年12月、情報処理学会。【査読有】

須藤修、日本経済新聞社編、『電子政府戦略会議報告書』、2001年12月、日本経済新聞社。(討論参加)

Osamu Sudoh, "Wealth of Networked Nations," *Look Japan*, no.558, 2002, Look Japan.

須藤修、「電子商取引における紛争解決のための電子証拠物に関する分析」電子情報通信学会編『暗号と情報セキュリティシンポジウム』、『暗号と情報セキュリティシンポジウム』、2002年1月、電子情報通信学会。

須藤修、国立情報学研究所編、『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成13年度研究概要・ITの深化の基盤を拓く情報学研究』、2002年2月、国立情報学研究所。(分担執筆)

須藤修、電子自治体に対応した情報管理主管部門の在り方に関する調査研究会(委員長:須藤修)編、『電子自治体に対応した情報管理主管部門の在り方に関する調査研究報告書』、2002年3月、財団法人地方自治情報センター。(監修)

須藤修、電子申請実証実験研究会(委員長:須藤修)編、『厚生労働省電子申請実証実験研究報告書』、2002年3月、厚生労働省。(監修、分担執筆)

須藤修、ICカードを活用した地域ポイント制に関する調査研究会(委員長:須藤修)編、『ICカードを活用した地域ポイント制に関する調査研究報告書』、2002年3月、財団法人広域関東圏産業活性化センター。(監修)

須藤修、次世代電子政府研究会(委員長:須藤修)編、『次世代電子政府研究会報告書——e Government から e Democracy へ——』、2002年3月、NTTデータ。(監修)

須藤修、IT革命による21世紀経済社会委員会(委員長:公文俊平)編、『IT革命による21世紀経済社会の姿に関する調査・研究報告書』、2002年3月、住友生命総合研究所。

Osamu Sudoh, "Survey results in Service," National Institute of Science and Technology Policy ed., *7th Research and Foresight on Science and Technology*, 2002.3, National Institute of Science and Technology Policy, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

須藤修、「サービス分野——知識創造型産業への移行でさらに重要性増す」、『Science & Technology』、11巻、5号、2002年5月、財団法人科学技術広報財団。

Osamu Sudoh, "The Digital Revolution and Japan's Strategies," EU-Japan Centre for Industrial Cooperation org. ed., *Meet Asia in Japan 2002: Strategic Business Opportunities in Japan and China*, 2002.5, EU-Japan Centre for Industrial Cooperation.

須藤修、ICカードシステム利用促進協議会 ed., *2002年JICSAP欧州ICカード利用調査報告書——欧州におけるIT関連プロジェクト最新動向*, 2002.5.29, ICカードシステム利用促進協議会。(分担執筆)

須藤修、「電子地域コミュニティは民主主義の進化の基盤となる」、『別冊コンピュータピア』、2002年11月、コンピュータエージ社。

須藤修、「市場の機能変容——技術発展と市場機能の相互作用的關係」、『法律時報』、2002年12月、日本評論社。

須藤修、「IT時代における自治体経営と地域マネジメント」、『地域政策研究』、21号、2002年12月、地方自治研究機構。

須藤修、「電子政府の推進と課題」コンピュータ犯罪に関する白浜シンポジウム実行委員会編、『報告書・第6回コンピュータ犯罪に関する白浜シンポジウムレポート』、2002年12月、コンピュータ犯罪に関する白浜シンポジウム実行委員会。

須藤修、「電子自治体で官民連携」、『日本経済新聞』、2002年12月20日。

須藤修、寺西俊一・細田衛士編、『環境保全への政策統合——岩波講座 環境経済・政策学第5巻』、2003年、岩波書店。
【査読有】

須藤修、国領二郎・高木晴夫・奥野正寛・柳川範之・永戸哲也・浦昭二編、『情報社会を理解するためのキーワード』、1巻、2003年、培風館。

須藤修、「電子自治体と地域マネジメント」、『情報処理』、44巻、4号、2003年、社団法人情報処理学会。

須藤修、「経済システムの変化とデジタル経済」、『情報処理』、44巻、8号、2003年、社団法人情報処理学会。

須藤修、「ネットワーク社会とNPO」、『情報処理』、44巻、10号、2003年、社団法人情報処理学会。

森垣努・松浦幹太・須藤修、「Digital TVを利用した超高精細電子時刻印システムに関する考察」、『コンピュータセキュリティシンポジウム論文集(CSS)2003論文集』、2003年、社団法人情報処理学会。【査読有】

須藤修、総合行政ネットワークに対する各種提案に関する調査研究委員会(委員長:須藤修)編、『総合行政ネットワークに対する各種提案に関する調査研究委員会調査報告書』、2003年、財団法人地方自治情報センター。(監修及び分担執筆)

小森旭・花岡悟一郎・松浦幹太・須藤修、「署名鍵漏洩問題における電子証拠生成技術について」、『電子情報通信学会 SCIS2003 暗号と情報セキュリティシンポジウム論文集』、2003年1月、電子情報通信学会。

須藤修、安西祐一郎編、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究・研究成果報告書・研究活動の概要と成果』、2003年1月、国立情報学研究所。(分担執筆)

Osamu Sudoh, "The Digital Economy and New Governance," *Review of Media, Information and Society*, 18, 2003.3, The University of Tokyo.

須藤修、公共ITにおけるアウトソーシングに関するガイドライン研究会(委員長:須藤修)編、『公共ITにおけるアウトソーシングに関するガイドライン研究会報告書』、2003年3月、総務省。(監修)

須藤修、電子政府世田谷委員会(委員長:須藤修)編、『都市型高齢社会における新たな行政経営モデルに関する調査研究』、2003年3月、財団法人地方自治研究機構。(監修)

須藤修、「地域が自立的発展をするための産学官民の協働」、『日経研月報』、2003年9月、財団法人日本経済研究所。

須藤修、日本経済新聞社編、『電子政府戦略会議報告書』、2003年10月、日本経済新聞社。(分担執筆)

須藤修、「ネットワークとNPOの社会的機能」、『国際シンポジウム・デジタル市民社会と社会情報学』、2003年10月4日、東京大学社会情報研究所、東京大学弥生講堂一条ホール。

須藤修、花田達朗・吉見俊哉編、『社会情報学ハンドブック』、2004年、東京大学出版。

須藤修、「地球環境と市場経済」、山口重克編、『新版・市場経済』、2004年、名古屋大学出版会、第Ⅲ部第7章 pp. 315～332。【査読有】

森垣努・松浦幹太・須藤修、「Digital TVを利用した高精細電子時刻印システムに関する安全性評価」、『2004年暗号と情報セキュリティシンポジウム(SCIS2004)論文集』、2004年、社団法人情報処理学会。【査読有】

須藤修、「ITの生産性とネットワーク取引環境」、『情報処理』、45巻、1号、2004年、社団法人情報処理学会。

Osamu Sudoh, "The Strategies for Sustainable Development and Knowledge Network of NPOs," *Review of Media, Information and Society*, 19, 2004, The Institute of Socio-Information and Communication Studies, The University of Tokyo.

須藤修、「電子商取引とモバイル・コマース」、『情報処理』、45 巻、4 号、2004 年、社団法人情報処理学会、pp. 424～425。

須藤修、「IT と環境保全型経済」、『情報処理』、45 巻、7 号、2004 年、社団法人情報処理学会、pp. 750～751。

Osamu Sudoh, "Community Stores in Cyberspace," *The Japan Journal*, 1, no.4, 2004, pp. 22-23.

須藤修、「IT がもたらす地域社会の変革——共同 IT アウトソーシング戦略の意義」、『ルネサンス四国』、25 号、2004 年、四国電力株式会社、pp. 4～7。

須藤修、「パブリック・ガバナンスを志向する政策情報——電子自治体と新たな地域ガバナンス」、『NIRA 政策研究』、17 巻、2 号、2004 年 2 月、総合研究開発機構。

Osamu Sudoh, "The Knowledge Network in the Digital Economy and Sustainable Development," Osamu Sudoh ed., *Reviewed Conference Papers on Establishment of the Digital Economy and Evolution of the Socio-Economic System*, 2004.2, Sudoh Research Office in ISICS, The University of Tokyo, Founded by the MEXT.【査読有】

須藤修、「わが国独自の電子政府を基盤に——日本社会のガバナンス変革に向けて」、『NTT Data Digital Government』、2004 年 2 月。URL:[http:// e-public.inforum.nttdata.co.jp/files/world_report](http://e-public.inforum.nttdata.co.jp/files/world_report)

T. Morigaki, K. Matuura and O. Sudoh, "An Analysis of Detailed Electronic Time-Stamping Using Digital TV(paper 1568924968)," *IEEE International Conference on e-Technology, e-Commerce, and e-Service (EEE04)*, 2004.3.【査読有】

須藤修、高齢社会における IT を活用した市民参加のあり方に関する調査研究委員会(委員長:須藤修)編、『高齢社会における IT を活用した市民参加のあり方に関する調査研究委員会報告書』、2004 年 3 月、三鷹市及び財団法人地方自治研究機構。(監修)

須藤修、杉並区地域ポータルサイト懇談会(委員長:須藤修)編、『杉並区地域ポータルサイト懇談会報告書』、2004 年 3 月、杉並区。(監修、分担執筆)

須藤修、「e-コミュニティのガバナンス」、日本能率協会「自治体電子化コンソーシアム」監修、『e-Government—電子政府・自治体ガイド 2004』、2004 年 4 月、日本能率協会マネジメントセンター、pp. 26～29。

須藤修、日本経済新聞社・日経産業消費研究所編、『電子自治体に関する調査報告書』、2004 年 9 月、日経産業消費研究所。(調査協力)

須藤修、日本経済新聞社編、『電子政府戦略会議報告書』、2004 年 10 月、日本経済新聞社。(分担執筆)

須藤修、「ユビキタス社会における電子政府・電子自治体の役割」、財団法人ニューメディア開発協会編、『情報フェスタ 2004 報告書』、2004 年 11 月、財団法人ニューメディア開発協会。

須藤修、「電子政府の構築に向けて」、『電子社会システムと情報セキュリティ』、2004 年 11 月、21 世紀 COE プログラム中央大学研究拠点。

Hideyuki Tanaka, Kanta Matsuura and Osamu Sudoh, "Vulnerability and Information Security Investment : An Empirical Analysis of e-Local Government in Japan," *Journal of Accounting and Public Policy*, 24, 2005, USA, pp. 37-59.【査読有】

Osamu Sudoh, "The Knowledge Networks in the Digital Economy and Sustainable Development," Osamu Sudoh ed., *Digital Economy and Social Design dissertation*, 2005, Springer-Verlag, pp. 3-38.【査読有】

須藤修、「電子自治体と地域における災害リスク・マネジメント」、『都市問題』、2005 年 1 月、東京市政調査会、pp. 83～90。

口頭発表等

須藤修、「e-Commerceの展望と課題—消費者保護とNPO」、『通商産業省産業構造審議会』、2000年4月4日、通商産業省。

Osamu Sudoh, "Digital Economy and Social Development," *International Seminar on Electronic Commerce*, 2000.4.21, オペラシティビル。

須藤修、「デジタル経済の現状と課題」、『総務庁規制改革委員会』、2000年5月19日、総務庁。

須藤修、「デジタル経済とビジネスモデル」、『ビジネスモデル特許と今後の経営戦略』、2000年5月30日、財団法人日本特許情報機構・国際エグゼクティブフォーラム、パレスホテル。

吉井健・井上学・須藤修・山口昭則・新藤哲雄、「パネルディスカッション・ビジネスモデル特許と経営戦略」、『ビジネスモデル特許と今後の経営戦略』、2000年5月30日、財団法人日本特許情報機構・国際エグゼクティブフォーラム、パレスホテル。

須藤修、「デジタル革命と電子政府」、『日本セキュリティマネジメント学会第14回全国大会』、2000年6月3日、獨協大学。

須藤修、「デジタルエコノミー」、『シンポジウム・電腦生活の諸問題』、2000年6月12日、日本学術会議講堂。

井口雅一・坂村健・須藤修・加藤公敬・藤井健・越塚登・児島治彦・中野博隆・林喜男、「パネルディスカッション・電腦生活の諸問題」、『シンポジウム・電腦生活の諸問題』、2000年6月12日、日本学術会議講堂。

浦野義頼・三木哲也・寺島信義・遠藤薫・三友仁志・須藤修・北村歳治、「パネルディスカッション・IT革新と21世紀の社会」、『シンポジウム・IT革新と21世紀の社会-』、2000年6月28日、早稲田大学国際情報通信センター、早稲田大学大隈講堂。

須藤修、「地域社会と情報セキュリティ」、『IT革命と情報セキュリティサミット』、2000年7月16日、IT革命と情報セキュリティサミット実行委員会・早稲田大学、早稲田大学14号館。

須藤修・北川正恭・荒川広幸・川村志厚、「パネルディスカッション・地域情報社会とセキュリティ・ポリシー」、『IT革命と情報セキュリティサミット』、2000年7月16日、IT革命と情報セキュリティサミット実行委員会・早稲田大学、早稲田大学14号館。

村岡洋一・渡部敏弘・前川徹・越桐国雄・須藤修、「パネルディスカッション・IT革命とセキュリティ対策の将来」、『IT革命と情報セキュリティサミット』、2000年7月16日、IT革命と情報セキュリティサミット実行委員会・早稲田大学、早稲田大学14号館。

須藤修、「IT革命とビジネス革新」、『第一生命経済研究所研究会』、2000年9月11日、第一生命保険会社本社ビル。

須藤修、「IT革命とNPOの社会的機能——市場・政府・準公共領域」、『日本社会情報学会第15回全国大会』、2000年9月29日、一橋大学兼松講堂。

須藤修、「行政電子化の課題」、『日本情報学会第15回全国大会』、2000年9月30日、一橋大学本館。

須藤修、「eビジネス最前線——印刷産業におよぼす影響」、『印刷学会特別セミナー』、2000年10月6日、アルカディア市ヶ谷。

須藤修、「21世紀のe Societyとe Business」、『第4回日立GP研究発表会』、2000年10月18日、日立公共システムエンジニアリング。

Osamu Sudoh, "Regional Development and Collaboration : A Solution for Digital Development and Environmental Problems," *2nd Germany—Japan International Seminar Regional Development*, 2000.11.10, Development Bank of Japan Org. (Frankfurt an main, Germany)

Osamu Sudoh, "Panel Discussion: Regional Development," *2nd Germany—Japan International Seminar Regional Development*, 2000.11.10, Development Bank of Japan Org., Frankfurt an main, Germany. (Frankfurt an main, Germany)

須藤修、「デジタル経済とセキュリティ——e コマース・電子政府の信頼性基盤としてのPKI」、『PKIフォーラム』、2000年11月22日、日経BP社。

大山永昭・富永英義・後藤敬三・須藤修・宮崎緑・笠原正雄、「パネルディスカッション・IT戦略と産官学民の役割」先端情報技術研究組織、『第2回先端情報技術研究組織講演会』、2000年12月25日、先端情報技術研究組織・中央大学研究開発機構共催、中央大学市谷キャンパス。

須藤修監修、『国際シンポジウム Financial Executive Seminar 2001』、2001年2月13日、NTTデータ、帝国ホテル。(監修)

須藤修、「IT革命の行方——世界の潮流と日本」、『IT革命の行方——世界の潮流と日本』、2001年3月1日、日本銀行。

須藤修、「ITイノベーションと知識社会の創造」、『電子情報通信学会2001年総合大会』、2001年3月28日、立命館大学びわこ・くさつキャンパス。

須藤修、「グローバル化の進展による社会の変化」、『経済社会の変化に応える道路政策のあり方に関する研究会』、2001年5月23日、財団法人建設経済研究所。

須藤修・ほか、「パネルディスカッション・e コミュニティ分析ツールマトリックスと事例研究」、『Connect2001』、2001年5月28日、Connect2001 実行委員会、法政大学ポアソナードタワースカイホール。

須藤修、「知識創造型ネットワーク社会の創造」、『Connect2001』、2001年5月30日、Connect2001 実行委員会、幕張NTTセミナールーム。

須藤修、「IT革命による21世紀経済社会研究委員会」、『電子商取引・電子行政化の動向』、2001年5月31日、住友生命総合研究所。

須藤修、「IT革命がもたらす社会変革」、『電子政府と情報技術』、2001年6月1日、日立返仁会、東京国際フォーラム。

阿部裕行・伊東正剛・加藤敏晴・須藤修、「ワークショップ・地域活性化とマルチメディアの可能性」、『日本マスコミュニケーション学会全国大会』、2001年6月3日、同志社大学。

Osamu Sudoh, Ki-Yoong Hong, Mohamed Arif Nun, Kwok-Yan Lam, Han-Min Hsia and Jirou Makino, "Panel Discussion : Scenarios of PKI Development in Asia," *The First Asia PKI Forum*, 2001.6.13, Japan Promotional Association for Asia PKI Forum Org. 新高輪プリンスホテル。【査読有】

廣松毅・須藤修・長谷川文雄、「パネルディスカッション・21世紀の産業・社会にとって<情報>とは何か——近未来の情報あり方を考える」、『平成13年度科学工学技術委員会シンポジウム』、2001年8月25日、財団法人科学教育研究会、お茶の水スクエア。

Osamu Sudoh, "Digital Economy and Sustainable Development," *International Conference on National, Regional and Global Transition : A Common Agenda for Anglo-Japanese Relations in the Twenty-first Century*, 2001.9.8, Anglo-Japanese Academy org., Manchester in UK.

前川徹・須藤修・林紘一郎・宇田好文・増田祐司・小菅敏夫、「基調シンポジウム・情報社会の国際的展開の展望と課題」、『日本社会情報学会第16回全国大会』、2001年10月18日、早稲田大学国際会議場。

Osamu Sudoh, "The Digital Revolution and the Evolution of e-Government," *The International Symposium on The IT revolution : Challenges from innovation in information and communication technology and the role of government*, 2001.11.14, Institute for International Policy Studies org., 全日空ホテル。

Osamu Sudoh, Paul Lillrank, Seth G. Fearey, Yong-Jin Park and Taizo Yakushiji, "Panel Discussion : e-Government at the national and local level," *The International Symposium on The IT revolution : Challenges from innovation in information and communication technology and the role of government*, 2001.11.14. (全日空ホテル、2001年11月14日)

須藤修、「情報化と社会制度の構築に関する研究」、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究』平成13年度領域全体会議』、2002年1月16日、文部科学省科学研究費特定領域研究、学術総合センター。

須藤修、「グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザインに関する研究」、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究』平成13年度領域全体会議』、2002年1月17日、文部科学省科学研究費特定領域研究、学術総合センター。

須藤修、「e-Japanと社会進化」、『e-Japan フォーラム』、2002年2月8日、日本ユニシス、ホテルニューオータニ。

石井正弘・平山征夫・須藤修・H.C.Bjornsson・新谷文夫、「パネルディスカッション・e-Japan:官民の役割と官民協働のあり方」、『e-Japan フォーラム』、2002年2月8日、スタンフォード大学、日本ユニシス、ホテルニューオータニ。

Osamu Sudoh, "On Japan PKI Projects," 2002.3.22, Infocomm Development Authority of Singapore, Singapore, Singapore Government.

Osamu Sudoh, "The e Japan and the Evolution of Government," 2002.3.25, Ministry of Economic Affairs, Taipei, Chinese Taipei Government.

Osamu Sudoh, "The e Government and PKI," 2002.3.26, Korea Information Security Agency, Seoul in Korea, Korea Government.

Osamu Sudoh, "The IT Revolution and the Evolution of Governance," *Government Leaders' Conference 2002*, 2002.4.16, Microsoft org., USA, Westin Hotel Seattle.

R. Hahn, Pin-kung Chiang, M. Binder, O. Sudoh, D. Crane and S. Singleton, "Panel Discussion : Building a Strong Information Technology Sector," *Government Leaders' Conference 2002*, 2002.4.16, Microsoft org., USA, Westin Hotel Seattle.

須藤修、「電子政府の推進と課題」、『第6回コンピュータ犯罪に関する白浜シンポジウム』、2002年5月18日、コンピュータ犯罪に関する白浜シンポジウム実行委員会、コガノイベイホテル。

須藤修、「次世代電子政府はどこに向かうのか—e デモクラシーの可能性と課題」、『ITで変わる市民参画と行政』、2002年5月22日、e デモクラシーシンポジウム実行委員会、経団連ホール。

須藤修・S.Clift・加藤秀樹・堂本暁子・浜口友一・伊集院礼子、「パネルディスカッション・ITで変わる市民参画と行政」、『ITで変わる市民参画と行政』、2002年5月22日、e デモクラシーシンポジウム実行委員会、経団連ホール。

北川正恭・須藤修・J.Backman・O.Kongas・H.Bjornsson、「パネルディスカッション・電子自治体のその先—ITが切り拓く地域の未来」、『第2回 e-Japan フォーラム』、2002年5月27日、スタンフォード大学・日本ユニシス。

須藤修、「グローバル・ネットワークとIT経済の制度デザイン」、『設計工学シンポジウム』、2002年5月29日、日本学術会議、日本学術会議講堂。

須藤修、「ネットワーク社会と個人情報保護—セキュリティの制度設計」、『平成14年度科学工学技術委員会シンポジウム』、2002年6月1日、財団法人科学教育研究会、東京八重洲ホール。

須藤修、「電子自治体とコミュニティマネジメント」、『第2回電子自治体シンポジウム-』、2002年6月7日、横須賀市・社会情報学会・横須賀市IT戦略会議・横須賀市都市政策研究所、横須賀芸術劇場。

須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾・後藤玲子・榊島栄一郎、「グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザインに関する研究」、『文部科学省科学研究費補助特定研究『ITの深化の基盤を拓く情報学研究』平成14年度研究成果発表会』、2002年6月19日、日本教育会館。(須藤修、出口弘、田中秀幸、榊俊吾、後藤玲子、榊島栄一郎の共同研究発表)

須藤修、「わが国の電子署名制度の発展と課題」、『電子署名・電子認証シンポジウム』、2002年7月24日、電子署名・電子認証シンポジウムタスクフォース。(弁護士会館、2002年7月24日)

須藤修、「情報技術が支える地域活性化」、『情報技術が切り拓く東北地域の未来』、2002年9月6日、地域活性化ITフォーラム実行委員会、ホテルメトロポリタン仙台。(基調講演)

須藤修、「パネルディスカッション・情報技術が切り拓く東北地域の未来」、『情報技術が切り拓く東北地域の未来』、2002年9月6日、地域活性化ITフォーラム実行委員会、ホテルメトロポリタン仙台。

清原慶子・須藤修・伊藤守・恒松直幸・久保田文人、「基調シンポジウム・環境としての情報空間」、『社会情報学会第17回全国大会』、2002年9月26日、東京工業大学。

須藤修・潮田邦夫・森勝彦・馬男木賢一・廣川聡美、「ワークショップ・組織改革とコンピテンシーマネジメント」、『社会情報学会第17回全国大会』、2002年9月27日、東京工業大学。

須藤修、「電子社会への胎動——e-Japan 構想最前線」、『シンポジウム電子社会の未来』、2002年11月6日、日本経済新聞社、日経ホール。(基調講演)

須藤修、「電子自治体とドキュメント」、『電子自治体で変貌するドキュメント』、2002年11月25日、社団法人日本印刷技術協会通信・メディア研究会。(基調講演)

須藤修、「IT革命の行方と地域経済」、『地域公共政策学会平成14年度秋期研究大会』、2002年11月30日、福井県立大学。(基調講演)

須藤修・伊勢信三・北川修一・池上惇・竹内規浩、「討論・福井県経済の現状と課題」、『地域公共政策学会平成14年度秋期研究大会』、2002年11月30日、福井県立大学。

須藤修・加藤尚武・阿部賢一・佐々木良一・関口和一、「パネル討論・電子政府・自治体を推進する情報セキュリティ」、『シンポジウム・e-Japan を推進する暗号と情報セキュリティ』、2003年1月22日、日本セキュリティ・マネジメント学会・中央大学研究機構、中央大学駿河台 記念館。

後藤玲子・須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾、「情報社会における公私の連携及び機能分担」、『平成15年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告会』、2003年1月27日、国立情報学研究所。

須藤修、「地域情報化におけるNPOの役割と可能性」、『第9回社会情報システム学シンポジウム』、2003年1月29日、社会情報システム学研究会、電気通信大学。(基調講演)

須藤修、「電子政府・電子自治体が目指す社会」、『シンポジウム・安全なネットワーク社会と電子行政』、2003年2月22日、電子商取引推進協議会・財団法人科学技術交流財団、パレロワイヤルシャンテ。(基調講演・招待講演)

岩田彰・須藤修・大野秀敏・平野洋・佐々木浩・三田衛一、「パネルディスカッション・地方自治体における電子行政取組みの現状と将来 動向」、『シンポジウム・安全なネットワーク社会と電子行政』、2003年2月22日、電子商取引推進協議会・財団法人科学技術交流財団、パレロワイヤル シャンテ。

須藤修、「電子自治体戦略——情報テクノロジーと地域マネジメント」、『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『ITの深化の基盤を拓く情報学研究』柱AO6計画研究「グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザインに関する研究」主催、東』、2003年2月27日、文部 科学省・東京大学社会情報研究所共催、東京大学総合図書館大会議室。【査読有】(基調講演)

Osamu Sudoh, "e-Government Project and New Social Development in Japan," 2003.5.14, US. Department of Commerce, Washington, D.C, US Government.

須藤修、「電子政府・電子自治体最前線」、『海外電子政府視察団研究会』、2003年5月16日、日本経済新聞社、日本経済新聞社本社会議室。(基調講演)

須藤修、「電子自治体戦略とセキュリティ」、『ユビキタス社会と情報セキュリティ』、2003年5月23日、関西新技術研究所、京都リサーチパーク4号館。(基調講演)

須藤修、「電子政府とデジタル経済」、『アメリカ・カナダ電子政府視察研究会』、2003年6月10日、日本経済新聞社、Washington Plaza Hotel。(基調講演)

須藤修、「電子自治体と地域プロジェクト・マネジメント」、『Project Solution Forum』、2003年6月25日、法政大学、東京国際フォーラム。(招待講演)

須藤修、「電子自治体とGIS」、『GISカンファレンス2003』、2003年7月5日、地理情報システム学会、六本木ヒルズ。(招待講演)

須藤修、「電子政府・電子自治体の最新動向とセキュリティ・個人情報保護」、『セコム IS 研究所講演会』、2003年10月9日、セコム IS 研究所、セコム SC センター。(招待講演)

須藤修、「電子自治体と地域公共マネジメント」、『社会・経済システム学会第22回大会』、2003年10月26日、一橋大学。

齊藤日出治・藤井敦史・須藤修・谷本寛治、「パネルディスカッション・中間組織と公共性」、『社会・経済システム学会第22回大会』、2003年10月26日、一橋大学。

須藤修、「日本における電子自治体構想の現状と課題」、『2003年度日韓地方行政フォーラム』、2003年11月13日、財団法人自治体国際協会ソウル事務所、韓国ラマダブラザ済州ホテル。(基調講演)

須藤修・工藤裕子・生嶋文昭・チョイ・チャンハク・ファン・ビヨンチョン、「パネルディスカッション・行政の効率化及び透明性」、『2003年度日韓地方行政フォーラム』、2003年11月13日、財団法人自治体国際協会ソウル事務所、韓国ラマダブラザ済州ホテル。

須藤修、「電子政府の構築に向けて」、『電子社会システムと情報セキュリティ』、2003年12月21日、文部科学省・21世紀 COE プログラム中央大学研究拠点、中央大学理工学部。(招待講演)

須藤修、「情報化社会の行方と地域マネジメント」、『21世紀のIT型社会創造フォーラム』、2004年1月30日、山形県情報化推進協議会・山形県デジタルコンテンツ利用促進協議会、遊学館生涯学習センター。(基調講演、山形新聞が報道)

赤塚孝雄・須藤修・三田啓・北村忠雄・深野二郎・吉村和文、「パネル討論・電子自治体の役割と実現に向けて」、『21世紀のIT型社会創造フォーラム』、2004年1月30日、山形県情報化推進協議会・山形県デジタルコンテンツ利用促進協議会、遊学館生涯学習センター。(山形新聞が報道)

須藤修、「ユビキタス社会における電子政府・電子自治体の役割」、『情報化フェスタ2004』、2004年2月17日、財団法人ニューメディア開発協会、六本木ヒルズ・スカイスタジオ。(基調講演)

須藤修・谷史郎・佐々木浩・溝江言彦・島村秀世・梅本和秀・小倉博行、「討論・地域における情報化の推進を考える」、『地域情報化全国セミナー2004・大垣』、2004年5月27日、地域情報化全国セミナー2004・大垣実行委員会、大垣市情報工房。

須藤修・高村茂・佐々木豊・平塚直樹・新津岳、「討論・市町村合併で求められる情報化とは」、『地域情報化全国セミナー2004・大垣』、2004年5月28日、地域情報化全国セミナー2004・大垣実行委員会、大垣市情報工房。

国領二郎・須藤修・岩田彰、「総括討論」、『地域情報化全国セミナー2004・大垣』、2004年5月28日、地域情報化全国セミナー2004・大垣実行委員会、大垣市情報工房。

須藤修、「電子政府・電子自治体の動向」、『米国電子政府・電子自治体最前線 2004』、2004年6月5日、日本経済新聞社、The Warwick Seattle in USA。

須藤修、「深化し、展開する：社会情報学——政策展開」、『智慧の環・学びの府』、2004年6月12日、東京大学大学院情報学環・学際情報学府、東京大学安田講堂。

高橋はるみ・梶原拓・片山善博・須藤修、「討論・電子自治体で高める競争力と地域活性化」、『電子政府・電子自治体戦略会議』、2004年8月2日、日本経済新聞社、ホテルニューオータニ。

曾我敏・牧内勝哉・溝江言彦・須藤修、「討論・エンタープライズ・アーキテクチャの本質を探る」、『電子政府・電子自治体戦略会議』、2004年8月3日、日本経済新聞社、ホテルニューオータニ。

羽山正孝・清原慶子・須藤修・辻村清行・関口和一、「討論・セキュアな電子政府・電子自治体と個人情報保護」、『電子政府推進シンポジウム 2004 東京』、2004年9月29日、セキュアな電子政府を推進する会、国連大学。

須藤修、「Web based Community 構築に向けた官民連携モデル」、『平成 16 年度進化経済学会オースタムカンファレンス』、2004年10月2日、進化経済学会、東京工業大学すずかけ台キャンパス。(招待講演)

須藤修・原田至郎・Sugmin Youn・水越伸、「パネルディスカッション・NPO とネットワーク社会」、『国際シンポジウム・デジタル市民社会と社会情報学』、2004年10月4日、東京大学社会情報研究所、東京大学弥生講堂一条ホール。

須藤修、「ユビキタス・ネットワークの社会制度設計」、『21 世紀 CIO 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成第 1 回設立記念シンポジウム』、2004年10月27日、文部科学省・21 世紀 COE プログラム東京大学大学院情報学環・学際情報学府、東京大学安田講堂。

坂村健・須藤修・濱田純一、「討論・ユビキタス情報社会を支える社会設計・法制度そして政策」、『21 世紀 CIO 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成第 1 回設立記念シンポジウム』、2004年10月27日、東京大学安田講堂。

須藤修、「動き出した電子政府・自治体が成功するために——CRM & Security」、『情報セキュリティを生かす』、2004年11月、SKY リサーチパーク・アライアンス協議会・財団法人ソフトピア、ソフトピアジャパン。(基調講演・招待講演)

須藤修・金英美・川野真稔・熊谷道夫・吉崎賢介・李忠悦・河會信、「討論・電子自治体の構築基盤と業務改革」、『第 1 回日韓電子政府・電子自治体交流会議』、2004年11月11日、日本政府総務省・韓国政府行政自治部、赤坂プリンスホテル。

Osamu Sudoh, "E-Community and New Governance," *Government Leaders Forum—Asia*, 2004.11.19, Microsoft org., Singapore, The Grand Hyatt Singapore. (招待講演)

Jerry Mechling・Shahid Akhtar・Qian Hualin・Osamu Sudoh, 「Panel Discussion: Governance and Public」、『Government Leaders Forum in Asia 2004』、2004年11月19日、Microsoft org., Singapore, The Grand Hyatt Singapore。

須藤修、「電子政府・電子自治体の構築—EA と安心・安全なネットワーク社会」、『須藤修特別講演会』、2004年12月5日、JTB、Hotel Nikko San Francisco。(招待講演)

赤岡功・日置弘一郎・喜多一・出口弘・須藤修、「討論・新しい地域産業政策：民間と行政の役割」、『第 34 回 システム工学会研究会・地域産業クラスターを基軸とした産官学の連携と新産業モデルの創出』、2004年12月11日、計測自動制御学会 システム・情報部門、テクノプラザ岡谷。

須藤修・Glenda Hayes・今岡亮司・柴崎亮介・山下純一・菅又久直、「討論・LCDM の今後の進め方とメタデータレジストリ」、『ライフサイクルデータマネジメントのコンセプトと取組みの方向性』、2004年12月15日、LCDM 研究会、都市センター会館。

須藤修、「地域知識基盤と Data Management」、『知識経営における次世代 IT プラットフォームの研究』、2004年12月20日、独立行政法人産業技術総合研究所、独立行政法人産業技術総合研究所。

須藤修、「情報化と社会制度の構築に関する研究」、『平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・ITの深化の基盤を拓く情報学研究成果報告会』(学術総合センター、2005 年 1 月 13 日)、2005 年 1 月 13 日、学術総合センター。

須藤修、「空間情報社会と電子自治体」、『空間情報社会シンポジウム』、2005 年 3 月 4 日、日本学術会議主催、日本学術会議講堂。(招待講演)

須藤修、「産業の活性化と情報」指名討論者」、2005 年 3 月 8 日、日本学術会議経済政策研究連絡委員会、日本学術会議講堂。

その他

International Conference e Business Japan, 2000.6.13, Keidanren Kaikan. (Chairman)

The Second International Workshop on Agent-based Approaches in Economic and Social Complex Systems, 2002.8.16, The University of Tokyo. (開催責任者)

須藤修、「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」、『文部科学省科学研究費補助特定研究『ITの深化の基盤を拓く情報学研究』A06情報化と社会制度の構築に関する研究(柱長:須藤修)平成14年度研究成果中間発表会』、2002 年 11 月、学士会館分館。(開催責任者)

須藤修・姉崎猛・伊藤実・小田嶋芳、「パネルディスカッション・ITの革新と雇用」、『シンポジウム電子社会の未来』、2002 年 11 月 6 日、日本経済新聞社、日経ホール。

『地域公共政策学会平成14年度秋期研究大会「行財政分科会」』、2002 年 11 月 30 日、福井県立大学。(コメンテーター)

須藤修、「A06情報化と社会制度の構築に関する研究」、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究』、2003 年 1 月 23 日、国立情報学研究所。(開催責任者(柱長:須藤修))

一般向け著書等

須藤修・S.Clift・加藤秀樹・堂本暁子・浜口友一・伊集院礼子、「ITで変わる市民参画と行政」、NTTデータシステム科学研究所監修、『e デモクラシーという地域戦略』、2002 年 10 月、小学館スクエア。

一般向けエッセイ等

Osamu Sudoh, "ECOM and Development of Digital Economy," *ECOM Today*, no.7, 2000, ECOM.

須藤修、「<情報化>と<環境問題>」、『東大は主張する 2000』、2000 年、財団法人東京大学新聞社。

須藤修、「電子政府の実現に向けて」、『JACIC情報』、2000 年、財団法人日本建設情報センター。

須藤修、「巻頭特集「図解・IT革命」」、須藤修監修、『現代用語の基礎知識 2001』、2000 年、自由国民社。(監修・執筆)

須藤修・田中秀幸、「新語特集「IT経済用語集」」、須藤修監修、『現代用語の基礎知識 2001』、2000 年、自由国民社。(須藤修監修・田中秀幸ほかと共同執筆)

須藤修・高橋夏樹、「対談・IT革命」、『GAS』、2000 年 4 月、東京ガス。

須藤修、「電子政府で創るよりセキュアな暮らし」、『ひたち』、2000 年 7 月、日立製作所。

須藤修, "G-8 chiefs to tackle new issues including IT, human genome," *The Nikkei Weekly*, 2000.7.17. (企画協力)

“IT revolution faces serious hurdles in Japan,” *The Nikkei Weekly*, 2000.7.24. (企画協力)

須藤修、「IT革命と経済のパラダイム・シフト」、『旬報経理情報』、926 巻、2000 年 8 月、中央経済社。

北川正恭・井堀幹夫・孫泰蔵・須藤修・川上哲郎、「討論・新世紀に向けたデジタルコミュニティの形成」、『Kansai Institute of Information Systems』、115 号、2000 年 8 月、財団法人関西情報センター。

須藤修、「電子自治体の構築——電子商取引のインフラづくりにも寄与」、『日経地域情報』、349 号、2000 年 8 月、日本経済新聞社%日経産業消費研究所。

福川伸治・金丸恭文・北城格太郎・須藤修・宮内義彦、「新しい日本を創造するために」、『経済同友』、621 号、2001 年、経済同友会。(2001 年1・2 月合併号)

須藤修、「IT革命のインパクト」、『Solcowave』、3 号、2001 年 3 月、NTTソルコ。

須藤修、「デジタル経済へ向けた社会構造の変革」、『Solcowave』、4 号、2001 年 4 月、NTTソルコ。

須藤修、「電子政府とデジタルエコノミー」、『日立GPジャーナル』、創刊号、2001 年 4 月、日立公共システムエンジニアリング株式会社技術統括本部。(創刊号)

須藤修、「B to C市場をめぐる変動」、『Solcowave』、5 号、2001 年 5 月、NTTソルコ。

須藤修、「e ビジネスにおける革新」、『Solcowave』、6 号、2001 年 6 月、NTTソルコ。

須藤修・高崎一郎・浅野幸治・吉田稔・廣川聡美、「電子自治体の実現に向けて——IT戦略で自治体が変わる——」、『KIIS』、118 号、2001 年 7 月、財団法人関西情報センター。

須藤修、「台頭する e マーケットプレイス」、『Solcowave』、7 号、2001 年 7 月、NTTソルコ。

須藤修、「デジタル革命と地球環境問題に対応した地域の発展と協働」、『日経研月報』、278 号、2001 年 8 月、財団法人日本経済研究所。

須藤修、「e マーケットプレイスの今後」、『Solcowave』、8 号、2001 年 8 月、NTTソルコ。

須藤修、「ネットを支える制度環境の進展」、『Solcowave』、9 号、2001 年 9 月、NTTソルコ。

須藤修、「電子行政とネットワーク社会の進化」、『INTEC』、2 号、2001 年 9 月、インテック。

須藤修、「インタビュー・電子政府は自治体に課題」、『日経情報ストラテジー』、10 巻、9 号、2001 年 10 月、日経BP社。

須藤修、「動き出した電子政府構想」、『Solcowave』、10 号、2001 年 10 月、NTTソルコ。

須藤修・長井正利、「ビジネスインフラの旗手たち」、『Internet Magazine』、2001 年 10 月、インプレス。

須藤修、「IP Power による経済インパクト」、『日本経済新聞』、2001 年 10 月 26 日。(以下、二つの書誌情報が含まれている。『日経ネットビジネス』第 85 号(2001 年 11 月 10 日号)、『日経コミュニケーション』第 354 号(2001 年 11 月 19 日号)、『日経情報ストラテジー』第 10 巻第 12 号)

須藤修、「セキュリティ・ビジネス」、『Solcowave』、11 号、2001 年 11 月、NTTソルコ。

須藤修・田中秀幸ほか、「IT経済」、須藤修監修、『現代用語の基礎知識 2002』、2001 年 11 月。(監修、共同執筆、自由国民社)

須藤修、「NPOの創造と新たな社会発展の展望」、『Solcowave』、12 号、2001 年 12 月、NTTソルコ。

深澤淳志・須藤修・松本喬・廣瀬典昭・寺川陽、「討論・CALS/ECの一翼を担う電子入札への期待と展望」、『JACIC情報』、64号、2001年12月、財団法人日本建設情報総合センター。

須藤修、「ITが参加型の行政を実現」、『Wit Solution Journal』、7号、2001年12月、NTT西日本。

須藤修、「電子入札を取り巻く社会状況」、『日経コンストラクション』、2001年12月28日。(以下、もう一つの書誌情報が含まれている。『日経アーキテクチャ』(2001年12月24日号))

須藤修、『電子自治体導入の手引』、2002年、日経BP出版。(企画協力)

須藤修、「インタビュー・コンタクトポイント」、『Solcowave』、13号、2002年1月、NTTソルコ。

須藤修・長井正利、「対談・電子政府・行政への提案」、『New Media』、223号、2002年2月、株式会社ニューメディア。

井本勇・須藤修、「対談・ITによる佐賀県の地域革新」、『日本経済新聞』、2002年2月22日。(2002年2月22日付け朝刊)

須藤修、「インタビュー・動き始めた電子政府が地域IT企業を活性化する」、『エンジニア TYPE』、9巻、7号、2002年3月、キャリアデザインセンター。

須藤修、「デジタル経営講座」、『VC Digest』、11号、2002年3月、NTTコミュニケーションズ。

須藤修、「e デモクラシー実現のために期待されるNPOの役割」、『Consensus Community』、9号、2002年3月、NTTデータ。

須藤修・松島努、「対談・電子政府の膨張するデータ管理と Storage Area Network」、『New Media』、2002年3月、株式会社ニューメディア。

須藤修、「インタビュー:IT革命は始まったばかりー次は電子政府・自治体構想の実現へ」、『テレコム・フォーラム』、2002年7月、財団法人日本電信電話ユーザ協会。

須藤修、「IT革命とICカード」、『富士時報』、75号、2002年7月、富士電機株式会社。

須藤修・田中秀幸ほか、「IT社会」、『現代用語の基礎知識 2004』、2003年、自由国民社。(須藤修、田中秀幸ほか、共同執筆)

須藤修、「電子自治体構築への道」、『Justsystem & Government』、2003年2月、ジャストシステム。

Osamu Sudoh, "e-Government Project and New Social Development in Japan," *US. Department of Commerce (US Government), Office of Management and Budget (US Government), 2003.3, Public Works and Government Services Canada (Canada Government).*

須藤修、「電子政府の構築で民主主義の進化を」、『ガバナンス』、27号、2003年7月、ぎょうせい。

須藤修・若林裕幸・関幸子・岩本雅汎、「座談会・ITで身近になる公共情報」、『国土交通』、2003年8月、財団法人運輸振興協会ほか。

須藤修、「個人情報保護とセキュリティ」、『自治体チャンネル』、55号、2003年11月、三菱総合研究所。

須藤修、「電子自治体と地域発展」、『日立評論』、85巻、12号、2003年12月、日立評論社。

須藤修、「ブロードバンド革命が切り拓く未来」、『BAS』、3号、2004年3月、NTT西日本。

須藤修、「ブロードバンド革命が切り拓く未来」、『BAS Partners News』、3号、2004年4月、NTT西日本、pp. 1~2。

須藤修、「情報の経済学——産業革命を凌ぐ社会経済システムの創造」、『AERA Mook 新版・経済学がわかる。』、2004年5月、朝日新聞社、pp. 42～44。

須藤修、「見えてきた＜2005年＞電子自治体の姿」、『ガバナンス』、39号、2004年7月、ぎょうせい、pp. 74～75。

須藤修・田中秀幸ほか、「IT社会」、『現代用語の基礎知識』、2004年11月、自由国民社。

一般向け講演等

須藤修、「デジタルエコノミー」、『日本マルチメディアフォーラム』、2000年4月19日、サンケイビル。

北川正恭・井堀幹夫・孫泰造・須藤修・川上哲郎、「パネルディスカッション・新世紀に向けたコミュニティの形成とフォーラムへの期待」、『行政・地域情報化フォーラム』、2000年4月27日、財団法人関西情報センター、大阪国際会議場。

須藤修、「デジタル革命と教育改革」、『読売新聞』編集局「教育」研究会』、2000年5月19日、読売新聞本社ビル。

須藤修、「IT革命と社会進化」、『情報化セミナー』、2000年5月24日、福井県高度情報化推進協議会、福井県国際交流会館。

須藤修、「e-Commerceの展望と課題——ネットワーク社会における消費者保護とNPO」、『第13回消費者実務者懇談会』、2000年5月31日、通商産業省本館講堂。

Osamu Sudoh, “Digital Economy and e Business, International Conference e-Business Japan,” 2000.6.13, 経団連会館国際会議場。

須藤修、「ネット革命がもたらす経済・社会システムの変貌」、2000年6月19日、名古屋経済調査連絡協議会、名古屋商工会議所。

須藤修、「デジタル・エコノミーとネットビジネス」、『Digital Economy Wave 2000』、2000年7月7日、NEC情報サービス、NEC本社ビル講堂。

須藤修、「IT革命とデジタル経済の課題」、『Mondex Millennium Seminar』、2000年7月10日、日本モンデックス推進協議会・日本経済新聞社、日経ホール。

須藤修・杉山晋一・山下廣太郎・乾勝巳・平松雄一、「パネルディスカッション・電子マネーの可能性について」、『Mondex Millennium Seminar』、2000年7月10日、日本モンデックス推進協議会・日本経済新聞社、日経ホール。

須藤修、「デジタル経済の展望と課題——IT革命の行方」社団法人中国地方総合研究センター主催（リーガロイヤルホテル）、2000年8月1日、社団法人中国地方総合研究センター。

須藤修、「eビジネスの最新動向」、2000年8月23日、日経BP社、日本都市センター。

須藤修・ラリー・ライファー・清家一雄・安延申、「パネルディスカッション・Webによる教育システム改革」、『第6回チャレンジド・ジャパン・フォーラム実行委員会』、2000年8月30日、京王プラザホテル。

成毛真・西嶋美那子・須藤修・阿多親一・手嶋雅夫・池田茂・金丸恭文・竹中ナミ、「パネルディスカッション・チャレンジド——今、企業トップが動くとき」、『第6回チャレンジド・ジャパン・フォーラム2000日米会議』、2000年8月30日、第6回チャレンジド・ジャパン・フォーラム実行委員会、京王プラザホテル。

須藤修、「デジタルエコノミーとネットビジネス——IT革命の動向と展望」、『インテック・エグゼクティブ・セミナー2000』、2000年9月1日、インテック、インテック研修所。

須藤修、「e-Commerceの現状と進むべき方向」、『ECフォーラム2000』、2000年9月14日、NTTコミュニケーションズ、帝国ホテル。

須藤修、「デジタル革命とNPO——社会構造変動の2つの波頭」、『次代を考える研究会』、2000年9月14日、経済同友会、パレスビル。

須藤修、「高度情報通信社会における行政の在り方」、『福島県情報化推進特別講演会』、2000年9月18日、福島県、福島県庁。

須藤修、「IT革命とセキュリティ」、『Secure Card & Solutions 東京 2000』、2000年9月20日、日本工業新聞社、ビッグサイト。

須藤修、「IT革命の進展とこれからの企業」、『企業職員研修・管理職セミナー』、2000年9月27日、国民生活センター、国民生活センター研修施設。

須藤修ほか、「パネルディスカッション・Emerging e Marketplace —日本の産業界はこの課題にどのように対応するのか」、2000年10月3日、Commerce Net org., B2B Big Bang、東京国際フォーラム。

須藤修、「IT革命とe Marketplace」、『日本経済新聞社広告局研究会』、2000年10月10日、日本経済新聞社広告局研究会、日本経済新聞社東京本社。

須藤修、「IT革命における行政の在り方」、2000年10月11日、愛媛県、愛媛県庁分庁舎大会議室。

木村太郎・須藤修・孫正義・藤原宏高・鍋倉真一・鈴木祥弘、「総務庁規制改革委員会公開討論会パネルディスカッション・IT革命推進のための規制改革」、2000年10月13日、総理府講堂。

須藤修、「ITが導く社会システム変革」、『iDC (internet Data Center) イニシアティブ設立総会』、2000年10月16日、iDC イニシアティブ設立準備会、ホテルパシフィック東京。

須藤修、「IT革命とe Commerce」、『CRM研究会』、2000年10月19日、マルエツ・読売広告、リーガロイヤルホテル早稲田。

須藤修、「IT革命と行政情報化」、『情報化推進特別講演会』、2000年10月20日、福島県、福島県立会津大学。

須藤修、「台頭するeマーケットプレイス」、『eマーケットシンポジウム』、2000年10月31日、日本経済新聞社、日経ホール。

須藤修、「ネットワーク化の進展とビジネスモデルの革新」、『第37回マーケティング総合会議——顧客価値創造の経営革新』、2000年11月13日、社団法人日本能率協会、ホテルラフォーレ東京。

須藤修、「次世代インターネットを展望する」、『ネットワークビジネス 2000 in あいち』、2000年11月14日、ネットワークビジネス 2000 in あいち実行委員会、名古屋中小企業振興会館。

須藤修、「ITの発展に伴う社会経済システムの変容」、『第2回システム研究会』、2000年11月20日、経済同友会Eエコノミー委員会、パレスビル。

福川伸次・金丸恭文・北城格太郎・須藤修・宮内義彦、「パネルディスカッション・新しい日本を創造するために」、『iJapan 構想——新しい日本の創造』、2000年12月4日、経済同友会、東京會館。

須藤修、「IT革命における行政情報化のあり方」、『第3回十勝川流域総合情報ネットワーク研究会』、2000年12月8日、帯広開発建設部、帯広開発建設部。

須藤修、「iDCイニシアティブの意義と社会変革」、『Oracle Open World 2000』、2000年12月14日、オラクル、東京ドームホテル。

須藤修、「IT革命と電子行政化」、『電子申請研究会』、2000年12月20日、財団法人関西情報センター、中央電気倶楽部。

須藤修、「IT革命と行政の果たす役割」、2000年12月26日、福井県、福井県庁大ホール。

須藤修、「IT革命と企業経営の変革」、『第9回経済懇談会』、2001年1月10日、経済同友会、帝国ホテル。

須藤修、「IT革命と公共事業」、『平成12年度建設技術講習会』、2001年1月17日、福島県土木部、福島テルサ。

須藤修、「21世紀の日本企業」 *Digital Economy Wave 2001*, 2001.1.19, NEC情報サービス, 名古屋マリオットホテル。

須藤修・長保幸・吉村壽孝・矢野貴久子・松尾厚二郎、「パネルディスカッション・ネットビジネスの成功要因」、『*Digital Economy Wave 2001*』、2001年1月19日、NEC情報サービス、名古屋マリオットホテル。

安延申・須藤修・金丸恭文・橋本孝之、「パネルディスカッション・IT経済構造改革とeJapan戦略」、『JCSSA新春セミナー』、2001年1月21日、社団法人日本コンピュータシステム販売店協会、帝国ホテル。

須藤修、「電子自治体実現のためのキーワードと戦略」、『電子自治体実現の基盤としての公共iDCセミナー』、2001年1月24日、電子自治体実現のためのキーワードと戦略iDCイニシアティブ、リーガロイヤルホテル小倉。

須藤修、「IT革命と金融革新」、『国際シンポジウム Financial Executive Seminar 2001』、2001年2月13日、NTTデータ、帝国ホテル。

須藤修、「高度情報社会における行政の在り方」、2001年2月21日、内外状況調査会(時事通信社)、松山市役所大ホール。

須藤修、「IT革命とネット経済」、『情報ビジネス講演会』、2001年2月23日、出雲市、島根厚生年金会館。

須藤修、「IT革命とネット経済の展望と課題」、2001年2月27日、国際エグゼクティブフォーラム、パレスホテル。

須藤修、「欧米におけるB2B取引の進展と課題」、『第4回 Web Marketing Strategy Seminar』、2001年3月14日、伊藤忠テクノサイエンス、新宿パークタワー。

須藤修、「電子認証とネットセキュリティ」、『ネットワークセキュリティセミナー』、2001年3月15日、毎日新聞社・日刊工業新聞、サンシャイン60ビル。

須藤修、「IT革命と電子政府」、『情報社会と電子政府の展望』、2001年3月17日、兵庫県行政書士会、神戸商工会議所神商ホール。

大山永昭・須藤修、「パネルディスカッション・情報社会と電子政府の展望」、『情報社会と電子政府の展望』、2001年3月17日、兵庫県行政書士会、神戸商工会議所神商ホール。

須藤修、「行政ICカードの展望と課題」、『第2回電子自治体シンポジウム』、2001年3月26日、電子自治体フォーラム、リーガロイヤルホテル早稲田。

須藤修・廣川聡美・山本正雄・田中順一・新谷文夫、「パネルディスカッション・官民連携によるICカードサービスを探る」、『第2回電子自治体シンポジウム』、2001年3月26日、電子自治体フォーラム、リーガロイヤルホテル早稲田。

須藤修、「IT革命と電子行政——行政のデジタル化とネットワーク経済」、『新たな経済活力を創出する電子行政』、2001年4月11日、日本経済新聞社、日経ホール。

須藤修、「ICカードの具体的利用と今後の動向——ネットワーク経済とICカード」、『第1回ICカードセミナー』、2001年4月12日、ICBA、新丸ビル。

須藤修、「IT革命と電子行政——変わる行政プロセス」、『第1回行政情報化研究会』、2001年4月16日、三重県行政情報化推進協議会、三重県庁講堂。

須藤修、「電子自治体と地域の活性化」、『新たな経済活力を創出する電子行政』、2001年4月19日、日本経済新聞、大阪商工会議所国際会議ホール。

須藤修・伊藤元規・石井恭子・吉田稔・新谷文夫、「パネルディスカッション・電子自治体と新産業創出」、『新たな経済活力を創出する電子行政』、2001年4月19日、日本経済新聞、大阪商工会議所国際会議ホール。

須藤修、「自治体のIT革命」、『平成13年度市町村長会議』、2001年4月25日、福井県、福井県自治会館多目ホール。

須藤修・高崎一郎・原田裕司・吉田稔・廣川聡美、「パネルディスカッション・電子自治体の実現に向けて」、『電子自治体の実現に向けて—IT戦略で自治体が変わる』、2001年5月9日、財団法人関西情報センター、中央電気倶楽部。

須藤修、「IT社会の今後の展開と個人情報」、『どうなっているの私の個人情報—IT社会における個人情報の利用と保護の新展開』、2001年5月12日、東京弁護士会・第一東京弁護士会・第二東京弁護士会・日本弁護士連合会、弁護士会館。

須藤修・藤原静雄・片岡伸介・加藤真代・三宅弘・大澤孝征・三雲孝江、「パネルディスカッション・どうなっているの私の個人情報」、『どうなっているの私の個人情報—IT社会における個人情報の利用と保護の新展開』、2001年5月12日、東京弁護士会・第一東京弁護士会・第二東京弁護士会・日本弁護士連合会。

須藤修、「ネット社会と経済変動」、『Financial Seminar』、2001年5月25日、サンマイクロシステムズ、ホテルイースト21東京。

須藤修、「IT革命と電子自治体」、『情報化セミナー』、2001年6月11日、佐賀県、はがくれ荘。

須藤修、「e-Business and e-Government」、『2001年度コマースネットジャパン定期総会』、2001年6月12日、Commerce Net Japan、東京オペラシティタワービル。

須藤修、「電子行政化とLGWAN」、『欧州におけるIT関連プロジェクト最新動向調査報告会』、2001年6月25日、日刊工業新聞・ICカードシステム利用促進協議会、科学技術館サイエンスホール。

須藤修、「IT革命と社会変革」、『ITフェア2001 in 広島』、2001年6月26日、中国情報通信懇談会、メルパルク広島。

須藤修、「電子行政化の意義と課題」、2001年7月11日、電子文書・電子申請推進協議会会員総会。

須藤修、「実現に向けて加速する電子自治体構想」、『電子自治体実現の基盤としてのiDCセミナー(東京会場)』、2001年7月19日、iDCイニシアティブ、中央大学駿河台記念館。

須藤修、「電子県庁構築におけるリーダーシップ」、『平成13年度マネジメントセミナー』、2001年8月7日、埼玉県、埼玉会館。

須藤修、「電子行政とネットワーク経済」、『第6159回JPI特別研究フォーラム』、2001年8月20日、株式会社日本計画研究所、JPIカンファレンススクエア。

須藤修、「電子自治体の実現」、『電子自治体実現の基盤としての公共iDCセミナー(大阪会場)』、2001年8月22日、iDCイニシアティブ、大阪国際会議場。

篠塚勝正・伊東乾・岸博幸・須藤修、「パネルディスカッション・知の融合と大学の進化」、『社会と大学のアクティブリンク』、2001年9月15日、東京大学公開シンポジウム「社会と大学のアクティブリンク」実行委員会、東京大学安田講堂。

須藤修、「IT時代における公社等の情報化のあり方」、『情報化推進アドバイザー講演会』、2001年9月17日、福島県、福島グリーンパレス。

須藤修、「ITイノベーションと社会経済システムの転換」、『企業経営者懇話会2001年9月例会』、2001年9月19日、社会経済生産性本部、経団連会館。

須藤修、「次世代電子政府」、『IT戦略セミナー』、2001年9月26日、日本IBM、日本IBM天城ホームステッド。

須藤修、「21世紀電子政府の展望と課題」、『ITで創る21世紀——2001年情報化月間記念講演会』、2001年10月1日、経済産業省・財団法人日本情報処理開発協会、東京全日空ホテル。

須藤修、「電子政府の展望と課題」、『ITフォーラム』、2001年10月4日、東京ガス、東京ガス本社大会議室。

須藤修、「IP Powerによる経済インパクト」、『NTT Communications Conference 2001: IP Power Business Solutions』、2001年10月5日、NTTコミュニケーションズ、新高輪プリンスホテル国際館パミール。URL:<http://www.ntt.com.ip2001/> (日本経済新聞社、日経BP社後援、テレビ東京協力、なお、ライブは<http://www.ntt.com.ip2001/>に収録)

須藤修、「電子政府の実現に向けて—展望と課題—」、『電子政府・電子自治体シンポジウム』、2001年10月10日、日刊工業新聞、虎ノ門パストラル。(総務省後援)

William Gates・Alan Mather・Wu Choy Peng・Terry Lutes・片山虎之助・竹中平蔵・小阪憲次・古屋圭司・梶原拓・片山善博・北川正恭・国松善次・橋本大二郎・長澤純一・原田和明・須藤修・杉田亮毅・富沢秀機、「The Meeting of the Strategic Conference on e-Government」、『The Meeting of the Strategic Conference on e-Government』、2001年10月16日、日本経済新聞社、赤坂プリンスホテル。

岸本周平・大橋秀行・棚橋康郎・西野弘・須藤修、「パネルディスカッション・IT調達システムと人材育成」、『電子政府戦略会議』、2001年10月16日、日本経済新聞社、赤坂プリンスホテル。

廣川聡美・戸谷寿夫・後藤省二・須藤修、「パネルディスカッション・拡がる電子政府・電子自治体の役割」、『電子政府戦略会議』、2001年10月16日、日本経済新聞社、赤坂プリンスホテル。

須藤修、「ITの動向と県政運営」、『IT推進フォーラム』、2001年10月19日、埼玉県IT推進実行委員会。

須藤修、「デジタル経済がもたらすインパクト——迫りくる電子契約社会への対応」、『第6回中小企業懇談会』、2001年10月24日、財団法人中小企業総合研究機構、都市センターホテル。

須藤修、「日本再生の為にブレイクスルー」、『iDC イニシアティブ特別講演会』、2001年10月24日、iDC イニシアティブ、キャピトル東急ホテル。

須藤修、「行政電子化が金融業に及ぼす影響」、『第2回日本決済ネットワーク・セミナー』、2001年10月26日、日本決済ネットワーク、株式会社日本総合研究所。

須藤修、「IT革命の中での自治体経営の展望」、『平成13年度福井県市町村収入役セミナー』、2001年10月31日、福井県、サバエ・シティホテル。

須藤修・高崎一郎・府中義則・吉田稔・横江公美、「パネルディスカッション・電子政府の課題と可能性」、『第2回・新たな経済活力を創出する電子政府』、2001年11月5日、日本経済新聞社、日経ホール。

須藤修、「電子自治体構築に向けた諸課題」、『IT推進トップセミナー』、2001年11月12日、埼玉県・埼玉県市町村振興協会、浦和東武ホテル。

須藤修、「電子入札を取り巻く社会状況」、『建設ITフォーラム』、2001年11月13日、日経BP社、東京コンファレンスセンター。

須藤修、「電子政府実現における自治体の課題」、『電子自治体推進関西大会』、2001年11月19日、電子文書・電子申請推進協議会、大阪国際交流センター。

竹中平蔵・増田寛也・浅野史郎・福田昭夫・梶原拓・北川正恭・石井正弘・橋本大二郎・麻生渡・稲嶺恵一・須藤修、「第1回公開討論・地域からIT戦略を考える」、『地域からIT戦略を考える会第1回会合』、2001年11月23日、岡山後楽園唱栄の間。

須藤修、「高度情報化社会における行政の在り方」、『地方行財政調査会』、2001年11月30日、福島県郡山地方広域市町村圏組合、郡山市役所。

須藤修、「電子行政化と電子入札」、『福井県建設 CALS/EC 講習会』、2001年12月18日、福井県、福井県庁大ホール。

須藤修・加藤哲夫、「パネルディスカッション・市民が創る新しい社会像—NPOの活動から見えてくるもの」、『DCsスクール市民・社会人遠隔授業パイロット講座第1回』、2002年1月26日、デジタルコミュニティーズ、三重県立看護大学。

須藤修、「デジタル経済と電子自治体の構築」、2002年2月18日、社団法人関西経済連合会情報通信委員会、リーガロイヤルNCB。

須藤修、「e Japan 構想と金融サービス」、『地方銀行経営グループ第40回例会』、2002年2月22日、沖電気工業株式会社、ホテル日航東京。

須藤修、「電子自治体における電子認証の最新動向」、『電子自治体における電子認証の最新動向セミナー』、2002年3月18日、NTTデータ・新日本監査法人・日本電子公証機構、目黒雅叙園。

須藤修・折坂義雄・山田宗範・浮川初子、「パネルディスカッション・産・学・公・民連携〈e-Kansai 戦略〉の実現に向けて」、『e-Kansai 戦略シンポジウム』、2002年4月24日、財団法人関西情報センター、大阪国際会議場。

須藤修、「使いやすくて効率のよい電子政府・電子自治体の実現に向けて」、『EC研究会第65回フォーラム』、2002年5月10日、ラビロス六本木。

竹中ナミ・金丸恭文・坂本由紀子・須藤修・田中直人・野田聖子・浜四津敏子・矢田立郎、「パネルディスカッション・ITを使ってユニバーサル・シティ神戸を実現しよう」、『Let's ユニバーサル・シティ Kobe フォーラム2002』、2002年5月12日、神戸ファッションマート。

須藤修、「デジタル・エコノミーと電子政府・電子自治体構想」、『定例講演会』、2002年5月15日、オリックス・レンテック、パレスホテル。

須藤修、「電子政府・電子自治体とセキュリティの動向」、『第6回欧州動向調査報告会』、2002年5月29日、ICカードシステム利用促進協議会、機械振興会館。

須藤修、「ブロードバンド時代における電子政府・自治体」、『地域情報化全国セミナー2002』、2002年5月30日、長野市・財団法人電気通信高度化協会・テレピア促進協議会・情報基盤協議会・信越情報通信懇談会、ホテルメトロポリタン長野。

須藤修、「電子自治体の目指すもの」、『電子自治体講演会』、2002年5月31日、福島県、福島県ハイテクプラザ。

須藤修、「個人情報保護とデータマイニング」、『Fujitsu ユニバーシティ』、2002年6月6日、富士通経営研修所、富士通経営研修所。

須藤修、「情報化の進展と社会変化」、2002年6月12日、中小企業大学校。

須藤修、「電子自治体の効果について」、『情報化推進アドバイザー会議』、2002年6月13日、福島県、福島県庁。

須藤修、「IT革命と社会変動」、『JR東日本メカトロニクス定例研究会』、2002年6月18日、JR東日本メカトロニクス株式会社本社ビル。

須藤修、「電子自治体の今後の動向について」、『行政・地域情報化フォーラム』、2002年7月5日、財団法人関西情報・産業活性化センター、大阪赤十字会館。

須藤修、「電子自治体実現に向けての展望と課題」、『市町村助役セミナー』、2002年7月8日、福井県、サンピア敦賀。

須藤修、「電子政府・電子自治体の最新動向について」、『iDC 講演会』、2002年7月10日、株式会社東京電力・株式会社@東京・サンマイクロシステムズ、山王パークタワー。

須藤修、「電子自治体構想と地域発展」、『電子自治体セミナー』、2002年7月11日、株式会社日立情報システムズ、大阪全日空ホテル。

須藤修、「e-Japanと電子自治体」、『第22回ECOMセミナー』、2002年7月17日、電子商取引推進協議会(ECOM)、機械振興会館。

須藤修、「IT先端技術を活用した電子自治体の実現」、『電子自治体推進会議2002』、2002年7月22日、毎日新聞社、ニッショーホール。

須藤修・大野慎一・逢坂誠二・江島潔・白井均、「パネルディスカッション・自治体の電子化がもたらすもの」、『電子自治体推進会議2002』、2002年7月22日、毎日新聞社、ニッショーホール。

須藤修、「電子政府の最前線と成功への課題」、『iDC 活動報告会』、2002年7月23日、iDC イニシアティブ、明治記念館。

須藤修、「ネットワークを基盤にした電子自治体構想」、『島根県市町村電子自治体協同構築推進協議会講演会』、2002年7月29日、島根県、市町村振興センター。

須藤修、「知識と創造性」、『Fujitsu ユニバーシティ』、2002年7月31日、富士通経営研修所、富士通経営研修所。

末吉興一・沢田秀男・西尾理弘・須藤修、「パネルディスカッション・行政広域化時代——充実したサービスを実現する自治体経営」、『電子政府戦略会議』、2002年8月1日、日本経済新聞社、赤坂プリンスホテル。

須藤修、「電子自治体がめざす地域自立戦略」、『e-Japan 戦略の目指す地域づくり—IT革命と地域の課題と対応』、2002年8月17日、総務省・三重県、津都ホテル。

片山虎之助・須藤修・北川正恭、「パネルディスカッション・ネットワーク社会で地域が変わる」、『e-Japan 戦略の目指す地域づくり—IT革命と地域の課題と対応』、2002年8月17日、総務省・三重県、津都ホテル。

金丸恭文・須藤修・岸本修平・池田茂・西野弘、「パネルディスカッション・暮らすこと、生きること、そしてIT」、『チャレンジド・ジャパン・フォーラム in いわて』、2002年8月28日、チャレンジド・ジャパン・フォーラム in いわて実行委員会、ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング。

須藤修、「動き出した電子政府・自治体が成功するために——CRM and Security」、『公共 iDC で実現する電子自治体セミナー』、2002年9月11日、iDC イニシアティブ、ホテルオークラ別館。(基調講演)

須藤修・五十嵐孝雄・田口裕之・杉野周二・溝江言彦・志村近史・本田雅裕、「パネルディスカッション・電子自治体と公共 iDC の課題」、『公共 iDC で実現する電子自治体セミナー』、2002年9月11日、iDC イニシアティブ、ホテルオークラ別館。

須藤修・藪紀洋・福西義昭・植村富明、「パネルディスカッション・電子自治体の新たな展開——システムの共同化・広域化」、『電子自治体ITセミナー』、2002年9月13日、財団法人地方自治情報センター、新神戸オリエンタルホテル。

須藤修、「電子政府構築における iDC の役割」、『iDC イニシアティブ第4回定期総会』、2002年9月24日、帝国ホテル。

須藤修、「電子自治体の課題と展望」、『電子自治体フォーラム総会』、2002年10月3日、経団連会館。(基調講演)

須藤修、「情報ネットワーク社会における自治体の課題」、『ネットワーク社会と情報発信』、2002年10月4日、彩の国さいたま人づくり広域連合自治人材開発センター、彩の国さいたま人づくり広域連合自治人材開発センター。

須藤修、「電子自治体最前線」、『日経ビジネスコラム』、2002年10月7日、日本経済新聞社、日本経済新聞社本社。

須藤修、「電子自治体の実現に向けて」、『福井県市町村情報主幹課長会議』、2002年10月10日、福井県、福井国際交流会館。

須藤修、「地域が活きる e-自治体とは」、『地域が活きる e-自治体とは』、2002 年 10 月 11 日、広島ITビジネスフォーラム、メルパルク広島。(基調講演)

須藤修・廣川聡美・吉田洋之・佐々木康弘、「パネルディスカッション・IT社会における行政サービスの事例と今後の課題」、『地域が活きる e-自治体とは』、2002 年 10 月 11 日、広島ITビジネスフォーラム、メルパルク広島。

須藤修、「行政の広域化と電子自治体の推進のポイント」、『第10回インフォ・フェア2002in わかやま』、2002 年 10 月 30 日、社団法人和歌山情報サービス産業協会・和歌山情報化推進協議会・雇用・能力開発機構和歌山センター、県民交流プラザ和歌山ビッグ愛。(基調講演)

須藤修・木村良樹・大橋健一・神出政巳・村上恒夫・佐藤周、「パネルディスカッション・和歌山における電子自治体推進」、『第10回 インフォ・フェア2002in わかやま』、2002 年 10 月 30 日、社団法人和歌山情報サービス産業協会・和歌山情報化推進協議会・雇用・能力開発機構和歌山センター、県民交流プラザ和歌山ビッグ愛。

須藤修、「IT化が拓く行政新時代——デジタル革命と行政ネットワーク」、『電子自治体ソリューションフェア関西 2002』、2002 年 11 月 7 日、日本経営協会、大阪産業創造館。(基調講演)

須藤修、「電子自治体と地域戦略」、2002 年 11 月 13 日、日本情報通信コンサルティング。(基調講演)

須藤修、「電子自治体の行方と果たす役割」、『電子自治体セミナー in にしのみや』、2002 年 11 月 18 日、西宮市フレンテホール。(基調講演)

須藤修・稲嶺恵一・橋本大二郎・石井正弘・麻生渡・梶原拓・福田昭夫・浅野史郎・高橋洋介、「パネルディスカッション・ITは世界を変える——地域からのチャレンジ」、『第3回地域からIT戦略を考える会』、2002 年 11 月 26 日、福岡県、シーホークホテル。

須藤修、「情報技術が支える地域活性化」、『Unisys Forum 2002 in 北海道』、2002 年 12 月 3 日、ユニシス研究会北海道支部、札幌グランドホテル。(基調講演)

須藤修、「e-Japan 戦略と電子自治体が目指す社会」、『C&Cユーザーフォーラム』、2002 年 12 月 13 日、NEC、東京ビッグサイト。(基調講演)

平井伸治・広島和夫・須藤修・佐々木かをり・関口和一、「基調討論・どうする？どうなる？日本のIT——日本の未来は地方自治体が創る地方自治体発 e-Japan」、『Internet Week 2002 : IA Japan エグゼクティブフォーラム』、2002 年 12 月 20 日、インターネット協会、パシフィコ横浜。(基調討論)

須藤修、「電子社会化で近未来の生活はこう変わる」、『よくわかる！近未来の電子社会フェア』、2002 年 12 月 22 日、福島県高度情報化推進協議会、ビッグパレットふくしま。(基調講演)

須藤修、「電子自治体構想と電子公共調達」、『電子入札システム導入促進フォーラム』、2003 年 1 月 9 日、国土交通省、大阪府女性総合センター。(基調講演)

須藤修、「電子自治体と地域経済の活性化」、『K-Opti.com IT Forum 2003』、2003 年 1 月 20 日、株式会社ケイ・オプティコム、大阪国際会議場。(朝日新聞社後援、基調講演)

須藤修、「電子政府・電子自治体の現状について」、『福島県情報推進アドバイザー講演会』、2003 年 1 月 27 日、福島県本庁舎。

須藤修、「電子自治体における e デモクラシーの可能性と課題」、『活力自治体フェア2003』、2003 年 1 月 31 日、電子自治体推進フォーラム・日本工業新聞、幕張メッセ。(招待講演)

金谷年展・馬男木賢一・猿渡知之・須藤修・新開伊知郎、「パネルディスカッション・e デモクラシーで地域活性化をどう進めるか」、『活力自治体フェア2003』、2003 年 1 月 31 日、電子自治体推進フォーラム・日本工業新聞、幕張メッセ。

須藤修、「電子政府・電子自治体の構想」、『電子政府研究会』、2003年3月1日、日本経済新聞社、和歌山コガネイベイホテル。(基調講演)

須藤修・楠本隆、『対談・和歌山県にみる地方電子化のあり方』、2003年3月1日、和歌山コガネイベイホテル。

須藤修、「デジタル社会とモバイルの可能性」、『ドコモモバイルエグゼクティブセミナー』、2003年3月4日、NTTドコモ、ホテル阪急インターナショナル。(基調講演)

須藤修、「行政のIT化」、『近畿地区懇談会』、2003年3月4日、地方行財政調査会、都ホテル大阪。(招待講演)

須藤修、「電子自治体と地域戦略」、『ITふくおか推進会議』、2003年3月6日、福岡県、シーホークホテル&リゾート。(招待講演)

須藤修、「電子政府システムの現状と将来動向」、『電子政府システムの現状と将来動向セミナー』、2003年3月20日、NECユニバーシティ技術研究所、NECユニバーシティ技術研修所。

須藤修、「電子自治体の現状と将来動向」、『福島県情報化推進アドバイザー会議』、2003年4月24日、福島県、福島県庁。

須藤修、「電子自治体とセキュリティ」、『行政・地域情報化フォーラム』、2003年5月26日、財団法人関西情報・産業活性化センター、中央電気倶楽部。

須藤修、「電子政府・電子自治体構想と地域経済活性化」、『電子自治体フェア2003』、2003年6月3日、富士通、マイドーム大阪。(招待講演)

須藤修、「e-Kansai 戦略アクション宣言と行動提案」、『行政・地域情報化フォーラム——e-Kansai 戦略円卓会議』、2003年6月23日、財団法人関西情報・産業活性化センター・大阪府、大阪国際会議場。

須藤修、「地域の自立的発展と産学官民の協働」、『経済講演会』、2003年7月3日、大分経済同友会ほか、大分トキハ会館。(招待講演)

須藤修、「電子自治体の目指すもの」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年7月7日、総務省・静岡県・静岡新聞・全国地方新聞社連合会、静岡コンベンションアーツセンター『グランシップ』。(基調講演<静岡新聞が報道>)

須藤修、「電子自治体と地域発展」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年7月9日、総務省・福島県・福島民放社・福島民友新聞社・全国地方新聞社連合会、会津大学講堂。(基調講演<福島民友新聞が報道>)

菅家一郎・林隆史・宮沢洋一・五十嵐直子・須藤修、「パネルディスカッション・電子自治体の現状と今後の課題」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年7月9日、総務省・福島県・福島民放社・福島民友新聞社・全国地方新聞社連合会、会津大学講堂。(福島民友新聞が報道)

五十嵐英男・須藤修・松尾カニタ・横山健一郎・辻正次、「パネルディスカッション・コスモスクエアのまちづくり——課題と展望」、『コスモスクエアシンポジウム・関西の再生とコスモスクエア』、2003年7月11日、財団法人大阪港開発技術協議会・産経新聞社、ヴィアーレ大阪。(産経新聞が報道)

須藤修、「電子自治体と住民サービス」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年7月18日、総務省・福岡県・西日本新聞社・全国地方新聞社連合会、アクロス福岡・国際会議場。(基調講演<西日本新聞が報道>)

須藤修、「電子自治体が目指すもの」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年7月28日、総務省・福井県・福井新聞社・全国地方新聞社連合会、福井県自治会館。(基調講演<福井新聞が報道>)

須藤修・揚原安磨・高嶋公美子・田中利憲・齊藤一雅・橋詰武宏、「パネルディスカッション・電子自治体の推進と住民の暮らし」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年7月28日、総務省・福井県・福井新聞社・全国地方新聞社連合会、福井県自治会館。(福井新聞が報道)

石川雄章・溝江言彦・廣川聡美・牧内勝哉・須藤修、「パネル討論・これからの行政サービスと人材——共同アウトソーシング・SLA」、『電子政府戦略会議』、2003年7月31日、日本経済新聞社、赤坂プリンスホテル。(日本経済新聞が報道)

福田昭夫・石川喜延・石井正弘・須藤修、「パネル討論・新しい地域ガバナンスと電子自治体の役割」、『電子政府戦略会議』、2003年8月1日、日本経済新聞社、赤坂プリンスホテル。(日本経済新聞が報道)

須藤修、「電子自治体が目指すもの」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年8月6日、総務省・島根県・山陰中央新報社・全国地方新聞社連合会、くにびきメッセ。(基調講演<山陰中央新報が報道>)

須藤修・かわべまゆみ・松浦正敬・大野慎一・富田幹彦・前田幸二、「パネル討論・電子自治体と未来の暮らし」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年8月6日、総務省・島根県・山陰中央新報社・全国地方新聞社連合会、くにびきメッセ。(山陰中央新報が報道)

須藤修、「信頼ある電子自治体の構築に向けて」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年8月7日、総務省・山梨県・全国地方新聞社連合会、甲府市総合市民会館芸術ホール。(基調講演、梨日日新聞が報道)

小林是網・須藤修・宮島雅展・大野慎一・長田克夫、「パネル討論・電子自治体の推進と住民の暮らし」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年8月7日、総務省・山梨県・全国地方新聞社連合会、甲府市総合市民会館芸術ホール。(山梨日日新聞が報道)

須藤修、「電子自治体の展望と課題」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年8月19日、総務省・山口県・全国地方新聞社連合会、ぱるるプラザ山口。(基調講演 <山口新聞が報道>)

須藤修・江島潔・松野浩嗣・田中昌子・斉藤一雅・佐々木正一、「パネル討論・電子自治体でかわる住民の暮らし」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年8月19日、総務省・山口県・全国地方新聞社連合会、ぱるるプラザ山口。(山口新聞が報道)

成毛真・金丸恭文・須藤修・金子郁容・安延申、「パネルディスカッション・ユニバーサル社会創造の課題」、『第9回チャレンジド・ジャパン・フォーラム 2003 国際会議』、2003年8月22日、チャレンジド・ジャパン・フォーラム 2003 国際会議 in ちば実行委員会、幕張メッセ国際会議場。

須藤修、「電子政府・電子自治体とセキュリティの動向」、『電子自治体セミナー2003in 茨城』、2003年8月29日、日立製作所、茨城県市町村会館。(基調講演)

須藤修、「動き出した電子自治体が見据えるべき課題」、『公共 IDC で実現する電子自治体セミナー』、2003年9月12日、IDC イニシアティブ、セルリアンタワー東急。(基調講演)

田口裕之・明石亮一・若菜金一郎・中村好宏・溝江言彦・須藤修・磯部猛也・志村近史、「パネルディスカッション・電子自治体の課題」、『公共 IDC で実現する電子自治体セミナー』、2003年9月12日、IDC イニシアティブ、セルリアンタワー東急。

須藤修、「個人情報保護とセキュリティ」、『主催『自治体チャンネル特別セミナー』』、2003年9月16日、三菱総研、三菱総研。(基調講演)

須藤修、「今後の IT 社会のあり方と日本の国際競争力強化について」、『netCommunity フォーラム』、2003年9月26日、富士通、富士通電子行政モデルルーム。(招待講演)

須藤修、「新たな経済発展とカード新時代」、『デジタル経済への産・官・学連携——カード新時代』、2003年9月29日、新社会システム総合研究所、明治記念館。(招待講演)

須藤修、「電子自治体構想と新たな社会発展」、『NTT Group Collection in West 2003』、2003年10月2日、NTT 西日本、大阪国際会議場。(招待講演)

須藤修、「情報ネットワーク社会の進展と自治体の役割」、『ネットワーク社会と情報発信』、2003年10月7日、彩の国さいたま人づくり広域連合自治人材開発センター、彩の国さいたま人づくり広域連合自治人材開発センター。

須藤修、「電子自治体と産官連携」、『電子行政ソリューションセミナー』、2003年10月8日、エネルギー・コミュニケーションズ、日立製作所、メルパルク広島。(招待講演)

須藤修、「電子自治体と未来の暮らし」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年10月20日、総務省・京都府・京都新聞社・全国地方新聞社連合会、ホテルグランヴィア京都。(基調講演 <京都新聞が報道>)

須藤修・平林幸子・横澤誠・小寺貞明・井上源三・森本博和、「電子自治体の構築による府民の未来づくり」、『電子自治体と未来の暮らし』、2003年10月20日、総務省・京都府・京都新聞社・全国地方新聞社連合会、ホテルグランヴィア京都。(京都新聞が報道)

須藤修、「e-Japan II と社会経済システムの進化」、『情報通信融合ソリューションセミナー』、2003年10月23日、沖電気工業、沖電気工業本社ビル。(基調講演)

須藤修、「e-Japan と社会経済システム」、『電子署名・電子認証最新動向』、2003年11月3日、Identrus、Capital Hilton in Washington D.C.。

須藤修、「電子自治体と地域の発展」、『地方行財政調査会講演会』、2003年11月7日、岐阜県大垣市、大垣市情報工房。(招待講演)

須藤修・江崎正邦・萩原誠司・大場充・近藤則子・原田康夫、「パネルディスカッション・中国地方の電子自治体戦略」、『第1回中国地方電子自治体戦略会議』、2003年11月21日、中国地方電子自治体戦略会議実行委員会。(岡山県総合福祉会館、読売新聞、朝日新聞、山陽新聞、岡山日日新聞、中国新聞がそれぞれ報道)

須藤修、「e-Japan 戦略—これまでの成果と今後の行方」、『電子政府・電子自治体の評価と行政アウトソーシングビジネスの変革』、2003年12月8日、新社会システム総合研究所、明治記念館。(基調講演)

須藤修、「高度情報社会の現状と課題—IT ガバナンスの必要性」、『福島県情報化推進アドバイザー会議』、2003年12月10日、福島県、福島県庁講堂。

須藤修、「ブロードバンド革命とネットワーク社会」、『ネットワークソリューションセミナー2003』、2003年12月14日、NTT西日本、グランドハイアット福岡。(招待講演)

須藤修、「電子市役所と地域活性化」、『みんなで一緒に考えよう！電子市役所』、2004年1月10日、名古屋市、名古屋国際センターホール。(基調講演)

川勝平太・須藤修・市川克哉、「市民討議・みんなで一緒に考えよう！電子市役所」、『みんなで一緒に考えよう！電子市役所』、2004年1月10日、名古屋市、名古屋国際センターホール。

須藤修、「電子自治体と地域発展」、『活力自治体セミナー』、2004年3月23日、フジサンケイ・ビジネス i、パシフィック横浜アネックスホール。(基調講演)

須藤修・牧慎太郎・谷史郎・小林隆・辻正・北村忠雄、「パネル討論・電子自治体で地域発展をどう進めるか」、『活力自治体セミナー』、2004年3月23日、フジサンケイ・ビジネス i、パシフィック横浜アネックスホール。

須藤修、「カード社会の利便と恐怖」、『消費者スクール』、2004年3月24日、小金井市経済課、小金井市上之原会館。

須藤修、「電子自治体が目指すもの」、『福島県情報化推進アドバイザー講演会』、2004年4月26日、福島県、福島県本庁舎。

須藤修、「電子自治体の現状と展望」、『電子自治体(e-Japan)講演会』、2004年5月10日、茨城県測量設計業協会、水戸京成ホテル。(基調講演)

須藤修、「行政・地域情報化フォーラム活動報告」、『e-Kansai 戦略円卓会議』、2004年5月17日、財団法人関西情報・産業活性化センター、大阪国際会議場。

土屋泰一・須藤修・臼井純子・下田喜宏・白川千治・竹村太佑・浅野幸治・石川雄章・堀池喜一郎、「円卓会議・地域を元気に！——官民連携地域ポータル」、『e-Kansai 戦略円卓会議』、2004年5月17日、財団法人関西情報・産業活性化センター、大阪国際会議場。

須藤修、「電子政府・自治体のこれから——サービス・システム・機能」、『電子政府の基礎知識セミナー』、2004年5月24日、NEC ユニバーシティ技術研修所、NEC ユニバーシティ技術研修所。

須藤修、「電子政府・電子自治体と官民連携」、『第24回自治体セミナー』、2004年6月22日、富士通、クレール。(基調講演)

須藤修、「電子政府・電子自治体の方向性」、『海外電子行政調査セミナー』、2004年7月13日、富士通、USA、Hilton San Francisco。(基調講演)

須藤修、「電子自治体構築の現状と課題」、『第3回公共 iDC で実現する電子自治体セミナー』、2004年7月22日、iDC イニシアティブ・Web サービスイニシアティブ、建築会館ホール。(基調講演)

須藤修・土屋光秋・溝江言彦・井堀幹夫、「パネルディスカッション・公共 iDC で実現する電子自治体」、『第3回公共 iDC で実現する電子自治体セミナー』、2004年7月22日、iDC イニシアティブ、Web サービスイニシアティブ、建築会館ホール。

須藤修、「電子自治体と地域ガバナンス」、『第3回電子自治体フェア九州 2004』、2004年7月28日、社団法人日本経営協会、福岡商工会議所。(招待講演)

須藤修、「電子自治体とアウトソーシング」、『沖電気工業経営諮問委員会』、2004年7月30日、沖電気工業経営諮問委員会、沖電気工業株式会社本社ビル。

須藤修、「電子政府・電子自治体と官民連携」、『富士通ソリューション・フォーラム』、2004年9月3日、富士通、クレール。(招待講演)

須藤修、「Web-Based 電子自治体と官民連携」、『情報通信事業部講演会』、2004年9月27日、東京電力、東京電力本店。(招待講演)

須藤修、「電子自治体構築の現状と課題」、『市町村行政講演会』、2004年10月4日、財団法人佐賀市町村振興協会、佐賀市文化会館。(招待講演)

須藤修、「自治体の IT 戦略と官民連携」、『第39回行政事務近代化九州ブロック研究会』、2004年10月7日、行政事務近代化九州ブロック研究会、ソラリア西鉄ホテル。(招待講演)

須藤修、「情報倫理の葛藤——個人情報利用と保護」、『第102回東京大学公開講座——いま、倫理の時代』、2004年10月16日、東京大学、東京大学安田講堂。

須藤修、「IT 社会における地方公共団体の役割」、『福島県地域情報化推進会議』、2004年10月28日、福島県、杉妻会館。(基調講演)

須藤修、「市場経済の転換と個人情報保護」、『日本監査役協会講演会』、2004年11月2日、社団法人日本監査役協会、東京国際フォーラム。(招待講演)

須藤修、「ユビキタス環境と電子自治体——e-Japan/u-Japan と EA』、『OKI 情報通信ソリューションフェア 2004』、2004年11月11日、沖電気工業株式会社、沖電気工業株式会社本社。(招待講演)

須藤修・岸本晃・小久保徳子・高橋寿美夫・国領二郎、「討論・人のつながりを力に地域活性化を後押し」、『地域情報化フォーラム in ながさき』、2004年11月12日、日本経済新聞社、ホテルニュー長崎。

井坂明・島田政次・溝江言彦・島村秀世・須藤修、「討論・IT の地消地産に向けて」、『地域情報化フォーラム in ながさき』、2004年11月12日、日本経済新聞社、ホテルニュー長崎。

須藤修、「電子自治体と官民連携による地域発展」、『新潟県電子自治体構築セミナー』、2004年11月15日、新潟県IT & ITS 推進協議会、柏崎市市民プラザ。(基調講演・招待講演)

須藤修・牧慎太郎・三上喜貴・土田茂・品田正樹・松下哲夫、「討論・電子自治体構築の加速化に向けて」、『新潟県電子自治体構築セミナー』、2004年11月15日、新潟県IT & ITS 推進協議会、柏崎市市民プラザ。

須藤修、「ユビキタス時代における地域情報化」、『全国マルチメディア祭 2004in 和歌山』、2004年11月21日、和歌山県・総務省、和歌山県立情報交流センターBig・U。(招待講演)

須藤修、「電子政府・電子自治体の構築—EAと安心・安全なネットワーク社会」、『第1回情報・通信セキュリティ教育コース』、2004年11月25日、東京大学国際・産学共同研究センター、第一法規株式会社。(招待講演)

須藤修、「中国経済の潜在力と課題」、『沖電気工業経営諮問委員会』、2004年11月29日、沖電気工業経営諮問委員会、沖電気工業株式会社本社ビル。

須藤修・岩田彰・安井義博・武長脩行・三宅なほみ・加藤正嗣、「討論・ITで創る豊かな地域社会」、『東海電子自治体戦略会議実行委員会 2004』、2004年12月9日、東海電子自治体戦略会議実行委員会、メルパルク名古屋。

須藤修、「経済発展と個人情報保護」、『中部監査役協会講演会』、2004年12月21日、社団法人日本監査役協会、メルパルク名古屋。(招待講演)

須藤修、「ユビキタス・ネットワークと地域発展」、2005年1月17日、佐賀県庁知事室。

須藤修、「デジタル経済と地域発展」、『福島県高度情報化推進協議会 IT セミナー』、2005年1月24日、福島県高度情報化推進協議会、福島県杉妻会館。(招待講演)

須藤修、「北海道とe-Japan」、『HEART 新春講演会』、2005年1月26日、NPO 法人 HEART、札幌後楽園ホテル。(招待講演)

須藤修、「電子自治体の将来展望」、『第2回情報・通信セキュリティ教育』、2005年2月15日、東京大学国際・産学共同研究センター、東京大学先端科学技術研究センター。(招待講演)

須藤修、「IT 主要動向と電子自治体」、『情報通信事業部講演会』、2005年3月15日、東京電力、東京電力本館。

須藤修、「情報化戦略とICカード」、『フロンティアサービス研究所懇談会』、2005年3月22日、JR 東日本、インペリアル・トレジャー。

須藤修、「福島県の目指すべきIT社会」、『情報化推進アドバイザー講演会』、2005年3月23日、福島県、福島県本庁舎講堂。

その他一般向け

須藤修、「デジタル経済の発展とECOM」、『ECOM TODAY』、8号、2000年4月、電子商取引実証推進協議会。

須藤修、「本と出会う——トーマス・クーン著『科学革命の構造』——」、『TBSニュースバード・チャンネル』、2000年4月29日。(2000年4月29日、30日放送)

須藤修、「ネットワーク社会におけるデジタル経済の課題」、『日経金融新聞』2000年8月28日付け朝刊及び『日経流通新聞』2000年8月31日付け朝刊、2000年8月28日。(『日経金融新聞』2000年8月28日付け朝刊及び『日経流通新聞』2000年8月31日付け朝刊)

須藤修・杉山晋一・乾勝巳・山下廣太郎・平松雄一、「討論・電子マネーの可能性について」、『日経金融新聞』2000年8月28日付け朝刊及び『日経流通新聞』2000年8月31日付け朝刊、2000年8月28日。(『日経金融新聞』2000年8月28日付け朝刊及び『日経流通新聞』2000年8月31日付け朝刊)

須藤修、「電子マネー」、『産経新聞』、2000年10月19日。(2000年10月19日付け夕刊)

須藤修、「台頭するEマーケットプレイス——進む環境整備」、『日経産業新聞』、2000年11月30日。(2001年3月26日付け朝刊)

須藤修, 株式会社日立製作所 ed., *Video e-Government*, 2001, 株式会社日立製作所.

須藤修・坂明・小林偉昭・竹内克彦、「21世紀のIT革命と情報セキュリティ」、『防犯設備』、15巻、4号、2001年1月、社団法人日本防犯設備協会。

須藤修・牧野二郎、「緊急対談・健全なネットワーク社会へ試金石の電子署名法」、『日経産業新聞』、2001年3月26日。(2001年3月26日付け朝刊)

須藤修、「IT革命と電子行政——行政のデジタル化とネットワーク経済」、『日経産業新聞』、2001年5月15日。(『日経産業新聞』2001年5月15日朝刊)

須藤修、「ICカードの具体的利用と今後の動向」、『ICBAレポート』、62号、2001年5月15日。

須藤修、「電子自治体と地域の活性化」、『日経産業新聞』、2001年5月23日。(『日経産業新聞』2001年5月23日朝刊)

吉田稔・石井恭子・伊藤元規・須藤修・新谷文夫、「討論・電子自治体と新産業創出」、『日経産業新聞』、2001年5月23日。(『日経産業新聞』2001年5月23日朝刊)

Osamu Sudoh・Ki-Yoong Hong・Mohamed Arif Nun・Kwok-Yan Lam・Han-Min Hsia・Jirou Makino、「相互認証・法制度の整備・相互運用——アジアにおけるPKI普及のシナリオ」、『日経産業新聞』、2001年6月29日。(『日経産業新聞』2001年6月29日付け朝刊)

須藤修・後藤省二・戸谷寿夫・廣川聡美、「拡がる電子政府・自治体の役割」、『日本経済新聞』、2001年11月28日。(2001年11月28日付け朝刊)

須藤修・高崎一郎・府中義則・吉田稔・横江公美、「討論・電子行政の課題と可能性」、『日経産業新聞』、2001年11月29日。(2001年11月29日付け朝刊)

竹中ナミ・金丸恭文・坂本由紀子・須藤修・田中直人・野田聖子・浜四津敏子・矢田立郎、「討論：ユニバーサル・シティ Kobe——ITが可能性開く」、『神戸新聞』、2002年5月22日。(2002年5月22日付け朝刊)

須藤修、「インタビュー：PKI・認証システムの整備不可欠」、『日経産業新聞』、2002年6月28日。(2002年6月28日付け朝刊)

末吉興一・沢田秀男・西尾理弘・須藤修、「広域行政にIT活用」、『日本経済新聞』、2002年8月2日。(2002年8月2日付け朝刊)

須藤修、「自律した地域社会・ネット連携で発展」、『毎日新聞』、2002年8月9日。(2002年8月9日付け朝刊)

須藤修・大野慎一・逢坂誠二・江島潔・白井均、「討論・自治体の電子化がもたらすもの」、『毎日新聞』、2002年8月9日。(2002年8月9日付け朝刊)

末吉興一・沢田秀男・西尾理弘・須藤修、「広域行政化時代へIT活用で充実したサービス実現」、『日本経済新聞』、2002年8月30日。

隈研吾・須藤修・中村陽一・三浦展、「討論・共費市場の可能性」、博報堂研究開発局編、『未来予兆』、2002年9月、博報堂。

須藤修、「インタビュー・産公共同で行政システムを運営」、『日本工業新聞』、2002年10月3日。(2002年10月3日付け朝刊)

須藤修、「e デモクラシー目指せ！——電子自治体フォーラム」、『日本工業新聞』、2002年10月4日。(2002年10月4日付け朝刊)

須藤修、「地域マネジメントの時代——産・官・学の連携が要」、『日経産業新聞』、2002年11月28日。(2002年11月28日付け朝刊)

須藤修・姉崎猛・伊藤実・小田島芳、「討論・雇用問題解消へ、情報技術活用が鍵」、『日経産業新聞』、2002年11月28日。(2002年11月28日付け朝刊)

須藤修・西澤和夫・森山武・本島靖・内藤文子、「討論・ITを活用した自治体経営のポイント」、『地域政策研究』、21号、2002年12月、地方自治研究機構。

須藤修・稲嶺恵一・橋本大二郎・石井正弘・麻生渡・梶原拓・福田昭夫・浅野史郎・高橋洋介、「討論・東京一極から地方へ——格差埋める情報技術」、『読売新聞』、2002年12月3日。(2002年12月3日付け朝刊 西日本版)

須藤修、「電子自治体におけるe デモクラシーの可能性と課題」、『日本工業新聞』、2003年2月25日。(2003年2月25日付け朝刊)

須藤修、「電子自治体と地域経済の活性化」、『朝日新聞』、2003年2月25日。(2003年2月25日付け朝刊、大阪版)

須藤修、「インフラ整備から活用の段階へ——インターネット情報スクエア Vol.46」、『日本経済新聞』、2003年6月26日。(2003年6月26日付け夕刊)

五十嵐英男・須藤修・松尾カナタ・横山健一郎・辻正次、「討論・関西再生とコスモスクエア」、『産経新聞』、2003年7月31日。(2003年7月31日付け朝刊)

須藤修、「電子自治体と未来の暮らし」、『西日本新聞』、2003年8月8日。(2003年8月8日付け朝刊)

須藤修、「行政が目指すもの——積極的に組織進化を」、『福井新聞』、2003年8月14日。(2003年8月14日付け朝刊)

須藤修・揚原安磨・高嶋公美子・田中利憲・斉藤一雅、「討論・IT 通し見える地域の新たな形」、『福井新聞』、2003年8月14日。(2003年8月14日付け朝刊)

須藤修、「電子自治体の役割考える」、『宇部時報』、2003年8月20日。(2003年8月20日付け朝刊)

須藤修、「電子自治体の展望と課題」、『防長新聞』、2003年8月20日。(2003年8月20日付け朝刊)

須藤修、「電子自治体が目指すもの」、『山陰中央新報』、2003年8月27日。(2003年8月27日付け朝刊)

須藤修・かわべまゆみ・松浦正敬・大野慎一・富田幹彦・前田幸二、「討論・IT が可能にする新しい地域づくり」、『山陰中央新報』、2003年8月27日。(2003年8月27日付け朝刊)

石井正弘・石川嘉延・福田昭夫・須藤修、「行政改革と住民サービスを支援する電子自治体」、『日本経済新聞』、2003年8月29日。(2003年8月29日付け朝刊)

須藤修、「情報化社会の行方と地域マネジメント」、『おもしろバイキング』、2004年5月、ケーブルテレビ山形、pp. 2~3。

須藤修、「ネット社会犯罪の芽摘む——エコノ探偵団」、『日本経済新聞』、2004年7月25日。(2004年7月25日付け朝刊(須藤修のコメント掲載))

高橋はるみ・梶原拓・片山善博・須藤修、「討論・電子自治体で高める競争力と地域活性化」、『日本経済新聞』、2004年8月19日。(2004年8月19日付け朝刊)

須藤修、日本経済新聞社・日経産業消費研究所編、『全国自治体のIT戦略』、2004年10月、日本経済新聞社%日経産業消費研究所、pp. 115~117。(討論参加)

須藤修・岸本晃・小久保徳子・高橋寿美夫・国領二郎、「討論・人のつながりを力に地域活性化を後押し」、『日本経済新聞』、2004年12月8日。(2004年12月8日付け朝刊)

辻井 潤一 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

Web情報の組織化と検索のための言語処理技術

Webには、数年前には想像できなかったほどの大量のテキスト情報、半構造化情報が蓄積されている。この大量の蓄積情報を組織化し、相互に関連づけることで、ユーザの情報要求に的確に応えるためのシステム、および、そのための自然言語処理技術の研究、Semantic Webと言語処理技術の研究

テキストからの情報抽出に関する研究

テキストから固定的なテンプレートを生める情報を抽出する技術、分野の文献から科学・学問分野(現在は、生化学分野)の知識を構造化するための自然言語処理技術の研究

言語構造の解析アルゴリズムと機械学習の研究

計算機による言語処理の基本技術の研究、この延長上に人間の脳における言語処理機構を計算論の立場から解明する研究がある。このような基礎的、要素 技術的な研究が上記2つの応用指向の研究を行う場合の基盤となる。このような観点から、言語構造を解析するためのアルゴリズム研究、および、機械学習からの研究を行っている

研究業績(2000~2004年度)

著書等

辻井潤一編、『談話と対話』、2001年3月、東京大学出版会、244pp.。

論文等

Takaki Makino, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun-ichi Tsujii, "Native-Code Compilation of Feature Structures," Stephan Oepen, Dan Flickinger, Jun-ichi Tsujii and Hans Uszkoreit eds., *Collaborative Language Engineering: A Case Study in Efficient Grammar-based Processing*, 2000, CSLI Publications.【査読有】

Miyao Yusuke, Takaki Makino, Kentaro Torisawa and Jun-ichi Tsujii, "The LiLFeS abstract machine and its evaluation with the LinGO grammar," *Natural Language Engineering Special Issue -- Efficient Processing with HPSG: Methods, Systems, Evaluation*, 6, no.1, 2000, pp. 47-61.【査読有】

Torisawa Kentaro, Kenji Nishida, Yusuke Miyao and Jun-ich Tsujii, "An HPSG Parser with CFG Filtering," *Natural Language Engineering Special Issue -- Efficient Processing with HPSG: Methods, Systems, Evaluation*, 6, no.1, 2000, pp. 63-80.【査読有】

金山博・鳥澤健太郎・光石豊・辻井潤一、「つ以下の候補から係り先を選択する係り受け解析モデル」、『言語処理学会学会誌』、7巻、5号、2000年、pp. 487~490。【査読有】

Ohta Tomoko, Yuka Tateisi, Nigel Collier, Chikashi Nobata and Jun'ichi Tsujii, "Building an Annotated Corpus from Biology Research Papers," *In the Proceedings COLING 2000 Workshop on Semantic Annotation and Intelligent Content*, 2000, Luxembourg, pp. 28-34.【査読有】

Nobata Chikashi, Nigel Collier and Jun'ichi Tsujii, "Corpora for the Named Entity Task.," *In the Proceedings of ACL 2000 Workshop on Comparing Corpora*, 2000, Hong Kong, China, pp. 20-27.【査読有】

Collier Nigel, Chikashi Nobata and Jun'ichi Tsujii, "Comparison between Tagged Corpora for the Named Entity Task.," *In the Proceedings of the 18th International Conference on Computational Linguistics (COLING 2000)*, 2000, pp. 201-207. 【査読有】

Kanayama Hiroshi, Kentaro Torisawa, Mitsuishi Yutaka and Jun'ichi Tsujii, "A Hybrid Japanese Parser with Hand-crafted Grammar and Statistics.," *In the Proceedings of the 18th International Conference on Computational Linguistics (COLING 2000)*, 1, 2000, Saarbrucken, Germany, pp. 411-417.【査読有】

辻井潤一, *PSB*, 2000. (招待講演, Honolulu, 2000)

辻井潤一, *Sir Edward Youde Memorial Fund Visiting Professorship*, 2000. (公開講演, 香港, 2000)

辻井潤一, *at CNRS, Paris (LE JAPONAIS 2000 International Seminar)*, 2000. (招待講義, パリ, 2000)

辻井潤一, *Lrec*, 2000. (パネリスト, アテネ, 2000)

辻井潤一, *Coling*, 2000. (パネリスト, ザールブリュッケン(ドイツ), 2000)

辻井潤一、「言語処理のパラダイムについて」、『ACL2000』、2000年。(招待講演、香港、2000)

Ninomiya Takashi, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsuji, "An Agent-based Parallel HPSG Parser for Shared-memory Parallel Machines," *Journal of Natural Language Processing*, 8, no.1, 2001.【査読有】

Yoshinaga Naoki, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Resource sharing among HPSG and LTAG communities by a method of grammar conversion from FB-LTAG to HPSG," *In the Proceedings of ACL/EACL Workshop on Sharing Tools and Resources for Research and Education*, 2001, Toulouse, France, Morgan Kaufman Publishers, pp. 39-46.【査読有】

Nishida Kenji, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Compiling an HPSG-based grammar into more than one CFG," *In the Proceedings of PACLING 2001*, 2001, pp. 199-206.【査読有】

Yoshinaga Naoki, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Efficient LTAG parsing using HPSG parsers," *In the Proceedings of Pacific Association for Computational Linguistics (PACLING 2001)*, 2001, Fukuoka, Japan, pp. 342-351.【査読有】

Ohta Tomoko, Yuka Tateisi, Jin-Dong Kim, Hideki Mima and Jun'ichi Tsujii, "Ontology Based Corpus Annotation and Tools," *In the Proceedings of the 12th Genome Informatics 200*, 2001, pp. 469-470.【査読有】

Yoshida Minoru, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Extracting ontologies from World Wide Web via HTML tables," *In the Proceedings of the Pacific Association for Computational Linguistics (PACLING 2001)*, 2001, pp. 332-341.【査読有】

Kazama Jun'ichi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "A Maximum Entropy Tagger with Unsupervised Hidden Markov Models," *In the Proceedings of the Sixth Natural Language Processing Pacific Rim Symposium*, 2001, pp. 333-340.【査読有】

Yoshida Minoru, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "A method to integrate tables of the World Wide Web," *In the Proceedings of the first International Workshop on Web Document Analysis (WDA 2001)*, 2001, pp. 31-34.【査読有】

Kim Jin-Dong, Tomoko Ohta, Yuka Tateisi, Hideki Mima and Jun'ichi Tsujii, "XML-Based Linguistic Annotation of Corpus," *In the Proceedings of the first NLP and XML Workshop held at NLPRS 2001*, 2001, pp. 47-53.【査読有】

Ohta Tomoko, Yuka Tateisi, Jin-Dong Kim, Sang-Zoo Lee and Jun'ichi Tsujii, "GENIA corpus: A Semantically Annotated Corpus in Molecular Biology Domain," *In the Proceedings of the ninth International Conference on Intelligent Systems for Molecular Biology (ISMB 2001) poster session*, 2001, p. 68.【査読有】

Ohta Tomoko, Yuka Tateisi and Jun'ichi Tsujii, "Tools for Ontology-based Corpus Annotation," *In the Proceedings of the sixth Pacific Symposium on Biocomputing (PSB 2001)*, 2001, Hawaii, U.S.A, p. 112.【査読有】

Yakushiji Akane, Yuka Tateisi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Event extraction from biomedical papers using a full parser," *In the Proceedings of the sixth Pacific Symposium on Biocomputing (PSB 2001)*, 2001, Hawaii, U.S.A, pp. 408-419.【査読有】

Makino Takaki, Kazuyuki Aihara and Jun'ichi Tsujii, 2001.【査読有】

辻井潤一、「Information Extraction について」、『PSB 2001』、2001 年。(チュートリアル、ハワイ、2001)

辻井潤一、『JSPS German-Japanese Symposium』、2001 年。(招待講演、バイロイト(ドイツ)、2001)

辻井潤一、「テキストマイニングについて」、『ISMB』、2001 年。(チュートリアル。コペンハーゲン、2001)

Miyao Yusuke and Jun'ichi Tsujii, 2002.【査読有】

Mima Hideki, Sofia Ananiadou, Goran Nenadic and Jun'ichi Tsujii, 2002.【査読有】

Mima Hideki, Sophia Ananiadou, Goran Nenadic and Jun'ichi Tsujii, 2002.【査読有】

Ohta, Tomoko, Yuka Tateisi, Hideki Mima and Jun'ichi Tsujii, "GENIA Corpus: an Annotated Research Abstract Corpus in Molecular Biology Domain," *Proceedings of the Human Language Technology Conference (HLT 2002)*, 2002.【査読有】

Kazama, Jun'ichi, Takaki Makino, Yoshihiro Ohta and Jun'ichi Tsujii, "Tuning Support Vector Machines for Biomedical Named Entity Recognition," *Proceedings of the Natural Language Processing in the Biomedical Domain (ACL 2002)*, 2002, Philadelphia, PA, USA.【査読有】 (To appear)

Yoshinaga, Naoki, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "A formal proof of strong equivalence for a grammar conversion from LTAG to HPSG-style," *Proceedings of the TAG+6 Workshop*, 2002, pp. 187-192.【査読有】

Hara, Tadayoshi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Clustering for obtaining syntactic classes of words from automatically extracted LTAG grammars," *Proceedings of the sixth International Workshop on Tree Adjoining Grammars and Related Frameworks (TAG+6)*, 2002, Venice, Italy, pp. 227-233.【査読有】

Araki, Junko, Takashi Ninomiya, Takaki Makino and Jun'ichi Tsujii, "Two Perspective systems Using a Route as a Reference Object," *Proceedings of the sixth World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics (SCI 2002)*, 2002.【査読有】 (To appear)

辻井潤一、『Korean NLP Association』、2002 年。(招待講演、ソウル、2002)

辻井潤一、『HLT Conference』、2002 年。(チュートリアル、サンディエゴ、USA、2002)

辻井潤一、『Coling 2002』、2002 年。(チュートリアル、台北、2002)

辻井潤一, *SCIE02*, 2002. (招待講義、ローマ、2002)

辻井潤一, *LangTech2002*, 2002. (多言語処理に関する講演 ベルリン、2002)

辻井潤一, *日中言語処理シンポジウム*, 2002. (基調講演、北京大学開催、中国、2002)

辻井潤一, *Academia Sinica 台北*, 2002. (言語学研究所研究評価委員)

Araki, Junko, Takashi Ninomiya, Takaki Makino and Jun'ichi Tsujii, "Action Vectors for Interpreting Route Descriptions.," *Proceedings of the AAAI-02 Workshop on Spatial and Temporal Reasoning.*, 2002.7.【査読有】

Ninomiya, Takashi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Lenient Default Unification for Robust Processing within Unification Based Grammar Formalisms.," *Proceedings of the 19th International Conference on Computational Linguistics (COLING 2002).*, 2002.8.【査読有】

Ninomiya, Takashi, Takaki Makino and Jun'ichi Tsujii, "An Indexing Scheme for Typed Feature Structures.," *Proceedings of the 19th International Conference on Computational Linguistics (COLING 2002).*, 2002.8.【査読有】

Kawasaki, Yoshiaki, Jun'ichi Kazama and Jun'ichi Tsujii, "Extracting Biomedical Ontology from Textbooks and Article Abstracts.," *Proceedings of the SIGIR'03 Workshop on Text Analysis and Search for Bioinformatics.*, 2003, pp. 44-50.【査読有】

Yoshinaga, Naoki, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Parsing comparison across grammar formalisms using strongly equivalent grammars.," *Journal of Traitement automatique des langues.*, 44, no.3, 2003.【査読有】 (To appear)

Tsujii, Jun-ichi, "New Perspectives of Linguistic Study.," *ISCA and IEEE workshop on Spontaneous Speech Processing and Recognition.*, 2003, Tokyo., Tokyo Institute of Technology., pp. 151-157.【査読有】

Hisamitsu, Toru and Tsujii, Jun-ichi, "Measuring Term Representativeness.," Pazienza, Maria Teresa ed., *Information Extraction in the Web Era.*, 2003, Springer-Verlag., pp. 45-76.【査読有】 (LNAI 2700.)

Masuda, Katsuya, Takashi Ninomiya, Yusuke Miyao, Tomoko Ohta and Jun'ichi Tsujii, "A Robust Retrieval Engine for Proximal and Structural Search.," *Proceedings of HLT-NAACL 2003 Short papers.*, 2003, pp. 58-60.【査読有】

Miyao, Yusuke, Takashi Ninomiya and Jun'ichi Tsujii, "Lexicalized Grammar Acquisition.," *Proceedings of the 10th Conference of the European Chapter of the Association for Computational Linguistics (EACL) companion volume.*, 2003, pp. 127-130.【査読有】

Kazama, Jun'ichi and Jun'ichi Tsujii, "Evaluation and Extension of Maximum Entropy Models with Inequality Constraints.," *Proceedings of the 2003 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP 2003).*, 2003, pp. 137-144.【査読有】 (errata revised)

Tsuruoka, Yoshimasa and Jun'ichi Tsujii, "Probabilistic Term Variant Generator for Biomedical Terms.," *Proceedings of the 26th Annual International ACM SIGIR Conference.*, 2003, pp. 167-173.【査読有】

Yakushiji, Akane, Yuka Tateisi, Yusuke Miyao, Naoki Yoshinaga and Jun'ichi Tsujii, "A Debug Tool for Practical Grammar Development.," *Proceedings of the 41st ACL companion volume.*, 2003, pp. 173-176.【査読有】

Yoshinaga, Naoki, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Comparison between CFG filtering techniques for LTAG and HPSG.," *Proceedings of the 41st ACL companion volume.*, 2003, pp. 185-188.【査読有】

Masuda, Katsuya., "A Ranking Model of Proximal and Structural Text Retrieval Based on Region Algebra.," *Proceedings of the ACL 2003 Student Research Workshop.*, 2003, pp. 50-57.【査読有】

Tsuruoka, Yoshimasa and Jun'ichi Tsujii., "Boosting Precision and Recall of Dictionary-Based Protein Name Recognition.," *Proceedings of the ACL-03 Workshop on Natural Language Processing in Biomedicine.*, 2003, pp. 41-48.【査読有】

Yu, Zhonghua, Yoshimasa Tsuruoka and Jun'ichi Tsujii., "Automatic Resolution of Ambiguous Abbreviations in Biomedical Texts using Support Vector Machines and One Sense Per Discourse Hypothesis.," *Proceedings of the SIGIR'03 Workshop on Text Analysis and Search for Bioinformatics.*, 2003, pp. 57-62.【査読有】

Miyao, Yusuke and Jun'ichi Tsujii., "A model of syntactic disambiguation based on lexicalized grammars.," *Proceedings of the Seventh Conference on Natural Language Learning (CoNLL) at HLT-NAACL 2003.*, 2003, pp. 1-8.【査読有】

Matsuzaki, Takuya, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii., "An Efficient Clustering Algorithm for Class-based Language Models.," *Proceedings of the Seventh Conference on Natural Language Learning (CoNLL) at HLT-NAACL 2003.*, 2003, pp. 119-126.【査読有】

Tsuruoka, Yoshimasa and Jun'ichi Tsujii., "Training a Naive Bayes Classifier via the EM Algorithm with a Class Distribution Constraint.," *Proceedings of the Seventh Conference on Natural Language Learning (CoNLL) at HLT-NAACL 2003.*, 2003, pp. 127-134.【査読有】

Miyao, Yusuke, Takashi Ninomiya and Jun'ichi Tsujii., "Probabilistic modeling of argument structures including non-local dependencies.," *Proceedings of the Conference on Recent Advances in Natural Language Processing (RANLP) 2003.*, 2003, pp. 285-291.【査読有】

吉田 和弘・鶴岡 慶雅・宮尾祐介・辻井潤一、「確率的言語モデルにおけるパラメータの確率分布を推定する手法とその応用.」、『言語処理学会第9回年次大会論文集』、2003年、pp. 250~253.【査読有】

坂尾 要祐・宮尾 祐介・辻井潤一、「構文解析における非局所的な評価値の構成的計算」、『言語処理学会第9回年次大会論文集』、2003年、pp. 549~552.【査読有】

大内田 賢太・吉永 直樹・二宮 崇・宮尾 祐介・辻井潤一、「語彙化文法における語彙項目の構造的特徴に基づく自動分類」、『言語処理学会第9回年次大会論文集』、2003年、pp. 553~556.【査読有】

葉師寺 あかね・建石 由佳・宮尾 祐介・吉永 直樹・辻井潤一、「実用的な文法を開発するためのデバッグツール」、『情報処理学会研究報告 NL-155』、2003年、pp. 19~24.【査読有】

辻井潤一, "Spontaneous Speech Recognition Workshop," *解放融合プロジェクトの Workshop*, 2003, IEEE, ISCA. (基調講演)

Tsuruoka, Yoshimasa and Jun'ichi Tsujii., "Iterative CKY Parsing for Probabilistic Context-Free Grammars.," *Proceedings of IJCNLP 2004*, 2004.【査読有】

Ninomiya, Takashi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii., "A Persistent Feature-Object Database for Intelligent Text Archive Systems.," *Proceedings of IJCNLP 2004*, 2004.【査読有】

Miyao, Yusuke, Takashi Ninomiya and Jun'ichi Tsujii., "Corpus-oriented Grammar Development for Acquiring a Head-driven Phrase Structure Grammar from the Penn Treebank.," *Proceedings of IJCNLP-04.*, 2004.【査読有】

増田勝也・二宮 崇・宮尾祐介・辻井潤一、「領域代数を用いた構造化テキスト検索の頑健でスケーラブルなモデル」、『言語処理学会第10回年次大会論文集』、2004年。【査読有】

辻井潤一, "WS on Text Annotation," 2004.1. (招待講演、Bielefeld, January, 2004.)

辻井潤一, *LREC(Language Resource and Evaluation Conference)*, 2004.5. (基調講演、Lisbon, May, 2004)

その他

辻井潤一、2003年。(ACL2003のGeneral Chairとして会議(札幌)を組織 日本,2003)

一般向け著書等

辻井潤一, "言葉とコンピュータ," 月刊「言語」, 129, no.No.1-12, 2000. (連載、2000年1月から12月)

辻井潤一 and 建石由佳, "生命の理解とオントロジー," 数理科学, no.458, 2001, サイエンス社.

辻井潤一, "ゲノム情報学と言語処理," 情報処理 143, no.1, 2002.1, pp. 36-41. (情報処理学会会誌)

西垣 通 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

基礎情報学

生命情報から社会情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトウラーナ/ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、ドブレのメディアロジーなどを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。

インターネット社会論

上記の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(共同体、情報都市、サイバースペース心理など)を理論的に検討する。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

レジス・ドブレ、嶋崎正樹訳、西垣通監修、『一般メディアロジー講義』、2001年3月22日、NTT出版。

西垣通・ジョナサン・ルイス、『インターネットで日本語はどうなるか』、2001年3月26日、岩波書店。

西垣通・NTTデータ システム科学研究所、『情報都市論』、2002年4月10日、NTT出版。

北川高嗣・須藤修・西垣通・濱田純一・吉見俊也・米本昌平、『情報学事典』、2002年6月15日、弘文堂。

レジス・ドブレ、嶋崎正樹訳、西垣通監修、『イメージの生と死』、2002年8月16日、NTT出版。

伊藤守・西垣通・正村俊之編、『パラダイムとしての社会情報学』、2003年5月30日、早稲田大学出版部。

西垣通・NTTデータ システム科学研究所、『eリテール・インパクト』、2003年11月7日、NTT出版。

西垣通、『基礎情報学』、2004年2月25日、NTT出版。

論文等

青木保・西垣通ほか、「情報技術が支えるアジアの共生」、『2000年アジア科学技術会議』、2000年6月6日。(東京大学・日経新聞主催、2000年6月6日)

西垣通、「インターネット時代のアジアの言語」、三浦信孝・糟谷啓介編、『言語帝国主義とは何か』、2000年9月30日、藤原書店、pp. 328～336。

林紘一郎・西垣通ほか、「英語の公用語化を考える」、『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所主催シンポジウム』、2000年12月1日。(2000年12月1日)

西垣通、「言語の普遍性をめぐって」、『田中克彦(著)『チョムスキー』』、2000年12月15日、岩波現代文庫、pp. 265～272。(解説、田中克彦(著)『チョムスキー』)

西垣通、「文理融合をめざす大学院」、『日本学会会議主催 2001年情報学シンポジウム』、2001年1月18日。(2001年1月18日)

レジス・ドブレ・石田英敬・西垣通ほか、「メディアロジーの可能性:文化と技術をめぐって」、『日仏メディアロジー討議』、2002年2月、東京大学。(東大ほか主催、2002年2月13-14日)

西垣通、「ことば」、『東北芸術工科大学、総合教養講座』、2002年12月10日、東北芸術工科大学。(東北芸術工科大学、総合教養講座、2002年12月10日)

西垣通、「「情報科学」から「情報学」へ」、『パラダイムとしての社会情報学』、2003年5月30日、早稲田大学出版部、第1章 pp. 1～20。

西垣通、「オートポイエーシスにもとづく基礎情報学」、『思想』、951号、2003年7月5日、pp. 5～22。

西垣通, “社会情報学の系譜と課題,” *東大社会情報研究所国際シンポジウム*, 2003.10.3. (2003年10月3日)

西垣通・伊藤守・広松毅・木村忠正、「今日的課題としての社会情報学」、『日本社会情報学会合同研究会』、2004年3月6日、日本社会情報学会合同研究会。(2004年3月6日)

西垣通、「情報学の新しい地平」、『明治大学情報コミュニケーション学部開設記念シンポジウム』、2004年5月8日。(2004年5月8日【基調講演】)

西垣通、「情報学からみた文学的伝統」、『全国大学国語国文学会第89回大会』、2004年6月5日。(2004年6月5日【招待講演】)

西垣通、「基礎情報学とは何か:情報学の潮流を踏まえて」、『情報メディア学会第3回研究大会』、2004年6月26日。(2004年6月26日【基調講演】)

西垣通、「基礎情報学からみたコミュニケーション」、『社会言語科学会第14回大会』、2004年9月4日。(2004年9月4日【招待講演】)

西垣通、「ヒトと機械と進化」、『リオータルと非人間的なもの』、2005年1月26日、岩波ポストモダン・ブックス、解説 pp. 91～112。

口頭発表等

小林康夫・西垣通ほか、「理系の知」と『文系の知』の総合の地平」、『東大教養学部創立50周年記念シンポジウム』、2000年11月11日。

西垣通、「IT革命後の社会」、『第7回統合型地理情報シンポジウム』、2001年4月3日。(中央大学理工学部主催、2001年4月3日【招待講演】)

西垣通、「21世紀ネット社会とは何か」、『長岡科学技術大学匠陵講演会』、2003年9月24日。(2003年9月24日【招待講演】)

西垣通、「21世紀に望まれる社会情報学の課題」、『群馬大学社会情報学部創設10周年記念特別講演会』、2003年10月1日。(2003年10月1日【招待講演】)

西垣通・正村俊之・遠藤薫・高橋徹、「情報論再考」、『日本社会情報学会第9回大会シンポジウム』、2004年10月2日。(2004年10月2日)

西垣通、「情報化時代に“生きる”とは」、『愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会研究大会』、2004年12月4日。(2004年12月4日【招待講演】)

一般向け著書等

山崎正和・西垣通編、『文化としてのIT革命』、2000年10月30日、晶文社。

西垣通、『IT革命』、2001年5月18日、岩波新書。

一般向け作品等

西垣通、「網目のほころび」、『群像(毎月連載)』、2003年1月～2003年12月。(2003年1月～12月)

西垣通、「あすへの話題」、『日本経済新聞コラム(毎週連載)』、2003年1月8日～2003年6月25日。

一般向けエッセイ等

西垣通、「レジス・ドブレ：メディアロジーの射程」、『大航海』、34号、2000年6月、pp. 44～50。

西垣通、「IT革命後の社会」、『中央公論』、2001年1月、pp. 58～73。

西垣通、「サイバースペースの中の暴力」、『大航海』、37号、2001年1月、pp. 132～137。

西垣通、「ITの思想：サイバネティックスとメディアロジーをめぐって」、『現代思想』、29巻、1号、2001年1月、pp. 78～83。

伊藤守・西垣通・ほか、「映像流通ネットワーク時代の生活空間」、『NTTオープンラボ・シンポ』、2001年10月。

西垣通、「IT革命で日本語はどうなるか」、『朝日カルチャーセンター公開講座「日本語の現在」』、2001年11月。

西垣通、「ゲーム理論」的思考の功罪」、『大航海』、42号、2002年4月、大航海、pp. 174～180。

西垣通、「IT革命の検証」、『SRI生活起点』、2002年7月、pp. 26～32。

西垣通、「ネットワーク社会の人間関係」、『東京大学公開講座「ヒト、人、人間」』、2002年11月15日、東京大学出版会、pp. 201～226。(2002年、所収)

西垣通、「ヒト科学21」、『朝日新聞文化欄(隔月連載)』、2003年5月19日～2005年3月14日。(2003年5月～2005年3月)

西垣通、「世界最先端のIT国家の実現に向けて」、2004年4月、自民党 e-Japan 重点計画特命委員会。

西垣通、「21世紀の情報科学」、『21世紀世界地図シリーズ』、2004年7月。(東京自由大学)

西垣通・根本長兵衛・エドガー・モラン、「IT革命と社会・言語・人間性の変貌」、福原義春・樺山紘一編、『解はひとつではない: グローバリゼーションを超えて』、2004年7月10日、慶應義塾大学出版会、pp. 16~32。(かながわ学術研究交流財団主催K-FACEフォーラム、2000年7月)

西垣通、「メディア社会と文学: 情報学者が小説を書く」、『日本文学協会第59回大会』、2004年11月。

西垣通、「シャノンの呪縛を解く: 基礎情報学のねらい」、『環』、20巻、冬号、2005年1月30日、pp. 144~152。

西垣通、「IT革命はマスメディアをどう変えるか」、『放送研究と調査』、55巻、3号、2005年3月、pp. 38~49。

一般向け講演等

猪瀬直樹・西垣通ほか、「一億総表現者の時代」、『日本ペンクラブ主催シンポジウム』、2000年9月。

西垣通、「インターネットで日本語はどうなるか」、『日立製作所中央研究所主催講演会』、2001年5月。

西垣通・村上陽一郎・吉見俊也・米本昌平、「情報学とは何か」、『朝日カルチャーセンター公開講座』、2002年6月。

西垣通、「情報学とフィクション」、『日本書籍出版協会新人研修会』、2003年4月。

西垣通、「ネット社会への大転換」、『財務省トップセミナー』、2004年1月。

西垣通、「基礎情報学: 情報工学と社会学の架け橋として」、『第27回リブロコミカレ特別セミナー』、2004年3月21日。

その他一般向け

西垣通、「ITといのち」、『文化講演会、NHKラジオ第二放送』、2004年7月。

橋元 良明 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績(2000~2004年度)

著書等

『情報化と社会生活』、2000年、北樹出版。

橋元良明、「豊かな言語生活のために」、国立国語研究所編、2000年。

橋元良明、「2000 HDTVの画質・画面サイズの一般的視聴者への効果に関する実験研究(共著)」、『平成11年度情報通信学会年報』、2000年、pp. 1～16。

橋元良明、『インターネット、携帯電話・PHSの高度利用に関する調査研究 報告書』(共著)、2000年7月、マルチメディア振興センター。

橋元良明、「2001『情報環境の変化に伴うコミュニケーション行動変容の分析』(共同執筆)文部省科学研究費基礎研究(B)(2)(代表者:橋元良明)報告書(2001.3)」、『2001『情報環境の変化に伴うコミュニケーション行動変容の分析』(共同執筆)文部省科学研究費基礎研究(B)(2)(代表者:橋元良明)報告書(2001.3)』、2001年。(2001『情報環境の変化に伴うコミュニケーション行動変容の分析』(共同執筆)文部省科学研究費基礎研究(B)(2)(代表者:橋元良明)報告書(2001.3))

橋元良明、「2001『情報リテラシー育成のための方策の研究—情報リテラシー教育の効果分析』」、『文部省科学研究費基礎研究(C)(代表者:鈴木裕久)報告書』、2001年3月。(共同執筆、代表者:鈴木裕久)

橋元良明、「第5章 中国におけるインターネットの普及と利用」、独立行政法人通信総合研究所／東京大学社会情報研究所編、『世界インターネット利用白書』、2002年、NTT出版、pp. 85～99。

橋元良明、「コミュニケーション論からみたエチケット」、『言語』、29巻、4号、2002年、大修館書店、pp. 22～29。

橋元良明、「言語行為」、『哲学の木』、2002年。

橋元良明、「インターネット・パラドクス—在日留学生の調査を通して」、津田幸男・関根久雄編、『グローバル・コミュニケーション論』、2002年、ナカニシヤ出版、pp. 87～101。

橋元良明、「電子メディア社会の言語行動」、荻野綱男編、『朝倉日本語講座9 言語行動』、2003年、朝倉書店、pp. 174～215。

橋元良明、「現代人の情報行動—テレビとインターネットを中心に」、伊藤守・小林宏一・正村俊之編、『電子メディア文化の深層』、2003年、早稲田大学出版部、pp. 145～173。

橋元良明、「若者の情報行動と対人関係」、正村俊之編、『情報化と文化変容』、2003年、ネルヴァ書房、pp. 26～57。

橋元良明、「インターネット利用に伴う情報格差、対人関係希薄化の分析—パネル調査によるインターネット・パラドクスの検証」、『平成13年度—15年度科学研究費助成研究報告書』、2004年。

論文等

橋元良明、「2000 加入形態別インターネットの利用実態詳細分析とホームページの日米比較」、『電気通信普及財団研究調査報告書』、14号、2000年、pp. 478～488。

橋元良明、「2000 Anxiety about Earthquakes in Overcrowded Spaces and the Attitudes toward Protection against Disasters of Tokyoites,」『都市直下地震災害米国シンポジウム論文集』、2000。

石井健一・辻大介・森康俊・三上俊治・橋本良明、「2000 内容分析による個人ホームページの国際比較—自己開示・自己表出を中心に」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、14号、2000年、pp. 1～82。

橋元良明、「2000 携帯電話を中心とする通信メディア利用に関する調査研究」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、14号、2000年、pp. 83～193。

橋元 良明、「2000 「理工系とのトランス・ディシプリンの道」(誌上ディスカッション)」、『社会言語科学』第2巻第2号, 11-24。』、2巻、2号、2000年、pp. 11~24。(2000 「理工系とのトランス・ディシプリンの道」(誌上ディスカッション)『社会言語科学』第2巻第2号,11-24.)

橋元 良明、「2000 「豊かな言語生活のために」」、『豊かな言語生活のために』、(『新「ことば」シリーズ 』)、11号、2000年、国立国語研究所。(2000 「豊かな言語生活のために」国立国語研究所『新「ことば」シリーズ 11 豊かな言語生活のために』)

橋元 良明、「2000 「電脳社会と青少年」」、『神奈川県青少年健全育成シンポジウム—高度情報化社会と青少年 報告書』、2000年11月。

橋元良明、「インターネット利用」、東京大学社会情報研究所編、『日本人の情報行動 2000』、2001年、東京大学出版会、pp. 101~115。

橋元良明、「グライス」、『言語』、30巻、3号、2001年、大修館書店、pp. 124~125。

橋元良明、「サール」、『言語』、30巻、3号、2001年、大修館書店、pp. 180~181。

橋元良明、「授受表現の語用論」、『言語』、2001年、大修館書店、pp. 46~51。

橋元良明、「コミュニケーション科学への「最初の一步」」、『社会言語科学』、3巻、2号、2001年、pp. 83~85。

橋元良明、「情報化社会と敬意表現」、『Science of Humanit』、32巻、2001年、勉誠出版、pp. 69~74。

橋元良明、「変容する現代のコミュニケーション」、『教育と医学』、7巻、2001年、慶応義塾大学出版会、pp. 4~11。

橋元良明、「携帯メールの利用実態と使われ方—インターネットによるEメール利用との比較を中心に」、『日本語学』、20巻、2001年、明治書院、pp. 23~31。

橋元良明、「配慮と効率—ポライトネス理論とグライスの接点」、『言語』、1巻、30号、2001年、pp. 44~52。

橋元良明、「都市への民族大移動—高度経済成長下の東京」、『20世紀の定義 4 越境と難民の世紀』、2001年、pp. 219~240。

鈴木裕久・川上善郎・辻大介・石井健一・李潤馥・橋本良明、「2001 「2000年日本人のインターネット利用に関する調査研究」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』No.15,pp.-(鈴木裕久、川上善郎、辻大介、石井健一、李潤馥との共著)(2001.3)」、『2001 「2000年日本人のインターネット利用に関する調査研究」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』No.15,pp.-(鈴木裕久、川上善郎、辻大介、石井健一、李潤馥との共著)(2001.3)』、2001年。

橋元 良明、「2001 デジタル・ディバイド:情報強者と情報弱者(第16コミュニケーションフォーラム「IT革命と社会の調和:21世紀情報社会への課題と展望」記録)、『情報通信学会誌』第65号』、38巻、3号、2001年、pp. 49~62。

小松亜紀子・栗原正輝・斑目幸司・Anurag Kashyp・橋本良明、「2001 首都圏若年層のコミュニケーション行動—インターネット、携帯メール利用を中心に」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、16号、2001年、pp. 94~210。

橋元良明、「ケータイは若者を孤独にしている」、『ABC(Asahi Business Club)』、2001年3月、朝日生命保険相互会社。

橋元 良明、「2001 『ワールド・インターネット・プロジェクト インターネット利用動向に関する実態調査報告』」、2001年3月、総務庁通信総合研究所。(2001.3)

橋元 良明、「2001 「インターネットと携帯電話利用に関するヘルシンキ調査」」、『電子情報通信学会第3回ネットワークとライフスタイルワークショップ Proceedings』、2001年3月。(2001.3)

橋元 良明, "2001 Internet Usage Trends in Japan:Survey Report 2000," *The World Internet Project Japan 報告書*, 2001.4, p. 2001 Internet Usage Trends in Japan:Survey Report 2000, *The World Internet Project Japan 報告書*,(2001.4).

橋元 良明、「2001 「ケータイ世代のコミュニケーション」」、『TPIS』、363号、2001年7月、pp. 4～10。

橋元良明、「『テレビに踊らされる人々』という神話」、『論座』、2001年8月、朝日新聞社、pp. 70～78。

橋元良明、「コミュニケーションとことば」、『言語』、31巻、5号、2002年、大修館書店、pp. 24～27。

橋元良明, "The Spread of Cellular Phones and Their Influence on Young People in Japan, Review of Media," *Information and Society*, 7, 2002, The Institute of Socio-Information and Communication Studies, The University of Tokyo.

橋元良明、「メディアの変化と国語教育」、『月刊 国語教育研究』、365号、2002年。

橋元良明、「『インターネット・パラドクス』の検証—インターネットが精神的健康・社会的ネットワークの形成に及ぼす影響」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、18号、2002年、pp. 335～485。

橋元 良明、『2002 『ワールド・インターネット・プロジェクト インターネット利用動向に関する実態調査 2001年調査報告』』、2002年、総務庁通信総合研究所。(分担執筆、2002.3)

橋元 良明、「2002 『青少年の問題行動の背景と要因』」、『2002 『青少年の問題行動の背景と要因』(分担執筆)』、2002年、神奈川県青少年問題協議会。(分担執筆)

橋元 良明、「2002 Internet Usage Trends in Japan: Survey Report 2001」、『The World Internet Project Japan 報告書』、2002年4月、Institute of Socio-Information and Communication Studies, The University of Tokyo and Communications Research Laboratory。

橋元 良明, "2003 Internet Usage Trends in Japan: Survey Report 2002," *The World Internet Project Japan 報告書*, 2002.4.

橋元 良明、「情報行動研究の20年と今後の展望」、『第20回情報通信学会 ワークショップ報告』、2003年。(2003)

橋元 良明、「2003 『21世紀情報社会におけるメディア・エコロジーの基礎研究』(分担執筆)」、『平成12-14年度科学研究費女性研究成果報告書(代表:三上俊治)(フィンランドにおけるインターネット、携帯電話利用の実態, pp.17-48)』、2003年、平成12-14年度科学研究費女性研究成果報告書(代表:三上俊治)(フィンランドにおけるインターネット、携帯電話利用の実態, pp.17-48)。

橋元 良明、「招待講演「情報行動論からみたインターネット利用」」、『デジタルシティと人間の認知・行動、招待講演「情報行動論からみたインターネット利用」』、2003年2月27日。(2003.2.27)

橋元 良明、「2003 『ワールド・インターネット・プロジェクト インターネット利用動向に関する実態調査 2002年調査報告』』、2003年3月、通信総合研究所。(分担執筆、2003.3)

橋元 良明、「2004 『ワールド・インターネット・プロジェクト インターネット利用動向に関する実態調査 2003年調査報告』』、2003年3月、通信総合研究所。

橋元 良明、「携帯電話、インターネットの普及と若者のコミュニケーション行動」、『第11回社会言語科学学会大会貴重講演』、2003年3月9日。(2003.3.9)

橋元 良明、「情報化社会とコミュニケーション」、『日本コミュニケーション学会シンポジウム』、2003年6月14日。(シンポジスト(メディア利用と対人関係))

橋元 良明、「インターネット利用行動に及ぼすメンタリティの影響」、『第20回情報通信学会 共同発表』、2003年6月28日。(金相美、石井健一、木村忠正との共同発表)

橋元良明、「インターネット利用に関する日韓大学生比較調査—インターネット・コミュニティを中心として」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、20号、2004年、pp. 205～345。

橋元良明、「インターネット、コミュニケーション学の行方」、『コミュニケーション学がわかる。』、2004年、朝日新聞社 (AERA Mook)。

橋元良明、「コミュニケーション・メディアの変化と青少年の心理・行動」、『月刊福祉』、2004年、pp. 38～40。

橋元良明、「パネル調査によるインターネット利用の影響分析」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21号、2004年。

橋元良明、「情報環境の変化と生活」、『かんぽ Kamp2004』、2004年。

橋元良明、「オンライン調査による社会調査の問題点」、『日本語学』、23巻、2004年、明治書院、pp. 180～192。

橋元良明、「日本語総点検—メールにおけるフェイスマークの利用」、『言語』、33巻、11号、2004年、大修館書店、pp. 36～38。

橋元良明、「日本人における黙読と音読」、『現代の図書館』、42巻、2号、2004年、日本図書館協会、pp. 102～108。

橋元 良明、「2004 『子どもとテレビゲーム』に関する NPO 等についての調査研究—米国を中心に』、2004年。

橋元 良明、「子どもの心と居場所を考える」、『全国青少年相談研究会、シンポジウム』、2004年1月23日、全国青少年相談研究会。(パネリスト)

橋元 良明、「文部科学省「青少年を取り巻く有害環境対策に関する調査研究会」調査報告書(2004.3.25)」、『青少年を取り巻く有害環境対策に関する調査研究会』調査報告書』、2004年3月25日、文部科学省。(分担執筆)

橋元 良明、「情報化が及ぼす心や行動への影響」、『東京都立精神保健福祉センター』、2004年9月30日、東京都立精神保健福祉センター。(2004.9.30)

橋元 良明、「情報通信学会、情報行動研究会 「インターネットのある生活—フィンランドと日本の若者に関する国際比較研究 Living with the Internet:Cross-cultural Study of Youth in Finland and Japan (英語による国際)」情報通信学会、情報行動研究会 「インターネットのある生活—フィンランドと日本の若者に関する国際比較研究 Living with the Internet:Cross-cultural Study of Youth in Finland and Japan (英語による国際)」2004.11.3、情報通信学会、情報行動研究会 「インターネットのある生活—フィンランドと日本の若者に関する国際比較研究 Living with the Internet:Cross-cultural Study of Youth in Finland and Japan (英語による国際)」2004.11.23)

その他

橋元 良明、「IT 革命と社会の調和:21 世紀情報社会への課題と展望」、『世界コミュニケーション年記念第 16 回コミュニケーション・フォーラム』、2000年、情報通信学会・郵政省。

橋元 良明、『シヨン学会』、2000年6月17日、韓国言論学会。(韓国言論学会共催、パネラー)

橋元 良明、「シンポジウム「デジタル・ディバイド:情報強者と情報弱者」、報告者」、2000年11月9日。(同項目内に以下の記載有り:神奈川県青少年健全育成シンポジウム「高度情報化社会と青少年」(神奈川県主催)基調講演『電脳社会と青少年』およびパネルディスカッション『インターネット])

橋元 良明、「2001 「新しいまちのつながりをつくる—IT の可能性にみる地域社会の明日」」、『地域開発ニュース』2001』、270号、2001年7月、pp. 6～13。(座談会記録)

橋元 良明、「ITの普及と家族関係」、2001年8月22日、内閣府国民生活局。

橋元 良明、「調査・実験する側とされる側」報告「質問票調査の問題点」、『社会言語科学会第8回大会 ワークショップ』、2001年9月22日。

橋元 良明、「デジタルディバイド(講演)」、『日本社会情報学会』、2001年11月27日、日本社会情報学会。

橋元 良明、「ワークショップ ブロードバンド社会の Equality」コメンテーター、『第 19 回情報通信学会』、2002 年 6 月 22 日、情報通信学会。(同項目内に以下の記載有り:「シンポジウム ブロードバンドが切り開くクオリティ社会」パネリスト)

橋元 良明, “The Spread of Cellular Phones and Their Influence on Young People in Japan,” 2002.7.14.

橋元 良明、「HIKARI 時代のビジネス」パネラー、『NTT グループコレクション in WEST 2002』、2002 年 10 月 23 日、NTT 西日本主催。(2002.10.23)

橋元 良明、「デジタルシティのユニバーサルデザイン」プロジェクト 、『第2回 デジタルシティワークショップ 』、2002 年 11 月 7 日、科学技術振興事業団戦略的基礎研究推進事業(CREST)。(2002.11.7)

花田 達朗 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

「公共圏」概念の理論的検討およびその概念の実際の諸局面への応用

情報メディアによって編制・構造化される社会的空間という問題構制について

ジャーナリスト教育プログラムの研究開発

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

花田達朗・廣井脩編、『論争 いま、ジャーナリスト教育』、2003 年、東京大学出版会、332pp.。(共編著)

吉見俊哉・花田達朗編、『社会情報ハンドブック』、2003 年 3 月、東京大学出版会、294pp.。(共編著)

花田達朗・ニューズラボ研究会、『実践ジャーナリスト養成講座』、2004 年 2 月、平凡社、293pp.。

論文等

花田達朗、祁景澄訳、「新的世紀、新的課題—日本新聞教育的過去、現在与未来」、『国際新聞界』、2000 年 5 期、2000 年、pp. 19～23。

花田 達朗、「変わる大学とジャーナリスト教育の将来」、『東京地区マスコミ倫理想談会』、2000 年 4 月 20 日、日本プレスセンター 日本新聞協会。

花田達朗、「変わる大学とジャーナリスト教育の将来」、『マスコミ倫理』、487 号、2000 年 5 月、マス・コミュニケーション倫理想談会全国協議会、pp. 4～5。

花田達朗, “Media Policy and Social Demand in Japan,” 2000.10, Montreal in Canada, University of Montreal, pp. 17-18.

花田達朗, “Conceptual Approach to the Public Sphere,” *Programme Europa Mundi of UNESCO, Final Conference: The Global Arena, the Media and the Information Society*, 2000.11, Santiago de Compostella in Spain, Programme Europa Mundi of UNESCO, Final Conference: The Global Arena, the Media and the Information Society.

花田達朗, "Die Öffentlichkeitssphäre und die Informationsgesellschaft in Japan heute," *On Line Workshop mit der Universität Düsseldorf*, 2000.12.7.

Tatsuro Hanada, "Can a public space transcend national boundaries?," Wolfgang Pape ed., *Models of Integration in Asia and Europe: Generating Public Space for Our Common Futures*, 2001, European Commission, pp. 95-102.

花田達朗, 「公共圏に吹く風」、『InterCommunication』、2001年4月、全36巻、pp. 98~101。

花田達朗, 「なぜ、いまジャーナリスト教育か? 諸外国の実情と日本の課題」、『調査研究本部「ジャーナリズム研究会」』、2001年6月15日、読売新聞本社。

花田達朗, 「ジャーナリズムの境界、境界のジャーナリズム」、『国際ジャーナリズム研究センター準備室主催「東アジアのジャーナリズムとジャーナリスト—状況・意識・教育」』、2001年7月7日、東京大学本郷キャンパス法文2号館1番大教室。

花田達朗, 「公共圏と市民参加」、『研究会』、2001年8月28日、総合研究開発機構。

花田達朗, "Neue Medien – neue Arbeit am Beispiel Japan," *»ARBEIT« – GESCHICHTE, GEGENWART UND ZUKUNFT*, 37. Linzer Konferenz, 2001.9.11-2001.9.15, Veranstaltet von der Internationalen Tagung der Historikerinnen und Historiker der Arbeiter- und anderer sozialer Bewegungen (ITH).

花田達朗, 「公共圏概念、そしてメディアとしての建築」、『日本建築学会大会(関東)建築計画部門パネルディスカッション「建築の計画はコミュニケーションを変革する結節点に足り得るか?」』、2001年9月22日、東京大学本郷キャンパス理学部4号館講義室。

花田達朗, 「ジャーナリスト教育がなぜ問題なのか?」、『国際ジャーナリズム研究センター準備室主催「ジャーナリスト教育を科学できるか—その実験と教訓」』、2001年10月20日、東京大学本郷キャンパス法文2号館1番大教室。

Tatsuro Hanada, "Neue Medien – neue Arbeit am Beispiel Japan," *Review of Media, Information and Society*, 7, 2002.

Tatsuro Hanada, "Neue Medien – neue Arbeit am Beispiel Japan," Josef Ehmer, Helga Grebing und Peter Gutschner ed., *"Arbeit": Geschichte – Gegenwart – Zukunft*, (ITH-Tagungsberichte; Bd.36), 2002, Leipzig: Akademische Verlagsanstalt, pp. 225-237.

Tatsuro Hanada, "M CONCEPTUAL A ESFERA PÚBLICA," José Vidal Beneyto ed., *LA VENTANA GLOBAL*, 2002, Buenos Aires, Taunus (Traducción del inglés de Moisés Ramírez), pp. 137-162.

花田達朗, 「KUGAI」— the Lost Public Sphere in Japanese History』、『Capitalism and Communication in the Twenty First Century, CCIS』、2002年6月、London, UK, University of Westminster。

花田達朗・木村恭子・小田光康, 「ジャーナリスト教育の現状と課題—東京大学社会情報(旧新聞)研究所教育部研究生卒業生へのアンケート調査結果」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、18巻、2002年10月、pp. 279~333。

花田達朗, 「ジャーナリスト教育実験のコンセプトとプロジェクト(ジャーナリスト教育の実験報告~教育プログラム開発プロジェクトの試み)」、『総合ジャーナリズム研究 No.182』、2002年10月、pp. 54~57。(秋季号)

花田達朗, 「大学から見た「放送インターンシップ」」、『月刊民放』、2003年2月、pp. 34~35。

花田達朗, 「ジャーナリスト教育の試行実験—newslab の試み」、花田達朗・廣井脩編、『論争 いま、ジャーナリスト教育』、2003年3月31日、東京大学出版会、pp. 189~199。

花田達朗, 「国際シンポジウム「デジタル時代にこそ求められる「放送の公共性」とは?」、『コミュニケーション研究の視点から—』の パネリスト』、2003年5月9日、NHK放送文化研究所主催、東京大学社会情報研究所・早稲田大学ジャーナリズム研究所共催、千代田放送会館。

花田達朗、「ジャーナリスト研修とジャーナリスト倫理の関係次第」、『関西地区マスコミ倫理想談会5月例会』、2003年5月26日、日本新聞協会大阪事務所会議室。

花田達朗、「身体としてのジャーナリズム、その活力のために」、『世界』、717号、2003年8月、pp. 119～126。

Tatsuro Hanada, "Cultural Diversity as Social Demand – The Korean Minority and Japanese Broadcasting," *GAZETTE*, 65, no.4&5, 2003.9, pp. 389-400.

花田達朗、「地域のために新聞は何ができるかー日米の経験と情報を共有して」のコーディネーター、『日米メディアシンポジウム』、2003年9月19日、日本地方紙ネットワーク主催、日本プレスセンタービル10階大会議室。

花田達朗、『『市民社会』ーその構図からアジアの何が見えるか』、(『アジア理解講座』)、2003年10月8日～2003年12月10日、国際交流基金アジアセンター主催。(コーディネーターおよび講師)

Tatsuro Hanada, "Kugai: The Lost Public Sphere in Japanese History," *First Century, Lanham*, 2004, Lanham:Rowman & Littlefield Publishers, pp. 95-110.

花田達朗、「ジャーナリズムと情報化の日本の関係模様ー下部構造、上部構造、プロフェッション」、柴山哲也編、『日本のジャーナリズムとは何かー情報革命下で漂流する第四の権力』、2004年、ミネルヴァ書房、pp. 3～26。

花田達朗、「『制度としてのメディア』『メディアと公共圏』」、『社会情報学ハンドブック』、2004年3月、東京大学出版会、pp. 40、48～43、51。(page40-43, 48-51)

口頭発表等

花田達朗、『公開討論会「ジャーナリスト教育の課題と大学の役割」』、2003年10月25日、早稲田教育総合研究所・早稲田大学ジャーナリズム研究所主催、早稲田大学国際会議場井深ホール。(討論者)

一般向けエッセイ等

花田達朗、「ネーネーズとオキナワ公共圏」、『建設業界』、49巻、6号、通巻577号、2000年6月、pp. 50～51。

花田達朗、「専門紙ジャーナリズムの意義とメディア変容」、『東京交通新聞』、2000年10月23日、第10面。

花田達朗、「家電とペット」、『建設業界』、通巻583号、2000年12月、pp. 46～47。

花田達朗、「メディア規制、強化と緩和の二重奏」、『建設業界』、50巻、6号、通巻589号、2001年6月、pp. 46～47。

花田達朗、「非対称的な資源下の世界」、『建設業界』、50巻、20号、通巻595号、2001年12月、pp. 48～49。

花田達朗、「重源の皺」、『建設業界』、51巻、6号、通巻601号、2002年6月、pp. 42～43。

花田達朗、「ちいさい公共圏みつけた」、『建設業界』、51巻、12号、通巻607号、2002年12月、pp. 46～47。

花田達朗、「ちいさい公共圏みつけた」、『建設業界』、52巻、12号、通巻607号(2147と重複)、2002年12月、pp. 46～47。

花田達朗、「『説明責任』という誤訳」、『建設業界』、51巻、6号、通巻613号、2003年6月、pp. 46～47。

花田達朗、「職業としてのジャーナリズム」、『建設業界』、52巻、12号、通巻619号、2003年、pp. 50～51。

花田達朗、「無題」、文芸春秋編、『東大教師が新生にすすめる本』、2004年3月20日、文春新書、pp. 294～296。

花田達朗、「『自己責任』自己責任という政治の言葉」、『建設業界』、53巻、6号、通巻625号、2004年6月、pp. 54～55。

花田達朗、「決定論との闘い、あるいは経絡」、『建設業界』、53巻、12号、通巻631号、2004年12月、p. 49。

一般向け講演等

花田達朗、「公共圏・市民社会・生活世界」、『生活クラブ生活協同組合、事務局研修会』、2002年7月5日、箱根。

花田達朗、「ドイツのメディア産業労働組合の仕組」、2002号、2002年8月31日、メディア総合研究所、メディア産業研究会。

花田達朗、「公共圏の脱植民地化のために」、『横浜、生活クラブ生活協同組合、役職員研修会』、2002年12月9日。

花田達朗、「ジャーナリスト養成・研修の必要と需要、そして試行」、『朝日新聞社、編集局部長会』、2002年12月18日。

花田達朗、「ビジュアル・メディアとしての新聞紙(newspaper)」、『産経新聞東京社整理部』、2003年10月6日。

濱田 純一 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

情報法にかかわる研究

個別テーマとして近年取り組んできたのが、情報化ないしインターネットがもたらす法制度の変容に関する研究である。情報に関する法は、通常の物財に関する法と異なり、複製や移転の容易さなどの特質から法的にも固有の扱いを必要としている。また情報は、表現の自由や情報をめぐる自由・権利などの精神的諸価値と密接に結びついており、特有の法体系を構成している。こうした諸特質に基礎を置く情報法の体系構成を目指して、個別テーマについての研究を蓄積してきた。

情報政策にかかわる研究

情報政策は、メディアや通信システムをはじめ、情報技術政策や文化政策にも及ぶ射程の広い政策領域である。実務上個別的にはさまざまな情報政策が、地方や国のレベルで策定されてきたが、必ずしも総合的な体系性をもって行われてきたわけではない。これらの諸政策に総合的な展望を与え、またこうした政策に固有の政策形成過程や政策手法を分析することを研究の目標としており、「情報政策論」の授業と連動させながら、個別事例の検討を通じて、情報政策に関する研究の体系化に取り組んでいる。

社会情報学ないし情報学にかかわる研究

社会情報学あるいは情報学は、いま発展途上にある学問領域であり、学際性を共通の特質とする。これまで、基本的に社会科学の領域に足場を置く社会情報学の研究を主にすすめ、とりわけ情報を社会的文脈の中に置くことの意義を分析しつつ成果を積み重ねてきた。情報学は、より広く自然科学分野にも及ぶ学問領域であるが、たとえば生命や遺伝の仕組みなどは社会システムの構造とアナロジー可能な側面を有しており、情報という視点からそうした共通の枠組みを引き出すことにより、諸学問分野の連携を生み出す研究をすすめている。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

北川高嗣・須藤修・西垣通・浜田純一・吉見俊哉・米本昌平編、『情報学事典』、2002年、弘文堂。

濱田純一、「Information Policy(I)・(II)」、2004年、共同制作・独立行政法人国際協力機構(JICA)「遠隔技術協力システム(JICA-Net)」コンテンツ制作。

論文等

濱田純一、「憲法とコミュニケーション秩序(2)」、『法学教室』、241号、2000年。

濱田純一、「放送制度論と放送法制の行方」、『放送学研究』、49号、2000年。

濱田純一、「個人情報保護立法への憲法的視点」、『新聞研究』、583号、2000年。

濱田純一、「情報通信技術の発展と法の揺らぎ」、2000年、2000年情報学シンポジウム実行委員会。(学術会議講堂)

濱田純一、“2000 Wettbewerb und Vermachtung in der Informationsgesellschaft, REGULIERUNG-DEREGULIERUNG-LIBERALISIERUNG,” *Tendenzen der Rechtsentwicklung in Deutschland und Japan zur Jahrhundertwende* シンポジウム, 2000.10.5. (横浜桐蔭大学)

濱田純一，“Freedom of Speech in Japan,” *INFORMATION & SOCIETY*, no.6, 2001.

濱田純一，“Wettbewerb und Vermachtung in der Informationsgesellschaft,” Z.Kitagawa ed., *REGULIERUNG-DEREGULIERUNG-LIBERALISIERUNG*, 2002, Mohr Siebeck.

濱田純一、「地方情報化の進展と行政スタイルの変容」、『地方公務員月報』、467号、2002年。

濱田純一、「表現の自由の『装置』としての第三者機関」、『月刊民放』、372号、2002年。

濱田純一、「配信サービスの抗弁成立可能性の検討を一ロス疑惑報道訴訟の上告審判決の論点を整理する」、『新聞研究』、609号、2002年。

濱田純一、「表現の自由のインフラストラクチャー」、『法律時報』、74巻、1号、2002年。

濱田純一、「少年犯罪の実名報道と表現の自由」、『ジュリスト』、1202号、2002年。

濱田純一，“2002 Freedom of Speech in Japan,” *ICA 2002 Conference in Seoul*, 2002.7.15, ソウル.

濱田純一、「情報社会の進展と私たちの情報」、『群馬大学社会情報学部・日本社会情報学会共催シンポジウム』、2002年11月15日、群馬大学。

濱田純一、「日本における法令情報システムの現状と比較法的視座」、『The Legal Information Conditions in North East Asian Nations and the Prospect of Asia Legal Information Network』、2003年、KOREA LEGISLATION RESEARCH INSTITUTE, pp. 163~181。

濱田純一、「インターネットによる人権侵害について」、『人権のひろば』、31号、2003年5月、pp. 21~24。

濱田純一、「『放送』概念の制度論的展開～融合時代における“再定義”をめぐって」、『月刊民放』、2003年6月、pp. 18~23。

濱田純一，“The Legal Status of Mobile Broadcasting in the Regulatory Scheme of Broadcast Law and Radio Law: A Conceptual Approach and “Redefinition” of Broadcasting?,” *韓国言論学会主催シンポジウム*, 2003.6.20, ソウル.

濱田純一，“The Condition of Legal Information System of Japan and Comparative Studies,” *The Legal Information Conditions in North East Asian Nations and the Prospect of Asia Legal Information Network*, 2003.9, KOREA LEGISLATION RESEARCH INSTITUTE, pp. 183-204.

濱田純一、「名誉毀損における情報提供者の責任」、『法律時報』、2003年9月、pp. 109～114。

濱田純一、「日本における法令情報システムの現状と比較法的視座」、『シンポジウム“The Legal Information Conditions in North East Asian Nations and the Prospect of Asia Legal Information Network”』、2003年9月3日、KOREA LEGISLATION RESEARCH INSTITUTE 主催、ソウル。

濱田純一、「社会の高度情報化と憲法」、『シンポジウム「科学技術時代における憲法構造の変化と新たな課題」』、2003年9月6日、日韓法学会主催、ソウル。

濱田純一、「『ダイオキシン報道』訴訟判決を読むー取材・報道上の厳密さを求めた最高裁」、『新聞研究』、629号、2003年12月、pp. 39～42。

濱田純一、「プライバシーと『公共の利害』『社会の正当な関心事』ー表現の自由との調整の憲法的補助概念」、『法学教室』、288号、2004年。

濱田純一、「『新聞力』とその環境」、『新聞研究』、641号、2004年。

濱田純一、「差止め事件後の報道環境」、『法律時報』、76巻、7号、2004年。

濱田純一、“The Legal Status of Mobile Broadcasting in the Regulatory Scheme of Broadcast Law and Radio Law: A Conceptual Approach and,” *Review of Media, Information & Society*, no.9, 2004, Review of Media, Information & Society.

濱田純一、「現代国家と放送通信政策」「名誉・プライバシー」「座談会・社会情報学を学ぶ人へ」、花田達朗・吉見俊哉編、『社会情報ハンドブック』、2004年、東京大学出版会。

口頭発表等

濱田純一、「情報化、憲法秩序、そして国家」、『社会情報研究所国際シンポジウム「デジタル市民社会と社会情報学」』、2003年10月4日、東京大学弥生講堂。

一般向け講演等

濱田純一、「報道と人権」、『学士会夕食会講演』、2001年。

濱田純一、「『新聞力』とその環境」、『第57回新聞大会』、2004年、富山。(基調講演)

原 洋之介 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

開発経済

発展途上国・地域の経済発展に関する学際的研究

東南アジア経済

主として大陸部東南アジア地域での実態調査による経済研究

市場経済と情報

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

原洋之介、『アジア型経済システム』、2000 年 10 月、中公新書。

原洋之介、『現代アジア経済論』、2001 年 3 月、岩波書店。

原洋之介編、『アジア経済論 新版』、2001 年 7 月、NTT 出版。

原洋之介、『開発経済論 第 2 版』、2002 年 3 月、岩波書店。

原洋之介、『新東亜論』、2002 年 3 月、NTT 出版。

ジョン・トイ、『開発のディレンマ』、2005 年 2 月、同文館。

論文等

原洋之介、「グローバリズムの終焉」、『農業経済研究』、72 巻、2 号、2000 年 9 月。(2000 年度日本農業経済学会大会報告、2000 年 4 月 1 日、東京大学安田講堂)

大野泉、『世界銀行—開発援助戦略の变革』、2000 年 10 月、NTT 出版。

原洋之介、「アジアとアメリカの確執」、『大いなる説得—われらの子と孫への提言』、2000 年 11 月、日刊工業新聞社。

原洋之介、「今なぜギアーツの『インボリューション』か?」、『インボリューション:内に向かう発展』、2001 年 7 月、NTT 出版。(クリフォード・ギアーツ著(池本幸生訳)、解説)

原洋之介、「アジアから世界の成り立ちを見る—経済の領域で」、東京大学東洋文化研究所編、『アジアを知れば世界が見える』、2001 年 12 月、小学館。

原洋之介、「21 世紀の日本とアジア:パネルディスカッション」、『専修大学大学院経済学研究科『政策科学フォーラム』2002』、2 号、2002 年。(2001 年 10 月 30 日、専修大学大学院・経済学研究科)

原洋之介、「開発経済学と『日本の経験』」、社会経済史学会編、『社会経済史学の課題と展望』、2002 年 8 月、有斐閣。

原洋之介、「序 アジア学の方法とその可能性—ひとつの覚え書き」、東京大学東洋文化研究所編、『アジア学の将来像』、2003 年 3 月、東京大学出版会。

口頭発表等

原洋之介、「開発の経済学をめぐって」、『講演会・シンポジウム 沖縄の開発と環境』、2002 年 12 月 15 日、沖縄コンベンションセンター。

原洋之介、「開発・援助を考える—市場主義・グローバリズムを超えて」、『沖縄大学地域研究所創立 15 周年記念連続シンポジウム、沖縄大学』、『方法としての沖縄研究』、2003 年 1 月 11 日、沖縄大学。

一般向けエッセイ等

原洋之介、「新しい視点からの開発と環境」、『沖縄タイムス』、2002 年 12 月 12 日、朝刊。(朝刊)

原洋之介、「シンポジウム『開発・援助を考える』に寄せて」、『琉球新報』、2003年1月10日。(朝刊)

原洋之介、「東アジア経済統合をめぐる」、『日本経済新聞経済教室』、2004年1月5日、日本経済新聞経済教室。

原島 博 教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

ヒューマンコミュニケーションメディア

コンピュータと映像・音響技術を結び付けたマルチメディア技術が広く普及し、人とコンピュータの関係は大きく変わりつつある。来るべき21世紀へ向けて、人工現実感、さらには人に優しいメディア環境へ向けた感性情報処理技術も話題になっている。この研究では、その目指す方向、技術課題、メディア社会に与える光と影の問題を論ずるとともに、将来の「マルチメディア統合情報通信」さらには人間主体の「ヒューマン コミュニケーション メディア」へ至る道を総合的に検討している。

顔画像処理と感性コミュニケーション

人の顔・表情や身振り・手振りは、感性的な対人コミュニケーションの基本であり、その研究は将来の情報システムや通信システムにおけるヒューマンインタフェースの設計に大きなインパクトを与えるものと予想される。本研究では、画像処理並びにコンピュータグラフィックスの手法を駆使して、顔・表情画像や身振り・手振り画像の動的な分析と合成を行い、併せて、各種の心理学実験を通じて、顔・表情や身振り・手振りによる感性コミュニケーションモデルを構築することを目的としている。また、心理学者などとの共同研究を通じて「顔学」なる学際的な新分野の開拓を目指している。

実世界指向情報環境デザインとメディア空間の創出

情報技術の発展と情報化社会の成熟に伴い、それによって生み出される空間の演出およびデザインの重要性が高まっている。本研究では、実験室の枠を超え、我々の生活する実世界に焦点を当てた情報メディア空間の創出について検討を進めている。特に、(1)情報メディア空間とのインタラクションとヒューマンインタフェース (2)実世界に創出されるメディア空間におけるコミュニケーション (3)環境・場と情報との関わりを表現するメディア技術・表現の提案および実装 (4)バーチャルリアリティ技術の実空間への還元とデザインへの応用 (5)映像表現を利用した空間の変容と演出などの研究を行っている。また、建築学およびアートの分野の知見も取り入れ、環境に適応した空間のデザイン手法の実践を目指している。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

原島 博監修、『3次元画像と人間の科学』、2000年4月、オーム社。

情報理論とその応用学会編、『画像符号化(情報理論とその応用シリーズ 1-II 情報源符号化 歪みのあるデータ圧縮)』、2000年9月、培風館。

『22世紀への手紙 生命・情報・夢』、2001年3月、NTT出版。

『20世紀の定義』、2002年2月、岩波書店。

中島尚正・原島博・佐倉統、『総合情報学』、2002年3月、放送大学教育振興会。

苗村健・原島博、「ヒューマンコミュニケーションメディア」、佐藤知正編、『人と共存するコンピュータ・ロボット学』、2004年11月、オーム社、pp. 95～102。(ISBN 4-274-94694-0)

論文等

マリ・クリスティーン・河合徳枝・原島博、「華麗なるバリ島の楽園」、『バーチャルリアリティ文化フォーラム 2000』、2000 年 5 月。

原島博、「コンピュータによる顔画像処理」、『第 19 回日本歯科医学会総会・第 22 回アジア太平洋歯科大会』、2000 年 5 月、pp. 87～88。

米村恵一、杉浦彰彦、滝沢穂高、山本真司 and 原島博、「合成顔画面を用いた脳障害の程度評価」、『映像情報メディア学会誌』54, no.6, 2000.6, pp. 865-870.【査読有】

佐倉朔・原島博・村澤博人、「コンピュータで顔の秘密を探る～いい顔ってどんな顔から」、『どさんこミュージアムスピカ大顔展シンポジウム』、2000 年 6 月。

三村篤志・新田拓哉・苗村健・原島博、「仮想光源を用いたインタラクティブな立体表現 (Depth Sensation from Virtual Light Interaction)」、『3 次元画像コンファレンス 2000』、2000 年 7 月、pp. 35～38。

吉田 達哉・苗村健・原島博、「インテグラルフォトグラフィを用いた 3 次元 CG の合成 (3D Computer Graphics Based on Integral Photography)」、『3 次元画像コンファレンス 2000』、2000 年 7 月、pp. 39～42。

原島博・高城剛・松永真理・林正樹、「新たなコンテンツの創造に向けて (Toward the Creation of New Contents, Broadcast Technology)」、『技研だより』第 13 号シンポジウム特集、放送技術研究所開所 70 周年記念シンポジウム、パネルディスカッション B』、2000 年 7 月、pp. 6～7。

原口泉・山田尚司・埴原恒彦・原島博、「西郷さんの顔の謎－顔情報の分析と推測－」、『第 5 回日本顔学会大会 (フォーラム顔学 2000) 公開フォーラム』、2000 年 8 月。

原島博、「映像情報メディアの夢」、『映像情報メディア学会年次大会公開シンポジウム』、2000 年 8 月。

Akihiko Sugiura, Keiichi Yonemura and Hiroshi Harashima, "A Classification of Cerebral Disease by Using Face Image Synthesis," *IEICE Trans. Fundamentals*, E83, no.9, 2000.9, IEICE Trans. Fundamentals, pp. 1853-1859.【査読有】

山本健一郎、苗村健 and 原島博, "3 次元センサとトランスオーラル処理を用いた音像の定位," *日本ヴァーチャルリアリティ学会誌*, 5, no.3, 2000.9, pp. 981-987.【査読有】

池田裕美・苗村健・原島博・石川洵、「インタラクティブな透明球ディスプレイ i-ball の開発 (Interactive display of a crystal ball type: i-ball)」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会』、2000 年 9 月、pp. 279～282。

川原圭博・松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタの提案と実装～熱画像を利用した実時間システム～ (See-Through Video Avatar - concept and thermal vision based system -)」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会』、2000 年 9 月、pp. 333～336。

新田 拓哉・苗村健・原島博、「複合現実環境における影のインタラクション (Interaction of Shadows in Mixed Reality Environment)」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会』、2000 年 9 月、pp. 459～462。

竹内敬亮・苗村健・原島博、「竹内 敬亮%苗村 健%原島 博」、『3 次元物体の光線記述のためのテレセントリック撮像系 (Telecentric Capturing System for Acquiring Light Ray Data of 3D Objects)」、『2000 年 9 月、pp. 1～8。

羽鳥一夫・大須賀恵子・堤 和道・原島博、「平均顔手法を用いた表情評価の基礎検討」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2000』、2000 年 9 月、pp. 459～460。

竹内敬亮、苗村健 and 原島博, "テレセントリックレンズによる光線情報の取得," *映像情報メディア学会誌*, 54, no.10, 2000.10, pp. 1474-1477.【査読有】

2000.10.

原島博、「顔と表情と魅力」—顔の印象をコンピュータで探る—、『日本行動計量学会第 28 回大会』、2000 年 10 月、pp. 57～58。

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Ray-based approach to the integrated 3D visual communication," *SPIE Three-Dimensional Video and Display: Devices and Systems (Critical Reviews of Optical Science and Technology)*, CR76, 2000.11, SPIE Three-Dimensional Video and Display: Devices and Systems (Critical Reviews of Optical Science and Technology), pp. 282-305.【査読有】

新田拓哉・苗村健・原島博、「インタラクティブな陰影処理による複合現実感(Interactive Shading and Shadowing for Mixed Reality)」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2000)』、2000 年 11 月。

池田裕美・苗村健・原島博・石川洵、「透明球ディスプレイ i-ball におけるインタラクション(Interaction with a crystal ball type display i-ball)」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2000)』、2000 年 11 月、pp. 71～72。

Takeshi Naemura, Tatsuya Yoshida and Hiroshi Harashima, "3-D computer graphics based on integral photography Opt. Express 8," 2001.2, pp. 255-262.【査読有】

吉田達哉・苗村健・原島博、「インテグラルフोटグラフィを用いた 3 次元 CG の合成」、『映像情報メディア学会誌』、55 巻、3 号、2001 年 3 月、pp. 474～478。【査読有】

池田 裕美・苗村健・原島博・石川 洵、「透明球ディスプレイ i-ball におけるインタラクティブコミュニケーション(Interactive communication using a crystal ball type display i-ball)」、『インタラクション 2001』、2001 年 3 月、pp. 59～60。

山本健一郎・望月研二・市川忠嗣・苗村健・齋藤隆弘・原島博、「主成分分析を用いた頭部伝達関数のクラスタリング(Clustering of HRTFs Using Principal Component Analysis)」、『電子情報通信学会総合大会』、2001 年 3 月。(A-10-14)

N.P.Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Analysis and Synthesis of Facial Expressions based on Personal Facial Expression Space (PFES に基づく顔画像表情分析・合成)," *電子情報通信学会大会論文集*, 2001.3. (A-14-20)

松下 剛士・新田 拓哉・苗村健・原島博、「透過表現を用いたビデオアバタの改良と応用(Improvements and applications of See-Through Video Avatar)」、『電子情報通信学会総合大会』、2001 年 3 月、pp. 16～17。(A-16-17)

多胡剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「Video-Based Rendering の画質改善(1)-多眼入力システムと実時間光線補間-(Advances in VBR(1) - multi-view input system and real-time ray interpolation -)」、『(2001.3). A-16-18』、2001 年 3 月、電子情報通信学会総合大会。(A-16-18)

多胡 剛士・新田 拓哉・苗村健・原島博、「Video-Based Rendering の画質改善(2)-実時間計測による動的レイヤ構造の利用-(Advances in VBR(2) - Dynamic layered representation by real-time measurement -)」、『電子情報通信学会総合大会』、2001 年 3 月。

原島博・南 伸坊・南 美希子、「顔って面白い!」、『日本顔学会 第 10 回公開シンポジウム』、2001 年 3 月。

川原圭博・松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタの提案と熱画像を利用した実時間システムの実装」、『映像情報メディア学会誌』、55 巻、5 号、2001 年 5 月、pp. 746～750。【査読有】

原島博、『品質保証研究会通常総会特別講演』、2001 年 5 月。

公文俊平・関口和一・辻井重男・原島博・宮崎緑、「自然科学と人文科学による共創を目指して」、『電子情報通信学会主催公開シンポジウム』、2001 年 5 月。

原島博、「顔のコンピュータ解析」、『日本歯科医学会雑誌シンポジウム abstract』、52 巻、11 号、2001 年 5 月。

原島博、「コンピュータで顔を探る」、『失語症研究シンポジウム』、2001 年 6 月、pp. 113～118。

Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Real Time Facial Expression Analysis with Applications to Facial Animation in MPEG-4," *5th World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics (SCI2001)*, VI, 2001.7, 5th World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics (SCI2001), pp. 244-250.【査読有】

松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「空間共有通信における透過型ビデオアバター」、『3次元画像コンファレンス 2001』、2001年7月、pp. 29~32。

多胡剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「動的レイヤを用いた Video-Based Rendering」、『3次元画像コンファレンス 2001』、2001年7月、pp. 33~36。

原島博、「21世紀から22世紀への科学技術のゆくえ」、『光産業技術標準化総合委員会』、2001年7月。(銀座倶楽部)

Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Real Time Facial Expression Recognition System with Applications to Facial Animation in MPEG-4," *IEICE Trans INF & SYST*, 2001.8, pp. 1007-1017.【査読有】

Hiromi Ikeda, Takeshi Naemura, Hiroshi Harashima and Jun Ishikawa, "i-ball: Interactive information display like a crystal ball," *Conference Abstracts and Applications of ACM SIGGRAPH 2001*, 2001.8, Conference Abstracts and Applications of ACM SIGGRAPH 2001, p. 122.【査読有】

Takahide Takano, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "3D Space Coding using Virtual Object Surface," *Systems and Computers in Japan*, 32, no.12, 2001.9, pp. 47-59.【査読有】

大山紀美栄・辻美千子・奥田祥子・塚脇 寛之・大坊郁夫・原島博、「顔写真を公表する場合の「目を覆う方法」」、『日本顔学会誌』、1巻、1号、2001年9月、pp. 33~44。【査読有】

鳥羽美奈子・苗村健・齋藤隆弘・相澤清晴・望月研二・原島博、「空間共有コミュニケーションにおける建築物表現のための複合的な情報利用」、『日本バーチャルリアリティ学会第6回大会論文集』、2001年9月、pp. 227~230。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「鏡メタファによる情報環境*i-mirror*」、『日本バーチャルリアリティ学会第6回大会論文集』、2001年9月、pp. 397~398。

原島博、「VR(バーチャルリアリティ)と顔」、『VR文化フォーラム 2001 in 長崎』、2001年9月。

原島博、「いい顔になろうーコンピュータで探る顔の秘密」、『日本バーチャルリアリティ学会第6回大会特別講演』、2001年9月。

原島博、「「社会と大学のアクティブリンク」ー大学からの模索」、『「社会と大学のアクティブリンク」実行委員会主催公開シンポジウム』、2001年9月、東京大学本郷キャンパス大講堂。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「鏡メタファ情報環境 *i-mirror* におけるアプリケーション」、『映像メディア処理シンポジウム 2001』、2001年11月、pp. 85~86。

田中 悠・牛田啓太・杉田 馨・苗村健・原島博・島田 義弘、「ユーザの位置に応じた公共スペースのパーソナル情報空間化」、『映像メディア処理シンポジウム 2001』、2001年11月、pp. 29~30。

鳥羽 美奈子・苗村健・齋藤 隆弘・相澤 清晴・望月 研二・原島博、「空間共有コミュニケーションにおける図面とレンジデータを用いた建築物表現」、『2001年映像情報メディア学会冬季大会』、2001年12月。

Takeshi Naemura, Junji Tago and Hiroshi Harashima, "Real-Time Video-Based Modeling and Rendering of 3D Scenes," *IEEE Computer Graphics and Applications*, 22, no.2, 2002.3, pp. 66-73.【査読有】

Takaehi Naemura, Takuya Nitta, Atsushi Mimura and Hiroshi Harashima, "Virtual Shadows -- Enhanced Interaction in Mixed Reality Environment," *IEEE VR2002*, 2002.3, pp. 293-294.【査読有】

原島博・牛田啓太・田中悠・苗村健、「街の情報化を考える—“いまだけ・ここだけ”の情報環境デザイン—」、『電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ大会特別講演』、2002年3月。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「視線一致光学系を用いたディスプレイシステム i-mirror における鏡メタファインタラクション」、『インタラクション 2002』、2002年3月、pp. 85~86。

山本健一郎・望月研二・苗村健・齋藤隆弘・原島博、「映情メディア技報」、『空間共有通信における個人差を考慮した音像の提示』、2002年3月、pp. 25~30。

田中悠・牛田啓太・杉田馨・苗村健・原島博・島田義弘、「公共空間の個人利用システム i-wall による空間痕跡の時間軸探索」、『インタラクション 2002』、2002年3月、pp. 69~70。

寛康明・牛田啓太・苗村健・原島博、「人物軌跡を用いたインタラクションシステム“i-trace”一場を通じた人と人とのつながりの演出—」、『インタラクション 2002』、2002年3月、pp. 179~180。

井澤克俊・ナイワラチャンドラシリ・苗村健・原島博、「顔印象から連想される物体の自動選出」、『電子情報通信学会 2002年総合大会』、2002年3月。

祝捷・高橋桂太・牛田啓太・苗村健・原島博、「実時間 IBMR 技術を応用した電子的な鏡 (Plenoptic Digital Mirror) の試作」、『電子情報通信学会 2002年総合大会』、2002年3月。(A-16-39, pp. 359.)

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「時間軸に沿って探索する機能を持つ鏡”のあるインテリジェント待合室の試作」、『電子情報通信学会 2002年総合大会』、2002年3月。(A-16-40, pp. 360.)

田中悠・牛田啓太・杉田馨・苗村健・原島博・島田義弘、「公共空間の個人利用システム i-wall におけるインタフェースデザイン」、『電子情報通信学会 2002年総合大会』、2002年3月。(A-16-41, pp. 36.)

原島博、「いい顔, いい心, いいコミュニケーション」、(『VR-HC 公開市民講座, 京都』)、2002年3月。

竹内敬亮・苗村健・原島博、「3次元物体の光線記述のためのテレセントリック撮像系 (Telecentric Capturing System for Acquiring Light Ray Data of 3-D Object)」、『映情学誌』、56巻、4号、2002年4月、pp. 617~627。【査読有】
(Telecentric Capturing System for Acquiring Light Ray Data of 3-D Object)

原島博、「街の情報化: ライトアップからビデオアップへ」、『NICOGRAPH2002 春季大会』、2002年5月29日。

Takeshi Naemura, Takuya Nitta, Atsushi Mimura and Hiroshi Harashima, "Virtual Shadows in Mixed Reality Environment Using Flashlight-like Devices," *Trans. Virtual Reality Society of Japan*, 17, no.2, 2002.6, pp. 227-237.【査読有】

Jie Zhu, Keita Takahashi, Keita Ushida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Plenoptic Digital Mirror: An Electronic Mirror Using Video-Based Modeling and Rendering," *3D Image Conf. 2002*, 2002.7, pp. 149-152.

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "The Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication," *Three-Dimensional Television, Video, and Display Technology*, 2002.8, Springer-Verlag(New York). (Chapter 8 (2002.8). ISBN 3-540-43549-2)

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "The Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication," *Three-Dimensional Television, Video, and Display Technology*, 2002.8, Springer-Verlag (New York). (Chapter 8, [ISBN3-540-43549-2])

牛田啓太・山本健一郎・苗村健・原島博、「多次元 DCT による多チャンネル音場情報符号化に向けた一検討」、『映情学 年次大』、2002年8月。

田中悠・牛田啓太・杉田馨・苗村健・原島博・島田義弘、「壁とパーソナル空間の交わりを情報環境にするシステム i-wall (i-wall: a System for Providing an Information Environment at the Intersection of a Wall and One's Personal Space)」、『映情学誌』、56巻、9号、2002年9月、pp. 1500~1505。【査読有】

崎田 健二・Chandrasiri N.P.・原島博・苗村健、「顔画像における性別と年齢の統合的分析 (Integrated Classification of Sex and Age Groups Based on Facial Images)」、『日本顔学会誌』、2 巻、1 号、2002 年 9 月、pp. 83~95。【査読有】

牛田啓太・田中 悠・苗村健・原島博、「実世界指向情報環境: 情報街具の提案と試み—i-mirror と i-wall—」、『情処研報』、2002 年 9 月、pp. 9~15。(HI-100-2)

森村 久美子・牛田啓太・伊東 乾・原島博、「合唱におけるノンビブラート唱法の効果と評価」、『情報科学技術フォーラム (FIT2002) II』、2002 年 9 月、pp. 235~236。

加藤 寛・寛 康明・牛田啓太・苗村健・原島博、「影の表現を通じたインタラクティブ拡張現実空間」、『日本 VR 学会大会』、2002 年 9 月、pp. 105~108。(An Interactive Augmented Reality Space Using Shadows)

高橋 桂太・杉田 馨・苗村健・原島博、「複数の距離画像を用いた実時間 IBMR システムに向けた基礎検討」、『日本 VR 学会大会』、2002 年 9 月、pp. 477~480。(A Basic Study on Real-Time IBMR System Using Multiple Depth Maps)

井澤 克俊, N. P. Chandrasiri, 苗村健 and 原島博, “連想に基づく顔印象の自動分類と強調表現の検討,” *連想に基づく顔印象の自動分類と強調表現の検討*, 2002.9, 日本顔学会大会. (O-1-6 (Automatic Classification and Exaggeration of Facial Impression Using Objects Associated with Human Faces))

寛 康明, 加藤寛, 牛田啓太, 苗村健 and 原島博, “人物軌跡を利用した空間演出インタラクティブシステム i-trace,” *人物軌跡を利用した空間演出インタラクティブシステム i-trace*, 2002.9, 日本 VR 学会大会, pp. 431-434. (i-trace: An Interactive System Illuminating the Area Using One's Traces)

安田 和隆・杉田 馨・牛田啓太・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタを用いたコミュニケーション・プレゼンテーション支援システム」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2002』、3144 号、2002 年 9 月、pp. 589~592。(学術奨励賞受賞)

安田 和隆・杉田 馨・牛田啓太・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタを用いた双方向コミュニケーション支援」、『日本 VR 学会大会』、2002 年 9 月、pp. 495~498。(A Mutual Communication-Support Using See-through Video Avatars)

『ヒト, 人, 人間 われわれはどこから来てどこへ行こうとしているのか』、2002 年 11 月、東京大学出版会。

山本健一郎・望月研二・苗村健・齊藤隆弘・原島博、「直交基底空間上の軌跡による HRTF のクラスタリングと評価 (Proposal and Evaluation of Clustering Method for Loci of HRTFs in an Orthogonal Basis Space)」、『映像学誌』、56 巻、11 号、2002 年 11 月、pp. 1759~1768。【査読有】

Naiwala P. Chandrasiri, Istvan Barakonyi, Takeshi Naemura, Mitsuru Ishizuka and Hiroshi Harashima, “Communication over the Internet using a 3D Agent with Real-time Facial Expression Analysis, Synthesis and Text to Speech Capabilities,” *IEEE Int'l Conf. on Communication Systems (ICCS 2002)*, no.479, 2002.11, pp. 24-29。【査読有】

加藤 寛・牛田啓太・飯田 誠・苗村健・原島博、「マルチプロジェクションを用いた拡張現実空間における影のインタラクシオン」、『映像メディア処理シンポジウム (IMPS2002)』、2002 年 11 月、pp. 123~124。(I-5.02, Interaction with Augmented Shadow Using Multi-projection))

高橋 桂太・苗村健・原島博、「多眼画像取得における Plenoptic Sampling および等価被写界深度に関する理論的考察」、『画像符号化シンポジウム(PCSJ2002)』、2002 年 11 月、pp. 69~70。(P-5.01, pp.69 -- 70 (A Theoretical Study on Plenoptic Sampling and Equivalent Depth of Field in Image Acquisition Using Multiple Cameras) [学生論文賞 受賞][ベストポスター賞 受賞])

高橋 桂太, 苗村健 and 原島博, “多眼カメラアレイにおける Plenoptic Sampling および等価被写界深度に関する理論的考察,” *Theoretical Study on Plenoptic Sampling and Equivalent Depth of Field for Multiple Camera Arrays*, 102, no.469, 2002.11, 信学技報, pp. 29-34. (IE2002-102)

Keita Ushida, Yu Tanaka, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, “i-mirror: an Interaction/information Environment Based on a Mirror Metaphor Aiming to Install into Our Daily Space,” *12th International Conference on Artificial Reality and Telexistence(ICAT 2002)*, 2002.12, pp. 113-119。【査読有】

Yasuaki Kakehi, Keita Ushida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "i-trace: an Interactive System Drawing One's Traces and Illuminating the Area," *12th International Conference on Artificial Reality and Telexistence(ICAT 2002)*, 2002.12, pp. 154-161.【査読有】

Takeshi Naemura・Hiroshi Harashima, 「Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication」, 『Pre-ICAT CREST Symposium on Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence, Invited Talk』, 2002 年 12 月。

Naiwala P. Chandrasiri・Istvan Barakonyi・Takeshi Naemura・Mitsuru Ishizuka・Hiroshi Harashima, 「Communication over the Internet using a 3D Agent with Real-time Facial Expression Analysis and Synthesis」, 『The Society for Instrument and Control Engineers System Integration Division Annual Conference (SICE SI2002)』, 2002 年 12 月, pp. 239~240。

牛田啓太・田中 悠・苗村健・原島博・島田 義弘, 「街角情報環境に向けたインタフェースデザイン—情報街具としての i-wall を例に—」, 『VR 研報』, 17 巻, 4 号, 2002 年 12 月, pp. 51~58。(CSVC2002-27)

牛田啓太・苗村健・原島博・石川 洵, 「多人数観察可能なインタラクティブ透明球ディスプレイ i-ball 2 の開発」, 『計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SICE SI2002, II)』, 2002 年 12 月, pp. 9~10。(i-ball 2: an Interactive Crystal-ball-like Display for Multiple Users)

寛 康明, 牛田啓太, 苗村健 and 原島博, "i-trace: 人物軌跡による人と人とのつながりを演出するシステム," *計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SICE SI2002), II*, 2002.12, pp. 11-12. (i-trace: A System Presenting Linkages between People by Leaving Their Traces)

館 暉・原島博・廣瀬 通孝・川上 直樹・苗村健・広田 光一, 「テレグジスタンス遠隔通信システム」, 『計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SICE SI2002, II)』, 2002 年 12 月, pp. 1~2。(Telexistence Communication Systems)

杉田 馨・苗村健・原島博, 「グラフィックスプロセッサを用いた高速画像処理プラットフォームの検討」, 『信学技報(2003.2). IE2002-230 (Real-time Image Processing Platform Using Graphics Processors)』, 2003 年 2 月。

川上 玲 5 寛 康明, 苗村健 and 原島博, "Lumisight: Lumisty フィルムを用いた方向依存映像ディスプレイ," 2003.2, *インタラクシオン* 2003, pp. 53-54. (Lumisight: View-Dependent Transparent Display Using Lumisity Film)

市川寛子・N.P. チャンドラシリ・原島博・牧野 順四郎, 「相手の同調的反応が観察者表情に及ぼす影響」, 2003 年 2 月, *信学技報*。(PRMU2002-210)

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication," *Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence*, 2003.3, Ohmsha (Tokyo) and IOS Press, pp. 73-97. ([ISBN4-274-90586-1 C3055 (Ohmsha), ISBN1-58603-338-7 (IOS Press)])

杉田 馨・苗村健・原島博, 「グラフィックスプロセッサを用いた実時間ステレオマッチング」, 『信学総大, (2003.3). D11-121 (Real-time Stereo Matching Using a Graphics Processor)』, 2003 年 3 月。

川上 玲・寛 康明・苗村健・原島博, 「Lumisight ディスプレイを用いた透明パーティション」, 『信学総大』, 2003 年 3 月。(A16-6 (Transparent Partition Using Lumisight Display))

中洲 俊信・Chandrasiri N.P.・苗村健・原島博, 「対話型遺伝的アルゴリズムを用いた似顔絵作成」, 『信学技報』, 2003 年 3 月。(HIP2002-68 (Synthesis of Facial Caricatures Using Interactive Genetic Algorithm))

光田智史・山本 智幸・高橋 桂太・苗村健・原島博, 「奥行き推定を用いたインテグラルフォトグラフィからの自由視点画像合成」, 『信学総大』, 2003 年 3 月。(D11-150 (Free-viewpoint Image Synthesis from Integral Photography Using Estimated Depth Information))

柿本 正憲・向井 亨光・芳賀 剛士・西田 友是・苗村健・原島博, 「反射特性を考慮した実時間グレア描画手法」, 『画像電子学会誌』, 32 巻, 4 号, 2003 年 4 月, pp. 336~345.【査読有】

Kumiko Morimura, Makoto Iida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "A Study of Effect of Non-Vibrato Singing in Choral Music," *The Eighth Western Pacific Acoustics Conference*, 2003.4.【査読有】(MB42.pdf)

Kumiko Morimura, Makoto Iida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Impressions of Non-Vibrato Singing in Choral Music," *Society for Music Perception and Cognition 2003*, 2003.6, pp. 29-30.【査読有】

倉持 基・馬場 章・原島博、「「歴史写真」における新たな人物比定方法について」、『日本写真芸術学会平成 15 年度年次大会研究報告』、2003 年 6 月。

Minako Toba, Takeshi Naemura, Takahiro Saito, Kiyoharu Aizawa, Kenji Mochizuki and Hiroshi Harashima, "3D Image Representation of Buildings Utilizing Heterogeneous Information for Multimedia Ambiance Communication," *SPIE VCIP2003, Lugano*, 2003.7, SPIE VCIP2003, Lugano.【査読有】

Kazutaka Yasuda, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Thermo-Key: Human Region Segmentation from Video Using Thermal Information," *ACM SIGGRAPH2003 Emerging Technologies*, Booth No.40, 2003.7, San Diego.【査読有】(Booth No.40)

光田智史・山本 智幸・高橋 桂太・苗村健・原島博、「実時間奥行き推定を用いたインテグラルフォトグラフィからの自由視点画像合成」、『情報処理学会第 66 回全国大会』、2003 年 7 月、pp. 13~16。(優秀論文賞受賞)

高橋 桂太・苗村健・原島博、「多眼画像取得におけるシーンの奥行きとエイリアシングに関する理論的考察」、『3次元画像コンファレンス 2003』、2003 年 7 月。(3-3)

加藤 寛・苗村健・原島博、「影を拡張したインタラクティブな映像空間の創出」、『信学技報』、2003 年 7 月。(HIP2003-19)

川上 玲・筧 康明・苗村健・原島博、「視界制御フィルムを用いた方向依存透明ディスプレイ Lumisight」、『信学技報』、2003 年 7 月。(HIP2003-15)

原島博、「顔と感情とコンピュータ」、『日本感情心理学会第 11 回大会特別講演』、2003 年 8 月。

倉持基・馬場章・原島博、「「歴史写真」における人物比定の新しいモデル」、『日本顔学会誌』、13 巻、1 号、2003 年 9 月、pp. 89~97。【査読有】

Naiwala P. Chandrasiri, Istvan Barakonyi, Takeshi Naemura, Mitsuru Ishizuka and Hiroshi Harashima, "Communication system using a 3D agent with real-time facial expression analysis and synthesis," *Measurement and Meaning, Bologna, Italy*, 2003.9, Bologna, Italy, 70pp.【査読有】

Hiroko Ichikawa, Naiwala P. Chandrasiri, Hiroshi Harashima and Junshiro Makino, "The effects of congruent facial response on counterpart's facial expression," *10th European Conference Facial Expression, Measurement and Meaning*, 2003.9, Bologna, Italy, 50pp.【査読有】

Keita Takahashi, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Depth of Field in Light Field Rendering," *IEEE International Conference on Image Processing (ICIP2003)*, 2003.9, pp. 409-412(MA-P5.10).【査読有】

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Thermo-key: Human Region Segmentation from Video Using Thermal Information," *21st Century COE Symposium on Real World Information Systems*, 2003.9, pp. 29-32.【査読有】

Susumu Shibui, Katsutoshi Izawa, Hisoshi Harashima and Kazuo Shigemasa, "Adaptation to the facial expressions of emotion in the realistic face," *ECVP2003, Perception*, 132, 2003.9, pp. 173-174.【査読有】

原島博・廣瀬通孝・福島智・岩井俊雄・佐藤隆夫、「テクノロジーと心」、『日本心理学会大会シンポジウム』、2003 年 9 月。

牛田啓太・原島博・石川 洵、「透明球ディスプレイ i-ball2 のハードウェア実装とアプリケーション」、『日本バーチャルリアリティ学会第 8 回大会論文集』、2003 年 9 月、pp. 123~126。

中洲 俊信・N.P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「対話型 GA を用いた似顔絵作成システムの検討」、『日本感情心理学会第 11 回大会特別講演』、2003 年 9 月。

杉田 馨・高橋 桂太・苗村健・原島博、「GPU を用いた合焦判定による Light Field からの全焦点画像合成」、『顔学会大会』、2003 年 9 月。

飯田 誠・苗村健・原島博、「ひずみゲージを用いた透明タッチパネルの基礎研究」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2003』、2003 年 9 月、pp. 821~824。

高橋桂太・苗村健・原島博、「自由視点画像合成における光線情報のサンプリングと被写界深度に関する理論」、『映像情報メディア学会誌』、57 巻、10 号、2003 年 10 月、pp. 1292~1299。【査読有】

Yu Tanaka, Keita Ushida, Takeshi Naemura, Hiroshi Harashima and Yoshihiro Shimada, "i-wall: Personalizing a Wall as an Information Environment with a Cellular Phone Deveice," *The Fifth Annual Conference on Ubiquitous Computing(UbiComp 2003)*, 2003.10, pp. 157-158.【査読有】

Kaoru Sugita, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Performance Evaluation of Programmable Graphics Hardware for Image Filtering and Stereo Matching," *ACM Symp. on Virtual Reality Software and Technology (VRST2003)*, 2003.10. 【査読有】

Hiroshi Kato, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Graphic Shadow: Augmenting Your Shadow on the Floor," *The Second Intern. Symp. on Mixed and Augmented Reality (ISMAR 2003)*, 2003.10, pp. 306-307.【査読有】

Hiroshi Kato, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Textured Shadow," *The Second Intern. Symp. on Mixed and Augmented Reality (ISMAR 2003) MR Technology Expo*, 2003.10, pp. 352-353.【査読有】

牛田啓太・原島博・石 洵、「多人数観察可能な透明球ディスプレイ i-ball2-トラックボールインタフェースを用いたインタラクティブアプリケーション-」、『電子情報通信学会技術報告』、2003 年 10 月、pp. 15~20。(MVE2003-60)

牛田啓太, 原島博 and 石川 洵, "透明ディスプレイ i-ball2 における多人数インタラクティブアプリケーション," *映像メディア処理シンポジウム(IMPS2003)*, 2003.11, pp. 69-70. (I-4.01)

柿本 正憲・松岡 薫・西田 友是・苗村健・原島博、「まつ毛の回折光を考慮したグレアの高速表示」、『電子情報通信学会技術報告』、2003 年 11 月。(MVE2003-62)

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「鏡メタファに基づくインタラクション／情報環境 i-mirror」、『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』、18 巻、4 号、2003 年 12 月、pp. 421~431。【査読有】

Keita Ushida, Hiroshi Harashima and Jun Ishikawa, "i-ball 2: An interaction platform with a crystal-ball-like display for multiple users," *13th International Conference on Artificial Reality and Telexistence(ICAT2003)*, 2003.12, pp. 236-241. 【査読有】

舘 暉・原島博・廣瀬通孝・川上直樹・苗村健・広田光一、「トレイグジスタンス遠隔通信システム(2)」、『第 4 回 SICE システムインテグレーション部門講演会(SI2003)オーガナイズドセッション舘 GREST プロジェクト: トレイグジスタンスを用いる相互コミュニケーションシステム, 2G4-1 (2003.12).』、2003 年 12 月。

牛田啓太・原島博・石川 洵、「i-ball2 の開発(1):トラックボールインタフェースと一体化した透明球ディスプレイ」、『計測自動制御学会第 4 回システムインテグレーション部門講演会(SICE SI2003)』、2003 年 12 月、pp. 608~609。(2G4-3)

牛田啓太・原島博・石川 洵、「i-ball2 の開発(2):対話型コミュニケーションへの応用」、『計測自動制御学会第 4 回システムインテグレーション部門講演会(SICE SI2003)』、2003 年 12 月、pp. 610~611。(2G4-4)

飯田 誠・苗村健・原島博、「上面に実物体の配置が可能なタッチパネルの研究」、『第 4 回 SICE システムインテグレーション部門(SI 部門)講演会 オーガナイズドセッション複合現実感』、2003 年 12 月、pp. 251~252。(1H2-2)

Takeshi Naemura, Masahide Kaneko and Hiroshi Harashima, "Compression and Representation of 3-D Images," *Image Processing Technologies — Algorithms, Sensors, and Applications —*, 2004, Marcel Dekker Inc.. (ISBN 0-8247-5057-8)

Naiwala P. Chandrasiri, Istvan Barakonyi, Takeshi Naemura, Mitsuru Ishizuka and Hiroshi Harashima, "Internet Communication Using Real-Time Facial Expression Analysis and Synthesis," *IEEE Multimedia Magazine (Special issue on Multisensory Communication and Experience through Multimedia)*, 11, no.3, 2004, pp. 20-29.【査読有】

Kazutaka Yasuda, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Thermo-Key: Human Region Segmentation from Video," *IEEE Computer Graphics and Applications*, 24, no.1, 2004.1, pp. 26-30.【査読有】

Kaoru Sugita, Keita Takahashi, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Focus Measurement on Programmable Graphics Hardware for All in-Focus Rendering from Light Field," *IEEE Virtual Reality 2004 Conference*, 2004.3.【査読有】

牛田啓太・チャンドラシリ N. P.・原島博・石川 洵、「インタラクティブプラットフォーム i-ball 2 におけるコミュニケーション指向アプリケーション」、『インタラクティブプラットフォーム i-ball 2 におけるコミュニケーション指向アプリケーション』、2004 年 3 月、pp. 195~196。(B10)

松岡 薫・柿本 正憲・西田 友是・苗村健・原島博、「まつ毛によって生じる回折光のシミュレーションとグレア表現への応用」、『画像電子学会ビジュアルコンピューティングワークショップ 2003 宮島』、2004 年 3 月。(6N-3)

Takeshi Naemura, Masahide Kaneko and Hiroshi Harashima, "Compression and Representation of 3-D Images," *Image Processing Technologies — Algorithms, Sensors, and Applications —*, 2004.4, Marcel Dekker Inc.. (ISBN 0-8247-5057-8)

Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Interactive Analysis and Synthesis of Facial Expressions based on Personal Facial Expression Space," *6th Int'l Conf. on Automatic Face and Gesture Recognition*, 2004.5, Seoul Korea, IEEE FGR 2004, pp. 105-110.【査読有】

牛田啓太・原島博・石川 洵、「i-ball 2: 透明球ディスプレイを備えたインタラクティブプラットフォームの開発 (Development of i-ball 2: An Interaction Platform with a Crystal-Ball-Like Display)」、『映像情報メディア学会誌』、56 巻、6 号、2004 年 6 月、pp. 842~845。【査読有】

柿本 正憲・松岡 薫・西田 友是・苗村健・原島博、「波動光学に基づくグレア生成と実時間表示手法」、『Visual Computing / グラフィクスと CAD 合同シンポジウム 2004』、2004 年 6 月、pp. 101~106。(優秀研究発表賞(GCAD 賞)受賞(Glare Generation Based on Wave Optics and its Real-Time Rendering))

宮田 雅子・飯田 誠・苗村健・原島博、「駅におけるサインシステムの Re-Design」、『Design Symposium 2004, 講演論文集』、2004 年 7 月、pp. 139~142。(Re-Design of the sign system for station concourses)

稲田 大輔・倉持 基・Chandrasiri N. P.・苗村健・原島博、「顔の向きに依存しない人物同定システム—横向き顔画像からの同一人物判定手法の提案 (System for personal identification independent of view angle of the face image—Method for recognition from horizontal view—)」、『日本顔学会誌』、14 巻、1 号、2004 年 9 月、pp. 89~94。【査読有】

倉持 基・稲田 大輔・原島博・馬場 章、「「歴史写真」における新たな人物比定方法の実践 (Practice of a New Method for Identifying Persons by Comparison in "Historical Photographs")」、『第 9 回日本顔学会大会研究発表, 日本顔学会誌』、14 巻、2004 年 9 月、p. 179。【査読有】

牛田啓太・チャンドラシリ・N. P.・原島博、「透明球ディスプレイ i-ball2 におけるリアルタイム表情認識を用いたインタラクティブ」、『第 9 回日本顔学会大会』、2004 年 9 月。(O-5-2, pp.195 (Interactive Applications on i-ball 2 Using Real-Time Facial Expression Analysis))

中洲 俊信・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「対話型 GA を用いた似顔絵作成におけるユーザ意思反映の検討 ~顔部品選択・位置形状調節機能の導入~」、『第 9 回日本顔学会大会』、2004 年 9 月。(O-5-1, pp.194 (Reflection of user's intention for synthesizing facial caricatures based on interactive genetic algorithm))

Masanori Kakimoto, Kaoru Matsuoka, Tomoyuki Nishita, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Glare Generation Based on Wave Optics," *Proceedings of the 12th Pacific Conference on Computer Graphics and Applications (PG'04)*, 2004.10, Seoul Korea, pp. 133-142.【査読有】(Best Paper Award 受賞)

牛田啓太・苗村健・原島博、「実写動画マウスポインタの提案とその応用」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2004』、3324号、2004年10月、pp. 1033~1036。(Proposal of a Video Mouse-Pointer and its Application)

牛田啓太・林 淳哉・圓藤 知博・原島博・館 暲、「相互テレイグジスタンスへ向けた異種端末間のコミュニケーション—TWISTER III と i-ball 2 の接続実験—」、『計測自動制御学会第 5 回システムインテグレーション部門講演会 (SICE SI2004)』、2004年12月、pp. 911~912。(Communication between Different Type Systems toward Mutual Telexistence—Connecting TWISTER III and i-ball 2)

牛田啓太・原島博、「i-ball 2 の開発(3): インタラクションとコミュニケーションのプラットフォームを目指して」、『計測自動制御学会第 5 回システムインテグレーション部門講演会 (SICE SI2004)』、2004年12月、pp. 909~910。(3D4-2, Development of i-ball 2 (3): Toward an Interaction/Communication Platform)

中洲 俊信・チャンドラシリ N. P.・苗村健・原島博、「対話型 GA を用いた似顔絵作成における髪モデルの検討」、『電子情報通信学会技術研究報告』、2005年1月、pp. 7~12。(CQ2004-15)

その他

Satoshi Mitsuda, Tomoyuki Yamamoto, Keita Takahashi, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Interactive View Synthesis from Integral Photography Using Estimated Depth Information," 5243, no.5218, 2003.9, pp. 5243-5218.【査読有】(SPIE Three-Dimensional TV, Video, and Display II)

一般向け著書等

原島博、「モバイルは縁台になれるか?—街(まち)の情報化を考える—」、『NTT Docomo テクニカル・ジャーナル』、8巻、春号、2000年、pp. 4~5。

原島博、「歴史は何を教えてくれるか?」、『映像情報メディア学会誌』、54巻、4号、2000年4月、pp. 508~512。

後藤和彦・原島博・和久井孝太郎・山本英雄、「緊急課題としてのメディアリテラシー向上」、『映像情報メディア学会誌』、54巻、4号、2000年4月、pp. 538~547。

原島博、「顔のコンピュータ解析 歯科治療による顔貌の変化」、『日本歯科医師学会雑誌』、52巻、11号、2000年5月。(pp.20)

原島博、「「学環」という発想 東大で始まった新しいアカデミックデザイン」、『デザインニュース』、Summer、2000年6月、pp. 80~82。(2000-250)

Hiroshi Harashima, Takeshi Takashiro, Mari Matsunaga and Masaki Hayashi, "Toward the Creation of New Contents, 21st Century Broadcasting and Technology Development," *Broadcast Technology*, no.4, Autumn, 2000.7, pp. 10-11.

原島博、「対談「自分の顔と上手につき合っていくために」」、『顔力(がんにょく)』、2001年7月、ワニブックス、pp. 179~199。

一般向けエッセイ等

原島博、「感性コミュニケーションの基本となる「顔」」、『SAS Communication Japan』、2000年4月、pp. 18~19。

原島博、「いい顔、いいコミュニケーション」、『屋久島文化デザイン会議 2000 実行委員会』、2000年5月。

原島博、「いい顔、いいコミュニケーション」、『国際ロータリー第 2580 地区 第 1748 回例会報告』、2000年6月。

原島博、「いい顔とは何かーコンピュータで探るー」、『品川シルバー大学ふれあいコース』、2000年6月。

原島博、「なぜ、今”ヒューマンメディア”か」、『LIST Salon(イメラボ サロン)Tokyo 2000』、2000年7月。

原島博、「デジタル文化未来論」、『Link Club Newsletter』、170巻、2000年8月、pp. 8～10。

原島博、「コンピュータで探る顔の秘密」、『日本バーチャルリアリティ学会中高生向け講習会』、2000年8月、東京大学。

原島博、「日本人の顔のゆくえー顔には時代やあなたの生き方が刻まれるー」、『倫風』、150巻、9号、2000年9月、pp. 99～93。

原島博、「情報技術(IT)革命ーなぜ今 ITなのか？それは何を意味するのか？」、『東京理科大学大学院セミナー』、2000年10月。

原島博、「顔って面白い！～顔のイメージ分析～」、『第二回ジャパンメイクアップ アーティスト ネットワーク(JMAN)セミナー』、2000年10月。

原島博、「顔学」、『日本ヘアカラー協会』、2000年11月。

原島博、「あの人が学校にやってきたー京都市立石田小学校ー」、『日本文化デザイン会議(2000.11.4)』、2000年11月4日。

河口 洋一郎・原島博・廣瀬 通孝・山中 俊治、「移動の想像力」、『日本文化デザイン会議』、2000年11月5日。(京都国際会議場)

原島博、「原島 博」、『東京大学情報学環・学際情報学府設立シンポジウム, 安田講堂』、2000年11月27日。

マリ・クリスティーン・河合徳枝・原島博、「華麗なるバリ島の楽園」、『日本バーチャルリアリティ学会誌』、5巻、2号、2000年12月、pp. 101～117。

原島博、「20世紀, 21世紀, そして22世紀ー歴史の流れの中で”今”の技術を考えるー」、『ATR 成果報告会基調講演』、2000年12月、原島博: `20世紀, 21世紀, そして22世紀ー歴史の流れの中で”今”の技術を考えるー, ATR 成果報告会基調講演(2000.12)。

原島博・他、『理学工学系大学院案内』、2001年1月、東京図書、pp. 11～25。

原島博・犬童 文子、「いい顔でハッピー!」、『ベターホーム』、493巻、2001年1月、pp. 33～40。

原島博・村山 登、「デジタルアート”はここまで進化する」、『AERA』、2001年1月15日。

原島博、「顔って面白い!」、『ジャパンメイクアップ アーティスト ネットワーク(JMAN)』、12巻、2001年2月、pp. 1～2。

原島博、「情報新大陸へー21世紀の情報技術者の役割」、『三菱電機技報 特集マルチメディア情報流通技術』、2001年2月。

原島博、「赤ん坊は本能 大人は“つくり笑い」、『シルバー新報2面』、2001年2月23日。

原島博、「コンピュータで探るいい顔」、『横浜市立大学リカレント講座』、2001年3月。

原島博、「心, 第2回「顔と心と体」」、『研究会公開講座』、2001年3月。

原島博、「バーチャルアイドルの顔学」、2001年3月、Charamix.com。URL:<http://charamix.com/>

原島博、「顔の秘密をコンピュータで探る」、『平成 12 年度市民公開講座, 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ』、2001 年 3 月 4 日、原島博: ``顔の秘密をコンピュータで探る', 平成 12 年度市民公開講座, 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ(2001.3.4)。

原島博、「受賞記念パネル討論」、『第4回文化庁メディア芸術祭シンポジウム』、2001 年 3 月 17 日、北久保 貞宗, 武仲 貞宗, 原島 博: ``受賞記念パネル討論', 第4回文化庁メディア芸術祭シンポジウム(2001.3.17)。

原島博・東倉 洋一・竹村 真一、「鼎談～ヒューマンメディアプロジェクトの意義と今後の展望について～」、『ヒューマンメディア公開シンポジウム』、2001 年 3 月 23 日。

黒田 玲子・原島博、「右の世界 左の世界」、『日経サイエンス』、2001 年 4 月、pp. 108～113。

伊住 政和・北川原 温・原島博、「特集 青山デザイン会議, 生きもの”ヒト”を科学する」、『ブレーン』、2001 年 5 月、pp. 8～17。

原島博、「ダ・ヴィンチ科学の時代へ」、『学際』、1 号、2001 年 5 月、pp. 18～26。

原島博、「21 世紀と IT」、『デンティストリーオンライン・ジャパン・ドット・コム 特別記念講演』、2001 年 5 月。(セルリアンタワー東急ホテル)

原島博、「巻頭言 新会長挨拶」、『日本バーチャルリアリティ学会誌』、6 巻、1 号、2001 年 6 月、pp. 4～5。

原島博、『顔のゆくえ, 学習だより 夏』、2001 年 6 月、社団法人 日本理容美容教育センター、pp. 26～29。

原島博、「インタビュー 顔学入門」、『日本写真協会会報』、405 号、2001 年 6 月、pp. 10～13。

原島博・三橋 純、「トークとスライドレクチャー」ー女の顔・男の顔』、『東京写真月間 2001, 「東京写真月間 2001」実行委員会・社団法人日本写真協会・東京都写真美術館主催, 東京都写真美術館』、2001 年 6 月。(東京都写真美術館)

原島博、「CG アイドルの顔」、『アニメーション研究』、2001 年 7 月、pp. 2～3。

原島博、「邦楽, 西洋と比ぶれば(十)」、『美女 BEAUTY, (財)新日鐵文化財団主催 紀尾井邦楽スペシャル, 紀尾井小ホール』、2001 年 7 月。

原島博、「顔学への招待」、『北九州博覧祭記念講演, 「やすらぎ健康館」健康スタジオ』、2001 年 7 月。

原島博、「進化するコミュニケーション—01 情報編—匿す顔, 名無しの顔, メディアは果たして進化しているのか? 16 — 21」、『顔学から考える, ネイチャーインタフェイス』、1 巻、2001 年 8 月、pp. 16～21。

原島博、「日本顔学会ができるまで」、『日本顔学会誌』、2001 年 9 月、pp. 3～7。

原島博、「21 世紀: 科学技術のゆくえ」、『東京葛飾ロータリークラブ例会講演』、2001 年 10 月。

原島博、「人の“顔”は何を語るのか? —コンピュータ顔学からのアプローチ」、『東京大学第 96 回公開講座』、2001 年 10 月。

伊東 順二・崔 在銀・土佐 尚子・中津 良平・原島博・山城 祥二、「AKIRA の時代—AI と自然」、『第 24 回日本文化デザイン会議・沖縄, 沖縄コンベンションセンター』、2001 年 11 月。

原島博、「いい顔になろう—コンピュータで探る顔の秘密」、『日本バーチャルリアリティ学会誌』、2001 年 12 月、pp. 31～43。

原島博、「VR(バーチャルリアリティ)と顔」、『VR 文化フォーラム 2001 in 長崎, 日本バーチャルリアリティ学会誌』、2001 年 12 月、pp. 44～46。

- 原島博、「顔学から、住まいと町を見る」、『マイホームプラン』、31巻、12号、2001年12月、pp. 4～5。
- 原島博、「アトムが見た夢ーヒューマノイド・ロボットの世紀」、『DIME』、2001年12月、pp. 72～74。
- 原島博、「顔学会へ顔を出してみませんか?」、『Glaxo Smith Kline New Science』、46号、2002年、pp. 10～11。
- 原島博、「特集 良い研究環境を見つける・作る[コラム: 良い研究環境とは?]ー研究者として幸せだったか?ー」、『科学』、173巻、3号、2002年、pp. 277～278。
- 原島博、「顔を科学する」、『日本歯科医師会雑誌』、54巻、10号、2002年1月、pp. 943～950。
- 原島博、「顔学のかたち」、『InterLab』、2002年2月。
- 原島博、「顔とコミュニケーション」、『Harvard Business Review』、27巻、3号、2002年3月、5pp.。
- 児玉 孝子・大場 康雄・原島博、「受賞記念パネル討論」、『第5回文化メディア芸術祭シンポジウム』、2002年3月。
- 原島博・チャンドラシリ、「おとなになったきみの顔」、『3年の学習』、4号、2002年4月、pp. 74～77。
- 原島博、「気持ち伝ワルインタラクシオン 尚子's TALK SESSION」、『週刊アスキー』、395巻、2002年6月、pp. 72～73。
- 原島博、「気持ち伝ワルインタラクシオン 尚子's TALK SESSION」、『週刊アスキー』、396巻、2002年6月、pp. 68～69。
- 原島博、「ダ・ヴィンチ科学の新時代ーコンピュータで探る顔の秘密」、『中京大学公開講座』、2002年6月5日。
- 原島博、「良い顔になろう」、『竹早高校同窓会総会篁会講演』、2002年6月22日。
- 原島博、「顔訓 13か条で好感度をぐ～んとUPさせる」、『40代から、もっときれいになる本』、19巻、2002年7月、pp. 105～110。
- 安田 靖彦・原島博・羽鳥 光俊・岡村 治男・喜安 拓、「情報通信審議会関係者座談会ー情報通信審議会のITU活動の抱負(その1)」、『ITUジャーナル』、32巻、8号、2002年8月、pp. 38～44。
- 原島博、「人の顔は何を語るかーコンピュータで探る」、『物学研究会』、2002年8月30日。
- 原島博、「VRは理解と発見のメディア」、『日本VR学会誌』、17巻、3号、2002年9月、pp. 32～33。
- 原島博、「コンピュータと顔」、『鷹友会デンタルフォーラム 特別講演』、2002年9月11日。
- 原島博、「いい顔になろうーコンピュータで探る顔の秘密ー」、2002年9月23日。(スタジオカヅキ)
- 原島博、「ダ・ヴィンチ科学の時代へ」、『ANDO 技報』、172巻、2002年10月、pp. 4～8。
- 原島博、「情報と空間のデザイン: 街の情報化を考える」、『東京大学 IML シンポジウム』、2002年10月9日。
- 原島博、「21世紀から22世紀への科学技術の行方」、『ANDO TECHNO2002 特別講演』、2002年10月10日。
- 石井 格・原島博・井上 勝雄・渡辺 慎二・前田 章・三井 博隆、「座談会 工学に欠かせぬ異分野の知恵」、『電気学会誌』、122巻、11号、2002年11月、pp. 770～774。
- 原島博・香山 リカ・千葉 レーダ・夏原 晃子、「東京は病んでいるか」、『第25回日本文化デザイン会議東京・丸の内』、2002年11月3日。
- 原島博、「人の顔は何を語るか」、2002年11月13日。(日産自動車テクニカルセンター)

原島博、「21世紀から22世紀への科学技術ーダ・ヴィンチ科学の時代へー」、2002年11月20日。(品川シルバー大学)

原島博、「いい顔とは何か」、『金葉会講演』、2002年11月22日。

原島博・佐倉統・大戸天童・市村次夫、「何が街を輝かすのか?」、『第65回J.I.フォーラム』、2002年11月27日。

原島博、「未来の日本人の顔を予測する」、『日本機械学会誌』、105巻、1009号、2002年12月、pp. 12~13。

原島博、「遊学散歩」、『デンタルダイヤモンド』、1号、2003年、pp. 162~167。

原島博、「人生にとって美とは何かー顔における美」、『東洋英和生涯教育講座』、2003年1月8日。

原島博、「人生にとって美とは何かー科学における美ー」、『東洋英和生涯教育講座』、2003年1月16日。

三橋順子・蔦森樹・三枝みづき・黒田まゆみ・原島博、「男の顔、女の顔」、『日本顔学会シンポジウム顔』、2003年2月25日。

原島博、「いい顔になるための顔訓13ヶ条」、『2003 歯の健康シンポジウム 日本歯科医師会』、2003年3月1日。

原島博、「研究最前線からのメッセージー100年後の未来、人の顔は変わるの?」、『ジオ・ワールド』、5巻、14号、2003年4月。

原島博、「いい笑顔ーコンピュータで探るー」、『日本補綴歯科学会雑誌』、47巻、109th Special Issue号、2003年5月、33pp.。

原島博・海原純子、「心の持ち方で、顔は変わる!」、『PHPスペシャル Monthly6』、2003年6月。

原島博、「知的画像符号化から顔学、そしてダ・ヴィンチ科学へ」、『倉田奨励金35年の歩み』、2003年6月、pp. 23~24。

原島博、「顔学でみる歯と顔のいい関係、朝昼晩 歯と歯みがきを科学する」、『デジタルマガジン』、156巻、4号、2003年7月、pp. 2~4。

原島博、「眉の太さと小顔メイク 変化が映す女性の生き方」、『朝日新聞(夕刊)3面』、2003年11月26日。

原島博、「コピー・ロボットはお好きですか?ー「かけがえのない」ものと「かけがえのある」ものを考える」、『情報通信ジャーナル』、22巻、1号、2004年1月、pp. 12~13。

原島博、「続・テレコムインタビュー情報通信と私(156):ダ・ヴィンチ科学がひらくヒューマンコミュニケーションの未来の扉. 人生を楽しくするネット社会の実現が僕の夢です」、『情報通信ジャーナル』、22巻、2号、2004年2月、pp. 34~35。

原島博、「平均顔の世界①:銀行員の顔とプロレスラーの顔」、『Nature Interface』、19号、2004年2月、pp. 62~63。

原島博・星野幸夫、「対談ーNECソフトが描くバイオメトリクス未来」、『IT's VALWAY, Spring2004』、15号、2004年4月、pp. 3~5。

原島博、「平均顔の世界② Jリーグの顔とプロ野球の顔」、『NATURE INTERFACE』、20号、2004年4月、pp. 60~61。

原島博、「退任挨拶」、『学内広報』、1288号、2004年4月14日、21pp.。

原島博、「コンテンツ人材育成 東大も今秋からプロデューサー、技術開発者の育成に乗り出す」、『NEW MEDIA』、252号、2004年5月、15pp.。

原島博、「美男・美女に映るテレビ電話は詐欺なのだろうか？－「ありのまま」の通信から「気持ちをよくする」通信へ」、『情報通信ジャーナル』、22 巻、5 号、2004 年 5 月、pp. 10～11。

原島博、「あなたも今日からできる！「いい顔」になる秘訣、教えます」、『ひまわり』、40 巻、23 号、2004 年 5 月、23pp.。

原島博、「CG アイドルは不気味？それとも魅力的？」、『act』、1 巻、2004 年 5 月、pp. 14～15。

吉見 俊哉・原島博・港 千尋、「座談会 ネットワーク知の創造『社会情報学ハンドブック』の刊行に寄せて」、33 巻、6 号、2004 年 6 月、東京大学出版会、pp. 1～18。

原島博、「客室乗務員の顔と局アナの顔」、『NATURE INTERFACE』、(『平均顔の世界③』)、21 巻、2004 年 6 月、pp. 54～55。

原島・苗村研究室、「現場訪問記 東京大学 原島・苗村研究室」、『映像情報メディア学会誌』、58 巻、7 号、2004 年 7 月、pp. 920～923。

原島博、「東大が産業連携のプログラム開講 国際競争力のあるコンテンツ育成へ」、2004 年 7 月 3 日。(民間放送、4 面)

原島博、「顔学への招待」、『中 1Challenge 国・数・英・理・社』、(『難関私立中高一貫講座』)、2004 年 8 月、進研ゼミ、pp. 26～27。

志水 彰・原島博・井上 宏・角辻 豊、「心とカラダとキレイに効く「笑顔」の効用」、『美的』、14 巻、7 号、2004 年 8 月、pp. 86～93。

原島博、「映画スターの顔とテレビアイドルの顔」、『NATURE INTERFACE』、(『平均顔の世界④』)、22 巻、2004 年 8 月、pp. 50～51。

原島博、「「顔」で大人らしさを出すには」、『週刊 東京大学新聞』、2004 年 8 月 3 日、4 面。

原島博、「どうすれば街の人が「いい顔」になるのだろうか？」、『情報通信ジャーナル』、22 巻、9 号、2004 年 9 月、pp. 24～25。

原島博、「いい顔はいい関係から生まれます」、『MOM』、162 巻、2004 年 10 月、pp. 10～11。

原島博、「ミス日本と女性研究員の顔」、『NATURE INTERFACE』、(『平均顔の世界⑤』)、23 巻、2004 年 10 月、pp. 52～53。

原島博、「IT(情報通信技術)は文化の基盤となるか？」、『情報通信シンポジウム 2004 基調講演、東海情報通信懇談会』、(『情報通信 東海 特集Ⅱ』)、172 巻、2004 年 10 月、pp. 11～14。

その他一般向け

原島博・東比古・沢 静夫・かづき れいこ、「顔」、『「顔と心と体」研究会公開講座』、2000 年 11 月、原島 博、百 東比古、町沢 静夫、かづき れいこ: ``顔', 「顔と心と体」研究会公開講座(2000.11)。

廣井 脩 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

災害情報の研究

地震・噴火・台風など自然災害における、警報や避難命令などの災害情報の伝達実態と、地域住民の生命の安全を確保するための災害情報のあり方を研究している。また、避難など災害時の人間行動、災害報道の実態と問題点、住民の間で広がる流言などの分析も同時並行的に行ってきた。現在は、IT社会の急速な進展にともなう防災情報システムの発達の実態と問題点、および阪神・淡路大震災後に急速に変わりつつある災害情報の内容検討とその伝達方法、たとえば、余震情報や活断層の長期評価などの地震関連情報、および東海地震が切迫したときに出される観測情報、注意情報、地震予知情報などを、市民にどのように伝え、防災対策にどう活用すべきかについて多角的に調査研究している。

高度情報社会における社会問題の研究

上記の研究と平行して、高度情報社会の進展につれて顕在化してきた情報システムの脆弱性や、電磁波障害、紙ゴミ問題など新たな環境問題の出現といった、いわば情報化社会の負の側面についての分析と、それを克服するための方策について研究を行っている。

事故に関するデータベースの作成とホームページによる一般公開

自然災害や大規模事故に関する写真を中心としたデータベースを作成し、ホームページによって一般公開している。このデータベースは、<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/>に掲載してある。その詳細は後述する。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

廣井 脩、『情報通信と社会心理』、2000年、北樹出版。

廣井 脩、「過密空間における震災時の人間行動」、『0824104』、2000年3月。(文部科学省研究費・特定領域研究・計画研究成果報告書)

廣井 脩、『流言とデマの社会学』、2001年8月20日、文春新書、225pp.。

廣井 脩、「危機管理としての地震防災」、『科学』、9月号、2003年、岩波書店、12pp. pp. 940～951。

廣井 脩、『災害情報と社会心理』、2003年、北樹出版。

廣井 脩・黒田洋司・大西勝也・川端信正・中村信郎、「東海地震の地震防災強化地域市町村における地震防災対策の現状と課題」、2004年、人と防災未来センター、31pp.。URL:http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/index-genzai_no_sigoto-jisin_joho-hitobo-tokai-kyoka-chiiki-chosa.pdf

廣井 脩、「新潟県中越地震は何を教えたかー情報伝達に携帯メールが威力」、『エコノミスト』、2005年1月11日、pp. 46～49。

論文等

廣井 脩、「災害の予知と防災対策」、『地質と調査』、第2号、2000年、土木春秋、p.1pp. 巻頭言 p. 1。

廣井 脩、「都市直下地震と災害情報(市民のための情報システムを)」、『自主防災』、2000年2月。

廣井 脩、「JCO 臨界事故スクランブル的発想が必要だ」、『広報』、2000年3月、pp. 24～27。
URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun309-1.pdf

廣井 脩、「市民はメディアをどう評価したか東海村臨界事故についての調査研究から」、『新聞研究』、2000年4月、pp. 31～35。URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun311-1.pdf

廣井 脩、「防災情報では」、『自然災害科学』、18 巻、4 号、2000 年 4 月、pp. 411～413。URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun312-1.pdf

廣井 脩、「海岸防災を考える」、『海岸特集:巨大災害対策』、2000 年 6 月、全国海岸協会。
URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun319-1.pdf(平成 12 年)

廣井 脩、「インターネットと災害情報」、『東京大学社会情報研究所調査紀要』、57 号、2001 年。

廣井 脩、三上俊治、田中淳、中村功、中森広道、八木絵香、関谷直也、「1999 年 JCO 臨界事故における情報伝達と住民の対応」、『社会情報研究所調査紀要』、15 号号、2001 年 3 月 30 日、pp. 237～406。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩、「東海地震関連情報と防災対応」、『東海地震-その新発見-』、(『月刊地球号外』)、33 号、2001 年 6 月 1 日、海洋出版、pp. 217～225。URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun327-1.pdf

廣井 脩、「土砂災害と情報伝達」、『砂防と治水特集:危機管理』、2001 年 8 月。

廣井 脩、「座談会:地震災害にどう備えるか」、『Science&Technology Journal』、2001 年 9 月。

廣井 脩、「巨大地震と自動車」、『高速道路と自動車』、44 巻、9 号、2001 年 9 月。URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun329-1.pdf

廣井 脩・中村功・中森広道・松尾一郎・森岡千穂、「都市水害における住民心理と情報伝達」、『東京大学社会情報研究所調査紀要』、16 号、2001 年 10 月 16 日、pp. 1～93。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩、「災害時に人はどのように行動するのか」、『第 15 回大学と科学公開シンポジウムここまでわかった都市直下地震』、2001 年 11 月。

廣井 脩、「IT 社会と消防の情報化」、『消防科学と情報』、67 号、2001 年 12 月、消防科学総合センター、pp. 38～50。

廣井 脩、「インターネットの効用」、『ダム水源地ネット』、2002 年 2 月、ダム水源地環境整備センター。
URL:http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-ronbun_shu-ronbun333-1.pdf

廣井 脩、「2000 年有珠山噴火における災害情報の伝達と住民の対応」、『社会情報研究所 調査研究紀要』、18 巻、20021031、2002 年 10 月 31 日、社会情報研究所、pp. 1～194。

廣井 脩、「2001 年芸予地震における住民の対応と災害情報の伝達」、『社会情報研究所 調査研究紀要』、2002 年 10 月 31 日、社会情報研究所、pp. 195～278。

関谷直也、大西勝也、廣井脩、「2001 年 BSE(狂牛病)の社会的影響と対策」、『東京大学社会情報研究所調査紀要』、19 巻、2003 年 3 月 25 日、pp. 231～362。

廣井 脩、市澤成介、村中明、桜井美菜子、松尾一郎、柏木才介、花原英徳、中森広道、中村功、関谷直也、宇田川真之、田中淳、辻本 篤、鄭秀娟、「2000 年東海豪雨災害における災害情報の伝達と住民の対応」、『東京大学社会情報研究所調査紀要』、19 巻、2003 年 3 月 25 日、pp. 1～230。

廣井 脩、「災害時の人間行動」、『学術月報』、7、2003 年 7 月、pp. 56～60。

廣井 脩、「情報化社会における危機管理」、『BE 建築設備』、2003 年 9 月、建築設備総合協会、pp. 25～30。

廣井 脩、「富士山噴火の社会的影響:火山灰被害の影響についての企業・行政調査—富士山噴火対策研究:噴火による社会経済的影響に 関する調査研究 その 1」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、20 号、2003 年 12 月 25 日、pp. 1～152。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩・中村功・中森広道、「富士火山と住民意識—富士山噴火対策研究：火山情報と避難体制の研究 その1—」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、20号、2003年12月25日、pp. 153～204。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩、「企業の地震対策はどうあるべきか」、『働く人の安全と健康』、5巻、9号、2004年、5pp. pp. 17～21。

関谷直也・中村功・中森広道・廣井脩・福田充、「富士山噴火の社会的影、火山防災情報と住民意識—2003年御殿場・富士吉田住民アンケート調査より—、ハザードマップを解剖する、自治体における火山防災対策の現状—2003年火山周辺自治」、『月刊地球『富士火山の総合的研究』』、2004年、37pp. pp. 162～198。(p162-168, p169-174, p186-192, p193-198)

廣井 脩・田中淳・中村功・宇田川真之・中森広道・関谷直也・馬越直子、「2003年5月26日宮城県沖の地震等における住民の行動に関する調査報告書について」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21号、2004年3月15日、pp. 1～138。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩・中村功・中村信郎・中森広道、「2003年7月「宮城県北部を震源とする地震」における住民の対応と災害情報の伝達」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21号、2004年3月25日、pp. 139～198。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩・田中淳・関谷直也・木村拓郎・馬越直子・宇田川真之、「火山災害の長期的影響：雲仙普賢岳、有珠山、三宅島雄山の比較研究—富士山噴火対策研究：火山情報と避難体制の研究 その2—」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』21号』、21号、2004年3月25日、pp. 199～305。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩、「防災情報システムの現在と課題—安全情報に焦点をあてて—」、『地域政策研究』、27号、2004年6月、財団法人 地方自治研究機構発行、pp. 21～30。

廣井 脩、「地方自治体の危機管理」、『自治フォーラム』、6、2004年6月、自治研修協会、pp. 4～11。

廣井 脩、「富士山ハザードマップと防災対策」、『広報ぼうさい』、22号、2004年7月、p7pp. 。

廣井 脩、「富士山ハザードマップと防災対策」、『広報ぼうさい』、22号、7、2004年7月26日、内閣府監修、p. 7。

廣井 脩、「風評被害の実態と対策」、『公衆衛生』、68巻、10月号、2004年10月、医学書院、5pp. pp. 793(41)～798(46)。

関谷直也・廣井脩、「富士山噴火の社会的影響：火山灰被害の影響についての富士山周辺製造業郵送調査—富士山噴火対策研究：噴火による社会経済的影響に関する調査研究 その2—」、『情報学研究 調査報告編』、22号、2005年1月31日、東京大学情報学環。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

池谷浩・國友優・中森広道・関谷直也・中村功・宇田川真之・廣井脩、「2003年7月水俣市土石流災害における災害情報の伝達と住民の対応」、『情報学研究 調査報告編』、22号、2005年1月31日、東京大学情報学環。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

中村功・福田充・廣井脩、「自治体における火山噴火対策の現状—富士山噴火対策研究：火山情報と避難体制の研究 その4—」、『情報学研究 調査報告編』、22号、2005年1月31日、東京大学情報学環、pp. 241～282。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩・中村功・中森広道・福田充、「自治体における津波防災対策の現状」、『情報学研究 調査報告編』、22号、2005年1月31日、東京大学情報学環、pp. 283～339。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroii/index-houkokusho-rist.htm>

廣井 脩、「阪神・淡路大震災後、新潟県中越地震等の情報伝達の状況と今後の課題」、『近代消防』、臨時増刊号、2005年2月、pp. 1～5。

廣井 脩・中村功・福田充・中森広道・関谷直也・三上俊治・松尾一郎・宇田川真之、「2003 年十勝沖地震における津波避難行動—住民聞き取り調査を中心に—」、『情報学研究 調査研究編』、23 号、2005 年 3 月 31 日、東京大学情報学環、pp. 1～162。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/index-houkokusho-rist.htm>

廣井脩・中村功・田中淳・福田充・中森広道・関谷直也・森岡千穂、「2004 年7月新潟・福島豪雨水害における住民行動と災害情報の伝達」、『情報学研究 調査報告編』、23 号、2005 年 3 月 31 日、東京大学情報学環 情報学研究 調査研究編、pp. 163～286。URL:<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~hiroi/index-houkokusho-rist.htm>

その他

廣井 脩, "The Debris Flow in Hachimantai 1997 and Dissemination of Disaster Information," *共同執筆 Review of Media Information and Society*, no.5, 2000, The Institute of Socio-Information and Communication Studies.

廣井 脩, "2000 The Debris Flow in Izumi, 1997 and Dissemination of Disaster Information," *共同執筆 Review of Media Information and Society, Vol.6 The Institute of Socio-Information and Communication Studies*, 6, 2000, The Institute of Socio-Information and Communication Studies.

廣井 脩, "The Sociological and Economical Impact on Earthquake Disaster Compared between Japan and Taiwan," *共同執筆 Review of Media Information and Society*, 6, 2000, The Institute of Socio-Information and Communication Studies.

廣井 脩, "A Comparison of Reconstruction and Social Policies Between Earthquake Disasters in Taiwan and Japan," *共同執筆 Review of Media Information and Society*, no.6, 2002, The Institute of Socio-Information and Communication Studies.

一般向けエッセイ等

廣井 脩、「論点 「豪雨災害の教訓」」、『読売新聞』、2004 年 7 月 30 日。(11 面)

山口 泰 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

曲面形状処理

CAD/CAD/CAE やコンピュータグラフィクスにおいて形状情報は欠かせない要素である。特に現実世界には複雑かつ滑らかな曲面が、自然物はもちろん、自動車や飛行機などの人工物にも存在している。計算機によって曲面形状を処理するために、曲面の微分幾何学的な性質を利用することが有効であり、様々な手法を研究している。たとえば、多項式曲面の微分幾何学量の計算法、曲面間の交線計算、細分割曲面の評価法などを提案している

絵画風描画手法

これまでコンピュータグラフィクスは仮想世界を現実的(写實的)に描く手法として利用されてきた。しかし、エンターテインメントの分野では現実世界や仮想世界の風景を絵画風の画像として描くことが求められている。この絵画風の画像生成手法について研究している。これまでに、鉛筆画風の静止画像生成法、油彩画風の静止画ならびに動画生成法などを提案している

自然画像の視覚復号型暗号

視覚復号型暗号は、計算機を用いることなく、人間の視覚によって復号可能な暗号である。具体的には2枚の透明シートを重ねると、それまで見えなかった画像や文字が現れるようなものが相当する。これまでに提案された視覚復号型暗号は、主に文字情報などの2値画像を対象としており、現実世界の自然画像を暗号化するには適さなかった。そこで、グレースケールやカラーの自然画像を暗号化する手法について研究している

研究業績(2000～2004年度)

著書等

山口泰、「画像生成の手法」、田村秀行編、『コンピュータ画像処理』、2002年12月20日、オーム社、v+336pp. 第9章 pp. 287～324。

山口泰、「曲面形状処理における微分量計算とその利用」、『SCAT Technical Journal - Telecom Frontier』、39号、2003年、財団法人 テレコム先端技術研究支援センター、pp. 43～52。

山口泰、「実世界データのための次元間横断処理」、『平成14～16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書』、2005年2月、91pp.。

論文等

Yasushi Yamaguchi, "Differential Properties at Singular Points of Parametric Surfaces," P. Brunet, C. Hoffmann and D. Roller eds., *CAD-Tools and Algorithms for Product Design*, 2000, Berlin Heidelberg, Springer, viii+288pp. pp. 211-221.【査読有】

M. Shiraishi and Y. Yamaguchi, "An Algorithm For Automatic Painterly Rendering Based On Local Image Approximation," *Proc. of Symposium on Non-Photorealistic Animation and Rendering*, 2000, pp. 53-58.【査読有】

T. Itoh, Y. Yamaguchi and K. Koyamada, "Fast Isosurface Generation Using the Cell-Edge Centered Propagation Algorithm," *Lecture Notes in Computer Science, 1940*, 2000, Berlin Heidelberg, Springer, XV+595pp. pp. 547-556.【査読有】

M. Shiraishi and Y. Yamaguchi, "Adaptive Parameter Control for Image Moment-Based Painterly Rendering," 2000, Proc. of 9th Intl. Conf. on Geometry and Graphics, pp. 389-393.【査読有】

T. Itoh, Y. Yamaguchi and K. Koyamada, "Fast Isosurface Generation Using the Volume Thinning Algorithm," *IEEE Trans. on Visualization and Computer Graphics*, 7, no.1, 2001, IEEE, pp. 32-46.【査読有】

Y. Yamaguchi, R. Kamiyama and F. Kimura, "Surface-Surface Intersection with Critical Point Detection Based on Bezier Normal Vector Surfaces," *Geometric Modeling: Theoretical and Computational Basis Towards Advanced CAD Applications*, 2001, Kluwer Academic Publishers, xi+372pp. pp. 287-308.【査読有】

山口泰・辻本徳介・鈴木宏正、「狭山事件の足跡鑑定について」、『情報処理学会研究報告』、2001巻、35号、2001年、情報処理学会、pp. 31～36。

中嶋瑞穂・山口泰、「自然画像のための拡張型視覚的暗号の生成法」、『Visual Computing - グラフィクスとCAD 合同シンポジウム論文集』、2001年、画像電子学会-情報処理学会、pp. 55～60。【査読有】

寺沢幹雄・山口泰・小高金次、「Web2.5Dのための実時間視点モーフィング表示処理」、『Visual Computing - グラフィクスとCAD 合同シンポジウム論文集』、2001年、画像電子学会-情報処理学会、pp. 127～131。【査読有】

山口泰、「東京大学教養学部広域科学科におけるCG教育」、『図学研究』、35巻、1号、2001年、日本図学会、pp. 28～29。【査読有】

伊藤貴之・山口泰・小山田耕二、「等値面生成のための高速ポリゴン構築方法」、『情報処理学会論文誌』、42 巻、5 号、2001 年 5 月、情報処理学会、pp. 1076~1083。【査読有】

Yasushi Yamaguchi, "A Basic Evaluation Method of Subdivision Surfaces," *Journal for Geometry and Graphics*, 5, no.2, 2002, Heldermann Verlag, pp. 145-155。【査読有】

M. Nakajima and Y. Yamaguchi, "Extended Visual Cryptography for Naotural Images," *Journal of WSCG*, 10, no.2, 2002, pp. 303-310。【査読有】

M. Terasawa, Y. Yamaguchi and K. Odaka, "Real time View Morphing for Web Applications," *Journal of WSCG*, 10, no.2, 2002, pp. 445-452。【査読有】

白石路雄・山口泰、「3 次元的な傾斜を用いた絵画風モーフィング」、『情報技術レターズ』、1 巻、2002 年、情報処理学会-電子情報通信学会情報・システムソサエティ、pp. 169~170。【査読有】

M. Nakajima and Y. Yamaguchi, "A Dithering Technique for Extended Visual Cryptography," *Proc. of 10th Intl. Conf. on Geometry and Graphics*, 2002, pp. 312-317。【査読有】

中嶋瑞穂・山口 泰、「位置誤差に対して頑健な連続階調拡張型視覚的暗号」、『Visual Computing - グラフィクスと CAD 合同シンポジウム論文集』、2002 年、画像電子学会-情報処理学会、pp. 31~36。【査読有】

白石路雄・山口 泰、「絵画風画像モーフィング」、『Visual Computing - グラフィクスと CAD 合同シンポジウム論文集』、2002 年、画像電子学会-情報処理学会、pp. 147~152。【査読有】

中嶋瑞穂・山口 泰、「物理的な実現性を考慮した自然画像のための拡張視覚復号型秘密分散法」、『暗号と情報セキュリティシンポジウム予稿集』、2003 年、電子情報通信学会、pp. 1083~1088。

矢野類子・山口 泰、「画用紙の風合いを持った鉛筆画風濃淡画像の描写法」、『2003 年度大会(関東)学術講演論文集』、2003 年、日本図学会、pp. 11~14。

矢野類子・山口 泰、「画用紙テクスチャを反映した鉛筆画風画像生成法」、『Visual Computing - グラフィクスと CAD 合同シンポジウム論文集』、2003 年、画像電子学会-情報処理学会、pp. 69~74。【査読有】

大木嘉人・山口 泰、「操作履歴を利用した対話型チュートリアル制作支援システム」、『情報科学技術フォーラム 2003 講演論文集(第 3 分冊)』、2003 年、情報処理学会-電子情報通信学会 情報・システムソサエティ、pp. 468~469。

M. Nakajima and Y. Yamaguchi, "Registration-Tolerant Extended Visual Cryptography," *Proc. of Electronic Imaging: the Human Vision and Electronic Imaging VIII*, 5007-49, 2003.1, IS&T/SPIE, pp. 473-484。【査読有】

白石路雄・山口 泰、「絵画風画像モーフィング」、『情報処理学会論文誌』、45 巻、2 号、2004 年、情報処理学会、pp. 659~667。【査読有】

R. Yano and Y. Yamaguchi, *Proc. of 11th Intl. Conf. on Geometry and Graphics*, 2004, pp. 405-410。【査読有】

鈴木賢次郎・横山ゆりか・金子知適・加藤道夫・安達裕之・山口 泰・高橋成雄、「学生による授業評価に基づいた図形科学講義の分析」、『図学研究』、38 巻、3 号、2004 年、日本図学会、pp. 9~15。【査読有】

M. Nakajima and Y. Yamaguchi, "Enhancing Registration Tolerance of Extended Visual Cryptography," *Journal of Electronic Imaging*, 13, no.3, 2004, pp. 654-662。【査読有】

Y. Yamaguchi and M. Nakajima, "Picture-Oriented Visual Cryptography," *Proc. of JICAST 2004*, 2004, pp. 117-124。【査読有】

鈴木賢次郎・横山ゆりか・金子知適・加藤道夫・安達裕之・山口 泰・高橋成雄、「図(形科)学についての学生による授業評価」、『2004 年度大会学術講演論文集』、2004 年、日本図学会、pp. 51~56。

M. Nakajima and Y. Yamaguchi, "Device-dependent color neutralization method," *Proc. of Electronic Imaging: Color Imaging X*, 2005.1, IS&T/ SPIE, pp. 581-588.【査読有】

日誌遼子・藤代一成・山口泰、「特徴に基づく絵画風画像の補完」、『第 67 回全国大会講演論文集(4)』、2005 年 3 月、情報処理学会、pp. 175~176。

その他

M. Nakajima and Y. Yamaguchi, "Picture Illusion by Overlap," *SIGGRAPH 2004 Poster Session*, 2004.

吉見 俊哉 教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

戦争とメディア: 両世界大戦期におけるプロパガンダと情報流通に関する歴史社会学的研究

本研究は、20 世紀における戦争とメディアの緊密な関係を視野に収めつつ、情報学環が社会情報研究所の時代から受け継いできた重要な 2 つの戦時プロパガンダ関係の資料のコレクションについてのデジタル・アーカイブの構築を大きな目的としている。これらの 2 つのコレクションとは、①第一次大戦宣伝ポスター約 660 枚、及び、②内閣情報部の満州・フィリピンにおける宣伝資料の 2 つであり、いずれも日本国内では例を見ない貴重なものである。吉見研究室において組織された研究チームは、社会情報研究所時代から、これらの資料の修復と保存状態の改善に努め、上記資料を広く公開すべくデジタル・アーカイブの構築を進めてきた。このような基礎作業の上に立って、本研究では、これらの資料を関連諸資料と結びつけ、それらについて総合的に分析する学際的研究を、アーカイブそのものに組み込む仕方で展開している。

20 世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発

本研究は、冷戦期を通じた東アジアでのアメリカ的価値の受容や反発について、文化的な次元から比較歴史研究を進めるものである。その際、とりわけ米国の軍事的・経済的・文化的影響が大きな意味を持った日本本土、沖縄、韓国、台湾、フィリピンなどに焦点を当て、映画、テレビ、マンガ、音楽などから都市空間や基地文化までの大衆文化のレベルでの変化を、一方では政治的な次元と文化・メディアの次元の関係を精密に見据えながら、他方では東アジア全域を射程に収めて明らかにする。とりわけ本研究では、戦後日本及び東アジアの大衆意識のなかでの「アメリカ」の存在、アメリカ的文化商品の受容の過程を、韓国、台湾、フィリピンなどを中心に東南アジアまでの横断的な広がりなかで、また文化と軍事・経済的な覇権の構造を結びつけて明らかにしようとしている。

多言語対話型のデジタル百科全書の構築を通じた情報知の構造化

本研究は、デジタル・アーカイブの諸技術を基盤にしつつ、情報知を中核にした新しい多言語対話型の百科全書の構築とその大学教育のなかでの応用的展開を目指している。すなわちまず、情報学環教員が中核的に関与してきた『情報学事典』(弘文堂)、『社会情報学ハンドブック』(東京大学出版会)などの出版物のデジタルデータを、百科全書構築の実験素材として利用し、これらのデータを基礎にユビキタス社会における大学教育のモデルを示す知識形成実験を進めている。同時に、英国の *Theory, Culture and Society* 誌を中心とした New Encyclopedia Project、及び National Singapore 大学、Seoul National 大学などと協力しつつ、情報・言語の基礎理論、知覚情報、ジャーナリズム、メディア文化、情報行動、情報経済、情報法・政策などの中核的な諸領域についての知の対話的形成とその構造化を可能にするプラットフォーム作りを進めている。

研究業績(2000~2004 年度)

著書等

吉見俊哉、『カルチュラル・スタディーズ』、2000 年、岩波書店、132pp.。

- 吉見俊哉、『メディア・スタディーズ』、2000年、せりか書房、309pp.。
- 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉、『内破する知』、2000年、東京大学出版会、317pp.。
- 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉、「言説：切り裂く」、(『越境する知 第3巻』)、2000年、東京大学出版会、285pp.。
- 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉、「装置：壊し築く」、(『越境する知 第4巻』)、2000年、東京大学出版会、317pp.。
- 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉、「文化の市場：交通する」、(『越境する知 第5巻』)、2000年、東京大学出版会、304pp.。
- クロード・S・フィッシャー、吉見俊哉、松田美佐 and 片岡みい子 tr., 『電話するアメリカ——テレフォン・ネットワークの社会史』、2000、NTT出版、484pp.
- 吉見俊哉、「20世紀の定義」、『環境と人間』、(『20世紀の定義』)、9巻、2000年、岩波書店、pp. 17~32。
- 吉見俊哉、「本のかわりに、何が文化的公共圏を支えるのか?」、『別冊 本とコンピュータ』、4巻、2000年、トランスアート、pp. 11~16。
- 吉見俊哉、「グローバルシティの変貌」、『現代思想』、2000年10月、pp. 54~61。
- 姜尚中・吉見俊哉、『グローバル化の遠近法』、2001年、岩波書店、230pp.。
- 吉見俊哉・水越伸、『改訂版 メディア論』、2001年、放送大学教育振興会、199pp.。
- 吉見俊哉、『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』、2001年、講談社、249pp.。
- 吉見俊哉、「市民参加型社会が始まっている——愛知万博の「迷走」にく未来>を見る」、『世界』、2001年1月、岩波書店、pp. 269~278。
- 成田龍一・吉見俊哉、『20世紀日本の思想』、2002年、作品社、196pp.。
- 吉見俊哉、『1930年代のメディアと身体』、2002年、青弓社、255pp.。
- 小森陽一・千野香織・酒井直樹・成田龍一・島藺進・吉見俊哉、「拡大するモダニティ」、『近代日本文化史6』、2002年、岩波書店、307pp.。
- 小森陽一・千野香織・酒井直樹・成田龍一・島藺進・吉見俊哉、小森陽一・千野香織・酒井直樹・成田龍一・島藺進・吉見俊哉編、『冷戦体制と資本の文化』、(『近代日本文化史9』)、2002年、岩波書店、286pp.。
- 北川高嗣・須藤修・西垣通・浜田純一・吉見俊哉・米本昌平、『情報学事典』、2002年6月、弘文堂、1140pp.。
- 吉見俊哉、『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』、2003年、人文書院、377pp.。
- 水越伸・吉見俊哉、『メディア・プラクティス』、2003年、メディア・プラクティス、286pp.。
- 青木保・姜尚中・小杉泰・坂元ひろ子・莫邦富・山室信一・吉見俊哉・四方田犬彦、「市場」、『アジア新世紀5』、2003年、岩波書店、233pp.。
- 青木保・姜尚中・小杉泰・坂元ひろ子・莫邦富・山室信一・吉見俊哉・四方田犬彦、「構想」、『アジア新世紀8』、2003年、岩波書店、257pp.。
- 吉見俊哉、『韓国語版 博覧会の政治学』、2003年、Nonhyung Publishing Co.、399pp.。

Yoshimi, Shunya(責任編集), "Americanism," *Inter-Asia Cultural Studies*, 14, no.3, 2003, Routledge (London), 157pp.

ロジャー・シルバーストーン、吉見俊哉・伊藤守・土橋臣吾訳、『なぜメディア研究か』、2003年、せりか書房、350pp.。

キャロリン・マーヴィン、吉見俊哉、水越伸 and 伊藤昌亮 tr., *古いメディアが新しかった時*, 2003, 新曜社, 509pp.

Yoshimi, Shunya, "Television and Nationalism: Historical Change in the National Domestic TV Formation in Postwar Japan," *European Journal of Cultural Studies*, 6, no.4, 2003, European Journal of Cultural Studies, pp. 459-487. (sage)

吉見俊哉、「大学に何ができるのか」、花田達朗・広井脩編、『論争 いま、ジャーナリスト教育』、2003年、東京大学出版会、pp. 171~175。

吉見俊哉、『メディア文化論』、2004年、有斐閣、281pp.。

テッサ・モーリス=スズキ・吉見俊哉、『グローバリゼーションの文化政治』、2004年、平凡社、395pp.。

小田隆裕・柏木博・巽孝之・能登路雅子・松尾式之・吉見俊哉、『事典 現代のアメリカ』、2004年、大修館書店、1470pp.。

花田達朗・吉見俊哉、『社会情報学ハンドブック』、2004年、東京大学出版会、296pp.。

姜尚中・吉見俊哉、『韓国語版『グローバル化の遠近法』』、2004年、Yeesan Publishing Co., 256pp.。

吉見俊哉、「現代都市と文化研究——流動する都市と日常の文化実践」、園部雅久・和田清美編、『都市社会学入門』、2004年、文化書房博文社、pp. 169~197。

論文等

吉見俊哉、「運動会と学校空間」、杉本厚夫編、『体育教育を学ぶ人のために』、2000年、世界思想社。

Yoshimi, Shunya, "Consuming 'America': From Symbol to System," 2000, Chua Beng-Huat ed., *Consumption in Asia*, Routledge, pp. 202-224.

Yoshimi, Shunya, "The Cultural Politics of the Mass-Mediated Emperor System in Japan," 2000, Without Guarantees, P. Gilroy, L. Grossberg & A. McRobbie eds., Verso.

吉見俊哉、「National Body / National Ritual」、2000年4月、Yale University。(招待講演)

吉見俊哉、「Cultural Studies in Contemporary Japan」、2000年4月、台湾国立大学・台湾精華大学。(招待講演)

吉見俊哉、「『アメリカ』を欲望／忘却する戦後——基地と消費の屈折をめぐって」、『現代思想(総特集・戦後東アジアとアメリカの存在)』、29巻、9号、2001年、pp. 44~63。

吉見俊哉、「劇つくりの越境者」、西堂行人編、『如月小春は広場だった』、2001年、新宿書房、pp. 114~125。

吉見俊哉、「20年後の〈渋谷的なるもの〉をめぐって」、増田通二監修、『女の70年代:1969-1986 パルコポスター展』、2001年、ディスク・エム。

吉見俊哉、「『法廷』とナショナル・メディアの沈黙-」、VAWW-NET ジャパン編、『法廷』とナショナル・メディアの沈黙』、2001年、白澤社、pp. 176~193。

吉見俊哉、「グローバル化と脱-配置される空間」、『思想(特集・グローバル化の文化地政学)』、933号、2001年、pp. 45~70。

吉見俊哉, "America in Japan/Japan in Disneyfication: The Disney Image and the Transformation of 'America' in Contemporary Japan", *Janet Wasko et.al. eds., Dazzled by Disney ?*, 2001, Leicester University Press, pp. 160-181.

吉見俊哉, "Television and Nationalism in the Postwar Japan," 2001.5, Oregon University. (招待講演)

吉見俊哉, "Consuming 'America': Desire and Violence," 2001.5, Stanford University. (招待講演)

吉見俊哉, "Consuming 'America': Desire and Violence", 2001.5, National Singapore University.

吉見俊哉, 「日本のなかのアメリカについて考える」、『環 8号(特集「日米関係」再考)』、2002年、pp. 131~143。

吉見俊哉, 「メディア・イベントとしての『御成婚』」, 津金澤聡廣編編、『戦後日本のメディア・イベント』、2002年、世界思想社。

吉見俊哉, 「メディアとしての天皇制——占領から高度成長へ」, 網野善彦他編、『王を巡る視線』、(『天皇と王権を考える10』)、2002年、岩波書店。

Yoshimi, Shunya, "The Development of 'Newspaper Studies' as an Academic Discipline in the Discursive Space of 1930s Japan," *Social Science Japan Journal*, 15, no.2, 2002, Oxford University Press, pp. 199-214.

Yoshimi, Shunya, "Der Semiotische Raum des Modernen Tokio," *KultuR Revoltion*, 44, 2002, pp. 96-106.

Yoshimi, Shunya, "Consuming 'America': Der Kulturelle Konsum von Raumen und Identitäten im Heutigen Japan," *Historische Anthropologie, Bohlau*, 10, no.3, 2002, Historische Anthropologie, Bohlau.

吉見俊哉, 「欲望／忘却 「美國」的の日本戦後: 「基地」與「消費文化」的の錯綜關係」、『中外文学』、31巻、7号、2002年、台大外文系、pp. 63~90。

吉見俊哉, "Television and Nationalism in the Postwar Japan-," *Crossroad Cultural Studies Conference*, 2002.6, Tampere, Finland. (招待講演)

吉見俊哉, "The Locus of 'Journalism' as an Academic Discipline in the 1930s Japan," *Pre-conference for ICA(International Communication Association)*, 2002.7, Kangwon University, Korea. (主催)

吉見俊哉, 「活字と声の十字路としての『新聞』」、『印刷博物館『活字文明開化——本木昌造が築いた近代』』、2003年、凸版印刷・印刷博物館、pp. 132~139。

吉見俊哉, 「メディアの世紀 メディアの知」, 伊藤守・西垣通・正村俊之編、『パラダイムとしての社会情報学』、(『社会情報学への接近1』)、2003年、早稲田大学出版部、pp. 127~149。

吉見俊哉, 「現代メディアの知とは何か」、『AERA Mook No.96』、(『コミュニケーション学がわかる(』)、96巻、2003年、朝日新聞社、pp. 33~35。

Yoshimi, Shunya, "America' as Desire and Violence: Americanization in Postwar Japan and Asia during the Cold War," *Inter-Asia Cultural Studies*, 4, no.3, 2003.12, London, Routledge, pp. 433-450.

吉見 俊哉, 「テレビが家にやってきた」、『思想』、956号、2003年12月、岩波書店、pp. 26~47。

吉見俊哉, "Consuming 'America': Desire and Violence", *Pre-conference for Gwangju Biennale 2004*, 2003.12, Seoul National University. (招待講演)

吉見俊哉, 「現代日本のアメリカ化における「基地」と「消費」」, 庄司興吉編、『情報社会変動のなかのアメリカとアジア』、2004年、彩流社、pp. 107~136。

吉見俊哉、「グローバル化の多層的な解析のために」、『さまよえる近代』、2004年、平凡社、pp. 369～383。(アルジュン・アパデュライ)

吉見俊哉、「政治的身体をめぐる10の問いかけ」、伊藤守編、『文化の実践、文化の研究』、2004年、せりか書房、pp. 228～241。

吉見俊哉、「カルチュラル・タイフーンの現場から」、岩淵功一・多田治・田仲康博編、『沖縄に立ちすくむ』、2004年、せりか書房、pp. 151～157。

吉見俊哉, "Teaching Cultural Studies: University and Curricula in Japan," *Inter-Asia Cultural Studies Conference*, 2004.2, Center for Culture and Society, India.

吉見俊哉, "Information: Conceptual Trajectory and Local Contexts," *Problematizing Global Knowledge for New Encyclopedia Project*, 2004.4, National Singapore University.

吉見俊哉, "Americanism and Urban Space: Transformation of Colonial Memory," *Projector, Image, Intervention, Construction, Public Space*, 2004.9, Cultural Center, Caixa Forum, Barcelona. (招待講演)

吉見俊哉, "Tans-Asian Popular Culture and Inter-Asia Cultural Studies Project," *Asian Culture Symposium*, 2005.2, Gwangju, Korea. (National Culture Hall)

口頭発表等

吉見俊哉, "'America' as Desire and Violence: Consumption of 'America' in the postwar Japan and Asia in the Cold War," *Global Modernity and the Formation of Asian Popular Cultures: Americanization or Hybridization?*, 2005.2.22, Seongkonghoe University. (招待講演)

一般向け著書等

栗原彬・テッサ・モーリス＝スズキ・吉見俊哉、「グローバル化と多層的な公共圏」、『思想』、915号、2000年、pp. 88～112。

吉見俊哉、「才能ってのは執念だよ」、選書メチエ編集部編、『学問はおもしろい』、2001年、pp. 155～164。

岩崎稔・吉見俊哉・永野善子、「9・11から未来社会へ」、『神奈川大学評論』、40号、2001年、pp. 2～31。

五十嵐太郎・姜尚中・森川嘉一郎・吉見俊哉・浅田彰・磯崎新、「グローバル化の遠近法——東京の現在位置」、TNブロー編、『都市の変異』、2002年、NTT出版、pp. 298～336。

成田龍一・吉見俊哉・岩崎稔、「討論 戦争とメディア」、『現代思想』、2002年7月、pp. 46～96。

吉見俊哉、「問題意識を〈学問〉にしていく本当の『研究力』とは何か」、小森陽一編、『研究する意味』、2003年、東京書籍、pp. 218～244。

一般向けエッセイ等

如月小春・栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉、「知の越境と内破」、『UP』、332号、2000年、pp. 1～18。

石崎 雅人 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

コミュニケーション認知過程の解明

人と人とのインタラクションは、多くの場合、意図の言語化、言語からの意図の解読を基本とするコードモデルにより理解されている。しかし、会話分析などの研究により、インタラクションは、意図を協働的に作り上げる相互的な過程であり、インタラクションを構成する発話は、この相互的な過程を可能にする多くのリソースを含んでいることがわかってきている。本研究では、さまざまな手がかりが、どのように利用されているかを明らかにすることにより、インタラクションの仕組みを解明することを目的とする。

情報ナビゲーション

計算機の性能の向上、ネットワークの普及に伴い、WWW、電子ニュースなど大量の情報が利用できるようになってきている。しかし、情報が多くなればなるほど、ユーザが、欲しい情報を見つけるのが難しくなっている。また、ユーザは欲しい情報を言語化するのが難しい場合も少なくない。本研究ではユーザとのインタラクションを利用して、ユーザが欲しい情報を手に入れるのを支援することを目的とする。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

石崎雅人・伝康晴、『談話と対話』、2001年3月、東京大学出版会。

安西祐一郎・開一夫・石崎雅人、『情報と人間』、2004年12月、岩波書店。

論文等

岩本雅道・石崎雅人・國藤進、「ユーザの視点を考慮に入れた社会情報可視化システムの構築」、2001年、情報処理学会自然言語処理研究会、pp. 159～166。

小倉加奈代・石崎雅人、「チャット対話の話題推移に関する特徴分析」、『人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会』、2002年、pp. 13～20。

小倉加奈代・須藤由加・松永政幸・石崎雅人、「多レベルの知識を利用した課題遂行対話のためのセグメンテーション分割」、2002年、人工知能学会・言語音声理解と対話処理研究会、pp. 33～38。

石崎雅人、「コミュニケーション・コーパス」、杉山・下嶋・永田編、『ナレッジサイエンス』、2002年12月、紀伊国屋書店、pp. 98～105。

石崎雅人、「談話処理」、土屋・他編、『AI事典第2版』、2003年、共立出版、pp. 310～311。

石崎雅人、「タグ付きコーパスの共有化」、『日本語学』、22巻、2003年、明治書院、pp. 124～132。

Ogura, K., Masuda, T. and Ishizaki, M., "Building a New Internet Chat System for Sharing Timing Information," *Proceeding of the 4th SIGdial Workshop on Discourse and Dialogue*, 2003, pp. 97-104.【査読有】

小倉加奈代・石崎雅人、「チャット対話における関連発言同定のための表層情報の分析」、2003年、人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会、pp. 75～80。

益田武士・小倉加奈代・石崎雅人、「時間情報を共有可能なインターネットチャットシステムの構築」、2003年、人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会、pp. 35～40。

石崎雅人、「ATR対話DB・日本音響学会DB・ラベル付け・転記支援ツール」、小池・河野・田中・水谷・井出・鈴木・田辺編、『応用言語学事典』、2003年4月28日、研究社。

石崎雅人、「コミュニケーションの科学へ向けて」、『人工知能学会論文誌』、19 巻、4 号、2004 年、pp. 468～474。(依頼)

石崎雅人、「協同行為としてのコミュニケーション・内容分析」、吉見・花田編、『社会情学ハンドブック』、2004 年 3 月、東京大学出版。

口頭発表等

石崎雅人, "Panel on Paradigms, Corpora and Tools in Discourse and Dialogue Research," *The 4th SIGdial Workshop on Discourse and Dialogue*, 2003.7.6. (依頼・指定討論者)

石崎雅人、「対話における相互調整過程の単位について」、『科学研究費補助金学術創成研究費「言語理解と行動制御」公開シンポジウム』、2004 年 3 月 1 日。

石崎雅人、「話者の文化的基盤の顕現を誘発する談話データとは?」、『第 13 回社会言語科学会研究大会シンポジウム』、2004 年 3 月 27 日。(依頼・指定討論者)

石崎雅人、「An Agent Architecture for Multi-Party Dialogue」、『科学研究費補助金学術創成研究費「言語理解と行動制御」公開シンポジウム』、2005 年 3 月 10 日。

石崎雅人、「特徴分析によらない話者交替システムの可能性—予備的検討」、『科学研究費補助金学術創成研究費「言語理解と行動制御」公開シンポジウム』、2005 年 3 月 10 日。

その他一般向け

石崎雅人、『ロボット・テクノロジーよ日本を救え』、2003 年、ポプラ社、pp. 146～147。(取材原稿)

伊東 乾 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

研究業績(2000～2004 年度)

岡崎 毅 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

情報通信政策論(特に競争政策及び国際情報通信政策)

情報通信分野における競争政策の目的・役割とその具体的手法について、特に業法規制との関係に留意しつつ、あるべき姿を探る研究。及び、経済のグローバル化とインターネットによって、情報通信政策が国際的なものとならざる得ないことから不可避的に生ずる問題を考察し、解決策を探る研究。

情報に関わる法

情報通信分野を規制するいわゆる事業法。及び、情報に関する規制(例:個人情報保護規制、有害情報規制、著作権保護)と、情報公開、情報の自由な流通、表現の自由等に関わる法についての研究。

情報に関わる法と経済

情報通信政策・情報法の基礎となる経済理論と実際の政策・法の関係の研究。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

岡崎毅、吉見俊哉／花田達郎編、『社会情報学ハンドブック』、2004年3月19日、東京、日本、東京大学出版会、O+4pp. +0 国際情報通信政策 pp. 116～119。

論文等

岡崎毅, "The Impact of Competition on telecommunications in Japan," *Information Policy in Japan*, 2004.3, JICA.

岡崎毅、「電気通信分野における独占禁止法と事業法上の競争政策の関係について」、『第21回情報通信学会大会個人研究発表』、2004年6月20日、情報通信学会、浦安、東京、明海大学、1+3pp. +0。

北田 暁大 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したものと、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したものと、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗟う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したものと、『責任と正義』(2003年勁草書房)がある。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

吉見俊哉・レイモンド・ウィリアムズ・ロジャー・シルバーストーン・北田暁大・伊藤守・石田佐恵子・瓜生吉則・中村秀之・デビッド・モーレー・イエン・アング・難波功士・毛利嘉孝・リン・スピーゲル、『メディア・スタディーズ』、2000年4月、せりか書房。

大澤真幸・水内俊雄・若林幹夫・市野川容孝・原田正純・早瀬昇・イ・ヨンスク・塩崎紀子・佐藤学・北田暁大、『シリーズ越境する知 第4巻 装置：壊し築く』、2000年11月、東京大学出版会。

上野千鶴子・千田有紀・野口裕二・赤川学・飯田祐子・中谷文美・荻野美穂・加藤秀一・伊野真一・竹村和子・北田暁大、『構築主義とは何か』、2001年2月、勁草書房。

吉見俊哉・山口誠・成実弘至・本山謙二・小野俊太郎・北田暁大、『カルチュラル・スタディーズ』、2001年4月、講談社。

馬場康雄・北田暁大・竹中均・花野裕康・園田浩之・表弘一郎、『反＝理論のアクチュアリティ』、2001年5月、ナカニシヤ出版。

吉見俊哉・野上元・難波功士・高媛・北田暁大・真鍋昌賢・山口誠、『一九三〇年代のメディアと身体』、2002年3月、青弓社。

吉見俊哉・G・M・フルーグフェルダー・北田暁大・米山リサ・テッサ・モーリス＝スズキ・高媛・池田忍・金恵信、『岩波講座近代日本の文化史 第6巻 拡大するモダニティ』、2002年6月、岩波書店。

北田暁大、『広告都市・東京 その誕生と死』、2002年11月、廣済堂出版。

北田暁大、『責任と正義 リベラリズムの居場所』、2003年10月、勁草書房。

仲正昌樹・北田暁大・ウーヴェ・C・シュタイナー・高安啓介・古野拓・竹峰義和・原和之・藤本一勇・ヨッヘン・ヘーリツシュ、『美のポリティクス』、2003年12月、御茶ノ水書房。

北田暁大、『〈意味〉への抗い メディエーションの文化政治学』、2004年6月、せりか書房。

北田暁大、『嗟う日本の「ナショナリズム」』、2005年2月、NHK出版。

論文等

“Philosophy of/and Politics: Taking Rorty seriously and criticizing his criticism of the cultural left,” *Anglo-Japanese Academy Presentation Papers*, 2001.9, pp. 513-521.

北田暁大、「テレビの視線と裏りテラシー」、『言語』、31-13号、2002年12月、大修館書店、pp. 42~47。

北田暁大・古野拓、「RE-PLICATION:複製 :レプリカはアウラの衣を折り畳み、喪失の夢を見る」、『d/sign』、4号、2003年5月、太田出版、pp. 50~59。

北田暁大、「ポピュラー音楽にとって歌詞とは何か：歌詞をめぐる言説の修辞学／政治学」、『ユリイカ』、2003年6月、青土社、pp. 171~185。

北田暁大、「存在忘却? :「二つの構築主義」をめぐって」、『歴史学研究』、2003年8月、歴史学研究会、pp. 35~62。

北田暁大、「「かたち」の向こう側—陰謀する社会とメディア①:「かたち」としてのジャーナリズム」、『d/sign』、5号、2003年10月、太田出版、pp. 58~62。

北田暁大、「模造の弁明:広告の記号論とバルト」、『ユリイカ 総特集ロラン・バルト 臨時増刊号』、2003年12月、青土社、pp. 182~189。

北田暁大、「リアリティ・ワールドへようこそ:リアリティ・テレビの現実性」、『大航海』、49号、2003年12月、新書館、pp. 149～159。

北田暁大、「「かたち」の向こう側—陰謀する社会とメディア②:「ジャーナリズム」の考古学」、『d/sign』、6号、2004年1月、太田出版、pp. 146～150。

北田暁大、「自由と人格:Weber 自由論の再構成」、『東京大学社会情報研究所紀要』、66号、2004年2月、東京大学社会情報研究所、pp. 27～43。

北田暁大、「引用学—リファアーする／されることの社会学」、『ユリイカ』、2004年3月、青土社、pp. 110～120。

北田暁大、「「かたち」の向こう側—陰謀する社会とメディア③:賭金としての「事実」」、『d/sign』、7号、2004年5月、太田出版、pp. 150～154。

北田暁大、「ディスコースネットワーク—2000 第一回」、『InterCommunication』、50号、2004年11月、NTT出版、pp. 68～79。

北田暁大、「責任と正義:リベラリズムの居場所」、博士(社会情報学)学位論文、2004年11月、東京大学人文社会系研究科。【査読有】

北田暁大、「「ポスト構築主義」としての「プレ構築主義」」、『社会学評論』、Mar-55号、2004年12月、日本社会学会、pp. 281～297。

北田暁大、「ディスコースネットワーク—2000 第二回」、『InterCommunication』、51号、2005年1月、NTT出版、pp. 82～90。

口頭発表等

北田暁大、「「文化の社会学」と「文化の政治学」のあいだ」、2003年2月22日、関東社会学会、関東社会学会研究例会、慶応大学。

北田暁大、「現代日本社会への社会学的分析」、2003年11月29日、明治学院大学社会学部付属研究所 調査・研究部門、明治学院大学。(招待講演)

北田暁大、「ディスкурс(倫理)の構造転換」、『情報社会の倫理と設計についての学際的研究』、2004年3月12日、国際大学グローバルコミュニケーションセンター、国際大学グローバルコミュニケーションセンター。

北田暁大、「現代法理論と人権—社会学の立場から」、『現代法理論と人権』、2004年5月14日、日本法社会学会、立命館大学。

一般向け著書等

野村一夫・北田暁大他、『子犬に語る社会学・入門』、2003年11月、洋泉社。

見田宗介、北田暁大他、『AERA Mook 新版社会学がわかる』、2004年3月、朝日新聞社。

吉見俊哉・花田達朗・北田暁大他、『社会情報学ハンドブック』、2004年3月、東京大学出版会。

一般向けエッセイ等

北田暁大、「「正義する」人たちの「マンソン探し」」、『月刊民放』、2003年6月、pp. 34～35。

北田暁大、「境界の曖昧な雑誌広告」、『言語』、Sep-32号、2003年9月、大修館書店、pp. 44～49。

北田暁大、「嗤う日本のナショナリズム:「2ちゃんねる」に見るアイロニズムとロマン主義」、『世界』、720号、2003年11月、岩波書店、pp. 117~124。

北田暁大、「「届かなさ」の修辞学」、『10+1』、33号、2003年12月、INAX出版、pp. 150~162。

一般向け講演等

北田暁大・宮台真司、「保守の論理/アイロニーの美学 政治的ロマン主義の系譜学」、2004年6月19日、青山ブックセンター。

北田暁大・宮台真司、「空虚な時代のロマン主義」、2004年7月24日、池袋西武コミュニティカレッジ。

北田暁大・若林幹夫、「都市=メディアの交わる場所 空間の文化政治学」、2004年9月3日、三省堂書店。

北田暁大・宮台真司、「限界の思考 社会学と現代社会」、2004年9月23日、新宿紀伊国屋ホール。

北田暁大・東浩紀、「嗤う日本の「ナショナリズム」」、2005年3月30日、青山ブックセンター。

佐倉 統 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

研究業績(2000~2004年度)

著書等

佐倉統、『遺伝子 vs ミーム——教育・環境・民族対立——』、2001年、東京、廣済堂出版、230pp.。

佐倉統、『進化論という考えかた』、2002年、東京、講談社、210pp. +xii。(現代新書)

上田恵介・佐倉統監修、『動物たちの気になる行動(1)——食う・住む・生きる篇——』、2002年、東京、裳華房、viii+198pp.。(ポピュラー・サイエンス 243)

上田恵介・佐倉統監修、『動物たちの気になる行動(2)——恋愛・コミュニケーション篇——』、2002年、東京、裳華房、viii+192pp.。(ポピュラー・サイエンス 244)

佐倉統編、『未来の遺伝子——生命のはるかな旅——』、2002年、東京、東京書籍、238pp.。(安藤寿康、小長谷明彦、瀬名秀明、田沼靖一との対談集)

佐倉統・中島尚正・原島博編、『総合情報学』、2002年、東京、放送大学教育振興会、213pp.。

エドワード・O・ウィルソン, エドワード・O・ウィルソン ed., 佐倉 統 ed., *知の挑戦* 2002, 角川書店。

佐倉統、『人間論 4 知の構築力 第 5 章知識の進化』、2003年、東京、イムライフ経営大学院。

佐倉統、『進化論の挑戦(文庫版)』、2003年、東京、角川書店、7+246pp.。(角川ソフィア文庫、[同名、1997に加筆修正])

佐倉統編、『佐倉統が読む 進化論のエッセンス』、2003年、東京、トランスアート、145pp.。

R. アンジェ編、『ダーウィン文化論』、2004年、産業図書。

論文等

佐倉統、「ミームの乗り物としての老年期」、遠藤薫・山本和高編、『進化する老い、進化する社会——高齢化社会の科学とデザイン——』、2000年、東京、アグネ承風社、pp. 203～231。

佐倉統、「20世紀の生命科学——知の二重らせんの転回——」、柏木博・伊藤俊治・岡崎乾二郎・佐倉統・水越伸編、水野誠一監修、『20-21世紀 DESIGN INDEX』、2000年、東京、INAX出版、pp. 260～271。

佐倉統、「科学と非科学のはざままで——日本の霊長類学はどこまで日本的か？——」、杉山幸丸編、『霊長類生態学——環境と行動のダイナミズム——』、2000年、京都、京都大学学術出版会、pp. 427～449。【査読有】

佐倉統、「人工生命」、『政治学事典』、2000年、弘文堂。

「松井重吉『ダーウィンの人間論』書評」、『図書新聞』、2000年。

「E・O・ウィルソン『社会生物学(合本版)』書評」、『動物行動学会ニュースレター』、2000年。(動物行動学会ニュースレター)

佐倉統, "Does Darwin Meet Pokemon in Japan? The Concept and Connotation of 'Evolution'.,," *Society of Sociological Studies of Science/European Association for Sociology of Science and Technology Conference*, 2000, University of Vienna, Vienna.

佐倉統、「生物学の哲学はいかにして作られたか？——マイケル・ルース・インタビュー①」、『UP』、337号、2000年11月、東京、pp. 1～5。

佐倉統、「自然主義の時代がやってくる——マイケル・ルース・インタビュー②」、『UP』、338号、2000年12月、東京、pp. 11～15。

佐倉統、「人間への生物学的アプローチと社会・倫理——特集にあたって——」、『生物科学』、54号、2001年。【査読有】

佐倉統、「なぜ科学史を高校理科で教えるのか?」、『遺伝』、55巻、3号、2001年、pp. 30～34。

佐倉統、「科学技術と社会の未来」、『神奈川大学評論』、40号、2001年、pp. 73～82。

佐倉統、『複雑系の事典』、2001年、朝倉書店。(共編者)

佐倉統, "Pop' human biology in Japan," *Human Behavior and Evolution Society*, 2001, UCL., UCL..

佐倉統、「科学の哲学、科学と哲学——健全なる自然主義をめざして——」、『UP』、339号、2001年1月、pp. 34～39。

大瀧友里奈・大瀧雅寛・佐倉統、「衛生学的観点からみた江戸の水システムの評価」、『土木学会全国大会』、2001年9月、熊本大学、熊本大学。

佐倉統・長谷川一、「『知』の新たな公共化へ向けて」、『InterCommunication』、41号、2002年、pp. 76～89。

佐倉統、「横断的な知識とは何なのか?」、『InterCommunication』、42号、2002年、pp. 140～150。

佐倉統、「生命のようであるとはいかなることか?」、『InterCommunication』、43号、2002年、pp. 156～168。

佐倉統、『情報科学事典』、2002年、弘文堂。

佐倉統、「中学高校で進化をいかに教えるか」、『第4回日本進化学会』、2002年、中央大学、東京、東京。

大瀧友里奈・大瀧雅寛・佐倉統、「近代水道整備前の上水水質の分析」、『土木学会全国大会』、2002年9月、北海道大学、北海道大学。

大瀧友里奈・大瀧雅寛・佐倉統、「江戸型水システムの衛生学的評価」、『環境科学会』、2002年9月、立命館大学、立命館大学。

佐倉統、「生態学の歴史と環境倫理—科学と思想の交差点?」、『環境科学会シンポジウム「科学史からみた環境」』、2002年9月12日、東京大学、東京。

佐倉統、「人間にとってロボット(あるいは鉄腕アトム)とは何なのか?—フランケンシュタインと醜いアヒルの子—」、『人工知能学会誌』、18巻、3号、2003年、pp. 145~152。

佐倉統、「インターネット的学際知とは何なのか?—山形浩生との往復書簡—」、『InterCommunication』、44号、2003年、pp. 150~160。

佐倉統、「インターネット的学際知とは何なのか?—山形浩生との往復書簡2—」、『InterCommunication』、45号、2003年、pp. 165~172。

佐倉統、「アラマタ的な知のあり方をめぐって」、『InterCommunication』、46号、2003年、pp. 168~180。

佐倉統、「アラマタ的な知のあり方をめぐって②」、『InterCommunication』、47号、2003年、pp. 168~176。

佐倉統、『ごみの百科事典』、2003年、丸善。

佐倉統、「ミーム論の現状と問題点—非生命体進化理論の可能性—」、『第5回日本進化学会』、2003年、九州大学、福岡。

佐倉統、「ミーム論の現状と課題」、『経営情報学会東海支部会』、2003年。(招待講演)

Y. Otaki, M. Otaki, T. Aramaki and O. Sakura, "Residential Water Demand Analysis by Household Activities," 2003.4, Tenerife.【査読有】(CD-ROM,予稿集)

佐倉統、「生命とデザイン」、『世界グラフィックデザイン会議』、2003年10月、名古屋。

佐倉統、「STSとMOTの相互浸透:バイオメディカル産業の事例を通して」、『科学技術社会論学会(JSSTS)2003年度年次研究大会』、2003年11月。(コメンテータ)

佐倉統、「人間って何?」、『感動への科学 教員研修』、2003年11月、山口県教育研修所。(教員研修)

Y. Otaki, M. Otaki and O. Sakura, "Environmental History of Water Use in Tokyo," *The 3rd International Water History Association Conference, Cairo. /Proceedings of the 3rd International Water History Association Conference (CD-ROM)*, 2003.12, Alexandria .【査読有】

佐倉統、「文化のグローバリズムとローカリズム、そして国立大学法人化」、『InterCommunication』、48号、2004年、pp. 154~168。

佐倉統、「創造論・進化論・科学コミュニケーション—スコット講演へのコメント—」、『生物科学』、56巻、1号、2004年、pp. 20~22。【査読有】

佐倉統、「智慧の環・学びの府:せめぎあい、編みあがる情報知」、『東京大学大学院情報学環新生記念シンポジウム』、2004年6月12日。(司会)

佐倉統、「進化から見た老い」、2004年6月21日、山口県教育研修所。

佐倉統、「サイエンスコミュニケーションの横断知：市民と科学技術を結ぶ回路作り」、『サイエンスコミュニケーションの横断知：市民と科学技術を結ぶ回路作り』メルプロジェクト公開研究会』、2004年9月24日、メルプロジェクト公開研究会、東京大学。

佐倉統、「現代科学技術と人間観」、『現代科学技術と人間観』、2004年10月21日、聖心女子大学キリスト教文化研究所、聖心女子大学キリスト教文化研究所。

佐倉統、「人類は21世紀をどう生きるべきか」、『人類は21世紀をどう生きるべきか』武見太郎生誕100年記念シンポジウム・シンポジスト』、2004年11月6日、生存科学研究所、順天堂大学。

佐倉統、「STS的に科学技術白書をどう読むか」、『ワークショップ(コメンテータ)科学技術社会論学会(JSSTS)2004年度年次研究大会』、2004年11月14日。(コメンテータ)

佐倉統、「科学コミュニケーション —理論と実践の往復運動—」、『「日本の研究組織と科学コミュニケーション」ワークショップ(オーガナイザ・座長)科学技術社会論学会(JSSTS)2004年度年次研究大会』、2004年11月14日。

佐倉統, "Intermediating Theory and Practice: Present Condition and Prospects for Science Communication in Japan," *5th East Asian STS Conference*, 2004.12, Seoul National University, Seoul, Korea, Hoam Faculty House, Seoul National University.

佐倉統、「科学技術と社会間のコミュニケーションが必要だ」、『科学技術と社会間のコミュニケーションが必要だ』情報通信技術研究交流会(AC-Net)第147回例会』、2005年1月14日、ヴィアーレ大阪。

佐倉統、「21世紀の科学技術リテラシー」、『21世紀の科学技術リテラシー』第8回社会技術研究フォーラム』、2005年1月29日、東京国際フォーラム。

佐倉統、「未来社会形成における科学技術の役割」、『未来社会形成における科学技術の役割』ワークショップ・コメンテーター』、2005年3月、科学技術振興機構、虎ノ門パストラル。

その他

『視点・論点』、2000年6月、NHK教育テレビ。(テレビ出演)

『サイエンス・アイ』、2000年8月、NHK教育テレビ。(テレビ出演)

「人間』のメルトダウンを超えて——ヒトゲノム解明とロボット・テクノロジーがもたらす未来——」、『InterCommunication』、36号、2001年、pp. 26~41。(黒崎政男と対談)

『視点・論点』、2001年3月22日、NHK教育テレビ。(テレビ出演)

「進化を学ぶ意味」、『視点・論点』、2002年5月10日、NHK教育テレビ。(テレビ出演)

『サイエンス・ゼロ』、2003年、NHK教育テレビ。(テレビ出演)

三中信宏・佐倉統、「非生命体の進化理論2」、『日本進化学会第6回大会』、2004年、東京、東京大学。(演者：徳永幸彦、佐藤啓介、矢野環、屋名池誠)

「食のリスクを問い直す——BSEパニックの真実」、『第3回リビング・サイエンス・フォーラム』、2004年7月27日、丸ビル・東京21Cクラブ。

「携帯電話から見える現代社会」開催』、『第4回リビング・サイエンス・フォーラム』、2004年11月29日、丸ビル・東京21Cクラブ。

一般向け著書等

佐倉統・木野鳥乎、『わたしたちはどこから来てどこへ行くのか？——科学が語る人間の意味——』、2000年、東京、プロンズ新社、141pp.。

佐倉統監修、『ミーム力』、2001年、東京、数研出版。

佐倉統・澤口俊之・山元大輔・上田紀行・中島秀人、『ヒトは先ず「愛してる！」と叫んだ？——生命をめぐる4つのダイアログ——』、2001年、同朋舎（発行：角川書店）。

佐倉統・田端到、『科学書をめぐる100の冒険』、2003年、東京、本の雑誌社、262pp.。

一般向けエッセイ等

佐倉統、「恋愛——遺伝子とミームのタペストリー——」、『Z-kan』、2号、2000年、pp. 40～45。

『リテレール』、『科学書ベスト16』、2000年。

「J・グドール『森の旅人』書評」、『日経新聞』、2000年。

「松沢哲郎『チンパンジーの心』書評」、『bk1』、2000年。(bk1)

「江沢洋『朝永振一郎著作集』書評」、『bk1』、2000年。(bk1)

「オリヴァー・サックス『サックス博士の偏頭痛大全』書評」、『bk1』、2000年。(bk1)

佐倉統、「科学書をめぐる冒険-」、『本の雑誌』、2000年4月。(2000.4-2003.8(田端到との対談書評))

佐倉統・田端到、「科学書をめぐる冒険」、『本の雑誌』、2000年4月～2003年8月。(連載)

佐倉統、「地球環境への処方せん④——新たな「ミーム」生む教育を」、『毎日新聞』、2000年7月14日、夕刊。

佐倉統、「これからの生活と生命科学」、『子供の科学』、63巻、8号、2000年8月、pp. 19～31。

「港千尋『自然 まだ見ぬ記憶へ』書評」、『日経新聞』、2000年12月3日。

佐倉統、「知識の差異と進化——あるいは二重らせんの私たち——」、『文藝別冊：総特集・柳澤桂子』、2001年、pp. 98～107。

佐倉統、「サウンド・オブ・サイエンス——音楽好きの科学者たち——」、『MeSci』、1号、2001年、pp. 46～51。

「岩合光昭『スノー・モンキー』書評」、『bk1』、2001年。(bk1)

「藤原帰一『戦争の記憶』書評」、『bk1』、2001年。(bk1)

佐倉統、「科学のタネの探検隊」、『φ』、2001年1月。(2001.1?-2002.9(2002年4月から『Meme』と改題))

佐倉統、「2001年宇宙の旅——未来に追いついて①」、『朝日新聞』、2001年1月4日。

佐倉統、「科学と価値と物語」、『科学』、2001年6月、p. -673。(763-***)

佐倉統、「人は自らに似せてロボットを造れり」、『MeSci』、2002年、pp. 13～15。

佐倉統、「西アフリカ《地球の窓》」、『読売新聞』、2002年7月13日、夕刊。

佐倉統、「多様性はなぜ重要か?」、西田利貞・佐藤矩行編、『所収:『新しい教養のすすめ 生物学』』、2003年、京都:昭和堂、pp. 1~24。

佐倉統、「巻頭エッセイ」、『MEME』、2003年。(2003-2004.7)

「廣野善幸・市野川容考・林真理『生命科学の近現代史』 書評」、『中央公論』、2003年1月。

「トッド・E・ファインバーグ『自我が揺らぐとき』 書評」、『読売新聞』、2003年1月12日。

「アーサー・I・ミラー『アインシュタインとピカソ』 書評」、『中央公論』、2003年2月。

「ライザ・ピカード『18世紀ロンドンの私生活』 書評」、『中央公論』、2003年3月。

「上岡克己『アメリカの国立公園』 書評」、『読売新聞』、2003年3月9日。

佐倉統、「アトムとフランケンシュタイン」、『週刊読書人』、2003年3月21日。

「村山司『イルカが知りたい』 書評」、『読売新聞』、2003年3月23日。

佐倉統、「個』の欲望と『遺伝子』の時間」、『世界思想』、2003年4月。

「中野繁『川と森の生態学—中野繁論文集—』 書評」、『中央公論』、2003年4月。

「ビルギット・アダム『王様も文豪もみな苦しんだ性病の世界史』 書評」、『読売新聞』、2003年4月6日。

「ジェームズ・ワトソン『マクドナルドはグローバルか』 書評」、『読売新聞』、2003年4月13日。

「リチャード・フォーティ『生命40億年全史』 書評」、『読売新聞』、2003年4月27日。

「斎藤美奈子『趣味は読書』 書評」、『中央公論』、2003年5月。

「ロジャー・ゴスデン『老いをあざむく』 書評」、『読売新聞』、2003年5月11日。

「伊藤嘉昭『楽しき挑戦』 書評」、『読売新聞』、2003年5月25日。

「左巻健男・ほか『新しい科学の教科書』I~III』 書評」、『中央公論』、2003年6月。

「スー・ハベル『猫が小さくなった理由』 書評」、『読売新聞』、2003年6月1日。

「室山泰之『里のサルとつきあうには』 書評」、『読売新聞』、2003年6月29日。

「秋山邦晴『昭和の作曲家たち』 書評」、『読売新聞』、2003年7月6日。

「アマドゥ・クルマ『アラーの神にもいわれはない』 書評」、『読売新聞』、2003年8月10日。

「河合雅雄『森に帰ろう』 書評」、『読売新聞』、2003年9月21日。

「ティム・バークヘッド『乱交の生物学』 書評」、『週間ポスト』、2003年9月26日。

佐倉統、「私の進化論」、『朝日新聞』、2003年10月。(2003.10-11)

「鈴木克美『水族館』 書評」、『読売新聞』、2003年10月12日。

- 「正高信男『ケータイを持ったサル』 書評」、『読売新聞』、2003 年 11 月 30 日。
- 「フィリップ・R.レイリー『リンカーンの DNA と遺伝学の冒険 I・II』 書評」、『蛋白質核酸酵素』、2003 年 12 月。
- 佐倉統、「人間の本性と本能をめぐる論争に新たな地平はあるか」、『人間の本性を考える(下)』、2004 年、NHK ブックス、pp. 294～301。
- 「室山泰之『里のサルとつきあうには――野生動物の被害管理』 書評」、『遺伝』、2004 年 1 月。
- 「屋名池誠『屋名池誠『横書き登場』 書評』、『読売新聞』、2004 年 1 月 18 日。
- 「吉川惣司・矢島道子『メアリー・アニングの冒険』 書評』、『読売新聞』、2004 年 1 月 25 日。
- 「ジャン・ボテロ『最古の料理』 書評』、『読売新聞』、2004 年 2 月 8 日。
- 「フランケチエンヌ・ほか『月光浴』 書評』、『読売新聞』、2004 年 2 月 22 日。
- 佐倉統、「お菓子』の効用』、『チャイルドヘルス』、2004 年 3 月。
- 佐倉統、「アフリカの日々』、そして『ロシアより愛を込めて』『どうぶつと動物園』、『どうぶつと動物園』、2004 年 4 月。
- 「アブラハム・パイス『物理学者たちの 20 世紀』 書評』、『読売新聞』、2004 年 4 月 4 日。
- 「オリヴィア・ジャドソン『脳とセックスの生物学』 書評』、『読売新聞』、2004 年 4 月 25 日。
- 「鷲尾賢也『編集とはどのような仕事なのか』 書評』、『読売新聞』、2004 年 5 月 2 日。
- 「ニック・ミドルトン『地球でいちばん過酷な地に行く』 書評』、『読売新聞』、2004 年 5 月 9 日。
- 「マット・リドレー『やわらかな遺伝子』 書評』、『読売新聞』、2004 年 5 月 23 日。
- 「松井ゆみ子『ケルトの国のごちそうめぐり』 書評』、『読売新聞』、2004 年 5 月 30 日。
- 「リチャード・ドーキンス『悪魔に仕える牧師』 書評』、『北海道新聞』、2004 年 6 月 6 日。
- 「ジェームス・クリュス『笑いを売った少年』 書評』、『読売新聞』、2004 年 6 月 13 日。
- 「神谷敏郎『神谷敏郎『川に生きるイルカたち』 書評』、『読売新聞』、2004 年 6 月 20 日。
- 「ハナ・ホームズ『ハナ・ホームズ『小さな塵の大きな不思議』 書評』、『読売新聞』、2004 年 6 月 27 日。
- 「マイク・カージェス『あの瞬間、ぼくらは宇宙に一番近かった』 書評』、『読売新聞』、2004 年 7 月 4 日。
- 「岡部真一郎『ヴェーベルン』 書評』、『読売新聞』、2004 年 7 月 18 日。
- 「ロバート・キルシュナー『狂騒する宇宙』 書評』、『読売新聞』、2004 年 8 月 8 日。
- 「アラン・フェドゥーシア『鳥の起源と進化』 書評』、『読売新聞』、2004 年 8 月 19 日。
- 「ブライアン・サイクス『アダムの呪い』 書評』、『読売新聞』、2004 年 8 月 29 日。
- 佐倉統、「日常生活の中に、科学技術はころがっているというお話』、『小学校・中学校理科教科情報誌『教室の窓』』、2004 年 9 月。

佐倉統、「サイエンスブックカフェ」、『MeSci』、7巻、44号、2004年9月。

「川島レイ『上がれ！空き缶衛星』書評」、『読売新聞』、2004年9月12日。

「サイモン・ウィンチェスター『世界を変えた地図』書評」、『読売新聞』、2004年9月26日。

「デヴィッド・スノウド『100歳の美しい脳』書評」、『読売新聞』、2004年10月3日。

「金森修『自然主義の臨界』書評」、『読売新聞』、2004年10月10日。

「中井浩一『徹底検証大学法人化』書評」、『読売新聞』、2004年10月17日。

佐倉統、「不思議たんけん NIE 特集(6)生命の誕生と進化『ダーウィン進化論——光と影』」、『読売新聞』、2004年10月22日、朝刊。

「スティーヴ・ジョーンズ『Yの真実』書評」、『読売新聞』、2004年10月31日。

「荻原浩『僕たちの戦争』書評」、『読売新聞』、2004年11月7日。

「浦沢直樹・手塚治虫、アイザック・アシモフ『プルートウ%コンプリート・ロボット』書評」、『読売新聞』、2004年11月14日。
(書名が2つ)

「J・マイケル・ビショップ『がん遺伝子は何処から来たか』書評」、『読売新聞』、2004年11月21日。

「デリック・バング『スヌーピーたち 50年分の HAPPY BOOK』書評」、『読売新聞』、2004年11月28日。

佐倉統、「巷と科学の相関図」、『バイオニクス』、2004年12月。

佐倉統、「科学者へ等身大のまなざし——ドラマ『不機嫌なジーン』」、『朝日新聞』、2005年2月17日、朝刊。

佐倉統、「異文化衝突はグローバル化に伴う必然か?」、『毎日新聞』、2005年2月21日、夕刊。

その他一般向け

『タテ組、横組み』、2000年。

『Eco goo』、2000年。(布施英利と対談)

『クローズアップ現代』、2000年5月15日、NHK。(テレビ出演)

『サイエンス・アイ』、2000年8月5日、NHK。(テレビ出演)

『金森修『サイエンス・ウォーズ』出版記念シンポジウム』、2000年8月28日、青山ブックセンター。

『川崎市立看護短期大学創立5周年記念講演』、2000年10月9日。

『ジュンク堂トークショー』、2000年10月10日、ジュンク堂。

「人間はどんな生き物か?」、『横浜生涯教育講座』、2000年10月19日。(横浜生涯教育講座)

「人間とプラスチック」、2000年10月29日、埼玉県立美術館。(パネルシンポジウム)

2000年11月22日、NHKラジオ。(NHKラジオ)

『サイエンス・アイ』、2000年12月16日、NHK。(テレビ出演)

「ヒト・ゲノム計画の現状と問題点」、『ヒト・ゲノム計画の現状と問題点』、2001年3月6日、福島商工会議所。

『サイエンス・アイ』、2001年3月17日。(テレビ出演)

『視点・論点』、2001年3月22日、NHK。(テレビ出演)

2001年4月12日。(朝日カルチャーセンター講師)

『常葉大学シンポジウム』、2001年6月23日。

『ジュンク堂トークセッション』、2001年9月25日、池袋ジュンク堂。

『理科教育の意味』、2001年10月17日、福島県教育委員会研修会。

『人類には未来があるか?』、2001年11月10日、葬送の自由をすすめる会。

「わたしたちはどこから来てどこへ行くのか?——人間はどんな生き物なのか?」、『神戸市看護短大創立記念シンポジウム』、2001年11月17日。

『サイエンス・アイ』、2001年12月8日。(テレビ出演)

「人はどういう生き物か」、『視点・論点』、2001年12月19日、NHK。

「科学的発見・発明と知的所有権」、水越伸・NHK編、『市民・組織・英知《NHKスペシャル 変革の世紀①》』、2002年、NHK出版、pp. 256～268。(名和小太郎、加藤和人と鼎談)

『ロボット・ミーム展シンポジウム』、2002年1月12日、日本科学未来館。(パネリスト)

2002年3月4日、NHKラジオ。(NHKラジオ)

「人は何を伝え、残すのか」、『静岡連座』、2002年3月9日。(静岡連座、講演と討論)

『サンデー・スペシャル』、2002年3月17日、Tokyo FM。

『サイエンス・アイ』、2002年3月23日、NHK。(テレビ出演)

「進化を学ぶ意味」、『視点・論点』、2002年5月10日、NHK。

「科学者とジャーナリズムの関係を考える」、『五月祭シンポジウム』、2002年5月23日、五月祭シンポジウム。(パネリスト)

『町づくりと文化の進化』、2002年8月7日。(静岡、講演と討論)

「21世紀の動物園——動物園の役割ってなに?」、『上野動物園開園120周年記念シンポジウム』、2002年10月26日。(パネリスト)

『ゲノム談義 in 東京』、2002年11月9日、日本科学未来館。

『上野動物園開園120周年記念シンポジウム『21世紀の動物園——動物園の役割ってなに?』』、2003年。

「リビング・サイエンス宣言!」、『ソトコト』52: 別冊チビコト』、2003年、pp. 24～29。(上田昌文と対談)

「文化の測量【音楽篇】」、『プラトール』、0号、2003年、pp. 32～37。(宮本文昭と対談)

「21世紀『知』の集団像」、『Meme』、8号、2003年、pp. 21～25。(上田信行、中西紹一と鼎談)

『どうぶつと動物園』、2003年1月。(池田啓、日高敏隆、戸田杏子、菅谷博とのパネルディスカッション)

「科学館って何だろう？科学のメッセージを伝えるということ」、『科学館って何だろう？科学のメッセージを伝えるということ』、2003年3月、pp. 38～44。(井上慎一、内田まほろと鼎談)

『公開対談『アラマタ的な知のあり方をめぐって』』、2003年3月9日、ICC。(ICC)

“contact point,” *Solco w@ve*, 29, no. 5-7, 2003.5.

「マーケティング・ビューQ&A」、『マーケティング アイ』、32巻、2003年6月。

「進化生物学をめぐる通俗科学書はなぜ氾濫するのか？」、『科学』、73巻、11号、2003年11月。

「環境を学ぶ、環境を考える」、『環境会議』、春月号、2004年。(富江智子、鈴木邦雄、三輪紀人と鼎談)

「科学館って何だろう？——座談会を終えて」、『MeSci』、5巻、46号、2004年1月。

『ラウンジトーク『ロボット／メディア／生命』』、2004年7月21日、ICC。(ICC)

「私の読書遍歴 第二十一回」、『文學界』、59巻、3号、2005年3月、pp. 258～265。

鈴木 高宏 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

超柔軟マニピュレータに関する研究

本研究では、従来の弾性の存在を前提とした柔軟系モデルでは扱えない、より柔軟な非弾性的柔軟系の運動を解析し、その特性を利用して新たなマニピュレーションの可能性を拓くことを目的としている。このような系を超柔軟系と呼んでいるが、例えばひもや糸、ワイヤー、テザー、ファイバー等のような要素はその例として考えられ、これらを利用することで従来より格段に軽量かつコンパクトな機構が実現できる。こうした超柔軟系を用いた従来にはない新たなロボットマニピュレーションについて研究を行っている。

メカトロニック人工食道の開発

食道のただ一つの重要な機能は蠕動による咀嚼物の嚥下である。そのため、これは機械的機構で代替することが可能であると考えられ、それにより食道癌手術等における多大な外科的侵襲を低減することができる。本研究では、スクリュウ搬送機構を利用したメカトロニック人工食道の開発を行っている。現在、試作実験機において、様々な粘度の対象物について搬送実験を行い、その有効性を確認している。

人間-自動車-交通流系の動的挙動と制御

GCR サステナブル ITS プロジェクト(sITS)に参加し、その1テーマとして研究を行っている。ITS環境の普及段階においては、自動運転車と人間の運転する手動運転車の混在が予想される。本研究では、そうした混在交通流の動的挙動を解析し、安全性や効率を向上させる制御法を提案する。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

日本機械学会、「機械工学便覧 β9編(法工学)」、2003 年、日本機械学会。【査読有】

論文等

鈴木高宏・成瀬勝俊、「メカトロニック人工食道用機構の開発」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'00 (ROBOMECH'00)』、2000 年 5 月。(2P1-12-013)

鈴木高宏、「超柔軟アンダーアクチュエーテッドマニピュレータの制御」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'00(ROBOMECH'00)』、2000 年 5 月。(1A1-56-087)

鈴木高宏、「非ホロノミック超柔軟マニピュレータ」、『生産研究』、52 巻、5 号、2000 年 5 月、pp. 237～242。

T. Suzuki, W. Miyoshi and Y. Nakamura, "Dissipative Behaviors of 2R Free-Joint Manipulators with Friction," *IASTED Int. Conf. on Intelligent Systems and Control 2000 (ISC 2000)*, 2000.8, IASTED, Honolulu, Hawaii, USA, pp. 19-28.【査読有】(2000-08)

鈴木高宏、「非ホロノミック超柔軟システムの解析と制御」、『日本機械学会 2000 年年次大会』、1 号、2000 年 8 月、pp. 909～910。

鈴木高宏、「散逸的非ホロノミック劣駆動系の制御」、『日本機械学会 Dynamics and Design Conference 2000』、2000 年 9 月。(OS20-119)

鈴木高宏、「超柔軟マニピュレータの非線形挙動とそれを用いた制御」、『第 18 回日本ロボット学会学術講演会』、2000 年 9 月、pp. 1397～1398。

鈴木高宏、「混在交通流の動的挙動の解析」、『自動車技術会 2000 年秋季大会学術講演会』、98-00 巻、2000 年 10 月、pp. 10～13。

T. Suzuki and Y. Nakamura, "Control of Nonholonomic Free-Joint Manipulators with One Actuator," *IEEE/RSJ Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems (IROS 2000)*, 2000.11, pp. 127-132.【査読有】(2000-11)

鈴木 高宏、「3R 自由関節マニピュレータの形状制御」、『第 6 回ロボティクス・シンポジウム』、2001 年 3 月、修善寺、pp. 386～391。【査読有】

鈴木 高宏、「メカトロニック人工食道の開発」、『生産研究』、53 巻、3 号、2001 年 3 月、pp. 177～178。

T. Suzuki, "A Method for Shape Control of Super-Flexible Manipulators," *32nd International Symposium on Robotics*, 2001.4, Seoul, Korea, pp. 483-488.【査読有】

鈴木・三好・中村、「非ホロノミック自由関節マニピュレータの制御」、『日本ロボット学会誌』、19 巻、4 号、2001 年 5 月、pp. 499～509。【査読有】

鈴木 高宏、「超柔軟マニピュレータの形状制御の一方法」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'01(ROBOMECH'01)』、2001 年 6 月、高松。(2A1-L5(1)-(2))

鈴木 高宏、「重力ポテンシャル下における自由関節マニピュレータ」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'01(ROBOMECH'01)』、2001 年 6 月、高松。(2P2-L10(1)-(2))

鈴木 高宏、「超柔軟マニピュレータの形状制御の一方法」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'01(ROBOMECH'01)』、2001 年 6 月、高松。(2A1-L5(1)-(2))

鈴木 高宏、「重力下における自由関節マニピュレータの動的安定化制御」、『第 19 回日本ロボット学会学術講演会』、2001 年 9 月、東京、pp. 725~726。

鈴木 高宏、「車線変更による混在交通流の動的挙動の制御」、『自動車技術会 2001 年秋季大会学術講演会』、117-01 号、2001 年 10 月、札幌、pp. 31~34。

T. Suzuki・K. Shintani、「Control of A Super-Flexible Manipulator Using Its Dynamical Behaviors」、『TITech COE/ Super Mechano-Systems Symposium 2001』、2001 年 11 月、Yokohama, Japan。

鈴木 高宏、「重力下自由関節マニピュレータの動的安定化とインピーダンス制御」、『第 7 回ロボティクス・シンポジウム』、2002 年 3 月、上田、pp. 31~36。【査読有】

Takahiro Suzuki, "Anti-Gravity Control of Free-Joint Manipulators by Vibrational Input," *2002 IEEE Int. Conf. on Robotics and Automation (ICRA'02)*, 2002.5, Washington, D.C., pp. 1315-1320。【査読有】

望山 洋・鈴木 高宏、「超柔軟マニピュレータの運動学」、『第 2 回 SICE 制御部門大会』、2002 年 5 月、幕張、pp. 5~8。

新谷 賢・鈴木 高宏・望山 洋、「超柔軟マニピュレータ実験装置の開発」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02(ROBOMEC'02)』、2002 年 6 月、松江。(2P1-L05)

H. Mochiyama and T. Suzuki, "Dynamics Modeling of a Hyper-Flexible Manipulator," *SICE Annual Conference 2002*, 2002.8, Osaka, pp. 1683-1688。【査読有】

T. Suzuki, K. Shintani and H. Mochiyama, "Control Methods of Hyper-Flexible Manipulators using their Dynamical Features," *SICE Annual Conference 2002*, 2002.8, Osaka, pp. 1689-1694。

Takahiro Suzuki, "Impedance Force Control of Free-joint Manipulators with One Motor under Gravity," *IEEE/RSJ Int. Conf. on Intelligent Robots and Systems(IROS 2002)*, 2002.10, Lausanne, Switzerland, pp. 2274-2279。【査読有】

鈴木 高宏・新谷 賢・成瀬 勝俊、「人工食道用螺旋スクリュー機構の開発」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会』、2002 年 10 月、大阪。(1L36(1)-(4))

望山 洋・鈴木 高宏、「平面型超柔軟マニピュレータにおけるダイナミクスの幾何」、『第 20 回日本ロボット学会学術講演会』、2002 年 10 月、大阪。(3E34(1)-(4))

望山 洋・鈴木 高宏、「超柔軟マニピュレータの制御構造」、『計測自動制御学会システム・インテグレーション部門学術講演会(SI2002)』、2002 年 12 月、神戸。

鈴木 高宏・新谷 賢・望山 洋、「超柔軟マニピュレータの動力学的性質を利用した制御実験」、『計測自動制御学会システム・インテグレーション部門学術講演会(SI2002)』、2002 年 12 月、神戸。

T.Suzuki and Y.Nakamura, "Control of free-joint manipulators with only one actuator upon dynamic behavioral analysis," *Machine Intelligence & Robotic Control*, 4, no.3, 2003, pp. 99-111。【査読有】

望山洋・鈴木高宏、「受動性に基づく超柔軟マニピュレータのダンピング制御」、『第8回ロボティクス・シンポジウム』、2003 年 3 月、浜松。【査読有】

H.Mochiyama and T.Suzuki, "Kinematics and Dynamics of a Cable-like Hyper-flexible Manipulator," *2003 IEEE Int. Conf. on Robotics and Automation (ICRA'03)*, 2003.9, pp. 3672-3677。【査読有】

H. Mochiyama and T. Suzuki, "Kinematics and Dynamics of a Cable-like Hyper-flexible Manipulator," 2003.9, Taipei。【査読有】

鈴木 高宏・新谷 賢・藤田 真理子、「メカトロニック人工食道用咀嚼物搬送機構における多種粘着性対象の搬送実験」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04(ROBOMEC'04)』、2004 年 6 月。(1A1-H-52(1)-(4))

鈴木高宏・新谷賢・藤田真理子、「メカトロニック人工食道用咀嚼物搬送機構における多種粘着性対象の搬送実験」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 (ROBOMEC'04)』、2004年6月、名古屋。

鈴木高宏・新谷賢・藤田真理子、「レオロジー流体を搬送対象としたメカトロニック人工食道の搬送効率」、『第22回日本ロボット学会学術講演会』、2004年9月。

蛭原裕治・新谷賢・鈴木高宏、「超柔軟マニピュレータの鉛直平面内における投射巻き付きの解析」、『計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2004)』、2004年12月。

鈴木・蛭原、「超柔軟マニピュレータによる投射巻き付きのダイナミクスの解析」、『第10回ロボティクスシンポジウム』、2005年3月、箱根。【査読有】

一般向け著書等

鈴木高宏、「「柔らかな機械」をつくる——超柔軟ロボットシステムの運動制御」、渡辺正編、『バイオに学びバイオを超える —工学からバイオへのアプローチ—』、2004年1月、日本評論社。

田中 秀幸 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が一般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティ・マネジメントのインセンティブ設計に関する研究

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

田中秀幸・寺本卓史、『IT投資が企業の生産性に与える影響に関する調査研究』、2001年5月、158pp.。

佐野眞一・田中秀幸・四元正弘・境真良、『出版ルネサンス』、2003年6月、長崎出版、205pp.。

田中秀幸、『国内情報セキュリティ市場調査調査報告書(別冊)平成16年度情報処理実態調査を用いた情報セキュリティ対策の実証分析に関する調査研究』、2005年3月、67pp.。

論文等

田中秀幸、「シンガポールにおける電子政府と産業振興・地域振興」、『海外の地方自治体における電子政府と産業振興・地域振興調査研究』、pp. 13～31。

田中秀幸、「IT革命に対応した我が国企業のあり方について」、『日本経済政策学会関東部会研究報告会報告論文』、2001年1月27日、東京、日本、中央大学、pp. 1～29。

田中秀幸、「情報技術投資の生産性向上寄与に関する企業レベルの実証分析」、『経済産業省マイクロデータ分析研究会コンファレンス』、2001年3月30日、経済産業省マイクロデータ分析研究会、東京、日本、経済産業研究所、pp. 1～33。

田中秀幸、「Peer-to-Peer ネットワーク社会の展望」、『社会情報研究所紀要』、62号、2001年10月、pp. 1～39。

田中 秀幸、「情報財の構造に関する考察」、『文科省科研補助金特定領域研究「情報学」柱 A06「情報化と社会制度の構築に関する研究」平成13年度 A06 計画研究報告書』、2002年1月、pp. 27～40。

田中秀幸・寺本卓史、「IT関係投資の生産性インパクトに関する実証研究」、『社会情報研究所紀要』、63巻、2002年3月、pp. 65～90。

田中秀幸、「情報ネットワークに基づく社会経済システム」、『A New Direction of Media Studies in Korea and Japan』、2002年3月8日、ソウル市、韓国、ソウル国立大学言論研究所及び東京大学社会情報研究所、pp. 9～14。

田中秀幸、「OECD」、北川高嗣他編、『情報学事典』、2002年6月、pp. 122r～123l。

田中秀幸、「WTO」、北川高嗣他編、『情報学事典』、2002年6月、pp. 573r～574l。

田中秀幸、「範囲の経済」、北川高嗣他編、『情報学事典』、2002年6月、pp. 754r～755l。

田中秀幸、「輸出管理」、北川高嗣他編、『情報学事典』、2002年6月、p. 949l。

田中秀幸、「連結の経済」、北川高嗣他編、『情報学事典』、2002年6月、pp. 983l～983r。

Hideyuki Tanaka, "Reconsidering Neoclassical Economics and Game Theory from the Perspective of Dynamic Information," *Review of Media, Information and Society*, 8, 2003, pp. 41-69.

田中秀幸、「共同研究と産業システムの進化」、『社会情報研究所紀要』、65号、2003年、pp. 1～35。

田中秀幸、「組織の境界を超えた知識創造に関する制度設計」、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究：研究成果報告書：A06情報化と社会制度の構築に関する研究』、2003年1月、pp. 3～5。

Hideyuki Tanaka, "Limits of Neoclassical Economics and Game Theory from Dynamic Information Viewpoints," Osamu Sudoh ed., *Institutional Design on the Digital Economy*, 2003.1.

田中秀幸、「オルタナティブ経済の戦略」、水越伸・NHKスペシャル「変革の世紀」プロジェクト編、『インターネット時代を生きる』、2003年2月、pp. 111～121。

田中秀幸、「研究ノート：地方における電子情報の利用環境」、『情報メディア研究資料センターニュース』、15号、2003年4月。

田中秀幸、「産業システムの進化と中間組織の機能」、『社会・経済システム学会第22回大会報告要旨集』、2003年10月、pp. 31～32。

田中秀幸・松浦幹太、「情報セキュリティ・マネジメントの制度設計」、『日本セキュリティ・マネジメント学会・特定非営利活動法人 日本ネットワークセキュリティ協会主催、Network Security Forum 2003』、2003年10月22日、東京、東京ビックサイト、pp. 1～17。(奨励賞受賞)

田中秀幸、「産業システムの進化と中間組織の機能」、『社会・経済システム学会、第22回大会：システムの公共性を考える』、2003年10月26日、東京、一ツ橋大学。

田中秀幸、「中間領域がつかぬ研究開発パートナーシップ：半導体産業で機能するリサーチ・プロバイダー」、須藤修編、『国際会議論文集：情報経済の確立と社会経済システムの深化』、2004年、pp. 117～131。【査読有】

Hideyuki Tanaka, "Joint R&D and the Evolution of the Industrial System: Functions of Joint R&D in the Semiconductor Industry," *Review of Media*, 9, 2004, Information and Society, pp. 31-69.

田中秀幸、「産業システムの進化と中間組織の機能」、『社会・経済システム』、25号、2004年、pp. 109～115。【査読有】

田中秀幸・松浦幹太、「情報ネットワーク・システムの脆弱性とセキュリティ投資に関する実証分析」、『第23回社会・経済システム学会大会報告要旨』、2004年、pp. 12～13。

田中秀幸、「中間組織がつかぬイノベーション・モデル、情報セキュリティ・マネジメントのインセンティブ設計」、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究：研究成果報告書：A06情報化と社会制度の構築に関する研究』、2004年1月、pp. 4～10。(pp.4-5. 9-10)

田中秀幸、「ユビキタス・コンピューティング社会/ユビキタス・ネットワーク社会」、吉見俊哉・花田達朗編、『社会情報ハンドブック』、2004年3月、pp. 218～221。

田中秀幸、「情報化とイノベーション」、『社会情報ハンドブック』、2004年3月、pp. 150～153。

Hideyuki Tanaka, Kanta Matsuura and Osamu Sudoh, "Vulnerability and Information Security Investment: An Empirical Analysis of e-Local Government in Japan," *Financial Systems and Cybersecurity: A Public Policy Perspective*, 2004.5.28, University of Maryland, College Park, MD, pp. 1-17.

田中秀幸、「PtoP セキュリティ対策：PtoP に適応したセキュリティガバナンスの制度設計」、片方善治監修、『IT セキュリティソリューション大系：下巻 IT セキュリティエンジニアリング』、2004年7月22日、pp. 426～438。

田中秀幸、「PtoP セキュリティ技術の適用事例」、片方善治監修、『IT セキュリティソリューション大系：下巻 IT セキュリティエンジニアリング』、2004年7月22日、pp. 790～792。

Hideyuki Tanaka, "Research and Development Partnerships Bridged by the Intermediate Domain: A Research Provider in the Semiconductor Industry," *Osamu Sudoh ed. Digital Economy and Social Design*, 2005, pp. 184-209。【査読有】

Hideyuki Tanaka, Kanta Matsuura and Osamu Sudoh, "Vulnerability and information security investment: An empirical analysis of e-local government in Japan," *Journal of Accounting and Public Policy*, 24, no.1, 2005.1, pp. 37-59。【査読有】

田中秀幸、「情報セキュリティ投資に関する研究」、須藤修編、『ITの深化の基盤を拓く情報学研究研究成果報告書：A06情報化と社会制度の構築に関する研究』、2005年1月、pp. 3～5。

加藤卓也・田中秀幸・陳昱・大橋弘忠、「非対称情報市場における市場効率性及び投資家合理性の研究」、『進化経済学会第9回大会』、2005年3月、東京、東京工業大学、pp. 1～6。

藤原正弘・田中秀幸、「モバイル・インターネットのプラットフォーム構造に関する実証分析：第3世代携帯電話への転換が及ぼす影響について」、『進化経済学会第9回大会、東京：東京工業大学、2005年3月26～27日。』、2005年3月、東京、東京工業大学、pp. 549～557。

田中秀幸、「インタangible・アセットとしての情報セキュリティ」、『情報学研究』、69号、2005年3月、pp. 123～136。

口頭発表等

田中秀幸、「IT投資の生産性向上寄与について」、『経済産業研究所BBL研究会』、2001年2月20日、経済産業研究所、東京、日本、経済産業省。

田中秀幸、「高度ネットワーク社会における社会経済システム～その理論と政策論～」、『日本社会情報学会第80回定例研究報告会』、2001年7月、日本社会情報学会(JASI)、東京、日本、早稲田大学。

田中秀幸、「情報ネットワークに基づく社会経済システム」、『第6回ソウル大学言論情報研究所・東京大学社会情報研究所合同セミナー』、2002年3月、ソウル市、韓国、ソウル大学。

須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾・後藤玲子・榊島栄一郎、「グローバルな規模で進展する情報経済と新たな社会制度デザインに関する研究」、『文部科学省科学研究費補助金(特定領域研究)「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」総括班主催、『平成13年度成果報告会』』、2002年6月19日、東京、日本教育会館。

田中秀幸、「Peer-to-Peer ネットワーク・システムの社会経済デザイン」、『文部科学省科学研究費補助金(特定領域研究)「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」柱A06主催、『情報化と社会制度の構築に関する研究 平成14年度中間報告会』』、2002年11月1日、東京、学士会館。

田中秀幸、「情報化と社会制度の構築に関する研究」、『文部科学省科学研究費補助金(特定領域研究)「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」主催、『公開講演会』』、2003年1月22日、東京、学術総合センター。

田中秀幸、「Knowledge Sharing and Competitiveness in a High-tech Industry」、『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「情報学」A06計画研究班主催、『情報経済の確立と社会経済システムの進化』』、2003年2月27日、東京、東京大学総合図書館大会議室。

田中秀幸・松浦幹太、「情報セキュリティ・マネジメントの制度設計」、『平成15年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」柱A04主催、『情報セキュリティに関する総合的な研究』』、2003年11月1日、福岡、九州大学ベンチャービジネスラボラトリー。

後藤玲子・須藤修・出口弘・田中秀幸・榊俊吾、「情報社会の公私の連携と機能分担」、『平成15年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」総括班主催、『平成15年度成果報告会』』、2004年1月27日、東京、学術総合センター。

Hideyuki Tanaka and Kanta Matsuura, "An Incentive Mechanism of Information Security Investment: An Empirical Study of e-Local Government in Japan," *The 2004 Workshop on Information Security Research*, 2004.10.3, Fukuoka, Fukuoka Soft Research Park Center.

田中秀幸、「情報セキュリティ投資に関する実証的研究」、『平成16年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」総括班主催、『平成16年度成果報告会』』、2005年1月12日、東京、学術総合センター。

田中秀幸、「情報セキュリティの経済的動機付けと個人情報保護」、2005年3月16日、21世紀COE次世代ユビキタス情報社会基盤の形成、東京、日本、東京大学武田先端知ホール。

一般向け講演等

田中秀幸、「地域のユビキタス・ネットワーク社会とは何か」、『地域情報化全国セミナー2003・小田原』、2003年5月、小田原市、長野市、(財)電気通信高度化協会、テレピア促進協議会、情報基盤協議会、地域情報化懇談会主催、小田原市、日本。

田中秀幸、「自立した地域情報化に向けた4要素の相互作用」、『総務省・情報基盤協議会主催『e まちづくりフォーラム』』、2003年11月。

その他一般向け

須藤修・田中秀幸、「IT経済」、『現代用語の基礎知識 2001』、2001年1月1日、pp. 165～170。

須藤修・田中秀幸、「IT経済」、『現代用語の基礎知識 2002』、2002年1月1日、pp. 270～275。

須藤修・田中秀幸、「IT社会」、『現代用語の基礎知識 2003』、2003年1月1日。

須藤修・田中秀幸、「IT社会」、『現代用語の基礎知識 2004』、2004年1月1日、pp. 235～240。

須藤修・田中秀幸、「IT社会」、『現代用語の基礎知識 2005』、2005年1月1日、pp. 620～625。

陳 昱 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

離散粒子法による複雑流体のモデリング及び数値シミュレーション

本研究で扱われる複雑流体とは、コロイド、高分子溶液、液晶、界面活性剤溶液、血液など柔らかい凝縮系(Soft Condensed Matters)と定義される物質である。これらの体系には、流体の物性や巨視的な流動特性などは表面または流体内部で形成された凝集体などを通して分子の構造と分子間の相互作用からの影響を受ける一方、熱力学環境及び流動様式も凝集体構造及び凝集体間の相互作用に影響を与えることで、マイクロからメゾ、マクロと複数の時空スケールをわたる物理現象が同時に混在している。マルチ・スケールの物理とそれらのインタアクションを捉えるために、統計力学的な原理に基づいて、複雑流体の分子動力学モデルに対して離散化と簡略化を施し、離散粒子法のモデリングを行う。また、離散粒子法のモデルを用いた複雑流体の数値シミュレーションにより、複雑流体の相挙動及び流れのダイナミクス、マイクロ、メゾ構造及び相互作用と凝縮系のマクロ現象間の関連を解明していく。

統計物理のアプローチを用いた社会・経済システムのシミュレーション

我々の身の回りに存在する社会・経済システムには、競争、崩壊、進化、集団形成など複雑なダイナミクスと自己組織化構造が生じている。これら現象は、複数の時空間尺度を渡って系の構成要素、要素集団、体系全体の構造と相互作用によるもので、その本質的な発生メカニズムの解明および現象の時間発展の予測は極めて難しく、従来の数理アプローチを使っても扱えないものとされている。そこで、我々は複雑流体の研究から得られた知見を利用し、統計物理学の概念や手法を用いることによって社会・経済システムに生じた現象を物質科学と同じ様な視点で実証的に分析する手法を採用した。現時点の研究内容には、株市場についてのマルチ・エージェントシミュレーション、生物アルゴリズムによるデザイン、Small-World/Free-Scale ネットワーク上のセルオートマトンなどが含まれている。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

陳昱、「原子／分子・離散粒子のシミュレーション」、『計算力学ハンドブック』、5巻、2001年、日本機械学会。(6章2節)

論文等

Shingo Tsunoda, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "A New Surface Tracking Algorithm for Lattice Gas Automata," *Computer Physics Communications*, no.129, 2000, pp. 138-144.【査読有】

Tomonori Sakai, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "Formation of Micelle in the Real-Coded Lattice Gas," *Computer Physics Communications*, no.129, 2000, pp. 75-81.【査読有】

Yasuhiro Hashimoto, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "Immiscible Real-Coded Lattice Gas," *Computer Physics Communications*, no.129, 2000, pp. 56-62.【査読有】

Shulong Teng, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "Lattice Boltzmann Simulation of Multiphase Fluid Flows Through the Total Variation Diminishing with Artificial Compression Scheme," *International Journal of Heat and Fluid Flow*, no.21, 2000, pp. 112-121.【査読有】

Miki Hirabayashi, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "New Lattice-Boltzmann Model for Magnetic Fluids," *Physical Review Letters*, 8717, no.17, 2001, 8301+.【査読有】

Tomonori Sakai・Yu Chen・Hirotada Ohashi, 「Equilibrium and Non-Equilibrium Analyses of Fluids with Surfactants: Real-Coded Lattice Gas Approach」, 『Nihon Reoroji Gakkaishi』, 29 巻、1 号、2001 年、pp. 33~37.【査読有】((Journal of the Rheology Society of Japan))

Miki Hirabayashi, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "The Lattice BGK Model for the Poisson Equation," *JSME International Journal, Series B*, 44, no.1, 2001, pp. 45-52.【査読有】

Yu Chen, Shulong Teng and Hirotada Ohashi, "A Numerical Study of a Single Rising Bubble Using the Lattice Boltzmann TVD/AC Method," *Computational Fluid Dynamics JOURNAL*, 9, no.4, 2001, pp. 394-400.【査読有】

Junya Onishi, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "Lattice Boltzmann Simulation of Natural Convection," *JSME International Journal, Series B*, 44, no.1, 2001, pp. 53-62.【査読有】

Yu CHEN., "Lattice Gas Model for Complex Structures in Surfactant Solutions," *10th International Conference on Discrete Simulation of Fluid Dynamics New Trends, New Perspectives, Cargese France, July 2-7, 2001.*, 2001.7, New Perspectives, Cargese France.

Hirabayashi M, Chen Y and Ohashi H, "A new lattice Boltzmann approach to the fractal structure in magnetic fluids," *Journal of Magnetism and Magnetic Materials*, 252, no.1 月 3 日, 2002, pp. 138-140.【査読有】

Yasuhiro Inoue, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "Development of a Simulation Model for Solid Objects Suspended in a Fluctuating Fluid," *Journal of Statistical Physics*, 107, no.1 月 2 日, 2002, pp. 85-100.【査読有】

Yu CHEN., "Investigation of the Phase Behavior for a Real-Coded Lattice Gas Surfactant Model," *11th International Conference on Discrete Simulation of Fluid Dynamics and Soft Condensed Matter*, 2002.8, Changhai, China. (招待講演)

Hirabayashi M, Chen Y and Ohashi H, "Lattice Boltzmann kinetic scheme for electro-optical and magneto-optical effects in ferro-nematic liquid crystals," *Molecular Crystals and Liquid Crystals*, no.401, 2003, pp. 201-209.【査読有】

Inoue Y, Chen Y and Ohashi H, "On the density correlation of the spontaneous fluctuation in a real-coded lattice gas," *Computer Physics Communication*, no.153, 2003, pp. 66-70.【査読有】

Yasuhiro Inoue, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "A mesoscopic simulation model for immiscible multiphase fluids," *Journal of Computational Physics*, 201, no.1, 2004, pp. 191-203.【査読有】

陳 昱、「離散運動論のアプローチを用いた複雑流体シミュレーション」, 『第2回若手研究フォーラム』, 2004 年 12 月 18 日、埼玉工業大学、埼玉工業大学。(招待講演)

その他

Tomonori Sakai, Yu Chen and Hirotada Ohashi, "Real-Coded Lattice Gas Model for Ternary Amphiphilic Fluids," *Physical Review E*, 65, no.31503, 2002.【査読有】

苗村 健 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

3次元空間の光線記述プロジェクト

より高度な臨場感の記録と伝送を実現するために、3次元空間そのものの視覚情報を対象とした研究に取り組んでいます。本プロジェクトは、実写品質のCG合成、空間共有通信、3次元デジタルアーカイブ、3次元ディスプレイなどの分野と密接に関係しています。具体的には、空間構造に依存しない「光線記述方式」による空間情報の処理手法の研究に取り組み、以下の検討を進めてきました。

- ・光線記述方式の提唱と理論的体系化
- ・空間情報標本化に関する理論的検討 (All in-Focus Light Field Rendering)
- ・カメラアレイを用いた動空間情報の実時間処理 (Video-Based Rendering)
- ・数千眼レンズアレイの光学的検討と動空間情報の実時間処理 (LIFLET: Light Field Live with Thousands of Lenslets, McLiflet: Multi Cameras for LIFLET)
- ・3次元構造モデル推定に基づく実空間光線情報の補間と圧縮 (Virtual Object Surface, Simplified View-Dependent Structure, All in-Focus LIFLET)
- ・2次元映像メディアとの整合性を持つ3次元空間メディア (自由視点画像合成に基づく光線空間符号化)

複合現実感プロジェクト

我々が生活する「実世界」と、コンピュータの中に作り出される「バーチャルな世界」を高度に融合する複合現実感 (Mixed Reality) の研究に取り組んでいます。このためには、2つの世界の時間的・空間的・光学的な整合性を実現する必要があります。本プロジェクトでは、様々な入力方式・実時間処理・画像合成方式・対話的インタフェース・ディスプレイ装置の研究に取り組み、以下のような検討を進めてきました。

- ・ビデオ画像から人物領域を実時間で自動抽出する Thermo-key
- ・Thermo-key を利用したプライバシー保護技術 Thermosaic
- ・GPU を用いた高速画像処理 (General-Purpose Computation Using Graphics Hardware)
- ・実写品質のCG合成 (Image-Based Rendering, Photon Mapping) と実写を超える網膜レベルでのリアリティを実現する Vision-Realistic Rendering, および実写をアブストラクト化する Non Photorealistic Rendering
- ・大型スクリーン環境における対話的インタフェース (Reflection-Based Interface, Virtual Light Source)
- ・ビジュアルコミュニケーションのための視線一致光学系の開発 (i-ball, 透過液晶パネル)
- ・自然物の触感を有するユーザインタフェース (Strino: STRain-based user Interface with tactile of elastic natural Object)

実世界指向情報環境プロジェクト

情報技術の発展と情報化社会の成熟に伴い、それによって生み出される空間の演出およびデザインの重要性が高まっています。本プロジェクトでは、技術と芸術の境界に挑んできました。

- ・見る位置に応じて見え方が変化するディスプレイ (Lumisight)
- ・対面コミュニケーションを支援するテーブル型ディスプレイ (Lumisight Table)
- ・鏡の中に別の空間を映し出すインタラクティブアート (through the looking glass)
- ・実世界指向インタフェースのための透明マーカーの開発
- ・影に彩りや情報を与えた空間演出を可能にするマルチプロジェクションシステム (Textured Shadow, Movie-in-Shadow)
- ・音楽心理理論に基づくインタラクティブアート (otoato)
- ・頭部装着型実音場拡張システム

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

Henrik Wann Jensen、苗村健、『フォトンマッピング ―実写に迫るコンピュータグラフィックス』、2002 年 7 月、オーム社、209pp.。

論文等

Kunio Yamada, Tadashi Ichikawa, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa and Takahiro Saito, "High Quality Stereo Panorama Generation using a 3 Camera System," *SPIE Visual Commun. and Image Process. (VCIP2000)*, 4067, 2000.6, pp. 419-428. 【査読有】

金丸利文・山田邦男・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「セッティング表現に基づく共有空間における3次元オブジェクトの階層的表現」、『信学技報』、2000 年 7 月、pp. 17～22。

山田邦男・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「センサ変換画像のステレオマッチングによる自然シーンの構造推定」、『3次元画像コンファレンス 2000』、2000 年 7 月、pp. 9～12。

金丸利文・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「共有 3 次元画像空間におけるセッティング表現に基づく中景表現」、『3次元画像コンファレンス 2000』、2000 年 7 月、pp. 13～16。

三村篤志・新田拓哉・苗村健・原島博、「仮想光源を用いたインタラクティブな立体表現」、『3次元画像コンファレンス 2000』、2000 年 7 月、pp. 35～38。

吉田達哉・苗村健・原島博、「インテグラルフォトグラフィを用いたインタラクティブ 3 次元 CG の合成」、『3次元画像コンファレンス 2000』、2000 年 7 月、pp. 39～42。

金丸利文・山田邦男・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「共有空間における3次元オブジェクトの階層的表現法」、『映情メ年次大』、2000 年 8 月、pp. 265～266。

山本健一郎・苗村健・原島博、「3次元センサとトランスオーラル処理を用いた音像の定位」、『VR 論』、5 巻、3 号、2000 年 9 月、pp. 981～987。【査読有】

Kunio Yamada, Tadashi Ichikawa, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa and Takahiro Saito, "Structure Analysis of Natural Scenes using Census Transform and Region Competition," *IEEE Intern. Conf. Image Process. (ICIP2000)*, II, 2000.9, pp. 772-775. 【査読有】

竹内 敬亮・苗村健・原島博、「3 次元物体の光線記述のためのテレセントリック撮像系」、『信学技報』、100 巻、281 号、2000 年 9 月、pp. 1～8。

池田裕美・苗村健・原島博・石川洵、「インタラクティブな透明球ディスプレイ i-ball の開発」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会』、2000 年 9 月、pp. 279～282。

市川忠嗣・山田邦男・金丸利文・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「フォトリアリスティックな3次元共有画像空間表現と構築」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会』、2000 年 9 月、pp. 327～330。

川原圭博・松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタの提案と実装～熱画像を利用した実時間システム～」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会』、2000 年 9 月、pp. 333～336。

山田邦男・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「センサ変換と領域競合法を用いた自然シーンの構造化」、『信学ソ大』、2000 年 9 月。

竹内敬亮・苗村健・原島博、「テレセントリックレンズによる光線情報の取得」、『映情学誌』、54 巻、10 号、2000 年 10 月、pp. 1474~1477。【査読有】

Tadashi Ichikawa, Kunio Yamada, Toshifumi Kanamaru, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa and Takahiro Saito, "Multimedia Ambiance Communication Using a Stereoscopic Display Environment," *Asia Symposium on Information Display (ASID'00)*, 2000.10, pp. 70-75。【査読有】

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Ray-based approach to Integrated 3D Visual Communication," *SPIE Three-Dimensional Video and Display: Devices and Systems (Critical Reviews of Optical Science and Technology)*, CR76, 2000.11, pp. 282-305。【査読有】 (Invited Talk)

山田邦男・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「センサ変換と領域競合法を併用した自然シーンの構造化」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2000)』、2000 年 11 月、pp. 95~96。

新田拓哉・苗村健・原島博、「インタラクティブな陰影処理による複合現実感」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2000)』、2000 年 11 月、pp. 92~93。

池田裕美・苗村健・原島博・石川洵、「透明球ディスプレイ i-ball におけるインタラクション」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2000)』、2000 年 11 月、pp. 71~72。

山田邦男・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「3眼周囲環境入力装置を用いた高品質ステレオパノラマ画像の生成」、『映情学誌』、55 巻、1 号、2001 年 1 月、pp. 151~158。【査読有】

Kunio Yamada, Tadashi Ichikawa, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa and Takahiro Saito, "Structure Analysis of Natural Scenes using Census Transform and Region Competition," *SPIE Visual Commun. Image Process. (VCIP2001)*, 4310, 2001.1, pp. 228-237。【査読有】

Tadashi Ichikawa, Shoichiro Iwasawa, Kunio Yamada, Toshifumi Kanamaru, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa, Shigeo Morishima and Takahiro Saito, "3D Image Capturing and Representation for Multimedia Ambiance Communication," *SPIE Stereoscopic Displays and Applications XII*, 4297A, 2001.1, pp. 132-140。【査読有】

Takeshi Naemura, Tatsuya Yoshida and Hiroshi Harashima, "3-D computer graphics based on integral photography," *Opt. Express*, 8, 2001.2, pp. 255-262. URL: <http://www.opticsexpress.org/oearchive/source/30085.htm>。【査読有】

望月研二・齊藤隆弘・市川忠嗣・森島繁生・相澤清晴・山田邦男・須賀弘道・岩澤昭和一郎・山本健一郎・児玉和也・苗村健・斎藤英雄、「3次元空間共有コミュニケーション技術の研究開発-実写画像をベースとしたマルチメディア・アンビエンスコミュニケーションの実現に向けて-」、『信学技報』、2001 年 2 月、pp. 47~54。

吉田達哉・苗村健・原島博、「インテグラルフォトグラフィを用いた 3次元 CG の合成」、『映情学誌』、55 巻、3 号、2001 年 3 月、pp. 474~478。【査読有】

池田裕美・苗村健・原島博・石川洵、「透明球ディスプレイ i-ball によるインタラクティブコミュニケーション」、『インタラクション 2001』、2001 年 3 月、pp. 59~60。

山本健一郎・望月研二・市川忠嗣・苗村健・齊藤隆弘・原島博、「主成分分析を用いた頭部伝達関数のクラスタリング」、『信学総大』、2001 年 3 月。

大井隆太郎・浜本隆之・赤池正巳・苗村健・相澤清晴、「選択画素読み出しイメージセンサの評価」、『信学総大』、2001 年 3 月。

N. P. Chandrasiri, T. Naemura and H. Harashima, "Analysis and Synthesis of Facial Expressions based on Personal Facial Expression Space (PFES に基づく顔画像表情分析・合成)," *信学総大*, 2001.3.

多胡順司・新田拓哉・苗村健・原島博、「Video-Based Rendering の画質改善(1)-多眼入力システムと実時間光線補間-」、『信学総大』、2001 年 3 月。

多胡順司・新田拓哉・苗村健・原島博、「Video-Based Rendering の画質改善(2) -実時間計測による動的レイヤ構造の利用-」、『信学総大』、2001 年 3 月。

松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「透過表現を用いたビデオアバタの改良と応用」、『信学総大』、2001 年 3 月。

Tadashi Ichikawa., Kunio Yamada, Takahumi Kanamaru, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa, Shigeo Morishima and Takahiro Saito, "Multimedia Ambience Communication," *IEEE Signal Processing Magazine*, 18, no.3, 2001.5, pp. 43-50.

【査読有】

川原圭博・松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタの提案と熱画像を利用した実時間システムの実装」、『映情学誌』、55 巻、5 号、2001 年 5 月、pp. 746~750。【査読有】

Ryutaro Ooi, Takayuki Hamamoto, Masami Akaike, Takeshi Naemura and Kiyoharu Aizawa, "Real Time IBR System with Pixel Based Random Access Image Sensor," *Intern. Symp. Signals, Systems and Electronics (ISSSE2001)*, 2001.7, pp. 359-362.

Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura, and Hiroshi Harashima, "Real Time Facial Expression Analysis with Applications to Facial Animation in MPEG-4," *5th World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics (SCI2001)*, 2001.7, pp. 244-250.【査読有】

松下剛士・新田拓哉・苗村健・原島博、「空間共有通信における透過型ビデオアバタ」、『3次元画像コンファレンス 2001』、2001 年 7 月、pp. 29~32。

多胡順司・新田拓哉・苗村健・原島博、「動的レイヤを用いた Video-Based Rendering」、『3次元画像コンファレンス 2001』、2001 年 7 月、pp. 33~36。

Naiwala P. Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Real Time Facial Expression Recognition System with Applications to Facial Animation in MPEG-4," *IEICE Trans. Inf. & Syst*, 2001.8, pp. 1007-1017.【査読有】

Hiroshi Ikeda, Takeshi Naemura, Hiroshi Harashima and Jun Ishikawa, "i-ball: Interactive Information Display like a Crystal Ball," *ACM SIGGRAPH 2001 Emerging Technologies*, 2001.8, p. 122.【査読有】

大井隆太郎・浜本隆之・苗村健・相澤清晴、「実時間 IBR システムの為の選択画素出力イメージセンサ設計と評価」、『映情年次大』、25 巻、6 号、2001 年 8 月、pp. 374~375。

Takahide Takano, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "3D Space Coding using Virtual Object Surface," *Systems and Computers in Japan*, 32, no.12, 2001.9, pp. 47-59.【査読有】

鳥羽美奈子・苗村健・齊藤隆弘・相澤清晴・望月研二・原島博、「空間共有コミュニケーションにおける建築物表現のための複合的な情報利用」、『日本バーチャルリアリティ学会第 6 回大会』、2001 年 9 月、pp. 227~230。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「鏡メタファによる情報環境 `i-mirror`」、『日本バーチャルリアリティ学会第 6 回大会』、2001 年 9 月、pp. 397~398。

大井隆太郎・浜本隆之・相澤清晴・苗村健、「選択読み出しイメージセンサによる実時間 IBR システム」、『第 19 回ロボット学術講演会 RSJ2001』、2001 年 9 月。

Ryutaro Ooi, Takayuki Hamamoto, Takeshi Naemura and Kiyoharu Aizawa, "Pixel Independent Random Access Image Sensor for Real Time Image-Based Rendering System," *IEEE Intern. Conf. Image Process. (ICIP2001)*, II, 2001.10, pp. 193-196.【査読有】

田中悠・牛田啓太・杉田、「ユーザの位置に応じた公共スペースのパーソナル情報空間化」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2001)』、2001 年 11 月、pp. 29~30。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「鏡メタファ情報環境 i-mirror におけるアプリケーション」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2001)』、2001 年 11 月、pp. 85～86。

鳥羽美奈子・苗村健・齊藤隆弘・相澤清晴・望月研二・原島博、「空間共有コミュニケーションにおける図面とレンジデータを用いた建築物表現」、『映情メ冬大』、6 巻、7 号、2001 年 12 月、p. 55。

山田邦男・望月研二・市川忠嗣・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「マルチメディア・アンビエンスコミュニケーションにおけるステレオベースの自然シーン構造化」、『画電学誌』、31 巻、1 号、2002 年 1 月、pp. 21～29。【査読有】

Kunio Yamada, Kenji Mochizuki, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa and Takahiro Saito, "Virtual View Generation of Natural Panorama Scenes by Setting Representation," *SPIE Stereoscopic Displays and Applications XIII*, 4660, 2002.1. 【査読有】

Takeshi Naemura, Junji Tago and Hiroshi Harashima, "Real-Time Video-Based Modeling and Rendering of 3D Scenes," *IEEE Computer Graphics and Applications*, 22, no.2, 2002.3, pp. 66-73.【査読有】

Takeshi Naemura, Takuya Nitta, Atsushi Mimura and Hiroshi Harashima, "Virtual Shadows -- Enhanced Interaction in Mixed Reality Environment," *IEEE VR2002*, 2002.3, pp. 293-294.【査読有】

山本健一郎・望月研二・苗村健・齊藤隆弘・原島博、「空間共有通信における個人差を考慮した音像の提示」、『映情メ技報』、2002 年 3 月、pp. 25～30。

田中悠・牛田啓太・杉田馨・苗村健・原島博・島田義弘、「公共空間の個人利用システム i-wall による空間痕跡の時間軸探索」、『インタラクション 2002』、2002 年 3 月、pp. 69～70。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「視線一致光学系を用いたディスプレイシステム i-mirror における鏡メタファインタラクション」、『インタラクション 2002』、2002 年 3 月、pp. 85～86。

筧康明・牛田啓太・苗村健・原島博、「人物軌跡を利用したインタラクションシステム`i-trace` 一場を通じた人と人のつながりの演出」、『インタラクション 2002』、2002 年 3 月、pp. 179～180。

井澤克俊・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「顔印象から連想される物体の自動選出」、『信学総大』、2002 年 3 月。

祝捷・高橋桂太・牛田啓太・苗村健・原島博、「実時間 IBMR 技術を応用した電子的な鏡(Plenoptic Digital Mirror)の試作」、『信学総大』、2002 年 3 月。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「時間軸に沿って探索する機能を持つ鏡のあるインテリジェント待合室の試作」、2002 年 3 月。

田中悠・牛田啓太・杉田馨・苗村健・原島博・島田義弘、「公共空間の個人利用システム i-wall におけるインタフェースデザイン」、『信学総大』、2002 年 3 月。

原島博・牛田啓太・田中悠・苗村健、「街の情報化を考える--`いまだけ・ここだけ`の情報環境デザイン--」、『信学会ヒューマンコミュニケーショングループ大会特別講演』、2002 年 3 月、pp. 1～9。

山田邦男・望月研二・苗村健・相澤清晴・齊藤隆弘、「自然パノラマシーンのセッティング表現の構築とそれに基づく仮想視点移動」、『映情学誌』、56 巻、4 号、2002 年 4 月、pp. 583～591。【査読有】

竹内敬亮・苗村健・原島博、「3次元物体の光線記述のためのテレセントリック撮像系」、『映情学誌』、56 巻、4 号、2002 年 4 月、pp. 617～627。【査読有】

Takeshi Naemura, Takuya Nitta, Atsushi Mimura and Hiroshi Harashima, "Virtual Shadows in Mixed Reality Environment Using Flashlight-like Devices," *Trans. Virtual Reality Society of Japan*, 7, no.2, 2002.6, pp. 227-237.【査読有】

Jie Zhu, Keita Takahashi, Keita Ushida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Plenoptic Digital Mirror: An Electronic Mirror Using Video-Based Modeling and Rendering," *3次元画像コンファレンス 2002*, 2002.7, pp. 149-152.

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "The Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication," B. Javidi and F. Okano ed., *Three-Dimensional Television, Video, and Display Technologies*, 2002.8, New York, Springer-Verlag(New York), pp. 183-211.

Toshifumi Kanamaru, Takeshi Naemura, Kiyoharu Aizawa, Shigeo Morishima and Takahiro Saito, "Three-Dimensional Image Capturing and Representation for Multimedia Ambience Communication," B. Javidi and F. Okano ed., *Three-Dimensional Television, Video, and Display Technologies*, 2002.8, New York, Springer-Verlag(New York), pp. 227-240.

牛田啓太・山本健一郎・原島博・苗村健、「多次元 DCT による多チャンネル音場情報符号化に向けた一検討」、『映情メ
年次大』、12 巻、6 号、2002 年 8 月。

田中悠・牛田啓太・杉田馨・苗村健・原島博・島田義弘、「壁とパーソナル空間の交わりを情報環境にするシステム i-wall」、『映情学誌』、56 巻、9 号、2002 年 9 月、pp. 1500~1505。【査読有】

崎田健二・Chandrasiri N.P.・原島博・苗村健、「顔画像における性別と年齢の統合的分析」、『日本顔学会誌』、2 巻、1 号、
2002 年 9 月、pp. 83~95。【査読有】

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「実世界指向情報環境: 情報街具の提案と試み—i-mirror と i-wall—」、『情報処理
学会研究報告』、2002 年 9 月、pp. 9~15。

加藤寛・筧康明・牛田啓太・苗村健・原島博、「影の表現を通じたインタラクティブ拡張現実空間」、『日本バーチャルリアリ
ティ学会第 7 回大会』、2002 年 9 月、pp. 105~108。

筧康明・加藤寛・牛田啓太・苗村健・原島博、「人物軌跡を利用した空間演出インタラクティブシステム i-trace」、『日本バ
ーチャルリアリティ学会第 7 回大会』、2002 年 9 月、pp. 431~434。

高橋桂太・杉田馨・苗村健・原島博、「複数の距離画像を用いた実時間 IBMR システムに向けた基礎検討」、『日本バーチ
ャルリアリティ学会第 7 回大会』、2002 年 9 月、pp. 477~480。

安田和隆・杉田馨・牛田啓太・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタを用いた双方向コミュニケーション支援」、『日本バ
ーチャルリアリティ学会第 7 回大会』、2002 年 9 月、pp. 495~498。

安田和隆・杉田馨・牛田啓太・苗村健・原島博、「透過型ビデオアバタを用いたコミュニケーション・プレゼンテーション支援
システム」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2002』、2002 年 9 月、pp. 589~592。

井澤克俊・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「連想に基づく顔印象の自動分類と強調表現の検討」、『第 7 回日本顔学
会大会』、2002 年 9 月。

山本健一郎・望月研二・苗村健・齊藤隆弘・原島博、「直交基底空間上の軌跡による HRTF のクラスタリングと評価」、『映
情学誌』、56 巻、11 号、2002 年 11 月、pp. 1759~1768。【査読有】

Naiwala P. Chandrasiri, Istvan Barakonyi, Takeshi Naemura, Mitsuru Ishizuka and Hiroshi Harashima, "Communication
over the Internet using a 3D Agent with Real-time Facial Expression Analysis, Synthesis and Text to Speech
Capabilities," *IEEE Int'l Conf. on Communication Systems (ICCS 2002)*, no.479, 2002.11, Singapore.【査読有】(5 pages)

高橋桂太・苗村健・原島博、「多眼カメラレイにおける Plenoptic Sampling および等価被写界深度に関する理論的考察」、『
信学技報』、102 巻、469 号、2002 年 11 月、pp. 29~34。

高橋桂太・苗村健・原島博、「多眼画像取得における Plenoptic Sampling および等価被写界深度に関する理論的考察」、『
画像符号化シンポジウム(PCSJ2002)』、2002 年 11 月、pp. 69~70。(学生論文賞 受賞)[ベストポスター賞 受賞]

加藤寛・牛田啓太・飯田誠・苗村健・原島博、「マルチプロジェクションを用いた拡張現実空間における影のインタラクション」、『映像メディア処理シンポジウム(IMPS2002)』、2002年11月、pp. 123~124。

Keita Ushida, Yu Tanaka, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "i-mirror: an Interaction/information Environment Based on a Mirror Metaphor Aiming to Install into Our Daily Space," *12th International Conference on Artificial Reality and Telexistence(ICAT 2002)*, 2002.12, pp. 113-118.【査読有】

Yasuaki Kakehi, Keita Ushida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "i-trace: an Interactive System Drawing One's Traces and Illuminating the Area," *12th International Conference on Artificial Reality and Telexistence(ICAT 2002)*, 2002.12, pp. 154-161.【査読有】

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication," *Pre-ICAT CREST Symposium on Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence*, 2002.12. (Invited Talk)

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博・島田義弘、「街角情報環境に向けたインタフェースデザイン—情報街具としての i-wall を例に—」、『日本バーチャルリアリティ学会 サイバースペースと仮想都市研究会第5回シンポジウム(日本バーチャルリアリティ学会研究報告)』、7巻、4号、2002年12月、pp. 51~58。

舘日章・原島博・廣瀬通孝・川上直樹・苗村健・広田光一、「テレイグジスタンス遠隔通信システム」、『計測自動制御学会第3回システムインテグレーション部門講演会(SICE SI2002)』、2002年12月、pp. 1~2。

牛田啓太・苗村健・原島博・石川洵、「多人数観察可能なインタラクティブ透明球ディスプレイ i-ball 2 の開発」、『計測自動制御学会第3回システムインテグレーション部門講演会(SICE SI2002)』、2002年12月、pp. 9~10。

寛康明・牛田啓太・苗村健・原島博、「i-trace: 人物軌跡による人と人とのつながりを演出するシステム」、『計測自動制御学会第3回システムインテグレーション部門講演会(SICE SI2002)』、2002年12月、pp. 11~12。

苗村健、「3次元空間メディアの実現」、『季刊 InterCommunication』、44号、2003年2月、pp. 82~84。

杉田馨・苗村健・原島博、「グラフィックスプロセッサを用いた高速画像処理プラットフォームの検討」、『信学技報』、2003年2月。

川上玲・寛康明・苗村健・原島博、「Lumisight: Lumisty フィルムを用いた方向依存映像ディスプレイ」、『インタラクション2003』、2003年2月、pp. 53~54。

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Ray-Based Approach to Integrated 3D Visual Communication," S. Tachi ed., *Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence*, 2003.3, Tokyo, Ohmsha(Tokyo) and IOS Press, pp. 73-97.

中洲俊信・Chandrasiri N.P.・苗村健・原島博、「対話型遺伝的アルゴリズムを用いた似顔絵作成」、『信学技報』、2003年3月、ヒューマンコミュニケーショングループ大会。

杉田馨・苗村健・原島博、「グラフィックスプロセッサを用いた実時間ステレオマッチング」、『信学総大』、2003年3月。

光田智史・山本智幸・高橋桂太・苗村健・原島博、「奥行き推定を用いたインテグラルフォトグラフィからの自由視点画像合成」、『信学総大』、2003年3月。

川上玲・寛康明・苗村健・原島博、「Lumisight ディスプレイを用いた透明パーティション」、『信学総大』、2003年3月。

Kumiko Morimura, Keita Ushida, Makoto Iida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "A Study on Effect of Non-Vibrato Singing in Choral Music," *The 8th WEStern Pacific Acoustic Conference (WESPAC8)*, 2003.4.【査読有】

Kumiko Morimura, Keita Ushida, Makoto Iida, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Impressions of Non-Vibrato Singing in Choral Music," *Society of Music Perception and Cognition (SMPC 2003)*, 2003.6, Las Vegas.

柿本正憲・向井亨光・芳賀剛士・西田友是・苗村健・原島博、「反射特性を考慮した実時間グレア描画手法」、『画電学誌』、32 巻、4 号、2003 年 7 月、pp. 336~345。【査読有】

Kazutaka Yasuda, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Thermo-Key: Human Region Segmentation from Video Using Thermal Information," *ACM SIGGRAPH 2003 Emerging Technologies*, no.Booth 40, 2003.7, San Diego.【査読有】

Minako Toba, Takeshi Naemura, Takahiro Saito, Kiyoharu Aizawa, Kenji Mochizuki and Hiroshi Harashima, "3D Image Representation of Buildings Utilizing Heterogeneous Information for Multimedia Ambiance Communication," *SPIE VCIP2003*, 2003.7, Lugano.【査読有】

川上玲・笈康明・苗村健・原島博、「視界制御フィルムを用いた方向依存透明ディスプレイ Lumisight」、『信学技報』、2003 年 7 月。

加藤寛・苗村健・原島博、「影を拡張したインタラクティブな映像空間の創出」、『信学技報』、2003 年 7 月。

光田智史・山本智幸・高橋桂太・苗村健・原島博、「実時間奥行き推定を用いたインテグラルフォトグラフィからの自由視点画像合成」、『3次元画像コンファレンス 2003』、2003 年 7 月、pp. 13~16。(優秀論文賞 受賞)

高橋桂太・苗村健・原島博、「多眼画像取得におけるシーンの奥行きとエイリアシングに関する理論的考察」、『3次元画像コンファレンス 2003』、2003 年 7 月、pp. 133~136。

高橋桂太・苗村健・原島博、「自由視点画像合成における光線情報のサンプリングと被写界深度に関する理論」、『映情学誌』、57 巻、10 号、2003 年 9 月、pp. 1292~1299。【査読有】

Keita Takahashi, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Depth of Field in Light Field Rendering," *IEEE Intern. Conf. Image Process. (ICIP2003)*, 1, 2003.9, Barcelona, pp. 409-412.【査読有】

Satoshi Mitsuda, Tomoyuki Yamamoto, Keita Takahashi, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Interactive View Synthesis from Integral Photography Using Estimated Depth Information," *SPIE Three-Dimensional TV, Video, and Display II*, 5243, 2003.9, Orlando, pp. 116-124.【査読有】

Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Thermo-Key: Human Region Segmentation from Video Using Thermal Information," *21st Century COE Symposium on Real World Information Systems*, 2003.9, pp. 29-32.

高橋桂太・久保田彰・苗村健、「Light Field Rendering における全焦点画像合成に向けた合焦判定に関する基礎検討」、『信学技報』、2003 年 9 月。

笈康明・飯田誠・苗村健、「インタラクティブな多人数用方向依存ディスプレイ Lumisight Table の光学設計」、『日本バーチャルリアリティ学会第 8 回大会』、2003 年 9 月、pp. 111~114。(学術奨励賞 受賞)

山本智幸・苗村健、「レンズアレイを用いた実時間 Image-Based Rendering システムの実装」、『日本バーチャルリアリティ学会第 8 回大会』、2003 年 9 月、pp. 479~482。

井澤克俊・苗村健、「透過液晶パネルを利用した視線一致光学系の基礎検討」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2003』、2003 年 9 月、pp. 45~48。

飯田誠・苗村健・原島博、「ひずみゲージを用いた透明タッチパネルの基礎研究」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2003』、2003 年 9 月、pp. 821~824。

笈康明・飯田誠・苗村健、「インタラクティブな多人数用方向依存ディスプレイテーブル Lumisight Table の提案」、『FIT2003 情報科学技術フォーラム 情報技術レターズ』、2 巻、2003 年 9 月、pp. 293~294。【査読有】(FIT2003 論文賞受賞)

山本智幸・苗村健、「レンズアレイ方式 IBR システムにおける実時間処理の検討」、『FIT2003 情報科学技術フォーラム 一般講演論文集』、3 巻、2003 年 9 月、pp. 365~366。

中洲俊信・N.P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「対話型 GA を用いた似顔絵作成システムの検討」、『第 8 回日本顔学会大会』、2003 年 9 月。

Yu Tanaka, Keita Ushida, Takeshi Naemura, Hiroshi Harashima and Yoshihiro Shimada, "i-wall: Personalizing a Wall as an Information Environment with a Cellular Phone Device," *The Fifth Annual Conference on Ubiquitous Computing (UbiComp 2003)*, 2003.10, pp. 157-158.【査読有】

Hiroshi Kato, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Graphic Shadow: Augmenting Your Shadow on the Floor," *The Second Intern. Symp. on Mixed and Augmented Reality (ISMAR 2003)*, 2003.10, pp. 306-307.【査読有】

Hiroshi Kato, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Textured Shadow," *The Second Intern. Symp. on Mixed and Augmented Reality (ISMAR 2003) MR Technology Expo*, 2003.10, pp. 352-353.【査読有】

Kaoru Sugita, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Performance Evaluation of Programmable Graphics Hardware for Image Filtering and Stereo Matching," *ACM Symp. on Virtual Reality Software and Technology (VRST 2003)*, 2003.10, pp. 176-183.【査読有】

杉田馨・高橋桂太・苗村健・原島博、「GPU を用いた合焦判定による Light Field からの全焦点画像合成」、『信学技報』、2003 年 10 月。

山本智幸・苗村健、「屈折率分布レンズ方式 IBR システムにおける奥行き圧縮効果の除去」、『信学技報』、IE2003-105、2003 年 11 月。(映像情報メディア学会研究奨励賞受賞 (映情学技報 AIT2003-153))

山本智幸・苗村健、「レンズアレイ方式 IBR システムにおける奥行き圧縮効果の除去」、『映像メディア処理シンポジウム (IMPS2003)』、2003 年 11 月、pp. 81~82。

井澤克俊・苗村健、「透過液晶パネルを利用した視線一致光学系における照り返しの軽減」、『映像メディア処理シンポジウム (IMPS2003)』、2003 年 11 月、pp. 37~38。(ベストポスター賞 受賞)

高橋桂太・久保田彰・苗村健、「合焦判定を利用した Light Field からの自由視点・全焦点画像の合成」、『映像メディア処理シンポジウム (IMPS2003)』、2003 年 11 月、pp. 15~16。

柿本正憲・松岡薫・西田友是・苗村健・原島博、「まつ毛の回折光を考慮したグレアの高速表示」、『画像電子学会ビジュアルコンピューティングワークショップ 2003 宮島』、2003 年 11 月。

牛田啓太・田中悠・苗村健・原島博、「鏡メタファに基づくインタラクション／情報環境 i-mirror」、『VR 論』、8 巻、4 号、2003 年 12 月、pp. 421~431.【査読有】

Keita Takahashi, Akira Kubota and Takeshi Naemura, "All in-Focus View Synthesis from Under-Sampled Light Fields," *13th International Conference on Artificial reality and Telexistence (ICAT2003)*, 2003.12, pp. 249-256.【査読有】

筧康明・飯田誠・苗村健・白井良成・松下光範・大黒毅、「Lumisight Table: 天地問題を解消した対面協調支援システム」、『11th Workshop on Interactive Systems and Software (WISS2003)』、2003 年 12 月、pp. 109~114.【査読有】(対話発表賞 受賞)

安田和隆・飯田誠・苗村健、「温度情報と色情報を併用した実画像からの人物領域抽出」、『信学技報』、2003 年 12 月。

飯田誠・苗村健・原島博、「上面に実物体の配置が可能なタッチパネルの研究」、『計測自動制御学会第 4 回システムインテグレーション部門講演会 (SICE SI2003)』、2003 年 12 月、オーガナイズドセッション複合現実感 pp. 251~252。

舘暲・原島博・廣瀬通孝・川上直樹・苗村健・広田光一、「テレグジスタンス遠隔通信システム(2)」、『計測自動制御学会第 4 回システムインテグレーション部門講演会 (SICE SI2003)』、2003 年 12 月、オーガナイズドセッション館 CREST プロジェクト: テレグジスタンスを用いる相互コミュニケーションシステム。

Kazutaka Yasuda, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Thermo-Key: Human Region Segmentation from Video," *IEEE Computer Graphics and Applications*, 24, no.1, 2004.1, pp. 26-30.【査読有】

Tomoyuki Yamamoto and Takeshi Naemura, "Real-Time Capturing and Interactive Synthesis of 3D Scenes Using Integral Photography," *IS&T/SPIE Electronic Imaging 2004, Stereoscopic Displays and Applications XV*, 2004.1.【査読有】

小島將・苗村健、「レンズアレイ方式 IBR システムにおける最適な撮影条件の検討」、『信学技報』、2004 年 2 月。

Kaoru Sugita, Keita Takahashi, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Focus Measurement on Programmable Graphics Hardware for All in-Focus Rendering from Light Fields," *IEEE VR2004*, 2004.3, pp. 255-256.【査読有】

西貝吉晃・安田和隆・苗村健、「Thermo-key を利用したプライバシー保護のための実時間モザイク処理」、『インタラクシオン 2004』、2004 年 3 月、pp. 23~24。

橋田朋子・笥康明・苗村健、「i-trace を用いた合奏システム」、『インタラクシオン 2004』、2004 年 3 月、pp. 253~254。

西貝吉晃・安田和隆・苗村健、「人物領域を重視した高圧縮画像符号化の検討」、『信学総大』、2004 年 3 月。

櫛田和貴・高橋桂太・苗村健、「視点依存簡易モデルのインタラクティブ合成による IBR の検討」、『信学総大』、2004 年 3 月。

松岡薫・柿本正憲・西田友是・苗村健・原島博、「まつ毛によって生じる回折光のシミュレーションとグレア表現への応用」、『第 66 回情報処理学会全国大会』、2004 年 3 月。(学生奨励賞 受賞)

Takeshi Naemura, Masahide Kaneko and Hiroshi Harashima, "Compression and Representation of 3-D Images," K. Aizawa, K. Sakaue and Y. Suenaga eds., *Image Processing Technologies -- Algorithms, Sensors, and Applications --*, 2004.4, Marcel Dekker Inc, pp. 90-115.

苗村健、「バーチャルリアリティ技術の最新動向」、『電気学会誌』、124 巻、6 号、2004 年 5 月、pp. 353~356。

N. P. Chandrasiri, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Interactive Analysis and Synthesis of Facial Expressions Based on Personal Facial Expression Space," *IEEE Intern. Conf. Automatic Face and Gesture Recognition (FGR 2004)*, 2004.5, pp. 105-110.【査読有】

蓑毛雄吾・笥康明・飯田誠・苗村健、「影を映像メディアにするマルチプロジェクションシステム」、『芸術科学会第 3 回 NICOGRAPH 春季大会』、2004 年 5 月、pp. 59~60。

Tomoko Hashida, Yasuaki Kakehi and Takeshi Naemura, "Ensemble system with i-trace," *International Conf. on New Interfaces for Musical Expression (NIME04)*, 2004.6, pp. 215-216.【査読有】

柿本正憲・松岡薫・西田友是・苗村健・原島博、「波動光学に基づくグレア生成と実時間表示手法」、『Visual Computing / グラフィクスと CAD 合同シンポジウム 2004』、2004 年 6 月、pp. 101~106。(グラフィクスと CAD 研究会優秀研究発表賞 (GCAD 賞) 受賞)

N. P. Chandrasiri, Takeshi Naemura, Mitsuru Ishizuka, Hiroshi Harashima and Istvan Barakonyi, "Internet Communication Using Real-Time Facial Expression Analysis and Synthesis," *IEEE Multimedia Magazine*, 11, no.3, 2004.7, pp. 20-29.【査読有】

宮田雅子・飯田誠・苗村健・原島博、「駅におけるサインシステムの Re-Design」、『Design Symposium 2004』、2004 年 7 月、pp. 139~142。

飯田誠・松下光範・大黒毅・白井良成・笥康明・苗村健、「協調作業支援システム Lumisight Table を用いた風力発電適地選定教育」、『日本工学教育協会 平成 16 年度工学・工学教育研究講演会』、2004 年 7 月、pp. 419~420。

Tomoyuki Yamamoto, Masaru Kojima and Takeshi Naemura, "LIFLET: Light Field Live with Thousands of Lenslets," *ACM SIGGRAPH 2004 Emerging Technologies*, etech_0130, 2004.8, Los Angeles.【査読有】

Yasuaki Kakehi, Makoto Iida, Takeshi Naemura, Yoshinari Shirai, Mitsunori Matsushita and Takeshi Ohguro, "Lumisight Table: Interactive View-Dependent Display-Table Surrounded by Multiple Users," *ACM SIGGRAPH 2004 Emerging Technologies*, etech_0016, 2004.8, Los Angeles.【査読有】

Keita Takahashi and Takeshi Naemura, "All in-Focus Light Field Viewer," *ACM SIGGRAPH 2004 Posters*, no.48, 2004.8, Los Angeles.【査読有】

Yugo Minomo, Yasuaki Kakehi, Makoto Iida and Takeshi Naemura, "Movie-in-Shadow: Your Shadow is a Display," *ACM SIGGRAPH 2004 Posters*, no.15, 2004.8, Los Angeles.【査読有】

稲田大輔・倉持基・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「顔の向きに依存しない人物同定システム」、『日本顔学会誌』、4巻、1号、2004年9月、pp. 89~94。【査読有】

寛康明・苗村健、「through the looking glass」、『芸術科学論文誌』、3巻、3号、2004年9月、pp. 185~188。【査読有】(第3回論文賞受賞)

西貝吉晃・飯田誠・苗村健、「Thermosaic: ライブ映像の自動モザイク処理」、『日本バーチャルリアリティ学会第9回大会』、2004年9月、pp. 59~62。

高橋桂太・苗村健、「合焦判定に基づく全焦点 Light Field Viewer」、『FIT2004 情報科学技術フォーラム 一般講演論文集』、3巻、2004年9月、pp. 221~224。

中洲俊信・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「対話型 GA を用いた似顔絵作成におけるユーザ意思反映の検討~顔部品選択・位置形状調節機能の導入~」、『第9回日本顔学会大会』、2004年9月、p. 194。

Keita Takahashi, Akira Kubota and Takeshi Naemura, "A Focus Measure for Light Field Rendering," *IEEE Intern. Conf. Image Process. (ICIP2004)*, 3, 2004.10, pp. 2475-2478.【査読有】

Masanori Kakimoto, Kaoru Matsuoka, Tomoyuki Nishita, Takeshi Naemura and Hiroshi Harashima, "Glare Generation Based on Wave Optics," *Pacific Graphics 2004*, 2004.10, pp. 133-142.【査読有】(Best Paper Award 受賞)

牛田啓太・苗村健・原島博、「実写動画像マウスポインタの提案とその応用」、『ヒューマンインタフェースシンポジウム 2004』、2004年10月、pp. 1033~1036。

苗村健・原島博、「ヒューマンコミュニケーションメディア」、東京大学 21 世紀 COE 実世界情報プロジェクト監修監修、『人と共存するコンピュータ・ロボット学 --実世界情報システム--』、2004年11月、オーム社、pp. 95~102。

Mitsunori Matsushita, Makoto Iida, Takeshi Ohguro, Yoshinari Shirai, Yasuaki Kakehi, and Takeshi Naemura, "Lumisight Table: A face-to-face collaboration support system that optimizes direction of projected information to each stakeholder," *CSCW2004*, 2004.11, pp. 274-283.【査読有】

池田大介・苗村健、「多チャンネル映像の同時閲覧システムに関する基礎検討」、『映像メディア処理シンポジウム (IMPS2004)』、2004年11月、pp. 29~30。

塚本敏弘・西貝吉晃・苗村健、「Anisotropic diffusion を応用した thermo-key の抽出精度改善」、『映像メディア処理シンポジウム (IMPS2004)』、2004年11月、pp. 99~100。

Takeshi Naemura, "Real World Oriented Human Media," *CREST Symposium on Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence II*, 2004.12. (Invited Talk)

Takeshi Naemura, "3D Computer Graphics Based on Integral Photography," *The 11th International Display Workshops*, 3D3-1, 2004.12, pp. 1461-1464. (Invited Talk)

池田大介・苗村健、「多チャンネル映像の同時閲覧インタフェースの検討」、『信学技報』、2004年12月。

小島將・苗村健、「レンズアレイとカメラアレイを併用した自由視点画像合成の検討」、『信学技報』、2004年12月。

高橋桂太・苗村健、「Light Field Renderingにおける合焦判定法の空間解析」、『信学技報』、2004年12月。

岡田敦・飯田誠・苗村健、「頭部装着型実音場拡張システムの基礎検討」、『信学技報』、2004年12月。

塚本敏弘・西貝吉晃・苗村健、「非等方性最大値フィルタを用いた thermo-key の抽出精度改善」、『映情メ冬大』、13巻、10号、2004年12月。

高橋桂太・苗村健、「合焦判定に基づくマルチカメラ画像からの全焦点自由視点画像合成」、『計測自動制御学会第5回 SICE システム インテグレーション部門講演会 (SICE SI2004)』、2004年12月、オーガナイズドセッションマルチカメラによるセンシング pp. 609~610。(ベストセッション講演賞 受賞)

Yasuaki Kakehi, Makoto Iida, Takeshi Naemura, Yoshinari Shirai, Mitsunori Matsushita and Takeshi Ohguro, "Lumisight Table: Interactive View-Dependent Tabletop Display Surrounded by Mutiple Users," *IEEE Computer Graphics and Applications*, 25, no.1, 2005.1, pp. 48-53.【査読有】

Masaru Kojima and Takeshi Naemura, "McLiflet: multiple cameras for light field live with thousands of lenslets," *SPIE Stereoscopic Displays and Applications XVI*, 5664A-78, 2005.1.【査読有】

中洲俊信・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「対話型 GA を用いた似顔絵作成における髪モデルの検討」、『信学技報』、2005年1月。

塚本敏弘・西貝吉晃・苗村健、「エッジ保存平滑化フィルタを用いた Thermo-key の抽出精度改善」、『信学技報』、2005年1月。

寛康明・飯田誠・苗村健・松下光範、「Lumisight Table における卓上オブジェクトへの情報提示の基礎検討」、『インタラクシオン 2005』、2005年2月、pp. 225~226。

高橋桂太・久保田彰・苗村健、「Light Field Rendering における合焦判定と全焦点画像合成」、『信学論』、2005年3月、pp. 573~584.【査読有】

西貝吉晃・飯田誠・苗村健、「Thermosaic: 温度情報を利用した自動モザイク処理」、『映情学誌』、59巻、3号、2005年3月、pp. 422~426.【査読有】

松岡薫・N. P. Chandrasiri・苗村健・原島博、「主成分分析を用いた顔画像処理プラットフォームの開発」、『信学技報』、2005年3月。

川上翔治・飯田誠・寛康明・苗村健・松下光範、「Lumisight Table におけるカメラと歪ゲージを併用した接触入力の基礎検討」、『信学技報』、2005年3月。

岡田敦・飯田誠・苗村健、「頭部装着型実音場拡張システム」、『インタラクシオン 2005』、2005年3月、pp. 227~228。

田口裕一・苗村健、「自由視点画像合成に基づく光線空間符号化方式の基礎検討」、『信学総大』、2005年3月。

河宗玄・小島將・高橋桂太・苗村健、「レンズアレイ方式自由視点画像合成における合焦判定手法の適用」、『信学総大』、2005年3月。

一般向け作品等

加藤寛・苗村健・原島博、「光る影」、『インフォメーションアートの想像力展』、2003年3月、東京都写真美術館。

寛康明・苗村健、「through the looking glass」、『インフォメーションアートの想像力展』、2004年4月、東京都写真美術館。

寛康明・苗村健、「through the looking glass」、『第2回 DiVA 芸術科学会展』、2004年5月。【査読有】(大賞受賞)

寛康明・苗村健、「through the looking glass」、『Digital Art Festival 東京 2004, 東京ガジェット展』、2004年7月。

橋田朋子・寛康明・苗村健、「otoato <ver. IDE>」、『Design Initiative in Good Design Presentation 2004, ISUZU DESIGN EXPERIENCE』、2004年8月。

橋田朋子・寛康明・苗村健、「otoato」、『ASIA DIGITAL ART AWARD, インタラクティブアート部門』、2004年10月。【査読有】(優秀賞受賞)

西貝吉晃・飯田誠・苗村健、「異次元へワープ!? ポストクロマキー・合成技術の新時代展 サーモキー」、『SKIP CITY 彩の国ビジュアルプラザ 映像ミュージアム 未来映像ゾーン企画展』、2004年10月15日～2005年1月30日。

寛康明・苗村健、「through the looking glass」、『NHK BS1 デジタルスタジアム』、2004年12月23日。【査読有】(デジスタ2004 ゴールデンミュージズ(年間最優秀作品)受賞)

寛康明・苗村健、「through the looking glass」、『第8回文化庁メディア芸術祭』、2005年2月25日～2005年3月6日。【査読有】(審査委員会推薦作品 アート部門・インタラクティブ)

一般向けエッセイ等

苗村健、画像電子学会3次元画像調査専門委員会3次元画像用語事典編集委員会編、『3次元画像用語事典』、2000年7月、新技術コミュニケーションズ。

苗村健、「文献紹介: A Fuzzy Approach to Digital Image Warping」、『日本ファジィ学会誌』、13巻、5号、2001年10月、p. 468。

苗村健、「研究室紹介 Stanford University Computer Science Department Computer Graphics Laboratory」、『日本バーチャルリアリティ学会誌』、7巻、3号、2002年9月、pp. 219～222。

苗村健、「ISMAR2003 参加報告」、『ヒューマンインタフェース学会誌』、6巻、1号、2004年2月、p. 48。

一般向け講演等

苗村健、「光線理論が描く複合世界 ～IBR からインタラクションまで～」、『日本バーチャルリアリティ学会 複合現実感セミナー』、2000年4月。

苗村健、「Virtual Shadows in Mixed Reality Environment Using Flashlight-like Devices」、『日本バーチャルリアリティ学会 第2回複合現実感セミナー』、2002年10月。

苗村健、「3次元ディスプレイ技術から実写品質 CG・空間共有通信・情報街具へ」、『第28回ハイパーメディアシンポジウム ビジュアル・ストーリーミング』、2003年2月。

山本智幸・小島将・苗村健、「ふれあい展示 任意視点映像生成 インテグラル立体テレビ(2) 視点を自由に設定: 2-D 表示(LIFLET)」、『NHK 技研公開 2004』、2004年5月。

馬場 章 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

黒田日出男・馬場章、『地図と絵図の政治日本史』、2000 年 8 月、東京大学出版会。

『科学研究費補助金報告書 日本史資料データベースの入出力・検索環境における字形・字体および語彙の研究』、2002 年 3 月。

『科学研究費補助金報告書 後藤家計量関係資料の構造分析と文物相関の研究(特定領域研究)』、2003 年 3 月。

『科学研究費補助金報告書 末吉家史料の目録作成と公開および同家史料の総合的研究(基盤研究 B2)』、2003 年 3 月。

『特別推進研究(COE)報告書 象形文化の継承と創成に関する研究』、2004 年 3 月。

『特別推進研究(COE)報告書 前近代日本史料の構造と情報資源化の研究』、2005 年 3 月。

論文等

馬場章・他、「140 年前の写真とその修復」、『画像ラボ』、11 巻、7 号、2000 年 7 月。

馬場章・他、「140 年前の銀板写真の発見とその復元」、『映像情報』、32 巻、17 号、2000 年 9 月。

吉仲亮・馬場章、「銀板写真の画像復元処理と画像史料デジタルアーカイヴ」、『人文科学とコンピュータ 2000 論文集』、2000 年 12 月。【査読有】

馬場章、「デジタルアーカイヴからエキジビションへ」、東京大学史料編纂所編、『歴史学のためのウェブサイト第4回経験交流会』、2001 年 3 月 2 日。

馬場章・他、『人文科学とコンピュータ研究会第 50 回研究会記念シンポジウム』、2001 年 5 月 25 日、人文科学とコンピュータ研究会、国立民族学博物館。

安藤学・馬場章、「多様なセキュリティ操作を考慮したオブジェクト指向データベースの構造」、『コンピュータセキュリティシンポジウム 2001 論文集』、2001 年 10 月。【査読有】

Akira Baba, "Digitizing and Color-Restoration of Image on Dry Glass Plates," *Tokyo Symposium for Digital Silk Road*, 2001.12, UNESCO.

馬場章・他、「デジタルアーカイブからデジタルエキシビジョンへ」、『人文科学とコンピュータ 2001 論文集』、2001 年 12 月。【査読有】

安藤学・馬場章・他、「多機能セキュアデータベースのアクセス制御ポリシー設定問題」、『SCIS2002』、2002 年 1 月。

馬場章・他、「歴史学のデジタルミュージアムの試み」、『人文科学とコンピュータ 2002 論文集』、2002 年 12 月。

津田光弘・馬場章、「絵地図画像の研究支援ツールの開発」、『人文科学とコンピュータ 2002 論文集』、2002 年 12 月。

馬場章・研谷紀夫・津田光弘、「古地図の書誌学と電子資源化」、『第 46 回歴史地理学会論文誌』、2003 年 6 月。

馬場章・他、「デジタルアーカイブを利用した地図の書誌学」、『人文科学とコンピュータ 2003 論文集』、2003 年 12 月。

藤江清隆・馬場章、「テレビゲームの面白さとは何か」、『日本バーチャルリアリティ学会誌』、9 巻、1 号、2004 年 3 月。

倉持基・馬場章・他、「歴史写真』における新たな人物比定方法の実践」、『日本顔学会誌』、4 巻、1 号、2004 年 9 月。

Togiya Norio and Akira Baba, "Providing Metadata to Historical Material on Viewer Application iPalletnexus," *DCAC 2004*, 2004.9.

山根信二・馬場章、「アプリケーションソフトウェアのビジネスモデルの起源」、『信学技報』、2004 年 10 月。

山根信二・馬場章、「コンピュータゲームソフトウェア産業の成立」、『第 3 回ゲーム学会論文誌』、2004 年 12 月。

研谷紀夫・馬場章、「近現代個人資料へのメタデータ付与の実践と検証」、『人文科学とコンピュータ 2004 論文集』、2004 年 12 月。

一般向けエッセイ等

馬場章、「世界に赤水図を訪ねて」、『高萩市市民文化誌 ゆずりは』、2001 年 3 月。(7)

馬場章、「甦るガラス乾板」、『目之眼』、2002 年 2 月。(305)

馬場章、「赤水図の書誌学」、『高萩市市民文化誌 ゆずりは』、2002 年 3 月。(8)

馬場章、「ゲーム研究講義 1～20」、『ファミ通 Xbox』、2003 年 9 月～。(連載中)

一般向け講演等

馬場章、「赤水図は海を越えて」、2001 年 10 月 14 日、高萩市、高萩市文化会館。

馬場章、「歴史教育とデジタルアーカイブ」、『茨城県高等学校歴史教育研究会』、2003 年 7 月 28 日。

馬場章・他、「ゲーム産業と大学との連携の可能性を探る」、『CEDEC 2003』、2003 年 9 月 5 日、明治大学。

馬場章、「古地図のデジタルアーカイブ」、『奈良県図書館協議会』、2004 年 1 月 31 日、奈良市商工会議所。

馬場章、「画像史料の可能性」、『イパレットネクサス・ユーサーズ・カンファレンス』、2004 年 2 月 9 日、東京大学総合研究博物館。

馬場章、「ゲームの学問化は可能なのか」、『CEDEC 2004』、2004年9月6日、工学院大学。

馬場章、「テレビゲームの発展と私たちの暮らし」、2004年9月11日、国立科学博物館。

馬場章、「シンポジウム テレビゲームの楽しさ」、2004年9月12日、国立科学博物館。

馬場章、「ゲーム産業と大学の連携」、『IGDA 日本第8回ゲーム開発者セミナー』、2005年1月8日、千代田区。

馬場章、「オンラインゲーム研究の新地平」、『アジアオンラインゲームカンファレンス 2005』、2005年2月28日、工学院大学。

Akira Baba, "AN INTRODUCTORY LOOK AT SERIOUS GAME EFFORTS BASED IN JAPAN," *Game Developers Conference 2005*, 2005.3.8, Moscone West, San Francisco.

林 香里 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

オルタナティブ公共圏、社会運動論とジャーナリズム

個人的な情報発信活動、マスメディア、そして社会運動との連関の研究。ジャーナリズムを社会変動論、社会運動論とともに考える。

グローバル・ガバナンス、とりわけEUにおける情報の流れと民主的正当性について。

EUの社会運動とマスメディアの役割の考察。

N・ルーマンの機能システム理論における「マスメディア・システム」という考え方。

「マスメディア」、「公共圏」、「世論」、「ジャーナリズム倫理」等、メディア研究の諸概念をドイツの社会学者ニクラス・ルーマンによる現代社会分析理論によって再検討すること

ジェンダーとマスメディア

感情社会学から分析する女性のメロドラマ視聴の社会的意味について。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

林香里、『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』、2002年6月15日、新曜社、p. 462。

論文等

林香里, "The "Home and Family Section" in Japanese Newspapers," John Tulloch and Colin Sparks eds., *Tabloid Tales. Global Debates over Media Standards*, 2000, Rowman and Littlefield, pp. 147-162.【査読有】

林香里、「プレスの社会的責任理論」再訪—『米国プレスの自由委員会一般報告書』提出から53年を経て—、『マス・コミュニケーション研究』、58号、2001年1月31日、日本マス・コミュニケーション学会、pp. 109～125。【査読有】

林香里、「マスメディア・ジャーナリズム」の矛盾と革新」、博士号学位論文、2001年7月16日、東京大学大学院人文社会科学系研究科。(博士号学位論文、2001年3月2日提出)

林香里、「イエロー・ジャーナリズム%コミュニティ・ラジオ%オープン・ユニバーシティ%B・ブレヒト」、北川高嗣・須藤修・西垣通・濱田純一・吉見俊哉・米本昌平編、『情報学事典』、2002年6月15日、弘文堂刊。(4項目有り)

林香里、「ルーマン理論とマスメディア研究の接点」、『思想』、7月号、2003年、岩波書店、pp. 48～63。

林香里、「小さなマスメディア』のおもしろさとむずかしさ —ドイツ日刊紙『タッツ』というメディア実践」、水越伸・吉見俊哉編、『メディア・プラクティス』、2003年10月10日、せりか書房、pp. 218～234。

林香里, "Der Zivile Dialog: Ambivalenz der Institutionalisierung einer europäischen Öffentlichkeit," *Europa zwischen Wettbewerb und Solidarität*, 2003.10.17, Bamberg, Germany, Graduiertenkolleg "Märkte und Sozialräume in Europa", Otto-Friedrich-Universität Bamberg, Otto-Friedrich-Universität Bamberg. (コメンテーター: PD Dr. E. Rieger (Universität Konstanz) Prof. Dr. M. Jachtenfuchs (Professor of Political Science, International University Bremen))

林香里、「欧州の公共圏と『パブリック・リレーション』」、津金澤聰廣・佐藤卓己編、『現代のメディアとジャーナリズム6、広報・広告・プロパガンダ』、2003年10月30日、ミネルヴァ書房、pp. 172～174。

林香里、「オルターナティブ・ジャーナリズム%大衆化するジャーナリズム」、吉見俊哉・花田達朗編、『社会情報学ハンドブック』、2004年、東京大学出版会、pp. 78 102～81 105。(2論文有り)

林香里、「現代社会の世論と世論調査 —デリベラティブ・ポリングとは何か—」、『放送メディア研究』、2号、2004年6月5日、日本放送協会放送文化研究所、pp. 133～162。

林香里、「オルターナティブ・メディアは公共的か—その再帰的公共性の考察」、『マス・コミュニケーション研究』、65号、2004年7月31日、日本マス・コミュニケーション学会、pp. 34～52。

林香里・金相美、「日本女性の中の「冬のソナタ」ブーム —感情生活から生まれる「政治」生活のダイナミズム」、『ソウル大学言論情報研究所-東京大学大学院情報学環 合同シンポジウム』、2004年11月4日。(合同発表)

林香里, "Assessing the Popularity of," *the conference of the Culture Industry and Cultural Capital. Transnational Media Consumption and the Korean Wave in East Asia*, 2005.2.28, the Institute for Communication Arts and Technology. Sponsored by Hallym University. Venue: Korean Broadcasting Institute., Seoul.

口頭発表等

林香里、「ジャーナリズムは何のためにあるのか」、『2000年女性学・ジェンダー研究国際フォーラム、国際ワークショップ「女性とメディア」』、2000年8月3日～2000年8月6日、NVEC 国立婦人教育会館、埼玉県、NVEC 国立婦人教育会館。(日本人専門家として発表、コーディネーター: 東京学芸大学教授 村松泰子 / 外国人専門家: ISIS インターナショナル、マニラ マヴィック・カブレラ・バレッサ)

林香里, "Das Konzept "Öffentlichkeit" und die Herstellung der demokratischen Legitimation im europäischen Sozialraum," *Einführungstagung der Alexander von Humboldt-Stiftung*, 2003.2.14, Alexander von Humboldt-Stiftung, Munich, Germany, ミュンヘン大学.

林香里、「現代社会の世論と世論調査 —デリベラティブ・ポリングとは何か—」、『愛宕山フォーラム』、2004年4月27日、NHK 放送文化研究所。(講演)

林香里、『第一回地方紙フォーラム in 高知』、2004年9月24日、日本地方紙ネットワーク、高知県高知市、高知新聞社。(助言者として参加、講演)

林香里、「デリベラティブ・ポリングー政治と市民を結ぶ回路としての世論調査法」、『朝日新聞総合研究本部主催 朝日新聞総合研究本部談話会 第2回(テーマ「世論はどのようにつくられるのか」)』、2004年10月14日。(プレゼンテーション)

林香里, "Participant in the "Values and Ethics in the News," 2005.3.14-2005.3.18, The Poynter Institute, St. Petersburg, Florida, The Poynter Institute, pp. 13-18.

一般向けエッセイ等

林香里、「ドイツに生きるオルターナティブ・メディア」、『本とコンピュータ』、2002年冬号、2002年、pp. 13~14。

林香里、「公共性」を問い直す—『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』、『週刊金曜日』、2002年9月13日、p. 39。

林香里、「金曜コラム「冬ソナブームの矮小化」」、『読賣新聞 夕刊』、2005年1月21日、夕刊。

一般向け講演等

林香里、「市民とメディアのいま～新聞週間を前に、パネルディスカッション・テーマ:「市民と新聞の距離は」」、『新聞週間シンポジウム』、2002年9月23日、朝日新聞、東京、日本、築地朝日ホール、「市民と新聞の距離は」。(パネリストとして参加、そのほかのパネリスト:松本サリン事件被害者 河野義行/作家、前・朝日新聞紙面審議会委員 中沢けい)

林香里、「心豊かに生きる一日・韓の映画・ドラマに学ぶパートナーとの過ごしかたー」、『日経シニア・ライフセミナー2005、1日シニア大学/自分スタイルの見つけ方』トークセッション』、2005年1月25日、長寿社会開発センター・日本経済新聞社、東京、日本、日本経済新聞社 日経ホール、「心豊かに生きる一日・韓の映画・ドラマに学ぶパートナーとの過ごしかたー」。(パネリスト、長門裕之、林香里、コーディネーター、土井香苗、日経ホール)

林香里・金相美、「日本女性の「冬のソナタ」ブーム分析」、『横浜市婦人会館ライフセミナー』、2005年3月3日、横浜市婦人会館、横浜市婦人会館。(合同発表)

その他一般向け

林香里、「市民発のジャーナリズム—家庭面『ひととき』50周年に寄せて」、『朝日新聞 夕刊』、2001年9月22日、p. 9。

林香里、「編集者のためのワイドショー講座」、『編集会議』、9月号、2004年9月、p. 27。(インタビュー)

原田 至郎 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICTに依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

武力紛争の理論的・実証的分析

国際政治における武力紛争の発生・展開・終結についての、主に様々な数量的手法を用いた分析

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

Shiro Harada, "Post-WWII Asian Wars and Their Termination: Impact of the End of the Cold War and 'Greater China'," *香港返還に伴う東アジア社会への影響に関する調査* 研究成果報告書, 2001, 東京大学東洋文化研究所, pp. 50-69.

原田至郎、「旧環境への対応活動」、『伝統的な文字文化に基づく、カンボジアにおける情報化時代立ち上げに対する支援』、2002 年、財団法人アジア太平洋研究会、pp. 20～26。

猪口孝・原田至郎、「国際政治研究者の専攻戦略 ロジスティック回帰分析と数量化理論による日本国際政治学会会員の属性分析」、柳井晴夫・岡太彬訓・繁樹算男・高木広文・岩崎学編、『多変量解析実例ハンドブック』、2002 年 6 月、朝倉書店、pp. 494～509。

HARADA Shiro and LAO Kim Leang, "Computerizing Khmer Characters: The Current Situation and a Tentative Proposal for Improvement," Barom NETH, Chiev KHUS and Henri LOGARD eds., *The Proceedings of the 2nd International Conference on Khmer Studies*, 2003, pp. 250-259.

"Khmer," Joan Aliprand, et al. eds., *The Unicode Standard, Version 4.0 :the Unicode Consortium*, 2003, Addison-Wesley, pp. 274-283. (初稿を執筆)

原田至郎、「「専門家集団」によるガバナンスの制度的問題 クメール文字コードの国際標準化における例」、『政経研究』、39 巻、4 号、2003 年 3 月、pp. 557～605。

原田至郎、「IT とデジタルデバイド」、『アジア新世紀 8 構想』、2003 年 7 月、岩波書店、pp. 107～114。

HARADA Shiro, "Issues related with the existing international standard encoding of Lao script," *Workshop on Brain Storming of Lao software Localization*, 2004.11.12, Thalath, Laos.

原田至郎、「クメール文字による情報交換基盤の整備 技術的側面と国際標準化制度に関わる問題」、猪口孝編、『アジア学術共同体 構想と構築』、2005 年 1 月、NTT 出版、pp. 91～125。

HARADA Shiro, "Governance of the Global Information Society: The roles of experts and non-governmental organizations, and their limitations," *Session on Political Economy of Transnational Information Flows*, 2005.3.5, 46th Annual Convention of the International Studies Association, Honolulu, USA. (Abstract に基づき採択)

HARADA Shiro, "Cambodian people not feeling happiness," *The International Forum and Symposium "AsiaBarometer 2004"*, 2005.3.15, co-organized by the Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo and the Ministry of Foreign Affairs, Sanjo Kaikan, The University of Tokyo.

口頭発表等

原田至郎、「国際政治学における戦争の数量分析の例」、『防衛庁防衛局計画課装備体系・システム分析室主催講演会』、2002 年 11 月 29 日、防衛庁。

原田至郎、「デジタル・オポチュニティと NPO クメール文字コード問題を手がかりに」、『デジタル市民社会と社会情報学』、2003 年 10 月 4 日、東京大学社会情報研究所主催・ソウル大学言論情報研究所共催、東京大学。

原田至郎、「クメール文字による情報交換基盤整備: 技術と制度」、『日本学術会議第2部シンポジウム『アジアに知的架け橋を！』』、2004 年 6 月 15 日、日本学術会議大会議室。

一般向けエッセイ等

原田至郎、「クメール文字コードをめぐる諸問題」、『明日の東洋学』、8号、2002年10月、pp. 6～8。

一般向け講演等

HARADA Shiro, LAO Kim Leang, SVAY Leng and Norbert KLEIN, "Computerizing Khmer Characters and Its Institutional Problems," *The 8th Meeting of e-Asean Task Force*, 2001.7.6, Siem Reap, Cambodia.

HARADA Shiro, "The Procedural Problems in Making the "International Standard" Code for Khmer Script," *National ICT Awareness Seminar*, 2001.9.12, Phnom Penh.

HARADA Shiro, "Toward the best support of Khmer script in computers: Technical and Procedural Problems," *Digital Opportunity Forum - Asian Diversity and the Role of Japan*, 2001.11.5, Keidanren Kaikan.

LAO Kim Leang and HARADA Shiro, "The Encoding Problems in the "International Standard" Code for Khmer Script," *National ICT Awareness Seminar*, 2001.11.12, NiDA, UNDP and UNESCO, Phnom Penh.

その他一般向け

原田至郎、「有事法制について」、『グッドモーニングジャパン』、2003年8月17日、TBSラジオ。(解説)

HARADA Shiro, "Comments on Draft WGIG Issue Paper on Technical Standards," 2005.2.14. URL: <http://www.wgig.org/docs/Comment-Harada.pdf>

原田至郎、「ユビキタスネット社会憲章(案)」に対する意見」、2005年2月18日。

深代 千之 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

スポーツにおける情報伝達

スポーツは、文学・音楽・絵画・彫刻などと並んで、人間がつくりあげた文化の一つといえる。競技スポーツの中のダイナミックな身体運動は、芸術と呼ぶにふさわしいが、その「動作」は選手自らの努力とともに指導者からの巧みな情報伝達によって構築される。ダイナミックな身体運動を構築するには、動き自体のメカニズムが明らかになっていること、情報伝達が効率よく行われることが必要である。深代研では、次の2点に関して研究を行っている。

動作メカニズムの解明

遺伝的・環境的に最高のパフォーマンスが出力されている競技スポーツの動作を対象に、高速度ビデオ撮影を用いて2次元および3次元解析を行う。そのデータを基に、逆ダイナミクスを用いて動作構築のメカニズムを究明する。一方、コンピュータ・シミュレーションによって、身体運動の「力」発生源をコントロールし、その結果として運動を具現させる。このように、実験研究とシミュレーション研究を併用することによって、運動の本質を明らかにする。特に、運動を支える筋・腱複合体の粘弾性特性の役割に注目している。

非言語コミュニケーション

ダイナミックな身体運動の構築において、情報発信者である指導者から受信者である選手へ様々な情報が伝達される。この情報伝達は、科学知・言語知などの形式知に加えて、非言語コミュニケーションである身体知(あるいは暗黙知)が多

く用いられる。この身体知について、他分野との比較研究(例えば音楽・文学では、情報発信者は指揮者・作家であり、受信者が楽器奏者あるいは歌手・読者になる)を行うとともに、身体知の情報伝達システムを可視化することを試みている。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

深代千之、深代千之 桜井伸二 平野裕一 阿江通良編、『スポーツバイオメカニクス』、2000年、朝倉書店。

深代千之 柴山 明、『スポーツ基礎数理ハンドブック』、2000年、朝倉書店。

深代千之、「バイオメカニクス他」、『教養としてのスポーツ身体運動』、2000年、東京大学出版会。(分担執筆)

深代千之、「スポーツの「うまい、へた」って何が違うの？これからの健康とスポーツの科学」、『これからの健康とスポーツの科学』、2000年、講談社。(分担執筆)

深代千之 中村好男、「スポーツ科学の成果と競技力向上 III -運動学とバイオメカニクスは融合できるか-」、『21世紀と体育・スポーツ科学の発展(分担執筆)』、2000年、杏林書院。(分担執筆)

深代千之、『身体ほぐし運動の手引き書』、2000年、文部省。(分担執筆)

深代千之、「才能教育論第6・9章」、宮下充正 平野裕一編、『才能教育論』、2002年、放送大学教育振興会。(第6・9章)

深代千之、「スポーツは重力との戦いなぜなぜ宇宙と生命」、『学術会議業書6』、6号、2003年、pp. 79～90。

深代千之、『運動会で一番になる方法』、2004年、株式会社アスキー。

論文等

Nagano, A. A. Gerritsen S. Fukashiro, "A reliability analysis of the calculation of mechanical output through inverse dynamics: A Computer-simulation study.," *J. Biomech.*, 33, no.10, 2000, pp. 1313-1318.【査読有】

Nagano, A. S. Fukashiro, "Control of horizontal movement of mass center of body and center of pressure in vertical jumps.," *J. Biomech. Sports Exerc.*, 4, no.1, 2000, pp. 2-7.【査読有】

Nagano, A. S. Fukashiro, "Biomechanical comparison of the role of bi-articular rectus femoris in standing broad jump and vertical jump. Jpn.," *Jpn. J. Biomech. Sports Exerc.*, 4, no.1, 2000, pp. 8-15.【査読有】

Nagano, A. S. Fukashiro, "Relationships between mechanical output from individual joints and jump height in sub-maximal to maximal effort vertical jumps.," *Jpn. J. Biomech. Sports Exerc.*, 4, no.1, 2000, pp. 16-20.【査読有】

野田幹子 柴山明 石毛勇介 深代千之、「等尺性持続運動によるヒト下腿三等筋の粘弾性特性の変化」、『J. Biomech. Sports Exerc.』、4巻、4号、2000年、pp. 232～242。【査読有】

深代千之、「ジャンプ動作を通してみた筋・腱複合体の動態」、『Jpn. J. Biomech. Sports Exerc.』、4巻、1号、2000年、pp. 61～62。

深代千之、「反動動作のバイオメカニクス」、『体育学研究』、45巻、4号、2000年、pp. 457～471。【査読有】

大金邦成 深代千之、「シミュレーションによる身体運動の再構築」、『Jpn. J. Biomech. Sports Exerc.』、4巻、2号、2000年、pp. 92～107。

- Fukashiro, S. M. Noda A. Shibayama, "In vivo determination of muscle viscoelasticity in the human leg.," *Acta Physiol. Scand.*, no.172, 2001, pp. 241-248.【査読有】
- Nagano, A. D. Takeshita S. Fukashiro, "An estimation of the stiffness of mm. triceps surae in human hopping by the mass-spring model. Jpn.," *Jpn. J. Health Sports Sci. Physical Edu.*, 46, no.2, 2001, pp. 195-205.【査読有】
- Fukunaga, T. K. Kubo Y. Kawakami S. Fukashiro H. Kanehisa C. N. Maganaris, "In vivo behaviour of human muscle tendon during walking.," *Proc. R. Soc. Lond.*, 268, 2001, pp. 1-5.【査読有】
- Abe, T. S. Fukashiro Y. Harada K. Kawamoto, "Relationship between sprint performance and muscle fascicle length in female sprinters.," *J. Physiol. Anthropol.*, 20, no.2, 2001, pp. 141-147.【査読有】
- Kurokawa, S. T. Fukunaga S. Fukashiro, "Behavior of fascicles and tendinous structures of human gastrocnemius during vertical jumping.," *J. Appl. Physiol.*, 90, no.4, 2001, pp. 1349-1358.【査読有】
- Okada, J. S. Fukashiro, "Effect of resistance training associated with stretch-shortening cycle exercise on force development and muscle volume in human elbow flexors.," *Advances in Exercise and Sports Physiology*, 7, no.2, 2001, pp. 65-71.【査読有】
- Fukashiro S. Abe T. Shibayama A. Brechue WF, "Comparison of viscoelastic characteristics in triceps surae between Black and White athletes.," *Acta Physiol Scand.*, 175, no.3, 2002, pp. 183-187.【査読有】
- Kawamoto R. Ishige Y. Watarai K. Fukashiro S., "Influence of curve sharpness on torsional loading of the tibia in running.," *J. Appl. Biomech.*, no.18, 2002, pp. 218-230.【査読有】
- Kawamoto R. Ishige Y. Watarai K. Fukashiro S., "Primary factors affecting maximum torsional loading of the tibia in running.," *Sport Biomech*, 1, no.2, 2002, pp. 167-186.【査読有】
- 川本竜史 石毛勇介 渡会公治 深代千之, "脛骨捻り負荷と走速度の定量的関係," *Jpn. J. Biomech. Sports Exerc.*, 6, no.4, 2002, pp. 250-258.【査読有】
- 深代千之 島田美恵子 若山章信 竹下大介, 「レジスタンストレーニングにおける反動動作の効果」、『スポーツ医・科学』、14・15号、2002年、pp. 5~9。【査読有】
- 深代千之 右近睦美 安部 孝 川本和久, 「陸上:短距離選手における足関節の弾性特性」、『スポーツ医・科学』、14・15号、2002年、pp. 21~24。【査読有】
- Kawamoto, R. Y. Ishige K. Watarai S. Fukashiro, "Quantitative investigation of torsional loading of the tibia during quick change of running direction.," *Int. J. Sport Health Sci.*, 1, no.1, 2003, pp. 24-33.【査読有】
- Nagano, A. Komura, T. Fukashiro, S., "Contribution of series elasticity in human cyclic heel-raise exercise.," *Journal of Applied Biomechanics.*, no.19, 2003, pp. 340-352.【査読有】
- 千野謙太郎 小田俊明 栗原俊之 永吉俊彦 金久博昭 深代千之 福永哲夫 川上泰雄, 「下腿三頭筋の短縮性、伸張性運動中の筋線維動態」、『Jpn. J. Sports Sci. Exerc.』、7巻、3号、2003年、pp. 206~213。【査読有】
- 川本竜史 石毛勇介 持田 尚 吉久武志 深代千之, 「足底板の着用による走行時床反力の軽減効果」、『Jpn. J. Sports Sci. Exerc.』、7巻、4号、2003年、Jpn. J. Sports Sci. Exerc.、pp. 272~278。【査読有】
- 深代千之, 「走スピードの限界因子」、『体育の科学』、53巻、8号、2003年、pp. 587~593。
- 深代千之, 「腱の特性を活かしたトレーニング」、『体育の科学』、53巻、2号、2003年、pp. 120~126。
- 長野明紀 深代千之, 「Hill型筋腱複合体のモデリングとコンピュータ・シミュレーションへの適用」、『Jpn. J. Sports Sci. Exerc.』、7巻、3号、2003年、pp. 225~237。

長野明紀 姫野龍太郎 深代千之、「3次元の剛体運動の基礎 (1)方向余弦行列」、『Jpn. J. Sports Sci. Exerc.』、7巻、4号、2003年、pp. 341~350。

長野明紀 深代千之 姫野龍太郎、「筋骨格系モデルを用いたスポーツ科学へのアプローチ」、『Proceedings of: RIKEN symposium on Computational Biomechanics』、2003年、Saitama-ken, Japan。

深代千之、「腱のバネ機構とスポーツ」、『Jpn. J. Sports Sci. Exerc.』、7巻、3号、2003年、pp. 222~224。

Muramatsu, T. T. Muraoka Y. Kawakami S. Fukashiro T. Fukunaga, "Effects of Achilles tendon path change on the myotendinous junction movement of the gastrocnemius muscle.," *Int. J. Sport Health Sci.*, 1, no.1, 2003, pp. 19-23. URL: <http://www.shobix.co.jp/ijshs/contents/>【査読有】

Nagano, A. Komura, T. Himeno, R. Fukashiro, S., "Optimal digital filter cutoff frequency of jumping kinematics evaluated through computer simulation.," *Int. J. Sport Health Sci.*, 1, no.2, 2003, pp. 188-194. URL: <http://www.shobix.co.jp/ijshs/contents/>【査読有】

Nagano, A. Komura, T. Fukashiro, S., "Effects of series elasticity of muscle tendon complex on an explosive activity performance with a counter movement.," *Journal of Applied Biomechanics.*, 20, no.1, 2004, pp. 85-94.【査読有】

Nagano A, Komura T, Fukashiro S., "Effects of the length ratio between the contractile element and the series elastic element on an explosive muscular performance.," *J Electromyogr Kinesiol.*, 14, no.2, 2004, pp. 197-203.【査読有】

A. Nagano, T. Komura, S. Fukashiro, " Effects of Series Elasticity of the Muscle Tendon Complex on an Explosive Activity Performance With a Counter Movement ," *J Appl Biomech* 20:85-94,2004., no.20, 2004, pp. 85-94.【査読有】

その他

深代千之、「国際バイオメカニクス学会理事会報告」、『Jpn. J. Sports Sci. Exerc.』、7巻、3号、2003年8月、pp. 256~259。

Fukashiro, S., "Welcome to the Japanese Society of Biomechanics.," *ISB Newsletter*; 91, no.8, 2004.8.

一般向けエッセイ等

深代千之 川本和久 八田秀雄、「陸上競技のスプリントトレーニングをエネルギー代謝の視点から考える」、『コーチング・クリニック』、14巻、4号、2000年、pp. 10~15。

深代千之、「スプリンターのためのボディデザイン」、『月刊陸上競技』、3号、2003年、pp. 150~154。

深代千之、「最新スポーツ動作分析とシミュレーションの近未来像。コーチングクリニック」、『コーチングクリニック』、17巻、4号、2003年、pp. 53~55。

本田 由紀 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

学校教育と職業との関係性についての実証的研究

学校から職業への移行過程の実態、学校での学習内容と職業の場で必要とされる知識・スキルとの関係、就業後の再就学の意義など、学校教育と職業の世界との間の関係のあり方を実証データを用いて検討する。主要な分析軸のひとつとして、ジェンダーに焦点を当てる。

教育システムの存在様態に関する理論研究および比較歴史研究

教育システムは社会間で共通する構造・機能をもつと同時に、個々の社会に固有の特徴を備えている。そうした教育システムの一般性と変異性を把握するための理論的枠組みを、主に社会システム論に依拠しつつ展開するとともに、その枠組みを実際に比較歴史研究に適用する。

現代日本の教育政策・教育改革に関する批判的検討

近年、日本の教育政策にはいくつかの大きな転換がみられ、それらは将来の日本社会全体のあり方にも強く影響すると予測される。そうした教育政策・教育改革の動向と影響について客観的検討をふまえた上で問題点を指摘し、より望ましい方向性について提言を行う。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

本田由紀、「教育訓練と中高年期の職業的自律性」、『日本労働研究機構紀要』、19号、2000年6月、pp. 39～49。

藤崎宏子・宮坂靖子・渡辺秀樹・浅井美智子・永田えり子・葛野浩昭・川名紀美・本田由紀・宮本みち子・大久保孝治・杉山圭子・林賢一・下夷美幸・藤村正之、「親と子—変貌するライフコース」、藤崎宏子編、2000年7月、ミネルヴァ書房、364pp. pp. 159～182。

本田由紀、「数量的分析結果」、『フリーターの意識と実態』、『日本労働研究機構調査研究報告書』、136号、2000年7月、日本労働研究機構、pp. 35～46。

本田由紀、「社会人教育の現状と課題—修士課程を中心に—」、『高等教育研究』第4集、2001年4月、日本高等教育学会、pp. 93～112。

小杉礼子・本田由紀、「学校から職業への移行の変化とフリーター経験」、『日本教育社会学会第53回大会』、2001年10月7日、日本教育社会学会、上智大学。(上智大学)

本田由紀、「90年代におけるカリキュラムと学力」、『教育社会学研究』第70集、2002年5月、pp. 105～123。

本田由紀、「社会人大学院修了者のキャリア展開と大学院教育」、『日本高等教育学会第5回大会』、2002年5月26日、日本高等教育学会、愛知学院大学。(愛知学院大学)

長尾彰夫・志水宏吉・野口克海・本田由紀・宮田彰・堀家由妃代、「『学力低下』批判—私は言いたい 6人の主張」、(『AS選書シリーズ 001』)、2002年7月、アドバンテージサーバー、137pp.。(本田執筆部分は26-38ページ)

苅谷剛彦・清水睦美・本田由紀、「学業達成の構造と変容(1)」、『日本教育社会学会第54回大会』、2002年9月21日、日本教育社会学会、広島大学。(広島大学)

小杉礼子・堀有喜衣・上西充子・下村英雄・中島史明・耳塚寛明・本田由紀・高梨昌、「自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動」、小杉礼子編、『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』、2002年12月、日本労働研究機構、196pp. pp. 149～174。

苅谷剛彦・志水睦美・本田由紀、「変化・授業タイプ・学習レリバンス」、『学校臨床研究』、2巻、2号、2003年3月、東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター、pp. 43～76。

二神枝保・小豆川裕子・細萱伸子・大内章子・仙田幸子・本田由紀・廣石忠司・松田啓一・小川泰子・鈴木由紀子、「雇用・就労変革の人的資源管理」、菊野一雄・八代充史編、『雇用・就労変革の人的資源管理』、2003年4月、菊野一雄・八代充史編著、菊野一雄、八代充史、二神枝保、小豆川裕子、細萱伸子、大内章子、仙田幸子、本田由紀、廣石忠司、松田啓一、小川泰子、鈴木由紀子『雇用・就労変革の人的、263pp. pp. 147~160。

本田由紀、「社会人大学院の職業達成機能」、『日本高等教育学会第6回大会』、2003年5月25日、日本高等教育学会、神戸大学。(神戸大学)

本田由紀、「『非教育ママ』たちの存在」、『女性の就業と親子関係—母親たちの階層戦略— 親子関係編』、(『SSJDA Research Paper Series』)、29号、2003年7月、pp. 62~79。

本田由紀、「社会人大学院修了者の職業キャリアと大学院教育のレリバンス 分析編」、本田由紀編、『社会人大学院修了者の職業キャリアと大学院教育のレリバンス 分析編』、(『東京大学社会科学研究所研究シリーズ』)、8号、2003年8月、161pp.。

本田由紀、「男性フリーターの行方」、『日本教育社会学会第55回大会』、2003年9月21日、日本教育社会学会。(課題研究II, 2003年9月21日【招待講演】)

本田由紀、「若年労働市場における非典型雇用の拡大とその背景—JGSS-2000とJGSS-2001の統合データを用いて—」、『日本版 General Social Surveys 研究論文集[2] JGSS で見た日本人の意識と行動』東京大学社会科学研究所資料第22集』、2003年10月、pp. 47~59。

本田由紀、「トランジションという観点から見たフリーター」、『社会科学研究』、55巻、2号、2004年1月、pp. 79~111。

HONDA, Yuki, "The Formation and Transformation of the Japanese System of Transition from School to Work," *Social Science Japan Journal*, 7, no.1, 2004.4, pp. 103-115.

「女性の就業と親子関係—母親たちの教育戦略—」、本田由紀編、『勁草書房』、2004年5月、勁草書房、201pp. pp. 167~184。(本田執筆部分は167-184ページおよびまえがき・あとがき)

本田由紀・香川めい・小山治、「MBA派遣の可能性と課題—海外と国内を対比して—」、『日本教育社会学会第56回大会』、2004年9月11日、日本教育社会学会、東北大学。

本田由紀・討論者、「若年就労研究の学際的検討」、『日本教育社会学会第56回大会、課題研究I』、2004年9月12日、日本教育社会学会、東北大学。(課題研究I, 東北大学)

佐藤厚・上西充子・小川慎一・金野美奈子・千葉隆之・本田由紀・佐藤博樹・佐野嘉秀・呉学殊、「仕事の社会学—変貌する働き方—」、佐藤博樹・佐藤厚編、『仕事の社会学—変貌する働き方—』、2004年12月、有斐閣、215pp. pp. 103~121。

耳塚寛明・諸田裕子・清水睦美・本田由紀・山田哲也・金子真理子・堀健志・鍋島祥郎・金馬国晴、「苅谷剛彦志水宏吉」、『学力の社会学—調査が示す学力の変化と学習の課題—』、2004年12月、岩波書店、299pp. pp. 77~98。

その他

本田由紀、「若者文化・家庭と進路決定」、『進路決定をめぐる高校生の意識と行動—高卒「フリーター」増加の実態と背景』、(『日本労働研究機構調査研究報告書』)、138号、2000年9月、日本労働研究機構、pp. 192~209。

本田由紀、「高等教育修了後の継続教育訓練—」、『日欧の大学と職業—高等教育と職業に関する12カ国比較調査結果—』、(『日本労働研究機構調査研究報告書』)、143号、2001年3月、日本労働研究機構、pp. 114~142。

本田由紀、「ジェンダーと労働形態」、『大都市の若者の就業行動と意識—広がるフリーター経験と共感—』、(『日本労働研究機構調査研究報告書』)、146号、2001年10月、日本労働研究機構、pp. 163~185。

本田由紀、「学生生活が充実していないのは誰か」、『学生生活実態調査』、『SSJDA Research Paper Series』、23号、2002年10月、SSJDA Research Paper Series 23、pp. 111～124。

本田由紀、「社会人大学院修了者の職業キャリアと大学院教育のレリバンス 資料編」、本田由紀編、『社会人大学院修了者の職業キャリアと大学院教育のレリバンス 資料編』、『東京大学社会科学研究所研究シリーズ』、12号、2003年12月、149pp.。

本田由紀、「高校教育・大学教育のレリバンス」、『日本版 General Social Surveys 研究論文集[3] JGSS で見た日本人の意識と行動』東京大学社会科学研究所資料第22集』、2004年3月。

一般向け著書等

本田由紀、「1人1社制の存立基盤とその揺らぎ」、『日本労働研究雑誌』、489号、2001年4月、pp. 30～31。

本田由紀、「高卒就職とフリーターの現状－市場の縮小と揺れる高校生の意識」、『IDE 現代の高等教育』、427号、2001年4月、pp. 59～64。

Honda, Yuki、「The Reality of the Japanese School-to-Work Transition System at the Turn of the Century: Necessary Disillusionment」、『Social Science Japan Journal』、25号、2003年2月、pp. 8～12。

本田由紀、「これからの若者の働き方・暮らし方－新しい『常識』を作り上げるために－」、『JIL @ Work』、13巻、3月号、2003年3月、pp. 20～23。

本田由紀、「フリーターの現状と若年雇用政策」、『勤労よこはま』、6月号、2004年6月、pp. 3～8。

本田由紀、「フリーター像の常識を疑え」、『週刊エコノミスト』、29日号、2004年6月、pp. 50～53。

本田由紀、「よりリアルなフリーター像、より有効な支援策を求めて」、『生活経済政策』、90号、2004年7月、pp. 3～9。

本田由紀、「『対人能力格差』がニートを生む」、『中央公論』、4月号、2005年3月、pp. 82～91。(82-91年)

一般向けエッセイ等

本田由紀、「修了生動向の分析から」、『社会人大学院研究機構「プレ大学院講座」』、2002年12月8日、多摩大学ルネッサンスセンター。

本田由紀、「若者文化と高校生の進路選択－家庭と学校へのメッセージ」、『ヤングハローワーク・スクールデーセミナー』、2003年10月11日。(2003年10月11日)

本田由紀、「子供というリスク－女性活用と少子化対策の両立を阻むもの－」、『RIETI 政策シンポジウム「女性が活躍できる社会の条件を探る」』、2004年11月9日、TEPIA ホール。(2004年11月9日)

水越 伸 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのために「批判的メディア実践」という方法論を生み出しつつある。

メディア史

19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

柏木博・伊藤俊治・岡崎乾二郎・佐倉統・水越伸編、水野誠一監修、『20-21 世紀 Design Index』、2000 年、INAX 出版。
(水野誠一企画監修)

水越伸、ペク・ソンス監修、『デジタル・メディアの百年後を考える』、2000 年 12 月 5 日、韓国學術情報社、317pp.。

吉見俊哉・水越伸、『改訂版 メディア論』、2001 年。

水越伸・河上進編、『コリアン・ドリーム：韓国電子メディア探訪』、『別冊・本とコンピュータ 3』、2001 年 7 月、トランスアート社。

『情報学事典』、2002 年、弘文堂、1140pp.。(編集協力・執筆)

水越伸、『『教育』と『放送』のこれからを考える』、『2005 年度を目標に「教育と情報化」に対応した放送番組とデジタルコンテンツの企画案と番組編成についての調査と提言』、2002 年、(財)日本放送教育協会、pp. 36～42。

『東北大学大学院情報科学研究科学術公開シンポジウム『メディア・リテラシーの現状と展望』報告集』、2002 年 1 月、東北大学大学院情報科学研究科、50pp.。

水越伸、水越伸・NHK「変革の世紀」プロジェクト編、『NHK スペシャル「変革の世紀 II」インターネット時代を生きる』、2002 年 2 月 25 日、日本放送出版協会、286pp.。(編著)

社団法人日本民間放送連盟・東京大学大学院情報学環メルプロジェクト編、『『2001 年度民放連メディアリテラシー・プロジェクト』報告書』、2002 年 3 月、社団法人日本民間放送連盟・東京大学大学院情報学環メルプロジェクト。

水越伸、『新版デジタル・メディア社会』、2002 年 5 月、岩波書店、285pp.。

水越伸、水越伸・NHK「変革の世紀」プロジェクト編、『NHK スペシャル「変革の世紀 I」市民・組織・英知』、2002 年 11 月 30 日、日本放送出版協会、286pp.。(編著)

『文科省科学研究費基盤研究(B)『民族・国境を越えるエスニック・エンターテイナー：日本のサブカルチャーの新しい潮流』』、2003 年。(研究代表者：白水繁彦／分担執筆)成果報告書)

『文科省科学研究費基盤研究(C)『在日外国人のメディア消費とトランスナショナルアイデンティティの構築』』、2003 年、196pp.。(研究代表者：岩淵功一／分担執筆)成果報告書、2003 年、196 頁。)

『平成 14 年度科学技術振興事業団異分野研究者交流フォーラム報告書『科学技術と芸術：知の創造に向けて』』、2003 年。(研究代表者：須永剛司／共同執筆)

『平成 15 年度科学技術振興事業団異分野研究者交流促進事業報告書『科学技術と芸術—知の創造に向けて：ワークシヨップ・学び方を形にする パブリッシング & ラーニング』』、2003 年、47pp.。(研究代表者：須永剛司／共同執筆)

社団法人 日本民間放送連盟・東京大学大学院情報学環メルプロジェクト編、『2002 年度民放連メディアリテラシー・プロジェクト研究報告書：宮城・長野・愛知・福岡 4 地域におけるパイロット研究について』、2003 年 3 月、社団法人 日本民間放送連盟・東京大学大学院情報学環メルプロジェクト、201pp.。

「2001 年度メルプロジェクト・シンポジウム：メルプロジェクトの衍生（えんせい）」、『メディア表現、学びとリテラシー2002』報告要旨集』、2003 年 3 月、34pp.。

『2003 年度メルプロジェクト・シンポジウム：メルプロジェクトの波延 メディア表現、学びとリテラシー2004』報告要旨集（共同執筆）、2004 年 3 月、38 頁。』、2003 年 3 月 5 日、38pp.。（共同執筆）

水越伸、東京大学情報学環メルプロジェクト編、『メル：メディア表現、学びとリテラシー』、2003 年 3 月 7 日、トランスアート社、142pp.。

『はじめてみよう！メディア教育：公民館で、美術館で、学校で・・・青少年のためのメディア・リテラシー学習』、2003 年 7 月、東京都生活文化局、74pp.。

キャロリン・マーヴィン、吉見俊哉・水越伸・伊藤昌亮訳、『古いメディアが新しくなった時：19 世紀末社会と電気テクノロジー』、2003 年 8 月 31 日、新曜社、509pp.。

水越伸・吉見俊哉編、『メディア・プラクティス：媒体を創って世界を変える』、2003 年 10 月 10 日、せりか書房、286pp.。

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター編、『遠隔地社会教育研修・学習支援に関する調査研究報告：インターネットを活用した社会教育研修プログラムの開発』、2004 年、93pp.。（分担執筆）

「中間報告：モバイル・メディアの文化とリテラシーの創出を目指したソシオ・メディア研究」、『NTTドコモ・モバイル社会研究所ホームページ』、2004 年 10 月。URL:http://www.moba-ken.jp/core/core04_2.html

『2004 年度メルプロジェクト・シンポジウム：メルプロジェクトの協奏 メディア表現、学びとリテラシー2004』報告要旨集』、2005 年 2 月、31pp.。（共同執筆）

水越伸、『メディア・ピオトープ：メディアの生態系をデザインする』、2005 年 3 月 6 日、紀伊國屋書店、194pp. +iii。

論文等

Shin Mizukoshi, "From Active Enthusiasts to Passive Listeners: Radio, the State, and the Transformation of the Wireless Imagination," *Senri Ethnological Studies*, no.52, 2000, pp. 65-75.

水越伸、「日本におけるメディアリテラシーの展開と課題：メディア論の観点から」、水越敏行編、『メディアリテラシーの教育』、2000 年 11 月、明治図書、pp. 64~75。

水越伸、「細かいけれどしたたかな回路を」、『歴史教科書問題・未来への回答』『世界』、696 号、2001 年。

水越伸、「メルプロジェクトのはじまり：ゆるやかなコミュニケーション改革の対抗力」、『現代思想』、2001 年 1 月、青土社、pp. 206~217。（vol29-1）

水越伸・金亮都・劉雪雁、「デジタル情報化と東アジアのメディア文化：韓国社会、華人社会におけるメディア実践と文化形成」、『マス・コミュニケーション研究』、2001 年 1 月、日本マス・コミュニケーション学会、pp. 51~77。

水越伸、「デジタル・メディアの隠喩とリテラシー」、『アウラ』、145 号、2001 年 1 月、フジテレビ調査部、pp. 36~39。

水越伸、「メディアの 22 世紀：いまからあすへ」、『情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) 開学記念フォーラム『メディアの 22 世紀』第二部シンポジウム』、2001 年 6 月 8 日、岐阜県大垣市情報工房。（コーディネーター）

水越伸、「メディア表現、学びとリテラシー：『メルプロジェクト』の展開」、2001 年 10 月 4 日、東北大学大学院情報科学研究科棟 2F 大講義室。（招待講演）

水越伸、「メディア・ピオトープのすすめ: マスメディア中心から新しいメディアの生態系へ構造改革」、『新マスコミ学がわかる』、2001年11月10日、朝日新聞社、pp. 112~115。

水越伸、「Japan's encounters with "Asia"」、『国際基督教大学シンポジウム『Feeling "Asian" Modernities: TV Drama Consumption in East/Southeast Asia』』、2001年11月24日、国際基督教大学。(コーディネイター&コメンテーター)

水越伸、「セッション2: 情報コンテンツとメディア表現へ放送と通信の融合領域で」、『情報通信学会コミュニケーション・フォーラム』、2001年11月29日、兵庫県立淡路島夢舞台国際会議場。(コーディネイター)

水越伸、「新聞メディアにとっての二十一世紀: 役割を果たすためにどうすることが必要か」、『新世紀のメディア戦略: 激動の中から浮かぶ道筋』、2001年12月、朝日新聞社総合研究センター、pp. 169~197。

水越伸、「メディア・ピオトープ: 地域に根ざしたメディア生態系の自律的形成のために」、『同志社社会学会シンポジウム『メディアの死滅と再生: グローバル、ナショナル、ローカル、そしてアイデンティティ』』、2001年12月13日、同志社大学。(招待講演)

水越伸、「歴史の中の情報技術・ジャーナリズム・戦争」、外岡秀俊・枝川公一・室謙二編、『9月11日メディアが試された日: TV・新聞・インターネット』、2001年12月18日、トランスアート、pp. 85~90。

水越伸、「メディア論の歴史社会的構図」、『2002 情報学シンポジウム講演論文集』、2002年、社団法人 日本情報処理学会、pp. 105~111。

水越伸、「メディアリテラシーと学校新聞」、『高校の情報教育: メディアリテラシーを学ぶ』、2002年、黎明書房、pp. 11~13。

水越伸・下村健一・菅谷明子・橋場義之、「Jワークショップ: ジャーナリズムと送り手のメディア・リテラシー」、『東京大学社会情報研究所紀要』、64号、2002年、東京大学社会情報研究所、pp. 19~81。

「メディア・リテラシーの現状と展望」報告集、『東北大学大学院情報科学研究科学術公開シンポジウム』、2002年。
URL:http://www.media.is.tohoku.ac.jp/symposium2001/txt/symposium04OCT01_contents.txt

水越伸、「情報処理学会『2002 情報学シンポジウム』」、『情報処理学会『2002 情報学シンポジウム』』、2002年1月18日、日本学術会議講堂。(基調講演)

水越伸、「メディア・ピオトープ: メディア生態系の自律的形成のために」、『同志社社会学研究』第六号』、2002年3月、pp. 59~65。

『2001年度メルプロジェクト・シンポジウム: メルプロジェクトの展開 メディア表現、学びとリテラシー2002』報告要旨集 (CD-ROM付)』、2002年3月。

水越伸、「メディア・リテラシーとメルプロジェクトの実際」、『日本映像学会映像教育研究会シンポジウム『映像メディア教育の未来』』、2002年4月26日、東京都写真美術館。

Shin Mizukoshi・Kuniko Sakata、「Shin Mizukoshi "The Perspective of MELL Project :Media Expression, Learning and Literacy in Japan" (presentation with Kuniko Sakata), SEAMEO INNOTECH, Philippine, 2002/05/16-19. 【招待講演】」、『Shin Mizukoshi "The Perspective of MELL Project :Media Expression, Learning and Literacy in Japan" (presentation with Kuniko Sakata), SEAMEO INNOTECH, Philippine, 2002/05/16-19. 【招待講演】』、2002年5月、Philippines。(招待講演)

水越伸・伊藤昌亮・金亮都・小川明子、「情報コンテンツとメディア表現: 通信と放送の融合領域で」、『情報通信学会誌』第68号』、19巻、3号、2002年6月。

水越伸、「シンポジウム「映像と教育」」、『日本映像学会第28回大会』、2002年6月1日、早稲田大学国際会議場。(パネラー、長谷正人司会%岡島尚志%斉藤綾子%坂井滋和%水越伸)

Shin Mizukoshi, 「Brief Introduction of Media and Communication Studies in the University of Tokyo」, 『2002 Study Abroad Program』, 2002年6月6日, the Department of Culture and Communication at the Steinhart School of Education, New York University “Globalization and Japan’s Media”、東京大学社会情報研究所6階会議室。

水越伸、「メディアからみた風車」、『日本機械学会 2002 年度年次大会市民講座『風車の最新テクノロジーとその社会的アクセパタンス』、2002年9月27日、東京大学法文二号館第35室。

水越伸、「新たな地域情報共同体の形成と民俗のゆくえ」、『日本民俗学会第54回年会公開シンポジウム『民俗と情報：民俗世界における情報・情報社会における民俗』』、2002年10月5日、つくば国際会議場大ホール。(招待基調講演)

水越伸、「メディアリテラシー・メディア表現・ジャーナリスト教育：Jワークショップの実践報告」、花田達朗・廣井脩編、『論争・ジャーナリスト教育』、2003年、東京大学出版会。

水越伸・村田麻里子、「博物館とメディアリテラシー」、『東京大学社会情報研究所紀要』、65号、2003年、東京大学社会情報研究所。

水越伸、「メディア・ピオトープ試論：新しいメディア共同体のデザイン」、『筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター年報』、1号、2003年、筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター、pp. 28～30。

Shin Mizukoshi and Yuhei Yamauchi, “Perspectives on Japan’s Media Environment and the MELL Project, Visions/Revisions (Barry Duncan and Catherine Tynar),” 2003, pp. 159-178.

Shin Mizukoshi, “Challenges and Possibilities of Japan’s Media Literacy : Perspectives of the MELL Project,” Korean Society for Journalism and Communication ed., *Media Education in the World & Prospect of the Korean Media Education*, 2003, pp. 87-116.

水越伸、「新しいメディアの生態系をつくる」、日本民俗学会編、『日本民俗学会』、235号、2003年、pp. 148～159。

「メディアの現場に身を置く研究者、水越伸さん」、『矢野直明コム人対談』、13巻、2003年、NTTコムウェア。
URL:<http://www.nttcom.co.jp/comzine/archive/taidan/vol13/index.html>(対談)

水越伸(主宰・報告)、「メディア表現、学びとリテラシー：メルプロジェクトの衍生(えんせい)」、『東京大学大学院情報学環メルプロジェクト 2002 年度シンポジウム』、2003年3月、東京大学法文二号館。

水越伸(主宰・報告)、「メディア表現、学びとリテラシー：メルプロジェクトの波延(はえん)」、『東京大学大学院情報学環メルプロジェクト 2003 年度シンポジウム『メディア表現、学びとリテラシー：メルプロジェクトの波延(はえん)』』、2003年3月、東京大学大学院情報学環、東京大学弥生講堂。

水越伸(指定討論者)、『静岡大学情報学部「メディア・リテラシー教育を考える」ミニ・フォーラム』、2003年3月11日、静岡大学情報学部大会議室。

水越伸、「メディア・ピオトープ試論：新しいメディア共同体のデザイン」、『筑波大学知的コミュニティ基盤センター開所記念シンポジウム』、2003年3月17日、筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター。(招待基調講演)

水越伸(パネラー)、「アジア社会の情報化と人材育成」、『東京大学大学院情報学環・学際情報学府留学生交流シンポジウム「アジア社会の情報化と人材育成』』、2003年3月18日、東京大学情報学環暫定建物。(パネラー)

水越伸、「市民とメディアをつなぐ回路：メルプロジェクトの実践研究を通じて」、『明治学院大学公開講座『人間文化の再生を求めて』第二回「メディアを読む(現代文化理解のキーワード)」』、2003年5月24日、明治学院大学。(招待報告)

水越伸、「ラジオがニューメディアだったころ：1920年代ラジオ広告のメディア史」、『東京女子大学学会連続講演会』、2003年6月5日、東京女子大学。(招待講演)

水越伸、「PUBLiCing: Publishing as Making Public, or A New Dimension of Information Designing, Learning and Communicating」、『第六回アジアデザイン国際会議産学』リサーチ・プロポジション展示セッション』、2003年10月、アジアデザイン学会、つくば国際会議場。(展示発表代表、査読付展示発表)

Shin Mizukoshi、「Brief Introduction of 重点領域研究『情報社会と人間』Project in Japan」、Korean Information Strategy Institute, Westin Chosun Hotel, 2003/10/01. 【招待報告】、『Shin Mizukoshi “Brief Introduction of 重点領域研究『情報社会と人間』Project in Japan”』、2003年10月1日、Korean Information Strategy Institute、Westin Chosun Hotel。(招待報告)

Shin Mizukoshi, “Challenges and Possibilities of Japan’s Media Literacy: Perspectives of the MELL Project,” 韓国言論学会メディア教育研究会国際シンポジウム, 2003.10.2, 韓国言論学会メディア教育研究会国際シンポジウム、韓国放送会館、2003/10/02. 【招待報告】、韓国放送会館。(招待報告)

水越伸、「ネットワークの美」、『世界グラフィックデザイン会議』、2003年10月9日、世界グラフィックデザイン会議開催運営会、名古屋国際会議場。(コーディネーター)

水越伸、「ラジオ」、小田隆裕・柏木博他編、『事典現代のアメリカ』、2004年、pp. 974～981。

水越伸、「メディア・ピオトープ試論」、『第19回 ICTE 情報教育セミナー』、2004年5月16日、情報コミュニケーション教育研究会 (ICTE)、慶応義塾大学。(基調講演)

水越伸、「中日媒体素養」、『中日媒体素養論壇』、2004年9月21日、台湾国立政治大学傳播学院、台湾国立政治大学傳播学院。(招待講演)

Shin Mizukoshi, “Critical Media Practice” on Culture and Literacy of Mobile Media in Japan』、『Mobile Communication and Social Change: 2004 International Conference on Mobile Communication』、2004年10月、Mobile Communication and Social Change: 2004 International Conference on Mobile Communication. 【査読有】

水越伸、「日本におけるメディアリテラシーの系譜と課題」、『第11回日本教育メディア学会年次大会発表論文集』、2004年10月、日本教育メディア学会、pp. 25～28。

水越伸、「日本におけるメディアリテラシーの系譜と課題」、『第11回日本教育メディア学会年次大会』、2004年10月17日、日本教育メディア学会、関西大学高槻キャンパス。(査読付発表)

Shin Mizukoshi, “Critical Media Practice on Culture and Literacy of Mobile Media in Japan,” 2004 International Conference on Mobile Communication in Seoul, 2004.10.18, Korean Association of Broadcasting Studies, Seoul Press Foundation. (招待発表)

水越伸(主宰・報告)、「メディア表現、学びとリテラシー:メルプロジェクトの協奏」、『メディア表現、学びとリテラシー:メルプロジェクトの協奏』、2005年2月、東京大学大学院情報学環、東京国際フォーラム。

水越伸、「モバイル・メディアの文化とリテラシーをめぐるソシオ・メディア研究」、『NTTドコモ・モバイル社会研究所シンポジウム『モバイル社会の生活の質と安全』』、2005年3月5日、NTTドコモ・モバイル社会研究所、有楽町朝日ホール。

一般向けエッセイ等

水越伸、「メディアの王様」、柏木博・小林忠雄・鈴木一義編、『日本人の暮らし:20世紀生活博物館』、2000年4月、講談社、pp. 403～409。

水越伸、「デジタル化社会における放送のアイデンティティ」、『映像新聞』、2001年2月4日、p. 13。

藤竹暁・松田美佐・水越伸、「携帯電話と社会生活」、川浦康至・松田美佐編、『現代のエスプリ:携帯電話と社会生活』、405号、2001年4月、至文堂、pp. 5～33。(座談会・川浦康至司会)

「研究誌『放送学研究』の40年」、『放送学研究』、50号、2001年6月、NHK放送文化研究所、pp. 125～151。(後藤和彦・石川明と座談会)

桂敬一・水越伸・川本祐司・伊藤和文、「紙の新聞が消えるかもしれない」、『季刊・本とコンピュータ』、2001秋号(第二期1号)号、2001年9月、トランスアート社、pp. 41～48。(座談会)

水越伸、「放送人と子供たちが学びあう：『民放連メディアリテラシー・プロジェクト』始動」、『民間放送』、2001年10月3日、社団法人 日本民間放送連盟、p. 4。

水越伸、「メディア表現、学びとリテラシー」、『2002(秋季)東京大学公開講座講義要項「学力」』、2002年、(財)東京大学総合研究会、pp. 7～14。

水越伸、「言いたい放談」、『東京新聞』、2002年。(連載24回、2002-03年)

水越伸、「eメール時評」、『朝日新聞』、2002年。(連載15回、2002-03年)

水越伸、「地域とメディアを結ぶ回路」、『JNNメディア戦略会議「報道・情報分科会」事務局発行』、2002年2月、報道・情報分科会事務局発行。

水越伸、「リキエスタプラス宣言：新しい出版共同体のデザイン」、『季刊・本とコンピュータ』、2002年冬号(第二期6号)号、2002年12月、トランスアート社、pp. 80～84。

水越伸、「ラジオというメディア%メディアリテラシー」、吉見俊哉・花田達朗編、『社会情報学ハンドブック』、2003年3月、東京大学出版会。(ラジオというメディア(pp.172-175)、メディアリテラシー(pp.106-109))

水越伸、「メディアと社会」、『現代用語の基礎知識2004』、2003年11月、pp. 725～733。(項目解説)

水越伸、「本は『実体』から『象徴』になっていく」、『季刊・本とコンピュータ』、2004年夏号(第二期12号)号、2004年6月、トランスアート社、pp. 128～129。

水越伸、「メディアと社会」、『現代用語の基礎知識2005』、2004年11月、自由国民社、pp. 674～683。(項目解説)

一般向け講演等

水越伸、『仙台メディアテーク開館一周年記念シンポジウム『smtはどう開かれたか』』、2001年2月1日、仙台メディアテーク。

水越伸、『電子出版の未来・実践編／第二部「本とコンピュータの未来」』、2001年5月10日、「本とコンピュータ」編集室、新宿紀伊國屋ホール。(パネリスト)

水越伸、『IAMAS 情報科学芸術大学院大学開学記念フォーラム『メディアの22世紀』』『金曜フォーラム』』、2001年6月8日、NHK教育。(企画・出演、2001年6月8日放送)

水越伸、「デジタル情報化と新聞メディア」、『朝日新聞社新任次長研究会』、2001年6月16日、晴海グランドホテル。(2001年6月16日、30日(講演))

水越伸、「メディア変容の中の読者投稿欄」、『投書問題懇談会』、2001年6月26日、日本新聞協会、日本新聞協会中会議室。(講師)

水越伸、「メディア・リテラシー活動の現在」、2001年9月18日、東京都青少年問題協議会、東京都庁。(報告)

水越伸、「メディア表現、学びとリテラシー」、『横浜情報文化センター開館1周年記念シンポジウム『メディア教育を考える：メディアリテラシーと新聞・放送』』、2001年10月12日、横浜情報文化センター。

水越伸、「メディア教育を考える：メディアリテラシーと新聞・放送」、『金曜フォーラム』、2001年11月、NHK教育。(企画・出演、2001年11月放送)

水越伸、『日本賞受賞作品紹介特別番組』、2001年11月、NHK教育。(出演、2001年11月放送)

水越伸、『21世紀の新聞、新聞の21世紀』、2001年11月1日、朝日新聞総合研究センター、朝日新聞東京本社。(講演)

水越伸、「メディアと学び：メディアと学校を結ぶ実践を中心に」、『お茶の水女子大学附属中学校公開研究発表会』、2001年11月2日、お茶の水大学付属中学校。

水越伸、『シリーズ・映像制作の現場から：「表現者の自由」をめぐる対話 第一回被写体との格闘、原一男』、2001年11月17日、日放労、NHK509スタジオ。

水越伸、『文研の将来構想に関する懇談会』、2001年11月21日、NHK放送文化研究所、NHK放送文化研究所。(登壇?)

水越伸、『シリーズ・映像制作の現場から：「表現者の自由」をめぐる対話 第二回メディアはそのとき自由だったか』、2001年12月15日、日放労、NHK509スタジオ。(林直哉・司会?)

水越伸、『メディアリテラシーの射程』、2002年1月9日、放送番組向上協議会、麹町会館。

水越伸、『中海テレビ放送PAC講演『市民のメディア表現と学び』』、2002年3月24日、鳥取県米子市。

水越伸、『NHKスペシャル『変革の世紀：インターネット大討論』』、2002年8月17日。(出演)

水越伸、『平成14年度社会教育主事講習「情報化と社会教育」』、2002年9月17日、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター。

水越伸、『学力』、2002年9月21日、東京大学安田講堂。(東京大学公開講座)

水越伸、『メディアリテラシー』、2002年9月26日、テレビ信州社員研修会、長野県長野市テレビ信州本社会議室。

水越伸、『メディア表現、学びとリテラシー：民放連福岡実践の背景』、2002年10月27日、福岡・子供とメディア研究会。(劉雪雁と共同報告)

水越伸、『アーバンコミュニティ・プラットフォーム NPO フェスティバル『インターネットという眼鏡：豊かな情報市民社会のために』』、2002年11月16日、明治大学駿河台校舎リバティータワー16階。(浜田忠久と共同講演)

水越伸、「市民とメディアをつなぐ回路 メディア表現、学びとリテラシーを通じて」、『NHK放送技術局放送倫理セミナー』、2002年11月22日、渋谷NHK。(林田真心子と共同発表)

水越伸、『テレビ信州「民放連メディアリテラシー・プロジェクト」研究会』、2002年12月、テレビ信州「民放連メディアリテラシー・プロジェクト」研究会、テレビ信州本社会議室。(コーディネーター、討論者)

水越伸、「市民とメディアをつなぐ回路：メディア表現、学びとリテラシーを通じて」、『中国放送講演会』、2003年5月1日、広島市中国放送本社。(講演)

水越伸、「市民とメディアをつなぐ回路：メルプロジェクトの実践研究を通じて」、『明治学院大学公開講座『人間文化の再生を求めて：第二回メディアを読む(現代文化理解のキーワード)』』、2003年5月25日、明治学院大学。(報告)

水越伸、「ラジオがニューメディアだったころ：1920年代ラジオ広告のメディア史」、『東京女子大学学会連続講演会』、2003年6月5日、東京女子大学。(講演)

水越伸、「地域社会における『メディア・ビोटープ』のデザイン」、『地域メディアコンテンツ研究会』、2003年6月6日、総務省、総務省。(報告)

水越伸、「メルプロジェクトの現在」、『川崎国語メディア研究会』、2003年6月28日、川崎市高津市民館。(報告)

水越伸、『学問の制度性／制度化をめぐる：映画研究、メディア論、カルチュラルスタディーズ』、2003年7月31日、情報学環会議室。(吉本光宏、吉見俊哉、長谷正人とともに討論)

水越伸、「はじめてみよう！メディア教育：青少年のためのメディアリテラシー育成事業の可能性と課題」、『東京都青少年センター公開講座』、2003年9月11日、東京都青少年センター。(講演)

水越伸、『NHK教育テレビ『メディアが開く教育の未来』』、2003年11月8日。(企画協力・出演)

水越伸、「メルプロジェクトの射程：メディア総合研究所メディアリテラシーのために」、『メディア総合研究所研究会』、2003年11月15日、メディア総合研究所。(境真理子と共同報告)

水越伸、「市民とメディアをつなぐ『メルプロジェクト』の展開」、2003年12月20日、静岡市アイセル女性カレッジ、静岡市女性会館。(報告)

水越伸、「市民とメディアをつなぐ回路～MELL Project の試み～」、『多摩美術大学 情報デザイン学科 2003年度卒業研究制作展情報デザインコース・シンポジウム』、2004年2月1日、多摩美術大学 情報デザイン学科、青山スパイラルホール。(報告)

水越伸、「デジタル・テレビの隠喩とリテラシー」、『講演地上デジタルを考える会』、2004年2月19日、名古屋市伏見ライフプラザ。

水越伸、『地域の再生を目指して～地域内コミュニケーションの担い手は誰か？』、2004年3月23日、地域メディア戦略研究会、東京大学院情報学環会議室。(パネラー)

水越伸、「ケータイにアプローチする！」、『メルプロジェクト第24回公開研究会』、2004年4月17日、東京大学大学院情報学環暫定建物二階会議室。(司会・報告)

水越伸、「送り手と受け手の対話の場をデザインする：第二期民放連プロジェクト構想」、『メルプロジェクト第25回公開研究会』、2004年5月15日、東京大学大学院情報学環暫定建物二階会議室。(司会・報告)

水越伸、「メディア・ビोटープを育む：地域社会とメディアリテラシー」、『講演三重県メディアリテラシー・フォーラム』、2004年7月30日、津市センターパレスホール。

水越伸、「学校教育とメディア・リテラシー メディアを媒介とした表現と学び」、2004年10月22日、奈良女子大学附属中学校。(講演)

水越伸、「モバイルリング & デザイニング：NTTドコモ・モバイル社会研究所コア研究の中間報告」、『メルプロジェクト第29回公開研究会』、2004年11月13日、東京大学大学院情報学環暫定建物二階会議室。(司会・報告)

水越伸、「Critical Media Practice on Culture and Literacy of Mobile Media in Japan」、2004年11月29日、Telenor in Oslo。(報告)

水越伸、「Culture and Literacy of Keitai in Japan: from the Standpoint of the MoDe Project」、『Bouyegues Telecom 研修会』、2005年2月7日、東京全日空ホテル。(伊藤昌亮、鳥海希世子と共同報告)

水越伸、「メディア社会のこれから」、『人事院公務員研修所・第118回行政研修(係長級)』、2005年2月8日、国家公務員研修センター。(講演)

森 武俊 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

環境型人間機械システムの研究

人間を支援する機械システムとして環境型構成をデザインし, そのなかで, 人の行動理解, 個人適合処理を行なうための情報処理の研究. 分散センサ処理ネットワーク, マルチモーダル情報データベースの研究を行なっている.

機械による人の動作認識の研究

人間機械協調システムを念頭においた画像センサ, 圧力センサをはじめとする多種多数センサ情報処理, それらに基づく人の動作認識および人の行動モデルをステートチャートで表現することによる行動理解の研究. 特に最近では, モーションキャプチャされた計測運動データに基づいて人と同様の認識を行なう動作認識モデルの研究を進めている.

携帯型・着衣型センシングシステムの研究

人間行動データの常時蓄積処理のための小型携帯型生理量計測センサ, 小型運動計測記録システムの研究, 特別な操作を加えずに日常生活をしている自然な状況で動作の認識・提示支援を行なうシステムについて研究している.

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

佐藤知正・中村衛・森武俊、「運動計測情報に基づく人間の日常生活動作認識モデルに関する研究」、『平成 13 年度 IT の深化の基盤を拓く情報学研究研究成果報告書 A03 人間の情報処理の理解とその応用に関する研究』、2000 年、pp. 174～179。

森 武俊・他、「人間支援システム」、『機械工学ハンドブック』、2002 年、朝倉書店。(VI-5 篇 5 章, 7 章)

佐藤知正・森武俊、「人間体験蓄積・活用システムの研究開発. 平成 13 年度人間行動適合型生活環境創出システム技術」、『石油プラント高度情報化システム技術開発 成果報告書』、2002 年 5 月。

森 武俊・中村衛・佐藤知正、「運動計測情報に基づく人間の日常生活動作認識モデルに関する研究」、『平成 14 年度 IT の深化の基盤を拓く情報学研究研究成果報告書 A03 人間の情報処理の理解とその応用に関する研究』、2003 年、pp. 71～76。

稲葉雅幸・佐藤知正・森武俊・下山勲・松本潔・井上博允、『実世界情報システムプロジェクト ～ロボット研究グループ～』、2003 年、pp. 50～53。

佐藤知正・森武俊、『実世界情報システムプロジェクト ロボット研究グループ 環境型物理支援ロボットルームの構築』、2003 年、pp. 58～61。

佐藤知正・森武俊、「人間体験蓄積・活用システムの研究開発」、『平成 14 年度人間行動適合型生活環境創出システム技術. 石油プラント高度情報化システム技術開発 成果報告書 2003』、2003 年。

佐藤知正・森武俊・西田佳史・クリストファ アトケソン・ヨーキー マツオカ、「デジタルヒューマンの振る舞いを見せる、聞かせる技術ソフトウェア」、『情報処理振興事業協会未踏ソフトウェア創造事業 平成 14 年度報告』、2003 年 3 月。

森 武俊・他、「行動理解の章」、『ロボット工学ハンドブック』、2004 年、コロナ社。

森武俊・佐藤知正・中村衛、「運動計測情報に基づく人間の日常生活動作認識モデルに関する研究」、『平成 15 年度 IT の深化の基盤を拓く情報学研究研究成果報告書 A03 人間の情報処理の理解とその応用に関する研究』、2004 年、pp. 75～80。

稲葉雅幸・稲邑哲也・加賀美聡・井上博允・佐藤知正・森武俊・下山勲・松本潔・星野一憲、「実世界情報システムプロジェクト～ヒューマンロボット研究グループ～人の傍にあるロボティクス」、2004 年、p. 9999。

佐藤知正・森武俊、「実世界情報システムプロジェクト ロボット研究グループ 環境型物理支援ロボットルームの構築」、2004 年、p. 9999。

野口博史・佐藤知正・森武俊、「実世界情報システムプロジェクト～ヒューマンロボット研究グループ～ 部屋型人間行動計測環境：Sensing Room」、2004 年、p. 9999。

佐藤知正・森武俊、「人間体験蓄積・活用システムの研究開発」、『平成 15 年度人間行動適合型生活環境創出システム技術 石油プラント高度情報化システム技術開発 成果報告書』、2004 年、p. 9999。

論文等

Taketoshi MORI, Kousuke Tsujioka, Masamichi Shimosaka and Tomomasa Sato, "Human-like Action Recognition System Using Features Extracted by Human.," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, EPFL, Lausanne, Switzerland pp.1214-1220, 10 2002.*, 2001.10, pp. 1214-1220.【査読有】

Taketoshi MORI・Haruhiko H. ASADA., 「Design and Architecture an Agent-based Physiological Human Model.」、『BME』、16 巻、8 号、2002 年。【査読有】

江口郁子・佐藤知正・森武俊、「計算機理解に基づく診療行動の蓄積・提示支援システムに関する研究」、『A Medical Care Support System for Computational Behavioral Data Accumulation and Interactive Display by Behavior Understanding 日本ロボット学会誌』、20 巻、4 号、2002 年、日本ロボット学会、pp. 437～445。【査読有】

佐藤知正・森武俊・原田達也、「ロボティックルームの知能 ---ユービキタス知能---」、『Intelligence of Robotic Room --- Ubiquitous Intelligence---. 日本ロボット学会誌』、120 巻、5 号、2002 年、日本ロボット学会。【査読有】

Hiroshi NOGUCHI, Taketoshi MORI and Tomomasa SATO, "Construction of Network System and First Step of Summarization for Human Daily Action Data in Sensing Room.," *IEEE International Workshop on Knowledge Media Networking*, 2002, pp. 17-22.【査読有】

Tatsuya HARADA, Tomomasa SATO and Taketoshi MORI, "Total Estimation of Bed-Ridden Human's Gross and Slight Movement Based on Pressure Sensors Distribution Bed," *The 2002 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2002.5, pp. 3795-3800.【査読有】

森武俊、「人間の日常生活動作の認識を考える」、『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(C)IT の深化の基盤を拓く情報学研究 研究項目 A03 人間の情報処理の理解とその応用に関する研究 第二回研究会』、2002 年 5 月 16 日。(研究会資料)

佐藤知正・伊藤寛・森下広・田中雅行・森武俊、「ウェアラブルセンサを用いた医師への患者状況報告支援システム」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02 講演論文集』、2002 年 6 月、pp. 2A1-B07(1)～2A1-B07(2)。

佐藤知正・福井類・森下広・森武俊、「生活環境センサネットワーク空間において動作する移動台車システムの構築」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02 講演論文集』、2002 年 6 月、pp. 2P1-K04(1)～2P1-K04(2)。

佐藤知正・岩村泰彦・野口博史・原田達也・菅原康博・森武俊、「住居センサ空間から得られる長期行動情報に基づく人間の生活状況要約 支援システム」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02 講演論文集』、2002 年 6 月、pp. 1A1-J12(1)～1A1-J12(2)。

佐藤知正・大串俊明・野口博史・辻岡宏介・原田達也・西田佳史・森武俊、「磁気センサによる人間の日常動作収集の高信頼化～居住空間内の家具センサに基づく手法の提案～」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02講演論文集』、2002年6月、pp. 1A1-J08(1)～1A1-J08(2)。

森武俊・辻岡宏介・下坂正倫・佐藤知正、「人の抽出特徴量を用いた人に近い動作認識システム」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'02講演論文集』、2002年6月、pp. 2A1-K04(1)～2A1-K04(2)。

Taketoshi MORI, Haruhiko Asada and Tadashi Kitamura, "Design and Architecture of a Physiological Digital Human Model," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2002.10, pp. 1271-1277.【査読有】

Hiroshi NOGUCHI, Taketoshi Mori and Tomomasa Sato, "Construction of Accumulation System for Human Behavior Information in Room. Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2002.10, pp. 1252-1258. 【査読有】

Tomomasa SATO, Takashi Kobayashi, Hiroshi Morishita and Taketoshi Mori, "Plant-Shaped Robot Object as an Awareness Driven Display Device of Daily Life Information.," *Proceedings of the 2002 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2002.10, pp. 1165-1171.【査読有】

佐藤知正・一柳星文・森武俊、「セル生産のための力センサモジュールを用いた作業時間計測システム」、『第20回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2002年10月、1M32pp.。

原田達也・内野宏人・森武俊・佐藤知正、「室内における3次元位置・姿勢推定に関する考察」、『第20回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2002年10月、2G18pp.。

原田達也・高松洋亘・森武俊・佐藤知正、「動作模倣のための動作記述に関する考察」、『第20回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2002年10月、3C16pp.。

佐藤知正・福井類・森下広・森武俊、「人間共棲制御を可能とする環境型移動ロボットシステムの構築」、『計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会』、2002年12月、pp. 201～202。(以下、二つめの論文が含まれていた。佐藤知正、伊藤 覚、大谷 哲史、森 武俊、人間活動支援のための頭部運動情報に関する研究、計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演)

森 武俊・他、「領域ロボティクス」、『認知科学辞典』、2003年、共立出版。

森武俊・今井雄一郎・下坂 正倫・原田達也・佐藤知正、「頭位置画像処理による動作認識とそのモーションキャプチャベース認識との比較」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 7～8。

佐藤知正・久保寺秀幸・源田雄一郎・森武俊・原田達也、「人間動作の確率的表現・評価に基づく典型的動作軌道の獲得」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 17～18。

森下広・田村淳・森 武俊・原田達也・佐藤知正、「利用者とその行動に適応する機構を備えた能動的照明デバイスの構築」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 13～14。

森下広・左貝雅人・原田達也・佐藤知正・森武俊、「テーブル上で人を支援するためのロボティックソーサ」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 15～16。

森武俊・星名真幸・森下広・福井類・原田達也・佐藤知正、「センシングフロアによる人間の歩行動作の発見・追跡」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 5～6。

内野宏人・原田達也・森武俊・佐藤知正、「センサネットワークのための小型3次元姿勢推定デバイスの実現」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 3～4。

下坂正倫・森武俊・原田達也・佐藤知正、「人間の日常生活行動における動作認識」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 9～10。

原田達也・高松洋亘・森武俊・佐藤知正、「人間による動作模倣における動作困難性と必要情報量」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 11～12。

佐藤知正・森武俊・原田達也、「生活支援ルームにおける模倣の構成論的研究～第二報～」、『第二回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2003年2月、pp. 1～2。

佐藤知正・森武俊・西田佳史・クリストファアトケソン・ヨーキーマツオカ、「デジタルヒューマンの振る舞いを見せる、聞かせる技術ソフトウェア」、『情報処理振興事業協会未踏ソフトウェア創造事業 未踏ソフトウェア創造事業「デジタル・ヒューマンを実現する人間機能のモデリングとその応用ソフトウェア」研究報告会(2003.3.7.)』、2003年3月。

森武俊・原田達也・中村衛・市川保正・福田勝己・中根茂・藤田裕二・高野太刀雄・小林肇・齊藤正光・根本俊雄・稲葉雅幸、「インターネットカメラシステムの設計・製作とプログラミング演習－東京大学機械情報工学科CAE演習－」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1P1-3F-G4(1) ?1P1-3F-G4(2))

原田達也・中村衛・高野太刀雄・小林肇・齊藤正光・寺田実・森武俊・國吉康夫・稲葉雅幸、「C言語記述のマルチタスクモニタを用いたメカトロ・プログラミング演習－東京大学機械情報工学科メカトロ演習・知能機械情報学演習－」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1P1-3F-G5(1) ?1P1-3F-G5(2))

森武俊・星名真幸・森下広・原田達也・佐藤知正、「センシングフロアによる人の識別・追跡」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-1F-A2(1) ?1A1-1F-A2(2))

森下広・田村淳・森武俊・原田達也・佐藤知正、「利用者とその行動に適應する機構を備えた能動的照明デバイスの構築」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-3F-D2(1) ?1A1-3F-D2(2))

森武俊・高田有時・野口博史・原田達也・佐藤知正、「センシングルームにおける情報統合利用システム」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-1F-B6(1) ?1A1-1F-B6(2))

森武俊・岩村泰彦・原田達也・佐藤知正、「居住センサ空間から得られる長期行動情報に基づく生活要約システム」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-1F-A3(1) ?1A1-1F-A3(2))

佐藤知正・久保寺秀幸・源田雄一郎・森武俊・原田達也、「人間動作の確率的表現・評価に基づく典型的動作軌道の獲得」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-3F-C4(1) ?1A1-3F-C4(2))

佐藤知正・大谷哲史・伊藤覚・原田達也・森武俊、「研究活動における行動履歴作成支援システムの構築」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-3F-C7(1) ?1A1-3F-C7(2))

森武俊・黒岩文瑠・森下広・福井類・渡邊恵佑・原田達也・佐藤知正、「ロボティックキッチンを用いた個人行動適合の試み」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'03講演論文集』、2003年5月。(pp. 1A1-3F-C8(1) ?1A1-3F-C8(2))

Tomomasa SATO, Taketoshi Mori and Tatsuya Harada, "Robotic Room: Human Behavior Measurement, Behavior Accumulation and Personal/Behavioral Adaptation by Intelligent Environment.," *IEEE/ASME International Conference on Advanced Intelligent Mechatronics (AIM 2003)*, 2003.7, pp. 515-520.【査読有】

Tatsuya Harada, Hiroto Uchino, Tomomasa Sato and Taketoshi Mori, "Portable Orientation Estimation Device Based on Accelerometers," *Magnetometers and Gyroscope Sensors for Sensor Network*, 2003.7, pp. 191-196.【査読有】

Tomomasa Sato, Satoshi Otani, Satoru Itoh, Tatsuya Harada and Taketoshi Mori, "Human Behavior Logging Support System utilizing Fused Pose/Position Sensor and Behavior Target Sensor Information.," *IEEE Conference on Multisensor Fusion and Integration for Intelligent Systems(MFI)*, 2003.7, pp. 301-310.【査読有】

Masamichi Shimosaka, Taketoshi Mori and Tatsuya Harada, "Recognition of Human Daily Life Action and Its Performance Adjustment based on Support Vector Learning.," *Humanoids 2003*, 2003.9, pp. 1-17.【査読有】

森武俊・下坂正倫・原田達也・佐藤知正、「SVMを利用した日常動作認識におけるカーネルパラメータ最適化に基づく重要運動情報の発見」、『電子情報通信学会 技術報告 PRMU2003 95-114』、2003年9月、pp. 19~24。

森武俊・下坂正倫・原田達也・佐藤知正、「SVMカーネルパラメータ最適化を利用した日常動作認識における重要運動情報の発見」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

原田達也・高松洋亘・田岡創・森武俊・佐藤知正、「人間による動作模倣における動作困難性と必要提示部位」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

下坂正倫・森武俊・原田達也・佐藤知正、「Support Vector Machineを利用した日常動作認識システムの実現」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

下坂正倫・森武俊・瀬川友史・原田達也・佐藤知正、「FisherKernelを利用した日常動作の時系列認識」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

原田達也・内野宏人・森武俊・佐藤知正、「ワイヤレスネットワーク機能を備えた小型3次元姿勢推定デバイスの開発」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

佐藤知正・久保寺秀幸・源田雄一郎・原田達也・森武俊、「日常生活における人間動作の定性表現に基づく典型的作業の獲得」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

野口博史・森武俊・原田達也・佐藤知正、「部屋環境内分散センサ管理利用のためのネットワークシステム」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

森武俊・高田有時・野口博史・原田達也・佐藤知正、「分散センシング空間におけるXMLを用いた情報提供機能の実現」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

佐藤知正・藤本隆司・渡邊恵佑・森武俊、「仮想ロボット化」概念に基づいた環境型ロボットシステムの制御記述法～ロボティックルーム3における人間支援範囲の拡大～」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

佐藤知正・大谷哲史・伊藤覚・原田達也・森武俊、「研究活動計測に基づく行動履歴作成支援システムの構築」、『第21回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2003年9月。

Hiroshi MORISHITA, Keisuke WATANABE, Takeru KUROIWA, Taketoshi MORI and Tomomasa SATO, "Development of Robotic Kitchen Counter: A Kitchen Counter Equipped with Sensors and Actuators for Action ?adapted and Personally Fit Assistance.," *Proceedings of the 2003 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2003.10, pp. 1839-1844.【査読有】(以下、二つ目の論文が入っていた(尾高)Hiroshi NOGUCHI, Taketoshi MORI, Tomomasa SATO. Network Middleware For Utilization of Sensors in Room. *Proceedings of the 2003 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, pp.1)

Tomomasa Sato, Satoru Itoh, Satoshi Otani, Tatsuya Harada and Taketoshi Mori, "Human Behavior Logging Support System Utilizing Pose/Position Sensors and Behavior Target Sensors.," *Proceedings of the 2003 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2003.10, pp. 1068-1073.【査読有】

Tomomasa SATO, Yuichiro GENDA, Hideyuki KUBODERA, Taketoshi MORI and Tatsuya HARADA, "Robot Imitation of Human Motion Based on Qualitative Description from Multiple Measurement of Human and Environmental Data.," *Proceedings of the 2003 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2003.10, pp. 2377-2384.【査読有】

森武俊・黒岩文瑠・森下広・福井類・渡邊恵佑・原田達也・佐藤知正、「高さ調整可能なキッチンを用いた個人行動適合機能の実現」、『第18回生体生理工学シンポジウム』、2003年10月、pp. 299~302。

佐藤知正・久保寺秀幸・原田達也・森武俊、「人間動作データの定性表現に基づく物体操作作業の分類」、『電子情報通信学会 技術報告 NC/PRMU2003 95-115』、2003 年 10 月。

森武俊・下坂正倫、「カーネルパラメータ最適化の日常動作認識における有意運動情報発見への応用, Detecting Remarkable Motion Feature in SVM-based Action Recognition: An Application of Kernel Parameters Optimization」、『2003 年情報論的学習理論ワークショップ』、2003 年 11 月、京都。【査読有】(査読)

野口博史・高田有時・森武俊・原田達也・佐藤知正、「センサ情報管理機構を利用した住居内分散センサ出力統合システムの提案」、『第4回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 SI2003』、2003 年 12 月、pp. 37~38。

原田達也・桜井慎平・森武俊・佐藤知正、「横臥時無拘束生体量計測のための高精度力センサ分布ベッドの構築」、『第4回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 SI2003』、2003 年 12 月、pp. 151~152。

原田達也・内野宏人・森武俊・佐藤知正、「ネットワーク機能を備えた姿勢計測デバイスの実現と加速度の影響の少ない姿勢推定手法」、『第4回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 SI2003』、2003 年 12 月、pp. 153~154。

森武俊・瀬川友史・下坂正倫・佐藤知正、「動作の階層構造に着目した隠れマルコフモデルによる日常動作認識」、『第4回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 SI2003』、2003 年 12 月、pp. 301~302。

原田達也・伊藤覚・森武俊・佐藤知正、「SS 無線と高精度時間計測デバイスを利用した距離計測~室内三次元位置計測システムの開発」、『第4回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 SI2003』、2003 年 12 月、pp. 660~661。

Tomomasa Sato, Tatsuya Harada and Taketoshi Mori, "Environment Type Robot System "Robotic Room" featured by Behavior Media," *Behavior Contents and Behavior Adaptation IEEE/ASME Transaction on Mechatronics*, 19, no.3, 2004. 【査読有】

Taketoshi Mori, Takeru Kuroiwa, Hiroshi Morishita and Tomomasa Sato, "Assistance with Human Actions and Individuality Adaptation by Robotic Kitchen Counter," *Proceedings of the ASER '04 2nd International Workshop on Advances in Service Robotics Stuttgart*, 2004, pp. 13-20.【査読有】

原田達也・川野裕介・大谷哲史・森武俊・佐藤知正、「ワイヤレスネットワークに基づく LifeLog を利用した機器操作支援」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 206~207。

下坂正倫・森武俊・原田達也・佐藤知正、「オンライン動作認識のための混合状態力学系に基づくカーネル」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 210~211。

佐藤知正・稲葉雅幸・國吉康夫・森武俊・田所諭、「知能ロボットによる模倣の構成論的研究」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 553~554。

佐藤知正・細田尚史・久保寺秀幸・原田達也・森武俊、「物体間の相対関係に注目した複数物体操作動作のクラスタリング」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 563~564。

原田達也・森武俊・佐藤知正、「姿勢確率モデルによる欠損データからの姿勢復元」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 565~566。

久保寺秀幸・原田達也・森武俊・佐藤知正、「動作プリミティブに基づく日常物体操作のロボットによる支援」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 567~568。

野口博史・田中克典・森武俊・佐藤知正、「RDF を用いた住居内センサのメタデータおよび情報記述の提案」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 579~580。

森武俊・羽山典孝・野口博史・佐藤知正、「環境センサと可動プロジェクタによる段階的な情報支援の実現」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会 (SI2004)』、2004 年、pp. 581~582。

渡邊恵佑・森下広・森武俊・佐藤知正、「日常生活における手指使用状況の観察と分析－関節リウマチ患者支援のための外骨格型ハンドの開発にむけて－」、『第5回計測自動制御学会システムインテグレーション部門学術講演会(SI2004)』、2004年、pp. 733～734。

森武俊、「人間行動をどこにでも見せられる技術ソフトウェア」、『画像ラボ』15, no.1, 2004.1, pp. 42-46。

佐藤知正・森武俊・原田達也、「生活支援ルームにおける模倣の構成論的研究～第三報～」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 5～6。

森武俊・瀬川友史・下坂正倫・佐藤知正、「隠れマルコフモデルと動作の階層構造の木表現による日常動作認識」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 7～12。

下坂正倫・森武俊・原田達也・佐藤知正、「カーネル特徴空間調整を利用した重要運動情報の発見」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 13～16。

原田達也・田岡創・森武俊・佐藤知正、「人間の動作模倣のための姿勢類似度評価手法」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 17～20。

佐藤知正・源田雄一郎・森武俊、「人間机上運搬動作の分節化と再構築に基づくロボットの目標達成動作生成システムの研究」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 21～24。

佐藤知正・久保寺秀幸・原田達也・森武俊、「動作 Primitive による物体操作動作の認識」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 25～28。

佐藤知正・大串俊明・原田達也・森武俊、「力学系の切換えによる動作要素獲得・動作生成システム」、『第三回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2004年2月、pp. 29～32。

原田達也・伊藤武俊・佐藤知正、「SS無線と高精度時間計測LSIを用いた室内3次元位置計測システムの開発」、『第9回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2004年3月、pp. 26～31。【査読有】(1B1, (フルペーパー査読), 最優秀論文賞 Finalist)

岩村泰彦・森武俊・佐藤知正、「居住センサ空間 Sensing Room を用いた長期生活要約システムの開発」、『第9回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2004年3月、pp. 78～83。【査読有】(1D2, (フルペーパー査読))

大串俊明・佐藤知正・原田達也・森武俊、「セグメンテーション情報を利用しモーションデータを動作要素に分類・抽象化するシステムの開発～動作の再計画への応用～」、『第9回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2004年3月、pp. 84～89。【査読有】(1D3, (フルペーパー査読))

福井類・森下広・原田達也・森武俊・佐藤知正、「磁石誘導型天井移動ロボットプラットフォーム～天井吸着用磁石モジュールと複数ロボットの位置計測方法～」、『第9回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2004年3月、pp. 146～153。【査読有】(2C2, (フルペーパー査読))

下坂正倫・森武俊・佐藤知正、「定性的事前知識を統合したカーネル学習機に基づく日常動作認識法」、『第9回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2004年3月、pp. 180～185。【査読有】(2D3, (フルペーパー査読) 最優秀論文賞 Finalist)

野口博史・森武俊・佐藤知正、「住居内分散センサ出力統合ネットワークミドルウェアの構築～居住者状態表示アプリケーションの作成と時間遅延計測～」、『第9回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2004年3月、pp. 379～385。【査読有】(4D5, (フルペーパー査読))

佐藤知正・森武俊、「ユービキタスコンピューティングのためのハイパーロボットによって率いられた人間情報環境」、『電子情報通信学会技術報告 PRMU2003-286』、2004年3月、pp. 11～18。(招待講演原稿)

野口博史・小西亮輔・末益佳子・高田有時・岩村泰彦・森武俊・佐藤知正、「部屋型日常行動計測環境: Sensing Room」、『電子情報通信学会技術報告 PRMU2003-287』、2004年3月、pp. 19～24。

Tatsuya Harada, Hiroto Uchino, Taketoshi Mori and Tomomasa Sato, "Portable Absolute Orientation Estimation Device with Wireless Network under Accelerated Situation," *Proceedings of the 2004 IEEE International Conference on Robotics and Automation*, 2004.4, pp. 1412-1417.【査読有】

M. Tanaka, Y. Kikuchi, A. Senno, T. Sato, T. Mori, S. Watanabe, M. Abo and K. Yonemoto, "An f-MRI study on the neural activity associated with face and eye recognition," *14th European Congress of Physical and Rehabilitation Medicine*, 2004.5.【査読有】 (p.92)

Taketoshi Mori, Yushi Segawa, Masamichi Shimosaka and Tomomasa Sato, "Hierarchical Recognition of Daily Human Actions Based on Continuous Hidden Markov Models," *Proceedings of the 6th International Conference on Automatic Face and Gesture Recognition (FG2004)*, 2004.5, pp. 1-6.【査読有】

Tomomasa Sato, Hideyuki Kubotera, Tatsuya Harada and Taketoshi Mori, "Primitive-based Recognition of Object-handling Motion," *Proceedings of the ASER '04 2nd International Workshop on Advances in Service Robotics Stuttgart*, 2004.5, pp. 45-50.【査読有】

Tomomasa Sato, Satoshi Otani, Satoru Itoh, Tatsuya Harada and Taketoshi Mori, "Electronic Information Retrieval System utilizing Human Behavior Log," *Proceedings of the ASER '04 2nd International Workshop on Advances in Service Robotics Stuttgart*, 2004.5, pp. 72-77.【査読有】

Tomomasa Sato, Mehrab Hosseinbor, Rui Fukui, Jun Tamura, Hiroshi Morishita and Taketoshi Mori, "Illumination Assistance by Robotic Lamp with Adaptation to User's Behavior and Individuality.," *Proceedings of the ASER '04 2nd International Workshop on Advances in Service Robotics Stuttgart*, 2004.5.21, Germany, pp. 78-84.【査読有】

Taketoshi Mori, Masamichi Shimosaka and Tomomasa Sato, "SVM-Based Human Action Recognition and Its Remarkable Motion Features Discovery Algorithm," *Proceedings of the 9th International Symposium on Experimental Robotics (ISER2004)*, 2004.6, +01-129 .【査読有】

Taketoshi Mori, Hiroshi Noguchi, Aritoki Takada and Tomomasa Sato, "Sensing Room: Distributed Sensor Environment for Measurement of Human Daily Behavior.," *First International Workshop on Networked Sensing Systems (INSS2004)*, 2004.6, pp. 40-43.【査読有】

Tatsuya Harada, Takaharu Nagai, Taketoshi Mori and Tomomasa Sato, "Realization of Bluetooth-equipped Module for Wireless Sensor Network," *First International Workshop on Networked Sensing Systems (INSS2004)*, 2004.6, pp. 24-27. 【査読有】

原田達也・田岡創・森武俊・佐藤知正、「人間の動作模倣のための姿勢類似度評価手法」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 講演論文集』、2004年6月。(1A1-H-61(1)-1A1-H-61(4))

Tomomasa Sato・Mehrab Hosseinbor・Takeru Kuroiwa・Rui Fukui・Jun Tamura・Taketoshi Mori、「ロボティック照明による人間への個人行動適合機能の実現」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 講演論文集』、2004年6月、pp. 2P1-H-17(1)~2P1-H-17(4)。

森武俊・末益佳子・野口博史・佐藤知正、「人床圧力センサとRFIDの統合による複数人の追跡」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 講演論文集』、2004年6月、pp. 2P2-L1-35(1)~2P2-L1-35(4)。

原田達也・長井隆治・森武俊・佐藤知正、「Bluetooth搭載小型センサモジュールの製作とセンサ情報相互通信機能の実装」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 講演論文集』、2004年6月、pp. 2P2-L1-36(1)~2P2-L1-36(4)。

野口博史・小西亮輔・森武俊・佐藤知正、「環境側センサ情報に基づくルールベースな日常行動認識」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 講演論文集』、2004年6月、pp. 2P2-L1-37(1)~2P2-L1-37(4)。

佐藤知正・藤本隆司・原田達也・森武俊、「仮想ロボット化記述を用いた複数台ロボットによる協調搬送」、『日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'04 講演論文集』、2004年6月、pp. 2P2-L1-38(1)~2P2-L1-38(2)。

Taketoshi Mori, Noritaka Hayama, Hiroshi Noguchi and Tomomasa Sato, "Informational Support in Distributed Sensor Environment Sensing Room," *Proceedings of the 13th International Workshop on Robot and Human Interactive Communication(RO-MAN 2004)*, 2004.9, pp. 353-358.【査読有】

Tomomasa Sato, Rui Fukui, Hiroshi Morishita and Taketoshi Mori, "Construction of Ceiling Adsorbed Mobile Robots Platform Utilizing Permanent Magnet Inductive Traction Method," *2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2004.9, pp. 552-558.【査読有】(IROS)

Taketoshi Mori, Masamichi SHIMOSAKA, Tatsuya Harada and Tomomasa Sato, "Informative Motion Extractor for Action Recognition with Kernel Feature Alignment," *2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems*, 2004.9, pp. 2009-2014.【査読有】(IROS)

Tatsuya Harada, Sou Taoka, Taketoshi Mori and Tomomasa Sato, "Quantitative Evaluation Method for Pose and Motion Similarity Based on Human Perception," *The Fourth IEEE-RAS International Conference on Humanoid Robots(Humanoids 2004)*, 2004.9, pp. 1-19.【査読有】(#45)

Tomomasa Sato, Tatsuya Harada and Taketoshi Mori, "Robotic Room: Networked Robots System in Configuration of Room," *Proceedings of the 2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2004) Network Robot System Workshop*, 2004.9, pp. 11-18. (以下、二つめの論文が含まれていた。Tomomasa Sato, Yasuo Kuniyoshi, Masayuki Inaba, Satoshi Tadokoro, Taketoshi Mori. Overview of Robotics Imitation Project. International Workshop on Robotics Imitation, pp.1-8, 9 2004. (2004-09-29))

原田達也・森武俊・佐藤知正、「固有姿勢に基づく人間姿勢確率密度分布の推定」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2004 年 9 月、1A11pp.。

原田達也・森武俊・佐藤知正、「Wearable Motion Capture のための姿勢推定デバイスの開発」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2004 年 9 月、1A12pp.。

森武俊・瀬川友史・下坂正倫・佐藤知正、「身体の階層性を利用した隠れマルコフモデルによる日常動作のセグメンテーション」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2004 年 9 月、1A14pp.。

下坂正倫・森武俊・原田達也・佐藤知正、「時系列動作認識のための混合状態力学系に基づくカーネル計算法」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2004 年 9 月、3E16pp.。

野口博史・森武俊・佐藤知正、「住居内センサネットワークミドルウェアの非同期通信機構の構築」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2004 年 9 月、1C34pp.。

渡邊恵佑・森下広・森武俊・佐藤知正、「関節リウマチ患者支援のための外骨格型ハンドの開発 ——簡易示指モデルによる関節負荷の検討」、『第 22 回日本ロボット学会学術講演会予稿集』、2004 年 9 月、3K14pp.。

Taketoshi Mori and Yoshiko Suemasu and Hiroshi Noguchi and Tomomasa Sato., "Multiple People Tracking by Integrating Floor Pressure Sensors and RFID systems," *Proceedings of 2004 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*, 2004.10, The Hague, Netherlands, pp. 5271-5278.【査読有】

Masamichi Shimosaka, Taketoshi Mori, Tatsuya Harada and Tomomasa Sato, "Action Recognition Based on Kernel Machine Encoding Qualitative Prior Knowledge," *Proceedings of 2004 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*, 2004.10, The Hague, Netherlands, pp. 1569-1576.【査読有】

Hiroshi Noguchi, Taketoshi Mori and Tomomasa Sato, "Network Middleware for Flexible Integration of Sensor Processing in Home Environment," *Proceedings of 2004 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*, 2004.10, The Hague, Netherlands, pp. 3845-3851.【査読有】

Taketoshi Mori, Aritoki Takada, Yasuhiko Iwamura and Tomomasa Sato, "Automatic Human Life Summarization System in Sensory Living Space," *Proceedings of 2004 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*, 2004.10, The Hague, Netherlands, pp. 1583-1588.【査読有】

Tatsuya Harada, Taketoshi Mori and Tomomasa Sato, "Human Posture Probability Density Estimation Based on Actual Motion Measurement and Eigenpostures," *Proceedings of 2004 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*, 2004.10, The Hague, Netherlands, pp. 1595-1600.【査読有】

Taketoshi Mori, Masamichi Shimosaka, Tatsuya Harada and Tomomasa Sato, "Time-Series Human Motion Analysis with Kernels Derived from Learned Switching Linear Dynamics," *The Second International Workshop on Man-Machine Symbiotic Systems(IWMMS2004)*, 2004.10, pp. 161-172.【査読有】

Taketoshi Mori, Yushi Segawa, Masamichi Shimosaka and Tomomasa Sato, "Segmentation of Sequential Daily-Actions Based on Hidden Markov Models and Human Body Hierarchy," *The Second International Workshop on Man-Machine Symbiotic Systems(IWMMS2004)*, 2004.10, pp. 207-218.【査読有】

下坂正倫・森武俊・原田達也・佐藤知正、「オンライン時系列動作認識のための周辺化カーネル」、『電子情報通信学会パターン認識・メディア理解研究会』、2004年11月、pp. 1~6。

Taketoshi Mori, Masamichi Shimosaka, Tatsuya Harada and Tomomasa Sato, "Recognition of Daily Life Action and Its Performance Adjustment based on Support Vector Learning," *International Journal of Humanoid Robotics*, 1, no.4, 2004.12, pp. 565-583.【査読有】

Tomomasa Sato, Taketoshi Mori and Tatsuya Harada, "Ubiquitous Robotics and Learning from Imitation," *Korean Robotics and Systems*, 2004.12.

原田達也・森武俊・佐藤知正、「姿勢確率密度分布を利用した姿勢復元と動作生成の試み」、『第四回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2005年2月、p. 9999。

森武俊・柁次金佑・下坂正倫・瀬川友史・佐藤知正、「日常動作の概念関係と隠れマルコフモデルを利用した動作のオンライン分節化」、『第四回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2005年2月、p. 9999。

佐藤知正・細田尚史・久保寺秀幸・原田達也・森武俊、「ロボットによる机上動作模倣のためのHMMを利用した人間動作の分類手法」、『第四回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2005年2月、p. 9999。

久保寺秀幸・佐藤知正・原田達也・森武俊、「動作プリミティブに基づく机上作業の認識・予測とその支援軌道の生成」、『第四回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2005年2月、p. 9999。

佐藤知正・森武俊・原田達也、「生活支援ルームにおける模倣の構成論的研究～第四報～」、『第四回学術創成知能ロボットによる模倣の構成論的研究報告会予稿集』、2005年2月、p. 9999。

羽山典孝・森武俊・野口博史・佐藤知正、「アクティブな投影型情報提示システムにおける生活支援サービス選択」、『情報処理学会インタラクティブ2005』、2005年2月、pp. 231~232。【査読有】(インタラクティブ発表査読採録)

森武俊・高田有時・野口博史・佐藤知正、「分散センシング空間における日常生活データベースに基づいた行動予測システム」、『第10回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2005年3月、p. 9999。【査読有】(フルペーパー査読)

佐藤知正・久保寺秀幸・原田達也・森武俊、「動作プリミティブに基づく日常物体操作の認識とその支援軌道の生成」、『第10回ロボティクスシンポジウム予稿集』、2005年3月、p. 9999。【査読有】(フルペーパー査読)

野口博史・田中克典・森武俊・佐藤知正、「生活行動の対象としての住居内物体のRDF記述に基づくセンシング空間状況検索システム」、『電子情報通信学会技術報告KBSE2005』、2005年3月、p. 9999。

下坂正倫・柁次金佑・森武俊・佐藤知正、「オンライン動作認識における動作時系列生起度に基づく分節化」、『電子情報通信学会2005年総合大会』、2005年3月、p. 9999。

森武俊、「センシングルーム～個人生活を覚え助ける部屋型システム～」、『電子情報通信学会2005年総合大会ソサイエティ特別企画』、2005年3月22日、p. 9999。(依頼講演)

一般向けエッセイ等

佐藤知正・森武俊・原田達也、「環境型ロボットシステム(ロボティックルーム)における生体・生理・感性ロボティクス」、『～ロボット工学セミナー第15回シンポジウム～「生体・生理・感性ロボティクスの最新動向」』、2002年7月、日本ロボット学会、pp. 22～25。

安富 歩 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

黄土高原生態文化回復活動

黄土高原村落でのフィールドワークに基づき、最先端の科学技術を駆使して生態文化の回復を目指す。

近代「満洲」の成立

現在の中国東北地区に二十世紀初頭にどのような社会が出現したのかを、生態系・交通・政治・経済など多面的なアプローチにより明らかにする。

複雑系の歴史理論

歴史を理解するための数理的枠組みの構築を目指す。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

安富歩、「赤の女王と人間活動」、西部忠編、『進化経済学のフロンティア』、2004年、日本評論社、pp. 205～218。

金子邦彦・安富歩、「経済学から歴史学中心の社会科学へ」、吉田雅明編、『経済学の現在(2)』、2005年1月、日本評論社。

論文等

深尾葉子・安富歩、「満洲の廟会——「満洲国」期を中心に——」、『アジア経済』、45巻、5号、2004年、pp. 58～90。【査読有】

安富歩、「書評「山本有造著『満洲国』経済史研究』」、『経済史研究』、8号、2004年3月、大阪経済大学日本経済史研究所、pp. 191～199。

深尾葉子・安富歩、「黄土高原生態文化回復活動の理念と実践」、『東洋文化研究所紀要』、2005年3月。(第146冊、印刷中)

その他

安富歩、「帝国日本」と東北アジア」、九州大学韓国研究センター・九州大学21世紀COEプログラム編、『近現代東北アジア地域史研究会大会、九州大学韓国研究センター、九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本—交流と変容—」主催国際シンポジウム』、2004年12月4日、九州大学。(司会)

山内 祐平 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

情報リテラシーやメディアリテラシーにかかわる学習環境のデザイン

情報技術が社会のあり方を根本からゆさぶりつつある現在、教育に求められるものも変化しつつあります。その一つが、リテラシー(読み書き)概念の拡張です。メディアリテラシー・情報リテラシーなど新しい時代に必要とされる資質を学ぶための学習環境について、授業やワークショップのデザインを行いながら考えていきたいと思っています。

インターネットなどの情報メディアを利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいますが、学習は教師・ともに学ぶ学習者の存在・メディアなどの微妙なバランスの中で発生する複雑な事象です。インターネットなどの情報メディアを学びの場に導入する際に、このような要因をどうデザインすれば妥当性の高い学習環境になるのかを、実践的研究の中で明らかにしていきたいと思っています。また、ウェアラブルコンピュータなど、新しく出現した情報技術を学びのためのメディアとして形にしていく研究も行っています。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

水越伸、『NHKスペシャル「改革の世紀」I市民・組織・英知』、2002 年 11 月、日本放送出版協会。(PP171)

堀川照代・河西由美子・斎藤陽子・東海林典子・福永智子・山内祐平、『学習指導と学校図書館』、2002 年 12 月、樹村房。(PP6、PP144)

久保田賢一・黒上晴天、久保田賢一・黒上晴天編、『ICT教育の実践と展望』、2003 年 2 月、日本文教出版。(PP35、PP180)

山内祐平、『デジタル社会のリテラシー』、2003 年 4 月、岩波書店。

山内祐平・中原淳、山内祐平・中原淳編、『社会人大学院へ行こう』、2003 年 6 月、NHK出版。

山内祐平、「eラーニングによる教育と社会サービス—東京大学」、吉田文・田口真奈・中原淳編、『大学eラーニングの経営戦略 成功の条件』、2005 年 3 月、pp. 22～39。

論文等

中杉啓秋・山内祐平、「ウェアラブルコンピュータを用いた歴史学習 支援システムの開発」、『日本教育工学会誌』、26 巻、Suppl 号、2002 年、pp. 167～172。【査読有】

山内祐平・水越伸・本橋春紀、「学校と地方放送局の連携モデルの設計(2)」、『日本教育工学会 第 18 回全国大会』、2002 年 11 月、pp. 647～648。

中原淳・久松慎一・八重樫文・山内祐平、「ポケットの中の学習コミュニティ:携帯電話を活用した学習コミュニティ活性化ソフトウェアの開発」、『日本教育工学会 第 18 回全国大会』、2002 年 11 月、pp. 779～780。

松原秀哉・望月俊男・中原淳・西森年寿・山内祐平、「電子掲示板での情報交換分析ツールの開発」、『日本教育工学会 第 18 回全国大会』、2002 年 11 月、pp. 173～176。

望月俊男・中原淳・松河秀哉・一色裕里・松浦匡・西森年寿・山内祐平・加藤浩、「キャンパス内 e-Learning システムにおける CSCL 活用の可能性」、『日本教育工学会 第 18 回全国大会』、2002 年 11 月、pp. 391～392。

山内祐平、「学校と専門家を結ぶ実践共同体のエスノグラフィー」、『日本教育工学論文誌』、26 巻、4 号、2003 年、pp. 299～308。【査読有】

望月俊男・中原淳・山内祐平・西森年寿・松河秀哉・一色裕里・松浦匡・朝川哲司・八重樫文・加藤浩、「教室の授業と連携した e-Learning とその評価分析」、『教育システム情報学会』、20 巻、2 号、2003 年、pp. 132～142。【査読有】

中原淳・八重樫文・久松慎一・山内祐平、「iTree:電子掲示板における相互作用の状況を可視化する携帯電話ソフトウェアの開発と評価」、『日本教育工学会論文誌』、27 巻、4 号、2003 年、pp. 437～445。【査読有】

西森年寿・中原淳・望月俊男・松河秀哉・八重樫文・久保慎一・山内祐平・鈴木真理子・永田智子、「教室の授業と連携した e-Learning 環境構築支援システムの開発と実践」、『日本教育工学会論文誌』、27 巻、Suppl 号、2003 年、pp. 9～16。【査読有】

山内祐平・久松慎一・八重樫文、「e ラーニング用インタラクティブ・ストリーミングプレイヤーの開発」、『日本教育工学会 第 19 回全国大会』、2003 年 10 月、pp. 457～458。

山内祐平、「教育工学の研究方法論を探る」、『日本教育工学会 第 19 回全国大会』、2003 年 10 月、pp. 479～480。

小柳和喜雄・堀田龍也・山内祐平・木原俊行、「教育養成における e-Moderating Method のモデル化に関する研究」、『日本教育工学会 第 19 回全国大会』、2003 年 10 月、pp. 531～534。

中原淳・八重樫文・久松慎一・山内祐平、「iTree: 携帯電話を活用した電子掲示板上の学習活動促進の試み」、『日本教育工学会 第 19 回全国大会』、2003 年 10 月、pp. 131～132。

松河秀哉・望月俊男・中原淳・西森年寿・山内祐平、「電子掲示板における学習者の活動把握」、『日本教育工学会 第 19 回全国大会』、2003 年 10 月、pp. 579～582。

西森年寿・中原淳・望月俊男・松河秀哉・八重樫文・山内祐平、「高等教育の教室の授業と連携した E-Learning 環境構築支援システムの開発」、『日本教育工学会 第 19 回全国大会』、2003 年 10 月、pp. 477～478。

望月俊男・藤谷哲一・一色裕里・中原淳・山内祐平・久松慎一・加藤浩、「電子会議室の発言内容分析による協調学習の評価方法の提案」、『日本教育工学会論文誌』、28 巻、1 号、2004 年、pp. 15～27。【査読有】

山内祐平、「学習コミュニティを支える人工物のデザイン」、『日本教育工学会 第 20 回全国大会』、2004 年 9 月、pp. 21～24。

山内祐平・酒井俊典・八重樫文・久松慎一・望月俊男・北村智、「iPlayer: eラーニング用インタラクティブ・ストリーミングプレイヤーの開発」、『日本教育工学会 第 20 回全国大会』、2004 年 9 月、pp. 937～938。

飛弾信崇・山内祐平、「没入感のあるモバイル学習支援システムの検討」、『日本教育工学会 第 20 回全国大会』、2004 年 9 月、pp. 795～796。

酒井俊典・八重樫文・久松慎一・山内祐平・水越伸、「教師のメディア・リテラシー学習を支援するオンライン学習環境 Media Teachers Village の開発と評価」、『日本教育工学会 第 20 回全国大会』、2004 年 9 月、pp. 405～406。

その他一般向け

山内祐平、「情報メディアとリテラシー その学習をデザインする」、『New Education Expo』、2002 年 5 月 11 日、内田洋行。(東京ファッションタウン、招待講演)

山内祐平、「iii online」、『Web を利用した学習環境デザイン』、2002 年 6 月 8 日、メディア教育開発センター。(招待講演)

山内祐平、「情報技術を用いた学習の支援」、『東京大学公開講座』、2002年9月29日、東京大学。

山内祐平、「情報教育の新しい展開」、『全国社会科・生活科教育研究大会』、2003年7月31日、全国社会科・生活科教育学会、足立区西新井文化ホール。(招待講演)

山内祐平、「情報ネットワークと科学教育」、『広島大学附属中・高等学校公開研究会』、2003年11月15日、広島大学附属中・高等学校、広島大学附属中・高等学校。(招待講演)

山内祐平、「デジタル社会のリテラシー」、『メディアリテラシー講座』、2004年1月30日、山口情報芸術センター、山口情報芸術センター。(招待講演)

山内祐平、「デジタル社会のリテラシー」、『ひょうご e スクールコンソーシアム発足記念シンポジウム』、2004年3月9日、ひょうご e スクールコンソーシアム、県民小劇場。(招待講演、基調講演)

山口 いつ子 助教授

研究テーマ(主たるもの3点以内)

表現の自由・メディアの自由に関する判例分析

ユビキタス時代における「サイバー法」概念の展開

表現の自由と著作権

研究業績(2000～2004年度)

論文等

Itsuko Yamaguchi, "Where will the Freedom of the Internet go?: A Japanese Perspective," *REVIEW OF MEDIA, INFORMATION AND SOCIETY*, no.5, 2000.

ジョナサン・ワインバーグ (Jonathan Weinberg)、山口いつ子訳、「ガバナンス」、サイバーロー研究会、指宿信編、『サイバースペース法－新たな法的空間の出現とその衝撃』、2000年4月、日本評論社。

Itsuko Yamaguchi, "Choice and Free Speech in the Age of Broadband: What do we Japanese want them to be?," *REVIEW OF MEDIA, INFORMATION AND SOCIETY*, no.6, 2001.

山口いつ子、「インターネット上のMP3ファイル共有をめぐる著作権侵害と中間媒介者の責任－ナップスター事件連邦控訴裁判決[A & M Records, Inc. v. Napster, Inc., 239 F.3d 1004 (9th Cir. 2001)]」、『法律時報』、73巻、9号、2001年8月。

山口いつ子、「多様性と価値選択－インターネット時代の『情報法』研究」、『国際文化会館会報』、12巻、2号、2001年12月。

Itsuko Yamaguchi, "Beyond de facto Freedom: Digital Transformation of Free Speech Theory in Japan," *STANFORD JOURNAL OF INTERNATIONAL LAW*, 38, no.1, 2002.

山口いつ子、「デフォルトとしての『思想の自由市場』」、『法律時報』、74 巻、1 号、2002 年 1 月。

山口いつ子、「個人情報保護とメディアの自由」、『ジュリスト』、1222 号、2002 年 5 月。

山口いつ子、「『インターネットの自由』、『サイバー法』、『思想の自由市場』、『通信品位法』、『ネットワーク利用の風俗犯罪』、『表現の自由』、『プロバイダーの責任』」、北川高嗣他編、『情報学事典』、2002 年 6 月、弘文堂。(インターネットの自由 76-78 頁、サイバー法 349 頁、思想の自由市場 393 頁、通信品位法 607 頁、ネットワーク利用の風俗犯罪 714 頁、表現の自由 781-782 頁、プロバイダーの責任 829 頁)

山口いつ子、「2002 年マスコミ関係判例回顧／厳格化する免責要件の判断一名誉毀損、プライバシー・肖像権侵害をめぐって」、『新聞研究』、622 号、2003 年 5 月。

山口いつ子、「表現の自由論のメタモルフォーゼーアメリカ合衆国憲法第 1 修正における構造変化とその価値原理」、『社会情報研究所紀要』、67 号、2004 年 3 月。

山口いつ子、「『情報公開と個人情報保護』、『サイバー法』」、吉見俊哉、花田達朗編、『社会情報学ハンドブック』、2004 年 3 月、東京大学出版会。(情報公開と個人情報保護 124-127 頁、サイバー法 206-209 頁)

山口いつ子、「2003 年マスコミ関係判例回顧／裁判の増加、争点多様化進む」、『新聞研究』、633 号、2004 年 4 月。

口頭発表等

Itsuko Yamaguchi, "Article 21 v. First Amendment: Will American free speech philosophy do good for Japan?," *HARVARD LAW SCHOOL, Graduate Program, "Visiting Scholar and Visiting Researcher Colloquium Series"*, 2000.4.6, Cambridge, MA, United States.

山口いつ子、「インターネットの現在と『情報法』研究の将来」、『新渡戸フェロー在外研究報告会』、2001 年 6 月 16 日、財団法人国際文化会館。

山口いつ子、「アメリカにおける公共放送制度と放送のデジタル化」、『デジタル時代の公共放送に関する勉強会』、2002 年 11 月 28 日、日本放送協会。

山口いつ子、「ネット上の性的表現と青少年保護－Ashcroft v. ACLU, 535 U.S. 564 (2002); Ashcroft v. Free Speech Coalition, 535 U.S. 234 (2002)」、『メディア判例研究会報告』、2003 年 3 月 1 日、学習院大学。

Itsuko Yamaguchi, 「Architectural Style of 'Cyberlaw'」、『東京大学法学部・学術創世研究プロジェクト「情報(情報空間規制)」研究会』、2003 年 6 月 3 日、学士会館本館。

山口いつ子、「『サイバー法』のアーキテクチュラル・スタイル」、『社会情報研究所国際シンポジウム「デジタル市民社会と社会情報学」』、2003 年 10 月 4 日、東京大学弥生講堂・一条ホール。

Itsuko Yamaguchi, "Regulating Freedom on the Internet: Why 'Cyberlaw'?" *東京大学法学部・学術創世研究プロジェクト国際シンポジウム "International Symposium on Transboundary Issues of Law and Politics"*, 2003.12.7, 東京大学山上会館。

山口いつ子、「表現の自由と著作権」、『放送新政策研究会』、2004 年 12 月 10 日、日本民間放送連盟。

山口いつ子、「インターネット上のニュース記事見出しの著作物性－東京地判平成 16 年 3 月 24 日」、『メディア判例研究会』、2005 年 3 月 4 日、学習院大学。

山本 隆一 助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

Vili Podgorelec, Peter Kokol, Ryuichi Yamamoto, Gou Masuda and Norihiro Sakamoto, "Information Modelling and Knowledge Bases XIII," H.Kangassalo ed., *Medical Knowledge Extraction via Hybrid Decision Trees*, 2002, Amsterdam, IOS Press.

吉原博幸・開原成允・山本隆一、『電子カルテってどんなもの』、2002 年、中山書店。(264 ページ)

開原成允・樋口範雄・山本隆一・坂本憲広・岡村世里奈、『医療の個人情報保護とセキュリティ』、2003 年 8 月、有斐閣。(224 ページ)

石川澄・岡田美帆子・山本隆一・他、『医療情報』、2004 年、篠原出版新社、全 3 巻。(696 ページ)

論文等

Kenji Araki, Katshiro Ohashi, Shunji Yamazaki, Yasuyuki Hirose, Yoshinori Yamashita, Ryuichi Yamamoto, Kazushi Minagawa, Norihiro Sakamoto and Hiroyuki Yoshihara, "Medical Markup Language (MML) for XML-based Hospital Information Interchange," *J. Medical Systems*, 24, 2000, pp. 195-211.【査読有】

木村通男・大江和彦・作佐部太也・佐々木文夫・安藤裕・川真田文章・土屋文人・古川裕之・清谷哲明・廣瀬康行・山本隆一・坂本憲広・秋山昌範・山下芳範・谷重喜・山口雅敏・永井肇・阿曾沼元博・藤江昭・稲岡、「MERIT-9 紹介状型式による HIS-PC 間連携」、『医療情報学』、20 巻、2000 年、pp. 87～94.【査読有】

山本隆一、「医療情報のセキュリティ」、『システム／制御／情報』、44 巻、2000 年、pp. 576～582。

山本隆一、「医療情報のセキュリティと電子カルテについて」、『医療情報処理の現状と未来(シンポジウム)、第 51 回日本東洋医学会総会』、2000 年、京都。

山本隆一、「電子保存された診療録情報交換のための標準データ項目セット」、『診療情報基盤としての各コード標準化(パネルディスカッション)、第 20 回医療情報学連合大会』、2000 年、浜松。

山本隆一、「電子カルテ」、『医療情報学 20 年の宿題報告(シンポジウム)、第 20 回医療情報学連合大会』、2000 年、浜松。

Norihiro Sakamoto, Gou Masuda and Ryuichi Yamamoto, "A New Approach for Unification of Health Information Exchange Protocols," *J. Japan Assoc. Med. Informatics*, 21, 2001, pp. 13-22.【査読有】

増田剛・小西由記範・坂本憲広・山本隆一、「HL7 参照情報モデルに基づく病院情報システムのデータモデル設計指針の試作と評価 - 患者基本情報を中心として -」、『医療情報学』、21 巻、2001 年、pp. 97~104。【査読有】

山本隆一、「電子保存新基準について - 運用規定策定の試みと評価 -」、『映像情報』、32 巻、2 号、2001 年、pp. 92~96。

山本隆一、「医療情報システムのセキュリティモデル」、『医学のあゆみ』、196 巻、2001 年、pp. 277~281。

山本隆一、「ネットワーク時代の身分証明と安全性確保 - 電子化された診療情報のセキュリティについて -」、『治療』、83 巻、2001 年、pp. 245~251。

山本隆一、「ネットワーク時代の医療情報の安全性」、『BIO Clinica』、16 巻、2001 年、pp. 721~725。

山本隆一・増田剛・濱田松治、「生体識別(Biometrics)」、『Innervision』、16 巻、7 号、2001 年、pp. 14~16。

山本隆一、「医療情報のセキュリティ」、『Mebio』、18 巻、5 号、2001 年、pp. 132~138。

山本隆一、「特に Security および Privacy 保護規則に関する研究」、『シンポジウムHIPAAの動向 HIPAA 関連規則、第 21 回医療情報学連合大会』、2001 年、東京。

山本隆一、『シンポジウム医療情報の国際標準-ISO TC215 の活動をめぐって-Security - Public key infrastructure など、第 21 回医療情報学連合大会』、2001 年、東京。

山本隆一、「医療情報の暗号化とセキュリティ」、『現代医療』、34 巻、3 号、2002 年、pp. 59~62。

山本隆一・秋山昌範、「個人情報保護と医学・医療」、『日本医師会雑誌』、127 巻、7 号、2002 年、pp. 1069~1075。

増田 剛・山本隆一、「データマイニング技術を活用した EBM のための動的な診療根拠の導出」、『BME』、16 巻、4 号、2002 年、pp. 30~36。

山本隆一、「電子カルテとは」、『OPE NURSING』、18 巻、2003 年 7 月、MC メディカ出版、pp. 32~37。

山本隆一、「電子カルテの標準化とセキュリティ」、『IT 医療白書03』、2003 年 7 月、(株)エム・イー振興協会、pp. 12~14。

山本隆一、「医療情報の安全性を支える技術基盤 PKI」、『最新医学』、58 巻、8 号、2003 年 8 月、(株)最新医学社、pp. 21~25。

山本隆一、「医療情報のセキュリティとプライバシー保護」、『映像情報 Medical』、35 巻、14 号、2003 年 12 月、産業開発機構株式会社、pp. 1222~1225。

山本隆一、「個人情報保護の観点からの診療情報開示と記録整備のあり方」、『看護展望』、29 巻、2 号、2004 年 1 月、メジメルフレンド社、pp. 148~154。

山本隆一、「電子カルテの進展と医療情報保護、診療録管理 ~日本診療録管理学会誌~」、『看護展望』、16 巻、1 号、2004 年 4 月、診療録管理学会、pp. 8~17。

山本隆一、「電子カルテシステムとセキュリティ」、『INNERVISION』、19 巻、6 号、2004 年 6 月、(株)インナービジョン、pp. 20~23。

山本隆一、「診療情報の電子化と個人情報保護」、『医療経営最前線 医療業務編』、11 巻、238 号、2004 年 9 月、産労総合研究所、pp. 3～9。

山本隆一、「医療におけるプライバシー」、『日本放射線技術学会 日本情報分科会雑誌』、3 号、2004 年 10 月、(社)日本放射線技術学会、pp. 5～10。

山本隆一、「医療情報とセキュリティ ー概要と今後の動向ー」、『クリニカルプラクティス』、23 巻、11 号、2004 年 11 月、エルビゼアジャパン、pp. 98～101。

山本隆一、『日本病院会雑誌』、52 巻、1 号、2005 年 1 月、(社)日本病院会、pp. 106～124。

奈良 高明 講師

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

偏微分方程式のソース項同定逆問題の研究

偏微分方程式のソース項同定逆問題とは、支配方程式の解である物理場を観測量とし、その場を生み出す源、原因を推定する問題である。静電磁場、熱伝導場、ヘルムホルツ場、波動場など基本的な物理場のソース項同定は、例えば頭部表面で計測した静電ポテンシャル、静磁場からの脳内電流源の推定や、静弾性場内部で観測した変形量に基づく表面応力の同定、また電波源、音波源の推定など、非常に広汎な工学的応用をもつ。本研究の目的は

- 1) 偏微分方程式のソース同定逆問題の解を、入力データにより直接的かつ解析的に表現する再構成アルゴリズムを導出すること
 - 2) 解の陽な表現を活かして解精度を入力データ精度により評価し、安定性を保証した解法を構築すること
 - 3) 場の本質を抽出する局所的計測手法・センサを開発すること
- の 3 点である。

2002 年度は、ポアソン方程式の点ソース推定に関し、ソースの 3 次元位置を xy 平面もしくはリーマン球面へ射影した位置を陽に再構成する解法を提案した。このとき用いる観測量は、領域境界上でのポテンシャル値のルジャンドル陪多項式を重みとする境界積分、もしくはポテンシャル場の複素形式の空間高階微分となる。我々が“複素勾配”と呼ぶ後者の物理量は局所的計測に適しており、小型な計測システムでのソース推定実現への鍵となる。

2003 年度は、ソース項を点ソースから電流双極子あるいは磁気双極子に拡張し、複素勾配を用いるアルゴリズム、およびセンサを開発した。まず電流双極子推定に関しては、電位と磁場双方の複素勾配を用いることで、双極子の位置・モーメントを陽に再構成する手法を導いた。また磁気双極子推定に関しては、磁場の複素勾配のみを観測量とし、反復演算により双極子位置を同定するアルゴリズムを導いた。本アルゴリズムは、双極子位置をリーマン球面に射影した位置に関する力学系として表現され、磁場計測用コイルの軸付近(見こみ角 40° 程度)においてはごく僅かな反復回数で収束することを示した。更に 0 階から 2 階の複素勾配計測用コイルを作製して磁気双極子を定位する検証実験を行い、センサーソース間距離 5[cm]程度で誤差 1[mm]程度の精度で定位可能であることを確認した。

2004 年度は、脳磁図逆問題(Magnetoencephalography)への応用として、頭部表面で磁場をベクトルとして観測したデータから神経電流双極子を陽に推定する手法を導出した。また RFID タグを電磁場源として定位する手法として、磁場および磁場の勾配テンソルを計測するセンサを開発し、センサ出力から直接、タグの姿勢によらずに位置を推定する手法を提案した。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

Takaaki Nara, Masaya Takasaki, Susumu Tachi and Toshiro Higuchi, "An Application of SAW to a Tactile Display in Virtual Reality," *Proceedings of IEEE International Ultrasonics Symposium 2000*, 2000, Proceedings of IEEE International Ultrasonics Symposium 2000, pp. 1-4.【査読有】

奈良高明・柳田康幸・前田太郎・館暲、「テーパ膜上波動の解析に基づく構造ポテンシャルの理論」、『日本音響学会論文誌』、156 巻、3 号、2000 年、pp. 200~202。【査読有】

奈良高明・前田太郎・安藤繁・館暲、「パチニ小体の連成共振系モデル—層状ラメラ構造のモードフィルタリング機能—」、『第 15 回生体・生理工学シンポジウム論文集』、2000 年、pp. 403~407。(名古屋工業大学)

奈良高明・前田太郎・安藤繁・館暲、「皮膚の直交変形量に関する考察—ミスナー小体、パチニ小体が検出する皮膚変形量について—」、『第 15 回生体・生理工学シンポジウム論文集』、2000 年、pp. 407~410。(名古屋工業大学)

奈良高明・高崎正也・前田太郎・樋口俊郎・館暲、「弾性表面波(Surface Acoustic Wave; SAW)を用いた触覚ディスプレイ」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会大会論文集』、2000 年、pp. 303~306。(筑波)

奈良高明・前田太郎・安藤繁・館暲、「皮膚・機械受容器の動特性解析に基づく触覚提示原理に関する考察」、『日本バーチャルリアリティ学会第 5 回大会大会論文集』、2000 年、pp. 292~302。(筑波)

Takaaki Nara, Masaya Takasaki, Taro Maeda, Toshiro Higuchi, Shigeru Ando and Susumu Tachi, "Surface Acoustic Wave Tactile Display," *Surface Acoustic Wave Tactile Display*, 21, no.6, 2001, IEEE Computer Graphics and Applications, pp. 56-63.【査読有】

奈良高明・安藤繁、「複素平面への投影による 3 次元ポアソン方程式のソース同定逆問題解法」、『日本応用数学会 2001 年度会講演予稿集』、2001 号、2001 年、+313p. 314。(九州大学)

奈良高明・安藤繁、「ローラン係数を介した 2 次元ポアソン方程式のソース同定逆問題解法」、『日本応用数学会 2001 年度年会講演予稿集』、2001 年、+312p. 313。(九州大学)

奈良高明・安藤繁、「ローラン係数を介した 2 次元、3 次元ポアソン方程式のソース項同定法、第 1 回計算数理工学フォーラム、構造工学研究所、2001。【招待講演】」、『第 1 回計算数理工学フォーラム』、2001 年。(構造工学研究所【招待講演】)

奈良高明・前田太郎・館暲・安藤繁、「ミスナー小体のせん断共振特性による同調曲線の導出」、『第 39 回計測自動制御学会学術講演会予稿集』、2001 年。(九州工業大学)

奈良高明、「機械受容器のモデルと SAW 触覚ディスプレイ」、『第 1 回東京大学 VR ラボシンポジウム』、2001 年。(東京大学)

奈良 高明・安藤 繁、「ローラン係数を介した 2 次元ポアソン方程式ソース項同定逆問題の解法」、『日本応用数学会論文誌』、12 巻、2 号、2002 年、pp. 79~102。【査読有】

奈良 高明・安藤 繁、「多重展開に基づく 3 次元ポアソン方程式ソース推定逆問題の代数解法」、『日本機械学会論文集(A 編)』、68 巻、667 号、2002 年、pp. 407~414。【査読有】

奈良 高明・安藤 繁、「ポアソン方程式ソース項同定逆問題の射影解法」、『計算数理工学会論文集』、12 巻、2002 年、奈良 高明、安藤 繁、ポアソン方程式ソース項同定逆問題の射影解法、計算数理工学会論文集、Vol.2, pp.21-26 (2002)。【査読つき論文】、pp. 21~26。【査読有】

Takaaki Nara and Shigeru Ando, "Direct Representation of Sources in the Poisson Equation in terms of the Surface Integral of the Boundary Data," *Takaaki Nara and Shigeru Ando, Proceedings of International Conference on Inverse Problems*, 2002.1. (Hong-Kong.)

Takaaki Nara and Shigeru Ando, "Projection Method for an Inverse Source Problem of the Poisson Equation," *Proceedings of the Society for Instrument and Control Engineers Annual Conference (SICE2002)*, 2002.8. (Osaka)

奈良高明・安藤繁、「局的計測によるソース項推定逆問題の代数解法」、『第 19 回センシングフォーラム予稿集』、2002 年 9 月。(慶應大学)

奈良高明・安藤 繁、「リーマン球面への射影によるポアソン方程式のソース項同定」、『日本応用数学会 2002 年度年会』、2002 年 9 月。(慶應大学)

Takaaki Nara and Shigeru Ando, "A projective method for an inverse source problem of the Poisson equation," *Inverse problems*, 19, no.2, 2003, Takaaki Nara and Shigeru Ando, A projective method for an inverse source problem of the Poisson equation, *Inverse problems*, Vol. 19, No. 2, pp. 355-369, 2003.【査読つき論文】, pp. 355-369.【査読有】

Takaaki Nara and Shigeru Ando, "Locally Sensitive Coils for Current Dipole Inversion," *Proceedings of the 20th Sensor Symposium*, 2003, Takaaki Nara and Shigeru Ando, Locally Sensitive Coils for Current Dipole Inversion, *Proceedings of the 20th Sensor Symposium*, pp. 343-346, 2003.【査読つき論文】, pp. 343-346.【査読有】

Takaaki Nara and Shigeru Ando, "Current Dipole Estimation Based on the Measurement of Higher Spatial Differentials," *Proceedings of the SICE Annual Conference 2003*, 2003.【査読有】(TAI-1-1)

奈良高明・安藤繁、「リーマン球面への射影によるポアソン方程式のソース項同定」、『応用数理 2003』、13 巻、3 号、2003 年、pp. 45~57。【査読有】(査読つき論文)

奈良高明・安藤繁、「静電磁場の空間高階微分に基づく電流双極子推定法」、『日本応用数学会 2003 年度年会』、2003 年。(京都大学)

Takaaki Nara and Shigeru Ando, Inverse Source Problem of the Poisson Equation via Projection onto the Riemann Sphere, *Proceedings of the 5th International Congress on Industrial and Applied Mathematics*, pp. 258, Sydney, 2003, Jul., "Inverse Source Problem of the Poisson Equation via Projection onto the Riemann Sphere," *Proceedings of the 5th International Congress on Industrial and Applied Mathematics*, 2003.7, Sydney. (pp.258)

Takaaki Nara and Shigeru Ando, "Localization of RFID Tags from Measurement of Complex Gradients of Electromagnetic Fields," *Proceedings of First International Workshop on Networked Sensing Systems*, 2004, pp. 63-67.【査読有】

Takaaki Nara, Seiichiro Hayashi and Shigeru Ando, "Magnetic Dipole Estimation from the Measurement of Complex Gradients," *Proceedings of Society for Instrument and Control Engineers Annual Conference 2004*, 2004.【査読有】(査読つき論文)

奈良高明・大濱潤二、「EEG・MEG 逆問題における電流双極子の直接再構成」、『21 世紀の診断工学とその周辺』、3 号、2004 年、統計数理研究所。

奈良高明・大濱潤二、「ベクトル MEG による電流双極子の直接再構成」、『高精度数値計算法と逆問題解析』、2004 年、岡山理科大。(岡山理科大学)

Takaaki Nara, Junji Oohama and Shigeru Ando, "Direct Reconstruction of Current Dipoles Using the Vector Green Formula," *Mathematical Engineering Technical Reports*, 2004.11, The University of Tokyo. (2004-46)

松尾 宇泰 講師

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

微分方程式の定性的数値解法

微分方程式の数値解法は、一般論の範囲ではすでに円熟の域に達しているが、物理的な背景を持つ特別な問題群に対しては、その物理的性質を尊重する数値解法が優れた結果を与えることが近年分かってきた。本研究では、特に保存・散逸系を対象に、新しい数値解法の開発を行っている。

研究業績(2000~2004 年度)

論文等

Takayasu Matsuo, Masaaki Sugihara, Daisuke Furihata and Masatake Mori, "Spatially Accurate Conservative or Dissipative Finite Difference Schemes Derived by the Discrete Variational Method," *ICCAM 2000*, 2000, Leuven, Belgium. (July 17-21)

松尾宇泰・杉原正顕・降旗大介・森正武、「離散変分法による空間高精度スキームの導出について」、『2000 年度応用数学合同研究集会』、2000 年、応用数学合同研究集会。

松尾宇泰・降旗大介・見澤勝豊・杉原正顕、「離散変分法の Hamilton 系に対する適用について」、『日本応用数理学会 2000 年度年会』、2000 年、日本応用数理学会。

Takayasu Matsuo and Daisuke Furihata, "Dissipative or Conservative Finite-Difference Schemes for Complex-Valued Nonlinear Partial Differential Equations," *J. Comput. Phys.*, no.171-2, 2001, pp. 425-427.【査読有】

Takayasu Matsuo, *High-order Energy-conserving Schemes for Hamiltonian Systems International Conference on Recent Advances of Computational Mathematics*, 2001. (October 10-13, 2001, Matsuyama, Japan)

松尾宇泰・杉原正顕・降旗大介・森正武、「散逸系に対する時間高精度かつ散逸性を再現する差分スキームの導出について」、『日本応用数理学会 2001 年度年会』、2001 年、日本応用数理学会。

松尾 宇泰、「偏微分方程式に対する時間高次保存・散逸スキームについて」、『日本応用数理学会 2002 年度年会』、2002 年、日本応用数理学会。

Takayasu Matsuo, Masaaki Sugihara, Daisuke Furihata and Masatake Mori, "Spatially Accurate Dissipative or Conservative Finite Difference Schemes Derived by the Discrete Variational Method," 19, 2003, *Japan J. Indust. Appl. Math.*, pp. 311-330.【査読有】

Takayasu Matsuo, "High-order Schemes for Conservative or Dissipative Systems," *J. Comput. Appl. Math.*, 152, 2003, pp. 305-317.【査読有】

Daisuke Furihata and Takayasu Matsuo, "Conservative, and Linear Finite Difference Scheme for the Cahn-Hilliard Equation," *Japan J. Indust. Appl. Math.*, 20, 2003, pp. 65-85.【査読有】

Takayasu Matsuo, "High-Order Schemes for Dissipative or Conservative Systems International Conference on Indust. Appl. Math.," 2003.【査読有】 (Sydney, Australia)

Takayasu Matsuo, "High-order Method for Conservative or Dissipative Partial Differential Equations," *The 7th China-Japan Joint Seminar for Computational Mathematics and Scientific Computing*, 2004, 2004. (招待公演)

伊藤 陽一 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

遺伝子情報を利用した抗がん剤開発における実験計画および統計解析手法の開発

近年開発されてきた分子標的薬と呼ばれる抗がん剤は、がん細胞の増殖メカニズムに特異的に作用することで効果を発揮するよう設計されたものである。しかし、人間を対象とした臨床試験においては、基礎研究から予想された結果が必ず

しも出るとは限らないため、薬剤の投与によって、遺伝子発現変化が起きているかをモニタする必要がある。そのための方法として、数万種類の遺伝子を同時に測定するマイクロアレイという技術が注目されている。マイクロアレイデータの解析では、数万種類の遺伝子を同時に解析するため、統計的多重性の問題など様々な問題が発生する。このような問題に対する有効な解析手法開発を行うことを目的とする。

HRQOLデータに対する項目反応理論の応用

癌等の難治性疾患は、劇的な効果のある治療方法が存在しない。そのような状況下では、患者さんの生活の質(Quality of Life; QOL)を測定し、QOLが平均的に高い治療方法を選択することが望まれている。QOLの測定方法としては、自記式の質問票による測定が一般的であり、このようなデータは患者さんの健康関連のQOLを調査することから Health Related Quality of Life (HRQOL)データと呼ばれる。近年、このHRQOLデータに対して、教育学の分野で発展した項目反応理論を応用することが試みられている。項目反応理論は学力などの対象者の潜在的な特性を、潜在変数としてモデル化し、テストに対する反応からこの特性を推定しようとする理論である。QOL研究の分野では、対象者の潜在的な特性をHRQOLとし、QOL質問票の質問項目に対する評価を行っているが、現時点では、教育学における項目反応理論を直接応用しただけであり、臨床的に有用な情報を得ることができていない。そこで本研究では、項目反応理論の枠組を進展させ、医学に特化したモデルを開発することを目的とする。

研究業績(2000～2004年度)

論文等

伊藤陽一・大橋靖雄、「QOL質問票における項目反応理論に対するパラメータ推定」、『計量生物学』、23巻、1号、2002年、pp. 3～26。【査読有】

伊藤陽一・大橋靖雄、「マイクロアレイデータの探索的解析」、『臨床研究・生物統計研誌』、22巻、2002年、pp. 22～26。

伊藤陽一・大橋靖雄、「がん研究のための方法論 第6回」、『CRITICAL EYES on clinical oncology 2002』、4巻、2002年4月、pp. 9～10。

伊藤陽一、「アレイデータの探索的解析法」、『2002年度統計関連学会連合大会』、2002年9月7日、統計関連学会、明星大学、pp. 64～65。

濱野鉄太郎・伊藤陽一・井元清哉、「[チュートリアル 1]遺伝子発現データ解析概論」、『文部省科学研究費シンポジウム 基盤研究 A(1)「量子推測理論の数理統計学的基礎とその応用」シンポジウム バイオスタティスティックスの数理的基礎』、2002年12月5日。(招待講演)

伊藤陽一、「分子標的薬剤第1相試験における遺伝子発現の用量反応性の解析」、『文部省科学研究費シンポジウム 基盤研究 A(1)「量子推測理論の数理統計学的基礎とその応用」シンポジウム バイオスタティスティックスの数理的基礎』、2002年12月7日。(招待講演)

Yue Wang, Naoya Kato, Yujin Hoshida, Hideo Yoshida, Hiroyoshi Taniguchi, Tadashi Goto, Masaru Moriyama, Motoyuki Otsuka, Shuichiro Shiina, Yasushi Shiratori, Yoichi Ito and Masao Omata, "Interleukin-1beta gene polymorphisms associated with hepatocellular Carcinoma in hepatitis C virus infection," *Hepatology*, 37, no.1, 2003, pp. 65-71。【査読有】

河本純子・大生定義・長岡正範・鈴鴨よしみ・紀平為子・水野美邦・伊藤陽一・山口拓洋・大橋靖雄・福原俊一・近藤智善、「日本人における Parkinson's Disease Questionnaire-39 (PDQ-39) の信頼性評価」、『臨床神経学』、43巻、3号、2003年、pp. 71～76。【査読有】

伊藤陽一、「抗癌剤の開発および抗癌剤を用いた治療法の確立のための遺伝子データの活用」、『2003年度日本計量生物学会シンポジウム「生命情報科学」特別セッション:「遺伝子に関する統計解析上の諸問題」』、2003年5月27日、日本計量生物学会、統計数理研究所。(招待講演)

伊藤陽一・大橋靖雄、「分子標的薬剤に対する用量反応性遺伝子の探索」、『2003年度統計関連学会連合大会』、2003年9月2日～2003年9月5日、統計関連学会、名城大学、pp. 454～455。

Yue Wang・Naoya Kato・Yujin Hoshida・Motoyuki Otsuka・Hiroyoshi Taniguchi・Masaru Moriyama・Shuichiro Shiina・Takao Kawabe・Yoichi M. Ito・Masao Omata、「UDP-glucuronosyltransferase 1A7 genetic polymorphisms are associated with hepatocellular carcinoma in Japanese Patients with Hepatitis C Virus Infection」、『Clinical Cancer Research』、10 巻、2004 年、pp. 2441～2446。【査読有】

山口拓洋・大生定義・斎藤真梨・伊藤陽一・森若文雄・田代邦雄・大橋靖雄・福原俊一、「ALS 特異的 QOL 尺度 ALSAQ-40 日本語版 その妥当性と臨床応用にむけて」、『脳と神経』、56 巻、6 号、2004 年、pp. 483～494。【査読有】

Hiroshi Tsuda, Michael J. Birrer, Yoichi M. Ito, Yasuo Ohashi, Ming Lin, Cheng Lee, Wing H. Wong, Pulivarthi H. Rao, Ching C. Lau, Ross S. Berkowitz, Kwong-Kwok Wong and Samuel C. Mok., "Identification of DNA copy number changes in microdissected serious ovarian cancer tissue using a cDNA microarray platform," *Cancer Genetics and Cytogenetics*, 155, 2004, pp. 97-107.【査読有】

Jun Nakajima, Shinichi Takamoto, Jun Matsumoto, Eriho Takeuchi and Yoichi M. Ito., "Effect of preoperative transbronchial biopsy on prognosis of non-small cell lung cancer.," *Asian Cardiovascular & Thoracic Annals*, 12, 2004, pp. 330-335.【査読有】

伊藤陽一・大橋靖雄、「マイクロアレイを用いた任意の用量反応パターンを持つ遺伝子の探索手法の提案」、『2004 年度統計関連学会連合大会』、2004 年 9 月 3 日～2004 年 9 月 6 日、統計関連学会、富士大学、pp. 113～114。

口頭発表等

Ito Yoichi, "Analysis of patient pharmacodynamics using macroarray - statistical techniques for accommodating multiplicity.," *38th Annual Meeting of Drug Information Association*, 2002.6.15-2002.6.20, Drug Information Association., Chicago. (Chicago. June 15-20, 2002.)

伊藤陽一、「マクロアレイデータの探索的解析」、『医薬安全性研究会第 90 回定例会』、2002 年 7 月 20 日、医薬安全性研究会、東京、総評会館。(招待講演)

一般向けエッセイ等

伊藤陽一、「NLMIXED プロシジャを用いた項目反応理論モデルのパラメータ推定」、『第 21 回日本 SAS ユーザー会総会および研究発表会』、2002 年 8 月 1 日～2002 年 8 月 2 日、日本 SAS ユーザー会、pp. 485～494。(ヒルトン東京. 2002 年 8 月 1 日～2 日.)

影澤 政隆 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

高度交通システムに関する研究

路側設備や車載設備を利用した道路交通に関する認識システム、および表示システム。具体的には、路側カメラによる車両認識システムや、車載レンジセンサによる街や駐車車両の認識システム、車載カメラを利用した仮想空間表示システム。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

影沢政隆・上野信一・池内克史・栢木寛、「並列画像処理ボード IMAP-vision を利用した赤外画像による車両認識システム」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2000)講演論文集』、2000 年 7 月、全 II 巻、pp. 301～306。

M.Kagesawa, A.Nakamura, K.Ikeuchi and H.Saito, "Local-feature Based Vehicle Class Recognition in Infra-red Images Using IMAP Parallel Vision Board," *Proc. of 2000 International Conference on Intelligent Transportation Systems (ITSC 2000)*, 2000.10, Proc. of 2000 International Conference on Intelligent Transportation Systems (ITSC 2000).

Shintaro Ono, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Parking-Vehicle Detection System by using Laser Range Sensor Mounted on a Probe Car," *9th World Congress on Intelligent Transport Systems(ITSW2002)*, 2000.10.

M.Kagesawa, A.Nakamura, K.Ikeuchi and H.Saito, "Vehicle Type Classification in Infra-red Images Using Parallel Vision Board," *The 7th World Congress on Intelligent Transport Systems*, 2000.11, Torino.

M.Kagesawa, S.Ueno, K.Ikeuchi and H.Kashiwagi, "RECOGNIZING VEHICLE IN INFRA-RED IMAGES USING IMAP PARALLEL VISION BOARD," *IEEE Trans. on Intelligent Transportation System*, 2001.3, IEEE Trans. on Intelligent Transportation System, pp. 10-17.【査読有】

YOSHIDA Tatsuya, KAGESAWA Masataka and IKEUCHI Katsushi, "Local-feature Based Vehicle Recognition System Using Parallel Vision Board," *Proc. of the 5th World Multiconference on Systemics, 2001.7*, Proc. of the 5th World Multiconference on Systemics,Cybernetics and Informatics.

吉田達哉・影沢政隆・池内克史、「局所特徴認識アルゴリズムによる車両の認識」、『第19回日本ロボット学会学術講演会講演論文集』、2001年9月、pp. 1119~1120。

吉田達哉・影沢政隆・塘中哲也・池内克史、「局所特徴認識アルゴリズムによる車両の認識」、『電子情報通信学会技術研究報告』、101巻、302号、2001年9月、pp. 9~14。

YOSHIDA Tatsuya, KAGESAWA Masataka, TOMONAKA Tetsuya and IKEUCHI Katsushi, "Vehicle Recognition with Local-Feature Based Algorithm Using Parallel Vision Board," *Prof. of 8th World Congress on Intelligent Transport Systems (ITSWC2001)*, 2001.10.

影澤政隆・上野信一・池内克史・栢木寛、「並列画像処理ボード IMAP-vision を利用した赤外線による車両認識システム」、『電子通信情報学会論文誌 基礎・境界』、J85-A 巻、5号、2002年5月、pp. 597~605。【査読有】

Shintaro Ono, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "A Probe Car for Parking-Vehicle Detection by Using Laser Range Sensor," *IEEE The Intelligent Vehicles Symposium (IV 2002)*, 2002.6, IEEE The Intelligent Vehicles Symposium (IV 2002).【査読有】

吉田達哉・シャミラ モホッタラ・影澤政隆・池内克史、「CGモデル画像を利用したベクトル量子化による車両認識」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2002)』、2002年7月、pp. 473~478。

Tatsuya Yoshida, Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa, Tetsuya Tomonaka and Katsushi Ikeuchi, "Vehicle Recognition with Local-Feature Based Algorithm using CG Models," *9th World Congress on Intelligent Transport Systems(ITSW2002)*, 2002.10.

Tatsuya Yoshida, Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Vehicle Classification System with Local-Feature Based Algorithm Using CG Model Images," *電子情報通信学会論文誌*, E85-D, no.11, 2002.11, pp. 1745-1752.【査読有】

小野晋太郎・平原清隆・影澤政隆・池内克史、「車載レンジセンサによる路上駐車車両計数システム」、『第1回 ITS シンポジウム』、2002年12月。

吉田達哉・シャミラ モホッタラ・影澤政隆・池内克史、「CGモデル画像による教師画像を利用した車両認識の試み」、『第1回 ITS シンポジウム』、2002年12月。

Daisuke Miyazaki, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Determining Shapes of Transparent Objects from Two Polarization Images," *Proceedings of IAPR Workshop on Machine Vision Applications 2002(MVA2002)*, 2002.12, pp. 26-31.

Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "VEHICLE CLASS RECOGNITION USING 3D CG," 第10回 ITS 世界会議, 2003.11.

Shintaro Ono, Hiroshi Kawasaki, Kiyotaka Hirahara, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Ego-Motion Estimation for Efficient City Modeling by Using Epipolar Plane Image Analysis," 10th World Congress and Exhibition on Intelligent Transport Systems and Services, 2003年11月, 2003.11.

Shintaro Ono, Hiroshi Kawasaki, Kiyotaka Hirahara, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "Ego-Motion Estimation for Efficient City Modeling by Using Epipolar Plane Range Image," 第10回 ITS 世界会議, 2003.11.

シャミラ モホッタラ・影沢政隆・池内克史、「CGモデル画像による教師画像を利用した確率的車種認識手法」、『CVIM研究会 2003 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告』、2003年11月。

小野晋太郎・川崎洋・影沢政隆・池内克史・坂内正夫、「EPI解析を利用した画像統合による都市空間のイメージベースレンダリング」、『第2回 ITS シンポジウム 2003』、2003年12月。

小野晋太郎・川崎洋・平原清隆・影沢政隆・池内克史、「水平レンジスキャンを利用した自己位置推定による三次元都市モデルの構築」、『第2回 ITS シンポジウム 2003』、2003年12月。

小野晋太郎・川崎洋・影沢政隆・池内克史、「時空間距離画像を利用した事故位置推定による効率的な広域空間モデルの構築」、『画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2004)』、2004年7月。

Shintaro Ono, Koichi Ogawara, Masataka Kagesawa, Hiroshi Kawasaki, Masaki Onuki, Ken Honda, Keiichi Kenmotsu, Mayumi Sakai, Motomu Tsuji and Katsushi Ikeuchi, "IMAGE GENERATION SYSTEM FOR MIXED-REALITY TRAFFIC EXPERIMENT SPACE," 11th World Congress on Intelligent Transport Systems, 2004.10.

Katsushi Ikeuchi, Masataka Kagesawa, et al., "MIXED REALITY TRAFFIC EXPERIMENT SPACE UNDER INTERACTIVE TRAFFIC ENVIRONMENT FOR ITS RESEARCH," 11th World Congress on Intelligent Transport Systems, 2004.10.

Khairil Azumi, Shintaro Ono, Masataka Kagesawa and Katsushi Ikeuchi, "AUTOMATIC RECONSTRUCTION OF LARGE-SCALE VIRTUAL ENVIRONMENT FOR INTELLIGENT TRANSPORTATION SYSTEMS SIMULATION," 11th World Congress on Intelligent Transport Systems, 2004.10.

小野晋太郎・小川原光一・影沢政隆・川崎洋・大貫正明・本田健・見持圭一・坂井蘭美・辻求・池内克史、「複合現実交通実験空間のためのドライバ周辺環境画像構築システム」、『第3回 ITS シンポジウム』、2005年1月。

カイリルアズミ・小野晋太郎・影沢政隆・池内克史、「広域仮想都市構築のための航空写真影解析による3次元情報復元」、『第3回 ITS シンポジウム』、2005年1月。

小野晋太郎・平原清隆・影沢政隆・池内克史、「車載レンジセンサを利用した路上駐車車両の自動検出」、『電子通信情報学会論文誌 基礎・境界』、J88-A 巻、2号、2005年2月、pp. 247~256。【査読有】

池内克史・影沢政隆他、「サステイナブル ITS プロジェクトの紹介」、『電気学会・電子情報通信学会合同ITS研究会』、2005年3月。

口頭発表等

影沢 政隆、「画像センシング応用」、『センサ・アクチュエータ・マイクロマシン/ウィーク 2000 総合シンポジウム (ITS センサ II) 講師(2000.4)』、2000年4月。(講師(2000.4))

影沢 政隆、「高度交通システムにおける信頼性」、『第16回日本信頼性シンポジウム 特別講演, 2003.』、2003年。

金 相美 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

サイバーコミュニケーションとネットワーク

CMC と対弁されるインターネットや携帯電話の利用とソーシャル・ネットワークとの関係を分析する研究

選挙行動におけるメディア効果

政治コミュニケーションにおけるメディアの関与及び新たなメディアの役割に関する研究。

個人発信型コミュニケーションの社会心理

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

Kim, Sangmi, "Mobile internet and Social implication," *Mobile news: contents, services, business models* Kim, 2004.12, Korea Press Foundation..【査読有】

論文等

金相美、「在日留学生のパーソナル・メディア利用と対人ネットワーク・異文化適応・言語習得」、2001 年 12 月。【査読有】

橋元良明・辻大介・石井健一・木村忠正・金相美、「インターネット・パラドクスの検証」、『東京大学社会情報学調査紀要』、18 号、2002 年 10 月。

金相美、「携帯電話利用とソーシャル・ネットワークとの関係—在日留学生対象の調査結果を中心に」、『東京大学社会情報研究所紀要』、65 号、2003 年 3 月、pp. 363～394。【査読有】

金相美・三上俊治他、「携帯メールの絵文字と若者のメンタリティ」、『21 世紀情報社会におけるメディア・エコロジーの基礎研究』所収(執筆分担: 6.2 章: 89-101)』、2003 年 5 月、pp. 89～101。

金相美、「インターネット利用に関する日韓大学生比較研究—利用動機・効用の分析を中心に」、『マス・コミュニケーション研究』、63 号、2003 年 8 月、pp. 112～129。【査読有】

橋元良明・石井健一・木村忠正・金相美、「インターネット利用に関する日韓大学生比較調査—インターネット・コミュニティを中心として」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、20 号、2003 年 12 月。(執筆分担: 1.2 章: 228-227, 3 章: 274- 282, 4.1～4.4 章: 283-295)。

金相美、「オンライン・コミュニケーション利用と社会的スキル—日韓大学生調査を中心に」、『社会情報学研究』、8 巻、2 号、2004 年 3 月、pp. 13～26。【査読有】

橋元良明・辻大介・石井健一・木村忠正・金相美、「パネル調査によるインターネット利用の影響分析」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21 号、2004 年 3 月、pp. 340～399。(執筆分担 3.1 章: 340-355, 5.1 章: 389-399)

橋元良明・辻大介・石井健一・木村忠正・金相美、「インターネット利用に伴う情報格差・対人関係希薄化の分析—パネル調査によるインターネット・パラドクスの検証」、『平成 13 年～平成 15 年度科学研究費補助金(基盤研究 B-1)研究成果報告書』、2004 年 3 月。

口頭発表等

金相美、「留学生のパーソナル・メディア利用と日本語習得との関係」、『日本社会言語科学会 8th 大会』、2001 年 9 月。

金相美、「在日留学生のパーソナル・メディア利用と社会的ネットワーク」、『日本マス・コミュニケーション学会 2001 年秋季大会』、2001 年 10 月。

Kim, Sangmi, "Personal media usage and social network of international students residing in Japan," *International Communication Association*, 2002.7, International Communication Association.

金相美・石井健一・橋元良明・辻大介・木村忠正、「インターネット利用行動に及ぼすメンタリティの影響 ～日韓学生比較調査から」、『第 20 回情報通信学会』、2003 年 6 月。

林香里・金相美、「日本女性の『冬のソナタ』ブーム分析」、『横浜市婦人会館ライフセミナー』、2004 年 3 月 3 日。(2004 年 3 月 3 日、招待公演)

一般向け著書等

金相美、『韓国 N 世代白書』、2002 年 7 月、Travel Journal Publications。

清原 聖子 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

「現代アメリカの通信政策をめぐる政治過程」

1990 年代のアメリカ通信政策は、インターネット革命と 1996 年電気通信法によって、劇的に変化を遂げた。アメリカ政治においては、利益集団が高度に発展しており、とりわけビジネス団体はきわめて大きな政治的影響力を有してきた。したがってアメリカの通信政策をめぐる政策過程を研究する上では、利益集団に焦点を当てた研究を行うことがきわめて重要である。本研究は、今日の技術的、制度的巨大な変化が、アメリカの通信政策の政治過程における利益集団政治にどのような影響を及ぼしているのか、という点を明らかにすることを目的とする。従来の研究では、通信政策の政治過程は大手電話会社や業界団体に独占され、非営利団体や公共利益団体の政治参加は極めて限定的、と考えられてきた。しかしこれまでに本研究では、いくつかの具体的な個別事例研究を行うことで、今日のアメリカ通信政策の政治過程において、ベントン財団のような非営利団体や教育団体、全米図書館協会など新たな団体の政治参加が際立ち、政策過程の幅が広がっている点を明らかにした。本研究は特に、アメリカ通信政策において伝統的に重要な 이슈とされるユニバーサル・サービス政策の展開を中心に事例研究を行っている。その結果第一に、1993 年以降情報スーパーハイウェイ構想の実現を目指す非営利団体の活動が活発化し、政治参加アクターの類型に変化が見られた点を指摘した。第二に、学校・図書館向けの新たなユニバーサル・サービス支援プログラム(E-rate プログラム)の政策実施過程では、それまで通信政策の 이슈にほとんど関心を持っていなかった教育団体並びに全米図書館協会が政策の運営に直接携わるとともに、政策実施監視機能を果たし、政策の実施に関して極めて重要な役割を果たしている点を明らかにした。アメリカの利益集団政治について、環境保護政策や福祉政策などの領域では数多くの先行研究があるが、情報通信政策の分野ではこれまで十分な研究は行われていない。それゆえ本研究の完成は、情報通信政策ならびにアメリカ政治研究の発展に貢献できると考える。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

清原聖子、「1996 年通信法成立をめぐる政治過程—NCTA の政治活動を例にして—」、『財団法人 電気通信普及財団テレコム社会科学学生賞入賞論文集』、2002 年 5 月、電気通信普及財団、pp. 32～51。【査読有】

清原聖子・黒川綾子、「米国の教育機関におけるデジタル・デバイド解決政策—E-rate プログラムを中心に—」、『米国・欧州・日本における教育分野でのデジタル・デバイドの現状と解決策 財団法人国際通信経済研究所平成 13 年度自主研究報告書』、2002 年 6 月、第 1 章 pp. 5~31。(5 ページから 31 ページ。)

清原聖子、「米国の教育機関におけるデジタル・デバイド解決政策—E-rate プログラムをめぐる動向を中心に—」、『第 19 回情報通信学会大会予稿集』、2002 年 6 月 23 日、情報通信学会、東京、東京女子大学、pp. 155~169。

清原聖子、「米国における「教育の情報化」の現状と課題」、『情報通信ジャーナル』、21 巻、2 号、2003 年 2 月。(4 ページ)

清原聖子、「アメリカの通信政策決定過程における公共利益団体の役割— 一九九六年電気通信法を事例として—」、『法学政治学論究』、57 号、2003 年 6 月、慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会、pp. 223~258。
【査読有】

清原聖子・黒川綾子・太田美紀子、「米国におけるデジタル・デバイドの解消と情報リテラシー向上政策の展開」、『米英における情報 教育政策—情報リテラシーと学力向上— 財団法人国際通信経済研究所平成 14 年度自主研究報告書』、2003 年 6 月、第 1 章 pp. 5~26。

清原聖子、「情報教育政策の展開における米英比較」、『第 20 回情報通信学会大会予稿集』、2003 年 6 月 28 日、情報通信学会、東京、慶応大学、pp. 33~38。

清原聖子、「情報教育政策の展開における米英比較」、『第 20 回情報通信学会個人研究発表』、2003 年 6 月 28 日、慶應義塾大学。

清原聖子、「近年の米国高等教育機関における「遠隔教育」—全米教育統計センターの調査報告書を中心に—」、『海外電気通信』、2003 年 12 月、財団法人国際通信経済研究所、pp. 26~33。

清原聖子、「近年のアメリカ電気通信政策をめぐる政治過程の変容—新たな連合の出現と E-rate の成立」、『第 21 回情報通信学会大会予稿集』、2004 年 6 月 20 日、情報通信学会、千葉、明海大学。

清原聖子、「近年のアメリカ電気通信政策をめぐる政治過程の変容—新たな連合の出現と E-rate の成立」、『情報通信学会第 21 回 学会大会予稿』、2004 年 6 月 20 日、明海大学。URL:<http://www.soc.nii.ac.jp/jsicr/pdf/kiyohara.pdf>(個人研究発表)

清原聖子、「バーチャルスクール支援団体の設立」、『週刊教育事情』、856 巻、2004 年 7 月、教育公論社、pp. 14~15。

Shoko Kiyohara, "Changes in the Telecommunications Political Process in the United States: The Impact of the Establishment of the E-rate," *Annual Meeting of the Northeastern Political Science Association*, 2004.11.13, USA, Northeastern Political Science Association, Boston, Omni Parker House. (Boston、パネル発表)

清原聖子、「現代アメリカ通信政策の政治過程における変容—新たな連合の出現と E-rate の成立—」、『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』、68 巻、2005 年 1 月、東京大学大学院情報学環。

清原聖子、「E-rate プログラムの政策実施過程に関する分析—教育・図書館団体の役割とロビー活動を中心に—」、『InfoCom Review』、36 号、2005 年 3 月、情報通信総合研究所。【査読有】

清原聖子、「アメリカにおける通信・放送の融合議論に関する展開—連邦通信委員会スタッフへのヒアリング調査を中心に—」、『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』、69 巻、2005 年 3 月、東京大学大学院情報学環。

口頭発表等

清原聖子、「ハイテク時代の通信政策決定過程における公共利益団体の活動—E-rate をめぐる政治過程—」、『アメリカ学会自由論題発表』、2003 年 5 月 31 日、アメリカ学会、神戸、神戸大学国際文化学部。

小林 真輔 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

ASIPの設計空間探索向けのコンパイラ自動生成手法に関する研究

アプリケーションに特化したプロセッサ用のコンパイラをプロセッサの仕様記述から自動生成する。同じ記述を用いてハードウェア用の記述も同時に出力することが可能であるため、プロセッサの設計品質をすばやく評価することが可能となる。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法の研究。研究室では、Context-aware computing や超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

小林真輔・武内良典・北嶋 暁・今井正治、「組み込み用途向けマルチスレッド・プロセッサの構成の検討と評価」、『第 13 回 回路とシステム軽井沢ワークショップ論文集』、2000 年 4 月、pp. 533～538。

Shinsuke Kobayashi, Yoshinori Takeuchi, Akira Kitajima and Masaharu Imai, "Compiler Generation in PEAS-III: an ASIP Development System," *Proceedings of Software and Compilers for Embedded Systems 2001*, 2001.3.【査読有】

三田健太郎・小林真輔・武内良典・北嶋暁・今井正治、「PEAS-III システムのためのコンパイラ・ジェネレータの試作」、『DA シンポジウム 2001 論文集』、2001 年 7 月、pp. 143～148。

Toshiyuki Sasaki, Shinsuke Kobayashi, Tomohide Maeda, Makiko Itoh, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Rapid Prototyping of Complex Instructions for Embedded Processors using PEAS-III," *Proc. International Workshop on Synthesis And System Integration of Mized Information Technologies 2001*, 2001.10, pp. 61-66.【査読有】

Shinsuke Kobayashi, Kentaro Mita, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Design Space Exploration for DSP Applications using the ASIP Development System PEAS-III," *Proceedings of IEEE International Conference on Acoustics, Speech, and Signal Processing 2002*, 3, no.13-17, 2002.5.13-2002.5.17, pp. 3168-3171.【査読有】

引地信之・小林真輔・三田健太郎・武内良典・今井正治、「ASIP 設計自動化のためのアーキテクチャ記述共通化の提案 — プロセッサ記述およびコンパイラ・リターゲットに必要な記述の統合 —」、『電子情報通信学会技術研究報告』、102 巻、163 号、2002 年 6 月、pp. 25～30。

奥田晃司・小林真輔・武内良典・今井正治、「構成可変な VLIW プロセッサのアーキテクチャモデルとそのシミュレータ・ジェネレータ」、『DA シンポジウム 2002 論文集』、2002 年 7 月、pp. 161～166。

武内 良典・小林真輔・今井 正治、「特定用途向きインストラクションセットプロセッサ開発環境 ASIP Meister と DSP アプリケーションへの応用」、『電子情報通信学会技術研究報告』、102 巻、295 号、2002 年 9 月、pp. 73～78。(招待講演)

三田健太郎・小林真輔・武内良典・坂圭圭史・今井正治、「ASIP Meister におけるゼロ・オーバーヘッド・ループ制御方式の検討とその評価」、『電子情報通信学会技術研究報告』、2002 巻、113 号、2002 年 11 月、電子情報通信学会技術研究報告。(電子情報通信学会技術研究報告, CPSY2002-51, vol. 102, No. 478, Nov., 2002, pp. 43-48. 情報処理学会研究報告, 2002-SLDM-107, vol. 2002, No. 113, Nov., 2002, pp. 43-48.)

Shinsuke Kobayashi, Kentaro Mita, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "A Compiler Generation Method for HW/SW Codesign Based on Configurable Processors," *IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, E85-A, no.12, 2002.12, pp. 2586-2595.【査読有】

Shinsuke Kobayashi, Yoshinori Takeuchi, Akira Kitajima and Masaharu Imai, "Proposal of a Multi-Threaded Processor Architecture for Embedded Systems and Its Evaluation," *IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, E84-A, no.3, 2003.3, pp. 748-754.【査読有】

Koji Okuda, Shinsuke Kobayashi, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "A Simulator Generator Based on Configurable VLIW Model Considering Synthesizable HW Description and SW Tools Generation," *The 12th Workshop on Synthesis And System Integration of Mixed Information technologies SASIMI 2003*, 2003.4, pp. 152-159.【査読有】

三田健太郎・小林真輔・武内良典・坂主圭史・今井正治、「ASIP Meister におけるゼロ・オーバーヘッド・ループ制御方式の提案」、『第 16 回 回路とシステム軽井沢ワークショップ論文集』、2003 年 4 月、pp. 429~434。

Shinsuke Kobayashi, Kentaro Mita, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "JPEG Encoder Design Space Exploration Using the ASIP Development System: PEAS-III," *IPSJ Journal*, 44, no.5, 2003.5, pp. 1190-1201.【査読有】

田中浩明・小林真輔・武内良典・坂主圭史・今井正治、「SIMD 拡張プロセッサ用コンパイラにおける PACK 命令を考慮したコード選択手法」、『電子情報通信学会技術研究報告』、103 巻、147 号、2003 年 6 月、pp. 43~48。(DSP2003-58)

Shinsuke Kobayashi, Kentaro Mita, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Rapid Prototyping of JPEG Encoder using the ASIP Development System: PEAS-III," *Proceedings of IEEE International Conference on Multimedia & Expo (ICME) 2003*, 2003.7, pp. 149-152.

小林悠記・小林真輔・佐々木敏公・奥田晃司・坂主圭史・武内良典・今井正治、「コンフィギュラブル VLIW プロセッサの合成可能な HDL 記述生成手法の提案」、『DA シンポジウム 2003 論文集』、2003 巻、11 号、2003 年 7 月、pp. 259~264。

田中浩明・小林真輔・塩見彰睦・北嶋暁・佐藤淳・武内良典・今井正治・引地信行、「特定用途向きプロセッサ開発システム ASIP Meister」、『第 5 回組み込みシステム技術に関するサマーワークショップ予稿集』、2003 年 7 月、pp. 23~28。

Hiroaki Tanaka, Shinsuke Kobayashi, Yoshinori Takeuchi, Keishi Sakanushi and Masaharu Imai, "A Code Selection Method for SIMD Processors with PACK Instructions, Software and Compilers for Embedded Systems," *Lecture Notes in Computer Science 2826*, 2003.9, Springer.【査読有】

山下春造・大熊康介・早川幹・小林真輔・越塚登・坂村健、「P11 型アクティブチップのアーキテクチャ」、『電子情報通信学会 2004 年ソサイエティ大会』、2004 年。(A-20-9, p. 203, 2004 年)

下川功・山下春造・大熊康介・早川幹・小林真輔・越塚登・坂村健、「P11 型アクティブチップの無線輻射制御方式」、『電子情報通信学会 2004 年ソサイエティ大会』、2004 年。(A-20-10, p.204, 2004 年)

藤原亮介・志田雅昭・水垣健一・前木陽・小久保優・大熊康介・早川幹・越塚登・坂村健・小林真輔、「P2 型アクティブチップに向けた 低電力 UWB 無線方式の検討」、『電子情報通信学会 2004 年ソサイエティ大会』、2004 年。(A-20-10, p.205, 2004 年)

Yuki Kobayashi, Shinsuke Kobayashi, Koji Okuda, Keishi Sakanushi, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Synthesizable HDL Generation Method for Configurable VLIW Processors," *Proceedings of the Asia and South Pacific Design Automation Conference 2004*, 2004.1, pp. 843-846.【査読有】

Hassan Mohamed AbdElSalam, Shinsuke Kobayashi, Keishi Sakanushi, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Towards a Higher Level of Abstraction in Hardware/Software Co-Simulation," *First International Workshop on Embedded Computing (EC2004)*, 2004.3, First International Workshop on Embedded Computing (EC2004), pp. 824-830.【査読有】

Shinsuke Kobayashi, Kentaro Mita, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Rapid Prototyping of JPEG Encoder using the ASIP Development System: PEAS-IIIq," *Proceedings of IEEE International Conference on Acoustics, Speech, and Signal Processing 2003*, 2, 2004.4, pp. 485-488.【査読有】

Yohei Ishimaru, Keishi Sakanushi, Shinsuke Kobayashi, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "S-SEQUENCE : A NEW FLOORPLAN REPRESENTATION METHOD PRESERVING ROOM ABUTMENT RELATIONSHIPS," *IEEE International Symposium on Circuits and Systems 2004 (ISCAS 2004)*, 2004.5, IEEE International Symposium on Circuits and Systems 2004 (ISCAS 2004).【査読有】

小林真輔、「ユビキタス社会における超小型チップネットワーク技術の研究開発」、『第 15 回インターネット 技術第 163 委員会研究会』、2004 年 5 月。(招待講演)

Shinsuke Kobayashi, Miki Hayakawa, Yasuyuki Okuma, Isao Shimokawa, Masaaki Shida, Shunzo Yamashita, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "T-Air: Low Power Wireless Sensor Network Platform for Ubiquitous Computing," *First International Workshop on Networked Sensing Systems (INSS)*, 2004.6, First International Workshop on Networked Sensing Systems (INSS).【査読有】

小林真輔、「T-Engine プロジェクト」、『SWEST6 予稿集』、2004 年 7 月、pp. 98~102。(招待講演)

Fidens Felix Simanjuntak・Keishi Sakanushi・Shinsuke Kobayashi・Yoshinori Takeuchi・Masaharu Imai, 「Source Code Optimization for Reliability-Critical Embedded Systems」、『DA シンポジウム、情報処理学会シンポジウムシリーズ』、2004 年 7 月、pp. 157~162。

小林真輔・越塚登・坂村健、「H.263 を用いた組み込みソフトウェア開発プラットフォーム:T-Engine の評価」、『DA シンポジウム、情報処理学会シンポジウムシリーズ』、2004 巻、8 号、2004 年 7 月。

Shinsuke Kobayashi, Kentaro Mita, Yoshinori Takeuchi and Masaharu Imai, "Zero Overhead Loop Techniques for Application Specific Instruction-set Processors," *International Workshop on Synthesis And System Integration of Mized Information Technologies (SASIMI 2004)*, 2004.10, pp. 255-261.【査読有】

Lee Hoi Leong, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura, "CASIS: A Context Aware Speech Interface System," *ACM International Conference on Intelligent User Interfaces 2005 (IUI 2005)*, 2005.1, pp. 231-238.【査読有】

小林真輔・早川幹・越塚登・坂村健、「T-Engine を用いた ISO18000-4 タグリーダーライタのプロトタイプ設計」、『第 12 回 FPGA/PLD Design Conference ユーザープレゼンテーション論文集』、2005 年 1 月、pp. 79~84。

一般向けエッセイ等

小林真輔、「コンフィギャラブル・プロセッサを理解する -- コンパイラ検証のための基礎知識」、『DESIGN WAVE MAGAZINE』、2003 年 12 月、CQ 出版株式会社。

小林真輔、「ユビキタス・ショーケース」、『TRONWARE』、2004 年 2 月、パーソナルメディア。

早川幹・小林真輔・加藤淳、「新たな組み込みシステム用の開発プラットフォーム T-Engine ハードウェアの概要」、『Interface』、2004 年 8 月、CQ 出版株式会社、pp. 44~60。

尾立英基・小林真輔、「T-Engine フォーラムのユビキタス ID を使った RFID のセキュリティとプライバシー」、『Interface』、2004 年 12 月、pp. 110~118。

小林真輔、「薬品の自動認識 -病院とユビキタス-」、『TRONWARE』、91 号、2005 年 1 月、パーソナルメディア株式会社。(2005 年 1 月、p.60.)

一般向け講演等

小林真輔、「超小型チップネットワーク技術の研究開発」、『ユビキタスネットワークシンポジウム 2004』、2004 年 11 月、pp. 5~18。

小林真輔、「超小型チップネットワーク技術の最新動向」、『CKP セミナー2005 : ユビキタス社会の実現に向けて』、2005 年 3 月。(大阪、2005 年 3 月)

竹之内 禎 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

情報倫理学の解釈学的アプローチ

基礎情報学、解釈学、メッセージ論などを手がかりに、意味作用としての情報現象を、現代および過去の倫理的諸問題と関連づけて理論化する試み。

Webアクセシビリティ

視覚障害者の情報利用環境・情報利用特性と、情報ケアとしての情報サービス、情報リテラシー教育としての Web アクセシビリティ教育の方法論に関する研究。

ドイツ図書館文化論

ドイツの公共図書館の現状に関する調査、ドイツの全般的な図書館制度論。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

ラファエル・カプーロ、竹之内禎訳、「ホモ・インフォーマティクス—情報学の解釈学的パラダイムシフト—」、『思想』、2003 年第 7 号、第 951 号、20 年 3 月 6 日、pp. 69～88。(Rafael Capurro, Homo Informaticus, In: Leben im Informationszeitalter, 1995 の邦訳。)

ラファエル・カプーロ、竹之内禎訳、「伝達学とは何か」、『日独図書館懇談会会報』、第 15 号(2)号、通号 57、2001 年、pp. 5～11。

竹之内禎、「情報検索と解釈学 —ラファエル・カプーロの解釈学的情報学論—」、『図書館情報学研究』、1 号、2002 年。

竹之内禎、「社会情報学研究における解釈学的アプローチの有効性に関する予備的考察」、『社会情報学研究』、6 巻、2002 年、pp. 39～51。【査読有】

仲田誠, 田村貴紀, Leslie Tkach Kawasaki, 飯高敏和 and 竹之内禎, "The positive and negative aspects of," 2002.

日本図書館協会日本の参考図書編集委員会編、『日本の参考図書』、2002 年 9 月、日本図書館協会。

竹之内禎、「カプーロの解釈学的情報学—情報社会のエートスと「メッセージ論」への展開—」、『思想』、951 号、2003 年 7 月、pp. 89～99。

竹之内禎, "Capurro's Hermeneutic Approach to Information Ethics: Ethos in the information society and the development of "angeletics", " *International Journal of Information Ethics*, Vol.1, 2004.

竹之内禎, "A Consideration on the Concept of Information Literacy: Is it really "necessary for all"?", " *International Journal of Information Ethics*, Vol.2, 2004.

河井弘志, 三浦太郎, 竹之内禎, et al., "Bibliotheksentwicklung in Japan," *Bibliothek, Forschung und Praxis*, 28, Nr.3, 2004, pp. 303-318.

その他

竹之内禎、「中田邦造の図書館学構想」、『2000年度日本図書館情報学会春季研究集会』、2000年5月20日。(同志社大学新町キャンパス尋真館、2000年5月20日)

竹之内禎、「情報リテラシー概念に関する批判的考察：V.E.フランクルの homo patiens 論と H.-G.ガダマーの Takt 論を中心に」、『情報メディア学会第2回研究発表会』、2001.3.24。(学術総合センター、2001年3月24日)

仲田誠・田村貴紀・Leslie Tkach Kawasaki・飯高敏和・竹之内禎、「インターネット利用は情報格差や意識変化をもたらすか？～オンライン調査に見るネットユーザーの意識と価値観～」、『情報メディア学会第4回研究会』、2002年10月19日。(学術総合センター、2002年10月19日)

竹之内禎、「情報倫理からメッセージ倫理へーラファエル・カプーロのメッセージ論を手がかりにー」、『日本社会情報学会第7回大会』、2002年11月16日。(群馬大学、2002年11月16日)

仲田誠・田村貴紀・Leslie Tkach Kawasaki・飯高敏和・竹之内禎、「インターネットユーザーの精神世界ー文化観・自己観・宗教観を中心にー」、『日本社会情報学会第7回大会』、2002年11月16日。(群馬大学、2002年11月16日)

D.ビュースト 助手

研究テーマ(主たるもの3点以内)

近代性、グローバル化とナショナリズムの諸問題(日本・東アジアを中心に)

文化とアイデンティティの政治学(文化政策を含めて)

近代思想とその人文・社会科学への影響(解釈学を中心に)

研究業績(2000～2004年度)

論文等

Kang Sangjung, Ethnic Minority Citizenship and the Japanese Constitution tr., 2001.12, Canberra, Australia, Australian National University. (Translation)

Shunya Yoshimi, "Television and Nationalism: A historical review for the study of national media in the age of globalization," 2002.5. (Translation)

Shunya Yoshimi, "Open Air Television and the Consumption of Professional Wrestling," 2002.6. (Translation)

Hyun Mooam, "Empire and the Korean Network," 2002.7.22, Canberra, Australia, Australian National University. (Translation)

Okamoto Masako, "International Cultural Relations and Information Networks," 2002.10, Istanbul, Turkey, Koc University. (Translation)

Shunya Yoshimi, "Television and Nationalism: Historical Change of the National Domestic TV Formation in Postwar Japan," *European Journal of Cultural Studies*, 2003. (Translation)

Osamu Hiroi, Isao Nakamura, Hiromichi Nakamori, Ichiro Matsuo, Chiho Morioka, and Hisako Komuro, "Inhabitant's Behavior and Disaster Information Dissemination in an Urban Flood," *Review of Media, Information and Society*, no.8, 2003. (Translation)

Shunya Yoshimi, "The Postwar Order and the Consumption of "America"," 2003.3. (Translation)

Toriyama, Atsushi, "Okinawa's postwar: some observations on the formation of American military bases in the aftermath of terrestrial warfare," *Inter-Asia Cultural Studies*, 4, no.3, 2003.8. (Translation)

Shunya Yoshimi, "'America' as desire and violence: Americanization in postwar Japan and Asia during the Cold War," *Inter-Asia Cultural Studies*, 4, 3, 2003.8. (Translation)

Aoki Tamotsu, "'Great Happiness' and 'Small Happiness'," 2003.10. (Translation)

Kang Sang Jung, "America's Japan, Japan's Japan, and Asia's Japan," 2004.4, Leipzig, Germany, Universitat Leipzig. (Translation, Inaugural Speech delivered on assumption of Leibniz Visiting Professorship)

Kang Sang Jung, "Towards a New Regionalism: Overcoming Japan's Alienation from Asia," 2004.5. (Translation)

Shunya Yoshimi, "(Early) Postwar Japanese Television Studies," 2004.5.4. (Translation)

Aoki Tamotsu, "Globalization, Cultural Diversity and Japanese Culture – For the Development of a Multi-cultural World," *UNESCO Conference on "Japan-Arab Dialogue"*, 2004.5.6. (Translation, Keynote Speech for Session 2)

Aoki Tamotsu, "Exploring the Common Goal: Cultural Diversity," *UNESCO Conference on "Japan-Arab Dialogue"*, 2004.5.6, UNESCO, Paris, France. (Translation, Annotated Agenda for Session 2)

Kang Sang Jung, "Towards a Transformation of Japan's View of Asia," 2004.6. (Translation of 「日本のアジア観の転換に向けて」 the final chapter of 『反ナショナリズム：帝国主義の妄想と国家の暴力に抗して』)

Shunya Yoshimi, "Consuming America, Producing Japan," 2004.6. (Translation)

Aoki Tamotsu, "Signs of Hope for the Realization of an East Asian "Multicultural World"," 2004.7. (Translation)

Aoki Tamotsu, "Globalization, Cultural Diversity and East Asia: Toward the Possibility of Cultural Co-operation.," *36th World Congress of Sociology*, 2004.7.8, Institute of Sociology, Beijing, Chinese Academy of Social Sciences. (Translation, Keynote Speech, 6-12th July, 2004)

Kang Sang Jung, "America's Japan and Japan's Japan," *Series of lectures delivered at Leipzig University*, 2004.9, Leipzig, Germany, Universitat Leipzig. (Translation, Summer Semester 2004)

Shunya Yoshimi, "The Crisis of the Humanities and Experiments in the Creation of a New Encyclopedia. Presentation at Australian National University," 2004.10. (Translation)

Itsuko Yamaguchi, "NEP Supplement: Cyberlaw and the Japanese concept of "Information Law"," 2004.11.4. (Translation)

Shunya Yoshimi, "Tokyo and the "Modern Girl": The Spatial Politics of Modernity and Gender in Interwar Japan," 2005.1.5. (Translation)

宮尾 祐介 助手

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

型付き素性構造の確率モデル

型付き素性構造は複雑なグラフ構造であるため、従来自然言語処理で行われてきたマルコフ仮定に基づく確率モデル化が不可能であった。そこで、マルコフ仮定のような確率的独立性仮定が不要な log-linear モデルを適用し、またグラフの曖昧性が指数爆発する問題を解決するため、feature forest model を提案した。

大規模な語彙化文法の開発

HPSG や LTAG などの語彙化文法は、詳細な言語学的解析ができる反面、大規模な文法資源を開発することは困難であった。そこで、文法規則と辞書を人手で開発する既存の文法開発手法を転換し、文法規則とツリーバンクを開発する手法を提案した。開発中に文法規則をツリーバンクに適用することで、ツリーバンク、さらにそこから自動抽出された辞書の整合性が自動的に保たれる。これにより、文法の整合性を保ったまま文法資源を拡大することが可能となった。実際、英語の HPSG 文法を開発し、その有効性を確認した。

語彙化文法の曖昧性解消モデル

型付き素性構造の確率モデルを HPSG 文法に適用することで、HPSG 文法の曖昧性解消のための確率モデルを開発した。これにより、実世界のテキストを高精度で解析できるようになり、さらに、確率モデルを利用した高効率な探索アルゴリズムを適用することで、HPSG に基づく構文解析が実テキストに対して実時間で動作することを確認した。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

Takaki Makino, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun-ichi Tsujii, "Native-Code Compilation of Feature Structures," Stephan Oepen, Dan Flickinger, Jun-ichi Tsujii and Hans Uszkoreit eds., *Collaborative Language Engineering: A Case Study in Efficient Grammar-based Processing. CSLI Publications*, 2000.【査読有】

Yusuke Miyao, Takaki Makino, Kentaro Torisawa and Jun-ichi Tsujii, "The LiLFeS abstract machine and its evaluation with the LinGO grammar," *Natural Language Engineering Special Issue - Efficient Processing with HPSG: Methods, Systems, Evaluation*, 6, no.1, 2000, pp. 47-61.【査読有】

Kentaro Torisawa, Kenji Nishida, Yusuke Miyao and Jun-ichi Tsujii, "An HPSG Parser with CFG Filtering," *Natural Language Engineering Special Issue - Efficient Processing with HPSG: Methods, Systems, Evaluation*, 6, no.1, 2000, pp. 63-80.【査読有】

Akane Yakushiji, Yuka Tateisi, Yusuke Miyao and Jun-ichi Tsujii, "Use of a Full Parser for Information Extraction in Molecular Biology Domain," *Genome Informatics*, 11, 2000, pp. 446-447.【査読有】

Naoki Yoshinaga, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun-ichi Tsujii, "Resource sharing among HPSG and LTAG communities by a method of grammar conversion from FB-LTAG to HPSG," *Proceedings of ACL/EACL Workshop on Sharing Tools and Resources for Research and Education*, 2001, Toulouse, France, Morgan Kaufman Publishers, pp. 39-46.【査読有】

Naoki Yoshinaga, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun-ichi Tsujii, "Efficient LTAG parsing using HPSG parsers," *Proceedings of Pacific Association for Computational Linguistics (PACLING 2001)*, 2001, Fukuoka, Japan, pp. 342-351.【査読有】

Jun-ichi Kazama, Yusuke Miyao and Jun-ichi Tsujii, "A Maximum Entropy Tagger with Unsupervised Hidden Markov Models," *Proceedings of the Sixth Natural Language Processing Pacific Rim Symposium*, 2001, pp. 333-340.【査読有】

Naoki Yoshinaga and Yusuke Miyao, "Grammar conversion from LTAG to HPSG," *Proceedings of the sixth ESSLLI Student Session*, 2001, Helsinki, Finland, pp. 309–324.【査読有】

Akane Yakushiji, Yuka Tateisi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Event extraction from biomedical papers using a full parser," *Proceedings of the sixth Pacific Symposium on Biocomputing (PSB 2001)*, 2001, Hawaii, USA, pp. 408–419.【査読有】

Naoki Yoshinaga and Yusuke Miyao, "Grammar conversion from LTAG to HPSG," *European Student Journal on Language and Speech*, 2002.【査読有】

Takashi Ninomiya, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Lenient Default Unification for Robust Processing within Unification Based Grammar Formalisms," *Proceedings of the 19th International Conference on Computational Linguistics (COLING 2002)*, 2002, pp. 744–750.【査読有】

Tadayoshi Hara, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Clustering for obtaining syntactic classes of words from automatically extracted LTAG grammars," *Proceedings of the sixth International Workshop on Tree Adjoining Grammars and Related Frameworks (TAG+6)*, 2002, pp. 227–233.【査読有】

Naoki Yoshinaga, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "A formal proof of strong equivalence for a grammar conversion from LTAG to HPSG-style," *Proceedings of the sixth International Workshop on Tree Adjoining Grammars and Related Frameworks (TAG+6)*, 2002.【査読有】

Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Maximum Entropy Estimation for Feature Forests," *Proceedings of HLT 2002*, 2002.【査読有】

Naoki Yoshinaga, Yusuke Miyao, Kentaro Torisawa and Jun'ichi Tsujii, "Parsing Comparison across Grammar Formalisms Using Strongly Equivalent Grammars," *Journal of Traitement Automatique des Langues*, 44, no.3, 2003, Association pour le Traitement Automatique des Langues., pp. 15–39.【査読有】

Akane Yakushiji, Yuka Tateisi, Yusuke Miyao, Naoki Yoshinaga and Jun'ichi Tsujii, "A Debug Tool for Practical Grammar Development," *Companion Volume to the Proceedings of 41st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics*, 2003, pp. 173–176.【査読有】

Katsuya Masuda, Takashi Ninomiya, Yusuke Miyao, Tomoko Ohta and Jun'ichi Tsujii, "A Robust Retrieval Engine for Proximal and Structural Search," *Proceedings of HLT-NAACL 2003 Short papers*, 2003.【査読有】

Takuya Matsuzaki, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "An Efficient Clustering Algorithm for Class-based Language Models," *Proceedings of the Seventh Conference on Natural Language Learning (CoNLL) at HLT-NAACL 2003*, 2003, pp. 119–126.【査読有】

Yusuke Miyao, Takashi Ninomiya and Jun'ichi Tsujii, "Probabilistic modeling of argument structures including non-local dependencies," *Proceedings of the Conference on Recent Advances in Natural Language Processing (RANLP) 2003*, 2003, pp. 285–291.【査読有】

Yusuke Miyao, Takashi Ninomiya and Jun'ichi Tsujii, "Lexicalized Grammar Acquisition," *Proceedings of 10th EACL Companion Volume*, 2003, pp. 127–130.【査読有】

Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "A model of syntactic disambiguation based on lexicalized grammars," *Proceedings of 7th CoNLL*, 2003, pp. 1–8.【査読有】

Hiroko Nakanishi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Using Inverse Lexical Rules to Acquire a Wide-coverage Lexicalized Grammar," *IJCNLP 2004 Workshop on Beyond Shallow Analyses*, 2004.【査読有】

Yoshimasa Tsuruoka, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Towards efficient probabilistic HPSG parsing: integrating semantic and syntactic preference to guide the parsing," *Proceedings of IJCNLP-04 Workshop: Beyond shallow analyses – Formalisms and statistical modeling for deep analyses*, 2004.【査読有】

Hiroko Nakanishi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "An Empirical Investigation of the Effect of Lexical Rules on Parsing with a Treebank Grammar.," *Proceedings of the third TLT2004.*, 2004, pp. 103-114.【査読有】

Akane Yakushiji, Yuka Tateisi, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Finding Anchor Verbs for Biomedical IE Using Predicate-Argument Structures," *the Companion Volume to the Proceedings of 42st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics*, 2004, pp. 157-160.【査読有】

Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "Deep Linguistic Analysis for the Accurate Identification of Predicate-Argument Relations," *Proceedings of COLING 2004*, 2004, pp. 1392-1397.【査読有】

Takashi Ninomiya, Yusuke Miyao and Jun'ichi Tsujii, "A Persistent Feature-Object Database for Intelligent Text Archive Systems. In Keh-Yih Su, Jun'ichi Tsujii," Keh-Yih Su, Jun'ichi Tsujii, Jong-Hyeok Lee and Oi Yee Kwong eds., *Natural Language Processing - IJCNLP 2004. LNAI3248*, 2005, pp. 197-205.【査読有】

玄武岩 助手

研究テーマ(主たるもの3点以内)

東アジアにおけるコリアン・ネットワーク

20世紀の朝鮮半島は植民地と解放、冷戦と内戦、分断と民主化の劇的な歴史が展開された舞台であった。こうした過程のなかで移住、徴用、帰還など様々な移動を余儀なくされた「コリアン」(国家としての南北の朝鮮半島に居住している朝鮮人および半島以外で多様な国籍の下で居住する朝鮮半島出身者)たちが二十世紀において東アジアで展開してきた越境的なネットワークを、そのアイデンティティに着目して歴史社会的に明らかにする。

韓国におけるインターネットと市民社会

韓国で展開されている政治改革の現状を、若い世代を中心にインターネットを駆使するオンラインとオフラインが結合した政治文化を中心に考察する。さらに市民社会に後押しされる韓国の政治改革が、日本の市民社会との交流と連帯によってどのような越境的な市民的公共圏を構築していくのかを展望する。

研究業績(2000～2004年度)

論文等

玄武岩、「多国籍民族共同体の模索—転換期の韓国ナショナリズムの変容とその行方」、西川長夫・姜尚中・西成彦編、『20世紀をいかに超えるか』、2000年6月、平凡社、pp. 144～174。

玄武岩、「越境する周辺—中国延辺朝鮮族自治州におけるエスニック空間の再編」、『現代思想』、29巻、4号、3月号、2001年3月、青土社、pp. 204～218。

玄武岩, "Empire and the Korean Diaspora: Koreans that Rejected Imperial Subjecthood," *Asian Studies Conference 2002, 14th Biennial Conference*, 2002.7.3, Asian Studies Conference, Hobart, Tasmania, Australia, Hotel Grand Chancellor.

玄武岩、「コリアン・ネットワークと「在日」」、『環』、11巻、2002年10月、Autumn。

玄武岩、「東アジアのなかのコリアン・ネットワーク—その歴史的生成」、『アジア新世紀3 アイデンティティ—解体と再構成』、2002年12月6日、岩波書店、pp. 137～151。

玄武岩、「インターネットと韓国大統領選挙—言論権力 vs インターネット権力を中心に—」、『地域研究論集』、15 巻、2 号、2003 年 3 月、pp. 195～211。

玄武岩、「コリアン・ネットワークと「在日」」、『歴史のなかの「在日」』、2005 年 3 月 30 日、藤原書店、pp. 389～400。

玄武岩、「浮遊するディアスポラ—「延辺チヨンガ」をめぐる中国朝鮮族のアイデンティティ・ポリティクス」、『東京大学大学院情報学環紀要』、68 号、2005 年 3 月 31 日、pp. 83～100。

口頭発表等

玄武岩、「韓国における新政権発足後の市民社会の変容」、『カルチュラル・タイフーン』、2003 年 6 月、早稲田大学。

玄武岩、「討論者」、『国際シンポジウム「北東アジアの新世紀—人の移動とコリアン・ネットワーク」』、2003 年 11 月 21 日、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、東京大学安田講堂・東京大学学生会館分館。(2003 年 11 月 20—22 日)

玄武岩、「東北亜コリアン・ネットワークの展望」、『東北亜コリアン・ネットワーク国際会議』、2004 年 10 月、大阪。(討論者)

一般向けエッセイ等

玄武岩、「極東ロシア高麗人における「故郷」の再生」、『トヨタ財団レポート』、98 号、2002 年 4 月 5 日、Apr.、pp. 1～6。

玄武岩、「Revival of the Ethnic Korean “Home” of the Russian Far East,“ *Occasional Report*, no.33, 2002.7, TOYOTA FAOUNDATION, pp. 1-5.

玄武岩、「姜信子(文)・アン・ビクトル(写真)『追放の高麗人—「天然の美」と百年の記憶(石風社、2002 年)』 書評」、『週刊金曜日』、2002 年 12 月 6 日、pp. 52～53。

玄武岩、「テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない』 書評」、『週刊金曜日』、2005 年 1 月 14 日、p. 43。

一般向け講演等

玄武岩、「東アジアから日本の放送を考える」、『2001 年度放送と人権シンポジウム』、2002 年 4 月 5 日、日本放送労働組合千葉分会、NHK 千葉放送局。(NHK 千葉放送局、2002 年 4 月 5 日)

玄武岩、「北東アジアとディアスポラ—コリアン・ディアスポラの現在」、『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター〈市民アカデミア〉』、2003 年 9 月 5 日、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター。(大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター、2003 年 9 月 5 日)

玄武岩、「新政権発足後の韓国—政治・市民社会・メディア」、『アジア理解講座』、2003 年 11 月 26 日、国際交流基金アジアセンター。(国際交流基金アジアセンター、2003 年 11 月 26 日)

七丈 直弘 科学技術振興特任助教授

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

情報可視化とネットワーク分析による産業構造の解析

CGを用いてネットワーク構造を可視化するとともに、数理物理的分析をネットワーク構造に対して適用することで、ネットワーク形成の方法 (Kinetics) の解析や構造の特徴づけを行う。具体的な対象としては、知財分野や研究領域のコラボレーションを扱った。特に、新素材(光触媒を題材とする)開発におけるイノベーションとデジタルコンテンツ分野(CG、AR、VR、ユーザインタフェース等)のイノベーションと国際競争力の形成を議論した。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

『平成16年度文部科学省科学技術振興調整費・科学技術政策提言プログラム「先端科学技術研究をメディア芸術へと文化的価値を高めるための施政の在り方」報告書』。

『平成16年度文部科学省科学技術振興調整費・新興分野人材養成プログラム「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」報告書』。

論文等

馬場靖憲, 鎗目雅 and 七丈直弘, "The Role of University-Industry Collaboration in New Materials Innovation: Evolving Networks of Joint Patent Applications," *会報光触媒*, no.13, 2004.【査読有】

S. Iwasawa, N. Shichijo and Y. Kawaguchi, "Rendering Methods for Models with Complicated Micro Structures, 2nd Report," *Proceedings of the 14th International Conference on Artificial Reality and Telexistence*, 2004.【査読有】(査読つきコンファレンスペーパー)

S. Iwasawa, N. Shichijo and Y. Kawaguchi, "Rendering Methods for Models with Complicated Micro Structures," *Proceedings of the 31st International Conference on Computer Graphics and Interactive Techniques (2004)*, 2004. (ポスター発表だが、査読がある)

馬場靖憲・鎗目雅・七丈直弘・永原裕一、「産学官連携を通じたイノベーション: 研究開発コミュニティのネットワーク分析」、『研究・技術計画学会第19回年次学術大会講演要旨集』、2004年、pp. 175～177。

Baba, Yasunori, Masaru Yarime, Naohiro Shichijo and Yuichi Nagahara, "The Role of University-Industry Collaboration in New Materials Innovation: Evolving Networks of Joint Patent Applications," *Paper presented at the 10th International Joseph A. Schumpeter Society Conference*, 2004.6, Milan, Italy, pp. 9-12.【査読有】

口頭発表等

馬場靖憲・鎗目雅・七丈直弘、「光触媒研究者コミュニティのネットワーク分析: 科学技術政策における可能性」、2004年7月23日、文部科学省科学技術研究所科学技術動向研究センター。

馬場靖憲・鎗目雅・七丈直弘、「社会共創による知の生成: 特許データのネットワーク分析」、『第10回人工物工学コロキウム』、2004年12月10日、東京大学。

馬場靖憲・鎗目雅・七丈直弘、「社会共創による知の生成: 特許データのネットワーク分析」、『第10回人工物工学コロキウム』、2004年12月10日、東京大学。

吉田 正高 科学技術振興特任教員(助手)

研究テーマ(主たるもの3点以内)

コミックのデジタル・アーカイブ

印刷状況が劣悪であった昭和20年代～30年代を中心とした児童向けコミックのデジタル・アーカイブ作製と、その歴史資料としての活用に関する研究

近世江戸における鎮守の研究

近世江戸の各所に設置されていた信仰施設である鎮守について、特に地域住民の意識を通して、都市文化史の視点から考察する研究

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

吉田正高、「江戸隣接村における鎮守の成立と寺院—別当寺と地域住民の鎮守認識—」、日本史研究会編、『時と文化(岡田芳朗先生古稀記念論集)』、2000年、総合出版社歴研、pp. 179～197。

吉田正高、「解き放たれた大名屋敷内鎮守と地域住民—江戸から東京への変遷と流行神太郎稲荷の地域鎮守化—」、江戸遺跡研究会編、『江戸の祈り—信仰と願望—』、2004年、吉川弘文館、pp. 213～241。

論文等

吉田正高、「開帳にみる江戸の鎮守と地域住民—角筈村鎮守熊野十二社を例に—」、『早稲田大学大学院文学研究科研究紀要』、45(第4分冊)号、2000年、早稲田大学大学院文学研究科。

吉田正高、「江戸都市民の大名屋敷内鎮守への参詣行動—太郎稲荷の流行を中心に—」、『地方史研究』、284号、2000年、地方史研究協議会。【査読有】

小川保・吉田正高、「墨書・銘・古文書」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財真田信重霊屋保存修理工事報告書』、2000年、西楽寺。

小川保・吉田正高、「第6章 史料」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財正法寺庫裡、惣門、付鐘楼保存修理工事報告書』、2000年、正法寺。

小川保・吉田正高、「第8節 古文書・古絵図・棟札」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『東京都指定史跡大日堂境域及び日吉神社境域保存管理計画書』、2000年、普明寺。

吉田正高・馬場章他・他、「デジタルアーカイヴからデジタルエキジビションへ」、『人文科学とコンピューター・2001年シンポジウム論文集』、2001年、情報処理学会。

小川保・吉田正高、「江川家普請関係文書並びに目録」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財江川家住宅東蔵他一二棟保存修理工事報告書』、2001年、(財)江川文庫。

小川保・吉田正高、「第5章 史料」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財観音寺多宝塔保存修理工事報告書』、2001年、観音寺。

吉田正高、「残された江戸藩邸内鎮守と近代東京と地域住民—太郎稲荷産土神化の過程を中心に—」、『年度大会』、2001年12月22日、岡山藩研究会、早稲田大学。

吉田正高・ほか共著者多数、平凡社地方資料センター編、『歴史地名大系 東京都の地名』、2002年、平凡社。

吉田正高、「大衆文化に表現された「唐人」にみる東アジア認識—仕種・音曲・装束—」、『アジア遊学』、37号、2002年、勉誠出版。

吉田正高、「江戸近郊の鎮守祭礼と地域住民 —祭礼行事の都市化と問題点—」、『民衆史研究(特集・近世町村社会と宗教)』、64号、2002年、民衆史研究会。

小川保・吉田正高、「第5章 史料」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財太田家住宅主屋他八棟修理工事報告書』、2002年、太田家住宅保存修理委員会。

小川保・吉田正高、「第4章 墨書・銘文」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財切幡寺保存修理工事報告書』、2002年、切幡寺。

小川保・吉田正高、「第5章 史料」、(財)文化財建造物保存技術協会編、『重要文化財玉若酢命神社本殿他二棟修理工事報告書』、2002年、玉若酢命神社。

吉田正高、「解き放たれた大名屋敷内鎮守と地域住民—江戸から東京への変遷と太郎稲荷地域鎮守化の過程—」、『江戸遺跡研究会大会「江戸の祈り」』、2002年1月、江戸遺跡研究会、中央区立築地社会教育会館。

吉田正高、「解き放たれた大名屋敷内鎮守と地域住民—江戸から東京への変遷と太郎稲荷地域鎮守化の過程—」、『江戸の祈り 第15回大会 発表要旨集成』、2002年1月26日、江戸遺跡研究会。

吉田正高、「江戸における町内鎮守管理者としての修験と地域住民—就任、相続、退身の過程を中心に—」、『関東近世史研究会大会』、2002年10月27日、関東近世史研究会、法政大学。

吉田正高、「成田龍—「故郷」という物語—都市空間の歴史学—』を読む(合評会)、『アジア民衆史研究会』、2002年12月8日、アジア民衆史研究会、早稲田大学。

吉田正高、「江戸における鎮守の管理と修験—南品川宿新開地弁天社を中心に—」、『歴史評論』、643号、2003年、歴史科学協議会。【査読有】

吉田正高、「江戸・東京における町内鎮守管理者としての修験と地域住民—就任、相続、退身の実態を中心に—」、『関東近世史研究』、54号、2003年、関東近世史研究会。

吉田正高・他、「デジタルアーカイブを利用した地図の書誌学—長久保赤水製作『改正日本輿地路程全図』の場合—」、『人文科学とコンピューター・2003年シンポジウム論文集』、2003年、情報処理学会。(東京大学大学院学際情報学環助教授 馬場章、他7名共著)

吉田正高、「幕末名古屋藩における川田久保屋敷の利用—「川田久保御屋敷御長屋之図」の分析を中心に—」、『水野原遺跡』、2003年、新宿遺跡調査会。

吉田正高、加藤貴編、『江戸を知る事典』、2004年、東京堂。

その他一般向け

吉田正高、「江戸の鎮守—都市民の鎮守認識—」、『夏期足立区民教養講座』、2000年7月23日、足立青少年センター。

吉田正高、「江戸の鎮守—江戸市民のくらしと結びつき—」、『早稲田大学オープンカレッジ八丁堀校 講座「江戸の歴史」』、2001年~2004年、早稲田大学オープンカレッジ八丁堀校。

吉田正高、「江戸の暮らしと文化—江戸の発展と流行神—」、『甘木朝倉地区高齢者大学、歴史コース』、2001年7月19日。

吉田正高、「二つの太郎稲荷—台東区の神社—」、『台東区文化財講座』、2002年6月8日、台東区生涯学習センター。

吉田正高、「江戸の流行神—江戸を歩く—」、『早稲田大学オープンカレッジ八丁堀校 特別講座』、2004年。

堀 聖司 科学技術振興特任教員(助手)

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用に使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

研究業績(2000～2004 年度)

大谷 智子 科学技術振興特任教員(助手)

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

視覚的注意の空間特性 基礎及び応用的研究

主な興味は、注意の空間的特性にある。現在行っている一連の研究は、注意の強制の有無を利用してこの特性を探ることである。そこで、色誘導現象を利用して、視覚的注意の空間的波及効果を検討している。

視覚的注意の働きを説明する理論に、“特徴統合理論(Treisman & Gelade, 1980)”がある。これは、ある対象に注意が向けられたとき、ヒトはその対象の位置を特定し、その対象の属性(すなわち特徴)それぞれのマップを操作し、各特徴を統合する働きを持っているために、そのオブジェクトの形と色などを正確に認識・判断できるとする理論である。この特徴統合理論はそれ自体、信号処理機構を説明する有意な理論であるが、実際(様々な複雑な対象、状況下)には特徴の分節的処理は確固としたものではなく、複数の特徴において“結合錯誤現象(Treisman&Schmidt,1982)”や“非注意による見落とし現象(Mack & Rock, 1998)”が生起するという事実から、特徴マップそれ自体もまたそれらの複合的機能もそこでの情報の確定性はさほど堅固ではなく浮動的であると考えられている。

そこで、この特徴の空間特性および特徴マップの自由浮動性に着目し、注意が集中されている(注意の焦点と呼ばれる)オブジェクトに属する各特徴マップ上の活性が「注意焦点からの距離に依存した活性」といえるか、「注意焦点からの距離に非依存な活性」の要素もありうるかの2点に着目し、注意の焦点と固視点を分離させた刺激を用いて検討した。その結果、特徴への注意の自由浮動性が、注意の焦点からの距離に依存しないことが示唆された。しかし、注意の焦点から等距離にある刺激同士を比べると、注意の焦点からの位置(上下左右)によって、活性が異なることがわかった。これは、“視知覚の空間解像度に対する注意の修飾効果(Balz & Hock, 1997)”が報告されていることから、視覚的注意の空間的波及効果の検討には、視知覚の空間解像度の影響と視覚的注意の影響を考慮することを必要とする結果である。

次に、色誘導現象を利用して、注意の空間的波及効果を検討を目指した。具体的には、誘導、被誘導両刺激の間に「空間的な距離」を設け、まず、「色同化と色対比」の錯視量がどのように変化するかについての単純な知覚特性を測定し、ついで、プライミング効果を用いて視覚的注意効果を付与させた場合の測定結果との比較を行うこととする。

最後に、上記で得た視覚的注意の空間特性の知見を利用したインターフェースを用いて、評価実験及び応用的研究を実施することを予定している。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

大谷智子、「非注意対象が情報把握に及ぼす影響」、『日本視覚学会夏季大会』、12 巻、3 号、2000 年 7 月、VISION、山梨県河口湖町。(p.172)

大谷智子、「対象認知における注意の寄与」、『第 64 回日本心理学会大会、日本心理学会第 64 回大会発表論文集』、2000 年 11 月、京都大学。(p.571)

T. Ohtani, K. Yokosawa, M. Suganuma and T. Hasegawa, "Effects of eccentricity and figure-inside on binocular rivalry," *European Conference on Visual Perception*, 2001, トルコ, pp. 76-77.【査読有】(Perception, 30 Supplement)

大谷智子・横澤一彦・菅原睦、「方位縞の両眼視野闘争における随伴提示図形の効果」、『日本視覚学会冬季大会』、13巻、1号、2001年1月、VISION、工学院大学。(p.71)

横澤一彦・大谷智子、「見落とし現象における表象と注意 —非注意による見落としと変化の見落とし—」、『心理学評論』、46巻、3号、2003年、pp. 482~500。【査読有】

藤原 正仁 科学技術振興特任研究員

研究テーマ(主たるもの3点以内)

デジタルコンテンツ分野における人材育成に関する研究

デジタルコンテンツ分野の中でも特にゲーム分野について、国内外の高等教育機関および産業界における人材育成を総合的に分析し、高等教育機関におけるカリキュラム開発、産業界・政府・各種教育機関との連携のもとに高等教育機関が果たすべき役割について研究を行っている。

研究業績(2000~2004年度)

論文等

藤原正仁、「戦後日本の家族と女性の就労形態~パートタイマーの選択性的の問題を中心に~」、2001年1月10日、中央大学大学院。(商学(修士))

馬場章、藤原正仁、「東京大学におけるデジタルコンテンツ分野の人材養成への取り組み」、財団法人画像情報教育振興協会(CG-ARTS協会)メディア芸術調査委員会編、『科学技術政策提言調査報告書『先端科学技術研究をメディア芸術へと文化的価値を高めるための施政の在り方』』、2005年3月31日、財団法人画像情報教育振興協会(CG-ARTS協会)、4pp. 第2章3.国内の教育研究機関・学会の状況 pp. 156~159。

一般向け講演等

馬場章、藤原正仁、「オンラインゲーム研究の新天地を切り拓く~教育応用可能性をめぐる日韓共同研究の開始にあたって~」、有限責任中間法人ブロードバンド推進協議会編、『アジア オンラインゲーム カンファレンス 2005』、2005年2月28日、工学院大学。

添野 勉 研究拠点形成特任教員(助手)

研究テーマ(主たるもの3点以内)

写真史

日本近代における写真を中心とした映像の配信に関する歴史的・社会的研究。流通や普及の側面から近代における「写真」経験の有り様を問う。また、関係する当時の原史料の掘り起こしなどを進めている。

メディア論

メディアの普及と社会変化の関係性について、主に視覚文化の隆盛と変容という視点から研究している。

アーカイブ研究

歴史資料や一次資料としての写真のデジタルアーカイブ化の可能性について、アーカイブそのもののあり方を問うとともに、実際にデジタルアーカイブを構築するプロジェクトに関与することで実証的研究を行っている。

研究業績(2000～2004 年度)

著書等

馬場章、添野勉ほか、『大井町プロジェクト中間報告書』、2005 年、日本 東京。(2003 発行予定であったが、現在編集作業中)

論文等

添野勉、「写真の「社会的生成」過程とその動態～近代日本における日常的経験とメディアの相関をめぐって」、修士学位論文、2000 年 12 月、日本 東京、東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会情報学専門分野。【査読有】

河西由美子、「『大井町プロジェクト』地域市民の映像メディア表現実践」、『Global EduNET』、2001 年 7 月、日本 東京、アルク出版。URL:<http://www.alc.co.jp/edunet/mdlit/mdlit2001/mdlit63.html>(河西由美子・駒谷真美・添野勉・三坂千絵子による分担執筆)

添野勉、「日本写真史上における成沢玲川の位置～インフラ構築者として」、『日本写真芸術学会平成 14 年度年次大会研究発表会予稿集』、2002 年 7 月、日本写真芸術学会、日本写真芸術学会、日本 東京、6pp. pp. 29～35。【査読有】

添野勉、「日刊写真新聞『アサヒグラフ』の挑戦と挫折～「グラフ雑誌」と「グラフ編集」の原像」、『第二回竹尾デザイン史研究論文受賞作品集』、2003 年 4 月、日本 東京、株式会社竹尾、24pp. pp. 33～57。【査読有】

添野勉、「「芸術」写真の社会的生成～視覚メディアをめぐる実践と構図」、『東京大学社会情報研究所紀要』、64 号、2003 年 7 月、日本 東京、東京大学社会情報研究所、34pp. pp. 151～185。【査読有】

山本 拓司 研究拠点形成特任教員(助手)

研究テーマ(主たるもの 3 点以内)

近代日本における身体文化の形成

概要説明 主に日本をフィールドとしながら、社会の近代化と、体操やスポーツ、ダンス等の身体文化の変容の問題について研究を行っている。

東京大学情報学環所蔵 戦時宣伝資料のデジタル・アーカイブの作成について

概要説明 情報学環が所蔵する戦時宣伝資料(第一次世界大戦期の欧米プロパガンダポスターおよび日中戦争～第二次世界大戦にかけての日本側プロパガンダ・パンフレット)の整理とデジタル・アーカイブの作成を行い、それら戦時宣伝資料のメディア史においてもつ意義について研究を行っている。

研究業績(2000～2004 年度)

論文等

山本拓司、「近代日本と学校体操 —その導入過程をめぐって」、『三田社会学』、7号、2002年7月、三田社会学会、pp. 57～70。【査読有】

山下理恵子・山本拓司、「アイリッシュ・ダンスの社会学 —歴史的展開に関する序論的考察—」、『エール』、23号、2003年12月、日本アイルランド協会、pp. 66～81。【査読有】

山本拓司、「総和町における盆踊りと青年集団」、『そうわ町史研究』、10号、2004年3月、総和町教育委員会、pp. 80～88。

口頭発表等

山本拓司、「明治期における日本人と体操-学校体育を中心に」、『三田社会学大会』、2001年7月、三田社会学会、慶応義塾大学。

山本拓司、「近代日本の学校体育 —明治期における体操の導入をめぐって—」、『日本社会学会第75回大会』、2002年11月、日本社会学、大阪大学。

吉見俊哉・山本拓司・小泉智佐子、「東京大学社会情報研究所における戦時宣伝関連資料のデータベース化作業」、「戦時下、対東アジア戦略と広告宣伝」、『第4回 戦争と広告宣伝研究会』、2004年1月20日、島根県立大学。

一般向け著書等

山本拓司、「文化とアイデンティティ — ゲーリック・リーグが果たした役割」、海老島均・山下理恵子編、『アイルランドを知るための60章』、2004年12月、明石書店、pp. 240～243。

山本拓司、「官能のアイリッシュ・ダンス — リバーダンス旋風」、海老島均・山下理恵子編、『アイルランドを知るための60章』、2004年12月、明石書店、pp. 266～269。

関谷 直也 研究拠点形成特任教員(助手)

研究テーマ(主たるもの3点以内)

「環境問題におけるジャーナリズム／メディアと社会心理」についての研究

環境報道と環境広告に焦点をあて、社会心理史的・社会心理学的視点から研究を行っている。報道については、戦後の公害・原子力事故に焦点をあて、ジャーナリズムの変質過程とそれを支えた予防原則などの思想や世論潮流・社会心理との関係性について社会心理史的な接近を試みている。広告については、送り手と受け手についての量的調査、CF・新聞広告の内容分析、ヒアリング調査を行い、研究を深化、精緻化している。社会心理によって、企業の実際の環境対策や広報活動、広告の内容や表現手法が規定されていることを見出している。これらの個々の研究を通じて「環境問題と社会心理」の関係性、そこにおけるメディア・情報の役割、メディア・情報様式の形成過程を総体的に浮かび上がらせようと試みている。そこから環境問題という具体的な事例を通して、社会問題をめぐる報道、ジャーナリズム、広告のあり方を考えている。

「日本人の安全観」「風評被害」「センセーショナルリズム」に関する研究

日本人が安全・安心をどのように考えているのかについて、原子力事故、狂牛病・鳥インフルエンザ・SARSなどのバイオハザード、食品問題、環境問題、自然災害、また経済問題などを比較し、社会心理学的な共通点・相違点を流言の分析や質的・量的調査から研究している。また「原子力の安全神話」の形成過程の歴史的研究なども行ってきた。「感情的な安全認識」、「報道・社会現象に影響を受ける心理」「安全をめぐる心理の要素」「安全をめぐる根本的な観念」の存在と、それらと「具体的な対象に対する不安・安心の感情」との関係性について、徐々に実証的に明らかにしつつある。これは報道と感情の関係というマスコミュニケーション研究が見落としてきた課題でもある。

この延長線上には、情報過多社会の社会問題である「風評被害」がある。「風評被害」の社会心理的メカニズムおよび解決策についても研究を重ね、報告してきた。

これは、人々の安全に関わる様々な報道の「センセーショナリズム」「報道における『科学』の扱い」、「報道や情報公開に伴う経済的影響」「公害報道、環境報道の抑止力としての風評被害」という現実的問題に社会心理学の観点から接近するものでもある。これら現実的課題に貢献できるよう取り組んでいる。

「災害情報と社会心理」に関する研究

災害時のよりよい避難行動・防災行動、よりよい復興対策のために、さまざまな主体がメディア・報道を通じてどのような情報を伝え、どのような活動をとるべきかを明らかにするために、各種の共同研究プロジェクトに参画し、災害時の住民の心理・情報行動、情報伝達における問題点を調査・検討している。

水害、火山、地震時における住民の心理・情報行動・避難行動、行政・報道機関の実態、富士山噴火など想定災害の経済的・社会心理的影響などに関して、多くのインタビュー調査・量的調査・悉皆調査によって共同で研究している。個人としては、特に、富士山噴火という想定災害について社会経済的影響、気象災害における避難行動の心理を明らかにすることを試みている。

現実の「課題」の探索とは別に、最近は今後の「開発」として、とくに安否情報システムに関して、RFIDチップ、モバイル携帯端末、画像通信、ワンセグ放送、FelicaなどITツールの災害時の利用可能性について実証的に検討を試みている。

研究業績(2000～2004年度)

著書等

関谷直也、「環境広告」の生成—その存在理由と機能—、(財)地球環境戦略研究機関編、『環境メディア論』、『IGES地球環境戦略研究シリーズ』、3巻、2001年、中央法規出版、pp. 203～238。

三上俊治・川端美樹・関谷直也、『環境広告』の環境イメージ形成機能に関する研究、『2000年度吉田秀雄記念事業財団助成研究 研究成果報告書』、2001年、(財)吉田秀雄記念事業財団。(114)

関谷直也、「ドラマ・映画の広告空間—ドラマ性を持つ映像パッケージ・メディア接触におけるロコミを中心とするコミュニケーション・ネットワークのプロモーション機能と、広告媒体特性の再評価—」、『2001年度吉田秀雄記念事業財団助成研究 研究成果報告書』、2002年、(財)吉田秀雄記念事業財団。(123)

関谷直也、「バイオハザード(食品問題・感染症問題)に対する市民の意識に関する研究」、『平成15年度研究助成報告書』、2004年、(財)社会安全研究財団、pp. 141～145。

関谷直也、「日本人の安全観」、『平成15年度原子力安全基盤調査研究 研究成果報告書』、2004年、東洋大学。(193)

中村功・廣井脩・三上俊治・田中淳・中森広道・福田充・関谷直也、「災害時における携帯メディアの問題点」、『モバイル社会研究所 2005年コア研究社会インフラ部門(代表 中村功)報告書』、2004年、モバイル社会研究所。

論文等

森康俊・廣井脩・福田充・中森広道・関谷直也・馬越直子・金子茂、「企業の地震防災対策の現状と帰宅困難者問題—都内事業所アンケート調査から—」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、14号、2000年、東京大学社会情報研究所、pp. 283～354。

Isao Nakamura・Hiromichi Nakamori・Yasutoshi Mori・Naoya Sekiya・Osamu Hiroi, "The Debris Flow in Izumi 1997 and Dissemination of Disaster Information," "Review of Media, Information and Society", no.5, 2000, Institute of Socio-Information & Communication Studies(ISICS), The University of Tokyo, pp. 37-70.

Mitsuru Fukuda・Hiromichi Nakamori・Isao Nakamura・Naoya Sekiya・Osamu Hiroi, "The Debris Flow in Hachimantai 1997 and Dissemination of Disaster Information," *Review of Media, Information and Society*, no.5, 2000, Institute of Socio-Information & Communication Studies(ISICS), The University of Tokyo, pp. 71-96.

関谷直也、「世論としての『情報化』:Cultivation Theory と第三者効果—『情報化社会』とメディア・リテラシーへの誘い—」、『帝京大学情報処理センター年報』、2号、2000年、帝京大学、pp. 93~113。【査読有】

関谷直也、「『環境広告』の生成と世論の影響過程」、環境教育プロジェクト編、『環境メディア論—研究論文集』、2000年、(財)地球環境戦略機関、pp. 32~47。

廣井脩・三上俊治・田中淳・中村功・中森広道・八木絵香・関谷直也、「1999年JCO臨界事故と住民の対応」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、15号、2001年、東京大学社会情報研究所、pp. 237~406。

三上俊治・是永論・中村功・見城武秀・森康俊・柳沢花芽・森康子・関谷直也、「携帯電話を利用した情報サービスおよびメール利用の実態—情報行動センサス2000から—」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、15号、2001年、東京大学社会情報研究所、pp. 145~235。

三上俊治・大谷奈緒子・高橋奈佳・関谷直也、「メディア報道・広告と環境意識」、『2001年日本マスコミュニケーション学会春季研究発表大会』、2001年6月1日、日本マスコミュニケーション学会、京都:同志社大学。

廣井脩・田中淳・中村功・中森広道・宇田川真之・関谷直也・辻本篤、「2000年三宅島噴火における災害情報の伝達と住民の対応」、『東京大学社会情報研究所「災害と情報」研究会報告書』、2002年、東京大学社会情報研究所「災害と情報」研究会、+119。

廣井脩・伊藤和明・西出則武・中村信郎・田辺敏也・田中淳・中森広道・宇田川真之・関谷直也・辻本篤、「2000年有珠山噴火における災害情報の伝達と住民の対応」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、18号、2002年、東京大学社会情報研究所、pp. 1~194。

廣井脩・田中淳・中村功・中森広道・宇田川真之・関谷直也、「2001年芸予地震における住民の対応と災害情報の伝達」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、18号、2002年、東京大学社会情報研究所、pp. 195~278。

関谷直也、「『環境報道と社会心理—原子力/有害科学物質の環境リスク認識とソーシャル・リアリティ形成過程に関する研究—』」、『東京大学人文社会系研究科提出修士論文』、修士学位論文、2002年、東京大学人文社会系研究科、+601。

Miki Kawabata・Shunji Mikami・Naoya Sekiya・Toshio Takeshita, "Unsolved conflict between Europe-Japan and USA on the Global Warming Issue: Analysis of the longitudinal Trend in News Frame," *23 Conference and General Assembly AIECS/IAMCR/AIERI*, 2002.7.24, IAMCR, Spain: Barcelona.

関谷直也、「『風評被害』論」、『日本災害情報学会第4回学会大会 予稿集』、2002年11月7日、日本災害情報学会、東京:東京大学。

関谷直也・辻本篤・廣井脩、「富士山噴火の社会的影響—特に降灰の影響を中心とした定性的シナリオ—」、『日本災害情報学会第4回学会大会 予稿集』、2002年11月7日、日本災害情報学会、東京:東京大学。

中森弘道・廣井脩・中村功・田中淳・宇田川真之・関谷直也、「平成13年度芸予地震における情報と住民の対応」、『日本災害情報学会第4回学会大会 予稿集』、2002年11月7日、日本災害情報学会、東京:東京大学。

廣井脩・市澤成介・村中明・桜井美菜子・松尾一郎・柏木才介・花原英徳・中森広道・中村功・関谷直也・宇田川真之・田中淳・辻本篤・鄭秀娟、「2000年東海水害における災害情報の伝達と住民の対応」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、19号、2003年、東京大学社会情報研究所、pp. 1~230。

関谷直也・大西敏也・廣井脩、「2001年BSE(狂牛病)の社会的影響と対策」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、19号、2003年、東京大学社会情報研究所、pp. 231~362。

廣井脩・中村信郎・関谷直也、「集中講座報告：『災害放送担当者のための集中講座』」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、65号、2003年、東京大学社会情報研究所、pp. 129～261。

関谷直也、「企業の『環境問題』と『コミュニケーション』」、『環境経営コミュニケーションの現状と課題』、1号、2003年、日本広報学会環境経営コミュニケーション研究会、pp. 28～33。

関谷直也、「『風評被害』の社会心理—『風評被害』の実態とそのメカニズム」、『災害情報』、1号、2003年、日本災害情報学会、pp. 78～89。【査読有】

関谷直也・廣井脩、「富士山噴火の社会的影響：火山灰被害の影響についての富士山周辺製造業郵送調査—富士山噴火対策研究：噴火による社会経済的影響に関する調査研究 その2—」、『情報学研究 調査報告編』、22号、2004年、東京大学情報学環、+115。

池谷浩・國友優・中森広道・関谷直也・中村功・宇田川真之・廣井脩、「2003年7月水俣市土石流災害における災害情報の伝達と住民の対応」、『情報学研究 調査報告編』、22号、2004年、東京大学情報学環、+123。

関谷直也・廣井脩、「富士山噴火の社会的影響」、『月刊「地球」号外』、48号、2004年、海洋出版、pp. 162～168。

関谷直也、「隠匿のコミュニケーション：環境広告の定義と特徴」、『環境経営とコミュニケーションのかたち—持続可能な成長に向けた「環境コミュニケーション」と「情報様式」—』、2号、2004年、日本広報学会環境経営コミュニケーション研究会、pp. 95～107。

関谷直也、「『環境広告』の変遷と実態—『環境広告』先進企業調査より」、『広告テーマとしての“環境問題”』、2004年、企業宣伝協同組合、pp. 10～18。

関谷直也、「『環境広告』先進企業のケーススタディ——環境広告の現状に関する調査」、『広告テーマとしての“環境問題”』、2004年、企業宣伝協同組合、pp. 19～64。

関谷直也、「『風評被害』の法政策—『風評被害』補償における法的論点・対応策とその改善案—」、『災害情報』、2号、2004年、日本災害情報学会、pp. 102～113。【査読有】

松尾一郎・三上俊治・中森広道・中村功・関谷直也・田中淳・宇田川真之・吉井博明、「2003年十勝沖地震時の津波避難行動」、『災害情報』、2号、2004年、日本災害情報学会、pp. 12～23。

田中淳・中村功・宇田川真之・関谷直也・馬越直子・廣井脩、「2003年5月宮城県沖の地震における災害情報の伝達と住民の対応」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21号、2004年、東京大学社会情報研究所、pp. 2～106。

関谷直也・廣井脩、「2003年宮城県沖の地震における津波防災行動」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21号、2004年、東京大学社会情報研究所、pp. 107～138。

廣井脩・木村拓郎・関谷直也・田中淳・馬越直子・宇田川真之、「火山災害の長期的影響と支援策—雲仙普賢岳、有珠山、三宅島雄島の比較研究—」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、21号、2004年、東京大学社会情報研究所、pp. 199～304。

関谷直也・廣井脩、「富士山噴火の社会的影響：火山灰被害の影響についての企業・行政調査—富士山噴火対策研究：噴火による社会経済的影響に関する調査研究 その1—」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、20号、2004年、東京大学社会情報研究所、pp. 1～151。

中村功・中森広道・福田 充・関谷直也・廣井 脩・吉井博明・田中 淳・三上俊治・松尾一郎・宇田川真之、「2003年十勝沖地震における津波避難行動—住民聞き取り調査を中心に—」、『日本災害情報学会第6回学会大会 予稿集』、2004年11月、日本災害情報学会、東京：東京大学。

中森広道・廣井脩・関谷直也・中村 功・宇田川真之、「平成 15(2003)年熊本県水俣市土石流災害における住民の対応」、『日本災害情報学会第6回学会大会 予稿集』、2004年11月、日本災害情報学会、東京：東京大学。

口頭発表等

関谷直也、「CFにみる環境」、国際日本文化研究センターシンポジウム編、『テレビCMによる文化研究のあらたな可能性を探る』、2004年1月30日、国際日本文化研究センター。

関谷直也、「環境広告—広告の中の『環境』を解剖する」、国際日本文化研究センター共同研究編、『コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化 第6回研究会発表』、2004年6月7日、国際日本文化研究センター。

一般向け講演等

関谷直也、「広告テーマとしての環境広告」、『東京都中小企業連携組織開発等支援事業 研究成果報告会』、2004年3月16日、企業宣伝共同組合。

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成18年3月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京都文京区本郷7丁目3番1号

郵便番号 113-0033

電話：03-5841-5905 Fax：03-5841-5916

Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

東京都〇〇区〇〇〇〇〇

郵便番号〇〇〇〇〇〇〇

電話〇〇〇
